

鳥
取
松
合
下
遺
跡

鳥取松合下遺跡 洞 城 遺 跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書



二〇一三・三

国
土
交
通
省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2012. 3

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

鳥取松合下遺跡 洞 城 遺 跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2012.3

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

前橋市芳賀地区には、住居が500軒を超す芳賀東部団地遺跡、奈良三彩の小壺が出土した松峯遺跡など、関心を呼んだ遺跡が多くあります。それらが語りかけているのは、ひとを招き寄せ、むらを作らせた、この土地の豊かさではないでしょうか。古代は、勢多郡の中核の地だったはずですが。文献に記載された芳賀郷や鳥取部とは、どう関連するのか。そして中世は、大胡郷、青柳御厨そして細井御厨の一面ではないかと検討されてきた土地であります。

上武道路の建設に先立ち、芳賀地区では7遺跡が発掘調査されました。ここに報告する鳥取松合下、胴城遺跡もそのひとつで、芳賀地区の中央部鳥取町、勝沢町に所在します。旧石器時代にはじまり、縄文時代から平安時代の間の集落や、江戸時代の村に関連する溝、墓などがみつかりました。本書は、旧石器時代をのぞいた各時代の成果を報告するものです。

芳賀東部団地遺跡の西に位置し、一体の遺跡だったのでしょ。ここまでむらが続いています。郷、御厨については、検討を重ねることとなりましたが、拠点のむらであるという見方は一段と強まりました。出土した墨書土器や銅鏡は、周囲との交流を抜きにしては考えられません。拠点らしい勢いが感じ取れます。また江戸時代の墓には、全国的にも稀な出土といわれている題目銭が副葬されています。藩内の近郊農村にも意外な一面のあったことを教え、新たな課題を提供しました。

発掘調査から報告書の作成までには、国土交通省、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等の皆様大変お世話になりました。ここに関係者の皆様に衷心より感謝申し上げ、あわせて本書が地域の歴史を学ぶ資料として多くの皆様に活用されることを願ひまして、序とさせていただきます。

平成24年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、鳥取松合下遺跡、胴城遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 鳥取松合下(とっとりまつあいた)遺跡は、群馬県前橋市鳥取町371-1番地ほかに所在する。
調査対象面積3,262.82㎡である。遺跡略称は「J K57」である。
胴城(どうじょう)遺跡は、同鳥取町355番地ほかに所在する。
調査対象面積は6,130.66㎡である。遺跡略称は「J K58」である。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成19年度：平成20年2月1日～平成20年3月31日
平成20年度：平成20年4月1日～平成20年10月7日
平成21年度：平成21年10月11日
- 6 調査体制は次のとおりである。
平成19年度 高井佳弘 主任調査研究員、宮下 寛 主任調査研究員
胴城遺跡掘削請負工事：須賀建設株式会社
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社
平成20年度 関 晴彦 上席専門員、並木勝洋 主任調査研究員
鳥取松合下遺跡掘削請負工事：山下工業株式会社
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社
女屋和志雄 上席専門員、平井 敦 主任調査研究員
胴城遺跡掘削請負工事：須賀工業株式会社
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社
平成21年度 坂口 一 主任専門員(総括)、平井 敦 主任調査研究員
胴城遺跡掘削請負工事：株式会社シン技術コンサル
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社
- 7 整理事業の体制・期間は次のとおりである。
平成22年度 整理期間 平成22年10月1日～平成23年3月31日
整理担当 笹澤泰史 主任調査研究員
平成23年度 整理期間 平成23年4月1日～平成24年1月31日
整理担当 女屋和志雄 上席専門員
- 8 本書作成の担当は次のとおりである。
編集 笹澤泰史 女屋和志雄 デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
執筆 第3・4章縄文時代遺物観察表 縄文土器：橋本 淳(主任調査研究員) 石器・石製品：岩崎泰一(上席専門員) 第4章古墳時代以降遺物観察表 鳥取松合下遺跡：神谷佳明(上席専門員) 胴城遺跡：大西雅広(上席専門員) 金属製品：笹澤泰史(主任調査研究員) 遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐) 保存処理・樹種同定 関 邦一(補佐) 第7章第2節桜岡正信(上席専門員) 同第3節 関 邦一 ほかは女屋

- 11 石器・石製品の石材鑑定は、飯島静男氏(群馬地質研究会会員)にお願いした。成果は遺物観察表に掲載し、本文中にも記載した。
- 12 人骨・馬骨の鑑定は、宮崎重雄氏に委託して実施し、第6章に成果を掲載した。
- 13 出土遺物及び発掘調査に係わる資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 13 発掘調査並びに整理作業のあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。
(敬称略)

前原 豊 小島純一 山下歳信 能登 健 (以上前橋市教育委員会) 坂爪久純 (伊勢崎市教育委員会)
群馬県教育委員会 前橋市教育委員会

凡 例

- 1 グリッドの設定、座標値の表記は、国家座標第IX系(世界測地系)を用いた。図中のグリッド番号は、Xグリッド、Yグリッドの交点を示したもので、南東交点を基準とする。詳細は、第3章に記載した。
- 2 遺構断面図、等高線図に記した数値は標高を表し、単位はmである。方位は座標北である。真北方向角は鳥取松山下遺跡が $+0^{\circ} 25' 56''$ 、胴城遺跡が $+0^{\circ} 25' 58''$ である。
- 3 挿図の縮尺および掲載内容は以下のとおりである。

遺構 1/60、1/30を基本とし、挿図中には縮尺を示した。

・遺物分布図の番号は掲載遺物を表し、遺物観察表、写真図版とも一致する。

・●は土器、▲は石器を示す。接合関係は線で表した。

遺物 選択は、遺構の時期を特定できるものを優先した。掲載は1/3を中心とし、小型品は1/2、大型品は1/4を基本とした。挿図中には縮尺を示した。

・石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。

・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。

・石皿は、使用部の摩耗および再生状態（再敲打）を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。

・台石は、打痕・摩耗痕を含む礫面の状態を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。

・縄文土器の断面にある●は繊維の含有を表す。

・挿図中に使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

焼土		攪乱		土器付着物		灰釉陶器	
漆		燻		黒色土器		赤色塗彩	
スス		粘土		二次被熱			

- 4 遺物観察表は、縄文土器、石器・石製品、須恵器・土師器・陶磁器、金属器に分けて掲載している。用語は、観察者が複数の場合には統一をした。遺物番号は、挿図、写真図版とも一致する。

・短冊形打製石斧は、次のように分類した。a：側縁が平行、b：幅の狭い装着部に幅広の機能部が付く、c：側縁が弱く直線的に開くである。

・土器の遺存状態は、口縁、胴部、底部を示して全体の割合を数値で示した。ただし全体が想定できない場合は、破片、何分の一以下と表記した。

・出土位置の数値は、床面からの深さを示す。+は高く、-が低い。複数の破片からなる場合は～で示した。貯蔵穴など、個々の箇所については床面からの深さを示す。

・遺物分布図にある遺物番号の前に付けた外は、遺構外であることを表す。

・胴城遺跡の胎土の略称は以下のとおりである。

須恵器

A：夾雑物は少ないが、夾雑物中では白色鈹物粒がやや目立つ。灰色粒含む。

C：白色鈹物粒と透明鈹物粒多く含む。黒色鈹物粒少量含む。両者を含む岩片微量含む。

D：微細な鈹物粒を多く含む。 BはAより白色鈹物粒が多い。

土師器

A：鉱物粒含む。輝石か角閃石と考えられる黒色鉱物粒多く含む。A'は鉱物粒が少ない。

B：鉱物粒含むが、透明鉱物粒や黒色鉱物粒は目立たない。赤色粒多く含む。白色鉱物粒少量含む。

C：透明鉱物粒と黒色鉱物粒多く含む。赤色粒含む。

D：鉱物粒含む。薄く剥がれ、光を反射する雲母状の小片含む。

・鉄関連遺物は、磁石(強力磁石 TAJIMA PUP-M、特定の標準磁石)と特殊金属探知機による分類と、未来含観察による考古学的な分類を行った。

『磁着度』 鉄関連遺物分類用の特定「標準磁石」を用いて、資料との反応を数値化したもの。数置が大きいほど、磁石との反応が強い。

『メタル度』 特殊金属探知機により金属の量を分類したもの。錆化(△)H(○)M(◎)L(●)特L(☆)の順で金属部分が多いことを示す。概ね、H(○)は4～5mm大前後、L(●)は10～12mm大前後、特L(☆)は20mm大以上の金属鉄の残留を示す。金属探知機を用いて判定している。

- 5 本書内で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』(平成9年版)に準拠した。

- 6 テフラの呼称として、次の略語を使用する。

浅間A軽石 略称A s-A 1783年(天明3年) 浅間B軽石 略称A s-B 1108年(天仁元年)

浅間C軽石 略称A s-C 4世紀初頭 浅間黄色軽石層 略称A s-Y P

浅間大窪沢軽石層 略称A s-O K 浅間褐色軽石層 略称A s-B P

榛名八崎軽石層 略称H r-H P

これらの中で一部、挿図にはトーンを貼って表現したものがある。

- 7 本書で使用した地図は、下記のものを使用した。

第1図 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所作成「一般国道17号上武道路」2004年作成パンフレット使用

第2図 国土地理院地形図1/50,000「前橋」平成10年3月1日発行に加筆

第4図 国土地理院地形図1/25,000「前橋」平成22年12月1日発行、「渋川」平成14年10月1日発行、
「鼻毛石」平成14年9月1日発行、「大胡」平成22年12月1日発行を使用

第5図 前橋市役所発行現形図 平成21年版を使用

目次

序・例言・凡例	
目次・挿図目次・写真図版目次・表目次	
第1章 調査に至る経過	
第1節 上武道路について	1
第2節 上武道路と埋蔵文化財	2
第3節 調査に至る経過	3
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の立地	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法	15
1 試掘調査	15
2 調査区・グリッドの設定	15
3 遺構の確認面	16
4 記録仕様	16
第2節 基本土層	17
第3節 調査の経過	18
1 概要	18
2 鳥取松合下遺跡の調査経過	18
3 脚城遺跡の調査経過	19
第4章 鳥取松合下遺跡の調査	
第1節 遺構の概要	21
第2節 A～C区の遺構と遺物	21
第3節 D区の遺構と遺物	24
1 竪穴住居	24
2 土坑	61
3 遺構外遺物	64
第5章 脚城遺跡の調査	
第1節 遺構の概要	65
第2節 検出された遺構と遺物	65
1 竪穴住居	66
2 掘立柱建物	163
3 土坑	165
4 溝	177
5 古墳	181
6 井戸	182
7 墓坑	183
8 ビット群	184
9 遺構外遺物	184
第6章 自然科学分析	
第1節 脚城遺跡出土の人骨と馬歯	191
分析資料について	191
1 脚城遺跡出土の人骨	191
2 脚城遺跡3号住居出土のウマ	192
第7章 総括	
はじめに	195
第1節 遺跡の変遷	195
1 遺跡の範囲	195
2 時期別変遷	195
3 掘立柱建物	202
4 鍛冶	202
5 文字資料	202
6 曲物	203
第2節 金属器について	205
第3節 鳥取松合下遺跡出土炭化物について	209
1 試料について	209
2 観察所見と同定結果	209
3 9号住居と県内出土資料との対比	210
4 18号住居出土鉄斧の木質について	210
遺物観察表	213
遺構一覧表	252
写真図版	
報告書抄録	
奥付	
付図 鳥取松合下遺跡・脚城遺跡全体図	1 : 500

插图目次

第1图	上武道路踏线图	1	第64图	4号住居道横图(1)	73
第2图	道跡位置图	4	第65图	4号住居道横图(2)	74
第3图	地形区分图	5	第66图	4号住居道横图(1)	75
第4图	周边道跡分布图	10	第67图	4号住居道横图(2)	76
第5图	調査区位置图	15	第68图	5号住居道横图(1)	76
第6图	グリッド配置图	16	第69图	5号住居道横图(2)・道物图	77
第7图	基本土層柱状图	17	第70图	6号住居道横图(1)	77
第8图	A-C区道横全体图・2号溝道物图	22	第71图	6号住居道横图(2)・道物图	78
第9图	D区道横全体图	24	第72图	7号住居道横图	79
第10图	1号住居道横图(1)	25	第73图	7号住居道物图	80
第11图	1号住居道横图(2)	26	第74图	8号住居道横图(1)	80
第12图	1号住居道横图(3)・道物图(1)	27	第75图	8号住居道横图(2)・道物图(1)	81
第13图	1号住居道物图(2)	28	第76图	8号住居道物图(2)	82
第14图	2号住居道横图(1)	28	第77图	9・10号住居道横图(1)	83
第15图	2号住居道横图(2)・道物图	29	第78图	9・10号住居道横图(2)・9号住居道物图(1)	84
第16图	3号住居道横图・道物图	30	第79图	9号住居道物图(2)・10号住居道物图	85
第17图	4-6号住居・7号土坑道横图	31	第80图	11号住居道横图	85
第18图	4・5号住居道横图・4号住居道物图(1)	32	第81图	11号住居道物图	86
第19图	4号住居道物图(2)・5・6号住居道物图	33	第82图	12号住居道横图(1)	86
第20图	7-9号住居道横图(1)	34	第83图	12号住居道横图(2)・道物图	87
第21图	7-9号住居道横图(2)	35	第84图	13・14号住居道横图(1)・13号住居道物图	88
第22图	9号住居道横图・7号住居道物图(1)	36	第85图	13・14号住居道横图(2)・14号住居道物图	89
第23图	7号住居道物图(2)・8号住居道物图	37	第86图	15号住居道横图(1)	90
第24图	9号住居道物图(1)	38	第87图	15号住居道横图(2)・道物图	91
第25图	9号住居道物图(2)	39	第88图	16号住居道横图(1)	91
第26图	10号住居道横图	39	第89图	16号住居道横图(2)	92
第27图	10号住居道物图	40	第90图	16号住居道横图(3)・道物图(1)	93
第28图	11号住居道横图	40	第91图	16号住居道物图(2)	94
第29图	11号住居道物图	41	第92图	17号住居道横图	94
第30图	12号住居道横图(1)	42	第93图	17号住居道物图	95
第31图	12号住居道横图(2)・道物图(1)	43	第94图	18号住居道横图・道物图(1)	95
第32图	12号住居道物图(1)	44	第95图	18号住居道物图(2)	96
第33图	12号住居道物图(3)	45	第96图	19号住居道横图	96
第34图	13号住居道横图(1)	45	第97图	20号住居道横图	97
第35图	13号住居道横图(2)・道物图	46	第98图	21号住居道横图・道物图	97
第36图	14号住居道横图(1)	47	第99图	22号住居道横图	98
第37图	14号住居道横图(2)	48	第100图	22号住居道物图(1)	99
第38图	14号住居道横图(3)・道物图(1)	49	第101图	22号住居道物图(2)	100
第39图	14号住居道物图(2)	50	第102图	23号住居道横图(1)・道物图(1)	100
第40图	15号住居道横图(1)	50	第103图	23号住居道横图(2)・道物图(1)	101
第41图	15号住居道横图(2)・道物图(1)	51	第104图	23号住居道物图(2)	102
第42图	15号住居道物图(1)	52	第105图	24号住居道横图(1)	102
第43图	15号住居道物图(2)	53	第106图	24号住居道横图(2)・道物图(1)	103
第44图	16・17・20号住居道横图(1)・16号住居道物图	54	第107图	24号住居道物图(2)	104
第45图	17・20号住居道物图	55	第108图	25号住居道横图(1)	104
第46图	18・19号住居道横图(1)	56	第109图	25号住居道横图(2)・道物图(1)	105
第47图	18・19号住居道横图(2)・道物图	57	第110图	25号住居道物图(2)	106
第48图	21号住居道横图(1)	58	第111图	26号住居道横图(1)	106
第49图	21号住居道横图(2)・道物图(1)	59	第112图	26号住居道横图(2)	107
第50图	21号住居道物图(2)	60	第113图	26号住居道横图(3)・道物图(1)	108
第51图	22号住居道横图・道物图	60	第114图	26号住居道物图(2)	109
第52图	1~7号土坑道横图・2~6号土坑道物图	62	第115图	27・28号住居道横图	110
第53图	7号土坑道物图	63	第116图	27・28号住居道物图	111
第54图	道横外道物图	64	第117图	29号住居道横图(1)	111
第55图	1・3号住居道横图(1)	66	第118图	29号住居道横图(2)・道物图(1)	112
第56图	1・3号住居道横图(2)	67	第119图	29号住居道物图(2)	113
第57图	1・3号住居道横图(3)	68	第120图	30・31号住居道横图(1)	114
第58图	1・3号住居道横图(4)・1号住居道物图(1)	69	第121图	30・31号住居道横图(2)・30号住居道物图	115
第59图	1号住居道物图(2)・3号住居道物图(1)	70	第122图	31号住居道物图	116
第60图	3号住居道物图(2)	71	第123图	32~34号住居道横图(1)	117
第61图	2号住居道横图(1)	71	第124图	32~34号住居道横图(2)・33号住居道物图(1)	118
第62图	2号住居道横图(2)・道物图(1)	72	第125图	33号住居道物图(2)・34号住居道物图	119
第63图	2号住居道物图(2)	73	第126图	35・36号住居道横图(1)	120

第127回	35・36号住居遺構(2)	121
第128回	35・36号住居遺物園	122
第129回	37号住居遺構	123
第130回	37号住居遺物園	124
第131回	38号住居遺構・遺物園(1)	125
第132回	38号住居遺物園(2)	126
第133回	39号住居遺構・遺物園	127
第134回	40号住居遺構・遺物園(1)	128
第135回	40号住居遺物園(2)	129
第136回	41号住居遺構・遺物園	129
第137回	42号住居遺構	130
第138回	42号住居遺物園	131
第139回	43・44号住居遺構	132
第140回	43・44号住居遺物園	133
第141回	45号住居遺構・遺物園(1)	134
第142回	45号住居遺物園(2)	135
第143回	46号住居遺構(1)	135
第144回	46号住居遺構(2)・遺物園(1)	136
第145回	46号住居遺物園(2)	137
第146回	47号住居遺構(1)	137
第147回	47号住居遺構(2)・47～49号住居遺構	138
第148回	47号住居遺物園(2)	139
第149回	48号住居遺構	139
第150回	48号住居遺物園	140
第151回	49号住居遺構(1)	140
第152回	49号住居遺構(2)・遺物園(1)	141
第153回	49号住居遺物園(2)	142
第154回	50号住居遺構	143
第155回	50号住居遺物園	144
第156回	51号住居遺構(1)	144
第157回	51号住居遺構(2)・遺物園(1)	145
第158回	51号住居遺物園(2)	146
第159回	52号住居遺構(1)	146
第160回	52号住居遺構(2)	147
第161回	53号住居遺構(1)	147
第162回	53号住居遺構(2)・遺物園	148
第163回	54号住居遺構(1)	149
第164回	54号住居遺構(2)・遺物園(1)	150
第165回	54号住居遺物園(2)	151
第166回	55号住居遺構(1)	151

第167回	55号住居遺構(2)・遺物園(1)	152
第168回	55号住居遺物園(2)	153
第169回	56～58号住居遺構(1)	154
第170回	58号住居遺構・56～58号住居遺物園	155
第171回	59号住居遺構(1)	156
第172回	59号住居遺構(2)	157
第173回	59号住居遺構(3)・遺物園(1)	158
第174回	59号住居遺物園(2)	159
第175回	60号住居遺構	159
第176回	61号住居遺構(1)	160
第177回	61号住居遺構(2)	161
第178回	61号住居遺物園	162
第179回	1号掘立柱建物遺構	163
第180回	2・3号掘立柱建物遺構	164
第181回	1～16号土坑遺構	172
第182回	17～28・30号土坑遺構	173
第183回	29・31～46号土坑遺構	174
第184回	47～60・63号土坑遺構	175
第185回	61・62号土坑遺構・3・23・25・29・31・ 36・44・45・47・48・58・59・61号土坑遺物園	176
第186回	1～7号溝遺構(1)	178
第187回	3～7号溝遺構(2)・8～10号溝遺構	179
第188回	5・9号溝遺物園	180
第189回	1号墳遺構	181
第190回	1号井戸遺構・遺物園	182
第191回	1～2号墓遺構・1号墓遺物園・2号墓遺物園(1)	183
第192回	2号墓遺物園(2)	184
第193回	ビット郡遺構・35号ビット遺物園	185
第194回	遺構外遺物園(1)土器	186
第195回	遺構外遺物園(2)土器	187
第196回	遺構外遺物園(3)土器	188
第197回	遺構外遺物園(4)土器	189
第198回	遺構外遺物園(5)土器・金属製品	190
第199回	時期別遺構分布図(1)	196
第200回	時期別遺構分布図(2)	198
第201回	時期別遺構分布図(3)	199
第202回	時期別遺構分布図(4)	200
第203回	群馬県内出土金属器集成(1)	207
第204回	群馬県内出土金属器集成(2)	208
第205回	9号住居出土炭化材	211

表 目 次

第1表	上武道路8工区道跡一覧表	3
第2表	周辺道跡一覧表	12・13
第3表	性別判定基準値との比較表	193
第4表	胴城道跡2号墓頭蓋計測表	193
第5表	胴城道跡2号墓四股骨計測表	193
第6表	胴城道跡2号墓出土人骨計測表	194
第7表	群馬県出土金属器一覧	206
第8表	出土炭化物一覧表	212
第9表	遺構別樹種構成表	212
第10表	鳥取松合下道跡 石器観察表	213
第11表	胴城道跡 石器観察表	213
第12表	鳥取松合下道跡 縄文土器観察表	215

第13表	胴城道跡 縄文土器観察表	215
第14表	鳥取松合下道跡 遺物観察表	219
第15表	胴城道跡 遺物観察表	228
第16表	鳥取松合下道跡 金属製品観察表	248
第17表	胴城道跡 金属製品観察表	249
第18表	鳥取松合下道跡 住居一覧表	252
第19表	胴城道跡 住居一覧表	252
第20表	胴城道跡 掘立柱建物一覧表	253
第21表	胴城道跡 土坑一覧表	254
第22表	胴城道跡 溝一覧表	254
第23表	胴城道跡 その他一覧表	254

写真目次

トビラ	前橋市下沖町上空から見た赤城山南麓	平成13年撮影	3号住居カマド全景(西から)
P.L. 1	鳥取松合下遺跡		4号住居貯蔵穴遺物出土状況(東から)
	B区全景(東から)		4号住居全景(西から)
	B区全景(南から)		4号住居F A 堆積状況(南から)
	C区全景(北西から)		5号住居全景(西から)
	B区セクション		5号住居掘り方全景(西から)
	C区作業状況(西から)		5号住居掘り方土坑断面(西から)
	D区作業状況(南から)		6号住居全景(西から)
	D区作業状況(西南から)		6号住居掘り方全景(西から)
	D区基本土層(南から)		6・7号住居・25号土坑全景(東から)
P.L. 2	D区調査区全景(北から)		7号住居全景(西から)
	D区調査区全景(東から)		7号住居掘り方全景(西から)
P.L. 3	D区1・2・22号住居(北上空から)		7号住居掘り方断面(西から)
	D区3～11号住居(北上空から)		8号住居・23・24号土坑全景(東から)
P.L. 4	D区14・15号住居(南上空から)		8号住居東壁遺物出土状況(東から)
	D区12～19・21号住居、4号土坑(南上空から)		8～11号住居全景(東から)
P.L. 5	D区1号住居S P A-A' (東から)		8号住居全景(西から)
	D区1号住居S P B-B' (南から)		8号住居掘り方全景(西から)
	D区1号住居掘り方全景(南東から)		P.L. 13
	D区1号住居掘り方土坑埋没状況(南から)		9・10号住居全景(東から)
	D区2号住居掘り方全景(南東から)		9号住居全景(西から)
	D区4～6号住居(南上空から)		11号住居全景(西から)
	D区4号住居カマド全景(南西から)		11号住居カマド全景(西から)
P.L. 6	D区4号住居東壁石組(南から)		12号住居遺物出土状況(南から)
	D区7～9号住居遺物出土状況(南西から)		12号住居遺物出土状況(南から)
	D区7号住居勾玉出土状況(西から)		13号住居全景(西から)
	D区9号住居東壁遺物出土状況(西から)		14号住居全景(北東から)
	D区10号住居遺物出土状況(南から)		P.L. 14
	D区12号住居遺物出土状況(西から)		15号住居全景(西から)
	D区12号住居カマド遺物出土状況(南西から)		15号住居内焼土検出状況(西から)
	D区12号住居カマド全景(西から)		16号住居全景(西から)
P.L. 7	D区12・13・21号住居遺物出土状況(西から)		16号住居掘り方全景(西から)
	D区14号住居遺物出土状況(南東から)		16号住居カマド遺物出土状況(西から)
	D区15号住居掘り方検出状況(東から)		16号住居カマド全景(西から)
	D区14・15号住居掘り方全景(南西から)		16号住居内土坑遺物出土状況(西から)
	D区15号住居カマドS P A-A' (南西から)		17号住居全景(西から)
	D区15号住居カマド全景(南西から)		P.L. 15
	D区16号住居脚輪出土状況(東から)		18号住居全景(東から)
	D区18号住居鉄沖出上状況(東から)		22号住居遺物出土状況(西から)
P.L. 8	D区19号住居遺物出土状況(西から)		22号住居全景(西から)
	D区19号住居遺物出土状況(東から)		22号住居S P A-A' (南から)
	D区19号住居カマド全景(西から)		22号住居S P B-B' (西から)
	D区19号住居全景(西から)		22号住居遺物出土状況(西から)
	D区21号住居全景(西から)		23号住居全景(西から)
	D区22号住居全景(南から)		23号住居カマド全景(西から)
	D区5号土坑全景(北から)		P.L. 16
	D区7号土坑全景(東から)		24号住居全景(西から)
P.L. 9	脚輪遺跡		24号住居カマド全景(西から)
	調査着手前の状況(東から)		25号住居遺物出土状況(南から)
	9・10号住居作業状況(南から)		26号住居遺物出土状況(西から)
	平成19年度調査区全景(東から)		26号住居掘り方全景(西から)
	平成19年度調査区作業状況(東から)		26号住居カマド遺物出土状況(西から)
	1・3号住居作業状況(東から)		26号住居カマド全景(西から)
	1・3号住居全景(西から)		26号住居カマド掘り方全景(西から)
	1・3号住居S P A-A' (南から)		P.L. 17
	1・3号住居掘り方全景(西から)		27号住居全景(西から)
P.L. 10	2号住居全景(東から)		28号住居全景(西から)
	2号住居掘り方全景(東から)		29号住居全景(西から)
	3号住居全景(西から)		29号住居カマド全景(西から)
	3号住居掘り方全景(西から)		30・31号住居全景(西から)
	3号住居内馬骨出土状況(西から)		30号住居カマド全景(西から)
	3号住居内馬骨出土状況(西から)		33・34号住居全景(西から)
			33・34号住居掘り方全景(西から)
			P.L. 18
			平成20年度調査区北側全景(西上空から)
			平成20年度調査区北側全景(北上空から)
			P.L. 19
			35号住居全景(西から)
			35号住居カマド全景(西から)
			36号住居全景(西から)

	36号住居カマド全量(西から)	17号土坑 S P A - A' (北から)
	37号住居全量(北から)	17号土坑全量(北から)
	37号住居カマド全量(北から)	23号土坑全量(南から)
	38号住居全量(西から)	26号土坑全量(北西から)
	38号住居カマド全量(西から)	27号土坑(南西から)
P L . 20	39号住居全量(西から)	28号土坑全量(南から)
	39号住居廻り方全量(西から)	34号土坑全量(南東から)
	40号住居全量(西から)	44号土坑全量(南から)
	40号住居廻り方全量(西から)	45号土坑全量(南から)
	41号住居全量(西から)	46号土坑全量(南から)
	42号住居全量(西から)	54号土坑全量(南から)
	42号住居廻り方全量(西から)	56号土坑全量(南から)
	42号住居カマド全量(西から)	P L . 28
P L . 21	43・44号住居全量(西から)	57号土坑 S P A - A' (南から)
	43号住居カマド全量(西から)	57号土坑全量(南から)
	45号住居全量(西から)	58号土坑全量(南から)
	45号住居カマド全量(西から)	58号土坑遺物出土状況(南から)
	45～47号住居全量(西から)	62号土坑全量(南から)
	47号住居全量(西から)	63号土坑 S P A - A' (東から)
	47号住居カマド全量(西から)	30号土坑全量(北から)
	48号住居全量(西から)	30号土坑 S P A - A' (北から)
P L . 22	49号住居全量(西から)	平成19年度調査区ビット群(東から)
	49号住居カマド全量(西から)	平成19年度調査区北側全量(東から)
	50号住居全量(西から)	1号墓全量(南から)
	50号住居カマド全量(西から)	1号墓人骨検出状況拡大(南から)
	51号住居全量(西から)	2号墓全量(東から)
	51号住居カマド全量(西から)	2号墓人骨検出状況拡大(東から)
	52号住居全量(南西から)	平成21年度調査区全量(東上から)
	53号住居全量(南西から)	P L . 29
P L . 23	54号住居遺物出土状況(南西から)	鳥取松合下遺跡
	54号住居全量(南西から)	1～3号住居出土遺物
	54号住居カマド全量(南西から)	P L . 30
	55号住居全量(西から)	4～7号住居出土遺物
	56号住居全量(西から)	P L . 31
	56号住居カマド全量(西から)	8号住居・9号住居(1)出土遺物
	57号住居全量(西から)	P L . 32
	57号住居カマド全量(西から)	9号住居(2)・10・11号住居・12号住居(1)出土遺物
P L . 24	58号住居全量(西から)	P L . 33
	58号住居カマド全量(西から)	12号住居(2)出土遺物
	59号住居全量(西から)	P L . 34
	59号住居カマド全量(西から)	12号住居(3)・13・14号住居出土遺物
	59号住居貯蔵穴全量(西から)	P L . 35
	59号住居カマド廻り方全量(西から)	15号住居(1)出土遺物
	61号住居全量(南から)	P L . 36
	61号住居貯蔵穴全量(南から)	15号住居(2)・16～18・20号住居出土遺物
P L . 25	1号掘立柱建物全量(南から)	P L . 37
	2号掘立柱建物全量(西から)	19・21・22号住居、2～6号土坑出土遺物
	3号掘立柱建物全量(南から)	P L . 38
	1号古墳全量(北から)	P L . 39
	1号古墳北東部(北西から)	1・3号住居出土遺物
	1号古墳周堀埋没状況(北から)	P L . 40
	3～7号溝全量(東から)	2・4号住居出土遺物
	1号溝全量(南西から)	P L . 41
P L . 26	1号溝 S P A - A' (南西から)	4～6号住居出土遺物
	3号溝全量(南西から)	P L . 42
	4号溝全量(東から)	7・8号住居出土遺物
	4号溝 S P A - A' (東から)	P L . 43
	6・7号溝全量(北から)	9～11号住居・12号住居(1)出土遺物
	6号溝作業状況(南から)	P L . 44
	1号井戸 S P A - A' (南東から)	12号住居(2)・13～15号住居・16号住居(1)出土遺物
	1号井戸全量(南から)	P L . 45
	14号土坑全量(南から)	16号住居(2)・17・18・21号住居・22号住居(1)出土遺物
P L . 27	16号土坑 S P A - A' (南から)	P L . 46
	16号土坑全量(南から)	22号住居(2)・23号住居・24号住居(1)出土遺物
		P L . 47
		24号住居(2)・25号住居・26号住居(1)出土遺物
		P L . 48
		26号住居(2)・27～29号住居・30号住居(1)出土遺物
		P L . 49
		30号住居(2)・31・33・34号住居出土遺物
		P L . 50
		35～37号住居・38号住居(1)出土遺物
		P L . 51
		38号住居(2)・39～44号住居出土遺物
		P L . 52
		45～48号住居・49号住居(1)出土遺物
		P L . 53
		49号住居(2)・50・51・53号住居・54号住居(1)出土遺物
		P L . 54
		54号住居(2)・55～57号住居出土遺物
		P L . 55
		58・59号住居・61号住居(1)出土遺物
		P L . 56
		61号住居(2)・3・23・25・29・31・36・44・45・47・48・
		58・59・61号土坑、5・9号溝、1号井戸出土遺物
		P L . 57
		1・2号墓出土遺物、35号ビット、
		遺構外1～38出土遺物土器
		P L . 58
		遺構外39～91出土遺物土器
		P L . 59
		遺構外92～122出土遺物土器・1～18出土遺物石器
		P L . 60
		遺構外19～30出土遺物石器・遺構外1～13出土遺物

第1章 調査に至る経過

第1節 上武道路について

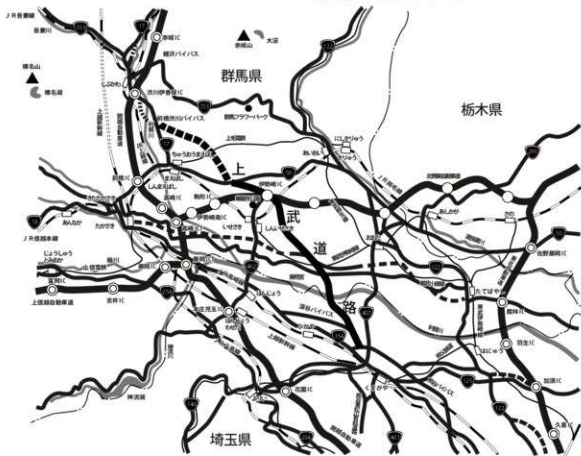
上武道路は、一般国道17号の交通混雑に対応するため計画された大規模バイパスで、群馬県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である。現道の西からは、前橋渋川バイパス、その先には鯉沢バイパス、さらに計画では上信自動車道が伸び、新たな交通幹線網となるよう期待が込められている。

平成10年には、前橋渋川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では「幹線交通乗り入れ30分構想」の中で幹線のひとつに位置づけている。事業は、昭和45年度に着手され、平成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用されている。その後、供用区間が延伸する

とともに交通量は増大、引き続いて終点までの13.1km区間の完成に期待が高まる。そこで、まず実現したのが国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間、7工区である。平成元年度に着手され、平成20年6月に暫定2車線で供用されている。これで、いよいよ残されたのが終点までの8.2km区間で、最終となる8工区である。

こうした動きに前後するのが、平成5年3月上信越自動車道藤岡・佐久間の開通、平成7年11月北関東自動車道高崎・伊勢崎間の起工、さらに平成9年10月の長野新幹線開業である。これらは、県が提唱している先述の「構想」実現に向けた着実な歩みで、上武道路の建設もこれに連動したものである。

8工区は、平成13年度に事業着手、平成24年度主要地方道前橋赤城線まで4.7kmの暫定開通をめざして工事が進められている。上武道路の全線については、平成29年度の開通が予定されている。



第1図 上武道路路線図 国土交通省パンフレットより作成(2004)

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地域である。群馬県は、昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充させて調査にあたり、昭和54年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に事業が引き継がれて、現在に至っている。

事業は、工事区を設け起点側から段階的に進められている。第1期工事区が埼玉県境から国道50号まで、次いで前橋市上泉町までが第2期工事区、それ以前前橋市田口町の現道までが、施工中の第3期工事区である。調査は、この進捗に合わせて行われている。

第1期工事区では、35遺跡が調査されている。調査した延面積は約534,000㎡である。

検出した住居の総数は1,747軒である。

縄文時代13軒

弥生時代8軒

古墳時代～平安時代1,692軒

時代不明34軒である。

旧石器は9遺跡で出土している。

その成果は26冊の発掘調査報告書として刊行され、出土した資料とともに広く活用されているところである。事業が完了した平成7年には、成果をより広く県民に提供するため、総集編「地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—」が刊行されている。総集編では、「芳郷」の黒土器出土で話題となった古代勢多部の芳賀郷や東山道説もあった「あづま道」といった、この地域が抱えてきた課題に対する検討の結果と、赤城山南麓の変動を明らかにした「縄文時代の反転土層」、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発見、今後取り組むべき課題が特記されている。

第2期工事区は7工区と呼ばれ17遺跡、面積288,873.3㎡が調査の対象である。7-1工区が209,788.9㎡、7-2工区が79,084.4㎡の内訳である。

検出した住居の総数は589軒である。

縄文時代57軒

弥生時代17軒

古墳時代～平安時代511軒

時代不明4軒、旧石器は13遺跡で出土している。

荒砥川の東で検出された集落は、古墳時代が充実していて今井神社古墳、大室古墳群の築造に呼応した動きであるとみられている。荒砥前田II遺跡では県内では稀な銅鋼が出土して注目を集め、女堀の調査では浅間柏川テフラが確認されたことで築造年代を特定する手掛かりが得られている。

荒砥川の西では縄文時代前期の集落が多い。ほぼ台地ごとであり、旧石器時代も暗色帯だけでなく、上位の土層からも出土した一方で、石器か否か注目の結晶質片岩が暗色帯以下で出土した遺跡も複数ある。以上の成果は、16冊の発掘調査報告書として刊行されている。

第3期工事区は8工区と呼ばれ、31遺跡、約40万㎡が対象である。主要地方道前橋赤城線(通称赤城県道)を境界にして東が8-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、8-1工区の東端から始められ、平成26年度に終了させる予定である。

平成23年11月の時点で、一般県道津久田停車場前橋線(通称石井県道)までは用地の買収が遅れた一部を残して終了し、終点の間根遺跡群田口下田尻遺跡を調査中である。8-1工区は、これまで通り旧石器時代や縄文時代が多いのに対して、8-2工区では縄文時代以降の様相が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった白川扇状地を横断するだけに、成果は期待以上で、中には予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれている。とりわけ終点の田口下田尻遺跡では100軒を超す集落を検出中で、低地での遺跡を問はず資料が得られると、今後の調査にも期待が高まっている。

遺跡名につけられた「J」Kは、7工区まで使われてきた略称を使用している。「J」が上武、「K」が国道を指している。番号は、7工区の最終番号52に続けたものである。ただし「J」K52だけは、上泉唐ノ瀬遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、「J」K52bをつけて7工区と区別している。また、「J」K59烏取塚田遺跡は、藤沢川沿いの低地に水田を推定していたが、試掘調査をした結果、遺構はなく除外されたが欠番としないで、そのままとした。

8工区の地区割は、世界測地系IX区X=45,000、Y=-63,000を基準にして設定されている。1km四方ごとが地区、その中を100m四方ごとが区で、起点側から終点に向かって第1地区から第13地区に分けられている。

第3節 調査に至る経過

7工区の調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。工事は順調で、主要地方道県道前橋・赤堀線までの供用が間に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋洗川バイパスが着工されている。これで8工区は、開通部分と前橋洗川バイパスとの間に残された格好となり、着工を待ち望む声有一段と強まる(第1図)。

上武道路沿いでは、全線での開通を前提にして各種の開発が進められてきた。開通部分はもちろんのこと、未開通の8工区でも早々と昭和50年代から芳賀北部住宅団地、五代南部工業団地等の造成が行われ、最近では大規模な商業店舗の建設が相次いでいる。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地の買収が起点側から始まる。その交渉には国土交通省と群馬県土地開発公社があった。

調査を実施するにあたっては、協定書ならびに受委託契約書を締結する必要がある。そのための協議は、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が締結される。これにより群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を実施することが決定する。なお「協定書」は、平成18年6月20日に協定期間が平成18年7月1日～平成29年3月31日に変更されている。

第1表 上武道路8工区遺跡一覧表 ※住所は前橋市を省略

JIS番号	遺跡名称	所在地	遺跡番号	当初面積	調査年度	備考
52b	上泉唐ノ堀遺跡	上泉町	00774	6,808.40	平成18～20年度	第522集
53	上泉新田塚遺跡群	上泉町	00775	26,526.54	平成18～20年度	第522集
54	上泉武田遺跡	上泉町	00773	8,832.56	平成19年度	年報27
55	五代砂留遺跡群	五代町	00772	21,965.10	平成19年度	第530集
56	芳賀東原沼地遺跡	五代町・鳥取町	未登録	30,645.27	平成18～20年度	年報26～28
57	鳥取松合下遺跡	鳥取町	00776	3,392.42	平成20年度	本報告
58	柳城遺跡	鳥取町	00041	6,130.78	平成19～21年度	本報告
59	鳥取塚田遺跡	勝沢町		11,046.53	調査除外	
60	堤遺跡	勝沢町	00034	12,703.76	平成20年度	年報28
61	小神明勝沢墳遺跡	勝沢町	00778	7,996.42	平成20年度	年報28
62	小神明富士塚遺跡	勝沢町・小神明町・上郷井町	00403	15,399.03	平成20・21年度	第524集
63	東田之口遺跡	上郷井町	00125	8,362.34	平成20年度	第523集
64	荘子遺跡	上郷井町	00134	6,245.89	平成20年度	年報28
65	上郷井五十嵐遺跡	上郷井町	00777	8,306.30	平成20・21年度	年報28・29
66	天王遺跡	上郷井町	00131	12,303.71	平成20・21年度	年報28・29
67	東原屋谷ノ遺跡	富士見町	0094	2,370.28	平成20・21年度	年報28・29
68	上町遺跡	上郷井町	未登録	4,502.69	平成21年度	年報29
69	時沢西原屋谷ノ遺跡	富士見町	0097	5,317.24	平成21年度	年報29
70	壬久保遺跡	上郷井町・富士見町	未登録	6,450.07	平成21年度	年報29
71	上郷井新田上遺跡	上郷井町	00128	13,700.24		
72	上郷井中島遺跡	上郷井町	00787	8,807.43	平成21年度	年報29
73	上郷井柳山遺跡	上郷井町	00786	12,693.66	平成21年度	年報29
74	山王・築遺跡群	青柳町	00795	22,861.11	平成21～23年度	年報29・30
75	引切塚遺跡	青柳町	00434	1,543.12		
76	青柳宿上遺跡	青柳町	00325	14,389.00		
77	日輪寺諏訪前遺跡	日輪寺町		5,966.00		
78	諏訪遺跡	日輪寺町	00144	24,757.00		
79	川端相序遺跡	川端町		17,090.00		
80	川端山下遺跡	川端町		10,649.00		
81	川端畑ヶ沢遺跡	川端町		8,928.00		
82	間根遺跡群	間根町		45,779.00	平成23年度	
合計面積				392,468.89		

備考欄の文献名は、14頁の文献を参照。

第1章 調査に至る経過

群馬県教育委員会は、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日の2度にわたり前橋市上泉町で試掘調査を実施する。その結果は、対象地内を遺跡と判断し、道路の建設に先立ち記録保存すべきことを国土交通省、前橋市教育委員会に伝える。こうして平成18年7月には8工区で最初となる上泉唐ノ堀遺跡、同年11月には隣接する上泉新田塚遺跡群での調査が開始される。

平成19年度には、2遺跡に加え4月から上泉町、5月から五代町、鳥取町で調査が開始される。その後用地買収が順調で、県教育委員会は同19年8月16～27日、鳥取町から上細井町にわたり試掘調査を実施する。28カ所でトレンチを設け、J K 59鳥取塚田遺跡だけを除いて遺跡と判断した。鳥取塚田遺跡も全くないと判断したわけではなく、浅間B軽石の堆積している箇所もあり水田の可能性を否定していない。藤沢川により削られているというのが除外した理由である。国土交通省との調整会議

では試掘調査の結果が報告され、調査と工事の工程が議題となる。国土交通省からは、河川を跨ぐ箇所ので工事を急ぎたいことが要望される。

こうした協議を経て調査するための条件が整い、平成20年1月24日副城遺跡の発掘届けが提出される。藤沢川寄りを優先して、平成20年2月1日から同年3月31日まで調査、次年度に継続するとした。道路建設が予定されていた所だけに、対象地は住宅地に挟まれて帯に残り、一見してわかる格好である。南80mに芳賀北原遺跡があり、同じ台地上の北700mが芳賀北部団地遺跡、南750mが芳賀西部団地遺跡で、金丸川の対岸東台地上には芳賀東部団地遺跡がある。

平成23年11月現在で、平成18年6月20日の「変更協定」に基づいて、埋蔵文化財の発掘調査及び整理業務が行われている。



第2図 遺跡位置図 国土地理院地形図 1/50,000 「前橋」平成10年3月1日発行使用

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

前橋市は、地形、地質の特徴から北東部の「赤城山斜面」、南西部の「前橋台地利根川右岸」、南部から南西部にかけての「前橋台地利根川左岸」、東部の「広瀬川低地帯」という4つの地域に分けられている(第3図)。

遺跡は、市街地の北東、赤城山斜面の南端寄りに位置する。市立芳賀小学校から大正用水までの台地上が副城遺跡で、市道を境に接して金丸川をはさんだ東の低地までが鳥取松合下遺跡である。対岸が芳賀東部団地遺跡である。また、芳賀北原遺跡は、今は東京電力芳賀発電所となっている所で副城遺跡の範囲内である。副城遺跡は周知されていたが、鳥取松合下遺跡は上武道路の調査区が新たに登録されたものである。

前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火による火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層からなっている。台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、利根川が流れているのは台地の中央である。その流路は「応永の変流」という室町時代中頃以降のものといわれ、それ以前には現在の広瀬川流域を主流が流れていたと推定されている(『前橋市史』第1巻1971)。

赤城山斜面は、中央で新期火山形成期の大胡火砕流堆積面と白川扇状地とが接しているが、遺跡がある藤沢川付近はその境界である。広瀬川低地帯までは約2kmに近い。緩やかな勾配となり、付近は樹枝状に開析されている。遺跡の西を藤沢川、東には金丸川が流れている。台地は幅が約150m、標高が台地上で146～148m、谷地との比高差は約5mである。

昭和50年代まで、南麓は県内を代表する「養蚕地帯」である。畑の多い乏水地帯で、桑の生育に適した土地であること、製糸や織物の生産地に近いことが普及した理由である。しかし養蚕に限らず農家は減る一方で、数え切れるほどにまで落ち込んでいる。市街化調整区域が多いために開発は規制され、代わる作物もない。転換を図ることも容易ではない。

そのため、地域活性化の起爆剤として上武道路に寄せ

る期待は大きい。昭和50年代、芳賀地区の予定地沿いには芳賀北部・芳賀東部工業・芳賀西部工業の3団地が造成され、その後も隣接して五代南部工業団地が造成されている。当然、上武道路の開通を予定したもので、期待の現れである。そんな中、平成21年5月富士見村が前橋市に編入合併したことで、南麓から『和名類聚抄』以来の地名「勢多郡」が消えている。

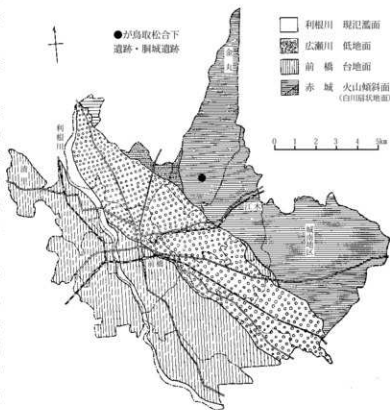
参考文献

前橋市 1971『前橋市史』第1巻

『群馬県10万分の1地質図』1999 同作成委員会

飯塚 聡 2008『群馬県立前橋工業高校周辺地域の理と歴史を学ぶ—地理科目における地域の歴史・文化を教材とした授業の実践—研究紀要』26 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

矢口裕之 2011『関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新世に係わる諸問題—研究紀要』29 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



市内の地形区分図 (前橋市史第1巻(1971)による)

第3図 地形区分図

第2節 歴史的環境

芳賀地区では3団地の造成以来、土地改良、上武道路と大規模な調査が行われてきた。芳賀東部団地遺跡だけでも500軒を越す住居があり、松峯遺跡からは奈良三彩の小甕が出土したというような発見もある。古代勢多郡の芳賀郷は、『芳郷』墨書の発見で前橋市二之宮町に絞られた感もあるが、藤沢、時沢など残る郷との関係で注目すべき地域であることはいうまでもない。

中世には、大胡郷や細井御厨、青柳御厨の一角にあったことは間違いなくであろう。しかし、それを語るのには文献の数々で、証明できる遺構を探し出すことが長い間の課題である。鎌倉坂の地名や旧利根川に推定される河岸からも、ここを通過する往来やその賑やかさを感じられるが、どれも推定の域にある。

芳賀の地名は、崖の端、水がはける所という地形由来する。たしかに台地の先は崖になり、水はけの良さを感じさせる景色である。鳥取は、鳥取部が置かれたからという説と『上野国神明帳』勢多郡從三位鳥取大明神に由来すると考えられ、大明神には遺跡に近い字八王子の大鳥神社(祭神鳥取造湯河板革命)が祀定されている。一方の副城は、勝沢城の南西にあった福福院に近いという意味での「堂上」が由来とされている。どちらも歴史を感じさせる由来である。

ここでは調査遺跡がある芳賀地区を中心に、東はおおよそ寺沢川、西は利根川までの範囲について歴史的な環境を述べる(第4図周辺遺跡位置図)。

旧石器時代

副城遺跡(1)では浅間大窪沢軽石層前後で出土して稀な例となったが、上泉唐ノ堀遺跡(2)、上泉新田塚遺跡群(3)上泉武田遺跡(4)、五代砂留遺跡群(5)、芳賀東部団地遺跡(6)でも暗色帯から浅間板鼻褐色軽石層での出土が相次いでいる。

鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡(7)では、浅間黄色軽石層下で硬質頁岩製石器が出土している。水田との比高差が1mほどの低台地の先端で、この立地に注目しておきたい。副城遺跡の対岸にある堤遺跡(8)は、縄文時代草創期の槍先形尖頭器を製作していたのではないかとみられ、分析が

待たれる。さらに第4図よりも北、富士見町龍ノ口遺跡では舟底形石核が出土しているが、ここは比高差のある台地上である(原田・中東1985ほか)。芳賀西部団地遺跡(9)の報告書には、前橋市内出土の有舌尖頭器15点が集成され、本遺跡の周辺には端気着帳遺跡(10)をはじめ5遺跡がある(1991)。

以上のように8工区では、上位から下位の層位で出土し、沿線に遺跡が多いことを感じさせる状況である(群埋文2008, 2010)。

縄文時代

副城遺跡では、前期黒浜式期の住居と土坑が検出されている。前期は、縄文時代の住居60軒が検出された芳賀東部団地遺跡のほか、台地の規模に係わらず遺跡が多い。中でも多いのが黒浜～諸磯式期で、南麓の傾向と合致する(鬼形1985)。拠点集落でも、広い台地に住居が点在する芳賀東部団地遺跡と狭い台地に22軒が重複する川白田遺跡(11)が対照的である。

上泉新田塚遺跡群では二ツ木式期の住居6軒が環状にめぐる。前期前半は、芳賀東部団地遺跡にもあるが標高も高い所では300mを越す。調査の偏りであるのか、現時点での傾向としてつかんでおきたい。早期は、遺物が断片的に出土している。

中期では前半は稀で、多いのが前期と重複する傾向にある加曾利E式～後期前半の遺跡である。九料遺跡(12)、芳賀北曲輪遺跡(13)では敷石住居が多くみられ、堤遺跡でも4軒というように、検出軒数も多いのが傾向である。五代伊勢宮遺跡(14)は、中期中葉～後半にかけての住居と土坑が環状になる、周辺では数少ない例である(高崎市教育委員会ほか2010)。

広瀬川低地帯(以下低地帯)にあるのが西新井遺跡で、表採ながら耳栓や石皿なども含む後期後半～晩期を主体とした資料が報告されている(設楽1984)。先述までの遺跡とは全く立地を異にしている。次の時代を占う意味でも、低地への注意を喚起する遺跡である。

弥生時代

旧富士見村田中田遺跡は、低地帯と細ヶ沢川が合流する低地にあり中期前半～後期の遺物が出土している。近隣では最も古い資料でもあり、どこを居住の場として

いたかに関心がある(富士見村教育委員会1986)。

端着靴遺跡では、後期の住居に古墳時代前期の方形周溝墓が重複している。田中田遺跡とは逆に低地帯に面した崖上であり、基盤が問題である。小神明勝沢境遺跡(15)では浅間C軽石の堆積する住居が検出されていて、台地にはさまれた谷地という立地が注意されている(群理文2009)。

赤城山西麓では、見立溜井遺跡、田尻遺跡などで弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の集落が検出されており、遺跡分布の密度は高いとみられている(赤城村教育委員会ほか2001)。関心は、東の荒砥地域との狭間でどう遺跡が分布しているのかにある。格好のトレンチとなる上武道路の中でも、8工区への関心は高い。

倉本遺跡(16)、湯気遺跡(17)では後期の住居が検出されている。2遺跡とも圃場整備によるもので、調査はトレンチに限られている。小神明勝沢境遺跡が示すように谷地での発見もあり、遺構が少ない現状も実情であるのかどうかという状況ではないか。

前橋渡川バイパスの田口下田尻遺跡では、ムラは弥生時代にまで遡ることが注目されている(群理文2006)。西新井遺跡と同じ低地帯の微高地にあり、立地は田中田遺跡も似ている。田口下田尻遺跡が特例でなく、低地帯に多くがあるからこそ南麓の台地上には遺跡がないのか、低地帯に対する見方を変える時期にある。

古墳時代

居住 昭和48年に開始された芳賀北部団地遺跡以来、調査例は増加している。芳賀東部団地遺跡のように4世紀から継続する伝統集落と、6世紀前後から始まる第1次新開集落とがある。

4世紀代の集落は、台地上とその縁辺部の低地という2つの立地傾向がある。前者の代表が芳賀東部団地遺跡で、報告書では耕地を意識したので台地の端に寄ったと解釈されている(前橋市教育委員会1984)。後者が五代砂留遺跡群である。

しかし調査した範囲の問題で、低地まで対象とすれば区別することなく、一つの集落の中の状況といえるかもしれないが、先述の小神明勝沢境遺跡の例もある。低地だから耕地というのではなく、居住の場としての利用も示唆される五代砂留遺跡群である。ただし立地が違っ

ていても、代表の2遺跡の道具組成に差はない。単口縁台付甕が主で、S字状口縁が客体的という南麓のあり方である(深澤2002)。立地の違いは、土地利用を模索した結果が現れたのだろうか。

5世紀代は、芳賀東部団地遺跡、五代中原遺跡(18)が拠点となる集落である。時期としては至近距離にある芳賀西部団地遺跡の初期群集墳に対応し、浅間C軽石降下後の安定した様相とみてよいだろう。

6世紀になると集落は、低地帯との関係を示しているのか崖沿いから、北は大正用水付近にまで点在している。二ツ岳の噴火で被災したため、崖沿いの高台を選んだという見方もできるが、激増するというような数ではない。勾配が急になる標高150m付近までは、本来低地帯と対になって利用されていたのではないか。本遺跡もその一つで、台地の縁辺に集住し、芳賀東部団地遺跡では分布の中心に大型住居があると指摘されている。7世紀代は集落の数が増え、分布範囲が上流域にまで拡大する。正円寺古墳(19)と桂堂大塚(20)、オプ塚(21)など、6世紀初頭からの首長墓の動向とも齟齬はない。

生産 集落は、多くが水田を意識したかのように谷地に面している。しかし、8工区内では、これまで谷地で水田を検出した遺跡がない。7工区でも遺構が検出されているのは大泉坊川まで、8工区に近づくほどプラント・オパール分析の数値は低く、可能性として指摘されているに過ぎない。生産は大きな課題である。

西麓にある見立溜井遺跡では、谷地で小区画水田が検出されている(赤城村教育委員会2008)。第4図の範囲では確実な遺跡はないが、竜ノ口川沿いでの試掘で小区画水田ではないかと報告されている。本調査にならず詳細は不明であるが、注意すべき内容である。

墓域 芳賀村は、『上毛古墳総覧』(以下総覧)(1933)には64基が記載されている。その1号「吉祥寺塚」が脚城遺跡で検出されている。『総覧』記載漏れ古墳は、芳賀西部団地遺跡で32基、芳賀東部団地遺跡4基、芳賀北曲輪遺跡1基、西田遺跡(22)5基、小坂子油田1遺跡(23)2基などがある。藤沢川沿いに立地し、円墳に帆立貝式古墳を含む10基前後の数で分布することが芳賀西部団地遺跡、西田遺跡では読み取れる。

前方後円墳は、明治38・39年五代大塚古墳(24)、昭和26年オプ塚、昭和32年正円寺古墳が調査されている。

標高160mのオプ塚が最北端で、集落の分布傾向とも重複する。これ以北に円墳が分布している。6世紀初頭の正円寺古墳を基点にすれば、漸次北上して7世紀代の到達点を描ける。正円寺古墳以外は30～40m前後の規模で、それに匹敵しながら直径が40mの大型円墳新田塚古墳(25)もある。検出例の少ないのが方形周溝墓で、端気着帳遺跡で1基、五代江戸屋敷遺跡(26)で2基が検出されている。

奈良・平安時代

居住 芳賀東部団地遺跡は、3つの台地にまたがり検出された住居の数が400以上、4世紀代にはじまり11世紀後半まで継続する集落である。中心に律令制と結びついた有力者がいて、谷地田を基盤とした変遷が描かれている(1984)。隣接の芳賀北部団地遺跡(27)、五代南部工業団地遺跡群でも変遷は似ていて、さらに荻窪鯨塚(28)、荻窪東爪(29)、荻窪倉兼・同II(30)の各遺跡などでも8世紀～9世紀に継続している、第二次新興集落の姿が明らかにされている。

松案遺跡(31)からは奈良三彩小壺が出土している。五代竹花遺跡(32)の和同開珎、神功開寶、五代砂留遺跡群の長年大寶まで、いずれも住居からの出土で評価するとしたら、先の指摘通り律令制と結びついた有力者がいたからとすべきなのか。松案遺跡からは「宅」と墨書された土器もあり、周辺で出土する墨書土器の数も多く、当然硯もある。芳賀東部団地遺跡では、「春日部国麿」や「勢多郡□(楊カ)五百□都□」と線刻された石製紡錘車も出土している(1988)。これらを見れば、文字の習得や銭などを入手しやすい環境にあって、鳥取部の推定も単なる語呂合わせではないように思える。

『和名類聚抄』にある勢多郡は、勢多郡少領上毛野朝臣足人の存在から南麓をあて、大室古墳群がある一帯を豪族上毛野氏本貫の地とみている(尾崎1970)。深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、深沢、時沢、藤沢(高山寺本)の9郷があり、芳賀郷は墨書「芳郷」が出土した二之宮洗橋遺跡付近に推定されている(群理文1994)。桂萱郷、真壁郷も言及されているが、場所を特定するまでに至っていない。勢多郡衙ではないかと注目された上西原遺跡も寺院とするのが有力で、郷の所在地同様、郡衙も特定されていない(松田2002)。

生産 水田は、荒砥川の西側になると調査した遺跡が少なく、一様に遺存状態も悪い。谷地にある荻窪南田遺跡(33)の水田は、アゼと段差による区画に特徴がある。谷幅一杯を利用するための工夫という見方もできるが、周辺集落の動向をみれば良好な可耕地に数の限界が見え出したため剰余の策だったのではないかと推定される。だから古墳時代からの継続性に乏しいのだろう。

このように区画するのは、低地帯にある茶木田遺跡(34)、石間西田II遺跡(35)にはなく谷地独特のものである。荻窪南田遺跡で見ると、谷地らしく水はけか土壌自体に問題があったのではないかと推定される。小神明勝沢境遺跡の浅間B軽石に覆われた谷地も、花粉分析の数値は低く、水田の存在は否定的である(群理文2009)。似た結果や状況は大明神遺跡(36)、端気着帳遺跡でも得られていて、鳥取福蔵寺遺跡ではY字の谷地の一方が開田されているにすぎない。この上流が鳥取松山下遺跡である。

そこで浮かんでくるのが生業の問題、集落は何で支えられていたのかである。鳥作が盛んであったからなのか、それとも農業以外にあったのか。まずは有力な候補が鉄の生産で、遺構が点々と検出されている。山に近い立地を考えれば木材、炭の入手も容易である。芳賀東部団地遺跡の小鍛冶は9世紀前半か、8世紀代にまで遡る可能性があり、南麓で遺構が増える背景には技術者の集団が配置されたからとも考えられている(1988)。銅城遺跡でも鉄滓と製品を折り曲げた故鉄が出土していて、近くに遺構が存在したことをうかがわせる。鉄に次いで紡錘車から推定する養蚕、布の生産、そして漆の生産が可能である。

尾崎喜左雄氏は、赤城山を信仰の対象として高く位置づけている(1970)。暮らしには不可欠の水を恵み、祖霊が住むからというのが理由で、この時代になると山上多重塔や、宇通庵寺が著名である。上毛野朝臣足人は国分寺に寄進したことで、少領という地位がある。当然周囲も無縁ではないだろう。本遺跡の周辺は村の数も多く、日々祈る草堂程度なら必要とされたのではないかと推定される。

中世

8工区最大の課題といえるのが、路線が横断しているとみられる大胡郷や細井御厨、青柳御厨の実態に迫ることであろう。いずれも文献からの推定で、遺構は検出さ

れていない。大胡郷は、低地帯にある桃ノ木川沿いを底辺に荒鹿川の大胡付近を頂点とした範囲と考えられている。長楽寺文書や彦部文書で大胡郷を冠した在家のあったことが分かるのと、金沢文庫本「念仏往生伝」で大胡氏が居住していたとみられるからである(前橋市史1971)。2つの御厨は、大胡郷の西側、藤沢川から低地帯にかけての一带とみられ、小神明町には神明宮が鎮座している。延文五年(1360)『神鳳抄』には、青柳御厨建永符80町とあり、細井御厨70町6段35歩とある。

『念仏往生伝』には文応元年(1260)細井尼の往生や、大胡氏の篤信ぶりが記載されている。南麓で赤城塔をはじめ石造物が多いのは、浄土教の普及と一役買った大胡氏などの存在が大きいとしている(近藤1978)。金石文では善勝寺(37)の仁治四年(1243)銘鉄造阿弥如来坐像が有名である。

大胡町養林寺は大胡氏の居館跡と推定され、隣接する長善寺には大胡太郎の墓と伝えられる多宝塔が残されている。『和名類聚抄』勢多郡の中に大胡はないが、茂木山神Ⅱ遺跡からは「大兒万財口」と墨書された土器が出土し、山ノ上碑にある大胡臣と関連するのかと注目されている(大胡町教育委員会2001)。

城館は、保存状況の良い嶺城(38)、荻窪城(39)のほか、小神明の寄居・小神明の砦(40)、鳥取城(41)、勝沢城(42)、小坂子城(43)小坂子要害城(44)、川白田の砦(45)がある。大胡城との関係で説明され、上泉城(46)は大胡一族といわれる剣聖上泉伊勢守の居城として有名である。

近世

明治22年嶺、小坂子、五代、鳥取、勝沢、端氣の6村が合併して、芳賀地区の前身「芳賀村」が発足する。明治11年『上野国郡村誌』(以下「郡村誌」)によれば、6村は江戸時代までさかのぼる。寛文四年(1664)酒井忠清領知目録には上野国勢多郡之内百式拾五箇村、寛保二年(1742)上野国内前橋領では中通41箇村に数えられている。寛保二年鳥取村の石高は251石、6村の合計が2,232石である。この頃のものが胴城遺跡で検出した墓や溝で、村の背後には畑が続き、路傍に墓地がある景観に復元できよう。

明治11年の鳥取村は、田畑と林の比が7:3、田が18町、畑28町で、穀米155石のほかに、大麦7石、小麦31

石、大豆10石、小豆、粟、蕎麦と続き、蝸14石、生糸8貫460匁とある。残る5村も産物等は同じで、その石高も寛文・寛保年間と変化していない。

『郡村誌』では、水利干にして水に苦しむという記載が目立つ。その不足を補っていたのが20基もある溜池で、芳賀村は郡内最多41基の粕川村に次いでいる。安政年間まで遡る修築記録もあるという。苦勞から解放されたのは、昭和46年群馬用水の完成を待ってである。

水をめぐる、南麓最大の遺跡と呼べるのが女堀(47)である。前橋市上泉町で取水し、旧東村国定までをつなぐ灌漑用水路で全長が13kmにも及ぶという規模である。このうち1.5kmが調査され、天仁元年(1108)浅間山の噴火から間もないころに掘削されたが、未完成に終わったと考えられている(峰岸・能登1981)。しかし、取水口と未完成説に対しては検討が重ねられている(飯島2009)。それによると、取水口は現在の利根川にまで達する説、山麓斜面を下る藤沢川の2説がある。

広瀬川低地帯での調査

昭和58年、青柳寄居遺跡で平安時代の水田とその下層から集落が検出された(前橋市教育委員会1976)。これが低地帯では初の本格的な調査で、同59年には茶木田遺跡、同63年から平成4年に国道50号拡幅に伴い東西2kmにわたる範囲が調査されている。これにより低地帯では、桃ノ木川沿いの広い範囲に開発の手が及んでいることが決定的となる。

古墳時代に遡る可能性まで出てきたことで、北1kmにある桂笠大塚古墳との関連が浮かぶ。『総覧』によれば、桂笠大塚古墳以外にも前方後円墳が点在していて、低地帯への注意が促されている(小林2002)。

平成9年には、国道50号の北、石岡西薬瀬遺跡(48)、西片貝源田鳥遺跡(49)が調査されている。前者では5世紀、7～8世紀の集落が検出され、周囲には平安時代の水田がある。平成12年には石岡西田Ⅱ遺跡が調査されている。寺沢川と旧利根川との合流点にあたり、それを望む台地上には6世紀初頭の正円寺古墳がある。検出された水田と畑は平安時代のものであるが、石岡西薬瀬遺跡の5世紀代の集落に対応する生産の場があると考えられている。



第4図 周辺遺跡分布図 国土地理院地形図 1/25,000 「前橋」平成22年12月1日発行、「鴻川」平成14年10月1日発行、
「藤毛石」平成14年9月1日発行、「大胡」平成22年12月1日発行を使用

参考文献

- 富士見村役場「富士見村誌」1954
- 勢多郡誌編纂委員会「勢多郡誌」1958
- 前橋市役所「前橋市史」第一巻 1971
- 大胡町役場「大胡町誌」1986
- 群馬県「群馬県史」通史編1 1990
- 芳賀村誌並びに芳賀の町誌編纂委員会「芳賀村誌・芳賀の町誌」1993
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬県遺跡大辞典」1999
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬の遺跡」1～7 2005・2006
- 有末武夫「群馬県地誌—地誌学の原点とその展開」有末武夫先生退官記念会実行委員会 1984
- 原田恒弘・中東耕志「勢多郡富士見村龍ノ口遺跡試掘調査報告1・Ⅱ」
「群馬県立博物館調査報告書」第1号・第2号
1985・1986
- 鬼形芳夫「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21 1985
- 群馬県勢多郡富士見村教育委員会「小暮地区遺跡群 上白狐山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡 平成5年度営繕整備事業地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1995
- 勢多郡町村教育事務研究会社会教育部文化財部会・赤城村教育委員会「赤城山麓の縄文のあけぼの—縄文時代前期を中心に—」2000
- 高崎市教育委員会・前橋市教育委員会「東国千年の都—前橋・高崎の縄文時代」2010
- 設楽博「前橋市上沖町西新井遺跡表面採集資料(上)」『群馬考古通信』第9号 群馬県考古学談話会 1984
- 富士見村教育委員会「富士見村遺跡群 田中田遺跡・窪谷戸遺跡・見取遺跡」1986
- 赤城村教育委員会・赤城村歴史資料館「赤城山麓の弥生びと—樽遺跡発見70年—」2001
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報」28 平成20年度事業概要 2009
- 齋藤 彰「思わぬところに古代集落—低地の中のムラ・田口下田尻遺跡—」
「埋文群馬」No.45 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡」第527集 2012
- 前橋市教育委員会「芳賀東部印地遺跡Ⅰ」1984
- 前橋市教育委員会「芳賀東部印地遺跡Ⅱ」1988
- 深澤敦「赤城村出土の古式土師器の位置付け」『赤城村歴史資料館紀要』第4集 赤城村教育委員会・赤城村歴史資料館 2002
- 群馬県勢多郡富士見村教育委員会「坂上遺跡 富士見工業団地造成に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書」1994

- 小林 修「赤城山西南麓における後期首長墓の展開」『群馬考古手帳』12
群馬上郷観の会 2002
- 粕川村教育委員会「粕川村の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—」1985
- 松田 猛「古代勢多郡の地名と氏族」『赤城村歴史資料館紀要』第4集
赤城村教育委員会・赤城村歴史資料館 2002
- 尾崎喜左雄「上野国の信仰と文化」尾崎喜左雄著書刊行会 1970
- 中澤充裕「群馬県前橋市松峯遺跡の奈良三彩小皿」『考古学雑誌』68巻4号 日本考古学会 1983
- 関口功一「上毛野勢多評」成立の諸問題」『信濃』第63巻第8号 信濃史学会 2011
- 尾崎喜左雄「上野国長楽寺文書の研究」尾崎喜左雄著書刊行会 1992
- 前原 豊「赤城山麓の墓」『よみがえる中世』5 茂樹大山氏と中世の東国
3 平凡社 1988
- 近藤義雄「金沢文庫本「念仏往生伝」成立の背景」『信濃』30巻5号 信濃史学会 1978
- 大胡町教育委員会「茂木山神Ⅱ遺跡」2001
- 山崎 一「群馬県古城址の研究」上巻 1971、下巻 1972、補遺篇上巻 1979、下巻 1979 群馬県文化事業振興会
- 築瀬大輔「赤城山麓「江木谷」の中世の景観—記録と記憶による景観復元の試み—」『群馬歴史民俗』第20号 群馬歴史民俗会 1999
- 峰岸純夫・能登 健「赤城山麓の開発と遺構」(女塚)「アバンクボタ」
19 特集利根川 1981
- 飯島義雄「灌漑用水遺構 女塚の赤城山麓への引水経路の検討」『研究紀要』27 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009
- 関口功一「前橋低地周辺の「開発」をめぐる二・三の問題」『群馬歴史民俗』第32号 群馬歴史民俗研究会 2011
- 広瀬桃木兩用水土地改良区「広域用水史」1994
- 『上野国郡誌』2 勢多郡(2)群馬県文化事業振興会 1978
- 群馬県教育委員会「群馬県内公共開発に伴う平成21年度県内遺跡発掘調査報告書」2011
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「上郷井北道跡群No.1 上郷井土地改良区営上郷井土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2009 同「上郷井北道跡群No.2 上郷井土地改良区営上郷井土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2010
- 周辺道跡一覧表の番号と第4図の遺跡番号は一致する。遺跡の文献は別途掲載している。

第2章 遺跡の立地と環境

第2表 周辺遺跡一覧表 遺跡番号は第4図番号、文献番号と一致

番号	遺跡名	時代・遺構の種類及び数
1	鳥取松合下遺跡	古墳～平安;住居22,土坑7 近世;溝12,道路2
	開城遺跡	旧石器:ブロック1カ所 縄文:住居1,土坑 古墳:住居,古墳1 奈良・平安:住居,掘立柱建物3,溝1,土坑,井戸1 近世:土坑,溝9
2	土山岩ノ窟遺跡	旧石器:文化層3枚 縄文:住居16,土坑208,配石1,掘立柱建物7,欄別1,遺物集中部1 奈良・平安:住居15,土坑4,掘立柱建物10,欄別3,ビット30,溝9 時期不明:ビット33
3	土山新田塚遺跡群	旧石器:ブロック1カ所 縄文:住居11,土坑95 古墳:住居1,古墳2 奈良・平安:住居4,溝6,堀2,道4,井戸1
4	土山武田遺跡	旧石器:文化層3枚 縄文:土坑1 古墳～平安:住居22,土坑,道,溝
5	五代砂留遺跡群	旧石器:ブロック3カ所 縄文:住居4,土坑 古墳:住居8 平安:住居15,土坑
6	芳賀東部団地遺跡(市教委)	縄文:住居60(うち敷石住居6),ビット140,配石遺構4 古墳:住居70,古墳4 奈良・平安:住居413,掘立柱建物約207,鍛冶・精錬址5,落ち込み3,その他671
	芳賀東部団地遺跡(理研文)	旧石器:ブロック4カ所 縄文:住居3,土坑 古墳:住居29 奈良・平安:住居28,溝 中・近世:墓坑12
7	鳥取福蔵寺遺跡	縄文:住居2,落ち込み2 古墳～平安:住居41,鍛冶遺構1,土坑83,掘立柱建物1,井戸2
	鳥取福蔵寺II遺跡	旧石器:細石器文化層 縄文:住居6 古墳～平安:住居44 縄文-中世:土坑84,掘立柱遺構9,鍛冶遺構1,溝5,井戸1
8	塚遺跡	縄文:石器製作跡,住居8(うち敷石住居4),土坑70,焼土遺構6,埋蔵3,配石遺構2 平安:住居1 中世:竪穴遺構6,火葬墓4
9	芳賀西部団地	縄文:住居7,ビット8,配石遺構2 古墳:古墳31,埴輪棺1 中・近世:土坑27
10	細安若根遺跡	縄文:住居2,ビット1 弥生:方形周溝墓2,ビット1,溝状遺構1 古墳:住居16
11	川白田遺跡	縄文:住居22,土坑338,埋設土器3,集石2 近世:土坑2,井戸3,畑跡1,溝2
12	九料遺跡	縄文:住居7(うち敷石住居3),集石1 古墳:住居67,土坑29,掘立柱建物1,ビット9 奈良・平安:住居4 中・近世:墓8,井戸4 時期不明:住居1,土坑6,掘立柱建物1,ビット11,溝9,水路2,河川跡4
13	芳賀北曲輪遺跡	縄文:住居24(うち敷石住居4,配石住居1),土坑21,風倒木1 古墳:古墳6 時期不明:井戸1,道路1
14	五代伊勢宮I遺跡	古墳:住居3 奈良・平安:住居3,ビット1 中・近世:土坑1,溝1
	五代伊勢宮II遺跡	縄文:住居7,土坑26 古墳:住居10,竪穴遺構2,土坑7,ビット490 奈良・平安:住居5,掘立柱建物3 近世:溝4
	五代伊勢宮III遺跡	縄文:土坑1 奈良・平安:住居3 中・近世:土坑66,溝3,井戸3,地下式坑5
	五代伊勢宮IV遺跡	縄文:住居3,土坑194 奈良・平安:住居1
	五代伊勢宮V遺跡	縄文:住居12,土坑43 古墳:小石塚1 古墳～奈良・平安:住居53,掘立柱建物6 土坑38,ビット163 中・近世:竪穴遺構5,溝6,井戸2
	五代伊勢宮VI遺跡	縄文:住居22,土坑753 古墳～平安:住居22,鍛冶遺構1 古墳～近世:土坑311,ビット336 奈良～近世:掘立柱建物3 近世:道路1 時期不明:井戸2,竪穴遺構1
	五代伊勢宮遺跡(1)	縄文:住居3,土坑40 古墳:住居9 古墳以降:住居2 奈良・平安:住居12,掘立柱建物2 平安～近代:溝10,土坑54
	五代伊勢宮遺跡(2)	縄文:土坑6 平安:住居1 時期不明:掘立柱建物1,土坑5,溝1 近代:道1
15	小神明勝沢境遺跡	縄文:埋蔵1 弥生:住居2 古墳:住居9 平安:溝1
16	倉本遺跡	弥生:住居2 中・近世:溝2(環濠),ビット21
17	湯気遺跡	弥生:住居1 古墳:住居4 奈良・平安:住居7 時期不明:掘立柱建物3,ビット,土坑,溝,井戸
18	五代中原I遺跡	縄文:住居2 古墳:住居5,土坑1 奈良・平安:住居11,土坑3,ビット254 近世・現代:溝2
	五代中原II遺跡	縄文:住居4 古墳:住居35 古墳後期～近世:ビット58,掘立柱建物3 近世以降:土坑25,道4 時期不明:風倒木3
	五代中原III遺跡	古墳:住居45,土坑55,ビット57
19	正門寺古墳	6世紀前半の前方後円墳 全長65m 自然石乱石積桶型横穴式石室(くびれ部:竪穴式石室)上毛古墳総覧資料第66号,石塚から鼠,人骨,太刀破片,鉄鍬片,漆薄片が出土
20	柱置大塚古墳	6世紀後半の前方後円墳 浮石質砂鉢状角四石室山岩積石積桶型横穴式石室 上毛古墳総覧資料第9号
21	オプ塚古墳	6世紀後半の前方後円墳 全長約35m 自然石乱石積桶型横穴式石室 上毛古墳総覧資料第48号 人骨,直刀,小刀,刀子,鉄鏝,鋸釣金具,耳環,土玉,須臾器,埴輪が出土
22	西田遺跡	縄文:住居3 古墳:住居4,円墳4,帆立貝式1,溝3,道1,集石2,ビット31
23	小坂子岡田I・II遺跡	縄文:陥し穴3 古墳:7世紀円墳3,小石塚1 奈良・平安:溝1 時期不明:風倒木1
24	五代大日塚古墳	6世紀末～7世紀前半の前方後円墳 横穴式石室 上毛古墳総覧資料第11号 鏡,鏡板,巻,雲珠,鐙,刀身,金・銀環,須臾器等出土,東京帝国大学,帝室博物館,群馬県歴史学校に收藏
25	新田塚古墳	7世紀代の円墳 直径約40m 高さ5m 上毛古墳総覧資料第51号

番号	遺跡名	時代・遺構の種類及び数
26	五代江戸屋敷遺跡	縄文:土坑1 古墳:住居44、方形周溝墓2、周溝状遺構1 奈良・平安:住居12、掘立柱建物1、ピット87、井戸1 中世:地下式坑2、溝1
27	芳賀北部田地	縄文:住居34(うち敷石住居4)、配石遺構17 奈良・平安:住居237、掘立柱建物8、製鉄遺構3、溝28、井戸5、ピット20
28	伏窪跡塚遺跡	奈良・平安:住居10、掘立柱建物10(1号掘立柱建物は布版)
29	伏窪東爪遺跡	縄文前期:住居2
30	伏窪倉兼遺跡	奈良・平安:住居29、掘立柱建物12
30	伏窪倉兼Ⅱ遺跡	奈良・平安:住居36、掘立柱建物10、溝4
31	松家遺跡	古墳:住居11 奈良・平安:住居65、ピット1、第62号住居で奈良三彩小甕出土 時期不明:掘立柱建物1
31	五代槍塚Ⅱ遺跡	古墳:住居2、土坑8、焼土坑1
31	五代竹花遺跡	縄文:住居2 古墳:住居5、土坑1 奈良・平安:住居11、土坑3、ピット254 近世・現代:溝2
32	五代竹花Ⅱ遺跡	縄文:住居1、土坑19 古墳:住居2、土坑8 奈良・平安:住居17、掘立柱建物3、中世:地下式坑1 近世以降:道4 時期不明:塹状遺構3、周溝状遺構1、土坑77、ピット236、井戸3
33	伏窪南田遺跡	縄文:土坑1 奈良・平安:溝13、道2、水田 中・近世:土坑2、溝6、道6、焼土痕1
34	茶木田遺跡	奈良・平安:住居10、土坑4、柱穴状ピット8、焼土遺構1 中世:井戸1、溝3
35	石岡西田Ⅱ遺跡	古墳:踏み分け道3、旧河道1 平安:住居16、As-B下水田、畠 中・近世:As-B混上下水田、溝41、土坑22、井戸4、旧河道3
36	大明神遺跡	古墳:住居2 近世:溝3、井戸1 古墳~近世:土坑6
37	天台宗善勝寺	鉄造阿弥如来坐像 背面踏出路(仁治四年大才突印二月日 大動進僧心禪 為法界衆生平 等利益也) 鉄跡、高さ88cm、1243年、国指定重要文化財「上毛金石文年表」
38	堀城跡	中世の城郭、16世紀 並部式丘城、北条高広家臣田中大次が在城
39	伏窪城跡	中世の城郭、16世紀 丘城、「上州故城畧記」では東伏窪城
40	小神明の寄居・磐	中世の城郭、16世紀 単部、開口正次が在城、「御岳神社文書」
41	鳥取城	中世の城郭、15~16世紀後半 平城、発智六郎右衛門ら越後勢が在城、「赤坂文書」「発智文書」
42	勝沢城跡	中世の城郭、16世紀 別部式平城 堀城の支城か、建久元年鎌倉の臣藤沢清近の居城(「芳賀村誌」)
43	小坂子城跡	中世の城郭、16世紀 丘城 堀城の支城か
44	小坂子要害城	中世の城郭、16世紀 丘城
45	川白田の磐	中世の城郭、16世紀
46	上泉城跡	中世の城郭、16世紀後半 平城 大胡城の支城として大胡氏により築城、永祿の頃は上泉氏を称する武藏守が在城、西林寺に上泉伊勢守信綱の墓がある。「言継卿記」「歴代古案」
47	女堀	赤城山南麓前橋市上泉町から旧佐波郡東村国定までをつなぐ灌漑用水路 全長13km、天仁元年(1088)に近い時期、12世紀初頭に創削されたものの、未完成に終わったと考えられている。
48	石岡西染瀬遺跡	古墳:住居9、土坑1 奈良:住居9 時期不明:款状遺構、住居1、掘立柱建物3、土坑11、溝5、噴砂
49	西片貝原田島遺跡	中世:火葬跡1、集石1
50	亀泉薬師塚古墳	6世紀頃、円墳 自然石乱石積無袖型横穴式石室 土毛古墳総覧記載無 大刀、金環、馬具、須恵器出土
51	宮野Ⅱ遺跡	旧石器:ブロック1カ所 縄文:住居15、掘立柱建物3、土坑125、埋設土器2、ピット13 古墳:古墳2、水田想定地 奈良:住居5 平安:住居5、土坑11、ピット7
52	堤沼上遺跡	旧石器:ブロック1カ所 古墳:住居6 奈良・平安:住居34 平安:住居5、掘立柱建物18、土坑56、溝9、井戸1、道3、ピット164、水田、畠
53	亀泉坂上遺跡	旧石器:ブロック1カ所 縄文:住居6、土坑73、ピット45 古墳:住居21、土坑12、土器集中1、畠1、溝1、古墳1 平安:溝4、道8、水田 江戸:溝10、道1、畑1
54	亀泉西久保Ⅱ遺跡	縄文:土坑2、配石遺構1 古墳:水田1 奈良・平安:住居6、土坑6、溝8、道3、水田 中・近世:溝4 時期不明:土坑16、ピット34
55	小神明富士塚遺跡	縄文:遺物包含層 弥生:住居1 古墳:住居2 奈良・平安:住居10、土坑1、溝17 中世:掘立柱建物1、溝1、道1 近世:屋敷1(掘立柱建物6、溝7、道1、井戸2、土坑)

第2章 遺跡の立地と環境

文献 番号は第4回番号、周辺遺跡表番号と一致

- 1 鳥取松合下遺跡・胴城遺跡 本報告
- 2 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「上泉唐ノ厩遺跡」第510集 2011
- 3 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「上泉唐ノ厩遺跡・上泉新田塚遺跡群」第522集 2011
- 4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「上泉武田遺跡」『年報』27 2007
- 5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「五代砂留遺跡群」第530集 2012
- 6 前橋市教育委員会「芳賀東部印地遺跡Ⅰ」芳賀印地遺跡群第1巻 1984
- 7 前橋市教育委員会「芳賀東部印地遺跡Ⅱ」芳賀印地遺跡群第2巻 1988
- 8 前橋市教育委員会「芳賀東部印地遺跡Ⅲ」芳賀印地遺跡群第3巻 1990
- 9 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「芳賀東部印地遺跡」1998
- 10 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「芳賀東部工業団地遺跡群」『年報』27・28 2007・2008
- 11 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「鳥取福蔵寺遺跡」1998
- 12 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡」1999
- 13 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「堤遺跡」『年報』28 2008
- 14 前橋市教育委員会「芳賀西部印地遺跡」芳賀印地遺跡群第4巻 1991
- 15 前橋市教育委員会「福気遺跡群Ⅰ」1983
- 16 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「山白田遺跡」1998
- 17 前橋市教育委員会「小神明遺跡群Ⅱ」1984「小神明遺跡群Ⅳ」1986「小神明遺跡群Ⅴ」1987
- 18 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「芳賀北輪軸遺跡」1990
- 19 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡」2001
- 20 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮Ⅱ遺跡」2002
- 21 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡」2002
- 22 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮Ⅴ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡」2003
- 23 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮遺跡(1)」2007
- 24 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮遺跡(2)」2009
- 25 (財)群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団「小神明勝沢境遺跡」『年報』28 2008
- 26 前橋市教育委員会「小神明遺跡群Ⅱ」1984
- 27 前橋市教育委員会「小神明遺跡群Ⅳ」1986
- 28 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮Ⅵ遺跡・五代深堀Ⅲ遺跡・五代中原Ⅲ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡」2002
- 29 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代伊勢宮Ⅶ遺跡・五代中原Ⅳ遺跡」2003
- 30 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代中原Ⅴ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡」2004
- 31 19・20・21 前橋市史編さん委員会「前橋市史」第一巻 前橋市 1971
- 32 前橋市教育委員会「小神明遺跡群Ⅱ」1984
- 33 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「小坂子岡田Ⅰ・Ⅱ遺跡」1997
- 34・25 前橋市史編さん委員会「前橋市史」第一巻 前橋市 1971
- 36 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代江戸屋敷遺跡」2001
- 37 前橋市教育委員会「芳賀北部印地遺跡Ⅰ」芳賀印地遺跡群第5巻 1994
- 38・29 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「茯苓輪塚遺跡・茯苓東爪遺跡」2002
- 39 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「茯苓倉兼遺跡・茯苓倉兼Ⅱ遺跡」2003
- 40 前橋市教育委員会「松家遺跡」1982
- 41 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡」2001
- 42 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「五代竹花Ⅱ遺跡・五代木福Ⅱ遺跡」2004
- 43 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「亀泉西久保Ⅱ遺跡・茯苓南田遺跡」第420集 2008
- 44 前橋市教育委員会「茶木田遺跡」1985
- 45 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「石岡西田Ⅱ遺跡」第306集 2002
- 46 前橋市教育委員会「小神明遺跡群Ⅱ」1984
- 47 前橋市史編さん委員会「前橋市史」第一巻 前橋市 1971
- 48～46 群馬県教育委員会「群馬県の中世城館跡」1989
- 49 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「女堀」1985
- 48・49 石岡西築遺跡調査会「石岡西築遺跡・西片貝原田島遺跡」1996
- 50 前橋市教育委員会「亀泉築師塚古墳」1973
- 51 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「笠野Ⅰ遺跡」第402集 2007
- 52 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「堤上遺跡」第423集 2008
- 53 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「亀泉坂上遺跡」第445集 2008
- 54 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「亀泉西久保Ⅱ遺跡・茯苓南田遺跡」第420集 2008
- 55 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「小神明勝沢境遺跡・小神明富士塚遺跡」第524集 2012

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 試掘調査

事業地やその周辺には、周知の埋蔵文化財包蔵地がある。平成19年8月16～27日、群馬県教育委員会が鳥取町から上榎町まで、約53,000㎡を対象に試掘調査を行っている。

鳥取松合下遺跡ではAs-B下の水田が、胴城遺跡は縄文時代～平安時代の集落があると判断され、本調査に至る。

2 調査区・グリッドの設定

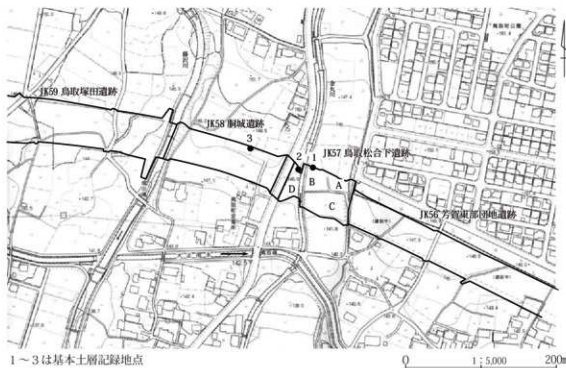
2つの遺跡は、西の藤沢川、東の金丸川にはさまれた台地であって東寄りの市道で東西に分けられる。胴城遺跡は台地上だけであるが、鳥取松合下遺跡は台地と金丸川が流れている低地までが範囲である。

鳥取松合下遺跡は、水路と道路で仕切られた低地をA～C区、台地をD区とした。胴城遺跡は、調査範囲を一

括していて、区を設定していない。国土交通省による土地区画番号は、168～176が鳥取松合下遺跡、177～183が胴城遺跡である。

グリッドは、8工区の基点である、国家座標第Ⅸ系(世界測地系) X=45,000、Y=-63,000を基準に設定した。上武道路調査予定地の統一仕様では1km四方が地区、その中の100m四方を区とし、さらに区の南東隅を基点に5mごとにX軸が南から1～20、Y軸が東からA～Tをつけて小区画に細分した。例えば、鳥取松合下遺跡を特定するには第4地区83O10グリッド、胴城遺跡の場合、第4地区85M10グリッドと表記する(第6図)。

この表記は、遺構の位置の特定、遺構図の作成や遺物の取り上げ、遺物への注記など諸作業で使われている。ただし、第4地区は、諸記録の管理上の扱いで、遺物や図面等記録類への記入は省略した。これに代わり、上武道路の7工区までの仕様にならない遺跡略称「JK」を使用した。Jは上武、Kは国道の略称である。鳥取松合下遺跡が「JK57」、胴城遺跡が、「JK58」である。



第5図 調査区位置図 前橋市現形図を使用(平成21年版)

第2節 基本土層

台地と低地について述べる(第7図)。

低地 鳥取松合下遺跡B区3トレンチ

- 1 褐灰色土 しまりのない現代の耕作土
- 2 黒褐色土 ローム粒が混入、堅緻、旧耕作土
- 3 黒褐色土 砂質しまりない、As-B混入、鉄分沈着
- 4 灰黄褐色土 砂質しまりない、川砂多く鉄分沈着
- 5 4層に似ているが1~3cm大の石多混

台地 鳥取松合下遺跡D区北壁84D16グリッド

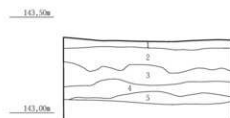
- 1 暗褐色土 A盛土、旧耕作土
- 2 黒褐色土 As-B多混、堅緻
- 3 黒褐色土 As-C少混、暗褐色土斑混、堅緻
- 4 黒褐色土 細粒、均質、堅緻
- 5 黒褐色土 全体に灰白色微砂、下位にローム斑混
- 6 ローム 上位にAs-BPほか軽石混入

台地 胴城遺跡84M19グリッド

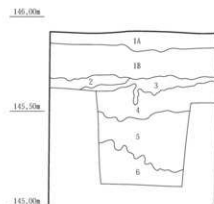
- 1 表土、耕作土、上層に土地改良の客土
- 2 暗褐色土 As-B混入
- 3 黒褐色土 As-C混入
- 4 黒褐色土
- 5 暗褐色土 ローム漸移層
- 6 黄褐色ローム、ソフトローム
- 7 浅間褐色軽石層群 As-BP
- 8 褐色ローム As-BP混入
- 9 暗色帯
- 10 褐色ローム
- 11 褐色ローム
- 12 榛名八崎軽石層

浅間B軽石(As-B)は、古墳の周堀など遺存状況が限られている。3層が1面目の遺構確認面、5層前後で縄文時代の遺構を確認、6層で旧石器出土、榛名八崎軽石層は厚さ20cm、下位にロームが続く。

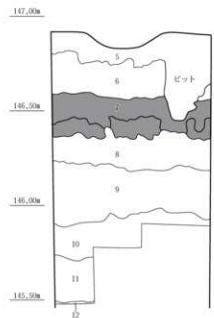
基本土層1
鳥取松合下 B区3トレンチ



基本土層2
鳥取松合下 84D16グリッド



基本土層3
胴城 84M19グリッド



1~3の記録位置は第5図参照

第7図 基本土層柱状図

第3節 調査の経過

1 概要

鳥取松合下遺跡は、平成20年度に芳賀東部団地遺跡と平行して調査を行った。胴城遺跡は、平成19年度と同20年度の2回に分けて行い、藤沢川の橋台部分1カ所を同21年度に行った。

特記されるのは、平成19年度末から20年度当初の『道路特定財源問題』である。5月20日までのおよそ50日間、調査は中断を余儀なくされている。問題の解決後は調査期間の短縮が急務となった。旧石器確認グリッド調査を2面目の調査に替える。芳賀東部団地遺跡との2遺跡平行調査などで事態を凌いだ。調査した遺構の数は、次のとおりである。旧石器時代については、8工区旧石器時代編(平成23年度刊行)に掲載する。

鳥取松合下遺跡

住居	22軒
土坑	7基
溝	12条
遺物箱数	16箱

胴城遺跡

住居	61軒
掘立柱建物	3棟
土坑	63基
溝	10条
古墳	1基
井戸	1基
墓坑	2基
ピット	96基
遺物箱数	25箱

2 鳥取松合下遺跡の調査経過

5月12日、A～C区での調査を開始する。先述の『道路特定財源問題』もあったが、芳賀東部団地遺跡調査終了後に予定されている工事で西入口であることと、6月上旬の田植えが迫っていることから、調査は芳賀東部

遺跡と平行して行う。トレンチで確認し、必要に応じて拡張とした。A区3本、B区6本、C区6本のトレンチを設定し、B区では溝と流路、C区では2条の流路を検出した。As-Bは検出したが、流路のほかは混土化していて平安時代の水田も可能性にとどまる。26日B区、28日C区の写真撮影、A～C区は30日調査を終了する。27日、県文化財保護課がD区で確認調査を行い複数の住居を確認する。30日D区の表土掘削を開始する。

6月5日、国土交通省との調整会議が高崎河川国道事務所で開催される。芳賀地区では工事発注の迫っていることが伝えられ、調査工程の提出を求められる。また8-1工区で試掘調査が可能であること、同2工区の用地買収状況が報告されている。6日、D区の表土掘削が終了する。確認された住居は10～15軒で、重複が激しい。5日から住居の調査をはじめ。11日、16号住居から銅鏡の破片、18号住居から柄の一部が残る鉄製の斧が出土。調査区が狭い上、重複に加えて焼失住居があるために調査は難航する。13日、前橋市教育委員会より連取松合下遺跡から鳥取松合下遺跡に遺跡名称変更の通知がある。30日、高崎河川国道事務所幹線係長視察。



18号住居鉄斧の出土状況 右半分が斧で長さは9.9cm、左が錆で固まった鉄柄と思われる一部。床に置かれていたか。

7月3日、『全国安全週刊』常務理事が視察。8日、1面空掘。この日以降、住居は掘り方調査へと移る。古墳時代の住居は大型で床面までが深く、カマドの残りが良い。調査の効率に努めるが、予想以上の掘削土量で、

残土置き場にも不足する事態。市道の脇でしかも路面よりも下にあるため、夕立のたびに調査区が水没する。9日、調査が終了したA～C区は国土交通省に引き渡す。14日、県文化財保護課より調査終了の見直しについて問い合わせがある。終了は7月末日とする。23日、大型住居の1、13、14号の掘り方調査を継続、いずれも建て替えがされていて胴城遺跡にはない特徴が判明。30日、遺物洗浄の準備を開始する。

8月 2日まで、D区を埋戻して調査を終了する。



作業が進むD区の様子 東向きの斜面に住居22軒ほかがある。右手が金丸川が流れる低地である。

3 胴城遺跡の調査経過

平成19年度の調査経過

2月 1日、防風ネットの設置等開始。4日から8日まで表土掘削、8日から遺構確認を開始する。13日から15日まで表土掘削、住居11軒、溝5条など確認する。18日から溝、墓坑の調査。19日、グリッド杭打設。21日、1号から住居の調査を開始する。25日、墓から出土した人骨の鑑定、1号墓が女性、2号が男性と指摘される。27日、3号住居からは馬骨出土、4号住居ではFAの堆積していることが判明。

3月 4日までに5～8号住居の調査を開始する。床面までが浅いため作業は進むものの、重複の切り合いを決めるのが難しい。11日、3～5号溝の全景撮影。遺構確認を兼ねて全体を清掃。12日、縄文時代の遺構確認開始。ローム漸移層上面まで10cm掘り下げて確認したが、遺構がないので一部は、そのまま2m×5mのグリッド

で旧石器確認調査へと継続する。最終的には5カ所となる。また4、9、10号住居などで掘り方調査が進められる。13日、群馬テレビの取材。18日、1号住居東壁に重複する縄文時代前期12号住居を検出する。周囲での確認を継続するが土坑等はなかった。21日、掘削工事請負会社である須賀建設が不渡りを出して業務中止。調査も中止となる。

平成20年度の調査経過

4月から5月6日まで、『道路特定財源問題』のために調査が中断する。

5月 19日、前年度調査箇所を調査を開始する。12号住居、旧石器確認調査を行う。住居は1軒だけで、代わりに土坑が点在して確認される。26日、高崎河川国道事務所幹線道路係長現地を視察。『道路特定財源』に関係して、改めて効率的な調査が要望される。28日までに前年度からの継続箇所である、5カ所の旧石器確認調査と周囲での縄文時代の遺構確認調査を終える。

6月 鳥取松合下遺跡の調査を急ぐことになり、胴城遺跡との2遺跡で平行した調査体制となる。2日、12号住居と27、28号土坑など調査終了。5日、10時から国土交通省との調整会議(既述)。調査終了した前年度分を埋戻し、引き続き3000㎡分の南半分の表土掘削を開始する。13日、遺構確認を開始する。住居は予想していたよりも少なく13～18号までの6軒である。20日、調査区南側84区1面の空撮。その後、住居の調査と旧石器確認調査を平行して進める。24日、1号墳を確認。地番照合の結果、『上毛古墳総覧』芳賀村1号墳吉祥寺塚古墳と判明。25日、旧石器確認調査で褐色帯から結晶質片岩が出土する。最終的には30点近い数となる。30日、高崎河川国道事務所幹線係長が視察。

7月 22日まで旧石器確認調査と住居の調査を継続する。ただし、鳥取松合下遺跡を主体としたために、作業は遅延する。24日から調査区東にある市道の際から事務所部分を残して、調査区の北半分の表土掘削を開始する。遺構確認へと続く。鳥取松合下遺跡D区の遺構が連続すると懸念された箇所であったが、住居2軒と大幅に減少、しかも市道前身の道で削平されていた。

8月 1日以降、住居の調査が本格化する。2～3軒と重複をした住居が多い上に、カマドの遺存状態が良好

第3章 調査の方法と経過

で作業工程の調整には苦慮する。年度当初の計画では8月から小神明地区での調査を予定していただけに、調査期間がいつまでかかるのか問題となる。18日、29～42号住居を調査する。請負期間を9月30日まで変更するとの通知がある。19日、県文化財保護課が調査状況を視察。22日、上毛新聞取材。

9月 2日、調査区北側1面の空撮。3日、県文化財保護課が調査状況を視察。住居は45～53号を調査中。掘り方調査を平行するが、重複とカマドの状態が良好なために作業は依然として難航。9～11日まで埋蔵文化財専門講座「旧石器調査」が本遺跡で実施される。17日、33号住居掘り方で出土した黒曜石製ナイフ形石器をもとに、85A・B18・19グリッドでの旧石器調査を開始する。18日、事務所プレハブを撤去。20日、プレハブ下表土掘削をして住居6軒を確認する。24日、56～61号住居調査。旧石器は、調査の範囲を13×15mにまで拡大する。29日、株式会社古環境研究所早田 勉氏が来跡。出土層位をAs-0K～As-YPと指摘。石器は黒曜石に硬質頁岩が伴う。

10月 2日、住居の掘り方調査を開始する。同日、国土交通省との調整会議が高崎河川国道事務所で開催される。現況、調査終了の見通しを報告する。主題は小神明町・上細井町地区の調査で、上細井地区で土地改良事業



新成遺跡での旧石器調査状況 浅間大窪沢軽石層～浅間黄色軽石層の間で100点余りの石器が出土。

が10月中にも発注されることが明らかとなる。7日、住居の掘り方調査、旧石器の遺物取り上げをして調査を終了する。8日、調査区の埋戻し。14日、国土交通省に対象用地を引き渡す。

平成21年度の調査経過

11月 10日、藤沢川にかかる橋台部分26.5mを立ち合い調査する。2号住居の未調査部分にかかることや、縄文土器や石器が散布していることから調査に至る。ローム漸移層を遺構確認面にして、2号住居の南西隅と6号溝の延長部分を検出することができた。



上空北から見た方賀地区 遺跡は写真のほぼ中央にある。(●)

第4章 鳥取松合下遺跡の調査

第1節 遺構の概要

A～C区は、金丸川が流れている低地にあり、道路と水路を境界にして分ける。D区は、金丸川をはさんだ西側の台地上にあり縁辺部にあたる。斜面の裾は、金丸川を越えていて、B区とC区で東端が検出されている。胴城遺跡とは市道を境界に分けたが、同一の遺跡とみられ低地の中央を蛇行していたものが、人の手が加えられて現在のように台地寄りの西へと位置を変更していることが明らかとなる。低地は泥炭質の黒色土が堆積していて、これを水田に変え、広くした結果だったとみえる。

試掘調査で指摘されていたAs-Bは、調査区全域に分布するのではなく、B区の流路に純層がブロックで溜まった状況である。土地改良による倒坪は近水面まで、それ以前の耕作面に及んではない。流路にしかないというのは、ほかが開墾で踏み込まれてしまったからなのか。適した立地ではあるが、水田と呼べるような状況はAs-Bが混土化して以降である。溝は、灌漑を主に区画まで兼ねたものとみられるが近世とそれ以降のものである。台地上の集落に対応する水田がどこに、どんな状況であるのか、生産跡との関係に調査の課題が残る。

集落の状況を明らかにしたのがD区である。胴城遺跡の東縁辺部にあたり、住居22軒、土坑7基が検出されている。古墳時代が5軒(1・2・6・15・21号)、奈良・平安時代が17軒(3～5・7～14・16～20・22号)である。重複は最大が4軒、建て替えもある。台地の縁辺部に密集していて、単独にあるのは2・11号の2軒だけという状況である。その中には9・18・19号の焼失住居3軒がある。胴城遺跡にくらべて数が多いという印象である。9号からは、中にアワが入った曲物と樹皮製容器が出土している。

古墳時代の住居は、一辺が6mを越すものと4m前後のものがある。4本の主柱穴と東カマドの特徴は共通しているが、N80°E前後とN85°E前後の二者に主軸方向が分かれる。

奈良・平安時代では、一辺が6m近い12号住居から最

小3m以下の8号住居まで形状、規模ともに様々である。時期が下るに従い掘り込みは浅くなり小型化する。ロームに達していないものが半数である。そのためであるのか、19号では床の半分と土坑の内面にシルト質のロームが貼付されている。住居全体に施した貼床の上であって、明らかに意図が異なる。19号では土間部分と考えてみた。床に貼ったのは胴城遺跡にも類例があり、それ以上に例の多いのがカマドである。シルト質土塊を厚く貼り、それを掘り込んで作られている。これらも掘り込みがロームに達しない住居である。

土器は、全体では16,177片、その80%以上を土師器の坏・埴輪と甕の小片が占めている。そしてカマド内を除けば接合例は少なく、また出土位置が高い。重複が繰り返された結果、移動した遺物が多かったといえよう。最も数が多いのは被災した9号住居で、土器のほかに紡錘車、大小の刀子、釘の鉄製品、工作台とみられる石が出土している。鉄製品は、18号住居の鉄斧が特筆される。焼失住居でも壁際にあったことが幸いしたのか、柄の装着部が鉄分で固まり残されている。広葉樹クヌギの芯材が使用され、芯の位置から膝柄ではないかと推定することができる。埴輪は、遺構と結びつかないが形状から8世紀後半～9世紀代の塀形¹⁾との関連が指摘されている。16号住居の銅鏡は、廃棄されたものであるが数少ない出土例として注目である。

第2節 A区～C区の遺構と遺物

As-B下に水田があるという試掘結果であったが、至急田植えをしたいとの要請を受けたこともあってトレンチで確認後、必要に応じて範囲を広げることにした。

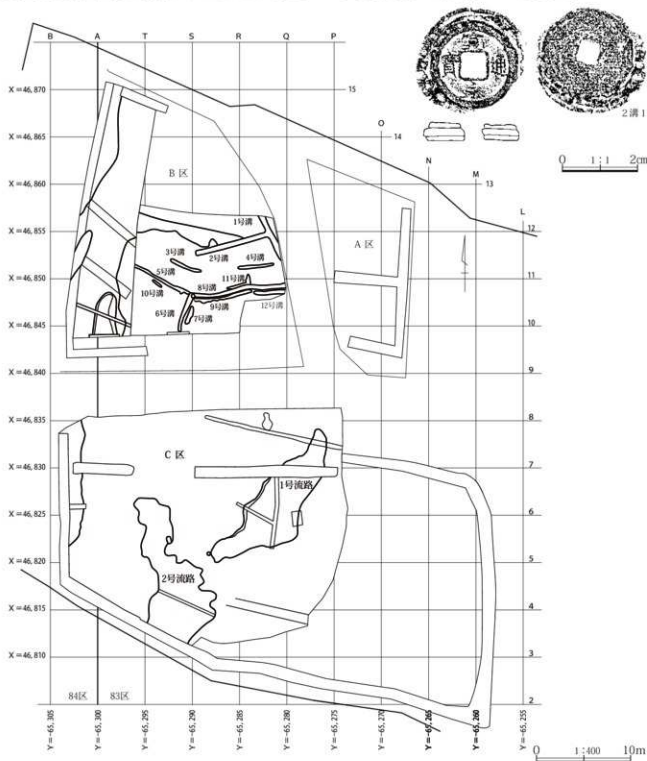
A区は、調査区の北東部である。トレンチは3本、地表下50cm前後まで土地改良前後の耕作土があり、その下にAs-Cが混入する黒褐色土、さらに地表下1m前後で地山とみられる砂礫混じりの土層となる。B区やC区にくらべて地山が高い。調査は、遺構がみられないことから地山までの堆積状況を一部で確認して終える。トレンチ

第4章 鳥取松合下遺跡の調査

以外については拡張していない。

B区は、金丸川の東側で流路を確認した後、さらに東側に拡張したところ12条の溝を検出した。溝は近世が上限で、土地改良直前のもまでがある。方位や隣接・重複している状況から灌漑を主としながら代々の水田を区画したとみられる。水田は、複数ある鉄分沈着層からの推定で近世以降、継続して耕作していたとみられる。近

世以前は、試掘で指摘されていたのが水田耕作土の下にある黒褐色粘質土である。全体に広がりそうであったが、遺構がある状況に乏しくトレンチで堆積状況を確認しただけで調査はしていない。流路は、幅が4~7m、As-Bの混土で埋まった後に水田となっている。この状況から、流路の時期はAs-B降下以前にさかのぼるとみられる。以下、近世以降の12条の溝について詳述する。



第8図 A～C区遺構全体図・2号溝遺物図

1号溝(第8図)

位置 B区84Q11・12、低地の中央部を南北に流れている。2号溝とは検出した中程でT字形に合流。

検出長 5.33m、幅50cm。**走行** N27°W

出土した遺物はない。

所見 土地改良前まで機能していたとみられる。

2号溝(第8図)

位置 B区84QR11、東端が1号溝とT字形に合流。

検出長 7.86m、幅58cm。**走行** N74°W

遺物 土器9片、寛永通宝6枚が出土した。

所見 土地改良前まで機能していたとみられる。

3号溝(第8図)

位置 B区84RS11、5号溝と平行、北2.50mにある。

検出長 3.46m、幅23～28cm。**走行** N63°W

遺物 覆土から須恵器羽釜の破片が出土した。

所見 検出状況から近世とみられる。

4号溝(第8図)

位置 B区84QR11、2号溝と8号溝の中間にある。

検出長 3.80m、幅26～32cm。**走行** N81°E

出土した遺物はない。

所見 検出状況から近世とみられる。

5号溝(第8図)

位置 84ST10・11、3号溝と10号溝の間にあり東端は6号・8号溝の交点に接続。西端は、深掘りて途切れているが続いているとみられる。

検出長 6.60m、幅20～42cm。**走行** N61°E

遺物 土師器3片が出土した。

所見 検出状況から近世とみられる。

6号溝(第8図)

位置 B区84RS10・11、北端が5・8号溝の交点に接続。検出長 9.26m、幅28～56cm。**走行** N20°E

出土した遺物はない。

所見 検出状況から近世とみられる。

7号溝(第8図)

位置 B区84RS10、6号溝に平行、東0.80mにある。

検出長 1.98m、幅40～52cm。**走行** N21°E

出土した遺物はない。

所見 検出状況から近世とみられる。

8号溝(第8図)

位置 B区84QR10、わずかに蛇行、西は5・6号溝の交点に接続。南は接するような位置で9・12号溝が平行、Rライン前後で11号溝と重複。

検出長 10.20m、幅30～42cm。**走行** N73°E

遺物 土師器環と甕の破片10片が出土した。

所見 検出状況から近世とみられる。

9号溝(第8図)

位置 B区84QR10、8号溝の南を接するような位置で平行する。東端の延長線上に12号溝がある。わずかに位置がずれている。

検出長 6.26m、幅18～36cm。**走行** N73°E

遺物 土師器環と甕、須恵器甕の破片7片が出土した。

所見 検出状況から近世とみられる。

10号溝(第8図)

位置 B区84S10、5号溝の南西50cmを平行。

検出長 1.20m、幅24cm。**走行** N56°W

出土した遺物はない。

所見 検出状況から近世とみられる。

11号溝(第8図)

位置 B区84QR10・11、8号溝の北側を接するように平行、一部は重複。8号溝よりも古い。東端が北へ直角に曲がる。

検出長 3.12m、幅23～47cm。**走行** N73°E

出土した遺物はない。

所見 検出状況から近世とみられる。

12号溝(第8図)

位置 B区84Q10、8号溝の南を接するように平行。西端の延長線上に9号溝がある。

検出長 3.30m、幅40～42cm。**走行** N85°E

出土した遺物はない。

所見 検出状況から近世とみられる。

C区は、6本のトレンチで下層に黒褐色土を確認する。東西約30m、南北約20mに拡張した。西端でB区から続く金丸川の流路と、中央部でY字形に2条の流路を検出した。As-Bは混土化していて、B区と同じ状況である。下位の黒褐色土は粘性が強く、泥炭質である。

1号流路

位置 83P～R5～7、台地の縁に沿って北東-南西方向に流れている。**検出長** 15.6m、最大幅6m、深さ0.9mまで掘り下げたが底面には達していない。覆土の中間にはラミナ状の川砂が全体にみられる。

2号流路

位置 83R～T3～6、低地の中央部を南北に流れている。**規模** 長さ16m、最大幅7m、深さ0.4mまで掘り下げた。下部は有機質に富んで泥炭化している。上流にあたるB区6トレンチで検出されている流路と同一のもので、1号流路とはY字形に接続している。

第3節 D区の遺構と遺物

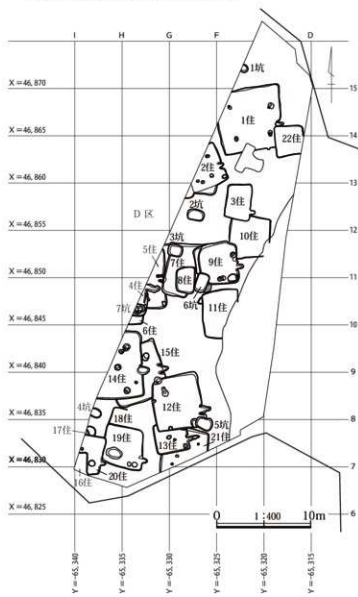
1 竪穴住居

1号住居(第10～13図 P L, 3・5・29)

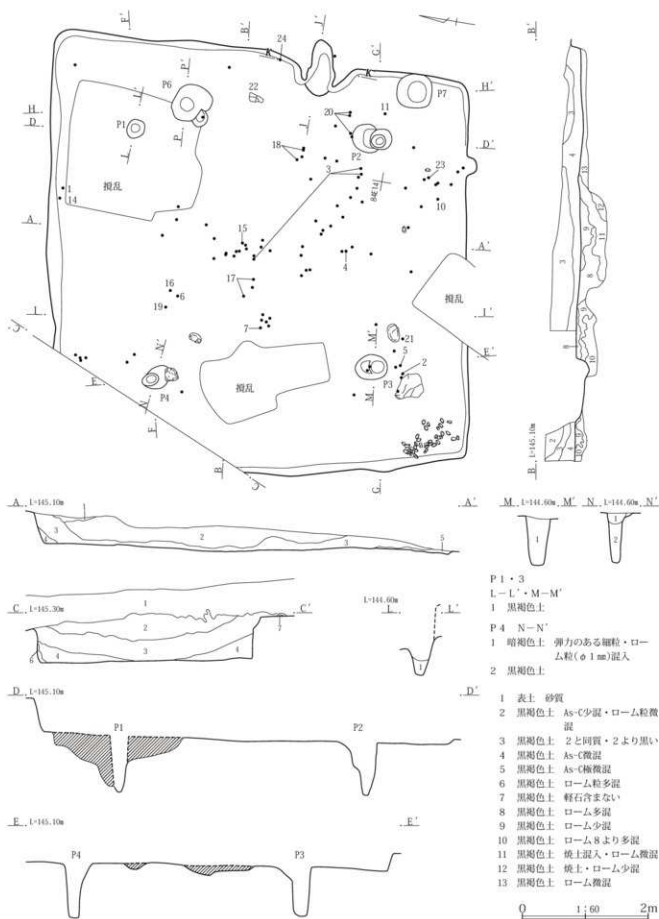
位置 84DE13～15 **形状** 方形、北西隅は調査区外。南東隅を基点にして建て替えられていて、北へ約1.30m、西へ約1.50m拡張されている。**規模** 長軸6.66m、短軸6.58m、残存壁高0.70m。建て替え前は長軸・短軸ともに約5.20m。**面積** 37.93㎡以上 **方位** N 85°
E 重複 南東隅に22号住居、22号が新しい。**床面** ローム塊を多く含む暗褐色土による貼床である。カマドの焚口から住居の中央部が硬化している。掘り方は主柱穴を結んだ内側が高く、壁際の間が低い。中央の土坑は、建て替え時にカマドの残土を埋めるために掘られたとみられる。底面には焼土の塊がある。

カマド 東辺の南寄りに位置する。壁外に方形の掘り込み、粘土を貼付して作られている。全長約90cm、焚口幅約40cmである。支脚、袖石は残されていない。**周溝** ない。**貯蔵穴** 南東隅寄り、P7で58・54・32cm **柱穴** P1～P4が新期主柱穴、P2を共用、P5・6・8が古期である。長軸・短軸・深さは、P1が32・28・88cm、P2が64・46・90cm、P3が50・40・77cm、P4が46・34・83cmである。柱間は、P1とP2が388cm、P2とP3が356cm、P3とP4が376cm、P4とP1が400cmである。ほかにP5が46・42・70cm、P6が66・66・88cm、P8が46・38・58cmとなっている。**埋没土** 上位から床面の近くまでが類似した黒褐色土で自然埋没。ロームの混入量で区分。2～3層上位に遺物が多い。

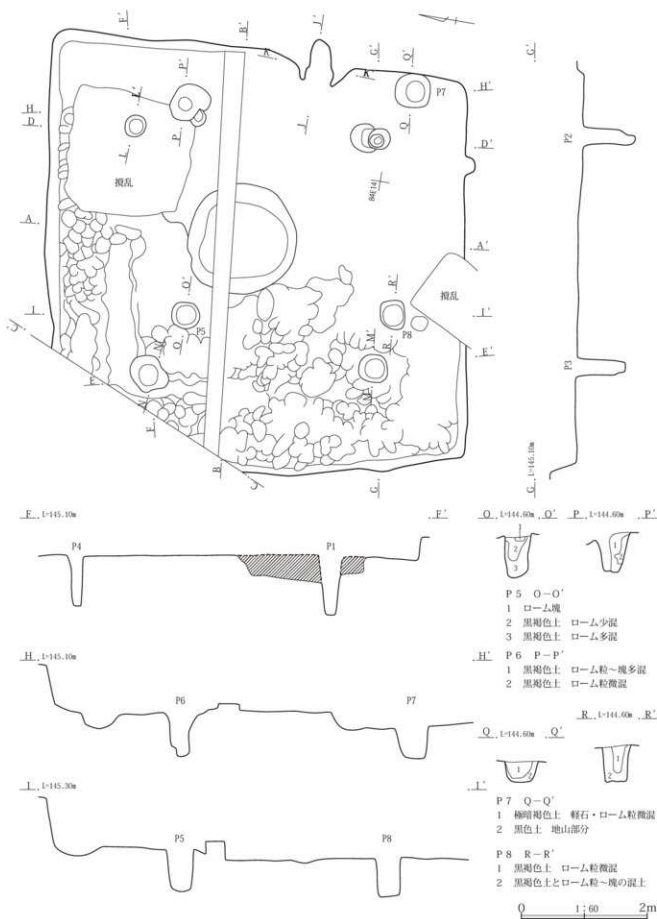
遺物出土状況 土師器1,396片、須恵器80片、灰陶陶器3片、弥生土器2片が出土したが、覆土中位からが多い。土師器環13、高環1、鉢1、甕5、須恵器環蓋1、高環1のほか、石製紡錘車1、刀子1を掲載。墨書1は混入。



第9図 D区遺構全体図



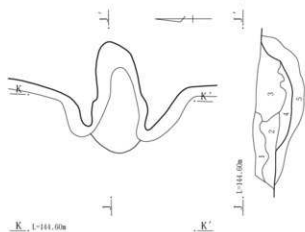
第10図 1号住居遺構図(1)



第11図 1号住居遺構図(2)

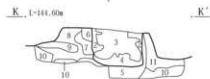
床面では南西の隅でも編み石約25点が集中、5点を掲載した。長さ13cm前後、重さは400～901gである。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から7世紀中頃～後半とみられる。

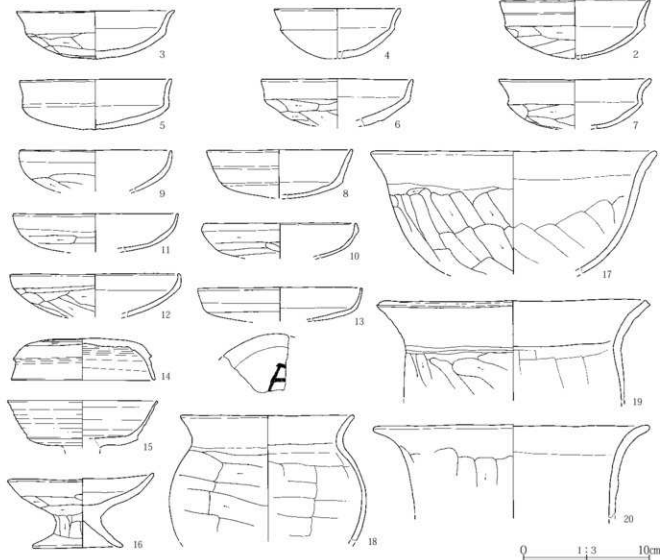


カマド

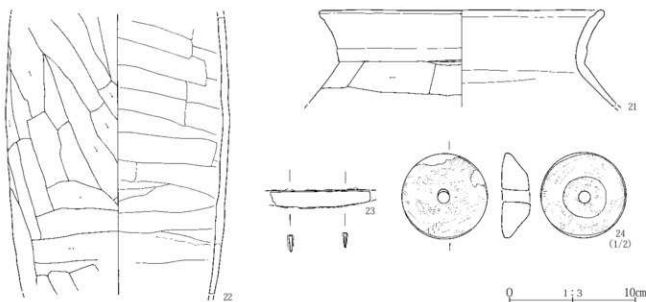
- 1 黒褐色土とローム粒の混土
- 2 黒褐色土 ローム塊(2cm)少混
- 3 黒褐色土 ローム粒多混・焼土粒少混
- 4 黒褐色土 炭粒多混・焼土粒(1～2mm)微混
- 5 黒色土 細粒・均質・ローム粒混入・焼土微混
- 6 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒混入・焼土(φ1～3mm)少混
- 7 黒褐色土 6と同質・6より明・焼土(φ1cm)・粘土粒少混
- 8 黒褐色土 6と同質・6より明・焼土・ローム・粘土微混
- 9 黒褐色土 上位ローム・下位黒褐色土で二分・堅緻(粘床)
- 10 黒色土 細粒・密・粘性あり(地山)
- 11 黒褐色土 細粒・均質・As-C・焼土粒混入(22住ブク土)



0 1:30 1m



第12図 1号住居遺構図(3)・遺物図(1)

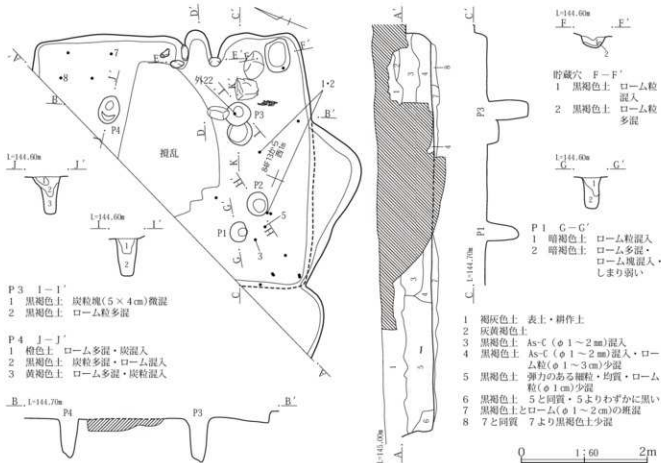


第13図 1号住居遺物図(2)

2号住居(第14・15図 P L. 3・5・29)

位置 84 E F 12・13 **形状** 方形、北西隅は調査区外。
南西隅は推定で、2層、5層を覆土とした別の住居の可能性
 がある。掘り方でも区別できなかったため、そのま

ま図示している。**規模** 長軸4.31m、短軸4.00m+、残
 存壁高0.39m **面積** 11.55㎡以上 **方位** N67° E
重複 南西隅に別の住居の可能性ある。**床面** 暗褐色
 土とロームの混土による貼床である。平坦、堅緻。掘り



第14図 2号住居遺構図(1)

方は、南辺寄りに跡跡が集中、深くなる。

カマド 東辺に位置する。石を芯にしてロームなどで被覆して作られている。全長60cm、焚口幅45cmである。石は、右側が二重で作り替えも考えられる。周溝 ない。

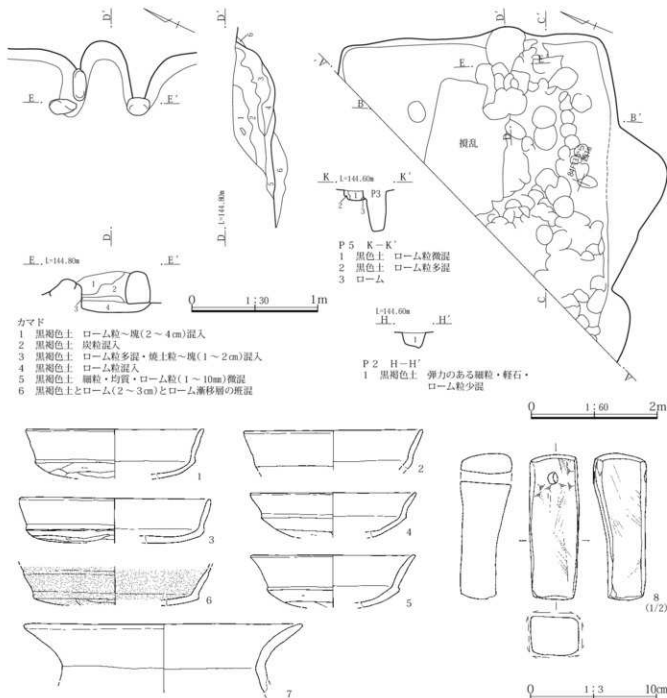
貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは54・38・19cmである。**柱穴** P 1、P 3、P 4が主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P 1が32・26・53cm、P 2が38・34・29cm、P 3が40・37・65cm、P 4が46・32・64cmで、3本とも隅丸方形である。柱間は、P 1とP 3が190cm、P 3と

P 4が205cmである。ほかにP 5が40・40・14cmである。

埋没土 As-C混入黒褐色土で床面まで埋没している。

遺物出土状況 土師器169片、須恵器37片、灰釉陶器8片が出土した。土師器環、甕が壁際に点在、床直に近いが接合例は少ない。土師器の環6、甕1のほか砥沢石製礫石1を掲載した。

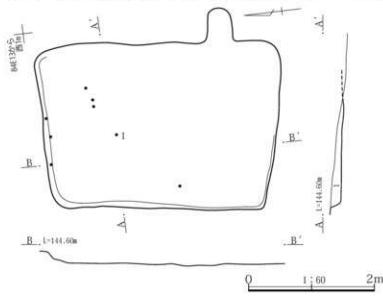
時期 古墳時代、出土した土器の特徴から7世紀後半とみられる。



第15図 2号住居遺構図(2)・遺物図

3号住居(第16図 P.L. 3・29)

位置 84E12 **形状** 長方形、河川改修で削平されていたところに、南東側は重機による掘りすぎで床面が露呈。1層黒褐色土の分布でプランを確定する。**規模** 長軸3.74m、短軸2.63m、残存壁高0.22m **面積** 9.84㎡ **方位** N94° E **重複** 南東隅に10号住居、本跡が新しい。**床面** 暗褐色土による貼床である。掘り込みはローム漸移層まで、掘り方調査はしていない。**カマド** 東辺の南寄りに位置する。掘り方状態で粘土と



第16図 3号住居遺構図・遺物図

焼土の分布でプランを確定。壁際に袖を持つとみられる。**周溝・柱穴** ない。**貯蔵穴** 検出することができなかった。埋没土 焼土、軽石が混入した黒褐色土で自然埋没。硬化面が一部で床との区別が難しい。

遺物出土状況 土師器66片、須恵器16片、灰釉陶器3片が点在。接合例も少なく、掲載した土器はない。石製品1を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。

1 黒褐色土 弾力のある顆粒・均質・緻密・As-C (φ1~3mm) 少混



4号住居(第17~19図 P.L. 3・5・6・30)

位置 84C10 **形状** 推定方形、当初は1軒とみて着手、南に6号住居と7号土坑があり、その後5号住居に重複していることが判明。深い上に調査区の壁際にあつて調査は困難。カマドの深い掘り方の状況からみて建て替えか、西側になお1軒が重複している可能性もある。

規模 長軸3.32m+、短軸1.26m+、残存壁高0.16m **面積** 2.12㎡以上 **方位** N94° E **重複** 古い方から6号、5号、本跡、7号住居、7号土坑の順である。**床面** ロームが混入する黒褐色土による貼床である。5号住居とは分けたがレベルの差はない。東の壁にある石垣は、川原石横置き二段、隙間には粘土質の土を詰め固定されている。建て替えにより新旧二重になっている。

カマド 東辺に位置する。石組み構造で全長約1.60m、作り替えがされている。面取りした砂岩が焚口のほか、燃焼部と煙道の境にも置かれている。掘り方は大型で、

貼付された粘土の内側に拳大~人頭大の石が隙間なく対に置かれている。作り替えしても構造は変わらず、中心を北に25cm移動しただけである。**周溝・貯蔵穴・柱穴** ない。住居内南東隅に7号土坑がある。長軸・短軸・深さは、105+・101・64cmである。本跡が古い。**埋没土** As-C、ローム、焼土が混入した黒褐色土で埋没。

遺物出土状況 土師器357片、須恵器37片が出土した。土師器坏2、コの字状口縁甕1、須恵器坏・埴4を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀中頃とみられる。

5号住居(第17~19図 P.L. 3・5・30)

位置 84G10・11 **形状** 推定方形、東辺側の最大約2mを検出。**規模** 長軸6.14m+、短軸3.20m+、残存壁高0.38m **面積** 10.35㎡以上 **方位** N87° E **重複**

古い方から本跡、4号、7号住居の順である。**床面** ローム混じりの黒褐色土による貼床である。

カマド 東辺の中央に位置する。掘り方をみても石を使ったとみられる痕跡はなく、焚口から燃焼部まで粘土を貼付して作られている。全長約1.30m、焚口には黒い灰が残され、掻き出された灰は踏み固められて硬化している。**周溝** ない。**貯蔵穴** 南東隅P2が候補、浅くて小型、南東隅以外での可能性もある。**柱穴** 長軸・短軸・深さは、P1が32・27・40cm、P2が52・36・28cmである。**埋没土** 黒褐色土を焼土とロームの混入量で分けた。5層黒褐色土との差は少ない。

遺物出土状況 土師器129片、須恵器11片が出土した。南東側に多い。土師器環4、コの字状口縁鉢2、須恵器

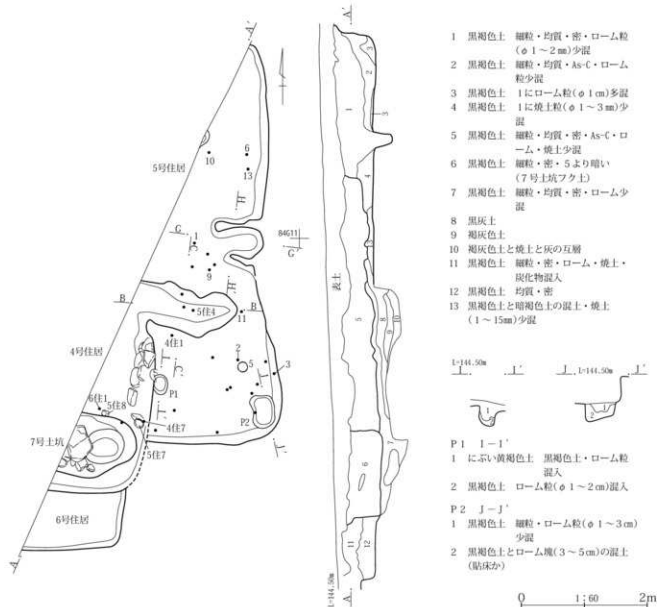
環蓋2、環・埴5、壺1を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀中頃とみられる。

6号住居(第17・19図 P.L. 3・5・30)

位置 84G10 **形状** 推定方形、4号住居とは床面の高さが違うことから区別、本跡とした。幅が約1mで、ほかは4号住居により削平されている。**規模** 長軸1.44m+、短軸0.92m+、残存壁高0.25m **面積** 1.32㎡以上 **方位** N86° E **重複** 古い方から本跡、4号住居、7号土坑の順である。**床面** ローム混じりの黒褐色土による薄い貼床である。

カマド 4号住居カマドの位置に推定。掘り方を相当さ

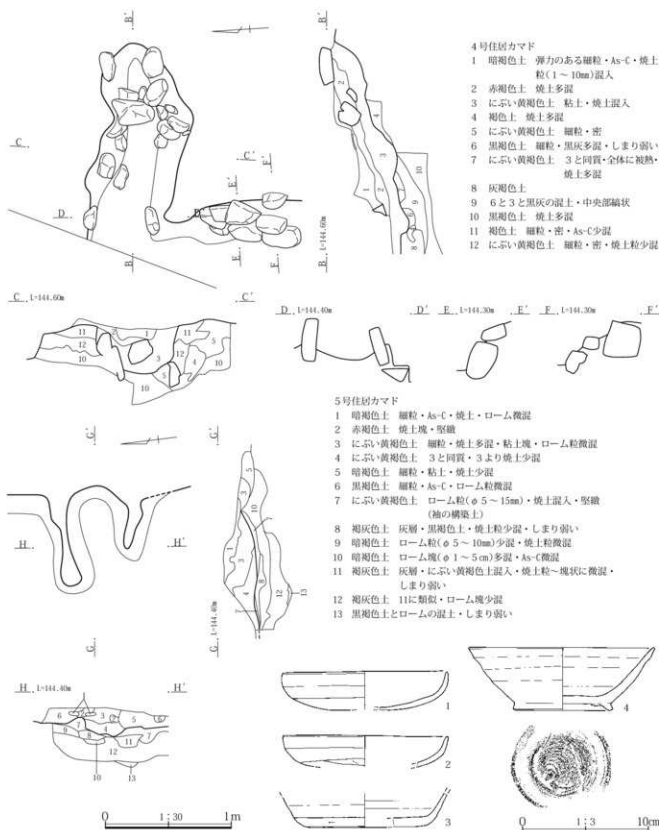


第17図 4~6号住居・7号土坑遺構図

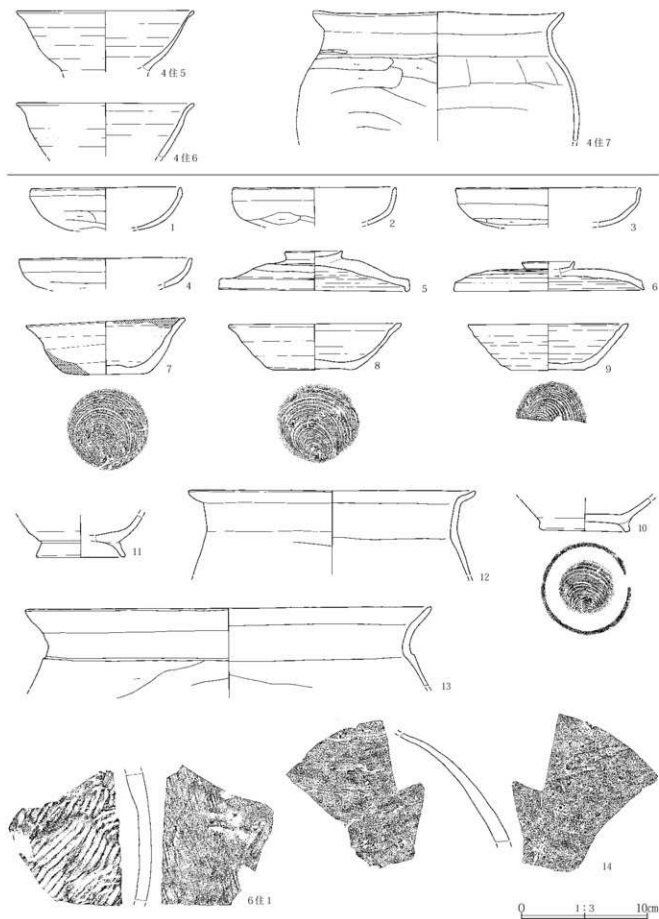
せたがレベルが合わない。周溝 ない。埋没土 暗褐色土を焼土、炭化物の混入状況で区分、掘り方は第17図7～10層が該当か。

遺物出土状況 須臾器表が1点出土したので掲載した。

時期 古墳時代、特定できる出土遺物がなく、遺構の重複関係からの判断である。



第18図 4・5号住居遺構図、4号住居遺物図(1)

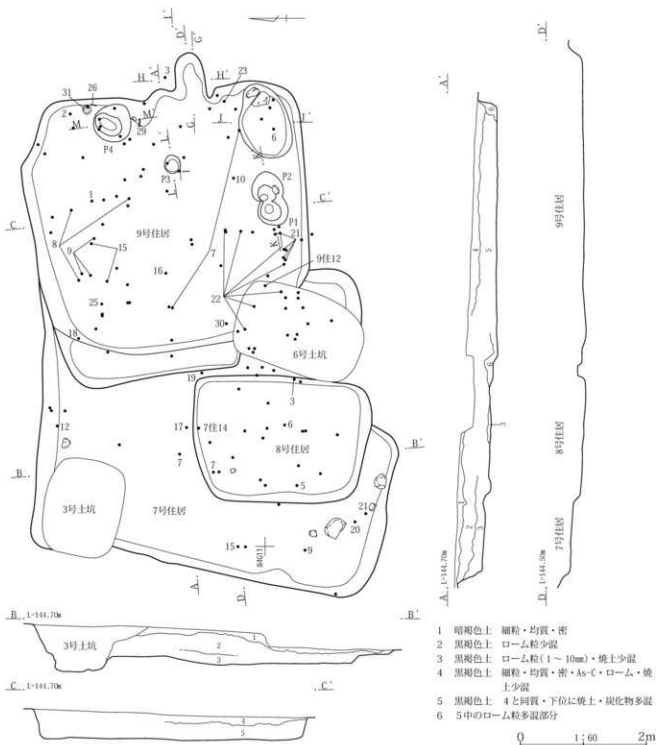


第19図 4号住居遺物図(2)、5・6号住居遺物図

7号住居(第20～23図 P.L. 3・6・30)

位置 84FG10・11 **形状** 推定長方形、南辺には6号土坑の南東、8号住居南の2箇所にコーナーがあり、8号住居側をとって本跡とした。方形としやすい6号土坑側は床面が高い。掘り方では8・9号住居にまたがり、約3.50m四方に跡跡が密集する。別の1軒の可能性がある。**規模** 長軸5.65m、短軸2.77m、残存壁高0.45m

面積 15.65㎡ **方位** N102° E **重複** 古い方から5号、本跡、8号、9号住居、3号土坑の順である。**床面** As-Cが混入した黒褐色土による貼床である。掘り方には跡跡が点在する程度で、土坑のような箇所はない。**カマド** 9号住居との重複で消失したのか。**周溝・貯蔵穴・柱穴** ない。**埋没土** 黒褐色土をローム、焼土の混入量で分けたが5・9号住居との違いはみられない。

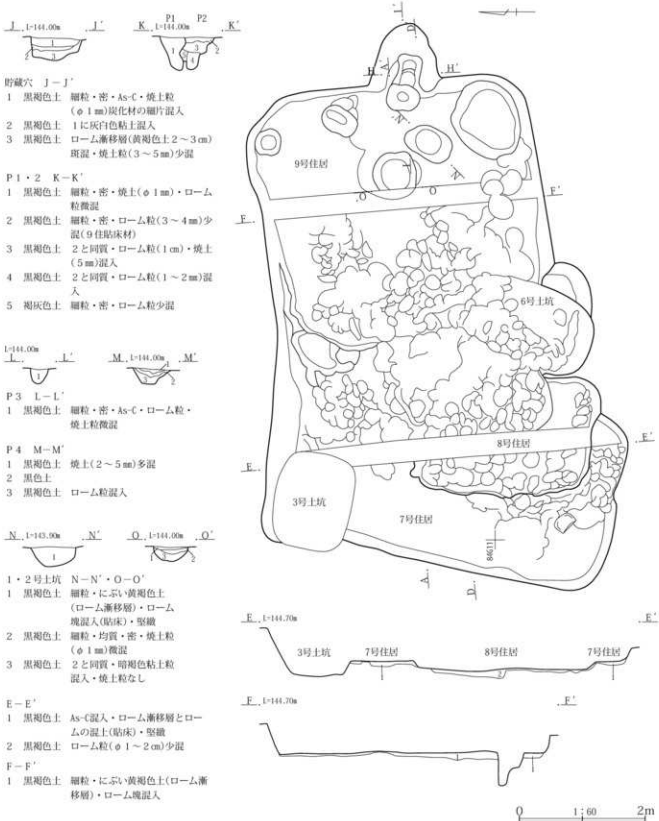


第20図 7～9号住居遺構図(1)

遺物出土状況 土師器633片、須恵器435片、灰釉陶器28片が出土した。土師器裏1、須恵器羽釜3、坏・埴5（境外面黒書1含）、皿1、黒色土器埴3、灰釉陶器埴3、皿1、

土鍾1、釘1、玉髓製勾玉1、磨石1を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第21図 7~9号住居遺構図(2)

8号住居(第20・21・23図 P L. 3・6・31)

位置 84 F 10・11 **形状** 長方形 **規模** 長軸2.79m、短軸2.01m、残存壁高0.29m **面積** 5.61㎡ **方位** N 92° E **重複** 7・10号住居より新しく、6号土坑より古い。**床面** ローム混じりの暗褐色土による貼床である。掘り方は浅く、鋤跡が点在する程度である。

カマド・周溝・貯蔵穴・柱穴 ない。**埋没土** ロームの混入する黒褐色土で床面まで自然埋没している。

遺物出土状況 土師器122片、須恵器64片、灰釉陶器5片が出土した。須恵器羽釜1、坏・埴3、灰釉陶器埴1、鉄鏝1、釘1を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。竪穴状遺構の可能性もある。

9号住居(第20～22・24・25図 P L. 3・6・31・32)

位置 84 E F 10・11、西辺には段差のある張り出しがあり、掘り方では7・8号住居にまたがり鋤跡が密集し、建て替えとは別にP1、P2が貯蔵穴の住居が重複している可能性がある。**形状** 方形、焼失住居。**規模** 長軸4.50m、短軸4.42m、残存壁高0.53m **面積** 19.89㎡ **方位** N 85° E **重複** 古い方から7号、10号住居、本跡、6号土坑の順である。**床面** 黒褐色土による貼床の

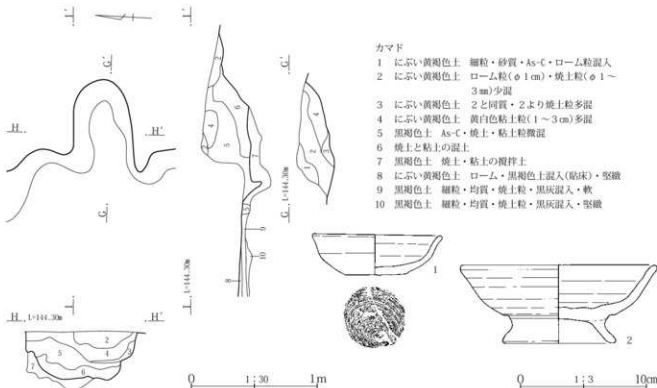
上に、北と西の2辺から約1m離れた内側にローム混じりの土が薄く貼床されている。貼付されていない壁際が板張りで、ほかが土間と床の仕様の違いを示しているのか。**カマド** 東辺の中央に位置する。全長約1.10m、方形の掘り方に粘土を貼付して作られている。内部は焼けていたが天井は全て崩落。P3の近くまで、掻き出された黒灰と焼土の薄い互層がある。**周溝** ない。**貯蔵穴** 南東隅、長軸・短軸・深さは123・80・35cmである。覆土は3層に分けられ、中位に黒い灰、下位に焼土が多い。上面は石が置かれていて、人為的に埋められたものか。

柱穴 長軸・短軸・深さは、P1が50・48・58cm、P2が50・48・53cm、P3が30・26・27cm、P4が63・60・30cmである。P1とP2は入口に関係したものか。

埋没土 焼土、ロームが混入した黒褐色土で自然埋没。

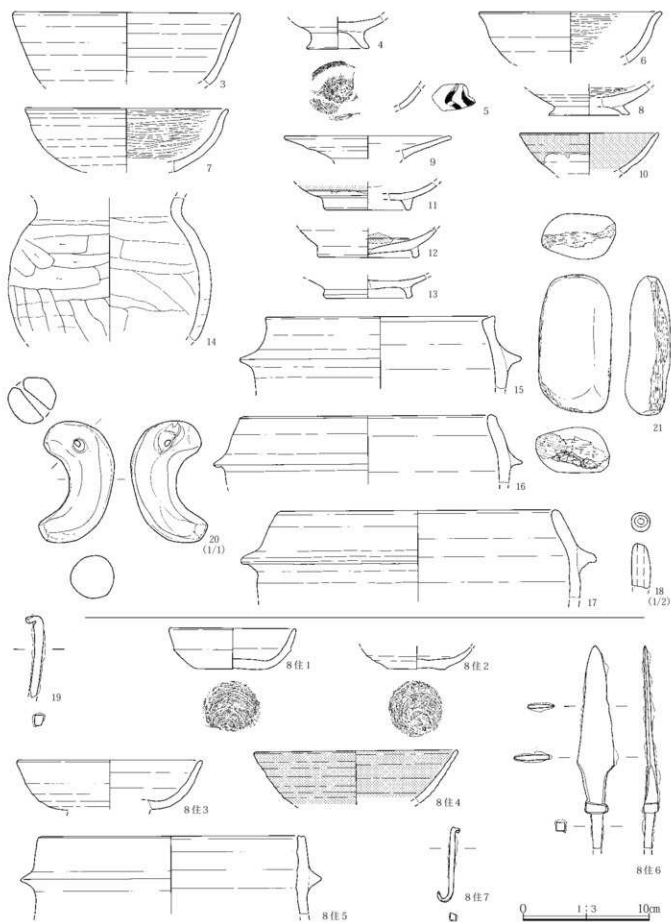
遺物出土状況 土師器2,068片、須恵器383片、灰釉陶器17片が出土した。土師器坏6、甕2、小型台付甕1、須恵器坏・埴9、蓋1、瓶1、甕1、灰釉陶器埴・皿3と、東辺のカマド左袖で鉄製紡錘車1、壁際に台石のような偏平な砥石1と石製紡錘車1、刀子1、釘1が出土。炭化した曲物、樹皮、フクベは北西隅で出土した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀前半とみられる。

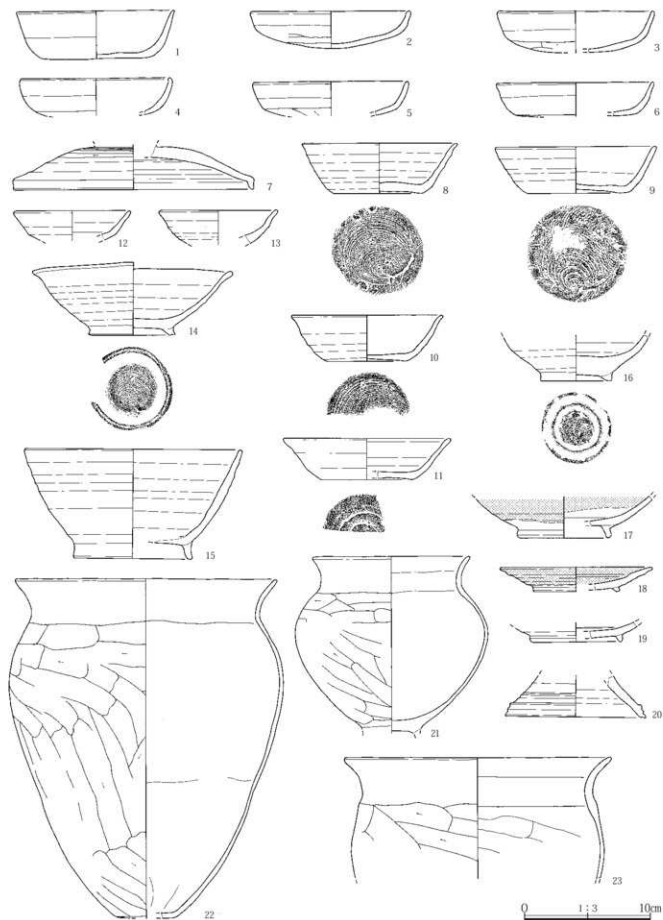


第22図 9号住居遺構図・7号住居遺物図(1)

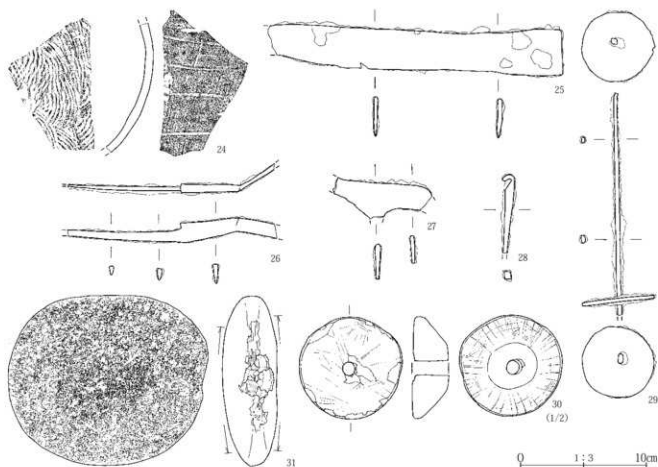
第3節 D区の遺構と遺物



第23図 7号住居遺物図(2)・8号住居遺物図



第24図 9号住居遺物図(1)



第25図 9号住居遺物図(2)

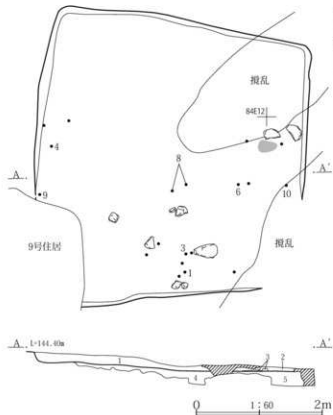
10号住居(第26・27図 P.L. 3・6・32)

位置 84DE11・12 **形状** 方形、北東隅と南西隅は推定である。**規模** 長軸4.48m、短軸4.40m、残存壁高0.25m **面積** 17.51㎡ **方位** N93° E **重複** 北西隅に3号住居、南西隅に9号住居、ともに本跡が古い。

床面 検出時点で露呈した状況。焼土混じりの黒褐色土による貼床、中央部に薄い硬化面がある。掘り方は、ベルトに沿って深掘りして断面の観察をただけである。

カマド 東辺の中央に位置する。図示した20cm大の石2個のある箇所が痕跡で、壁際に焼土がある。

周溝・貯蔵穴・柱穴 ない。**埋没土** 黒褐色土で床まで自然埋没している。



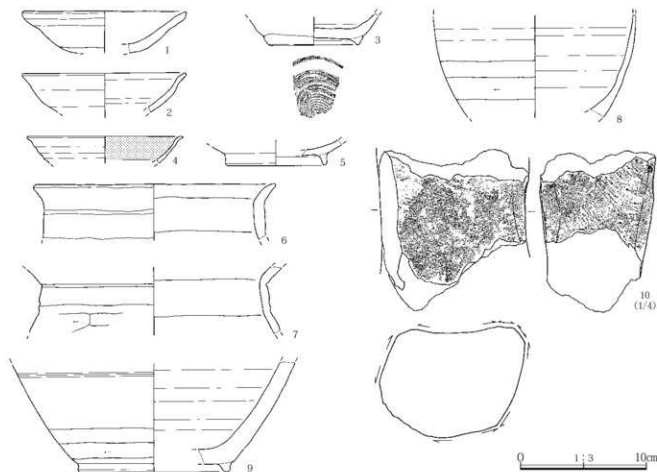
- 1 黒褐色土 弾力のある細粒・As-C少混・焼土微混
- 2 暗褐色土 1と同質・As-C・焼土・ローム粒混入
- 3 暗褐色土 2のローム粒集中部
- 4 黒褐色土 1と同質・As-C微混・焼土粒(1~5mm)混入
- 5 暗褐色土 細粒・均質・焼土粒(φ1~2mm)微混

第26図 10号住居遺構図

遺物出土状況 土師器255片、須恵器63片、灰軸陶器6片が出土した。土師器坏1、甕2、須恵器坏・壺2、壺1、灰軸陶器壺2、長頸壺1、礫砥石1を掲載した。石

はカマドからの廃棄で、中に接合したものがある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



第27図 10号住居遺物図

11号住居(第28・29図 P.L. 3・32)

位置 84E F 9・10 **形状** 長方形、

南東隅から東辺は攪乱で消失。**規模**

長軸5.16m、短軸3.78m、残存壁高0.21

m **面積** 15.81㎡ **方位** N85° E

重複 ない。**床面** 黒褐色土による貼

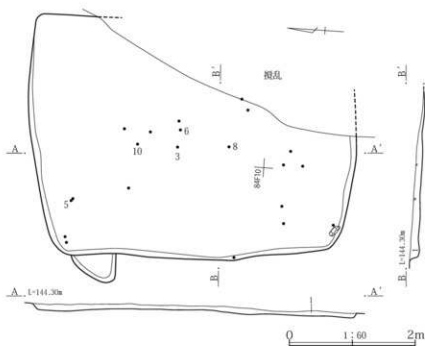
床、中央部に薄い硬化面がある。掘り

方の調査はしていない。

カマド 東辺の中央に焼土が分布して

いて痕跡とみられる。**周溝・柱穴** ない。

貯蔵穴 削平された南東隅に推定。



第28図 11号住居遺構図

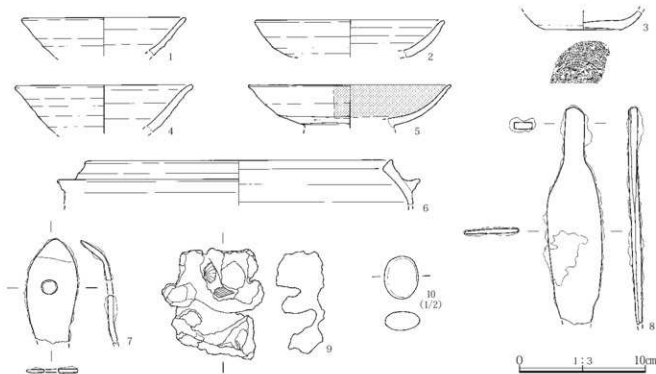
- 1 黒褐色土 弾力のある細粒・密・As-C
(φ 1～2mm)多泥・焼土粒・
ローム粒混入・硬

埋没土 As-C、焼土が混入する黒褐色土で自然埋没。

遺物出土状況 土師器289片、須恵器76片、灰軸陶器9片が出土した。須恵器坏・埴4、羽釜1、灰軸陶器埴1、

用途不明の鉄器2、埴形鍛冶滓1、石製品1を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



第29図 11号住居遺物図

12号住居(第30～33図 P L. 4・6・7・32～34)

位置 84EG7～9 **形状** 方形 **規模** 長軸5.81m、短軸5.15m、残存壁高0.57m **面積** 27.28㎡ **方位** N83° E **重複** 北西隅に15号住居、南東隅に5号土坑、南辺に13・21号住居があって、古い方から21号、15号、13号、本跡、5号土坑の順である。**床面** ローム混じりの黒褐色土による貼床、平坦で堅緻である。掘り方は、刃幅12～14cmの半月形の鋤跡が連続、西半分は一面にあり東側では壁沿いに集中。中央部との段差はなく、特に土坑のように深い箇所もない。

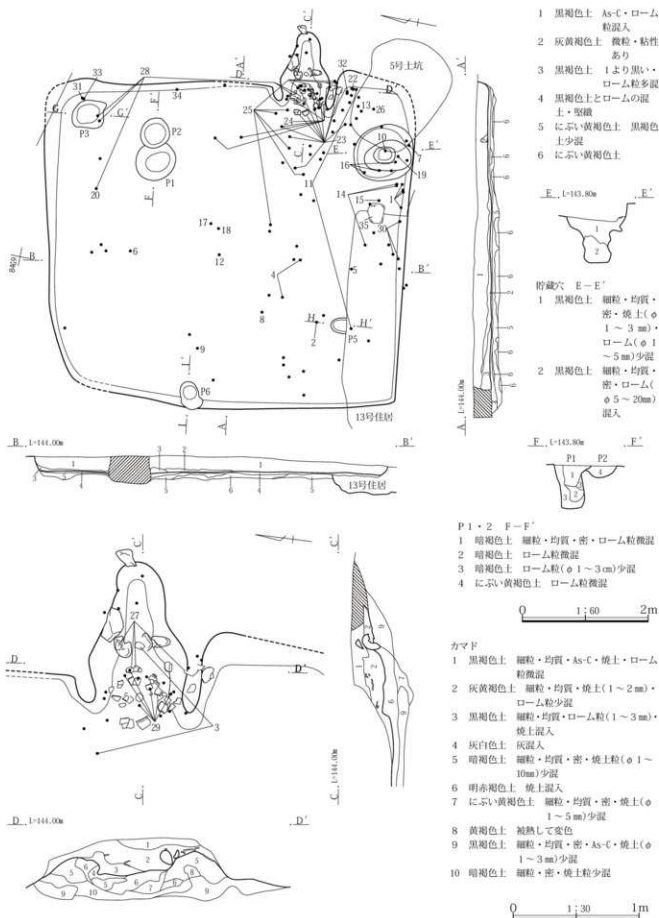
カマド 東辺の南寄りに位置する。全長約1.20m、天井は崩落し、支脚も抜かれた状況である。燃焼部の奥の両隅には対して石を置き、煙道でもその形跡がある。燃焼部では薄手の裏や長胴裏の破片がまとまり、架けていたか焚口に向島状に組んでいたとみられる。4層灰と6層焼土の互層、右袖での焼土塊混入状況からすると作り替えをしているとみられる。**周溝** 床面では検出できなかったが、掘り方の北辺と東辺のカマド北側で良好な状況。北辺には断面で区別できなかったが新旧2条ある。

貯蔵穴 南東隅から西へ1mの位置にある。長軸・短軸・深さは94・88・79cmである。直径20～25cmの円筒形をしたものが2基重複、2条の周溝と対応した作り替えの跡か。穴の西側が土手状に3～4cm高くなっている。掘り方では南東隅でP4浅い皿状の掘り込みが検出されている。古い貯蔵穴とみられる。**柱穴** 長軸・短軸・深さは、P1が66・59・69cm、P2が48・45・18cm、P3が50・44・12cm、P5が25・25・21cm、P6が46・30・29cmである。P4は掘り方検出され計測不可。P1は主柱穴の可能性を持つが4本組で対応するものがない。

埋没土 ロームが目立つ暗褐色土で床面まで埋没。

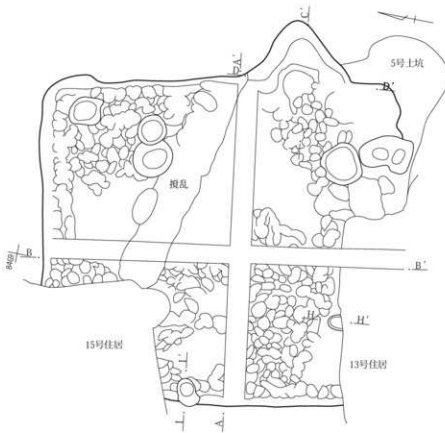
遺物出土状況 土師器1,857片、須恵器174片、灰軸陶器5片が出土した。住居の南半分が多く、カマドと東壁周辺との接合が多い。釘、石製紡錘車は壁際で出土。床よりも位置が高い。土師器坏8、甕8、小型甕1、高坏1、須恵器坏・埴8、坏蓋3、盤1のほか、用途不明の鉄器1、釘2、石製紡錘車1、礫石1を掲載した。

時期 奈良時代、出土した土器の特徴から8世紀中頃～後半とみられる。



第30図 12号住居遺構図(1)

第3節 D区の遺構と遺物



G, 1-143.80m, G', 1-143.80m, H, H'



P 3 G-G'

1 暗褐色土 細粒・均質・密・
ローム粒(φ 1~
2mm)少混

P 4 H-H'

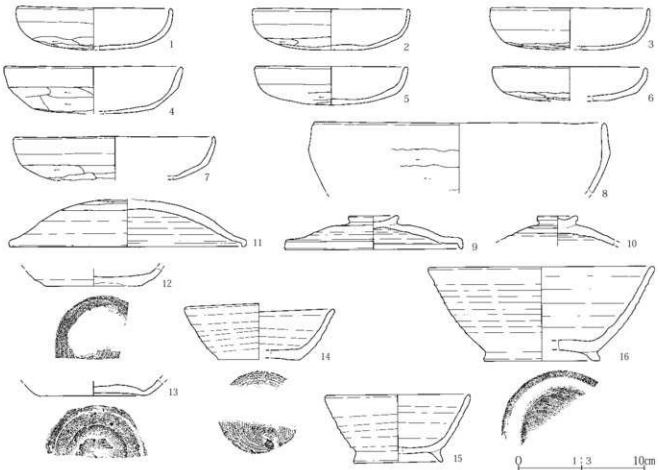
1 黒褐色土 細粒・均質・As-C・
焼土粒(φ 1~2mm)
少混



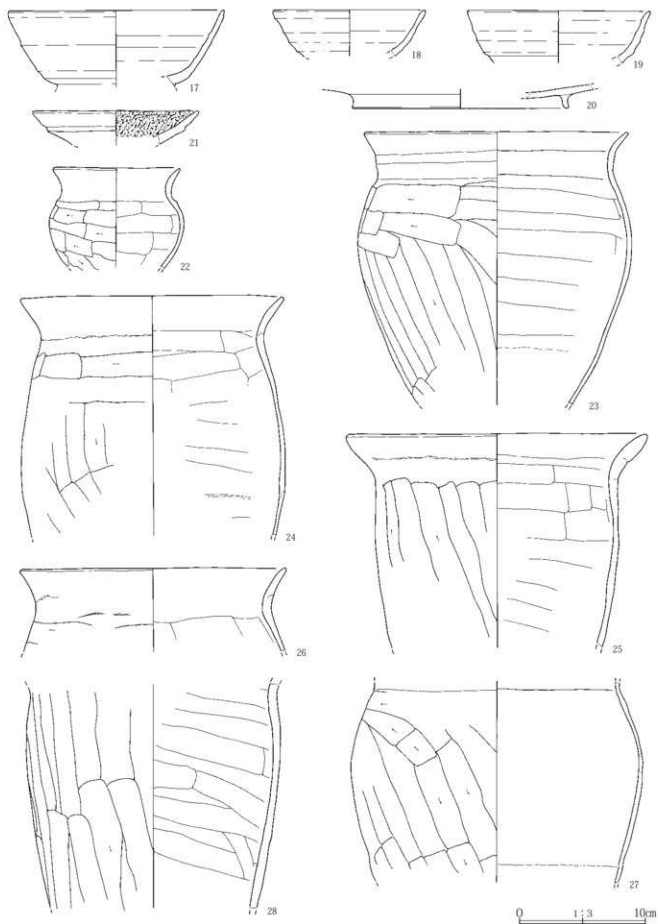
P 5 I-I'

1 黒褐色土 細粒・均質・密・ローム粒(φ 1~2mm)微混

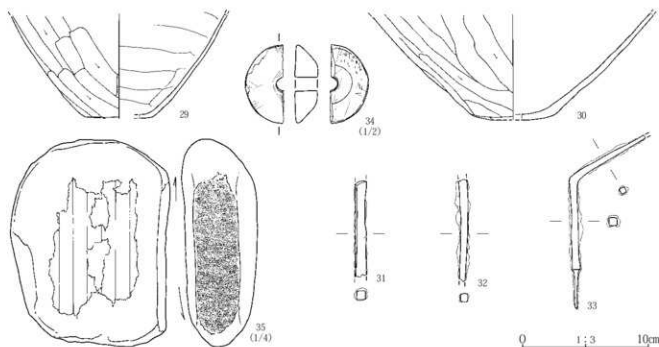
0 1:60 2m



第31図 12号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第32図 12号住居遺物図(2)



第33図 12号住居遺物図(3)

13号住居(第34・35図 P.L. 4・7・34)

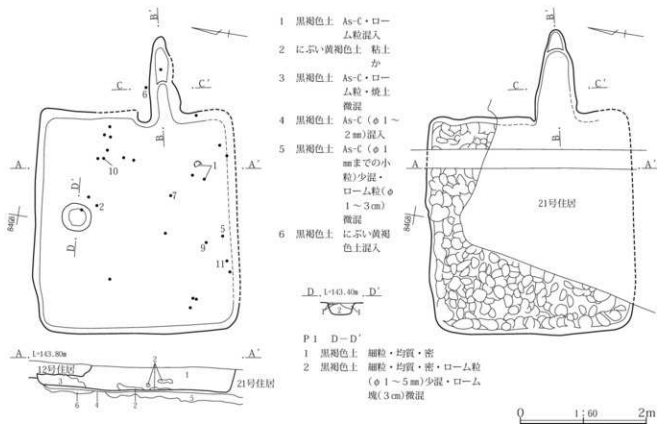
位置 84 F C 7 形状 方形、南側が南西隅からの推定。

規模 長軸3.54m、短軸3.23m、残存壁高0.43m

面積 11.43㎡ 方位 N78° E 重複 北辺に12号住

居、南東側に21号住居があり、古い方から21号、本跡、12号住居の順である。床面 ローム混じりの黒褐色土による貼床。掘り方は一面に跡が連続している。

カマド 東辺の南寄りに位置する。全長約1.40m。21号



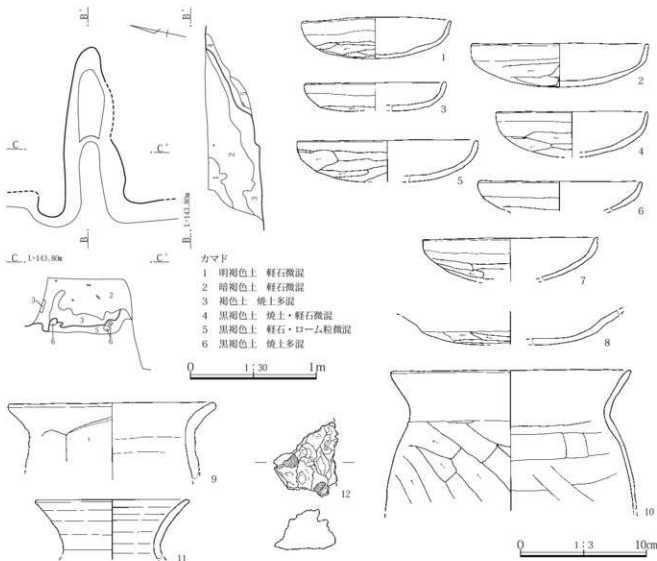
第34図 13号住居遺構図(1)

住居の覆土を掘り込み作られている。図示されていないが、右壁にだけ補強とみられる拳大の石が数個混じる。完全に崩落した状態で、遺物は残されていない。わずかに焼けた箇所ので山と区別、推定を含む。周溝 ない。
貯蔵穴 南東隅、21号住居 P 5 に可能性がある。長軸・短軸・深さは49・39+・27cmである。柱穴 P 1 の長軸・短軸・深さは46・44・58cmである。12号住居に伴う可能

性もあるが区別できなかった。**埋没土** 12号住居から続く黒褐色土はロームの状況で区別。差は少ない。

遺物出土状況 土師器277片、須恵器6片、灰軸陶器1片が出土した。土師器環8、甕2、須恵器瓶1、埴形竈治滓1を掲載した。小片で接合例は少ない。

時期 奈良時代、出土した土器の特徴から8世紀前半～中頃とみられる。



第35図 13号住居遺構図(2)・遺物図

14号住居(第36～39図 P L. 4・7・34)

位置 84GH 8・9 **形状** 推定方形、西側の約半分は調査区外。東側を試掘で切れ、中央部は耕作溝が縦断する。**規模** 建て替えをしていて新时期が長軸7.11m、短軸4.87m+、壁高0.49m、古期が長軸約6.30m、短軸4.87m+で南辺側に約1m拡張している。**面積** 新时期34.62㎡以上、古期32.14㎡以上 **方位** N86° E **重複** 東

南寄りに15号住居、本跡が新しい。**床面** 厚さ10cm前後、ロームと暗褐色土の混土による貼床である。

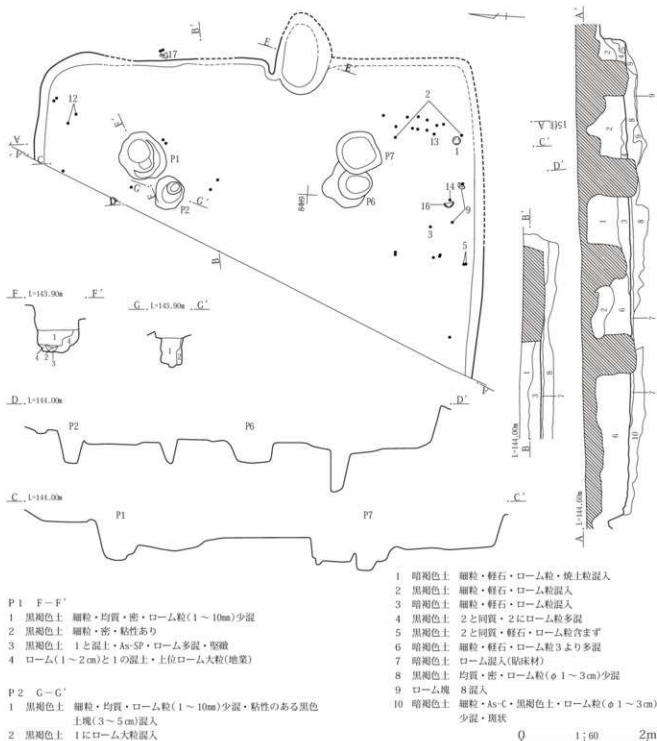
カマド 東辺の中央寄りに位置する。基礎にロームを主とする暗褐色土を厚く貼り、その内側にも5層の粘土を貼付して作られている。焚口には長巻を組み、複数の焼土層から作り替えが考えられる。**周溝** ない。**貯蔵穴** 南東隅のP 14が古期貯蔵穴の可能性ある。長軸・短軸・

深さは60+・40・60cm、自然埋没、土器片10点が出土。

柱穴 4本支柱穴のうち東側2本を検出。P2とP6が古期、P1とP7が新期である。長軸・短軸・深さは、P1が78・70・79cm、P2が54・45・83cm、P6が74+・80・73cm、P7が67・64・78cmである。柱間は、P1とP7が353cm、P2とP6が304cmである。**埋没土** 暗褐色土をローム混入状況で区分、差は少ない。自然埋没。

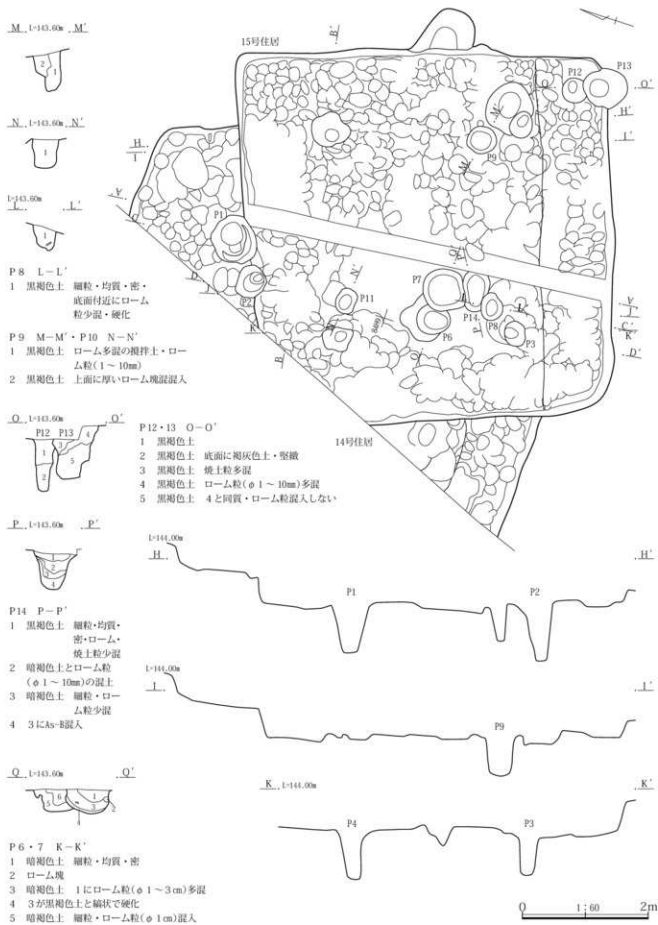
遺物出土状況 土器器864片、須恵器80片、灰軸陶器2片が出土。南辺寄りで環が多い。土器器環11、須恵器環・埴4、短頸壺蓋1、甕1、羽釜1、刀子1、用途不明の鉄器1を掲載したが15埴、18羽釜のように混入した遺物もある。

時期 奈良時代、出土した土器の特徴から8世紀後半とみられる。

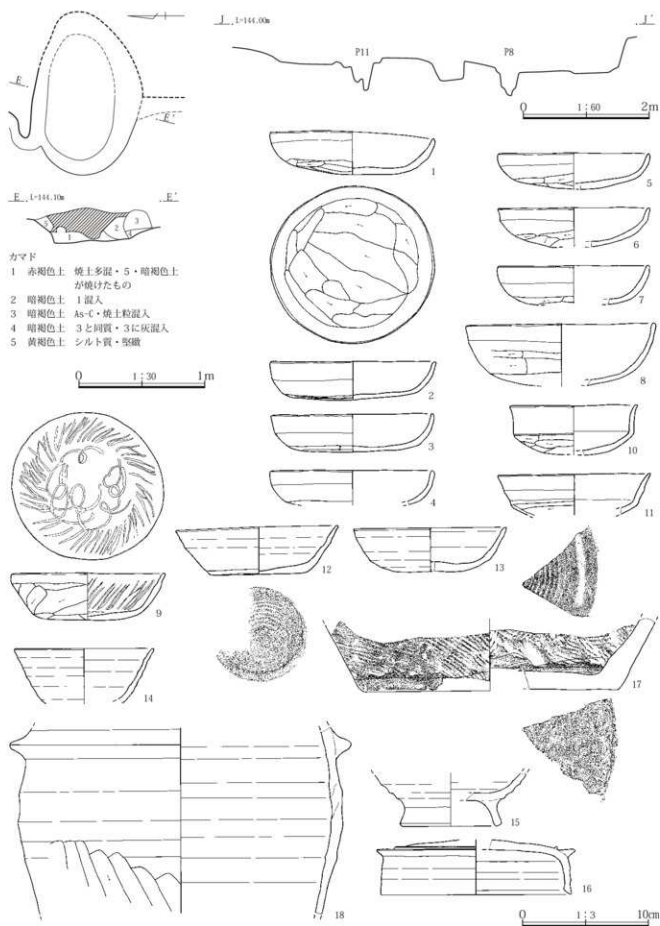


第36図 14号住居遺構図(1)

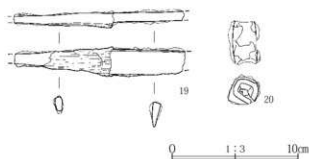
第4章 鳥取松山下遺跡の調査



第37図 14号住居遺構図(2)



第38図 14号住居遺構図(3)・遺物図(1)



第39図 14号住居遺物図(2)

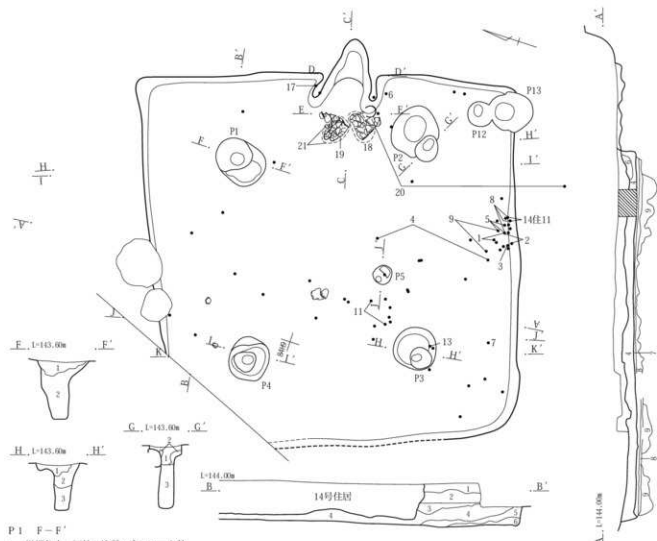
15号住居(第40～43図 P.L. 4・7・35・36)

位置 84GH8・9 形状 方形、北西隅が調査区外。

規模 建て替えををしていて新期が長軸5.87m、短軸5.82m、残存壁高0.76m、古期が長軸約5m、短軸約4.80mで、南辺約1m、西辺約0.90m拡張している。

面積 新期31.49㎡以上、古期24㎡以上 方位 N78°

E 重複 西半分に12号住居、南東隅に14号住居、古い方から本跡、14号、12号住居の順である。床面 厚さ10



P1 F-F'

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・ローム粒 (φ1～5mm)少混
- 2 黒褐色土とローム粒(φ1～10mm)の攪拌土

P2 G-G'

- 1 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒混入
- 2 ローム塊
- 3 黒褐色土 1と同質・1より大粒のローム粒多混

P3 H-H'

- 1 黒褐色土 弾力のある細粒・ローム粒 (φ1～3mm)少混
- 2 黒褐色土 ローム粒多混
- 3 暗褐色土

P4 I-I'

- 1 黒褐色土とローム塊と暗褐色土の互層

P5 J-J'

- 1 黒褐色土 細粒・ローム粒(φ1～10mm)少混

- 1 暗褐色土 細粒・軽石・ローム粒・焼土粒混入

- 2 暗褐色土 細粒・軽石・ローム粒混入

- 3 暗褐色土 ローム混入(粘土材)

- 4 黒褐色土 ローム混入・東側に焼土混入

- 5 黒褐色土 ローム粒混入・大粒の焼土少混

- 6 黒色土 細粒・均質・ローム粒微混

- 7 暗褐色土 ローム(1～3cm)微混

- 8 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒少混

- 9 黒褐色土 上に赤・黄褐色土・ロームの微混

第40図 15号住居遺構図(1)

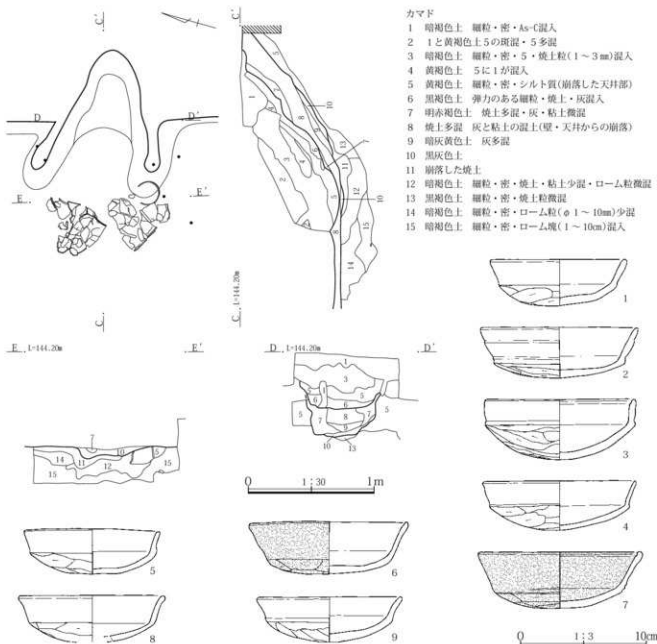
cm前後、ロームと暗褐色土の混土による貼床である。平坦で堅緻である。

カマド 新旧ともに東辺の中央に位置する。全長が1.50mを超す。焚口に長狭4個体が鳥居状に組まれ、燃焼部から煙道には粘土を厚く貼って作られている。周溝ない。貯蔵穴 南東隅にある。長軸・短軸・深さは66・64・84cmである。発掘時のP13であった。柱穴 P1・P8・P9・P11が古期主柱穴、P1～P4が新期である。長軸・短軸・深さは、P1が82・66・99cm、P2が88・78・101cm、P3が70・65・95cm、P4が70・64・108cmである。柱間は、P1とP2が299cm、P2とP3が332

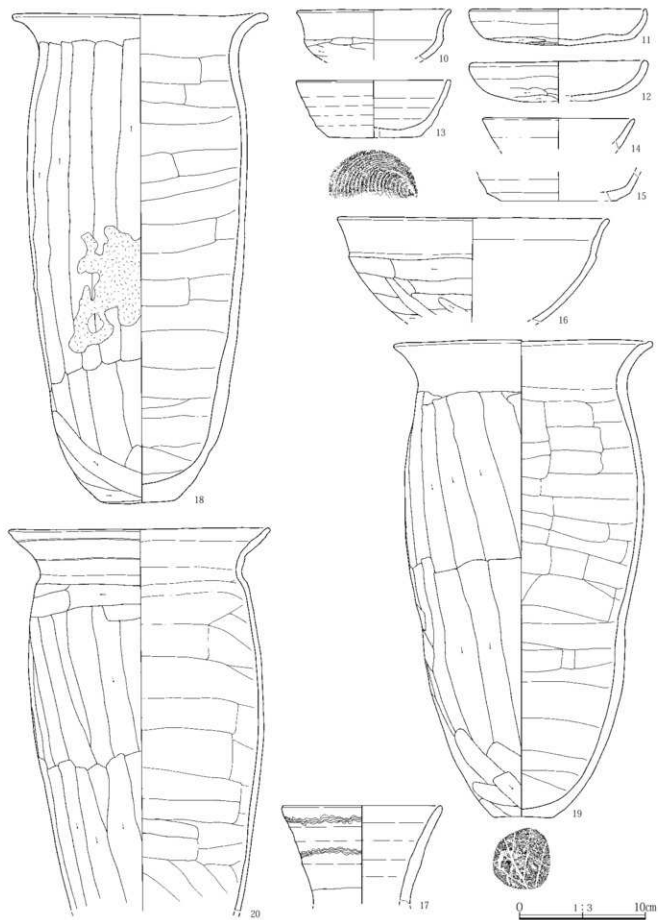
cm、P3とP4が268cm、P4とP1が320cmである。ほかにP5が30・28・25cm、P8が44・35・42cm、P9が46・44・63cm、P11が40・32・44cm、P12が41・40・83cm、P14が60・44・60cmである。P1は建て替え時の基壇が、新旧で共用している。埋没土 ロームが混入する黒褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 土師器663片、須恵器19片が出土した。土師器環12、鉢1、長胴甕4、須恵器環3、長頸壺1を掲載したが、11～15は混入である。

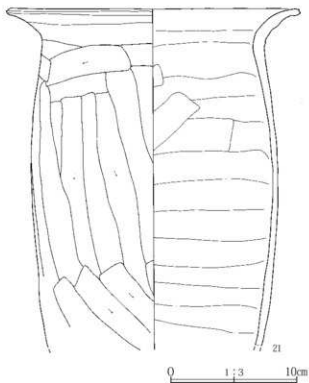
時期 古墳時代、カマドで出土した土器の特徴から7世紀後半とみられる。



第41図 15号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第42図 15号住居遺物図(2)



第43図 15号住居遺物図(3)

16号住居(第44図 P.L. 4・7・36)

位置 84H I 6・7 **形状** 推定方形、北東隅からカマドがある東辺中央まで、ほかは調査区外である。**規模** 長軸2.29m+、短軸1.41m+、残存壁高0.40m **面積** 2.22㎡以上 **方位** N91° E **重複** 17・20号住居との関係では最も新しい。**床面** 掘り込んだ地山を直接床とするか、薄い貼床である。

カマド 東辺に推定。焼けた粘土が残され、床面に硬化している。**周溝・柱穴** ない。**貯蔵穴** 南東隅か。**埋没土** As-Cが混入する黒褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 土師器210片、須恵器66片、灰釉陶器3片が出土した。須恵器環・埴2、皿3、鉄鍬か釘1、針状釣手金具1、銅鏡1を掲載した。銅鏡は、銅の成分が少ない。劣化のためか轆轤挽きが見えない。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から11世紀前半とみられる。

17号住居(第44・45図 P.L. 4・36)

位置 84H 7 **形状** 推定方形、南東隅のほかは調査区外である。**規模** 長軸2.56m+、短軸1.36m+、残存壁

高0.49m **面積** 1.74㎡以上 **方位** 南辺N68° E **重複** 16・20号住居との関係では、古い方から本跡、20号、16号の順である。北東の土坑は住居より新しい。**床面** 厚さ5cm前後、As-Cが混入する黒褐色土による貼床である。掘り方は、壁際から70～80cm内側が帯状に一段低くなる。別の住居か、建て替えの痕跡か。

カマド 検出した範囲には焼土や粘土もなく、特定できない。**周溝** 東壁際だけ窪んでいるのを確認できた。**貯蔵穴** 検出範囲にはない。**柱穴** P 1が4本組主柱穴の1本か。長軸・短軸・深さは、31・30・40cmである。東辺の1本は新しい。**埋没土** 6層ロームが混入する黒褐色土は攪拌されたような状況。4層はロームを主とする黒褐色土で20号住居の貼床とみられる。

遺物出土状況 土師器84片、須恵器27片が出土した。須恵器環1、皿1、羽釜2、黒色土器埴1を掲載した。ほかに土釜だけで器種は限られている。

時期 平安時代、出土した土器は出土位置が高く20号住居に伴う可能性がある。

20号住居(第44・45図 P.L. 4・36)

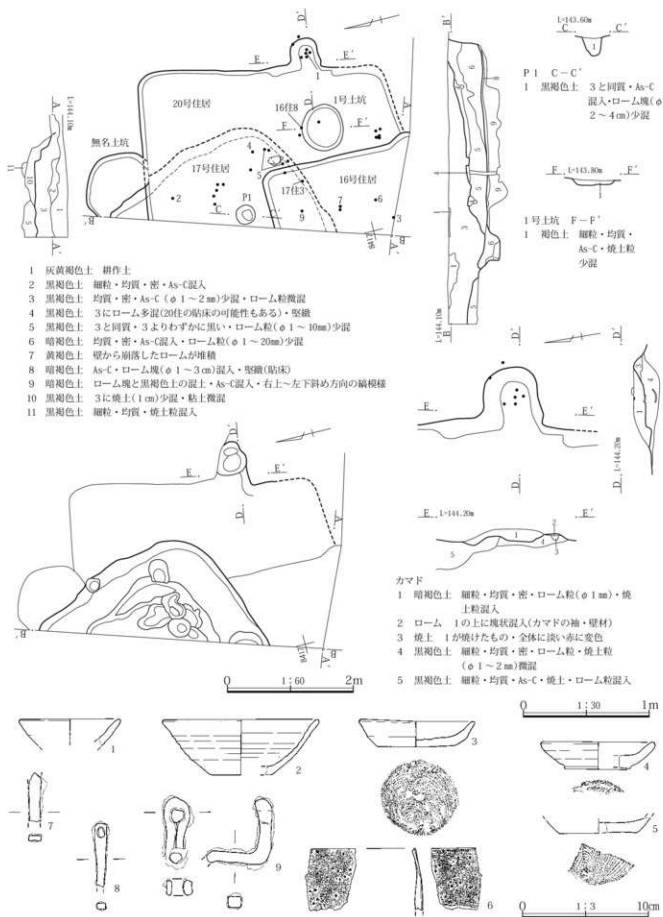
位置 84H I 6・7 **形状** 推定方形、西側は調査区外。**規模** 長軸2.49m+、短軸4.15m、残存壁高0.34m、壁高は断面Bで計測。**面積** 8.11㎡以上 **方位** N99° E **重複** 16・17・19住居との関係は、古い方から17号、19号、本跡、16号の順である。床面 17号住居との重複部分はロームを主とする黒褐色土による貼床である。

カマド 東辺の南寄りに位置する。床面の焼土が露呈した状況。石組み構造らしく、燃焼部左壁には手の平大に割れた石が置かれている。19号住居との重複部分を補強するのが目的か。全体が強く焼けていて、焚口の右手前には黒灰が掻き出されている。**周溝・貯蔵穴・柱穴** ない。カマドの正面にある1号土坑は、灰掻き穴とみられ長軸・短軸・深さが74・66・8cmである。焼土がわずかに混入する黒褐色土で埋没している。

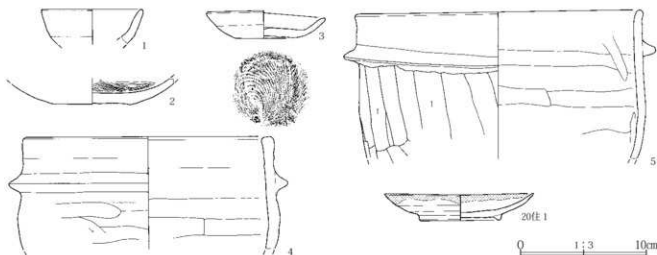
遺物出土状況 土師器66片、須恵器13片が出土した。カマド内から出土した1の灰釉陶器皿を掲載した。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

第4章 鳥取松合下遺跡の調査



第44図 16・17・20号住居遺構図(1)、16号住居遺構図



第45図 17・20号住居遺物図

18号住居(第46・47図 P L. 4・7・36)

位置 84GH7・8 **形状** 推定方形、遺構確認時点で炭化材が露呈、東側は床面下まで削平。**規模** 長軸1.86m+、短軸1.44m+、残存壁高0.07m **面積** 2.68㎡以上 **方位** N103° E **重複** 19号住居より古い。

床面 暗褐色土の薄い貼床である。

カマド 削平されている。**周溝・柱穴** ない。

貯蔵穴 不明、19号住居との重複で削平されたか。

埋没土 暗褐色土がわずかに残る。

遺物出土状況 土師器93片、須恵器27片が出土した。土師器環1、釘3、鉄斧1を掲載した。鉄斧は西壁の際で、床に置かれていたとみられる状況で、斧台の着装部が鉄錆で固まり残る。クヌギの丸木を芯の近くまで削り装着、芯の位置から膝柄ではないかとみられる。斧自身は、長さ9.9cm、刃幅最大4.3cmである。垂木とみられる炭化材はクヌギがほとんどで、良好なものは樹皮付きの丸木であることが分かる。垂木らしく住居中央から壁に向かって放射状に分布している。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀前半とみられる。

19号住居(第46・47図 P L. 4・8・37)

位置 84GH6・7 **形状** 方形、焼失住居で炭化材が露呈して確認される。**規模** 長軸4.28m、短軸4.26m、残存壁高0.31m **面積** 18.06㎡ **方位** N91° E **重複** 18・20号住居との関係は、古い方から18号、本跡、20号の順である。

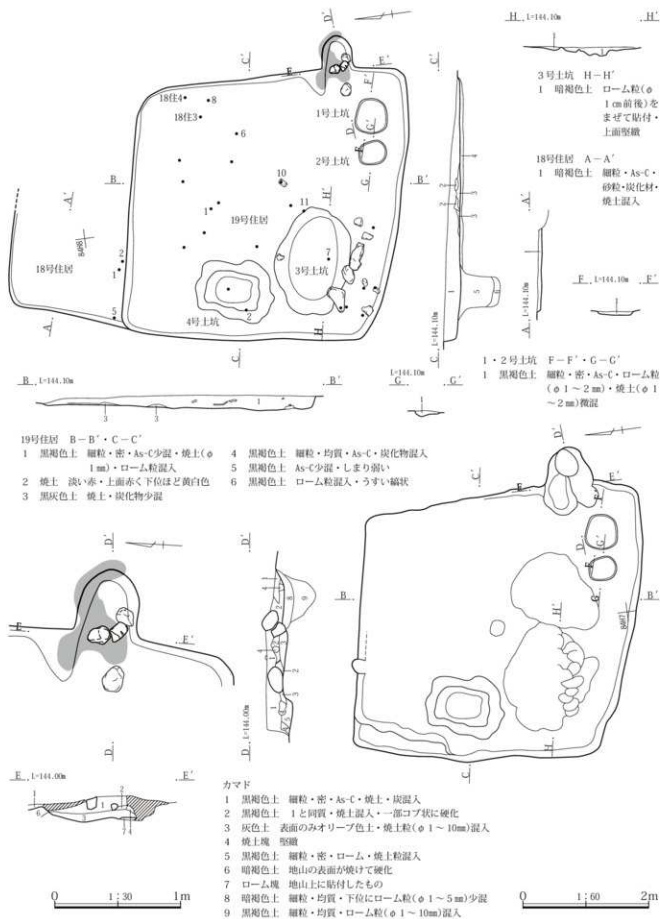
床面 南北で違いがあり北半分は踏み

固めただけ、南半分がロームによる薄い貼床である。南の壁際は約20cmの幅で硬化面がない。北から西の一部でも似た状況がみられた。

カマド 東辺の南寄りに位置する。全長約1m、幅約30cmの石組み構造。掘削が深く床面が露呈した状態で、支脚、袖石も散乱している。掘り方には深さ30cmの土坑があくが用途不明。**周溝・柱穴** ない。**貯蔵穴** 南東隅の土坑1か2に可能性がある。長軸・短軸・深さは、土坑1は54・52・18cmの円形、土坑2は44・38・11cmの円形である。土坑3は上面に薄くロームが貼ってあり170・118・13cmの楕円形、土坑4は貼付したローム面を切っていて127・94・64cmの方形、ロームで縁取りされた特異な仕様である。**埋没土** 黒褐色土で床面まで埋没。2層は焼土で、この上面に炭化材がある。3層は黒い灰層で北西寄りだけに分布する。

遺物出土状況 土師器622片、須恵器99片、灰陶器3片が出土した。土師器環1、須恵器環・埴5、皿1、釘1、刀子1、砥石1、敲石1を掲載した。炭化物は、断面ベルトの交点から放射状に分布。クヌギの丸木が主で、太さから垂木とみられる。一部にカヤとみられる茎が付着している。南西隅では20号住居カマドとの間で、炭化材と焼土に混じり人頭大の石が列を作る。石はすすけていて、後の混入ではない。上屋の裾を抑えていたものが垂木と共に崩落したものであろうか。

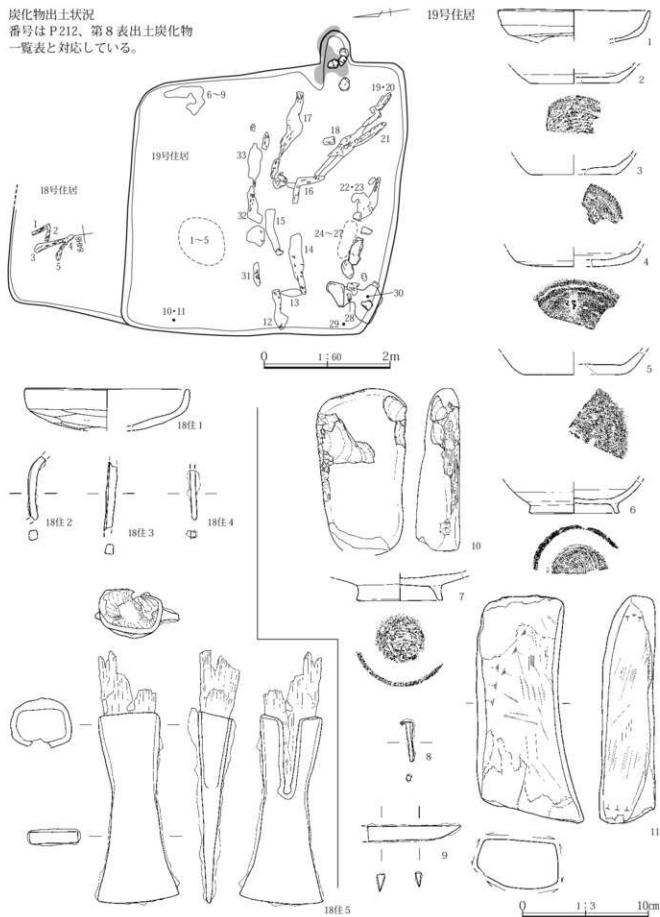
時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀前半とみられる。



第46図 18・19号住居遺構図(1)

炭化物出土状況
 番号はP212、第8表出土炭化物
 一覧表と対応している。

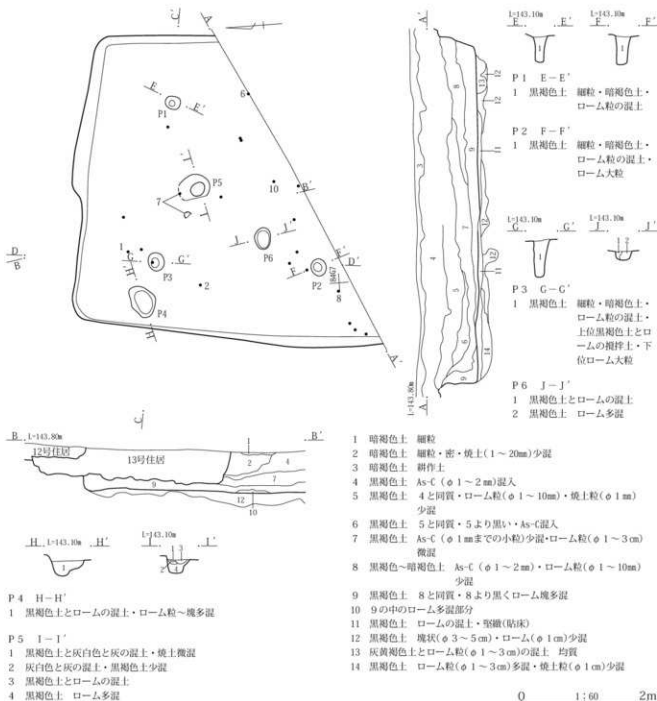
第3節 D区の遺構と遺物



第47図 18・19号住居遺構図(2)、遺物図

21号住居(第48～50図 P.L. 4・7・8・37)

位置 84FG6・7 **形状** 推定方形、南東隅が調査区外。**規模** 長軸4.82m+、短軸4.79m、残存壁高0.78m **面積** 16.72㎡以上 **方位** N99° E **重複** 北辺に12・13号住居があり、本跡が最も古く13号、12号住居の順である。**床面** ロームを主に、黒褐色土、にぶい黄褐色土との混土による貼床。平坦で、特に柱穴を結んだ内側が固い。掘り方は主柱穴を結んだ内側が高く、その中央が円形に窪んでいる。



第48図 21号住居遺構図(1)

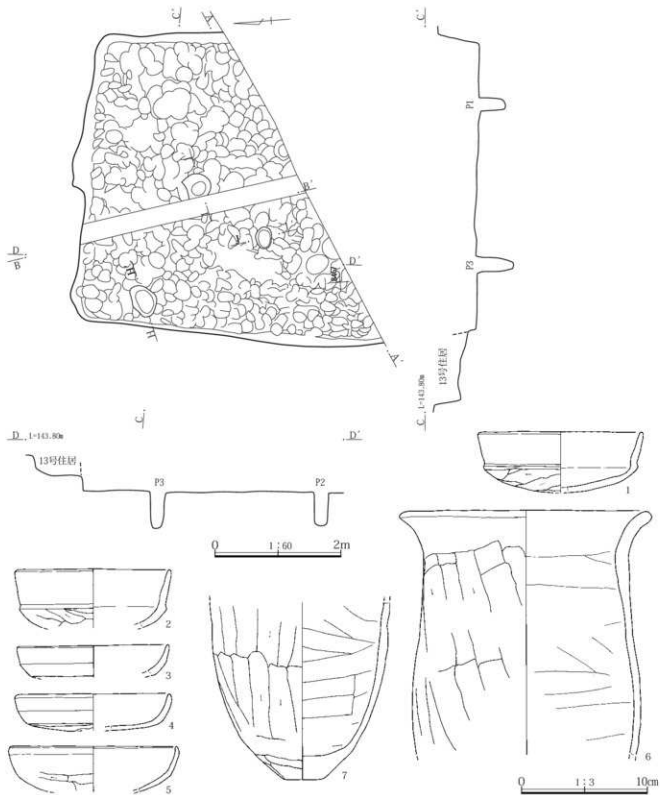
0 1:60 2m

ら遺物が多く出土した。

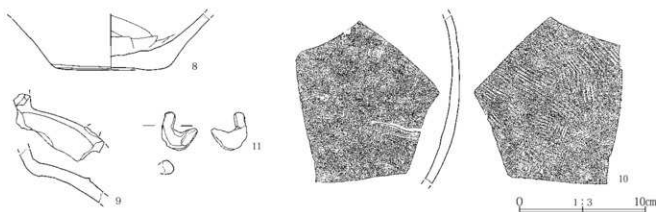
遺物出土状況 土師器415片、須恵器17片、灰釉陶器5片が出土した。床直は、カマドから崩落した長甕と南西隅にあるこも編み石である。ほか土師器環、甕、長胴甕、須恵器甕、提瓶は床から30～50cmと高い位置で埋没時

の混入。土師器環5、甕3、須恵器甕1、提瓶1、形象埴輪1を掲載した。

時期 古墳時代、推定されるカマドから崩落した土器の特徴から6世紀末～7世紀前半とみられる。



第49図 21号住居遺構図(2)・遺物図(1)

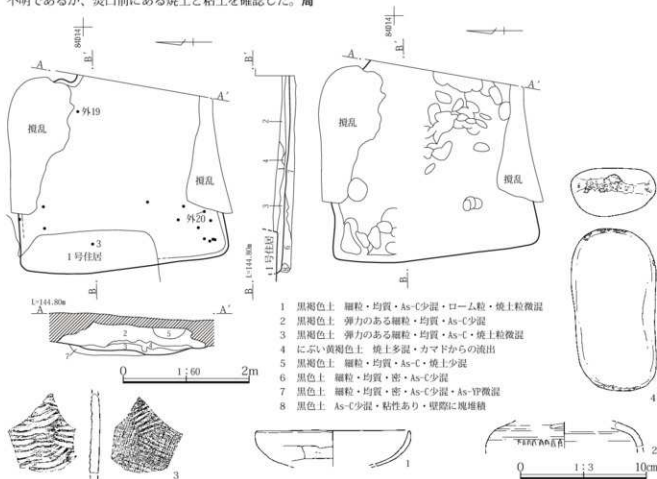


第50図 21号住居遺物図(2)

22号住居(第51図 P.L. 3・8・37)

位置 84D13・14 **形状** 方形、南西隅は調査区外。**規模** 長軸3.13m、短軸3.09m、残存壁高0.24m **面積** 8.86㎡ **方位** N84° E **重複** 1号住居の南東隅に重複、本跡が新しい。**床面** 黒褐色土による貼床。黒い灰がのる薄い硬化面がカマドから中央部にみられる。**カマド** 東辺の中央に位置する。調査区外のため詳細は不明であるが、焚口前における焼土と粘土を確認した。**周**

溝・柱穴 ない。**貯蔵穴** 調査区外の南東隅に推定する。**埋没土** As-Cが混入する黒褐色土で床面まで埋没。**遺物出土状況** 土師器38片、須恵器4片が出土した。土師器環1、須恵器甕1、甕1、甕1を掲載したが環と甕は混入した可能性がある。床面では南西隅にこも編み石9点が集中している。**時期** 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



- 1 黒褐色土 細粒・均質・As-C少混・ローム粒・焼土粒微混
- 2 黒褐色土 弾力のある細粒・均質・As-C少混
- 3 黒褐色土 弾力のある細粒・均質・As-C・焼土粒微混
- 4 にぶい黄褐色土 焼土多混・カマドからの流出
- 5 黒褐色土 細粒・均質・As-C・焼土少混
- 6 黒色土 細粒・均質・密・As-C少混
- 7 黒色土 細粒・均質・密・As-C少混・As-Y微混
- 8 黒色土 As-C少混・粘性あり・壁際に塊堆積

第51図 22号住居遺構図・遺物図

2 土坑(付図 D区)

概要 7基のほかにも掘り方などで検出され、住居に含めたものが数基ある。1号は、掘立柱建物の柱穴として検討した。周囲にある複数のピットとは対応関係がなく、建物であれば南東隅の可能性がある。2号以下は、住居に重複するか隣接している。形状や方位は似ているが、埋没土には違いがある。As-Bらしき細砂が混入する2号と4号、ロームの多い3号と5号とで、後者が住居に併存するか近い時期とみられる。性格は確定できないが、3号、7号は一段深く、ほかの倍以上の深さとなっている。出土した遺物は少なく、7号は住居からの流れ込みである。

1号土坑(第9・52図)

位置 84E15、1号住居の北2mにある。
形状 円形、掘立柱建物、南東隅の柱穴の可能性がある。
規模 長軸・短軸・深さは、81・70+・64cmである。底面は平坦、断面は箱形である。
方位 円形のため計測不可
埋没土 As-Cが混入する黒褐色土で埋没している。出土した遺物はなかった。
所見 埋没土の特徴から古代とみられる。

2号土坑(第9・52図 P.L. 3・37)

位置 84F12、2号と7号、2軒の住居の間にある。
形状 方形 **規模** 長軸・短軸・深さは、178・113・34cmである。ローム漸移層まで掘り込み、底面は平坦。
方位 N80° W
埋没土 細砂を含む黒褐色土。1号土坑よりも新しい。
遺物出土状況 上層から土器が55片出土した。須恵器埴2、土師器甕1を掲載した。
所見 埋没土の特徴から古代か、やや下の時期とみられる。

3号土坑(第9・52図 P.L. 3・37)

位置 84F G11、7号住居の北西隅に重複、住居よりも新しい。
形状 方形 **規模** 長軸・短軸・深さは、153・123・88cmである。**方位** N79° W
埋没土 暗褐色土、1～2cm大のロームを10%含む。

遺物出土状況 土器が33片出土した。須恵器埴1と釘1を掲載した。

所見 埋没土の特徴から古代とみられる。

4号土坑(第9・52図 P.L. 4・37)

位置 84H 8、14号と17号、2軒の住居の間にある。西側が調査区外である。**形状** 長方形 **規模** 長軸・短軸・深さは、108・96・20cmである。**方位** N66° W
埋没土 ローム塊を多く含む黒褐色土、2号土坑に近い。ローム漸移層まで掘り込む。
遺物出土状況 土器が16片出土した。灰陶器埴1を掲載した。
所見 埋没土の特徴から平安時代とみられる。

5号土坑(第9・52図 P.L. 8・37)

位置 84F 7・8、12号住居南東隅に重複、住居よりも新しい。**形状** 方形 **規模** 長軸・短軸・深さは、179・120・30cmである。底面は平坦、ローム漸移層まで掘り込む。**方位** N64° W **埋没土** 黒褐色土、4号土坑に類似する。
遺物出土状況 石1、土器が4片出土した。覆土上位で12号住居からの流れ込みである。土師器環1と須恵器蓋1を掲載した。
所見 出土した土器の特徴から平安時代とみられる。

6号土坑(第9・52図 P.L. 3・37)

位置 84F10・11、7号・9号住居に重複、住居よりも新しい。**形状** 長方形 **規模** 長軸・短軸・深さは、205・130・45cmである。**方位** N20° E
埋没土 黒褐色土で床面まで埋没している。
遺物出土状況 土器が1片出土した。土師器台付甕1、甕1を掲載した。
所見 出土した土器の特徴から平安時代とみられる。

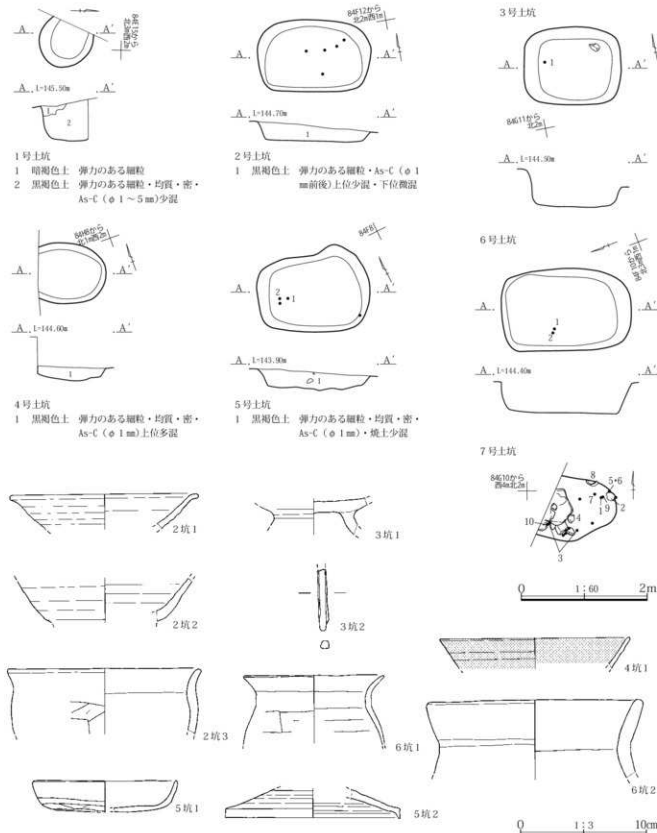
7号土坑(第9・17・52・53図 P.L. 8・38)

位置 84G10、4号・6号住居に重複、住居よりも新しい。西側が調査区外である。**形状** 推定長方形
規模 長軸・短軸・深さは、105+・101・46cmである。東側が深くなる。
方位 N78° W **埋没土** ローム混じりの黒褐色土

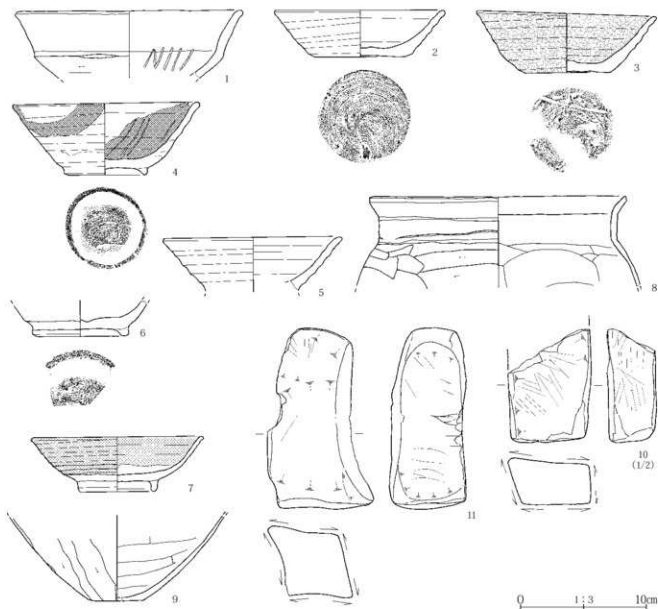
遺物出土状況 上面で土器が49片出土した。土師器環1、コノ字状口縁甕2、須恵器環・埴5、灰軸陶器埴1、砥石2を掲載。以上の土器に混じり石が出土。カマドなど

から廃棄されたものであるらしく、最大は50cmを超えるものがある。

所見 出土した土器の特徴から平安時代とみられる。



第52図 1~7号土坑遺構図・2~6号土坑遺物図



第53図 7号土坑遺物図

3 遺構外遺物(第54図 PL.38)

遺物は、取納箱にして12箱である。内訳は住居8箱、土坑1箱、ほか遺構確認など遺構外が3箱である。A区の遺物は数える程度で、B・C区ではD区から流れ込んだとみられるものが流路、溝から出土している。遺存状態は良好で、磨滅しているものは稀である。B区2号溝で出土した寛永通宝は、錆びて5枚が付着している。溝の時期よりも古く耕作等による混入とみてよいだろう。D区では3,599片が出土した。78%の2,811片が坏・埴類と甕である。検出された遺構の時期のものが圧倒的である。近世の陶磁器が極端に少ないのは集落からは離れた

場所で、耕地として利用されていたからであろう。

掲載したのは縄文土器8と石器4、B区から出土した土師器坏1、須恵器坏1、蓋1、D区で出土した土師器坏3、黒色土器1、灰軸陶器皿1、青磁1、釘1である。竜泉窯の青磁をのぞけば、いずれもD区で検出された遺構に合う時期である。胴城の由来は、芳賀小学校の西にあった福勝院に近いという意味の堂上からだといわれている。小学校の北には勝沢城がある。例外の青磁は、周囲に中世の遺構を推定させるものである。

縄文土器は、前期有尾式、諸磯a式、中期加曾利E2・E4式、後期称名寺式、堀之内式の深鉢あわせて46片が出土している。時期別に網羅したが大量に包含されてい

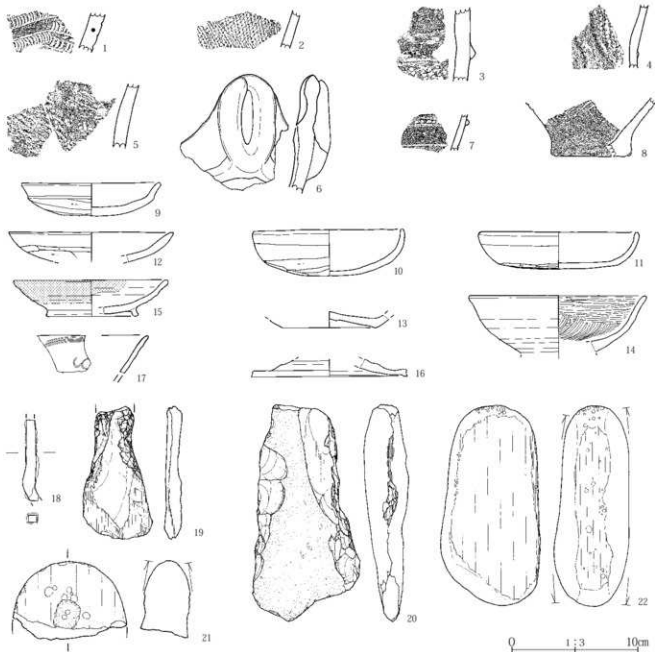
第4章 鳥取松合下遺跡の調査

る状況ではなく、住居ほかに混入したものである。1片だけB区から出土している。

石器は、掲載した以外では打製石斧1、削器2、加工痕ある剥片3、石核1、磨石2、剥片53が出土。石材は、黒色安山岩6、黒色頁岩38、珪質頁岩2、頁岩1、チャート7、ホルンフェルス1、石英閃緑岩1、玉髓

1、黒曜石1、細粒輝石安山岩1、粗粒輝石安山岩2である。

石製品は、紡錘車、砥石、敲石がある。石材は、滑石、砥沢石、粗粒輝石安山岩、珪質頁岩、デイサイト、閃緑岩などが使用されている。



第54図 遺構外遺物図

第5章 洞城遺跡の調査

第1節 遺構の概要

先述したように、幅約150mある台地の西側が本遺跡で、市道を境界とした東側の約30m分が鳥取松合下遺跡である。地名が違うために分けただけで、2つは同一の遺跡である。

検出したのは、住居61軒、掘立柱建物3棟、土坑63基、溝10条、井戸1基、古墳1基である。住居は、古墳時代に台地の東西両端から作られ、中央部が利用されるようになるのは平安時代になってからである。中央部は古墳時代の墓域であったためと、東西両側にくらべて低いことが理由とみられる。台地の東西と中央部とは、ローム層の堆積レベルに1m前後違いがある。

住居は、縄文時代前期1軒、古墳時代前期1軒、古墳時代後期11軒、奈良・平安時代47軒、不明1軒の内訳である。先述のように古墳時代は台地の東西両端に分かれ、中央にある古墳をはさんだ格好である。一辺が6mを超す大型住居のまわりには、半分程度の規模の住居が点在している。4号住居では覆土の中位にFAが堆積している。平安時代は、2～3軒の重複例が多く、カマドを作り替えているのも多くみられる。最大が26号住居の3基、石組み構造のものが多いのも特徴といえよう。

掘立柱建物は、平安時代の住居に併設されていたのではないかとみられるが、数からみて複数の住居に1棟といった割合だったのではないかと。柱穴の大小は建物の時差に相当し、住居と重複しているものもある。

土坑は、縄文時代が推定を含めて16基、平安時代が13基、ほかの35基は判断資料に乏しく時期不明とした。縄文時代は、住居の周囲ではなく台地の中央部にまとまる傾向にある。そのひとつ30号土坑は、ローム漸移層面から1.10mと深く、袋状土坑の典型である。平安時代のものが住居の数に対して少ない。

井戸は、水室と考えられている底面に段差がある構造である。

古墳は、『上毛古墳総覧』(1933)記載の芳賀村1号墳吉祥寺塚にあたる。土地改良で削平されていたものを、

検出した周堀で所在を確かめることができた。

縄文土器について

前期黒浜・有尾式～後期堀之内式まで、出土した量は各型式とも少量である。全出土量は遺物収納箱2箱で、12号住居と同じ前期黒浜式が半数以上を占めている。台地の中では、12号住居を含む西の藤沢川沿いに多く、調査区外にも及んでいる。

石器・石製品について

縄文土器と同様に調査区の西寄りから出土した。打製石斧や凹石など製品が多い。

古代土器について

灰釉陶器は、16軒の住居から出土。埴、皿の破片状態のものほとんどである。遺構間で接合したのが2例ある。うち1例は数の少ない瓶で、45号住居のものが36号住居、7号住居と接合している。共存する遺物からすると45号住居が原位置とみられる。

緑釉は、3軒の住居から出土している。破片となって時間を経たものらしく、住居へは混入である。

陶磁器等について

17世紀代からのもの。周辺遺跡で見られる資料と似ている。陶器類では皿、埴、鉢がある。染付は、細片で割れ口のキズが多いのは耕作によるものと見られる。割れてから時間が経過している。白天目埴は、長石釉を厚くかけている。稀少である。2号墓は17世紀代の後半、御器埴境が副葬されている。副葬品らしく使用痕跡が少ない。中世は、掲載した常滑焼甕のほか数少ない。

鉄製品について

8・9・16・21・29・31・33～36・42・43・55～57号住居、1号井戸から出土した21点を掲載した。刀子6、鉄鋸1、釘5、鉄滓3、銅製吸口1があり、不明が5点である。鉄滓は56号住居のものが埴型滓である。8号住居の鉄鋸などを束にした故鉄は注目である。

第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居

1号住居(第55～59図 P L. 9・39)

位置 85MN17～19 形状 方形

規模 長軸7.85m、短軸7.55m、残存壁高0.56m

面積 59.27㎡ 方位 N82° E

重複 中央に3号住居、東辺に12号住居、古い方から12号、1号、3号の順である。

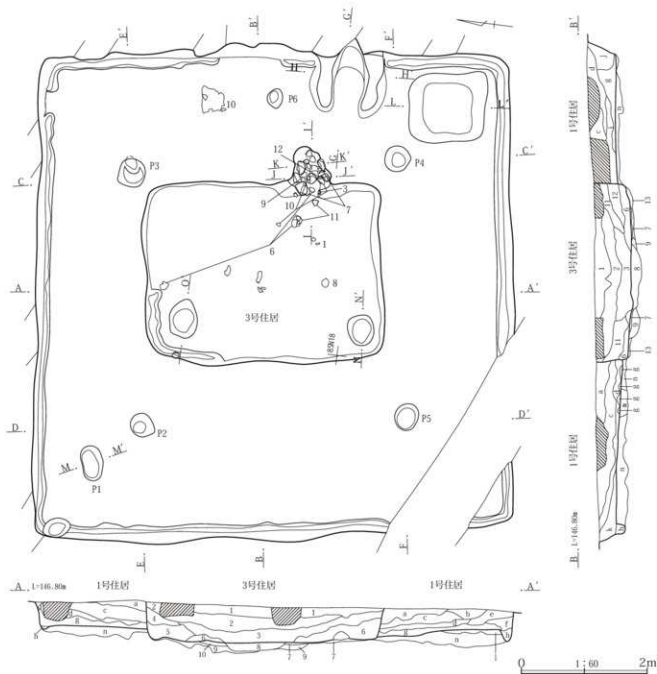
床面 ロームを主に少量の黒褐色土、褐灰色土との混土で貼床。平坦で堅緻。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、全長約150cm、焚口幅45cm、壁を利用して屋内にロームを貼り作られている。煙道はロームを掘り込んで屋外に伸びる。6層に焼土が含まれる。袖石、支脚は残されていない。

周溝 全周。幅14～20cm、深さ5～19cmである。

貯蔵穴 南東隅、方形、長軸・短軸・深さは120・111・110cmである。8の高坪が出土。

柱穴 長軸・短軸・深さはP1が56・35・31cm、P2が41・35・85cm、P3が44・41・80cm、P4が41・41・85cmである。柱間はP1とP2が396cm、P2とP3が420

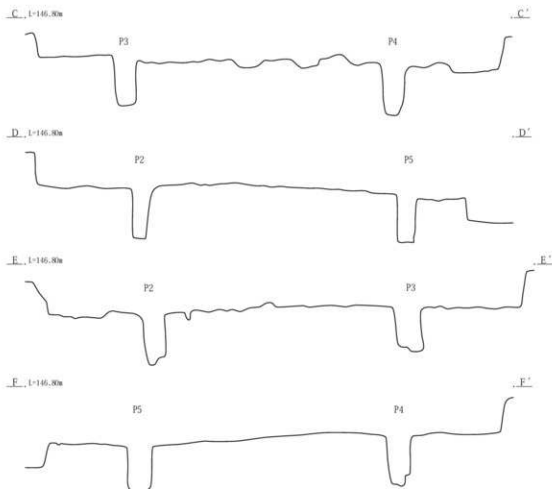


第55図 1・3号住居遺構図(1)

cm、P 3とP 4が408cm、P 4とP 1が420cmである。中軸線上の東壁寄りにあるP 5は、43・37・77cmで棟木をのせる柱穴。対応する柱穴は、西の線上では検出されていない。埋没土 自然埋没、下位にローム塊が多く混入する。

遺物出土状況 全体では、321片が出土した。3号住居と混在していて土師器環・埴、甕、甕、高坏、須恵器環・埴、瓶、羽釜がある。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から6世紀前半とみられる。



1号住居

- a 褐色土 黒褐色土混入・白色軽石(φ1~5mm)多混
- b 灰黄褐色土 白色軽石(φ1~5mm)多混
- c 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)多混
- d 褐色土 白色軽石(φ1~5mm)混入
- e 灰黄褐色土 白色軽石(φ1~5mm)混入
- f 暗灰黄色土 黒色土塊・白色軽石(φ1~3mm)混入
- g 黄褐色土 ローム粒・ローム塊混入
- h 暗灰黄色土 ローム粒多混・しまり弱くやわらかい
- i 灰黄褐色土 ローム粒・白色軽石(φ1~3mm)混入
- j 褐色土 ローム粒・白色軽石(φ1~3mm)混入
- k 灰黄褐色土 ローム粒混入・白色軽石(φ1~3mm)少混
- l 濃い黄色土 ローム・堅緻
- m 黄褐色土 ローム・褐色土の混入
- n ローム再堆積土 ローム塊に褐色土少混・黒褐色土混入

3号住居

- 1 AsB軽石・アッシュあり・編層か
- 2 黒色土 白色軽石(φ1~5mm)多混
- 3 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)炭化物混入
- 4 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)灰黄褐色土混入
- 5 黒色土 白色軽石(φ1~5mm)ローム粒混入
- 6 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊・白色軽石(φ1~5mm)混入
- 7 明黄褐色土 ローム・黒褐色土混入・堅緻
- 8 黒褐色土 ローム粒・炭化物多混・白色軽石少混
- 9 ロームと黒褐色土の混入
- 10 暗灰黄色土 ローム粒多混
- 11 褐色土 白色軽石(φ1~3mm)混入
- 12 灰黄褐色土 白色軽石(φ1~5mm)・黒褐色土混入
- 13 明黄褐色ローム 黒褐色土微混・堅緻



P 1 M-M'
1 黒色土 ローム粒多混・植物根か



1・2号土坑 N-N'・O-O'
1 黒褐色土 ローム粒・ローム塊混入・炭化物微混

0 1;60 2m

第56図 1・3号住居遺構図(2)

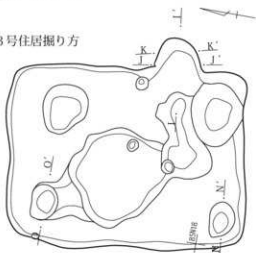
3号住居(第55～60図 P.L. 9・10・39)

位置 85MN17・18 形状 方形 規模 長軸3.73m、

短軸2.82m、残存壁高0.65m 面積 10.52㎡

方位 N82° E

3号住居掘り方



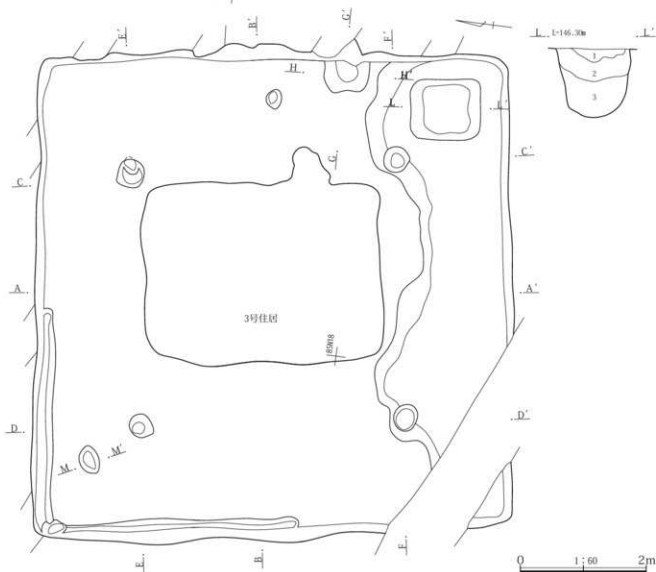
重複 埋没した1号住居内の中央部にある。本跡が新しい。さらに本跡の中央部で馬骨が出土した。**床面** ロームと黒褐色土との混土による貼床。平坦で堅緻。3基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは1号が48・42・20cm、2号が61・45・28cm、3号が160・140・20cmである。

カマド 東辺の南寄りに位置、左右対に置いた石を芯に粘土で被覆して作られている。中央に残る支脚の位置からみて1穴式。**周溝** 北西隅だけで検出。幅15～22cm、深さ2～6cmである。全周はしていない。

貯蔵穴 南東隅は掘り方で大型の掘り込みが検出され、

貯蔵穴 L-L'

- 1 灰黄褐色土 白色軽石(φ1～5mm)・砂粒混入
- 2 にぶい黄褐色土 砂粒多混・ローム粒・白色軽石(φ1～5mm)混入
- 3 灰黄褐色土 ローム粒混入・壁土・軽石混入



第57図 1・3号住居遺構図(3)

床面では2基の土坑が対応するのか。規模は先述。

柱穴 掘り方でも検出されていない。

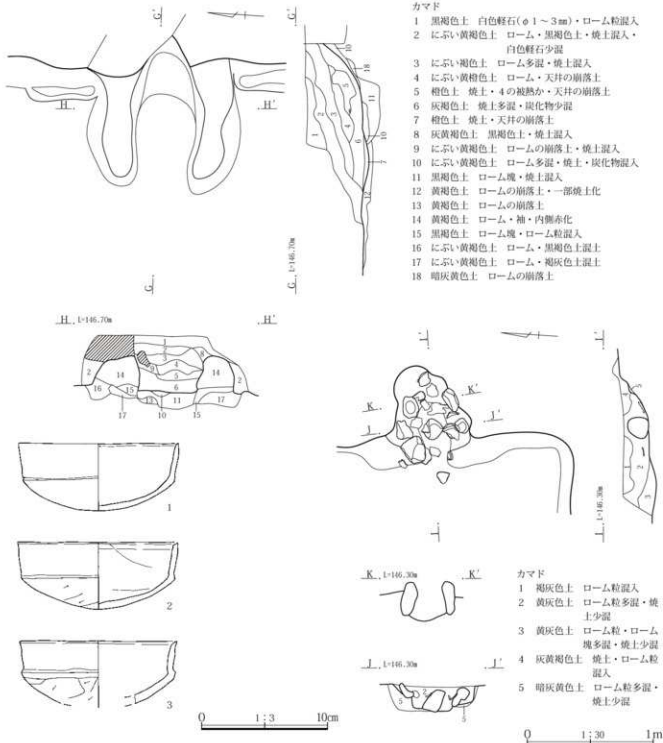
埋没土 自然埋没、上面に10cmを越す厚さでAs-Bの純層。

3層と8層が馬骨を埋葬した土坑の覆土ではないか。炭化物が混入した理由は不明である。

遺物出土状況 全体では61片が出土した。土器器環・埴

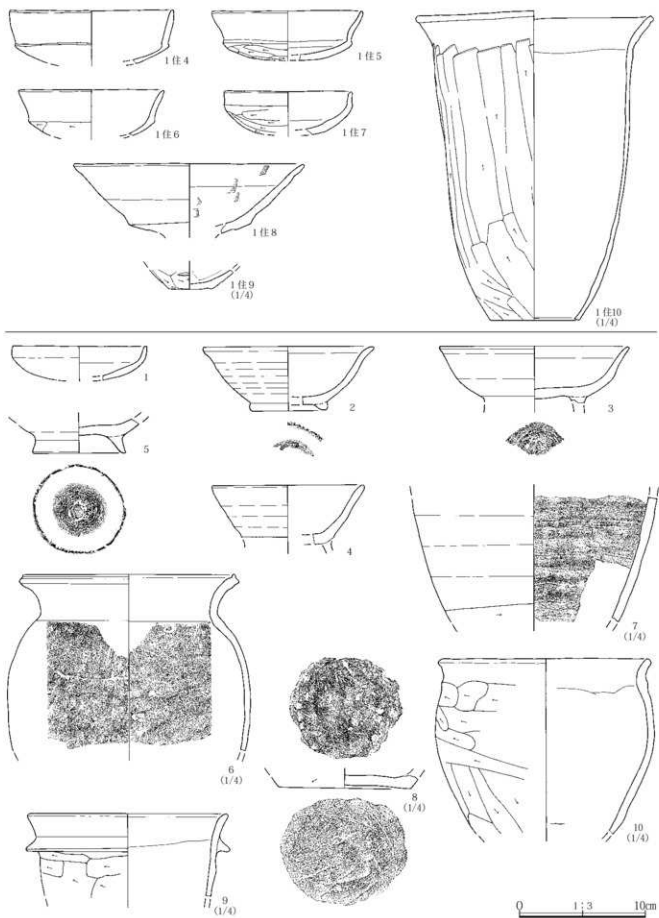
灰軸陶器、須恵器羽釜がある。カマド内では羽釜、土釜が
つづれている。馬骨は骨の一部と歯が出土しているこ
とから1頭分が埋葬されたものか。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半と
みられる。馬骨が出土した土坑は、住居埋没後、As-B降
下前である。

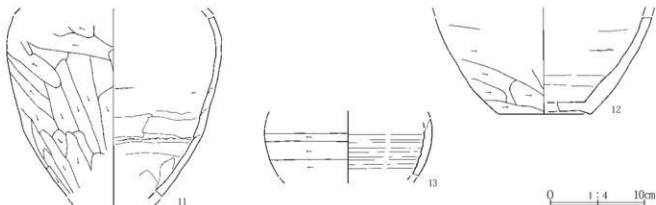


第58図 1・3号住居遺構図(4)、1号住居遺物図(1)

第5章 胴城遺跡の調査



第59図 1号住居遺物図(2)・3号住居遺物図(1)



第60図 3号住居遺物図(2)

2号住居(第61～63図 P L.10・40)

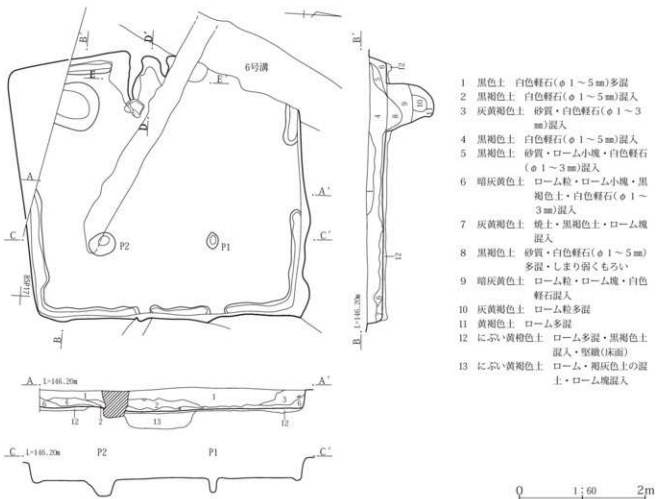
位置 85OP17 **形状** 方形、南西隅は調査区の壁にかかる。**規模** 長軸4.33m、短軸4.13m、残存壁高0.35m

面積 17.88㎡ **方位** N94° W

重複 北西隅に6号溝、中央に7号溝、本跡が古い。

床面 ロームと黒褐色土との混土で貼床。平坦で堅緻。

カマド 西辺の南寄りに位置、全長95cm、右袖口は耕作痕で消失、左袖口の手前にある人頭大の大きさの石は袖石ではないか。**周溝** 一部は途切れているが4辺で検出された。幅が10～15cm、深さが3～6cmである。北辺では中央部で間仕切り溝を検出、長さ約1m、幅20cm前後、深さ6～10cmである。



第61図 2号住居遺構図(1)

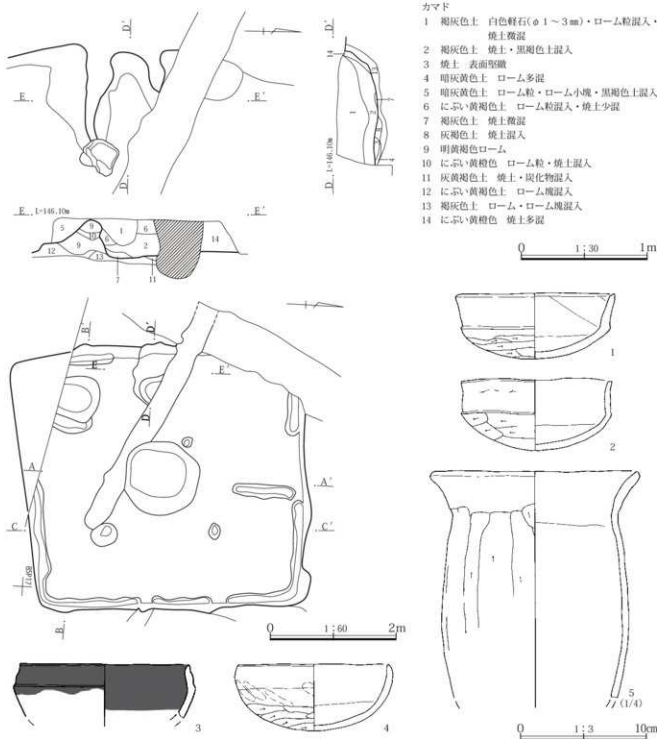
貯蔵穴 南西隅、長軸・短軸・深さは67以上・75・75cmの方形。埋没土は上下に分けられ、下位にローム塊が多い。**柱穴** P1～P3は掘り方で検出。長軸・短軸・深さは、P1が26・18・28cm、P2が43・35・25cm、P3が17・16・58cm。柱間はP1とP2が170cmである。東辺寄りの2本が対とみられるが西側で対応するものがない。床下の中央で土坑を検出、規模は117・115・29cmの

円形である。

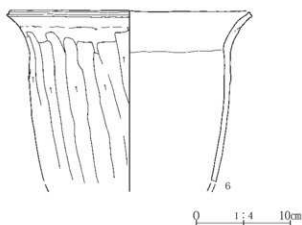
埋没土 中央部を1層黒色土、4層黒褐色土が厚く堆積する。自然埋没である。

遺物出土状況 全体では71片、土師器環・埴、壺、甕、高環の小片で接合例も少ない。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から6世紀前半とみられる。



第62図 2号住居遺構図(2)・遺物図(1)

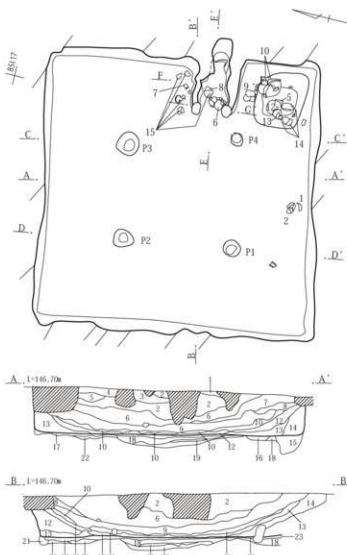


第63図 2号住居遺物図(2)

4号住居(第64～67図 P.L.10・11・40・41)

位置 85H I 15・16 形状 方形

規模 長軸4.50m、短軸4.42m、残存壁高0.70m



第64図 4号住居遺構図(1)

面積 19.89㎡ 方位 N78° E 重複 単独

床面 厚さ5cm前後の貼床、ロームを多く含む堅緻。掘り方では南辺で周溝に重複して1号土坑を検出、長軸・短軸・深さは70・50・18cmである。その西脇が堅緻で入口の梯子の跡ではないか。P1からP3と壁際との間では、長さ1mの間仕切り溝を検出。周溝は構造を別にするのか、東辺だけが80cm前後と幅が広い。

カマド 東辺の中央に位置、全長120cm、焚口幅35cmである。袖口には石が組まれ、中央から左に寄って支脚が残されている。6層・11層は炭化物層で、床面をはさんで上下にあるのは改築をしたからではないか。

周溝 掘り方で間仕切り溝とともに検出された。幅20～23cm、深さ10cm前後である。

貯蔵穴 南東隅、方形、長軸・短軸・深さは76・75・65cmである。縁が低くなるが土手はない。

- 1 褐灰色土 砂質・白色軽石(φ1～3mm)混入
- 2 明黄褐色土 ローム少混・白色軽石(φ1mm)混入
- 3 灰黄褐色土 白色軽石(φ1～3mm)・ローム粒混入
- 4 褐灰色土 白色軽石(φ1～3mm)・ローム粒混入
- 5 明黄褐色土ロームと褐灰色土の混入
- 6 灰黄褐色土 白色軽石(φ1～10mm)・ローム粒・ローム小塊混入
- 7 黄褐色土 ローム上多混・白色軽石(φ1～3mm)混入
- 8 黒褐色土 ローム粒・ローム塊・白色軽石(φ1～3mm)混入
- 9 褐灰色土 ローム粒・FA塊・白色軽石(φ1～10mm)混入
- 10 FA アッシュの間に軽石混入
- 11 黒褐色土 ローム粒混入・白色軽石少混
- 12 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊・黒褐色土混入
- 13 にぶい黄褐色土 ローム粒混入
- 14 灰黄褐色土 ローム粒・ローム小塊・黒褐色土混入
- 15 灰黄褐色土 ローム粒多混・しまり弱くやわらかい
- 16 灰黄褐色土 白色軽石(φ1mm)混入
- 17 暗灰黄色土 ローム粒多混・堅緻(床面)
- 18 黄褐色土 ローム粒多混
- 19 黒褐色土 ローム粒混入
- 20 黒褐色土 ローム多混
- 21 黒褐色土 ローム粒・ローム塊混入
- 22 黒褐色土 ローム多混・黒褐色土混入
- 23 黒色土 ローム粒混入・焼土少混

0 1:60 2m

柱穴 長軸・短軸・深さはP1が27・25・50cm、P2が31・28・41cm、P3が36・33・35cm、P4が20・18・44cmである。間隔はP1とP2が172cm、P2とP3が152cm、P3とP4が168cm、P4とP1が175cmである。P3とP4の底面には柱の圧着痕がある。

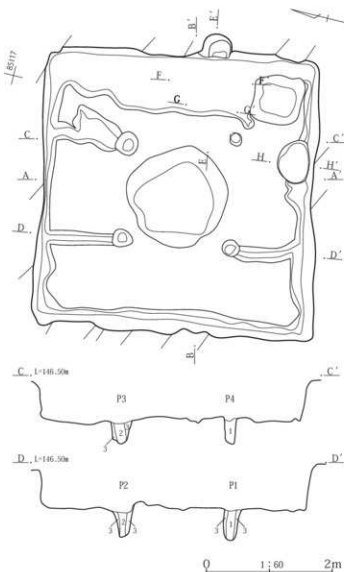
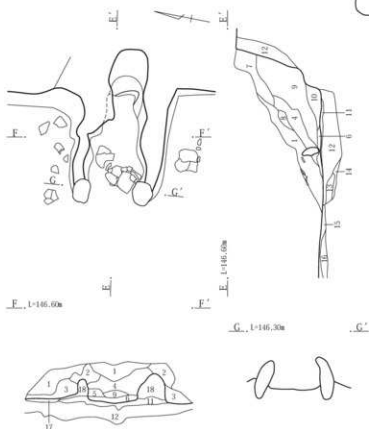
埋没土 FAが薄い間層を置いて床面直上にレンズ状に堆積。良好な箇所での厚さは10cm。

遺物出土状況 全体では103片、貯蔵穴から丸胴甕出土。土師器環・埴、甕、大小の甌、羽釜、高坏、埴がある。

時期 古墳時代、覆土のFAと出土した土器の特徴から6世紀初頭とみられる。



- 1号土坑 H-H'
- 1 黒褐色土 ローム粒・白色軽石(φ1~3mm)混入
 - 2 暗灰黄色土 ローム粒多混・しまり弱くやわらかい

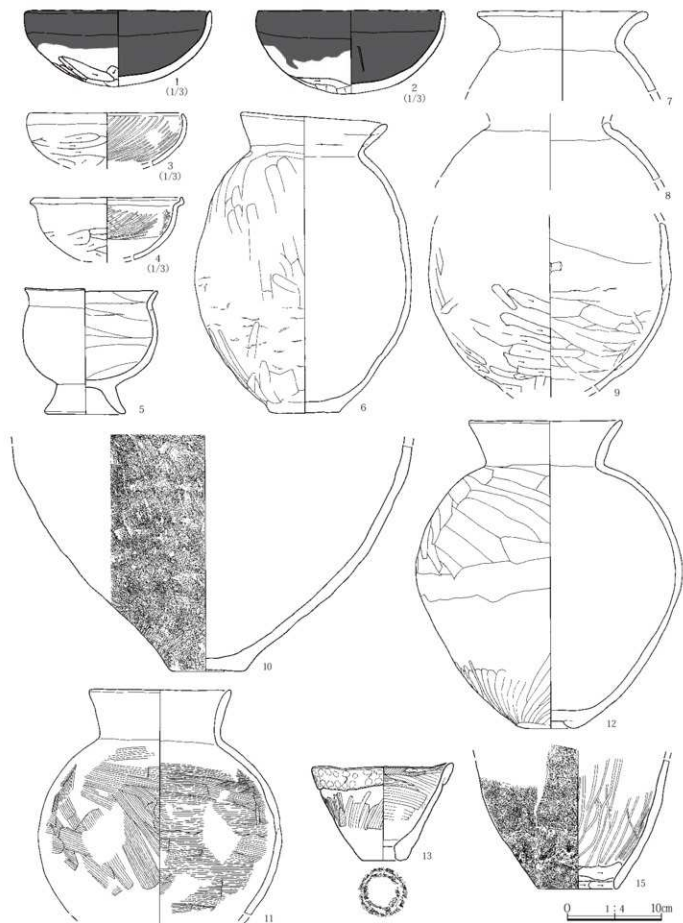


カマド

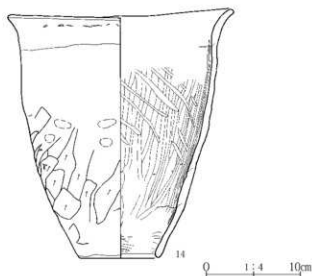
- 1 褐灰色土 ローム粒混入・焼土・炭化物微混
- 2 黄褐色土 ローム粒・焼土混入
- 3 黒褐色土 ローム粒・焼土混入
- 4 褐色土 焼土多混・ローム粒・ローム塊・炭化物混入
- 5 明黄褐色ローム 天井の崩落土か
- 6 黒色土 炭化物・ローム粒・ローム塊・焼土混入
- 7 にぶい黄褐色土 ローム粒・焼土微混
- 8 黄褐色土 ロームの崩落土・焼土混入
- 9 黒褐色土 ローム粒・焼土・炭化物混入
- 10 ローム塊と黒色土の混土・黒色土は炭化物多混
- 11 黒色土 炭化物層
- 12 黄褐色ローム 黒褐色土微混
- 13 褐灰色土 ローム粒混入
- 14 黄褐色ローム
- 15 黒褐色土 ローム多混・堅緻(床面)
- 16 黄褐色ローム少混
- 17 灰黄褐色土 ローム粒・焼土混入
- 18 明黄褐色ローム 焼土微混(カマド袖)

0 1:30 1m

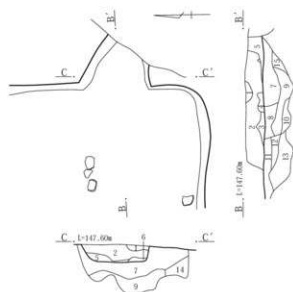
第65図 4号住居遺構図(2)



第66図 4号住居遺物図(1)



第67図 4号住居遺物図(2)



カマド

- 1 にぶい・黄褐色土 ロームの崩落土
- 2 黒褐色土 ローム粒混入
- 3 にぶい・黄褐色土 ロームの崩落土・焼土・炭化物混入
- 4 にぶい・黄褐色土 ローム粒・浅黄褐色粘質土混入(カマド天井の崩落土か)
- 5 にぶい・黄褐色土 焼土・黒褐色土混入
- 6 灰黄褐色土 ローム粒・焼土混入
- 7 灰褐色土 焼土・白色軽石(φ1~3mm)混入
- 8 黒褐色土 焼土・ローム粒混入
- 9 黒褐色土 ローム粒混入
- 10 黒褐色土とローム塊の混入
- 11 黒褐色土とロームの薄い・互層・堅緻(床面)
- 12 黄褐色土 ローム塊混入
- 13 黒褐色土 ローム塊混入
- 14 灰黄褐色土 焼土・ローム粒混入
- 15 ロームの崩落土 しまり弱くやわらかい



5号住居(第68・69図 P.L.11・41)

位置 9511・2 形状 方形

規模 長軸2.95m、短軸2.22m、残存壁高0.19m

面積 6.55㎡ 方位 N90° E 重複 単独

床面 ロームと黒褐色土の混土による貼床、平坦で堅緻。掘り方は、カマドの前から南辺の間に浅い土坑が連続している。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、大型の掘り方の中で南から北へ作り替えられている。

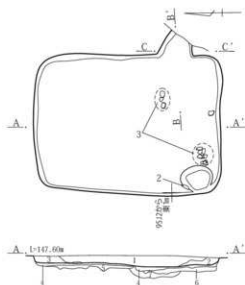
周溝 東辺、カマドの左側で検出。長さ1m、幅8~15cm、深さ5cmである。

貯蔵穴 南西隅、円形、長軸・短軸・深さは52・43・8cmである。柱穴 掘り方でも検出されていない。

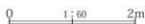
埋没土 壁際に褐灰色土、中央部が黒褐色土で自然埋没。

遺物出土状況 全体では36片、南辺寄りて出土。器形がわかるのは羽釜、瓶だけで、ほかの杯・瓿類、甕は小破片で低い接合率である。

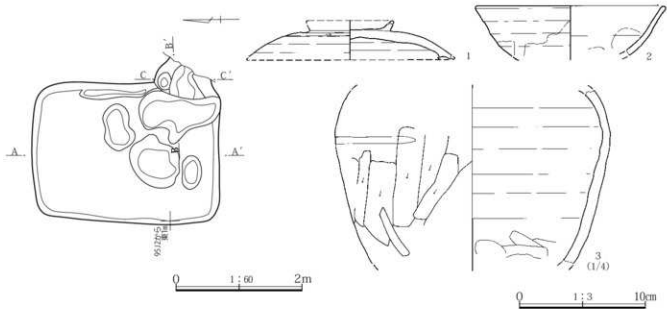
時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)混入
- 2 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)・ローム粒・焼土混入
- 3 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)・ローム粒混入
- 4 にぶい・黄褐色土 ローム粒混入・堅緻(床面)
- 5 黄褐色土 ローム多混
- 6 黄褐色土 ローム・黒褐色土混入
- 7 黒褐色土 ローム粒混入



第68図 5号住居遺構図(1)



第69図 5号住居遺構図(2)・遺物図

6号住居(第70・71図 P.L.11・41)

位置 85GH19・20 形状 方形

規模 長軸3.37m、短軸2.68m、残存壁高0.30m

面積 9.03㎡ 方位 N98° E 重複 北東隅に2号土坑

床面 5層褐灰色土による厚さ5cm前後の貼床。3層はその上にある硬化面。土坑は隅で2基を検出、長軸・短軸・深さは、1号が84・63・32cm、2号が92・77・42cmである。

カマド 東辺の南隅寄りに位置、中位以上が攪乱されて

いる。図示したのは掘り方の可能性がある。

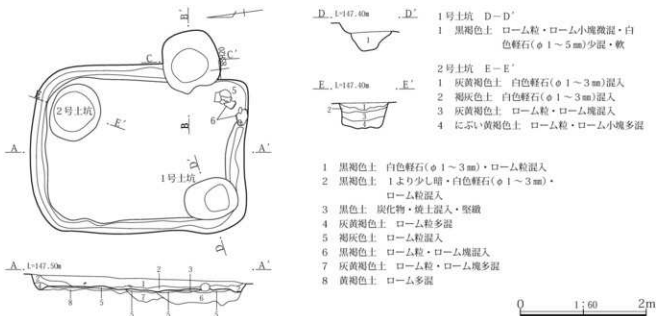
周溝 全周。幅17～20cm、深さ5cm前後である。

貯蔵穴 南西隅にある1号土坑に可能性がある。周溝にかかり黒褐色土で埋没している。

柱穴 掘り方でも検出されていない。

埋没土 中央部の床面まで黒褐色土で自然埋没。

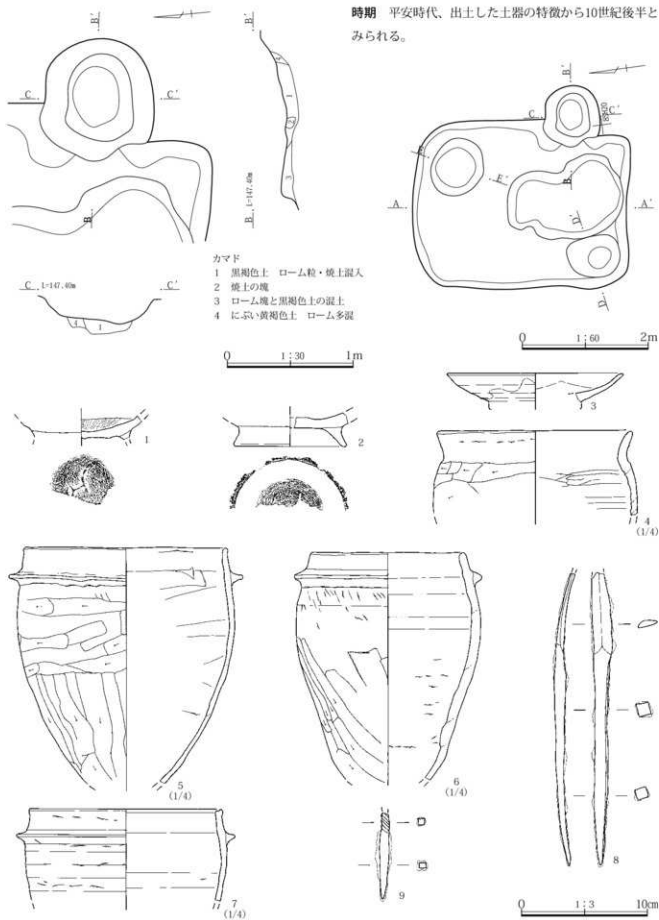
遺物出土状況 全体では79片、南東隅に多い。土師器環・碗、灰釉陶器、土製品、須臾器羽釜、瓶がある。器種不明の鉄器1、8の槍鉋は2号土坑から出土。全長15.5cm、茎の端部には木質が残る。



第70図 6号住居遺構図(1)

- D, L=147.40m, D', 1号土坑 D-D'
- 1 黒褐色土 ローム粒・ローム小塊微混、白色軽石(φ1~5mm)少混、軟
- E, L=147.40m, E', 2号土坑 E-E'
- 1 灰黄褐色土 白色軽石(φ1~3mm)混入
- 2 褐色土 白色軽石(φ1~3mm)混入
- 3 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊混入
- 4 にぶい黄褐色土 ローム粒・ローム小塊多混
- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1~3mm)・ローム粒混入
- 2 黒褐色土 1より少し暗・白色軽石(φ1~3mm)・ローム粒混入
- 3 黒色土 炭化物・焼土混入・堅硬
- 4 灰黄褐色土 ローム粒多混
- 5 褐色土 ローム粒混入
- 6 黒褐色土 ローム粒・ローム塊混入
- 7 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊多混
- 8 黄褐色土 ローム多混

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第71図 6号住居遺構図(2)・遺物図

7号住居(第72・73図 P.L.11・12・42)

位置 95GH1 形状 長方形

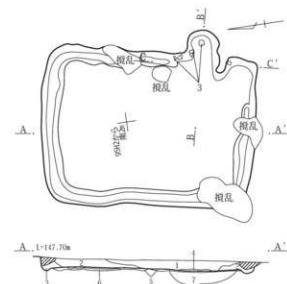
規模 長軸3.40m、短軸2.43m、残存壁高0.23m

面積 8.26㎡ 方位 N100° E 重複 単独

床面 5層褐色灰色土と6層黒色土、ロームとの混土による貼床。厚さが5cm前後で一定して堅緻である。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、底面の近くまで削平。右袖の一部と先端部に炭化物が残されている。

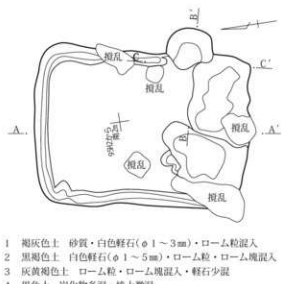
周溝 南東隅を除き全周。幅14～21cm、深さ4～6cmである。



貯蔵穴 南東隅の掘り方で長方形の土坑を検出。長軸・短軸・深さは130・90・20cmである。カマドから15層黒褐色土が流れ込んで埋没している。**柱穴** 掘り方で検出されていない。**埋没土** 壁際が褐灰色土、中央部にかけては黒褐色土で自然埋没している。

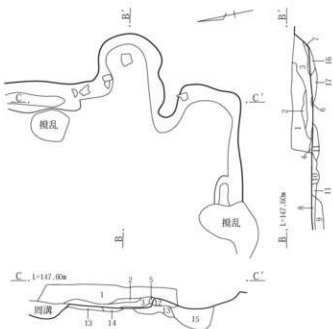
遺物出土状況 カマドとその周囲で出土。全体では70片、羽釜、甕、埴、蓋、灰桶陶器埴がある。炭化材はクスギ節の丸木である。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



- 1 褐色灰色土 砂質・白色軽石(φ1～3mm)・ローム粒混入
- 2 黒褐色土 白色軽石(φ1～5mm)・ローム粒・ローム塊混入
- 3 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊混入・軽石少混
- 4 黒色土 炭化物多混・焼土微混
- 5 褐色土 ローム粒混入・堅緻
- 6 にぶい黄褐色土 ロームの崩落土
- 7 黒色土 白色軽石(φ1～3mm)・ローム粒・ローム塊混入

0 1:60 2m

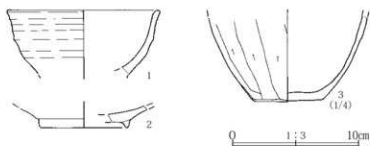


カマド

- 1 黒褐色土 ローム粒・白色軽石混入
- 2 褐色土 ローム粒・焼土混入、灰層薄く混入
- 3 灰褐色土 焼土・炭化物混入
- 4 黒色土 炭化物多混・焼土・ローム粒微混
- 5 ローム塊
- 6 暗灰黄色土 ローム粒・炭化物・灰の混土
- 7 炭化物層
- 8 黒色土 ローム粒混入・堅緻
- 9 黒色土 ローム粒・ローム塊混入
- 10 灰黄褐色土 黒色土・にぶい黄褐色粘土塊混入・堅緻
- 11 にぶい黄褐色土 ローム崩落土・堅緻
- 12 明黄褐色ロームと黒褐色土の混土・堅緻(袖)
- 13 にぶい黄褐色土 ローム多混
- 14 灰褐色土 焼土混入
- 15 黒褐色土 ローム粒混入(貯蔵穴か)
- 16 褐色土 焼土・炭化物混入
- 17 灰褐色土 焼土混入

0 1:30 1m

第72図 7号住居遺構図



第73図 7号住居遺物図

8号住居(第74～76図 P.L.12・42)

位置 95GH2・3 形状 長方形

規模 長軸3.50m、短軸2.73m、残存壁高0.15m

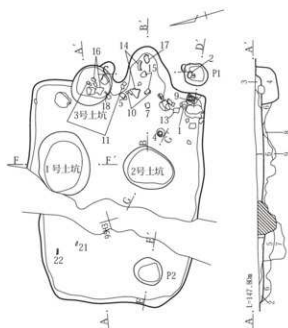
面積 9.56㎡ 方位 N111°E

重複 東辺カマド左脇に3号土坑

床面 ロームを多く含む灰黄褐色土による貼床。土坑の長軸・短軸・深さは、1号が100・80・63cm、2号が82・65・21cm、3号が65・61・27cm、4号が90・64・15cmである。4号は掘り方で検出した。ピットは1号が

38・35・29cm、2号が45・41・18cmである。
カマド 東辺の南寄りに位置、10層が床面、11層が灰掻き穴である。
周溝・柱穴 掘り方で検出されていない。
貯蔵穴 カマドの右にある1号ピットに可能性がある。南東隅からは扁平な石が出土。
埋没土 黒褐色土、灰黄褐色土で自然埋没している。掘り方の9層が堅緻である。

遺物出土状況 全体では118片、カマドを中心にした東辺沿いに分布。カマドの石に混じり羽釜11個体以上と甕、坏・埴15個体以上、灰輪陶器塊、罌子、釘、刀子が出土。釘と刀子は、長さを揃えて束ねている。2号土坑出土の刀子も曲げて長さが揃えられている。鍛冶原料の故鉄とみられ、長さは約5cmが規定であったようである。土層にある「吉」の線刻は焼成後である。
時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1～5mm)・焼土・ローム粒混入
- 2 灰黄褐色土 ローム粒混入
- 3 灰黄褐色土 2と同質・焼土混入
- 4 黒褐色土 ローム粒・焼土混入(3号土坑フケ上)
- 5 黒褐色土 ローム粒・ローム塊・白色軽石(φ1～5mm)混入
- 6 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊多混
- 7 に近い黄褐色土 ローム粒多混・しまり弱い
- 8 崩れたローム
- 9 灰黄褐色土 堅緻



- P1 D-D'
- 1 黒色土 焼土・ローム粒・白色軽石(φ1mm)混入
 - 2 灰黄褐色土 ローム塊・ローム粒混入

- P2 E-E'
- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1mm)・ローム粒混入
 - 2 ローム粒とローム塊と黒褐色土の混土・しまり弱くやわらかい



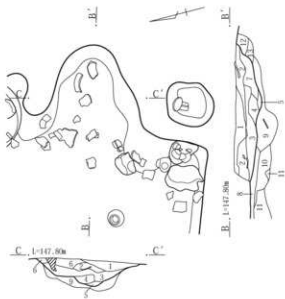
- 1号土坑 F-F'
- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1～3mm)混入
 - 2 黒褐色土 白色軽石(φ1～3mm)・ローム粒混入
 - 3 灰黄褐色土 ローム粒・焼土混入・軽石少混
 - 4 褐色土 ローム粒多混・しまり弱くやわらかい



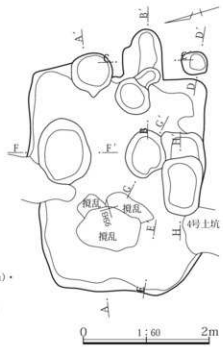
- 2号土坑 G-G'
- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1～5mm)・ローム粒混入・しまりよい
 - 2 灰褐色土 ローム粒・焼土混入

0 1:60 2m

第74図 8号住居遺構図(1)

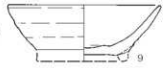
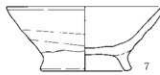
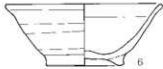
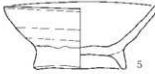
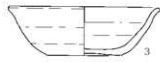


- 4号土坑 H-H'
- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1cm)・ローム粒混入
 - 2 暗灰黄色土 ローム粒多混



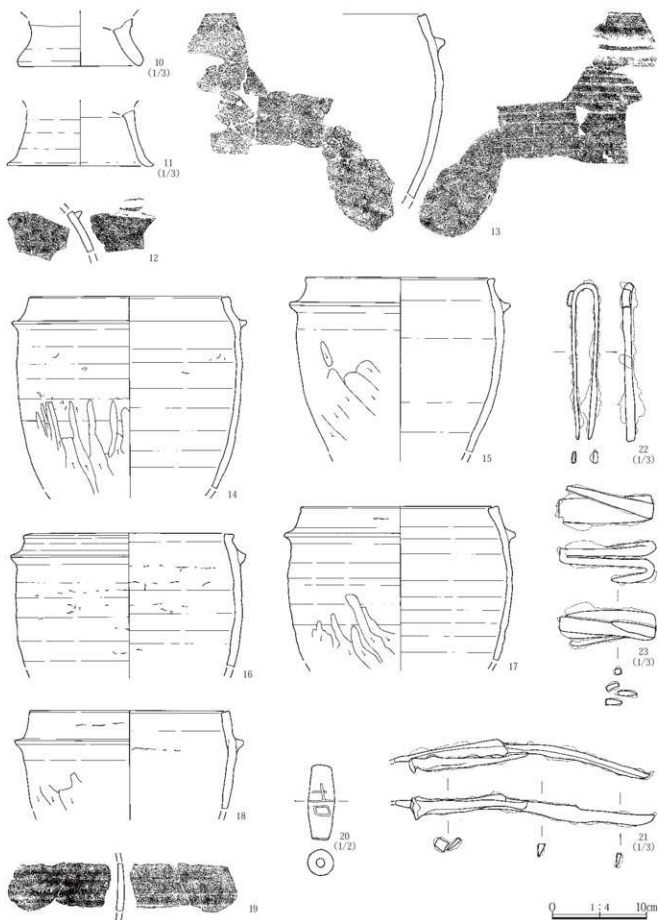
カマド

- 1 褐灰色土 覆瓦の上
- 2 灰褐色土 焼土混入
- 3 褐灰色土 焼土多混
- 4 にぶい赤褐色土 焼土多混・褐灰色土混入
- 5 黒褐色土 炭化物混入
- 6 灰黄褐色土 ローム粒混入
- 7 灰黄褐色土 焼土・ローム粒混入
- 8 黒褐色土 焼土混入・堅磁
- 9 灰褐色土 焼土多混
- 10 灰褐色土 焼土・ローム粒少混
- 11 黄褐色土 崩れたローム
- 12 褐灰色土 焼土微混
- 13 焼土と黒褐色土の混土



第75図 8号住居遺構図(2)・遺物図(1)

第5章 胴城道跡の調査



第76図 8号住居遺物図(2)

9号住居(第77～79図 P.L.12・13・43)

位置 95FG1・2 形状 方形

規模 長軸3.83m、短軸3.05m、残存壁高0.20m

面積 11.68㎡ 方位 N100° E

重複 北東に10号住居、本跡が新しい。

床面 灰黄褐色土による貼床。厚さは5cm前後で一定していて堅緻。10号住居とのレベルの差はない。掘り方でも2軒ともに凸凹が目立つ程度で平坦である。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置。壁際に袖を持つとみられるが底面の近くまで削平。間口75cm、奥行き60cm、4層、6層に焼土が多い。

周溝 検出されていない。

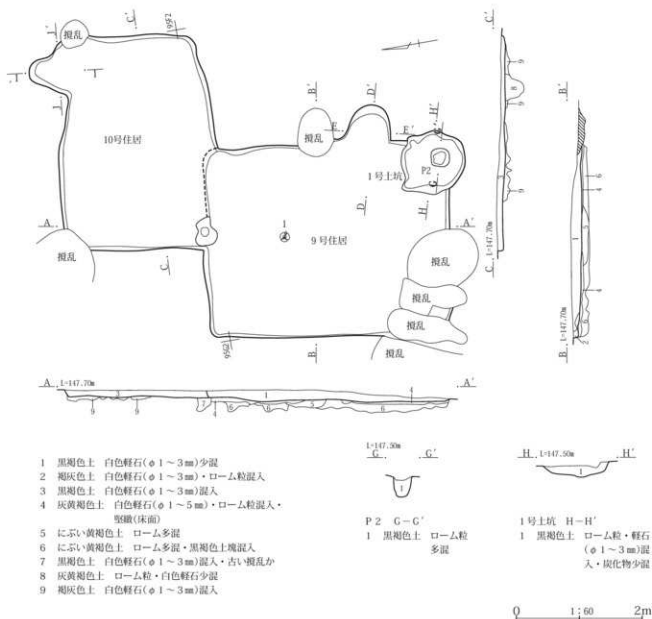
貯蔵穴 南東隅にある1号土坑に可能性がある。規模は101・100・30cmである。

柱穴 掘り方で2基のピットを検出。長軸・短軸・深さはP1が50・40・20cm、P2が29・29・32cm、P2は1号土坑内の中央にある。

埋没土 床面まで黒褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 全体では74の小片。土師器環・埴、須恵器環・埴、羽釜があり、6・7の須恵器環に判読不可の墨書。カマドの外側で器種不明の鉄器1点が出土。

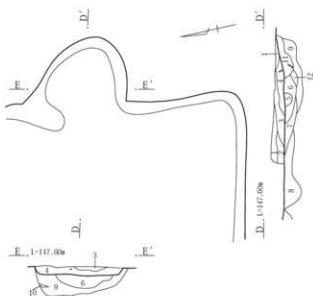
時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第77図 9・10号住居遺構図(1)

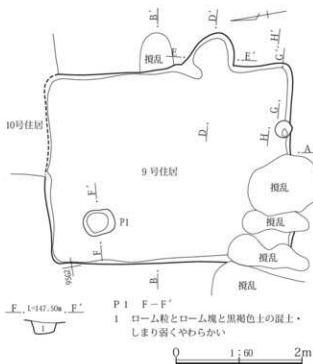
10号住居(第77~79図 P.L.12・13・43)

位置 95E F 1・2 形状 方形



9号住居カマド

- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1~3mm)混入
- 2 暗赤褐色土 白色軽石(φ1~3mm)・焼土混入
- 3 灰褐色土 焼土多混
- 4 にぶい黄褐色土 焼土多混
- 5 焼土塊
- 6 灰褐色土 焼土混入
- 7 褐色土 ローム粒少混・焼土混入
- 8 黒褐色土 ローム塊・白色軽石(φ1~3mm)混入
- 9 暗灰黄色土 ローム多混・灰褐色土混入
- 10 黄褐色土 焼土微混
- 11 灰黄褐色土 焼土微混
- 12 灰黄褐色土 焼土極微混



- P1 F-F'
- 1 ローム粒とローム塊と黒褐色土の混入・しまり強くやわらかい

規模 長軸3.40m、短軸2.50m、残存壁高0.12m

面積 8.50㎡ 方位 N10° E

重複 南西に9号住居、29号・31号土坑、本跡が古い。

床面 褐灰色土の貼床であるが堅くはない。

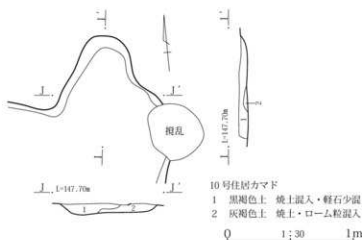
カマド 北辺の北東隅寄りに位置。壁際に袖を持つとみられるが底面の近くまでが削平され、遺存状態は悪い。開口80cm、奥行き70cmである。

周溝・貯蔵穴・柱穴 掘り方でも検出されていない。

埋没土 床面まで黒褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 全体では23片、須恵器環、埴、羽釜がある。

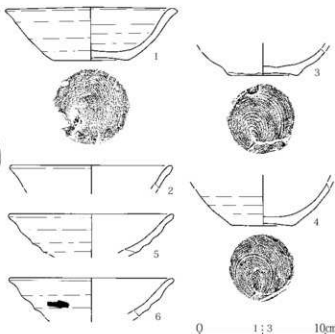
時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀代とみられる。



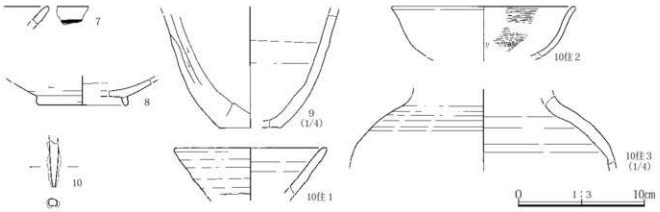
10号住居カマド

- 1 黒褐色土 焼土混入・軽石少混
- 2 灰褐色土 焼土・ローム粒混入

0 1:30 1m



第78図 9・10号住居遺構図(2)、9号住居遺物図(1)



第79図 9号住居遺物園(2)・10号住居遺物園

11号住居(第80・81図 P.L.12・13・43)

位置 95 E F 2・3 形状 推定方形、北側は調査区外

規模 長軸1.90m以上、短軸2.65m、残存壁高0.31m

面積 5.04㎡以上 方位 N83° E 重複 単独

床面 壁際をのぞいてロームを混入した黒色土による薄い貼床、堅緻。掘り方はカマドの手前で断面が塊状をした円形土坑と南西隅と南東隅に土坑がある。

カマド 東辺の南東隅から50cmに位置、支脚が残されている。開口55cm、奥行き88cmである。

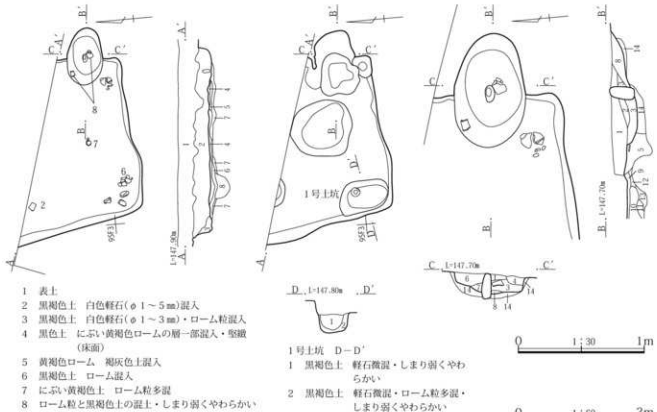
周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 南西隅にある1号土坑をあてる。長方形で長軸・短軸・深さは79・48・33cm、上面で底部に穿孔された須恵器塊1点が出土。

埋没土 黒褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 全体では76片、須恵器環・塊、羽釜がある。カマドからは鉄鍋の破片1点が出土。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半～11世紀前半とみられる。



- 1 表土
- 2 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)混入
- 3 黒褐色土 白色軽石(φ1~3mm)・ローム粒混入
- 4 黒色土 に近い黄褐色ロームの層一部混入・堅緻(床面)
- 5 黄褐色ローム 褐色色土混入
- 6 黒褐色土 ローム混入
- 7 に近い黄褐色土 ローム粒多混
- 8 ローム粒と黒褐色土の混土・しまり弱くやわらかい

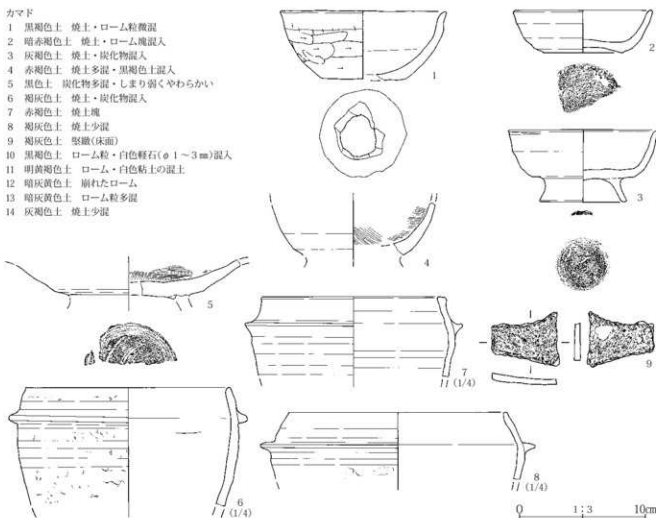
- 1号土坑 D-D'
- 1 黒褐色土 軽石微混・しまり弱くやわらかい
- 2 黒褐色土 軽石微混・ローム粒多混・しまり弱くやわらかい

第80図 11号住居遺構図

第5章 胴城遺跡の調査

カマド

- 1 黒褐色土 焼土・ローム粒混入
- 2 暗赤褐色土 焼土・ローム塊混入
- 3 灰褐色土 焼土・炭化物混入
- 4 赤褐色土 焼土多混・黒褐色土混入
- 5 黒色土 炭化物多混・しまり弱くやわらかい
- 6 褐灰色土 焼土・炭化物混入
- 7 赤褐色土 焼土塊
- 8 褐灰色土 焼土少混
- 9 褐灰色土 堅緻(床面)
- 10 黒褐色土 ローム粒・白色軽石(φ1~3mm)混入
- 11 明黄色土 ローム・白色粘土の混土
- 12 暗灰黄色土 崩れたローム
- 13 暗灰黄色土 ローム粒多混
- 14 灰褐色土 焼土少混

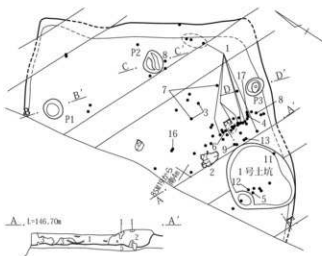


第81図 11号住居遺物図

12号住居(第82・83図 P L.13・43・44)

位置 85 LM17・18、西側半分が1号住居により消失。

形状 推定方形、北と東の2辺は直交しているが、南東辺は1号土坑があるため緩い弧状である。



第82図 12号住居遺構図(1)

規模 長軸4.00m、短軸3.17m以上、残存壁高0.22m

面積 12.68㎡以上 方位 北辺 N32° W

重複 西側に1号住居、1号土坑は本跡より新しいか。

床面 ローム面まで掘り下げて、直接床としている。

- 1 黒褐色土とにぶい黄褐色土の混土
- 2 褐色土多混 黒褐色土の塊混・弾力のある細粒土・均質
- 3 黄褐色土 灰白色砂粒(φ1mm以下)混入
- 4 赤褐色土 木の根による攪拌土
- 5 ローム 地山・As-OK相当・堅緻

1:145.70m
B-B'



1:145.70m
C-C'



P1 B-B'

- 1 黒褐色土 黄褐色土混入・堅緻
- 2 にぶい黄褐色土 黒褐色土混入

P2 C-C'

- 1 黒褐色土 にぶい黄褐色土と攪拌・しまり弱い

0 1:60 2m

炉 拳大の石が出土した中央部を想定、しかし掘り込みはなく、床も焼けていない。周溝 検出されていない。

柱穴 P 1～P 3を検出。床下でも深い掘り込みはない。長軸・短軸・深さはP 1が32・30・20cm、P 2が37・33・15cm、P 3が30・26・20cmである。1号土坑は、120・105・20cmである。

埋没土 黒褐色土にぶい黄褐色土で自然埋没。固く締まっている。

遺物出土状況 全体では58片、南東辺寄りに集中している。がで使用していたものが見つれた可能性がある。

時期 縄文時代前期 出土した遺物からみて黒浜式期である。

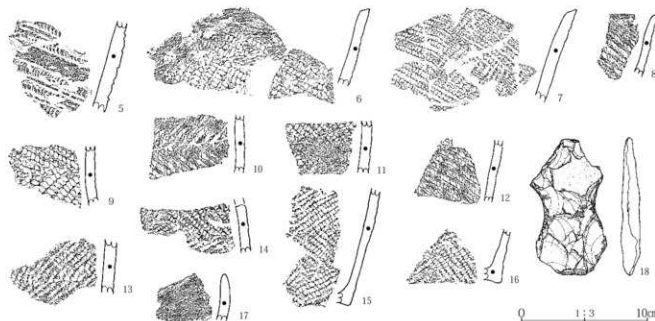
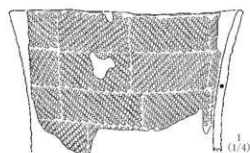


- P 3 D-D'
- 1 ぶい黄褐色土 しまり弱い
 - 2 褐色土 堅緻
 - 3 褐色土 2より明るい・堅緻



- 1号土坑 E-E'
- 1 黒褐色土 堅緻
 - 2 褐色土にぶい黄褐色土の斑混・堅緻

0 1:60 2m



第83図 12号住居遺構(2)・遺物図

13号住居(第84・85図 P.L.13・44)

位置 84 S 13、14号住居と南辺が接するほどの位置にあり、上面に8号溝が重複している。

形状 方形 **規模** 長軸3.18m、短軸3.18m、残存壁高0.41m **面積** 10.11㎡ **方位** N114° E

重複 南辺に8号溝、北西隅に土坑1基、本跡が古い。土坑はAs-B混土で埋没している。

床面 ローム漸移層と黒褐色土との混土による貼床。掘り方は、壁沿いを土坑状に連続して掘り込んでいる。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、袖は掘り残したロームを土台にして作られている。全長65cm、焚口幅25cmで

ある。底面に残されていた焼土は、スサの入った塊状で強く焼けたことが分かる。

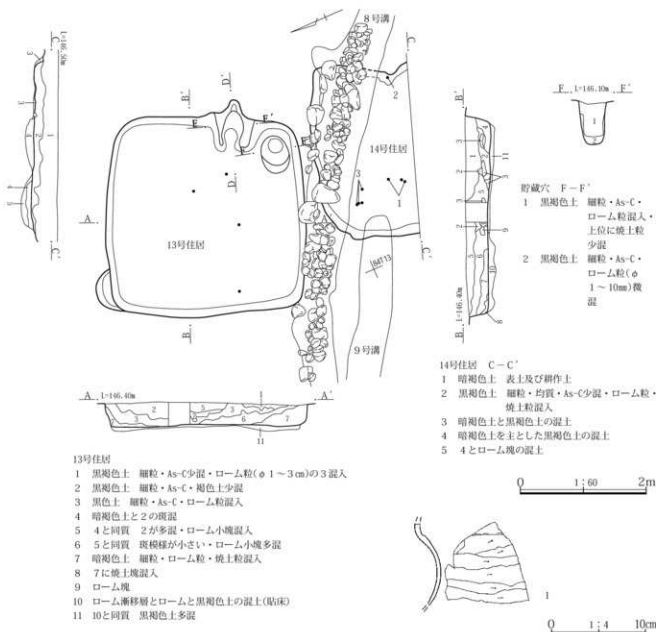
周溝・柱穴 掘り方でも検出されていない。

貯蔵穴 南東隅、円筒形で長軸・短軸・深さは60・44・70cmである。西側にだけロームを掘り残してできた高まりがある。幅が約15cm、高さ約3cmである。

埋没土 黒色土や黒褐色土にロームが混在している。人為埋没か。

遺物出土状況 全体では5片、土師器環・壺、コの字口縁釜がある。

時期 平安時代、出土したコの字壺の特徴から9世紀代とみられる。



第84図 13・14号住居遺構図(1)、13号住居遺物図

14号住居(第84・85図 P.L.13・44)

位置 84 S 12 形状 推定方形、南辺は調査区外

規模 長軸2.62m、短軸1.62m以上、残存壁高0.20m

面積 4.24㎡以上 方位 N107° E

重複 8号・9号溝に切られている。

床面 暗褐色土を主とした黒褐色土との混土による貼床、平坦で堅緻。掘り方の中央には円形の床下土坑があり、そのために壁沿いが沈下している。土坑の長軸・短軸・深さは80・74以上・14cm、人為埋没である。

カマド 東辺の中央に位置、底面の近くまで削平。左右

の袖の基部が残存。全長65cm、焚口幅25cm、壁は一部が強く焼けている。

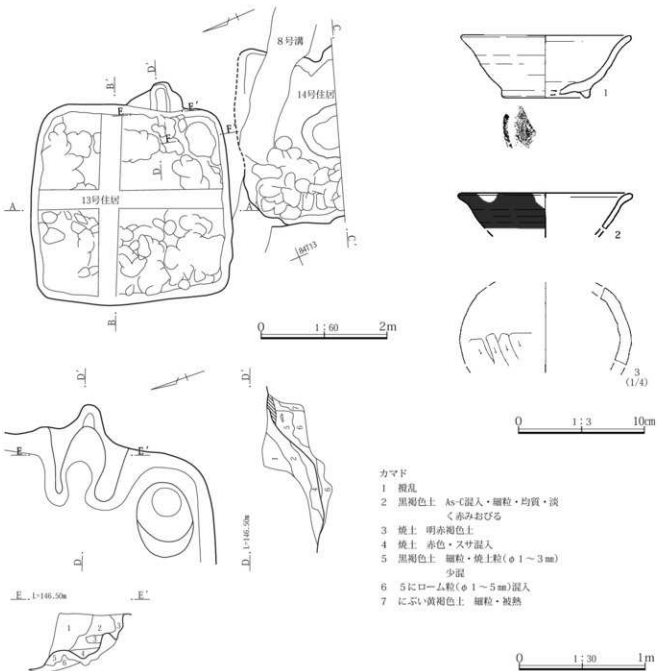
周溝・柱穴 掘り方でも検出されていない。

貯蔵穴 検出されていない。調査区外に推定。

埋没土 床面まで黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では9片、西辺寄りで須恵器碗、カマド左袖で須恵器碗が出土。ほかに土師器甕、灰軸陶器がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



第85図 13・14号住居遺構図(2)、14号住居遺物図

15号住居(第86・87図 P.L.14・44)

位置 85BC14・15 形状 方形、南東隅が調査区外で攪乱も受ける。

規模 長軸3.86m、短軸2.94m、残存壁高0.48m

面積 11.35㎡ 方位 N117° E

重複 北辺に9号溝、本跡が古い。

床面 ロームを主とした黒褐色土との混土による貼床、壁際まで平坦で堅緻である。

カマド 東辺の南寄りに位置、壁がカマドを境にずらしてできた角地に作られている。全長は65cmと短い。右壁は土手に掘り残したロームを粘土で被覆。床は焼け、大量の焼土が残されている。

周溝 北辺と東辺の掘り方で検出。幅10～20cm、深さ

5cm前後である。

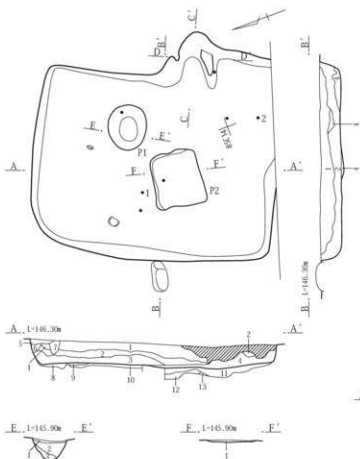
貯蔵穴 掘り方の南東寄りで土坑を検出。浅くて隅から1m近くも離れていて確定はできない。

柱穴 検出されていない。P1は長軸・短軸・深さが72・60・36cmの円形、上面に焼土の多い堅緻な層がある。

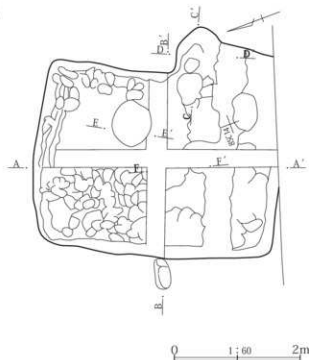
P2は88・78・5cmの方形、焼土が多いローム混土を貼付。埋没土 暗褐色土、黒褐色土で全体が埋没。

遺物出土状況 全体では34片、土師器環・埴、甕、灰軸陶器、須恵器環・埴、羽釜がある。1の須恵器埴は体部外面に字体の一部だけで判読不可の墨書がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

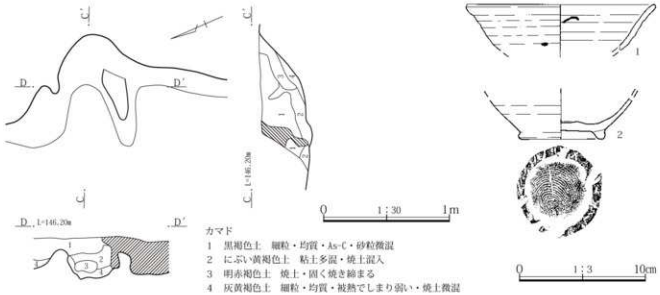


- 1 暗褐色土 細粒・密・As-C混入
- 2 黒褐色土 細粒・密
- 3 黒褐色土 細粒・密・As-C 1より少混
- 4 2のローム粒集中 ローム(φ1～10mm)少混
- 5 暗褐色土 にぶい黄褐色土(φ2～3cm)混混(9溝フク上)
- 6 黒褐色土
- 7 黒褐色土 攪乱か・9溝に伴うものか
- 8 暗褐色土とロームの混土
- 9 ローム塊
- 10 ローム塊を主とした黒褐色土の混土
- 11 黒褐色土 ローム少混
- 12 黒褐色土とローム塊(φ1～3cm)の混土
- 13 にぶい黄褐色土塊



- P1 E-E'
- 1 黒褐色土 ローム粒混入・貼床材
 - 2 黒褐色土 細粒・密・ローム粒(φ1～3mm)少混
 - 3 黒褐色土 2と同質・大粒のローム混入
- P2 F-F'
- 1 黒褐色土 中間に焼土(φ1～5mm)・ローム粒多混・上面大粒の焼土多混

第86図 15号住居遺構図(1)



第87図 15号住居遺構図(2)・遺物図

16号住居(第88～91図 P.L.14・44・45)

位置 85C D15 **形状** 方形。北東部が長さ1.85m、幅1.45mで張り出す。床面同士の段差はなく、埋没土の違ひも少ない。別の遺構である可能性が高い。

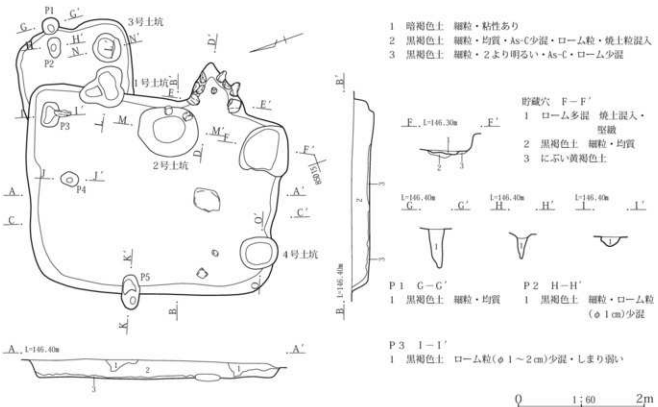
規模 長軸4.05m、短軸3.15m、残存壁高0.33m

面積 12.76㎡ **方位** N114° E

重複 9号溝に切られる。

床面 ロームまで掘り込み、灰黄褐色土を薄く貼床。壁際まで堅緻。土坑は4基検出。長軸・短軸・深さは1号が69・65・27cm、2号が95・80・31cm、3号が45・45・33cm、4号が60・50・22cmである。

カマド 東辺の南東部隅寄りに位置、石組みの2穴並置



第88図 16号住居遺構図(1)

式、左から羽釜、右から小型甕が出土している。焚口に人頭大の石、内部に支脚が残されている。

周溝 北辺の掘り方で検出。幅7～10cm、深さ5cm前後である。南辺のものは25～30cmと幅が広い。掘りすぎたのか、別の遺構なのかは不明である。

貯蔵穴 南東隅、方形、長軸・短軸・深さは78・78・4cm。焼土が混入するロームを貼付。作りは15号住居の床面中央にあるものと類似する。台座とみるべきか。

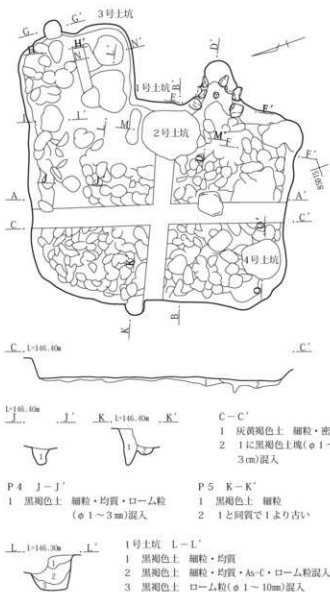
柱穴 5本を検出したが中軸線上にあるP4に可能性がある。延長線上には床にすえられた礎石のような石もある。P5は上屋を支える補助柱穴か。長軸・短軸・深さはP4が27・21・28cmである。P5が55・29・81cmである。

埋没土 黒褐色土は特徴が似ていて分けることがむずかしい。人為埋没か。

しい。人為埋没か。

遺物出土状況 全体では242片、土師器杯・埴、甕、灰軸陶器、須恵器杯・埴、蓋、甕、瓶、羽釜を取り上げる。カマドの手にすえられた石は、長軸・短軸・厚さが42・35・10cm。偏平で工作用の台石とみられる。1号土坑から緑軸陶器皿小片が出土。2号土坑は、規模が95・80・31cm、覆土の中位で破片の土器と石、カマドからかき出した焼土が出土。南東隅の壁の外側は棚として利用されていたのか羽釜が出土。破損している刀子1、折り曲げられた鉄鎌か槍鉋の一部が1点出土している。

時期 平安時代、カマドから出土した土器の特徴から10世紀後半～11世紀前半とみられる。



M, L-146.30m M' N, L-146.30m, N'



2号土坑 M-M'

- 1 黒褐色土 細粒・密・焼土粒(φ1mm)少混
- 2 黒褐色土 細粒・ローム粒(φ1～2cm)微混

3号土坑 N-N'

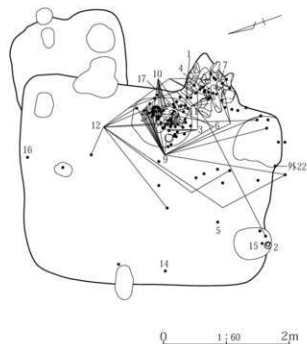
- 1 黒褐色土 細粒・下位にローム粒多混

O, L-146.30m O'

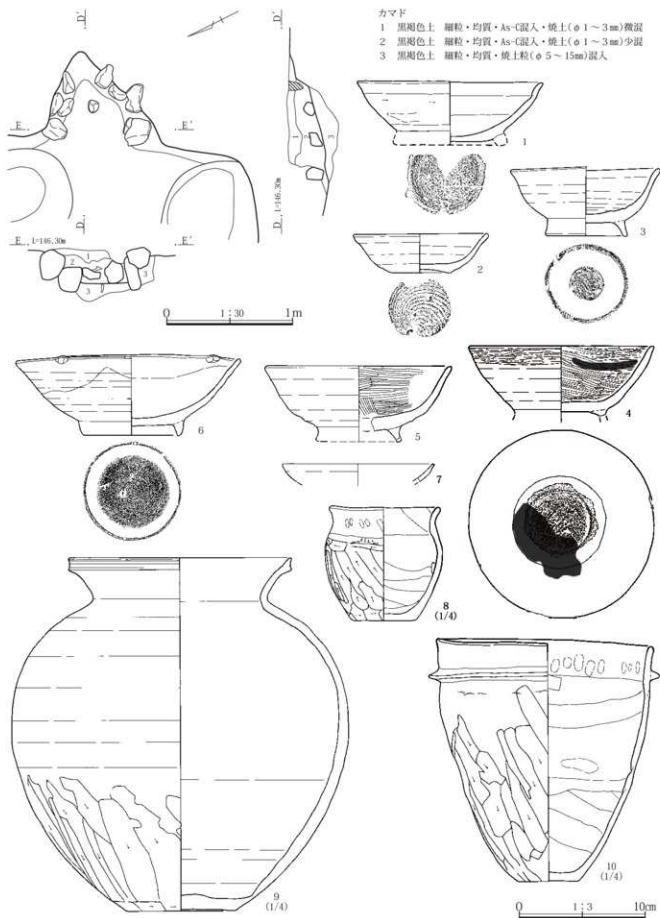


4号土坑 O-O'

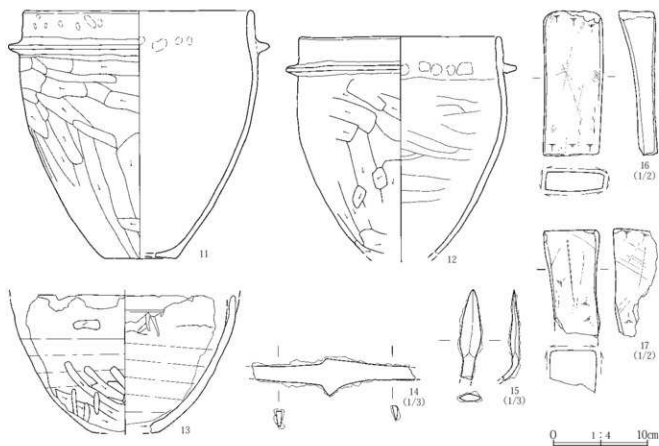
- 1 黒褐色土 ローム粒微混
- 2 ローム粒～埴多混 黒褐色土混入
- 3 ローム多混 黒褐色土少混
- 4 地山 暗褐色土多混・ローム粒少混



第89図 16号住居遺構図(2)



第90図 16号住居遺構図(3)・遺物図(1)



第91図 16号住居遺物図(2)

17号住居(第92・93図 P.L.14・45)

位置 84LM13 **形状** 方形、攪乱を受けているため、残されていた壁をつないで復元したプランである。

規模 長軸3.43m、短軸3.10m、残存壁高0.36m

面積 10.63㎡ **方位** N82° E **重複** 単独

床面 掘り込んだローム面に薄く貼床。平坦で堅緻。

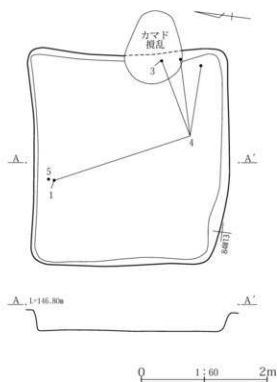
カマド 東辺の中央南寄りに位置、燃焼部の右壁だけ攪乱をまぬがけ、ほかは散在している。全長は煙道の焼け方から約1m、焚口には鳥居状に石が組まれ、甕が架けられていたとみられる。

周溝・貯蔵穴・柱穴 検出されていない。

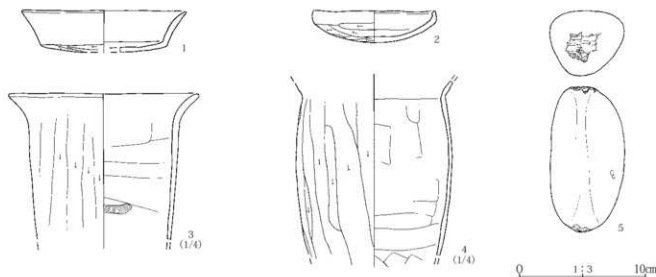
埋没土 暗褐色土が大半を占めていたが攪乱を受けて特定できていない。

遺物出土状況 全体では30片、カマド前の床面で長胴甕、北辺でもこも編み石、土器器坪が出土。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から7世紀後半とみられる。



第92図 17号住居遺構図



第93図 17号住居遺物図

18号住居(第94・95図 P L.15・45)

位置 84K10・11 **形状** 推定方形、東半分が市道に改修される前の道により削平。

規模 長軸2.82m、短軸2.60m以上、残存壁高0.55m

面積 7.33㎡以上 **方位** N26° E

重複 道より古い。

床面 掘り込んだロームに薄い貼床、堅緻。掘り方は、鋤跡が点在する。

カマド 検出した範囲にはないので、東辺に推定する。

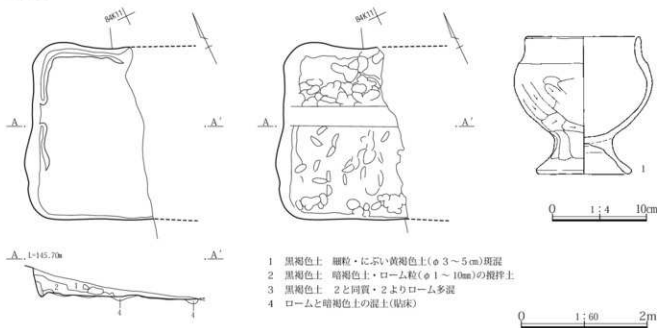
周溝 西辺の半分と北辺で検出。幅15cm、深さ6cm前後である。

貯蔵穴 検出した西側にはない。カマド周辺にあるとみられる。**柱穴** 検出されていない。

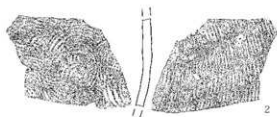
埋没土 暗褐色土が西側から流入。住居中央、2層との境にカマドの石が廃棄されている。

遺物出土状況 全体では13片、廃棄された石に土器が混在。土器も中央部の床面から上10cm付近で出土。接合例は少ない。土師器杯・埴、小型付台須、須恵器瓶、甕、羽釜がある。

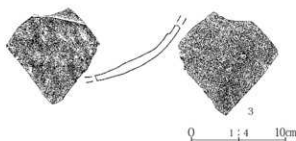
時期 古墳時代、土器の特徴は7世紀代であるが、住居はそれよりもさかのぼるものとみられる。



第94図 18号住居遺構図・遺物図(1)



第95図 18号住居遺物図(2)



19号住居(第96図)

位置 84 I 13、西側半分は市道に改修される前の道で削平。

形状 推定方形、北西隅を掘り方で検出。

規模 長軸1.25m以上、短軸2.25m、残存壁高0.07m

面積 2.81㎡以上 **方位** N100° E

重複 道より古い。

床面 掘り方が露呈した状況である。

カマド 東辺の南寄りに位置、底面まで削平。焼土やロー

ム塊が残る。焼土の量は多くて強く焼けている。

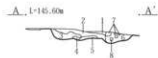
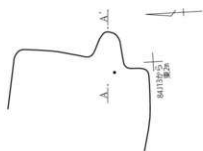
周溝・貯蔵穴 削平されていて不明。

柱穴 検出されていない。

埋没土 ローム混じりの黒褐色土が残されていた。

遺物出土状況 カマド内で土師器甕、須恵器環あわせて2片が出土。掲載した遺物はない。

時期 平安時代、カマド内から出土した土器から10世紀代とみられる。



カマド

- 1 黒褐色土 表土
- 2 焼土 ローム多混・黒褐色土混入
- 3 黒褐色土 砂質・焼土微混
- 4 ローム 黒褐色土多混・焼土微混
- 5 焼土とロームの混土・黒褐色土少混
- 6 黒褐色土 ローム・焼土微混
- 7 焼土
- 8 ローム塊

第96図 19号住居遺構図

20号住居(第97図)

位置 84 I 17 **形状** 推定方形、北側は調査区外

規模 長軸3.15m、短軸1.93m以上、残存壁高0.39m

面積 6.08㎡以上 **方位** N133° E **重複** 単独

床面 4層と同質の混土による貼床。中央にドーナツ状の硬化面があり、このレベルに合わせて床とした。掘り方は、壁沿いが溝状となり島状に残る中央部に円形の土坑があく。長軸・短軸・深さが110・35+・21cmである。
カマド 検出した範囲にはない。

周溝 掘り方の南辺、壁沿いで二重にめぐる溝を検出。

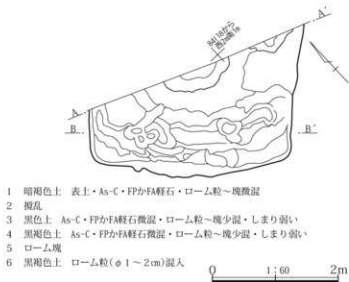
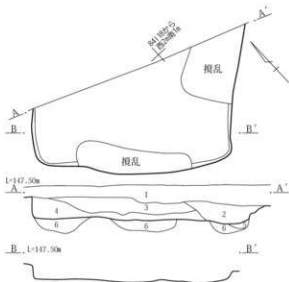
25cm前後と幅が広く、深さが5~10cm前後と一定していない。壁から15cm前後離れていて、柱穴状に深くなる箇所もある。**貯蔵穴** 検出されていない。

柱穴 検出されていない。掘り方で検出された溝の中には、柱穴のように窪んだ箇所が対にある。

埋没土 ロームと黒褐色土などの斑状の混土。

遺物出土状況 全体では22片と僅少。土師器環・壺、甕、高環の小片で、掲載した遺物はない。

時期 古墳時代、主軸方位は52・53・54・55号住居に類似。類例からすると北カマドではないか。



第97図 20号住居遺構図

21号住居(第98図 P L.45)

位置 84L18 **形状** 推定方形、南西隅を検出。北側は調査区外。南辺の東端が弧状になることから小型の住居と推定した。埋没土の様子からすると、直線となり広がることも考えられる。

規模 長軸1.42m以上、短軸0.90m以上、残存壁高0.45m **面積** 1.28㎡以上 **方位** 部分的な検出のために計

測不可。重複 なし

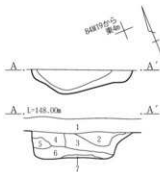
床面 掘り込んだロームを直接床面にしている。

カマド・周溝・貯蔵穴・柱穴 検出されていない。

埋没土 ロームと黒褐色土の混土で攪拌されたような状況。人為的な埋没か。

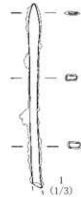
遺物出土状況 全体では僅少、小破片、鉄銹1点

時期 特定できる資料がない。



- 1 暗褐色土 表土・As-C・FPかFA軽石・ローム粒～塊微混
- 2 損乱 4に類似・1混入
- 3 損乱 1に類似・4混入
- 4 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・焼上粒(φ1～5mm)微混・ローム粒(φ1～3mm)少混
- 5 黒褐色土 4と同質・暗色みおひる・しまり強い
- 6 黒褐色土 4と同質・ローム粒(φ1～10mm)混入・しまり弱い
- 7 ローム多混 6の混土・堅緻・床面か

0 1:60 2m



第98図 21号住居遺構図・遺物図

22号住居(第99～101図 P L.15・45・46)

位置 84O P18・19 **形状** 方形

規模 長軸4.30m、短軸3.44m、残存壁高0.77m

面積 14.79㎡ **方位** N105° E **重複** なし

床面 ロームを主とした黒褐色土との混土で貼床。平坦で堅緻。掘り方は、深さ10cm前後の鋤跡が一面に連続している。壁に沿って外側から内側へ作業している。

カマド 東辺の中央寄りに位置。焚口には鳥居状に石が組まれ、住居跡の壁を奥壁にして燃焼部が作られている。

土台は土手に掘り残したロームで、高さ10cm前後である。壁外に出ているのは煙道だけで、約70度の角度で壁に掘り込まれている。

周溝 東辺の中央から南辺の中央までの間がない。ほかでは一定した状態めぐる。幅10～20cm、深さ4～9cmである。

貯蔵穴 南東隅、円筒形、長軸・短軸・深さは55・54・82cmである。周囲に土手、蓋用の段差はない。南東隅からは45cm離れていて、深い。

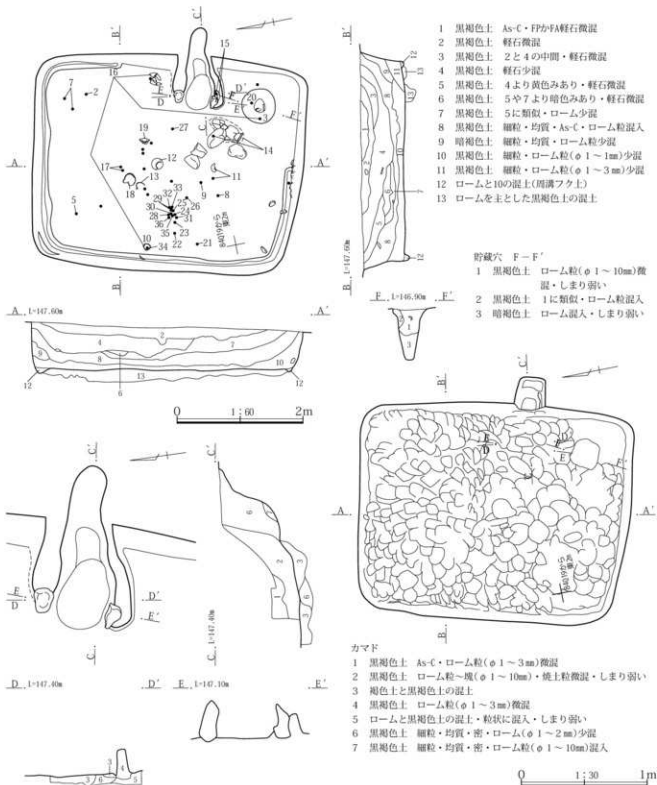
柱穴 掘り方でも検出されていない。

埋没土 黒褐色土がレンズ状に自然堆積。壁際にロームが多い。

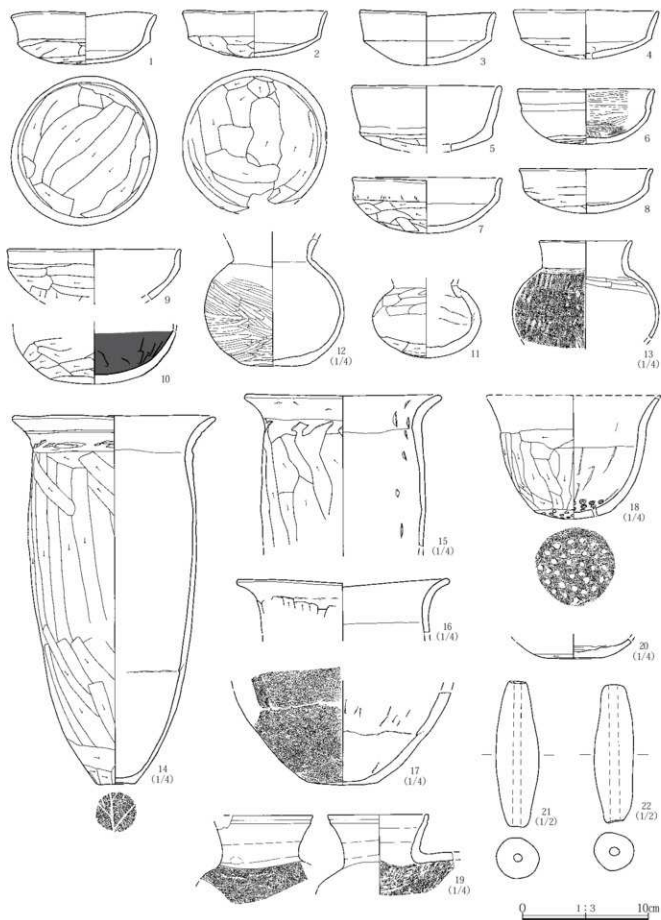
遺物出土状況 全体では138片、大型の破片が目立つ。土師器杯・埴、甕、須恵器杯・埴、皿、蓋、甕がある。

埋没が進んだ段階で廃棄され、出土位置は高い。床面では土鍾が西壁寄りに16点がまとまっている。14の長胴甕は石と重なりカマドから崩落したものである。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から7世紀前半とみられる。

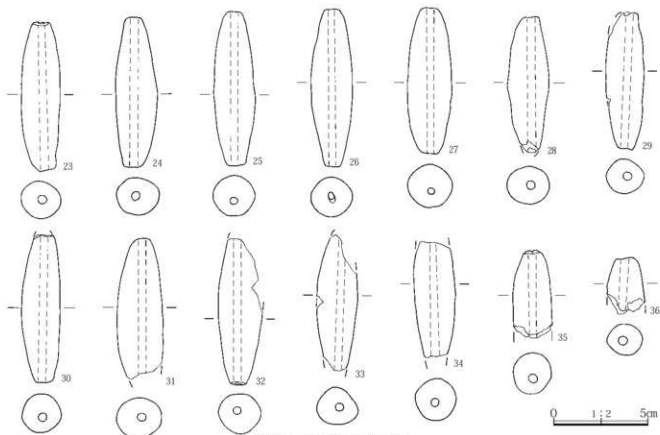


第99図 22号住居遺構図



第100図 22号住居遺物図(1)

第5章 胴城遺跡の調査



第101図 22号住居遺物図(2)

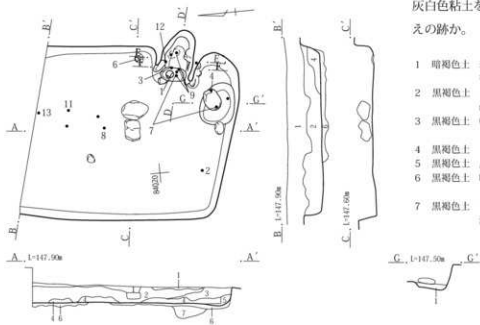
23号住居(第102～104図 P.L.15・46)

位置 84P Q19・20 形状 推定方形、北側は調査区外
 規模 長軸3.16m以上、短軸2.76m、残存壁高0.28m
 面積 8.72㎡以上 方位 N98° E 重複 なし
 床面 黒褐色土とローム漸移層との混土による貼床。掘

り方は跡跡が連続、南の壁際だけが10～12cm深い。7層はカマド用に掘り込んだ跡ではないか。

カマド 東辺の中央南寄りに位置、南辺から北へ80cmの位置に中心がある。全長80cm、焚口は石が鳥居状に組まれ、燃焼部にかけても左右で10石あまりを使う。袖には

灰白色粘土を使用。右袖は石が二重で作り替えの跡か。



第102図 23号住居遺物図(1)

- 1 暗褐色土 表土・As-C・FPかFA軽石・ローム粒～塊微混
- 2 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・ローム粒(φ1～10mm)微混
- 3 黒褐色土 軽石・ローム粒2に類似・ローム混入・2より黄色みあり
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土 黒褐色土・ロームの混土
- 6 黒褐色土 暗褐色土粒～塊(φ5～30mm)微混・しまり弱い
- 7 黒褐色土 ローム塊(φ1～5cm)混入・下位に黒灰混入

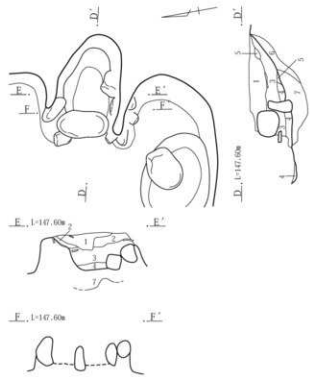
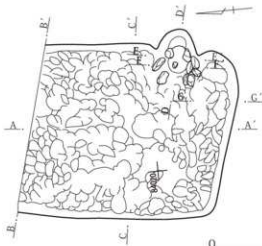
貯蔵穴 G-G'

- 1 黒色土 緻密・ローム少混・炭化物粒微混・しまり強い

支脚は中央に直立。焼土は少ない。使用面は、掘り方でさらに2面がある。住居の南東隅は焼土粒が多く、かき出した灰の置き場だったのではないかと推測される。周溝・柱穴掘り方でも検出されていない。貯蔵穴 南東隅、円形、長軸・短軸・深さは66・59・13cm。東壁から25cm離れていて、上面で石が出土。埋没土 黒褐色土で埋没。

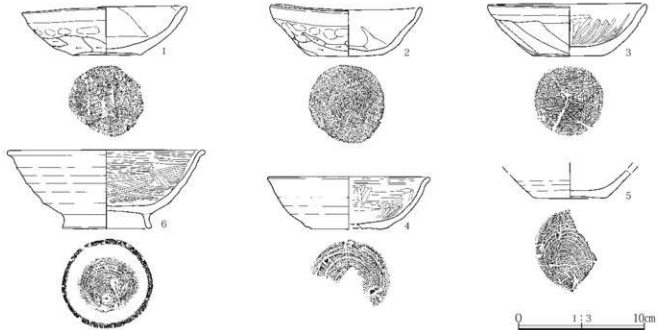
遺物出土状況 全体では127片、カマド内とその周囲は崩落した状況。土釜、台付鉢、坏、埴は、大型の破片が多く接合例も多い。床面中央の石2点は位置が高い。器種としては土師器坏・埴、甕、甕、灰釉陶器、須恵器坏・埴、瓶がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀末～10世紀前半とみられる。

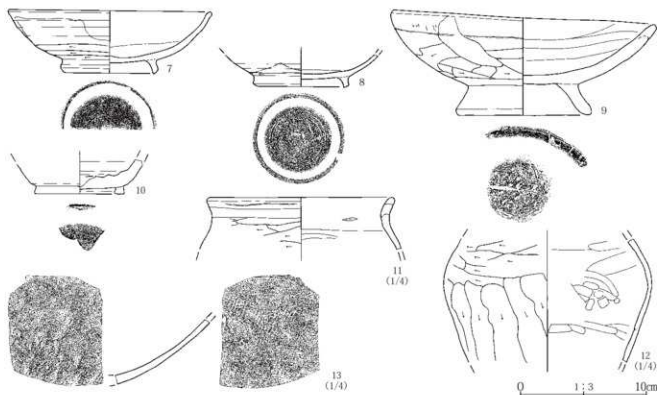


カマド

- 1 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石混入・堅緻
- 2 黒褐色土 1より黄色みあり・軽石1と同質・ローム粒(φ1~10mm)微混
- 3 黒褐色土 焼土粒(φ1~4mm)微混
- 4 黒褐色土 ローム混入・しまり弱い
- 5 焼土多混 黒褐色土混入
- 6 黒褐色土 緻密・As-C微混
- 7 黒褐色土 緻密・ローム粒~塊(φ2~10mm)・焼土粒微混



第103図 23号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第104図 23号住居遺物図(2)

24号住居(第105～107図 P L.16・46・47)

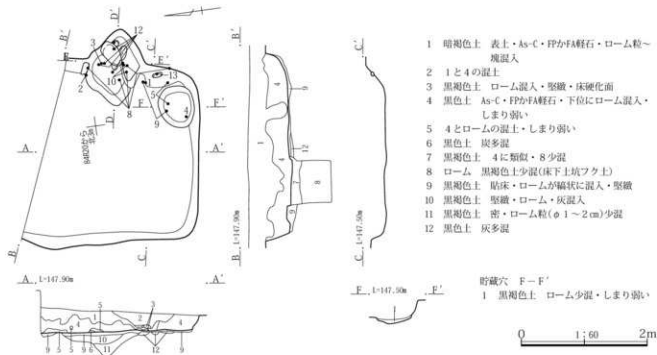
位置 84QR20 形状 推定方形、北側調査区外

規模 長軸2.64m以上、短軸2.75m、残存壁高0.38m

面積 7.26㎡以上 方位 N100° E 重複 なし

床面 ロームが混入する黒褐色土による貼床。平坦で堅

緻。掘り方は、鋤跡が点在、カマドの前で1号土坑、調査区の壁にかかり北側隅寄りで2号を検出。長軸・短軸・深さは、1号が67・45・21cm、2号が67・45+・70cmである。1号は新旧2基が重複する灰掻き穴、上面に焼土、灰がある。2号土坑は、断面が箱形の床下土坑である。



第105図 24号住居遺構図(1)

カマドの作り替えに対応する、複数の床面はない。

カマド 東辺の中央に位置、作り替えがされている。新カマドは、半円状に掘り込んだ地山に石を芯に3・4層の粘土を貼付して作られている。煙道と燃焼部の境には平らな石が置かれ、それが天井とともに崩落。下位に焼土と支脚が残されている。古いカマドは、中心を南へ約30cmずらせ煙道だけが残る。B断面の二重の石は、外側が古いカマドのものではないか。

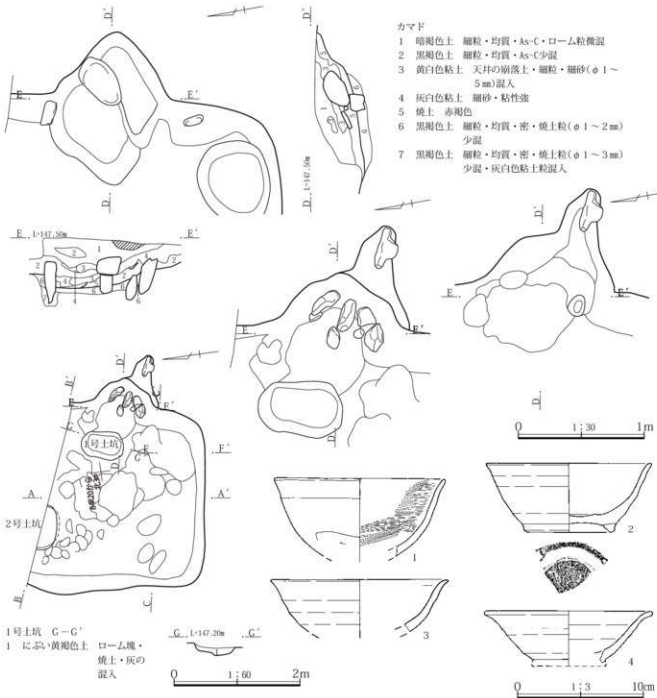
周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは67・55・11cmである。浅い掘り込みである。

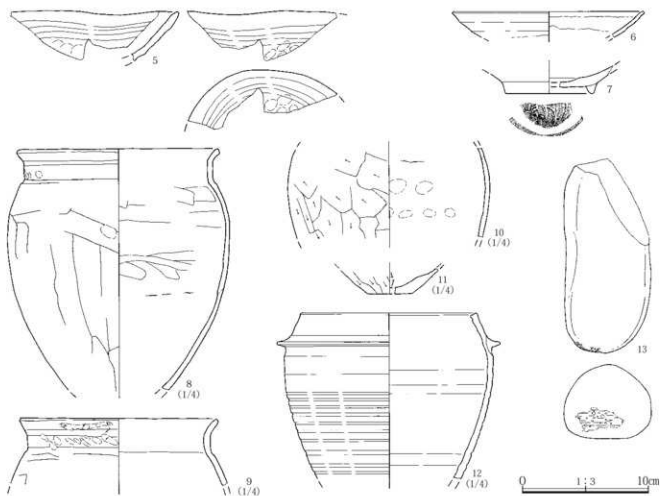
埋没土 黒色土で埋没、床面でローム混入。

遺物出土状況 全体では121片、カマド内から貯蔵穴に分布。コの字裏と羽釜の各個体がカマドの周囲で接合、羽釜の破片はカマド掘り方での出土。土師器環・埴、灰釉陶器、須恵器環・埴、瓶がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第106図 24号住居遺構図(2)・遺物図(1)



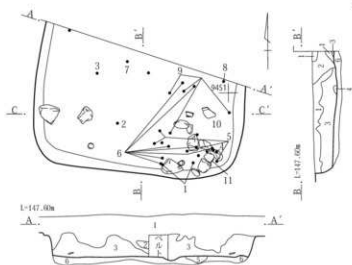
第107図 24号住居遺物図(2)

25号住居(第108～110図 P.L.16・47)

位置 84・94R S20・1 **形状** 推定方形、北側は調査区外 **規模** 長軸2.10m以上、短軸3.35m、残存壁高0.34m **面積** 7.04㎡以上 **方位** N98°E **重複** ない。

床面 ロームを混入する黒褐色土による貼床。掘り方は、特に深い箇所もない。直径70～80cmの円形をした、ローム漸移層までの浅い掘り込みがある。

カマド 検出部分にはない。南東隅からはカマドのものらしい石が出土。**周溝・柱穴** 検出されていない。



- 1 暗褐色土 表土・As-C・FPカマド軽石・ローム粒～塊微混
- 2 擾乱 攪拌された土・3と同質・ローム混入
- 3 黒褐色土 As-C・FPカマド軽石・焼土粒・ローム粒(φ2～5mm)少混
- 4 暗褐色土 床硬化面・堅緻
- 5 黒褐色土多混 6の黒褐色土混入・As-C・ローム粒(φ2～5mm)微混
- 6 黒褐色土 ローム粒～塊(φ5～10mm)微混

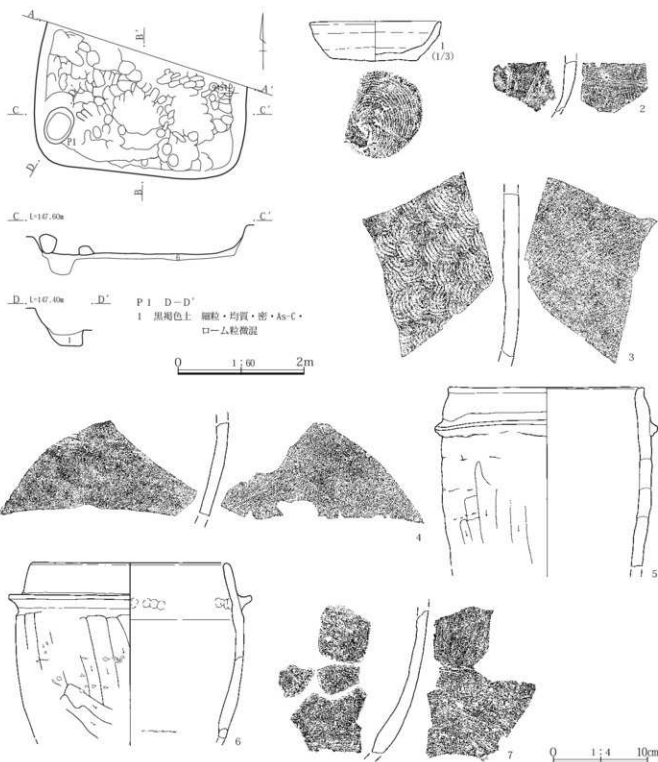
第108図 25号住居遺構図(1)

貯蔵穴 南西隅、長軸・短軸・深さは67・55・11cmである。底面に厚さ2～3mmの黒い灰層がある。壁に貼ってあったものが炭化したか、貯蔵していたものが固まったのではないかとみたい。**埋没土** 黒褐色土で埋没。

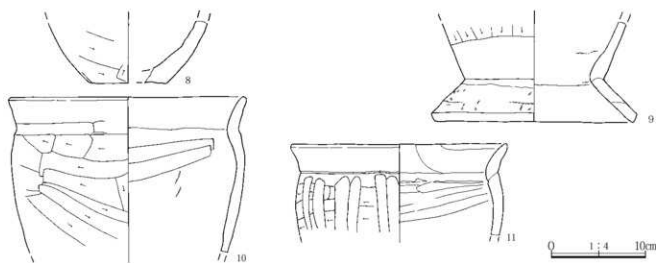
遺物出土状況 全体では158片。土器と石が混在し、レベルは高い。土師器環・埴、灰軸陶器、須恵器環・

埴、皿、甕、瓶、羽釜、土釜があり、南東隅から中央部まで接合するものが多い。甕は大型個体の胴部破片。石は南西隅の2点が床直、ほかはカマドを壊したので散乱したのか、または外から投棄したもの。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第109図 25号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第110図 25号住居遺物図(2)

26号住居(第111～114図 P.L.16・47・48)

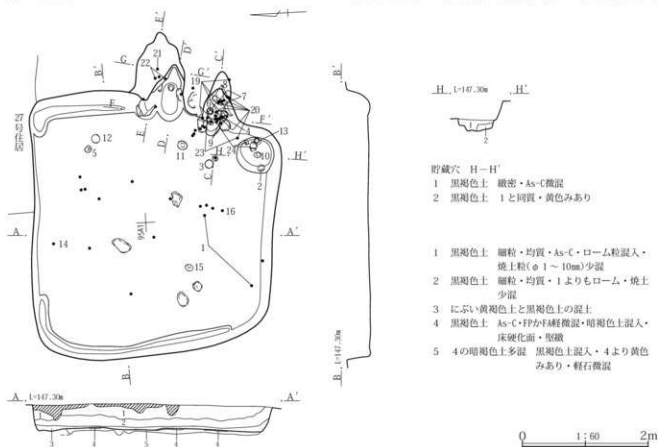
位置 84・85・94・95 T A20・1 **形状** 方形、建替えによる新旧2軒、カマドはA～Cの3基。古いプランにカマドB・C、新しいプランにカマドAの組み合わせ。違うのはカマドがある東辺だけで、ほか3辺は変化していない。北東隅で周溝の切れているのが、新旧プランの違いである。

規模 長軸4.28m、短軸3.95m、残存壁高0.38m

面積 16.91㎡ **方位** N95° E

重複 北東にある27号住居よりも新しい。

床面 3層が貼床。壁際までが硬化。4層は床の一部で、5層は古い住居の埋没土であるのか北壁の手前で立ち上がる。掘り方は、一面に跡跡が連続する中に2基の床下土坑がある。1号は浅くて用途不明、2号が灰掻き穴、



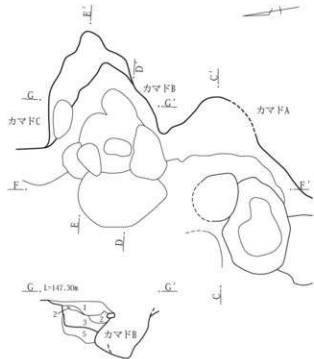
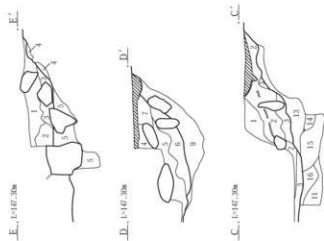
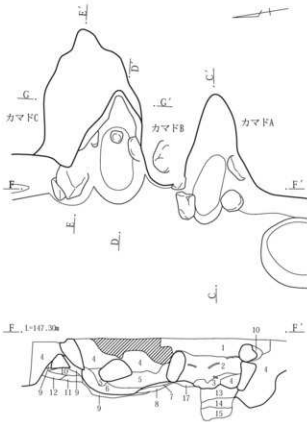
第111図 26号住居遺物図(1)

3号は住居よりも新しい。長軸・短軸・深さは1号が98・95・15cm、2号が103・96・48cm、3号が89・86・17cmである。

カマド 東辺の中央に位置、古い方からC、B、Aの順。壁外に大きく掘り込み、焚口の石組みをはじめ石を芯に6層を貼付して作られている。AとBには支脚が残され

ている。Aの焚口と天井は崩落した状態で、20の羽釜が架けられていた。**周溝** 西辺と東辺で部分的に検出。幅10～25cm、深さ2～4cmである。**貯蔵穴** 南東隅、新旧2基がある。長軸・短軸・深さは60・57・20cm、古いものは掘り方で検出。規模は76・53・27cmである。

柱穴 検出されていない。**埋没土** 黒褐色土で埋没。



カマドA・B

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C少混・ローム粒混入
- 2 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1～3mm)・ローム粒少混
- 3 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1～2mm)少混・炭粒混入
- 4 黒褐色土 細粒・As-C微混・焼土・ローム粒混入
- 5 黒褐色土 4と同質・As-C・大粒の焼土少混
- 6 ローム多混 暗褐色土混入(左袖)
- 7 褐色土 細粒・均質・密・As-C・ローム塊混入
- 8 黒灰色土
- 9 黒褐色土
- 10 ローム塊
- 11 ロームと暗灰褐色土の混土
- 12 黒褐色土 細粒・均質・密・ローム粒少混
- 13 黒褐色土 細粒・均質・密
- 14 褐色土 粘土混入
- 15 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土・粘土・炭化物(1～2cm)混入
- 16 黒褐色土 ローム・焼土・黒灰混入
- 17 灰黄褐色土

カマドC E-E'・G-G'

- 1 明黄褐色土 細粒・2・3に塊混入
- 2 黒褐色土 細粒・均質・As-C・ローム粒・焼土粒少混
- 3 明赤褐色土 焼土・粒状(φ1cm)・赤化したものと混土
- 4 ローム塊 焼熟して赤変
- 5 にぶい黄褐色土 細粒・焼熟して赤片・上位に焼土粒多混

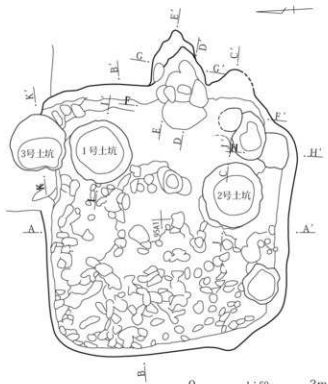


第112図 26号住居遺構図(2)

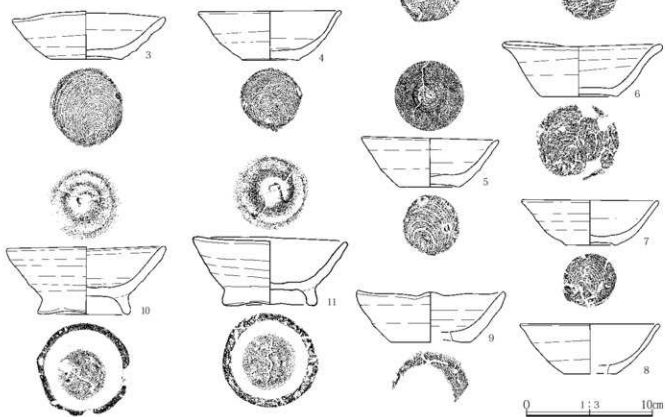
遺物出土状況 全体では444片。中央部から偏平な石、土器は床面よりも10cm高い。カマドからは羽釜、環・埴が出土。ほかに土師器環・埴、甕、台付甕、灰釉陶器、

須恵器環・埴、皿、蓋、瓶、羽釜がある。1の須恵器環には「万」墨書がある。

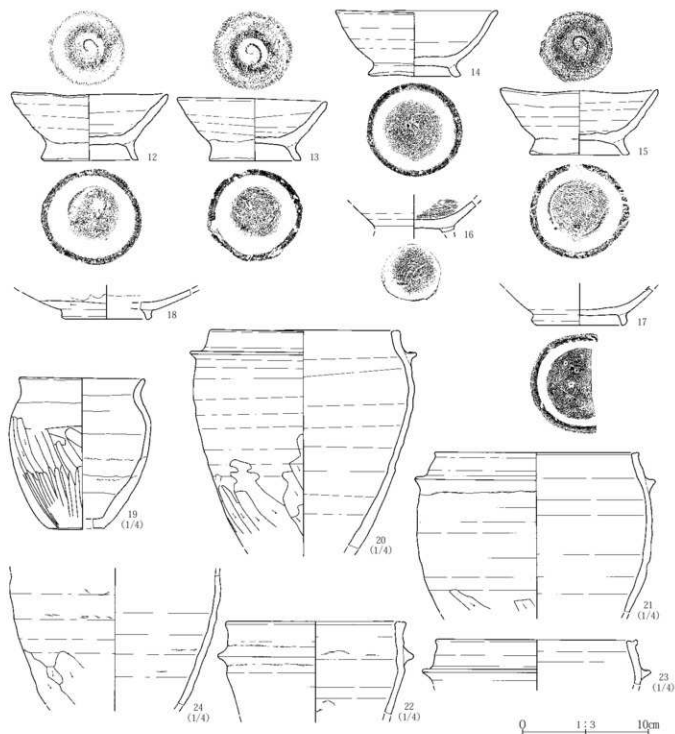
時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀末～10世紀前半とみられる。



- 1号土坑 I-I'
 1 黒褐色土 ローム粒(φ1~2cm) 少混
 2号土坑 J-J'
 1 黒褐色土
 2 1にローム・焼土・黒灰多混・水平方向の縞状・均質
 3 黒色土 細粒・均質・密・ローム塊(φ3~5cm)混入
 3号土坑 K-K'
 1 黒褐色土 細粒・均質・密・ローム漸移層(φ1cm)少混・焼土粒(φ1mm)混入



第113図 26号住居遺構図(3)・遺物図(1)



第114図 26号住居遺物図(2)

27号住居(第115・116図 P.L.17・48)

位置 94 T 1 形状 推定方形、北側は調査区外。

規模 長軸2.92m、短軸1.32m以上、残存壁高0.20m

面積 3.85㎡以上 方位 N93° E

重複 西にある28号住居より新しく、南西にある26号住居より古い。

床面 掘り込みはローム漸移層まで、暗褐色土などによ

る平坦な貼床。掘り方は浅く、中央に硬化面がある。約1m四方の範囲で、26号住居北東隅、同3号土坑に西側を切られている。隣接の3軒とは主軸方位がずれている。別の住居の可能性もあるが、規模はひとまわり小さい。

カマド 南東隅に貼付された黒褐色土が焼けている。隅を利用したカマドの可能性もあるが、焼けている以外に手掛かりはなく断定できない。

周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 直径26cmの円形、南東隅からは離れていて、浅い。1の環が出土。穴の脇には扁平な石が置かれ、西側の縁だけ薄くロームが貼られている。

埋没土 黒褐色土で埋没。28号住居との区別はできない。

遺物出土状況 全体では57片、土師器環・埴、甕、灰釉陶器、須恵器環・埴がある。26号住居との接合例があり混在していることが分かる。2の須恵器環は、内外面に稚拙な書体で大きな「万」の墨書がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

28号住居(第115・116図 P.L.17・48)

位置 94・95 T A 1 形状 推定方形、北側調査区外、

調査区の壁から1mを調査。

規模 長軸2.73m以上、短軸0.92m以上、残存壁高0.23m

面積 2.51㎡以上 方位 N100° E

重複 東にある27号住居より古い。

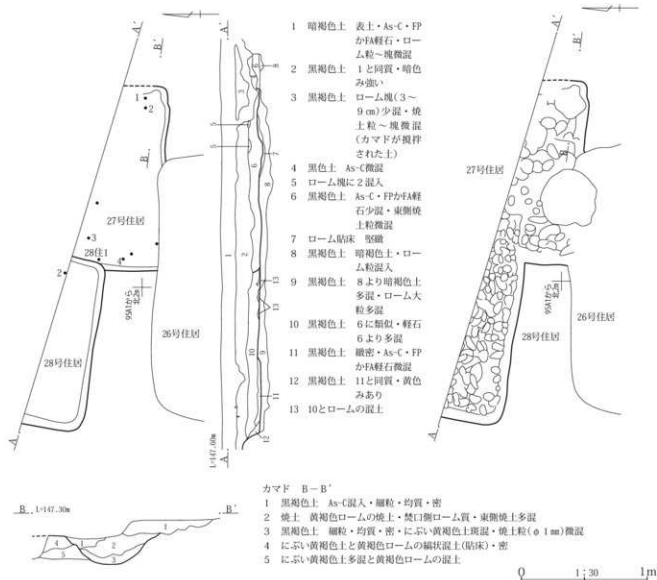
床面 ローム漸移層まで掘り込み、暗褐色土などで貼床、平坦。掘り方は浅く、27号住居よりも跡痕が多くて一面にある。土坑のような深い箇所はない。

カマド・周溝・貯蔵穴 検出した範囲にはない。

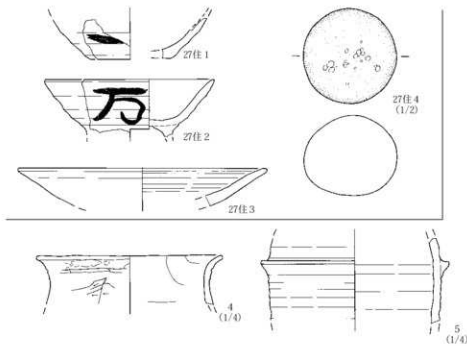
埋没土 黒褐色土で埋没。27号住居との差は少ない。

遺物出土状況 全体では45片、土師器環・埴、甕、須恵器環・埴がある。3の須恵器環は内外面に墨書がある。

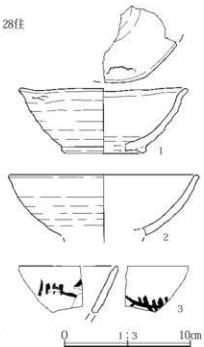
時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



第115図 27・28号住居遺構図



28住



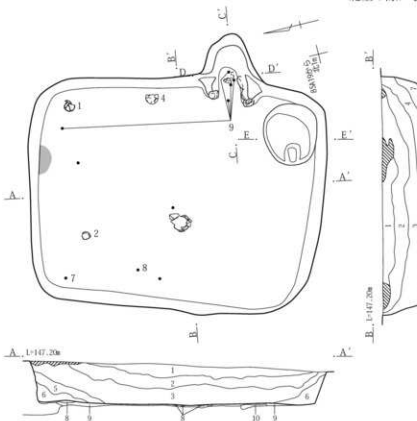
第116図 27・28号住居遺物図

29号住居(第117～119図 P.L.17・48)

位置 84・85 T A 19・20 形状 方形

規模 長軸4.75m、短軸3.65m、残存壁高0.68m

面積 17.34㎡ 方位 N107° E 重複 北壁にかかり縄文時代の54号土坑がある。床面 掘り込みはローム漸移層までと浅く、黒褐色土や褐色土などの混土で貼床。北壁の際に手の平大の焼土塊。塊は壁際に密着して、



- 1 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒混入
- 2 暗褐色土 As-C・ローム粒(φ1mm)少混
- 3 黒褐色土 As-C・焼土粒・ローム粒を全体に混入・下位にローム(3～5cm)少混
- 4 黒褐色土 ローム粒・粘土塊混入
- 5 黒褐色土 ローム粒少混・均質・密
- 6 黒褐色土 細粒・均質・黒色土灰混
- 7 黒褐色土 細粒・均質
- 8 黒褐色土 細粒・ローム粒少混
- 9 ロームと黒褐色土の混土(貼床)・堅緻
- 10 ローム塊とぶい・黄褐色土の混土

貯蔵穴 E-E'

- 1 黒褐色土 ローム粒・塊(φ0.1～1cm)下位に微混
- 2 黒褐色土 1にローム塊(φ1～5cm)混入

第117図 29号住居遺構図(1)

東壁にも拳程度の塊が点々とある。被熱で赤くなったもので、炭化物はない。成因は不明である。

カマド 東壁の中央に位置、壁外に箱型の掘り方を持つ。大きさと支脚が偏ることから並置2穴式とみられる。7層は厚く敷き込まれた地葉で、この上に支脚が立てられている。3層は、崩落した煙道の天井である。

周溝・柱穴 検出されていない。

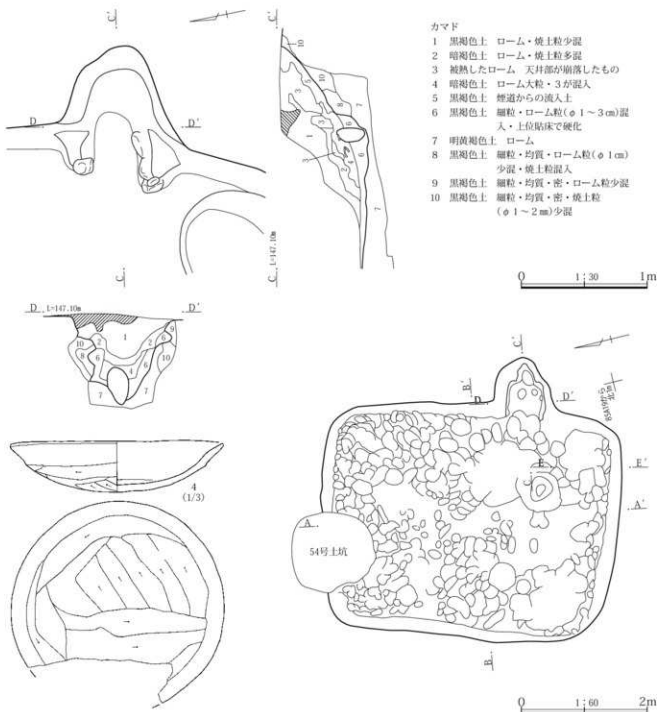
貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは97・85・23cmの方

形か。掘り込みは浅い。

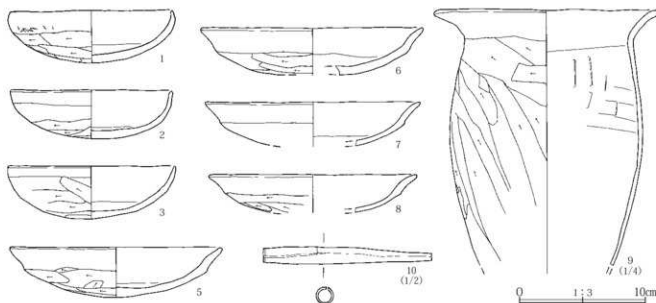
埋没土 黒褐色土で自然埋没。中位の2層と3層にロームや焼土の細粒を含むのが特徴である。

遺物出土状況 全体では270片。土師器環・埴、須恵器環・埴、蓋、瓶がある。床面からは9の埴、環のほか少ない。銅製吸口は混入である。

時期 奈良時代、出土した土器の特徴から8世紀前半とみられる。



第118図 29号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第119図 29号住居遺物図(2)

30号住居(第120・121図 P.L.17・48・49)

位置 85 B C 19・20 **形状** 方形、31号の床面と段差がなく、南西は推定。

規模 長軸4.13m、短軸3.76m、残存壁高0.55m

面積 15.53㎡ **方位** N107° E **重複** 南西にある31号住居より新しい。**床面** ロームまで掘り込み、7層で平坦に貼床。掘り方は北西隅に1号土坑、上面に蓋の厚みとみられる2cm前後の段差があり、底面にはロームが貼付されている。貯蔵用の施設を思わせるが浅い。中央にある楕円形のもの、縁に黒色土を貼付。底面の凹凸はロームを掘削した跡か。土坑の長軸・短軸・深さは1号が62・50・22cmである。

カマド 東辺の中央南寄りに位置、焚口に石が組まれ、右袖にはそのうちの2石が残されている。3層が天井、7層以下は掘り方で10層に焼土と灰が顕著。

周溝 北辺の中央部だけで検出。幅10～17cm、深さ7cmである。東端は壁の手前で内側に曲がる。西辺では31号住居の周溝と鍵の手に折れて続いている。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは62・44・45cmの方形。北側の縁に段差、2層は沈下した床面である。

柱穴 検出されていない。**埋没土** 黒褐色土で自然埋没。

遺物出土状況 全体では392片、土師器環・埴、甕、台付甕、灰軸陶器、須恵器環・埴、蓋、瓶、羽釜がある。須恵器甕の破片は、38号住居と同一個体か。2の墨書は書き慣れた様子の高、七の2文字か。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

31号住居(第120～122図 P.L.17・49)

位置 85 C 19・20 **形状** 方形、カマドの右が棚状に突き出る。

規模 長軸3.65m、短軸3.07m、残存壁高0.39m、棚は開口80cm、奥行き35cm、床面とは30cmの段差。

面積 11.21㎡ **方位** N101° E

重複 北東にある30号住居より古い。

床面 ロームまで掘り込んで、7層で薄く貼床、平坦。掘り方は浅く、30号住居より跡が多い。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、石組み粘土被覆構造。焚口から天井にかけて崩落した状態。底面には厚い灰層と焼土が残る。図示された石は補強用か。

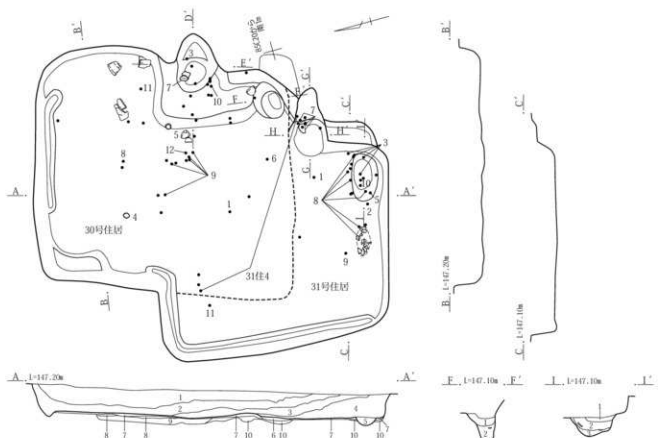
周溝 西辺から北辺で検出、北辺では鍵の手に曲がり30号住居にまで続いている。幅10～24cm、深さ3～7cmである。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは75・42・30cmの楕円形。中位の2層に遺物とカマドからの焼土を含む。

柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で埋没。色調の差では分けたが均質。

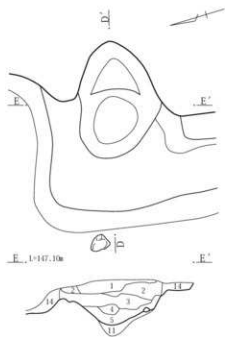
遺物出土状況 全体では190片、カマド内で土師器小型台付甕、埴、貯蔵穴とその周囲でコの字甕が出土。ほかに灰軸陶器、須恵器環・埴、蓋、瓶、羽釜がある。Sの



- 1 黒褐色土 細粒・均質・As-C少混・ローム粒混入
- 2 黒褐色土 細粒・均質・As-C・ローム粒(φ1~10mm)少混
- 3 黒褐色土 細粒・均質・As-C・ローム粒少混
- 4 黒褐色土 細粒・ローム粒(φ2~3cm)混入、5の境にはローム多混
- 5 黒褐色土 細粒・均質・密・貯蔵穴1に同じ

- 6 黒褐色土
- 7 ロームを主とした黒褐色土の混土(貼床)・堅緻
- 8 黒褐色土 ローム粒(φ1~2cm)少混
- 9 ローム塊と黒褐色土の混土
- 10 黒褐色土 As-C・焼土粒混入

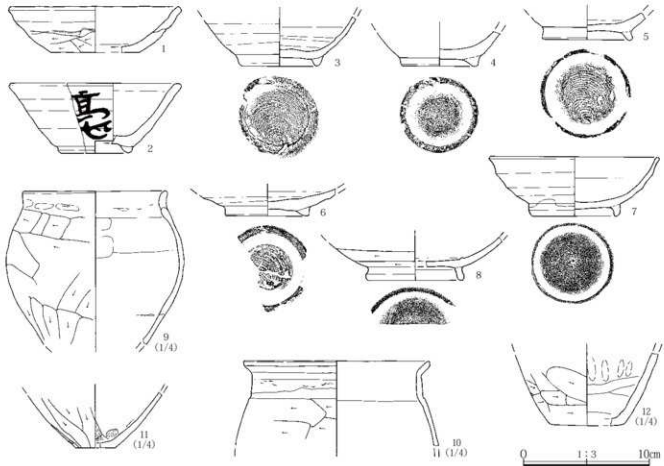
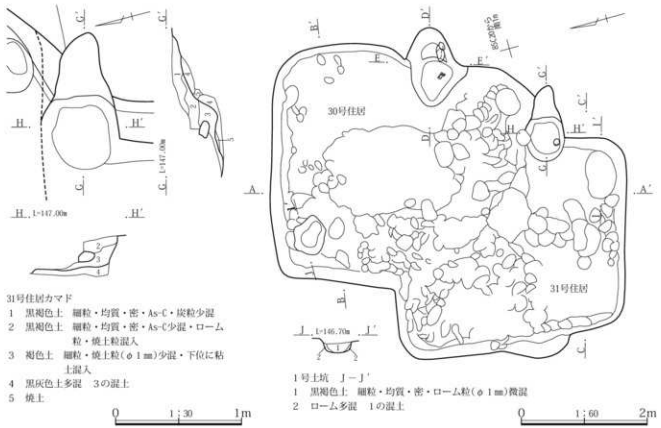
- 貯蔵穴 F-F'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密
 - 2 黒褐色土 細粒・均質・密・黄褐色ローム(φ1~2cm)混混
- 貯蔵穴 I-I'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・焼土粒混入
 - 2 褐色土 焼土を攪拌状態で多混
 - 3 暗褐色土 細粒・均質・焼土粒混入



30号住居カマド

- 1 黒褐色土 As-C少混・細粒・ローム・焼土少混
- 2 黒褐色土 1と同質、1より焼土多混・大粒
- 3 暗灰黄色粘土 天井
- 4 黒褐色土 As-C混入・細粒・ローム・焼土混入
- 5 3が赤化 焼土・ローム粒混入
- 6 3にローム塊混入
- 7 暗褐色土 As-C・ローム塊少混・赤化
- 8 黒褐色土 As-C・焼土粒・ローム粒少混
- 9 8に褐色土混入
- 10 赤褐色土 焼土多混・灰黄褐色土・黒褐色土混入
- 11 黒褐色土 As-C・焼土粒(φ1~5mm)微混・しまり弱い
- 12 暗褐色土 ローム混入・緻密
- 13 黒褐色土 As-C微混・黄色みおびる・下位ローム多混
- 14 黒褐色土とローム塊(φ3~10cm)の混土・As-C・F/F'F'軽石微混(カマド構築上か)

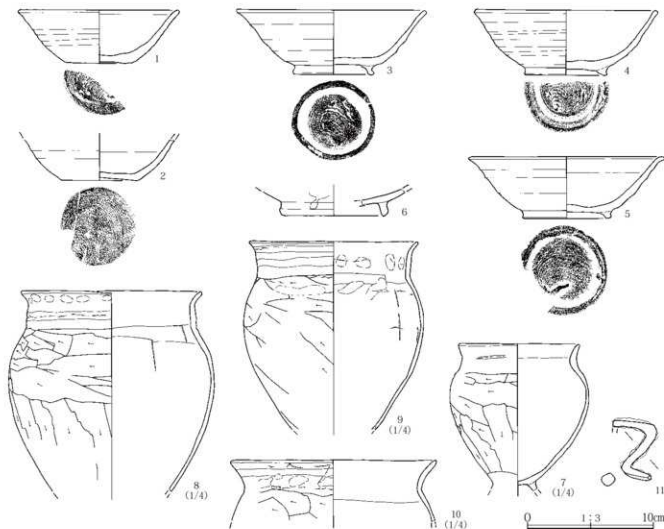
第120図 30・31号住居遺構図(1)



第121図 30・31号住居遺構図(2)、30号住居遺物図

字に折り曲げられた鉄器1、掘り方であるソフトローム層で黒曜石製ナイフ形石器が出土。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から9世紀後半とみられる。



第122図 31号住居遺物図

32号住居(第123・124図)

位置 95D2 形状 推定方形、北側調査区外

規模 長軸0.98以上、短軸2.53m、残存壁高0.28m

面積 2.48㎡以上 方位 N100° E

重複 33号住居、32号土坑よりも古い。

床面 硬化面はわからず、はっきりとしたものを検出することができなかった。掘り方は、跡跡が一面にある。南辺には内側30cm付近に中段があり、一段と深くなる。埋没土に差はないが建て替えをしているのではないか。

カマド・周溝・貯蔵穴・柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 数片と僅少である。

時期 平安時代とみられる。

33号住居(第123～125図 P L・17・49)

位置 95D2・3 形状 長方形、南辺は掘り方からすると推定しているよりも、さらに広がるか。

規模 長軸3.50m、短軸2.52m、残存壁高0.32m

面積 8.82㎡ 方位 N99° E

重複 北に32号住居、南東に34号住居があり、古い方から32号、34号、33号の順である。1号掘立柱建物との関係は不明。床面 ローム層まで掘り込み、黒褐色土による貼床。34号住居との重複部分は掘り抜いてしまい、断面による確認。

カマド 東壁中央に位置、34号住居カマドの跡に置いたローム塊を掘り込んで作る。全長は約1m、屋内に散在するのが焚口の石組みか。内部の焼土は、厚い所で2cm

を越す。焚口は掘りすぎで消失。

周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 カマド脇の南東隅にはない。33号住居掘り方で検出された土坑が本跡の北西隅に位置する。

埋没土 黒褐色土で床面まで埋没。

遺物出土状況 全体では284片、土師器環・埴、甕、付甕、灰釉陶器、須恵器環・埴、瓶、羽釜がある。34号住居重複部分に多いが床面よりは高い。床面からは石と鉄滓1点が出土。鉄滓は3点に割れているが接合しない。

時期 平安時代、出土した土器の特徴からすると10世紀後半とみられる。

34号住居(第123～125図 P.L.17・49)

位置 95D 2・3 **形状** 長方形

規模 長軸4.13m、短軸3.08m、残存壁高0.36m

面積 12.72㎡ **方位** N104° E

重複 33号住居、42号土坑よりも古い。43号土坑、1号掘立柱建物との関係は不明。**床面** ロームまで掘り込みロームが混入した土による貼床。掘りすぎたために断面

による確認。

カマド 東壁中央に位置、石組み粘土被覆の構造。焚口は、石が崩落して屋内に散在、つなぎの灰白色粘土混じりの土が残る。4層の下面には厚さ2～3cmの黒灰層。

周溝 検出されていない。

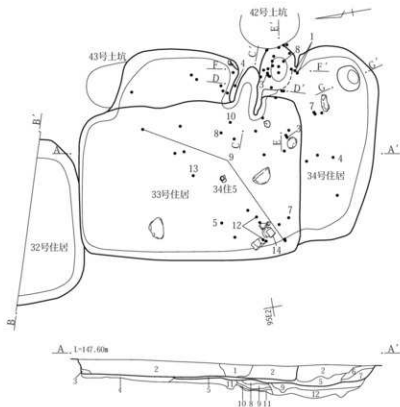
貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは41・33・27cmの方形。これとは別の土坑が33号住居内掘り方にある。本跡の北西隅に位置、68・55・14cmである。

柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で埋没。33号住居との区別はわずかしい。

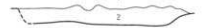
遺物出土状況 全体では153片、土師器環・埴、甕、灰釉陶器、須恵器環・埴、甕、羽釜がある。カマド内を除いて出土レベルが高い。羽釜とコの字口縁甕の個体は少なく、環・埴も小片。貯蔵穴の近くにある石はカマド焚口のもの。鉄滓1、紡錘車の軸1が出土。鉄滓は、推定直径10cm、2方向に割れ口がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



- 1 擾乱 砂質
- 2 黒褐色土 As-C・FPから軽石・ローム粒(φ1～5mm)・埴土粒(φ1～4mm)混混
- 3 黒褐色土 2に類似・暗褐色土混入・緻密
- 4 黒褐色土 ローム粒(φ1～3cm)多混
- 5 黒褐色土 1に類似・ローム混入・黄色みおびる
- 6 暗褐色土 ローム粒(φ1～5mm)少混
- 7 黒褐色土 2に類似
- 8 黒褐色土 細粒・ローム粒(φ1～3cm)少混
- 9 黒褐色土 細粒・ローム粒混混
- 10 ロームとにぶい黄褐色土の混土・堅緻
- 11 黒褐色土 細粒・ローム粒少混
- 12 にぶい黄褐色土 ローム粒(φ1～10mm)・黒褐色土少混

1:107.60m
B-B'



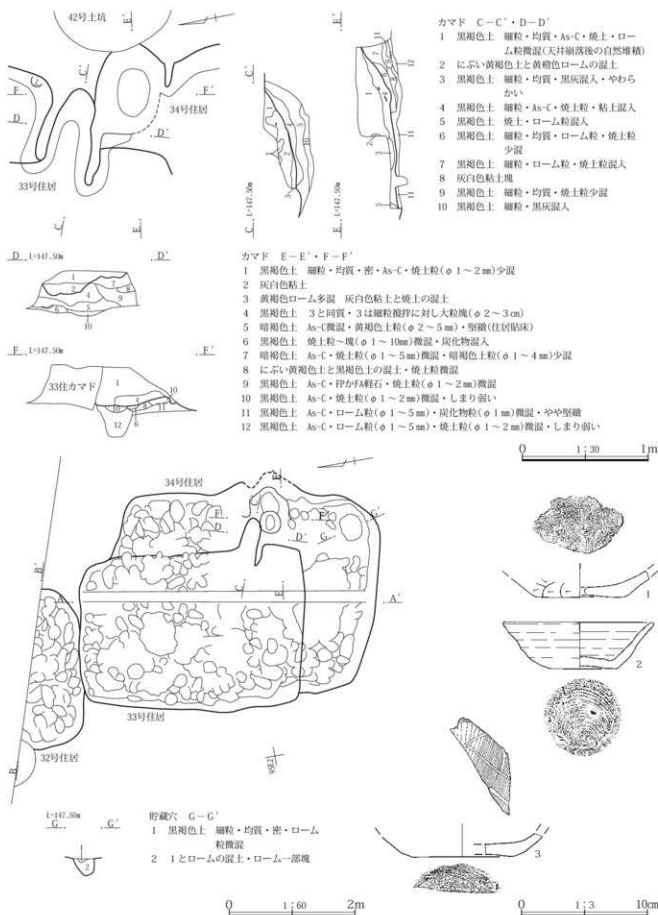
32号住居 B-B'

- 1 暗褐色土 表土(耕作土)
- 2 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C・ローム粒(φ1～2mm)少混

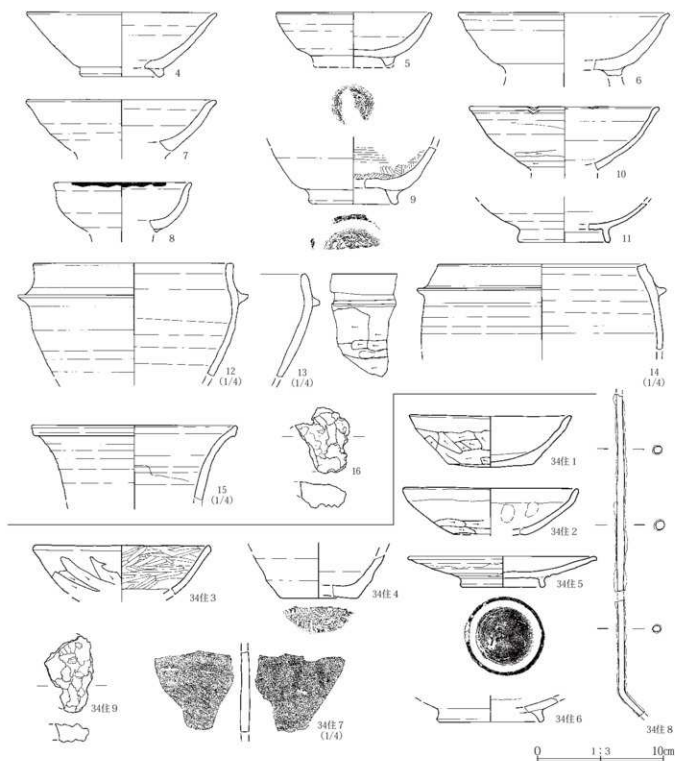
0 1:60 2m

第123図 32～34号住居遺構図(1)

第5章 胴城遺跡の調査



第124図 32~34号住居遺構図(2)・33号住居遺物図(1)



第125図 33号住居遺物図(2)・34号住居遺物図

35号住居(第126～128図 P L.19・50)

位置 85・95 A B 20・1 形状 推定方形

規模 長軸2.72m、短軸2.48m以上、残存壁高0.40m

面積 6.75㎡以上 方位 N105° E

重複 36号住居よりも古い。カマド石袖の遺存状況から新旧を判断した。

床面 8層による貼床、ロームを10cm前後掘り込んでいる。西辺沿いが中央より低くて軟らかい。カマド焚口前から西辺に向かって带状に硬化している。帯は36号住居の重複で消失しているが幅1m以上、土間の痕跡とみられる。掘り方は、凹凸が少なく南西隅寄りが浅い土坑となる程度。鋤跡痕も少なく、36号住居との境界はその数

の違いで判断した。

カマド 東辺の南東寄りに位置、石を芯にして2層・3層を貼付して作られている。石は対に置いてあったとみられ、左壁に3石、右壁に1石が残る。支脚は抜かれ、両袖口も36号住居の重複で消失。かき出した後であるためか、焼土の量は少ない。**周溝・柱穴** 検出されていない。**貯蔵穴** 南東隅の掘り方で円形の窪みがある。大きさの点で可能性がある。ほかに相当するものがない。**埋没土** 黒褐色土で自然埋没。36号住居との差はわずかである。

遺物出土状況 全体では461片、小破片が多い。土師器 杯・碗、甕、灰軸陶器、須恵器 杯・碗、蓋、甕、瓶、羽釜がある。北と東の壁沿い床面近くに人頭大の石が点在。台石のようでもあるが用途は不明。カマド内でコの

字甕が出土。埋没土からは鉄製鎌の端部とみられる小破片1点が出土。10の釘は、先端が二股に分かれている。

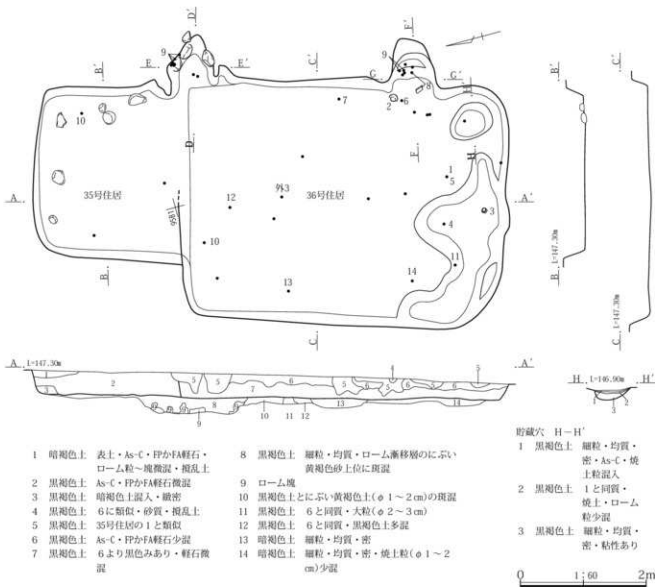
時期 平安時代、カマドから出土した土器の特徴から9世紀後半とみられる。

36号住居(第126～128図 P.L.19・50)

位置 85A B 19・20 **形状** 長方形

規模 長軸5.20m、短軸3.90m、残存壁高0.34m

面積 20.28㎡ **方位** N105° E **重複** 北にある35号住居よりも新しい。南の下面に縄文時代の56号土坑が重複。**床面** ロームが混入した黒褐色土で貼り床。平坦。掘り方で2基の土坑、長軸・短軸・深さは1号が77・78・15cmの円形、底面に粘土質の斑混土を貼付。2号は50・48・29cmの方形である。覆土は薄い互層。



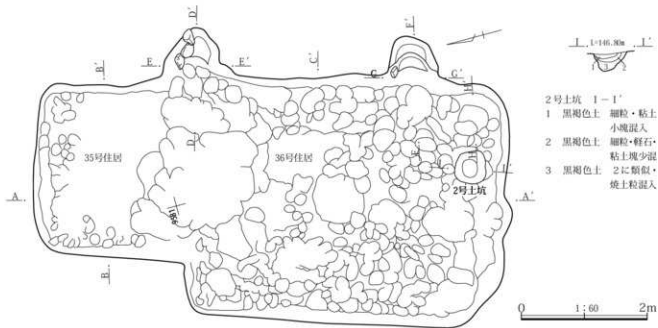
第126図 35・36号住居遺構図(1)

カマド 東壁中央に位置、ローム漸移層までを掘り込む。石組み粘土被覆の構造。間口は広い。3層は崩落した天井で、2層が被熱で赤く変色した粘土。焼土の厚さから

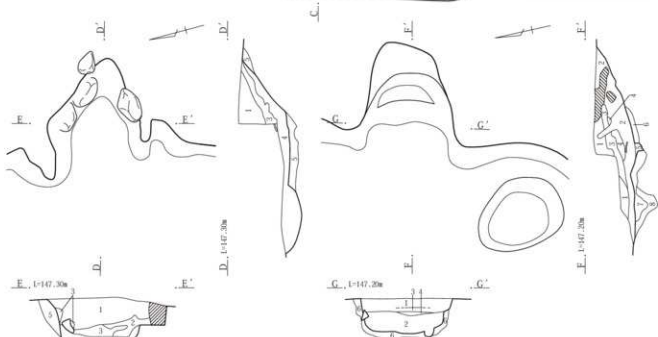
すると1回か、それ以上の作り替えがされている。

周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは72・55・19cmの方



- 2号土坑 1-1'
- 1 黒褐色土 細粒・粘土
小塊混入
 - 2 黒褐色土 細粒・軽石・粘土塊少混
 - 3 黒褐色土 2に類似・焼土粒混入



35号住居カマド

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C少混・3が微混
- 2 にぶい黄褐色土 細粒・均質・密・As-C少混・ローム粒混入
- 3 にぶい黄褐色土 2と同質・にぶい黄褐色粘質土・焼土攪拌状態で混入
- 4 黒褐色土 全体に黒灰混入・3に近い・上位に焼土粒(φ1~10mm)混入
- 5 黒褐色土 4と同質・焼土多混・一部傾斜の境混入

36号住居カマド

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C少混・ローム・焼土塊混入
- 2 焼土 赤褐色土(φ1~3mm)多混・灰・にぶい黄褐色土混入
- 3 黄褐色土 細粒(崩落した天井)
- 4 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1~2mm)少混
- 5 黒褐色土 細粒・均質・焼土粒(φ1~3mm)混入
- 6 暗褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1~2mm)少混
- 7 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ2~5mm)・粘土・ローム粒少混
- 8 黒褐色土 細粒・均質・密・薄い焼土層で7と分離・灰白色粘土(φ1~2cm)・焼土少混

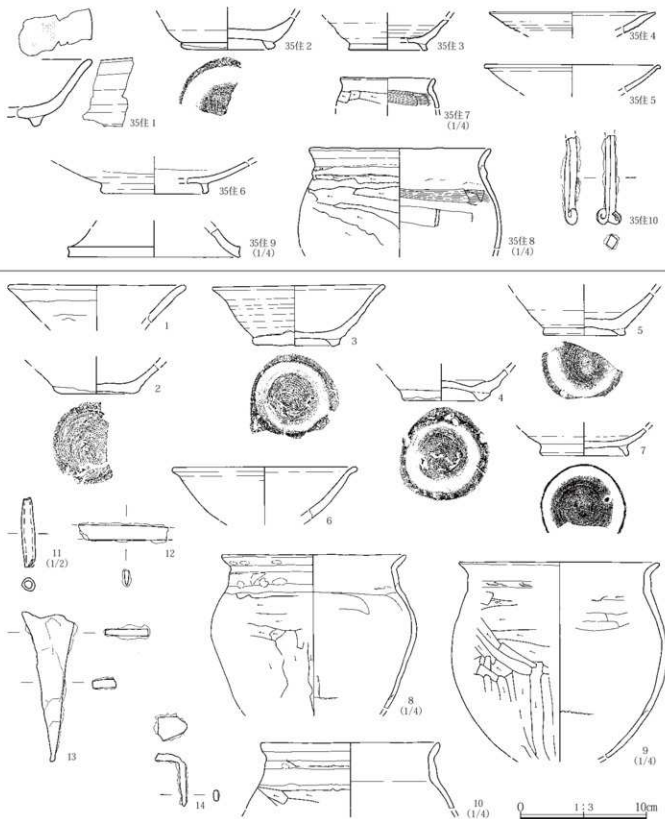


第127図 35・36号住居遺構図(2)

形、北側の縁に細い帯で残っていた黄褐色粘土は上蓋用の補強帯か。埋没土 黒褐色土で埋没。

遺物出土状況 全体では261片、喪胴部の破片が多い。ほか土師器環・埴、灰陶軸器、須恵器環・埴、瓶、瓶、羽釜

がある。カマド内から南辺沿いにかけてが多いが床面より10cm前後高い。土錘、雁股の鉄鏝か、釘、刀子の各1が出土。時期 平安時代、カマドから出土した土器の特徴から9世紀後半とみられる。



第128図 35・36号住居遺物図

37号住居(第129・130図 P.L.19・50)

位置 85 D E 20 形状 長方形

規模 長軸3.42m、短軸2.50m、残存壁高0.22m

面積 8.55㎡ 方位 N19° W

重複 北に接して45号土坑、床下に縄文時代の53号土坑がある。

床面 ローム漸移層まで掘り込み、6層による貼床。壁際をのぞいた中央部が硬化、東側のカマド前だけに1m四方の範囲で厚さ1cmのロームを貼付。硬化面とは接している。1号・2号土坑は、硬化面、ローム面を切り住居より新しい。長軸・短軸・深さは1号が95・83・15cm、

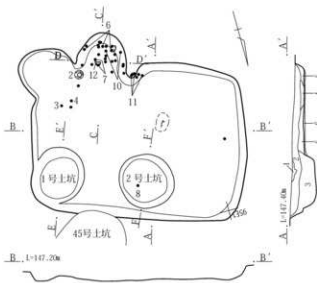
2号が90・85・12cm。出土した遺物はない。

カマド 南辺の東寄りに位置、ローム漸移層までを掘り込み粘土を主とした混土を貼付、さらに石で補強。図示した石は支脚で、中心よりも右に片寄ることから2穴式の構造ではないか。

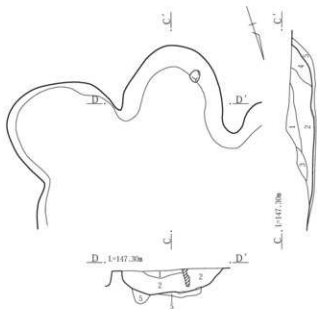
周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 カマド左側、壁の外側にまで張り出している土坑とみられる。長軸・短軸・深さは85・80以上・10cmである。底面には、カマド前の床面と同じように厚さ1cmのロームが貼付されている。

埋没土 黒褐色土で埋没。3層に分層したが差は少ない。



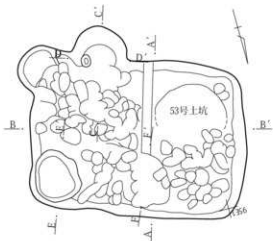
- 1 根瓦
- 2 黒褐色土 細粒・均質・As-C少混・ローム粒(φ1~2mm)少混
- 3 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒(φ1~3cm)少混
- 4 黒褐色土 細粒・均質・ローム塊混
- 5 黒褐色土 細粒・均質・As-C少混
- 6 黒褐色土と暗褐色土の混土(貼床材)・堅硬



カマド

- 1 黒褐色土 細粒・均質・As-C少混・ローム粒微混
- 2 黒褐色土 1より暗い・細粒・均質・密・As-C微混・ローム粒・焼土粒混入
- 3 にぶい黄褐色土 崩落した天井部
- 4 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1~3mm)混入
- 5 黒褐色土 4と同質・4に近い焼土多混・罌口灰白色(灰が薄い)混入

0 1:30 1m



E-1-147.40m E-E'

E-1-147.40m F-F'

- 1号土坑 E-E'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・地山から浮上したローム粒混入

- 2号土坑 F-F'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒(φ1~3cm)少混

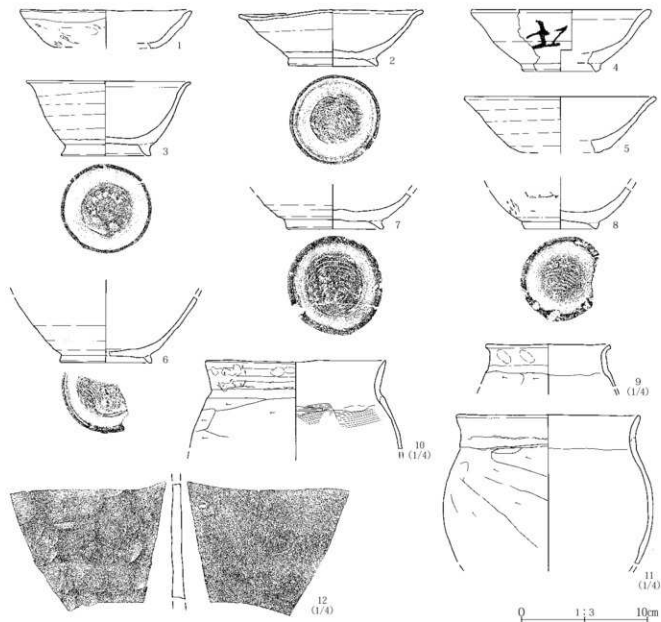
0 1:60 2m

第129図 37号住居遺構図

遺物出土状況 全体では128片、土師器環・埴、灰釉陶器、須恵器環・埴、蓋、甕、羽釜がある。カマドとその周囲で甕、埴が出土。4の黒書土器は、右の袖口で出土

(判読不可)。

時期 平安時代、カマド内から出土した土器の特徴から9世紀後半とみられる。



第130図 37号住居遺物図

38号住居(第131・132図 P.L.19・50・51)

位置 85 E F 19・20 **形状** 方形

規模 長軸3.25m、短軸2.97m、残存壁高0.25m

面積 9.65㎡ **方位** N97° E **重複** 単独

床面 ローム漸移層まで掘り込み、5層による貼床。掘り方には土坑状のものはなく、波打つ程度で平坦。

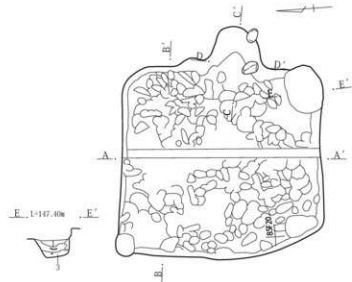
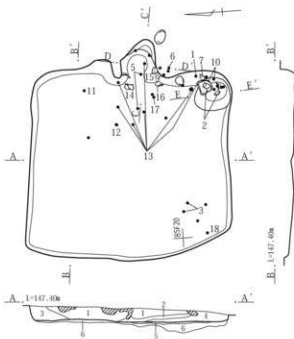
カマド 東壁の中央に位置、ローム漸移層までを馬蹄形に掘り込み、5層を貼付。左右で5層の厚さが違い、石

を芯にした右側が倍の厚さである。2層は崩落した天井。支脚は抜かれ、貯蔵穴の上にあるのが軸石か。焼土は少なく、焼け方も弱い。**周溝・柱穴** 検出されていない。**貯蔵穴** 南東隅、長軸・短軸・深さは58・55・30cmの円形、上面に25cm大の石がある。覆土は焼土が混入しコの字状口縁の甕が出土。**埋没土** 黒褐色土で埋没。

遺物出土状況 全体では91片、接合例は多い。土師器環・埴、甕、灰釉陶器、須恵器環・埴、瓶、甕、羽釜、土鍋

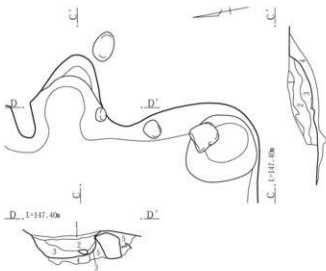
がある。カマドから南東側ではコの字状口縁の裏、坏、碗が集中。6「障」の刻書土器はカマド右脇から出土。

時期 平安時代、出土した土器の特徴からの10世紀前半とみられる。



貯蔵穴 E-E'

- 1 褐色土 細粒・密・焼上少泥・ローム粒混入
- 2 黒褐色土 細粒・均質・密・焼上少泥
- 3 褐色土 細粒・軟・焼上が攪拌された状態で多泥



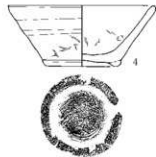
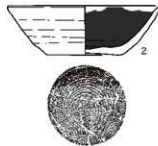
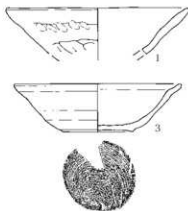
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C少泥
- 2 黒褐色土 細粒・均質・密・粘性あり
- 3 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C微泥
- 4 2にローム層移層混入
- 5 黒褐色土とロームの混土(駄床材)・硬化
- 6 黒褐色土 As-C混入・ローム(φ1~2cm)少泥・下位に多泥

0 1:60 2m

カマド

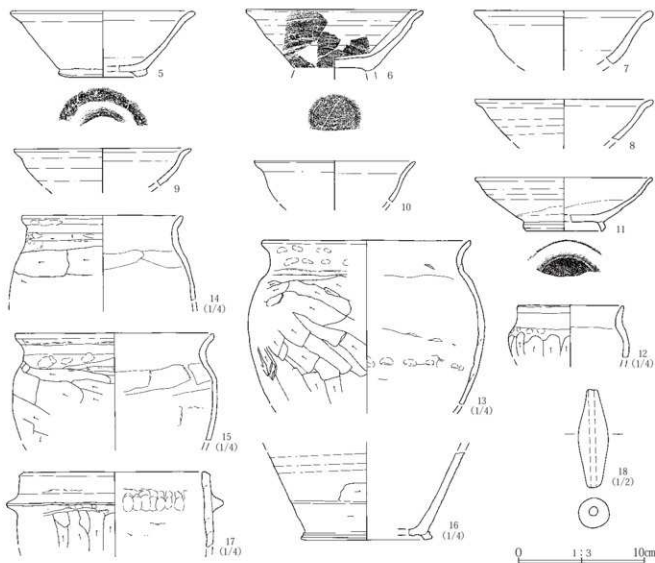
- 1 黒褐色土 細粒・均質・焼上粒微泥
- 2 にふい黄褐色土 3・煙道側は焼上混入・天井
- 3 暗褐色土 細粒・均質・焼上粒(φ1~3mm)少泥
- 4 黒褐色土 細粒・均質・密・焼上粒(φ1mm)混入・赤化
- 5 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C・ローム粒・灰白色粘土(φ1~2cm)少泥

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第131図 38号住居遺構図・遺物図(1)



第132図 38号住居遺物図(2)

39号住居(第133図 P.L.20・51)

位置 85C D17 形状 方形

規模 長軸3.84m、短軸3.07m、残存壁高0.20m

面積 11.79㎡ 方位 N109° E 重複 単独

床面 黒色土まで掘り込み、そのまま平坦にしている。薄い硬化面がある。床下に2基の土坑がある。長軸・短軸・深さは、1号が74・68・24cmの円形、2号は57・51・14cmの円形。2号の上面にはローム多混土による貼床が沈下して残る。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、全長約1mと長い。5層の上に、さらに石を芯にして粘土混土を貼付して作られている。石は袖口から対に置かれ、煙道内にまで及んでいる。支脚が残されていて、5層や2層の様子から

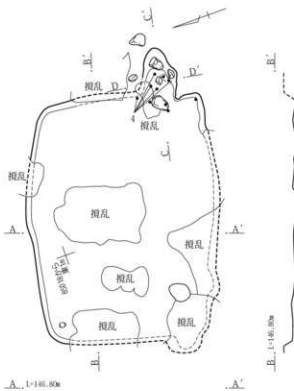
作り替えが考えられる。

周溝・柱穴 検出されていない。

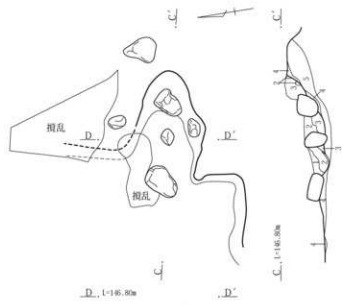
貯蔵穴 掘り方の南西隅で検出したビットに可能性がある。改築を考えると2号土坑にも可能性。特定できない。埋没土 黒褐色土で埋没。わずかに焼土を混入することで地山と区別した。

遺物出土状況 全体では125片、土師器環・埴、灰軸陶器、須恵器環・埴、灰、羽釜がある。カマド内の羽釜は複数個体、接合例は少ない。カマド以外では攪乱されていて少ない。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



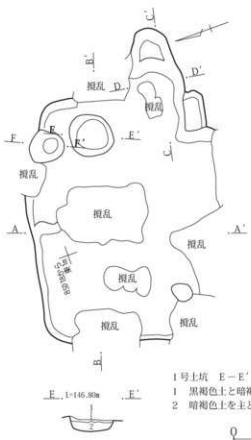
1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C・砂粒(φ2~3mm)混入



カマド

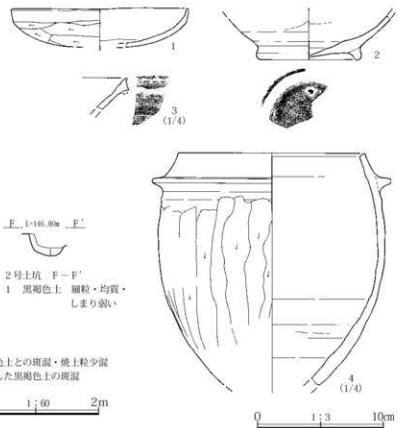
- 1 黒褐色土・As-C混入・細粒・均質・密
- 2 焼上 赤褐色土・固く焼きしまった塊(5cm)
- 3 黒褐色土 細粒・均質・密・焼上粒微混
- 4 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C混入・焼上粒微混
- 5 黒褐色土 細粒・均質・密・わずかに赤化

0 1; 30 1m



1号土坑 E-E'
1 黒褐色土と暗褐色土との斑混・焼上粒少混
2 暗褐色土を主とした黒褐色土上の斑混

0 1; 60 2m



0 1; 3 10cm

第133図 39号住居遺構図・遺物図

40号住居(第134・135図 P.L.20・51)

位置 85 B17 形状 方形

規模 長軸2.17m、短軸2.15m、残存壁高0.14m

面積 4.67㎡ 方位 N112° E

重複 下層に縄文時代の59号・60号土坑

床面 ローム漸移層上位まで掘り込み、貼床をしないでそのまま平坦にしている。中央は一面に粘土を貼った円形土坑で切られている。長軸・短軸・深さは74・60・7cmである。掘り方では、カマドから住居南西隅までが幅1mほどの帯状に低く、中には直径20～30cmの円形土坑が連続している。

カマド 東辺の南寄りに位置、掘り方は大きくて全体が壁外に突き出ている。焼け方は弱く、焼土、灰はない。

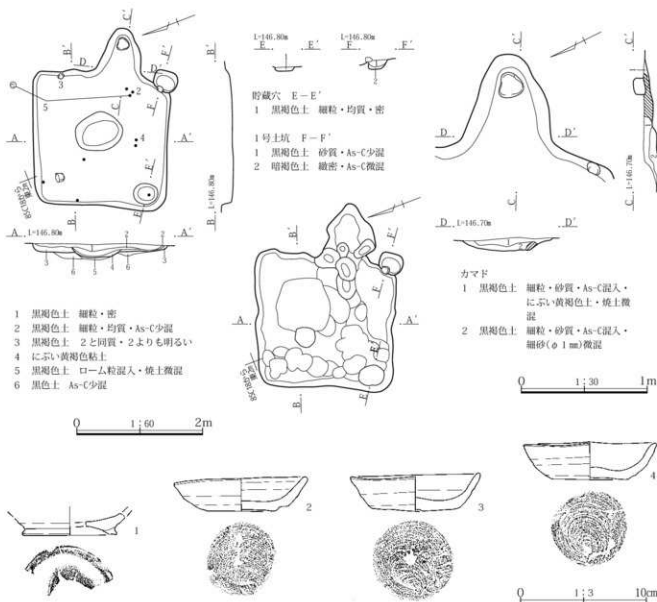
掘り方で両袖穴を検出、煙道寄りに丸い石が1点ある。周溝 検出されていない。

貯蔵穴 南東隅、隅から張り出している。長軸・短軸・深さは、38・34・15cmである。縁にはロームが貼付され、中からは石が出土。柱穴の可能性もある。南西隅の掘り方でも土坑1基を検出。規模は38・33・8cmである。

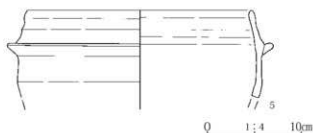
柱穴 掘り方の中央で直径31cm、深さ17cmのピット1本が検出されている。埋没土 黒褐色土で自然埋没。

遺物出土状況 全体では32片、カマドの右脇で羽釜、壁沿いで坏・埴が出土。ほか甕、蓋があるが羽釜破片だけで全体の半数近い量となる。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第134図 40号住居遺構図・遺物図(1)



第135図 40号住居遺物図(2)

41号住居(第136図 P.L.20・51)

位置 85A B 17・18 **形状** 方形、東辺中央から北西隅まで斜め方向に攪乱。

規模 長軸3.02m、短軸2.52m、残存壁高0.28m

面積 7.61㎡ **方位** N15° E

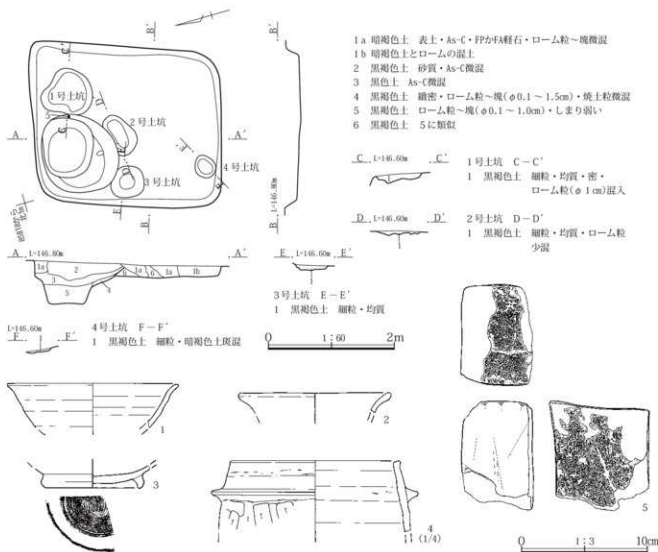
重複 北西隅に無名土坑。上面が円形で137・120・21cm、下面が長方形で95・80・42cmである。上面は住居より新

しく、下面は覆土が類似していることから、住居に共存している可能性が高い。**床面** ローム漸移層まで掘り込み、貼床をしないでそのまま平坦にしている。4基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは、1号が82・78・16cm、2号が65・38以上・6cm、3号が55・50・4cm、4号が38・33・8cmである。1号と2号が新しく、3号が掘り方である。

カマド 東辺に推定、攪乱されて消失。**周溝・柱穴** 検出されていない。**貯蔵穴** 北西隅寄りにある、4号土坑を想定。**埋没土** 黒褐色土で埋没。軽石の混入量で地山とは区別した。

遺物出土状況 全体では106片、小片が主。土師器環・埴、甕、灰軸陶器、須恵器環・埴、甕、羽釜がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第136図 41号住居遺構図・遺物図

42号住居(第137・138図 P.L.20・51)

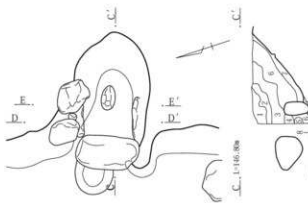
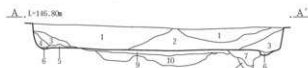
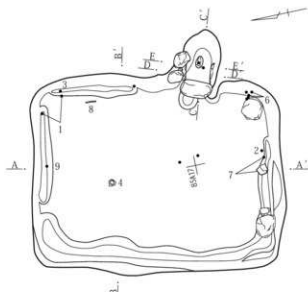
位置 84・85 T A16・17 形状 方形

規模 長軸3.95m、短軸3.18m、残存壁高0.43m

面積 12.56㎡ 方位 N102° E 重複 単独

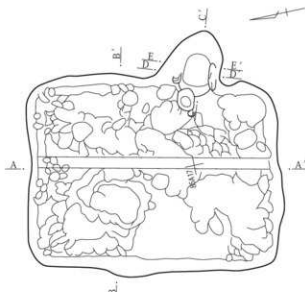
床面 ローム漸移層まで掘り込み、9層による貼床。掘り方は、北東隅をのぞいて土坑状の凹凸が目立つ。

カマド 東辺の南寄りに位置、新旧2つの支脚があり作



り替えられている。焚口は鳥居状に石を組み、燃焼部の壁は石を芯にして粘土と黒褐色土で被覆。図示した支脚は新しい方で、右側に寄せて作り替えられている。

周溝 南東隅のほか、一部途切れているがほぼ全周している。幅が15～32cm、深さは5～6cmである。南西隅寄りの石は溝の上にある。貯蔵穴・柱穴 検出されていない。



- 1 黒褐色土 As-C・FPから軽石・ローム粒(φ1～5mm)微混
- 2 黒褐色土 ローム粒～塊(φ0.3～1.0cm)少混・軽石微混
- 3 黒色土 砂質
- 4 黒褐色土 緻密・下位にローム混入
- 5 黒褐色土 4と同質・ローム4より多混
- 6 黒褐色土 5に類似
- 7 黒褐色土 ローム粒(φ1～3mm)～塊(φ1～3cm)少混・軽石微混
- 8 黒褐色土と黄褐色土の混土・しまり弱い・均質
- 9 黒褐色土 ローム塊(φ0.5～2.0cm)少混・軽石微混・堅緻・硬化面
- 10 黒褐色土 7と同質・ローム粒(φ0.1～0.5cm、また長径1～4cm)は7より多混



カマド

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C少混・2が(φ2～3cm)混混
- 2 にふい黄褐色土 粘性あり
- 3 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C微混・2と焼土少混
- 4 黒褐色土 細粒・均質・密・2より粘性あり
- 5 3に焼土(φ1～3mm)多混
- 6 黒褐色土 細粒・焼土(φ1～10mm)、灰多混・しまり弱い
- 7 黒褐色土 細粒・6と同質・焼土粒(φ1mm)・黒灰多混
- 8 焼土 淡い赤褐色土
- 9 にふい黄褐色土
- 10 黒褐色土 細粒・均質・密



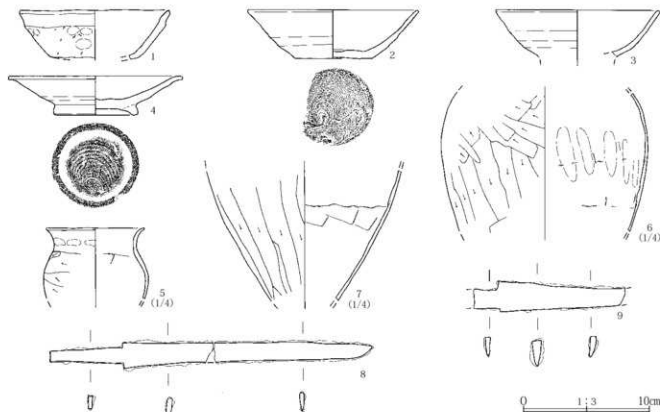
第137図 42号住居遺構図

埋没土 黒色土がローム斑混黒褐色土を切っている。

遺物出土状況 全体では119片、土師器環・埴、甕、台付甕、須恵器環・埴、皿・蓋がある。床面は南の壁際で石が出土。土器は壁際でも出土位置が高い。石は人頭大の大きさで作業用の台石か。南東隅は33・31・7cm、南

西隅寄りには周溝の上にあり33・31・23cmの大きさである。刀子2点は6.2～6.5cmと長さが揃えられている。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。



第138図 42号住居遺物図

43号住居(第139・140図 P.L.21・51)

位置 84S T 16-17 **形状** 方形、カマド右脇に浅いピット

があり、中から石が出土。カマドに付属する施設か。

規模 長軸3.52m、短軸3.46m、残存壁高0.14m

面積 12.18㎡ **方位** N107° E

重複 南東にある44号住居よりも新しい。

床面 ローム漸移層まで掘り込み、3層・4層による貼床。北辺に2基の土坑。長軸・短軸・深さは、1号が75・75・6cm、2号が70・68・29cmである。掘り方は、西側が深く浅い土坑が連続している。

カマド 東壁の中央に位置、黒色土を掘り込み、粘土を貼付している。削平されている上に損乱が多く、上部の構造は不明。焚口の手前には灰掻き穴がある。

周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 カマド右側の石が出土した掘り込みか。掘り方

の北西隅にある1号土坑が相当。土坑は、直径75cm、深さ6cmである。

埋没土 黒色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では74片、土師器環・埴、甕、灰釉陶器、須恵器環、碗、甕、羽釜がある。非掲載に剥離した薄い鉄片1がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。

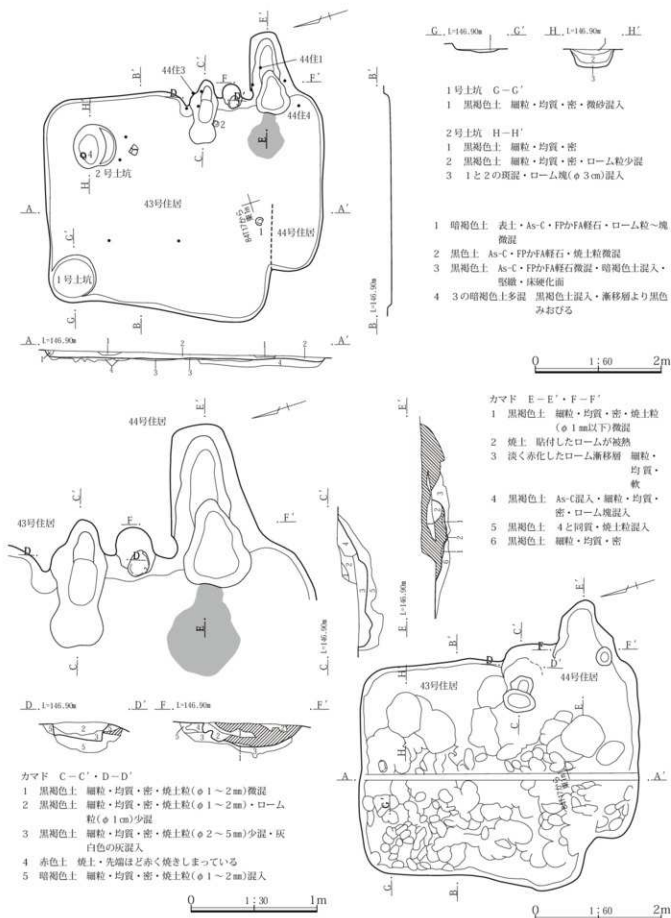
44号住居(第139・140図 P.L.21・51)

位置 84S T 16・17 **形状** 推定方形

規模 長軸2.88m、短軸2.10m、残存壁高0.08m、短軸は掘り方で計測した。

面積 6.05㎡ **方位** N109° E

重複 北西にある43号住居よりも古い。



第139図 43・44号住居遺構図

床面 ローム漸移層まで掘り込み、4層による貼床。掘り方は、西側に浅い土坑が連続している。

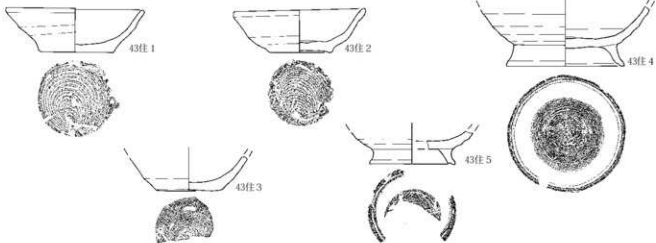
カマド 東辺の南寄りに位置、ローム漸移層に貼付したロームを掘り込んで作られている。底面を残すだけであるが、全長は140cmと大型であることが分かる。焼土の量も多い。焚口の正面の床には区別のためか、ロームが四角形に貼られている。

周溝・貯蔵穴・柱穴 検出されていない。

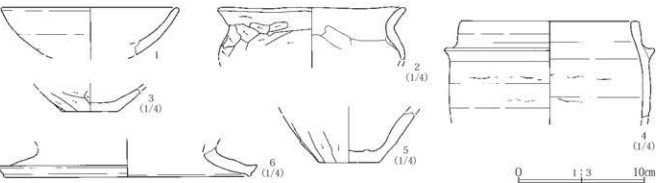
埋没土 黒色土で埋没している。

遺物出土状況 土器は74片、土師器環・埴、甕、灰軸陶器、須恵器環・埴、甕、羽釜、甗がある。カマドとその周囲の羽釜破片が最多、環・埴類は少ない。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第140図 43・44号住居遺物図



45号住居(第141・142図 P.L.21・52)

位置 84R S 16 **形状** 方形

規模 長軸3.45m、短軸3.05m、残存壁高0.18m

面積 10.52㎡ **方位** N101° E

重複 東にある46号住居より新しい。1号・2号土坑より古い。

床面 ローム漸移層まで掘り込み、5層による貼床。掘り方は浅くて波を打つ程度。3基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは1号が140・70・16cm、2号が110・70・23cm、3号が62・62・12cm、覆土に粘土が多い。

カマド 東辺の南寄りに位置、46号住居の覆土を掘り込

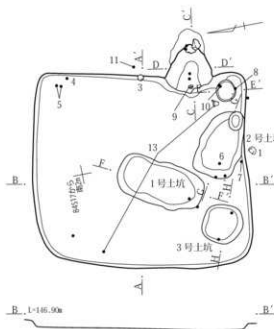
んでロームを貼付して作られている。煙道までが強く焼け、先端には煙突の丸い跡が残る。図示した石が煙道と燃焼部との境で、内部は焚口の外側にまで黒い灰層がある。厚さ最大5cm、煙道の先端では焼土層との互層。

周溝・柱穴 検出されていない。

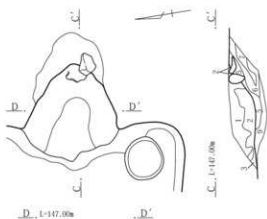
貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは、34・31・9cmの方形。覆土上位にカマドの焼土多混。大粒で掻き出して埋めたものが。埋没土 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体で59片、接合例は少ないが土師器環・埴、甕、灰軸陶器埴、須恵器環・埴、羽釜がある。壁沿いに点在。羽釜は8個体以上と破片が多い。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。

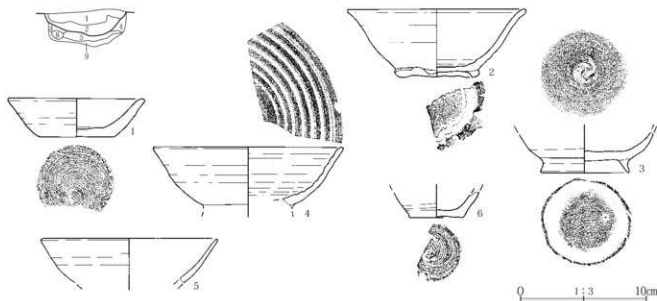


- 貯蔵穴 E-E'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1~3mm)混入(人為的な埋没)
 - 2 にぶい黄褐色土 ローム粒(φ1~2cm)混入
- F F', I-146.70m E' G' I-146.70m G'
- 1号土坑 F-F'
- 1 黒褐色土 砂質・As-C・FPかFA軽石・ローム粒(φ5~10mm)・焼土粒(φ1~3mm)微混
- 2号土坑 G-G'
- 1 1号土坑に類似 ローム粒・塊(φ2~4cm)・焼土粒(φ1~10mm)微混
- H H', I-146.70m H'
- 3号土坑 H-H'
- 1 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石微混・ローム混入
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C混入・焼土・ローム微混
 - 2 1に焼土・粘土・ローム粒混入・大粒(φ1cm)多混
 - 3 1に焼土多混
 - 4 焼土塊
 - 5 暗褐色土 As-C微混
- A A', I-146.00m
- B B', I-146.00m
- 0 1:60 2m

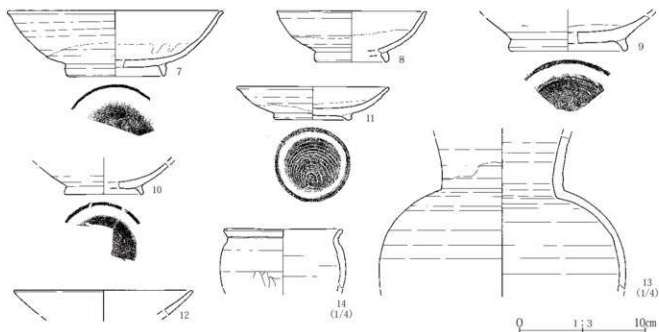


カマド

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C・ローム粒(φ1mm)・焼土粒微混
 - 2 明黄褐色ローム 両端はロームの純層に近い・中央部は焼土粒(φ1~15mm)混入
 - 3 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1mm)・黒灰混入
 - 4 黒褐色土 ローム少混
 - 5 にぶい黄褐色粘土と黒褐色土の混土
 - 6 焼土 強く焼けていて一部はカリカリ
 - 7 黒灰に2と6が混入
 - 8 焼土 6より赤い・塊状
 - 9 黒灰 2と6少混
- C C', I-147.00m
- D D', I-147.00m
- 0 1:30 1m



第141図 45号住居遺構・遺物図(1)



第142図 45号住居遺物図(2)

46号住居(第143～145図 P.L.21・52)

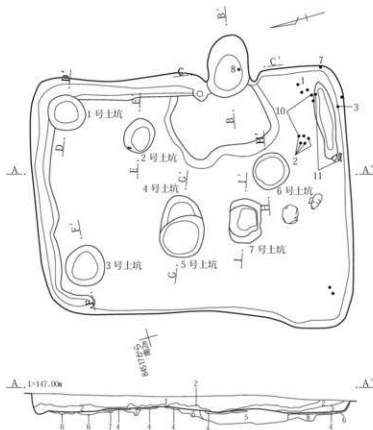
位置 84R S 15・16 形状 方形

規模 長軸5.03m、短軸4.15m、残存壁高0.31m

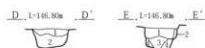
面積 20.87㎡ 方位 N105° E

重複 古い方から45号、46号・47号住居の順である。

床面 4層による貼床、ローム漸移層まで掘り込んでいる。平坦で堅緻。7基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは1号が60・55・29cm、2号が55・45・35cm、3号



第143図 46号住居遺構図(1)



1号土坑 D-D'

- 1 黒褐色土 As-C・ローム粒(φ3～5mm)・焼土粒(φ1～5mm)微混
- 2 黒褐色土 1と同質・ローム粒多混・ローム粒(φ0.5～2cm)少混

2号土坑 E-E'

- 1 黒褐色土 As-C・焼土粒(φ1mm)微混・しまり弱い
- 2 黒褐色土 ローム混入・1より黄色いあり・しまり弱い
- 3 黒褐色土 ローム混入・4より黄色いあり・しまり弱い
- 4 黒色土 しまり弱い

1 黒褐色土 細粒・均質・As-C少混

2 暗褐色土 細粒・ローム粒・南半で大粒の焼土粒混入

3 黒褐色土 細粒・均質・焼土粒少混

4 暗褐色土 As-C・FPかF質石・黒褐色土粒(φ5mm)微混・褐色土粒(φ3～5mm)少混・堅緻・貼床硬化面

5 6号土坑フケ上

6 黒褐色土 As-C微混・ローム・塊(φ2～3cm)混入

7 暗褐色土 As-C微混

8 暗褐色土 As-C・ローム粒(φ3～5mm)微混・しまり弱い

0 1; 60 2m

第5章 胴城遺跡の調査

が65・63・21cm、4号が63・35以上・27cm、5号が75・65・32cm、6号が57・55・15cm、7号が80・48・27cm、7号は床をはさんで2基が重複している。

カマド 東辺の南寄りに位置、貼付したロームを掘り込んで作られている。中央部にある支脚を据えた跡から1穴式構造とみられる。両方の袖石は焚口に倒れている。

周溝 北辺と東辺で検出された。幅20cm前後、深さ2～5cmである。



3号土坑 F-F'

- 1 黒褐色土 As-C・焼土粒(φ1mm)微混・しまり弱い
- 2 黒褐色土とロームの混土・しまり弱い

4・5号土坑 G-G'

- 1 黒褐色土 As-C・ローム粒～塊(φ0.1～3.5cm)・焼土粒(φ1～3mm)微混
- 2 黒褐色土 ローム混入・塊(φ0.5～3cm)少混
- 3 黒褐色土 1に類似・ローム粒・塊微混

貯蔵穴 1号土坑と3号土坑の双方に可能性がある。

柱穴 検出されていない。埋没土 黒褐色土で埋没。

遺物出土状況 全体では248片、小片が多くて接合例は少ない。羽釜よりもコの字口縁装の破片が多い。南東隅でコの字口縁装、杯、皿が出土。7号土坑脇の床に密着している石は平らで作業用の台ではないか。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

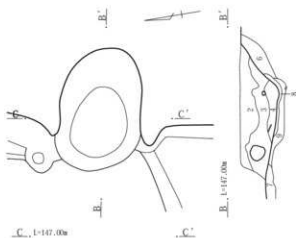


6号土坑 H-H'

- 1 黒褐色土 As-C・ローム粒～塊(φ0.1～3cm)微混

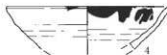
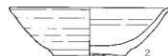
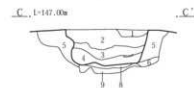
7号土坑 I-I'

- 1 黒褐色土 As-C微混・ローム塊(φ0.5～3cm)少混
- 2 暗褐色土 ローム混入
- 3 黒褐色土 ローム粒(φ0.5～1cm)少混・しまり弱い
- 4 黒褐色土 2と同様・上位に硬化した5層の貼床あり
- 5 床硬化面(貼床)

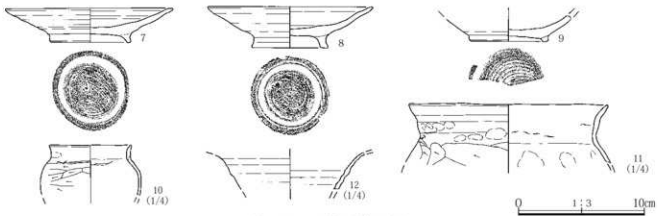


カマド

- 1 暗褐色土 As-C・FPかFA軽石微混
- 2 黒褐色土 黒褐色粘質土・塊(φ1～1.5cm)少混・焼土粒(φ2～5mm)微混・軽石1と同じ・堅緻
- 3 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・ローム塊(φ5～15mm)微混
- 4 暗褐色土 焼土粒(1～5mm)微混・軽石1・3と同じ・しまり弱い
- 5 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・灰・焼土塊混・炭化物粒(φ5mm)微混
- 6 褐色土と暗褐色土の混土・As-C微混
- 7 黒褐色土 As-C・ローム粒～塊(φ2～10mm)微混(住居掘り方フク土)
- 8 赤褐色土 焼土層・6が焼熱したもの
- 9 ローム多混 暗褐色土混入・地山ロームより暗色みおびる・しまり弱い



第144図 46号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第145図 46号住居遺物図(2)

47号住居(第146～148図 P.L.21・52)

位置 84QR16 形状 長方形

規模 長軸3.46m、短軸2.10m、残存壁高0.22m

面積 7.27㎡ 方位 N107° E

重複 46号住居より新しい。

床面 重複部分は46号住居覆土を踏み固め、重複以外はローム混土による貼床。掘り方は跡跡が波打つ程度、46号住居とは10cmの段差である。1号土坑の長軸・短軸・深さは65・53・27cmである。

カマド 東辺の南寄りに位置、地山を掘り込み2層黄褐色の粘土を貼付。3層が天井、4層が煙道で先端ほど焼け方は強い。支脚は抜かれ、鳥居状に組まれた石も焚口に倒れたままである。

周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは57・55・14cmであ

る。出土した遺物はない。

埋没土 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では130片、カマド内から住居南東隅にかけてが多い。土師器環・埴、甕、灰粘陶器埴、須恵器環・埴、甕、羽釜がある。カマド内からは羽釜とコの字口縁甕、南辺では環・埴が出土、2の須恵器碗の底部には「十」の刻書がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

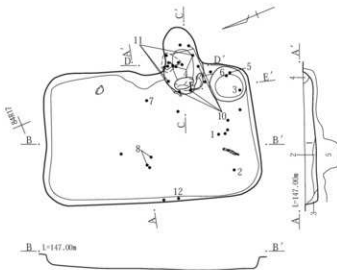
48号住居(第149・150図 P.L.21・52)

位置 84R S17 形状 長方形

規模 長軸3.30m、短軸2.27m、残存壁高0.11m

面積 7.49㎡ 方位 N105° E

重複 49号住居、1号土坑より古い。



第146図 47号住居遺構図(1)

- 1 黒褐色土 細粒・均質・As-C・ローム粒を全体に混入
- 2 1に焼土粒(1～15mm)混入
- 3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少混
- 4 暗褐色土 粘土質・埴
- 5 黒褐色土 As-C・褐色土粒(φ3～5mm)微混

貯蔵穴 E-E'

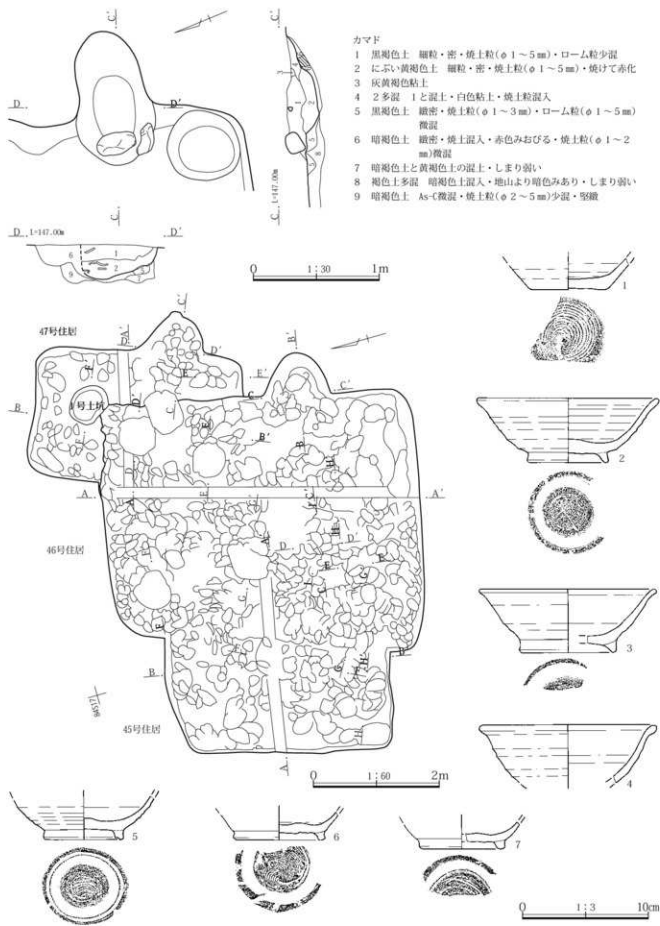
- 1 黒褐色土 細粒・均質(自然埋没)

1号土坑 F-F'

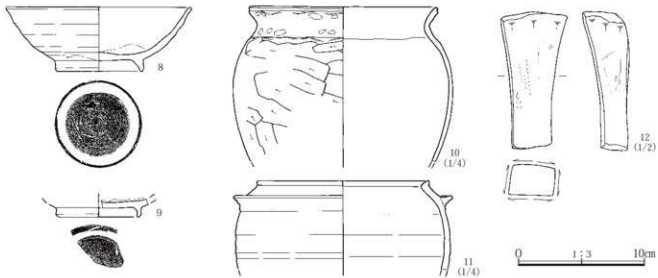
- 1 黒褐色土 As-C微混・褐色土粒～埴(φ0.1～5cm)少混
- 2 黒褐色土 As-C・ローム粒(φ1～3mm)・焼土粒(φ1mm)微混
- 3 黒褐色土 砂質・As-C微混

0 1:60 2m

第5章 胴城遺跡の調査



第147図 47号住居遺構図(2)・47~49号住居遺構図・47号住居遺構図(1)



第148図 47号住居遺物図(2)

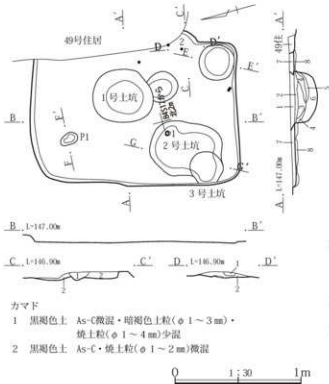
床面 ローム漸移層まで掘り込み、8層による貼床。3基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは、1号が96・85・40cm、2号が113・87・19cm、3号が55・53・15cmである。掘り方にある2号は、覆土にロームが多く人為的な埋め戻し。1号に切られた無名土坑は底面に粘土が貼付されている。

カマド 49号住居に切られ底面の掘り方だけが残る。

周溝・柱穴 検出されていない。**貯蔵穴** 南東隅、長軸・

短軸・深さは56・55・36cmの円形。2層は緻密。**柱穴** 北西隅寄りでP1を検出。長軸・短軸・深さは29・18・7cmである。**埋没土** 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では64片、土師器環・埴、甕、鉢、須恵器環・埴、蓋、甕、羽釜、接合率は低い。羽釜は3個体以上、コの字口縁甕が共伴。カマド内と南東隅で埴が出土。南辺壁際で出土した曲刃鎌は破損後、包丁のように転用か。長さ11.4cm、幅4.4cmと大ぶりである。



第149図 48号住居遺構図

- 1 黒褐色土 As-C・PPかFA軽石微混
- 2 黒褐色土 2に類似・焼土粒(φ1~5mm)微混
- 3 黒褐色土 As-C・ローム粒(φ3~10mm)・焼土粒(φ1~3mm)微混
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・多混
- 5 黒色土 As-C微混
- 6 黒褐色土 As-C・ローム粒(φ1~5mm)・焼土粒(φ1~4mm)微混
- 7 黒褐色土 細粒・ローム・焼土の小塊混入
- 8 黒褐色土 As-C・褐色土粒(φ5~10mm)微混



貯蔵穴 E-E'

- 1 黒褐色土 As-C・PPかFA軽石・焼土粒(φ1~10mm)微混
- 2 黒色土 軽石微混・緻密

P1 F-F'

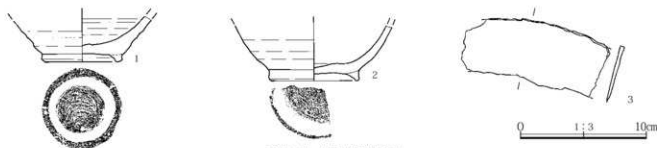
- 1 黒褐色土 上下で明暗・As-C微混

2・3号土坑 G-G'

- 1 黒褐色土 As-C・暗褐色土粒(φ5~10mm)微混
- 2 黒褐色土 1に類似・As-Cより多混・暗褐色土粒下位に混入
- 3 暗褐色土多混 As-C微混・黒褐色土混入



時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



第150図 48号住居遺物図

49号住居(第151～153図 P.L.22・52・53)

位置 84QR17・18 形状 長方形

規模 長軸5.18m、短軸3.82m、残存壁高0.36m

面積 19.79㎡ 方位 N103° E

重複 48号住居より新しく、北東隅の50号土坑より古い。

床面 ロームまで掘り込み、5・6層による貼床。堅緻。掘り方で2基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは1号が80・68・12cm、2号が80・70・16cmである。簡跡は壁に沿って一面に連続している。

カマド 東辺の南寄りに位置、石を芯に粘土で被覆した石組み構造。左壁は石が二重になっていることから、外側が古く中心位置を右側にずらして作り替えられてい

る。7層が古いカマドの掘り方覆土である。

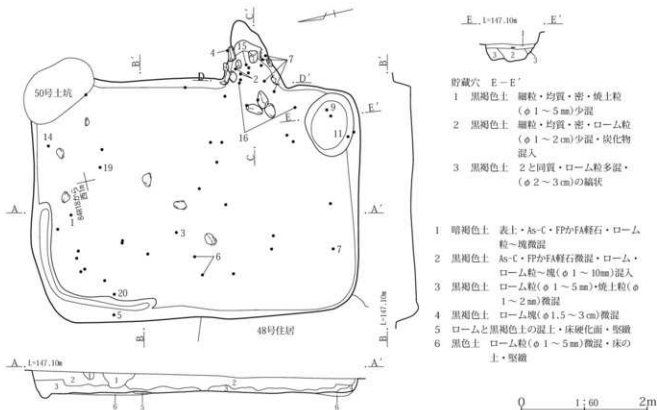
周溝 北西隅で検出された。幅3～19cm、深さ6cm前後である。部分的であったかは確定できない。

貯蔵穴 南東隅、長軸100・短軸78・深さ27cmの楕円形である。柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では465片と多いが位置は高い。石の多いことが注意される。土師器杯・埴、鉢、甕、灰釉陶器、須恵器杯・埴、皿、甕、瓶、羽釜、手づくね土器がある。カマド内で羽釜、埴が出土。

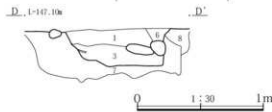
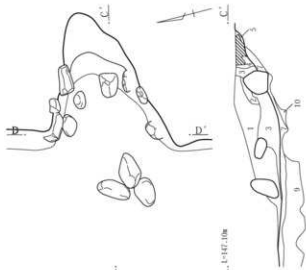
時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。



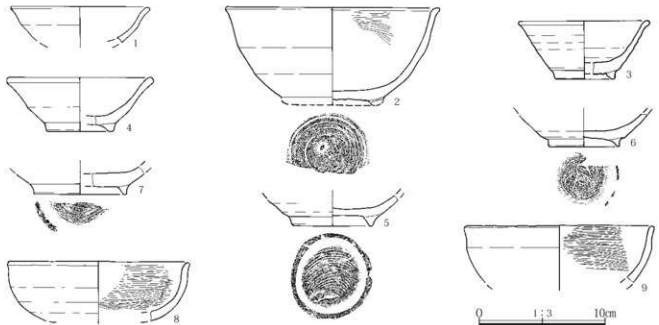
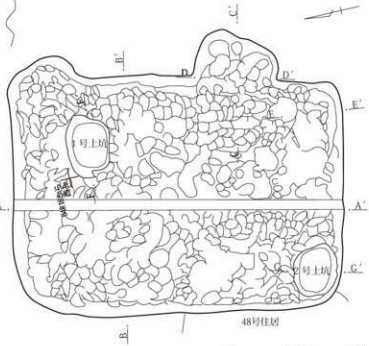
第151図 49号住居遺構図(1)

カマド

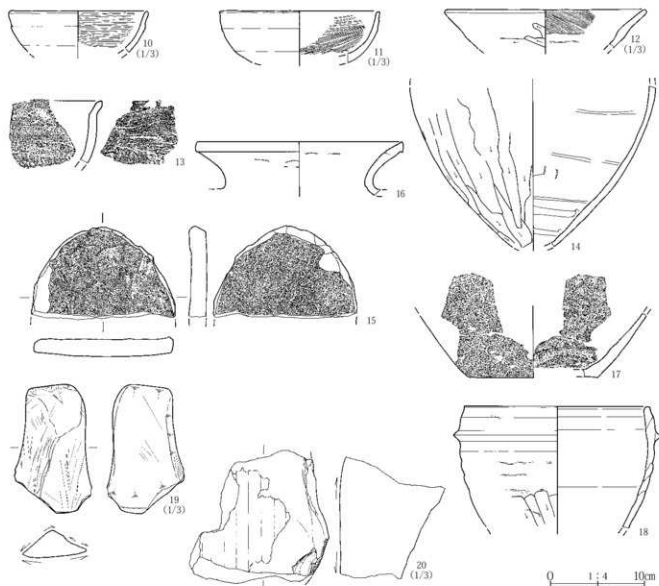
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C・ローム粒(ϕ 1~2mm)少混
- 2 にぶい黄褐色土 細粒・均質・密・ローム粒(ϕ 1~3mm)・焼土粒多混
- 3 にぶい黄褐色土 2と同質・焼土大粒で多混
- 4 1と2の混土
- 5 黒褐色土 地山か
- 6 ローム塊 明黄褐色土
- 7 黒褐色土 砂質・As-C・焼土粒(ϕ 1~3mm)微混・ローム粒~塊(ϕ 0.1~3cm)混入
- 8 にぶい黄褐色土 ローム多混・褐色土塊(ϕ 4~6cm)混入(カマド構築材)
- 9 黒褐色土 軽石・焼土・7と同じ・ローム粒~塊(ϕ 0.1~3cm)混入
- 10 暗褐色土 緻密・しまり弱い・焼土粒(ϕ 1~2mm)微混



- 1号土坑 F-F'
- 1 黒褐色土 As-C微混・黄褐色土塊(ϕ 1~4cm)混入
- 2号土坑 G-G'
- 1 黒褐色土 As-C・ローム粒(ϕ 5~10mm)・焼土粒(ϕ 1~2mm)微混



第152図 49号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第153図 49号住居遺物図(2)

50号住居(第154・155図 P.L.22・53)

位置 84QR18 形状 長方形

規模 長軸3.40m、短軸2.20m、残存壁高0.47m

面積 7.48㎡ 方位 N95° E

重複 51号住居よりも新しい。

床面 ロームまで掘り込み、7層による貼床。平坦で堅緻。3基の土坑を検出。長軸・短軸・深さは、1号が56・50・20cm、2号が44・34・5cm、3号が掘り方から94・74・18cmである。3号は、灰掻き穴で底に黒灰、上面を焼土混じりの土で貼床。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、貼付した粘土を掘り込んで作られている。燃焼部は箱型、壁外にある。底面の焼け方は強い。石は両方の袖口だけで、ほか粘土であ

る。石は丸くて偏平。左袖口にかかるのが3号土坑。

周溝 北西隅でL字形に検出された。幅が10～14cm、深さは5cm前後である。

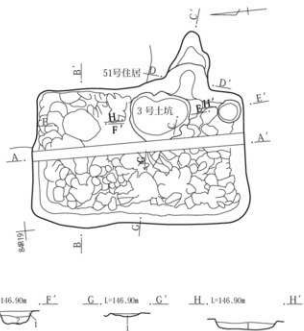
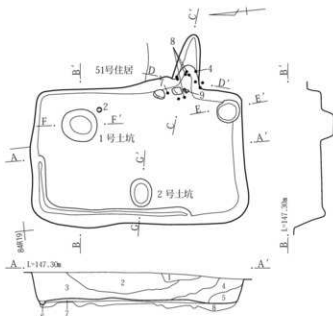
貯蔵穴 南東隅、方形、掘り方で検出したものを復元。規模は35・33・11cmである。

柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では175片、土師器環・埴、甕、灰軸陶器、須恵器環・埴、甕、羽釜がある。カマド内から羽釜、環、埴、釘が出土。1の環は判読不可の墨書土器。10の釘は先端を欠損している。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

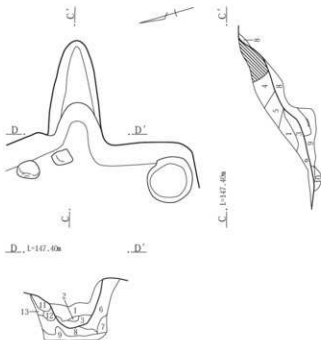


- 1 暗褐色土 表土・As-C・PPかFA軽石・ローム粒〜塊微混
- 2 黒褐色土 As-C多混・PPかFA軽石微混・ローム塊(φ0.5~2cm)微混
- 3 黒色土 2と同質、暗色みおびる
- 4 黒褐色土 2と同質・ローム・ローム粒混入、黄色みおびる部分あり
- 5 黒褐色土 ローム・遷移期の混土・軽石認められない
- 6 黒褐色土 砂質・ローム粒(φ1~10mm)多混(周溝フク上)
- 7 褐色土と黒褐色土の混土・As-C微混、堅緻(床硬化面)
- 8 暗褐色土 ローム混入・ローム塊(長径1~1.5cm)少混

- 1号土坑 F-F'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・ローム粒(φ1mm)少混・焼土粒混入
- 2 1にローム粒少混
- 2号土坑 G-G'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒(φ1~10mm)少混
- 3号土坑 H-H'
- 1 黒灰 上面には焼土混じりの暗褐色土貼っている

- E-E', 1:147.30m E-E'
- 1 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒(φ1~20mm)・焼土粒混入
 - 2 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒(φ1~5mm)少混・炭化物混入
 - 3 黒褐色土 細粒・均質・ローム粒(φ1~10mm)混入

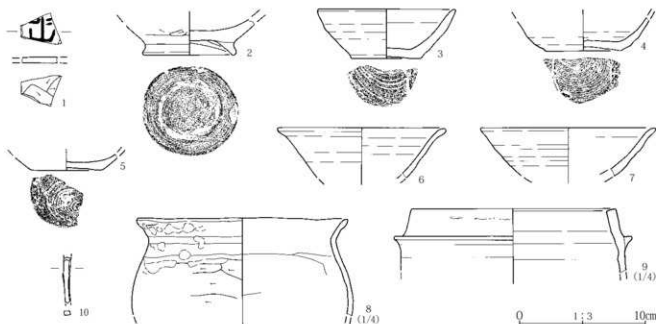
0 1:60 2m



- カマド
- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・ローム粒(φ1cm)少混・焼土粒微混
 - 2 焼土 赤褐色土・混入物多混
 - 3 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1~10mm)混入
 - 4 黒褐色土 ローム粒(φ1~10mm)微混
 - 5 黒褐色土 5よりローム多混・粒〜塊(φ0.1~4cm)少混
 - 6 暗褐色土 ローム粒〜塊(φ0.3~1cm)微混
 - 7 黒褐色土 ローム粒(φ1~10mm)・焼土粒(φ1.0~5cm)少混
 - 8 黒褐色土と焼土の混土・しまり強い
 - 9 黒褐色土 灰混入・ローム粒(φ1~10mm)・焼土粒(φ1mm)微混・しまり弱い
 - 10 黒褐色土 As-C・PPかFA軽石微混
 - 11 黒褐色土 ローム粒(φ0.5~1.5cm)微混
 - 12 暗褐色土 焼土多混・黒褐色土混入・しまり弱い
 - 13 暗褐色土 地山に類似・しまり弱い

0 1:30 1m

第154図 50号住居遺構図



第155図 50号住居遺物図

51号住居(第156～158図 P.L.22・53)

位置 84Q18・19 形状 方形

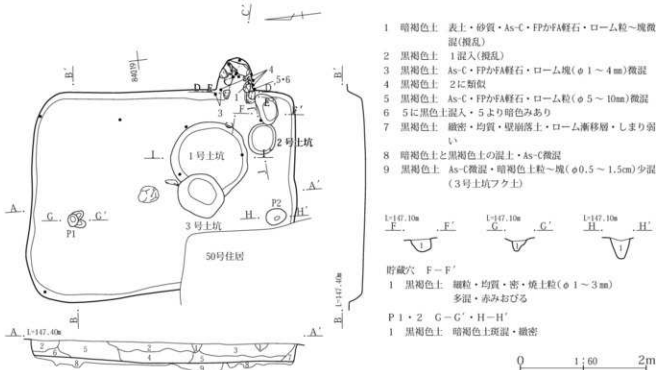
規模 長軸4.20m、短軸3.32m、残存壁高0.38m

面積 13.94㎡ 方位 N95° E

重複 50号住居よりも古い。1号～3号土坑床面 ローム漸移層まで掘り込み、8層による貼床。中央部に4層、5層と関係するの、黒いしみの跡がある。土間と想定

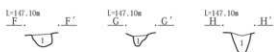
したが確定できなかった。このプラン内に1号と3号土坑がある。長軸・短軸・深さは1号が120・117・22cm、3号が75・66・20cmである。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、ロームまで掘り込み粘土で被覆した石組み構造。焚口をはじめ石を対に置き、煙道との境は偏平な石で蓋がされている。煙道までの長さ約60cm、焚口の幅27cmである。5層は、掘り方と



第156図 51号住居遺構図(1)

- 1 暗褐色土 表土・砂質・As-C・FPかFA軽石・ローム粒～塊殻混(粗乱)
- 2 黒褐色土 1混入(粗乱)
- 3 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・ローム粒(φ1～4mm)微混
- 4 黒褐色土 2に類似
- 5 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・ローム粒(φ5～10mm)微混
- 6 5に黒色土混入・5より暗色もあり
- 7 黒褐色土 緻密・均質・壁崩落土・ローム漸移層・しまり強い
- 8 暗褐色土と黒褐色土の混土・As-C微混
- 9 黒褐色土 As-C微混・暗褐色土粒～塊(φ0.5～1.5cm)少混(3号土坑アケ土)



貯蔵穴 F-F'

- 1 黒褐色土 細粒・均質・密・焼土粒(φ1～3mm)多混・赤みおびる

P1・2 G-G'・H-H'

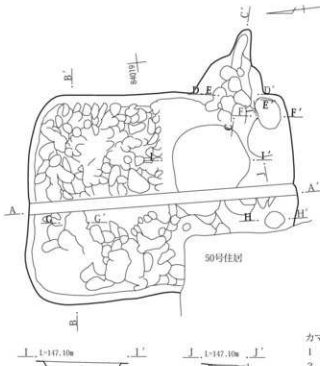
- 1 黒褐色土 暗褐色土混入・緻密

して図示したが煙道か。周溝 壁高いは低いが、はっきりとした掘り方ものではない。貯蔵穴 南東隅に新田2基が重複、新期は方形・長軸・短軸・深さは50・30・20cmである。覆土は焼土が多く、灰掻き穴として人為的に埋没か。底面に黒灰。古期は2号土坑で床面下にあり、48・43・22cmの規模である。柱穴 西寄りの長軸上に2基。長軸・短軸・深さは、P1が20・16・16cm、P2が

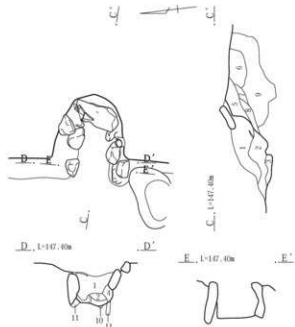
33・25・32cmである。埋没土 黒褐色土で埋没。

遺物出土状況 全体では143片、土師器杯・埴、甕、灰軸陶器、須恵器杯・埴、甕、瓶、羽釜がある。カマドから羽釜、甕、埴が出土。中央部の2点の石は覆土上位である。非掲載に鉄滓1点出土。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀前半とみられる。

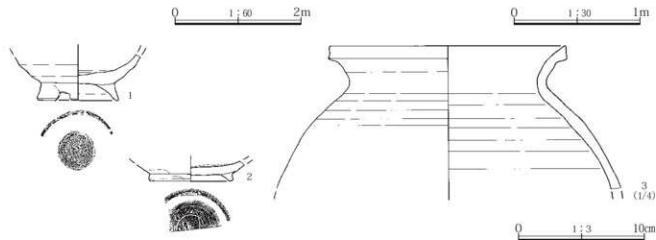


- 1号土坑 I-I'
- 黒褐色土・As-C微混・黄褐色土粒(φ1~8mm)少混
- 2号土坑 J-J'
- 黒褐色土・As-C微混・黒褐色土・黄褐色土粒(φ0.5~1cm)少混・堅緻・床硬化面
 - 黒色土・ローム粒(φ2~5mm)少混
 - ロームと暗褐色土の混土・地山のロームより暗色みおびる・しまり強い

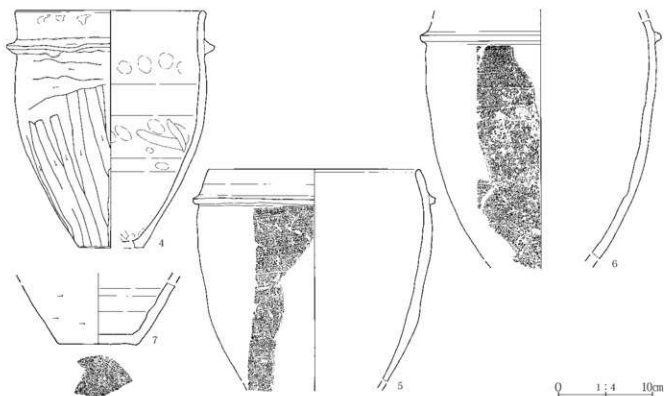


カマド

- 黒褐色土 細粒・均質・密・As-C・ローム粒・焼土粒微混
- 焼土 3より淡く赤化
- 焼土 地山のロームが赤化
- にぶい黄褐色土
- 黒褐色土 1と同質
- 黒褐色土 緻密・均質・As-C微混・しまり弱い
- 黒褐色土 砂質・5・6の中間・As-C・焼土粒微混
- 黒褐色土 緻密・均質・As-C・ローム粒(φ2~3mm)・焼土粒(φ1mm)微混
- 黒褐色土 緻密・均質・As-C微混
- 黒褐色土 緻密・焼土粒(φ1~5mm)微混
- 暗褐色土 As-C・ローム粒・焼土粒(φ1~2mm)微混・しまり弱い



第157図 51号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第158図 51号住居遺物図(2)

52号住居(第159・160図 P.L.22)

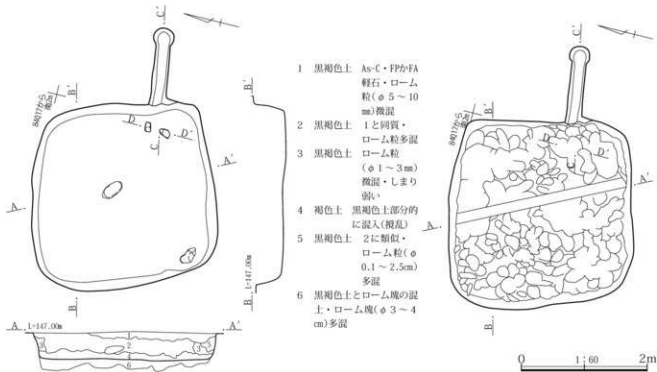
位置 84PQ16 形状 方形

規模 長軸2.95m、短軸2.95m、残存壁高0.45m

面積 8.70㎡ 方位 N72° E 重複 単独。

床面 ロームまで掘り込み、6層による貼床。平坦で堅緻。掘り方は壁沿いに一段深い土坑状のものが連続し、中央部が10cmほど高くなる。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、煙道は水平で長さ



第159図 52号住居遺物図(1)

125cmのトンネル、先端が直立。内部は焼けていない。掘りすぎで、対の袖石を残すだけであるが、壁との間は粘土で作られていたとみられる。

周溝 北の壁際だけであるが筋状に軟らかくて溝を思わせるような状況である。壁を被覆した跡ではないかとみられる。

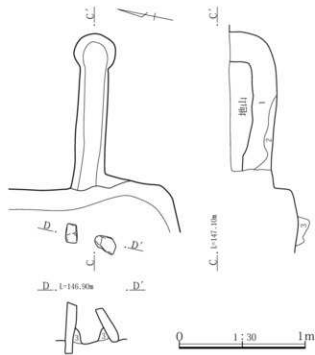
貯蔵穴 掘り方ではカマド脇が土坑のようにみえるが、特定できない。

柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土をロームの混入量で分けたが差は少ない。

遺物出土状況 全体では22片、土師器環・埴、甕、須恵器環・埴、甕の小片で接合例も少ない。取り上げた遺物はない。図示した中央にある石は床面よりも高い。

時期 古墳時代、決定できる資料は少ないが、住居の形状や出土した土器の特徴から7世紀代とみられる。



カマド

- 1 黒褐色土 ローム粒(φ2~3mm)少泥・焼土粒(φ1~2mm)微泥
- 2 暗褐色土 黒褐色土混入・焼土粒(φ1~2mm)微泥
- 3 暗褐色土と褐色土の混土・ローム粒~塊(φ0.5~1cm)微泥

第160図 52号住居遺構図(2)

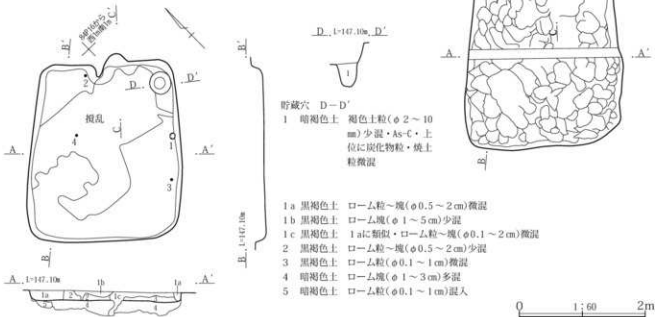
53号住居(第161・162図 P.L.22・53)

位置 84P15 **形状** 方形、掘乱から残る壁をつないでプランとする。掘り方で最終的に判断。カマド、床は掘乱されて、本来の箇所は少ない。

規模 長軸2.85m、短軸2.45m、残存壁高0.18m

面積 6.98㎡ **方位** N46° E **重複** 単独。

床面 4層による貼床、ロームまで掘り込んでいる。中央部の大半を掘乱されている。掘り方は、土坑のような



貯蔵穴 D-D'

- 1 暗褐色土 褐色土粒(φ2~10mm)少泥・As-C・上位に炭化物粒・焼土粒微泥

- 1a 黒褐色土 ローム粒~塊(φ0.5~2cm)微泥
- 1b 黒褐色土 ローム塊(φ1~5cm)少泥
- 1c 黒褐色土 1aに類似・ローム粒~塊(φ0.1~2cm)微泥
- 2 黒褐色土 ローム粒~塊(φ0.5~2cm)少泥
- 3 黒褐色土 ローム粒(φ0.1~1cm)微泥
- 4 暗褐色土 ローム塊(φ1~3cm)多泥
- 5 暗褐色土 ローム粒(φ0.1~1cm)混入

第161図 53号住居遺構図(1)

深い箇所はなく一面跡が連続した凸凹の状態である。
カマド 北東辺の中央に位置、ロームまで掘り込み粘土を使い作られている。煙道のほかは擾乱されている。良好な遺存状況であったとみられ、残された箇所では壁が焼け、焼土の量も多い。

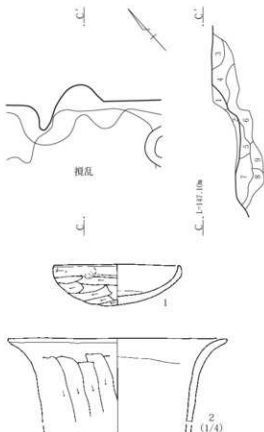
周溝・柱穴 検出されていない。

貯蔵穴 北東隅、擾乱でわからず掘り方で検出。長軸・

短軸・深さは35・33・35cmの円筒形である。出土した遺物はない。
埋没土 上位は広く擾乱されていて3層黒褐色土だけが残る。

遺物出土状況 全体では11片、南壁の際で土師器杯、カマドの近くで長胴甕の破片が出土している。

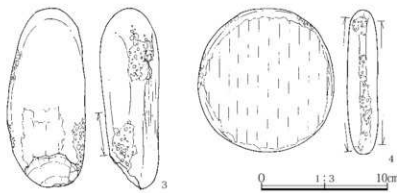
時期 奈良時代、出土した土器の特徴から8世紀前半とみられる。



カマド

- 1 黒褐色土 As-C・焼土粒(φ1~5mm)微混
- 2 黒色土と黒褐色土の混土・ローム粒~塊(φ0.3~4cm)少混
- 3 黒褐色土 As-C・焼土粒(φ1~2mm)微混・褐色土粒~塊(φ0.2~2cm)少混
- 4 黒褐色土 As-C・焼土粒(φ2~5mm)微混
- 5 暗褐色土 褐色土混入・塊(φ1~3cm)多混
- 6 暗褐色土 砂質・As-C・焼土粒(φ2~5mm)微混・ローム粒(φ1~10mm)少混
- 7 暗褐色土 6と同質・焼土粒6より多混
- 8 暗褐色土 As-C微混・ローム塊(φ1.5~4cm)混入・しまり強い
- 9 褐色土 As-C微混・ローム塊(φ1~2.5cm)混入・しまり弱い

0 1:30 1m



第162図 53号住居遺構図(2)・遺物図

54号住居(第163~165図 P.L.23・53・54)

位置 84NO14・15 **形状** 方形

規模 長軸5.08m、短軸4.95m、残存壁高0.48m

面積 25.15㎡ **方位** N54°E

重複 北と西辺を拡張して建て替えが1回されている。

床面 ロームまで掘り込み、4層・5層による貼床。掘り方は、主柱穴を結んだ外側から壁沿いまでが一段深く5~10cm深くなる。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、燃焼部を壁外に掘り込んで作られている。壁と袖口間の粘土は天井と共に崩落。焼土が多く、壁まで強く焼けている。

周溝 検出されていない。**貯蔵穴** 南東隅、1号が新期、

2号が古期である。長軸・短軸・深さは、1号が50・43・52cmの方形、2号が62・52・38cmの方形である。

柱穴 P1~P4が建て替え後の新期、P5・6・9・10が建て替え前である。長軸・短軸・深さは、P1が58・48・35cm、P2が50・48・49cm、P3が66・61・42cm、P4が68・65・53cmである。柱間は、P1とP2が203cm、P2とP3が175cm、P3とP4が222cm、P4とP1が192cmである。P1の底面には白色粘土が貼付されている。P5が46・40・26cm、P6が30・20・57cm、P7が33・30・40cm、P8が27以上・20以上・52cm、P9が57・40・35cm、P10が26・22・54cm、P11が24・20・65cmである。柱間は、P10とP11が200cm、P11とP6

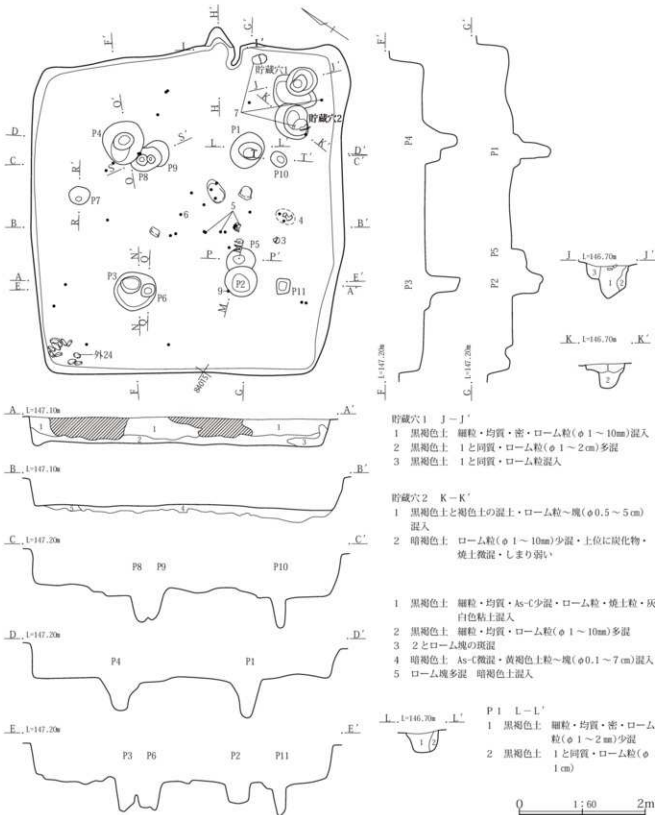
が214cm、P 6とP 9が207cm、P 9とP 10が207cmである。

埋没土 黒褐色土、暗褐色土による自然埋没である。

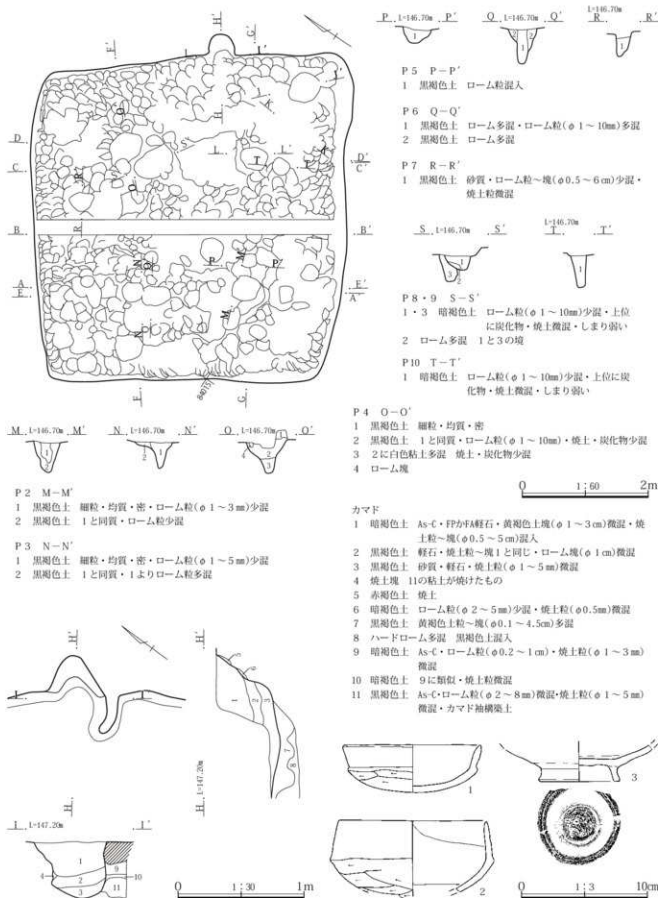
遺物出土状況 全体では574片、カマドから中央部に多い。石が混在していて、床面より5～15cm高い。南西

隅の床に11点のこも編み石が集中。土師器環・埴、鉢、台付甕、甕、灰釉陶器、須恵器環・埴がある。

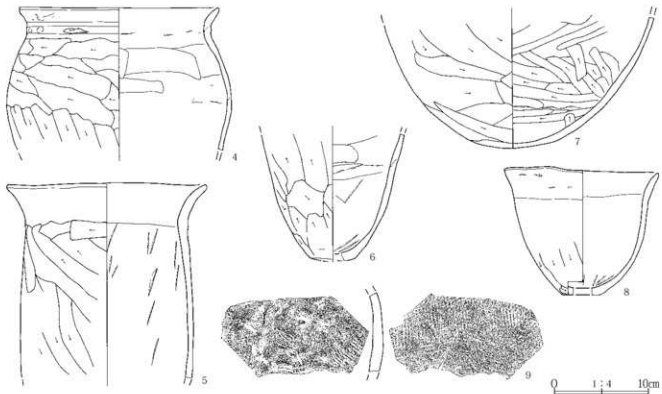
時期 古墳時代、出土した土器の特徴から6世紀末～7世紀前半とみられる。



第163図 54号住居遺構図(1)



第164図 54号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第165図 54号住居遺物図(2)

55号住居(第166～168図 P L.23・54)

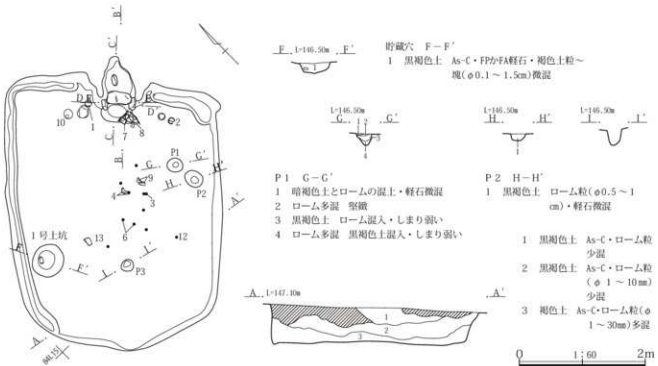
位置 84 K 14・15 形状 方形

規模 長軸4.35m、短軸3.40m、残存壁高0.65m

面積 14.79㎡ 方位 N41° E 重複 北東にある61

号住居より新しい。床面 ロームまで掘り込み、ローム混土による貼床。平坦で堅緻。南西隅寄りで1号土坑を検出。長軸・短軸・深さは53・48・18cmである。

カマド 北東辺の中央を壁外に掘り込み、4層を貼付し



第166図 55号住居遺構図(1)



貯蔵穴 F-F'
I 黒褐色土 As-C・FP2FA軽石・褐色土粒～塊(φ0.1～1.5cm)微混



P1 C-C'

- 1 暗褐色土とロームの混土・軽石微混
- 2 ローム多混 堅緻
- 3 黒褐色土 ローム混入・しまり弱い
- 4 ローム多混 黒褐色土混入・しまり弱い

P2 H-H'

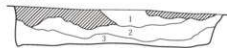
- 1 黒褐色土 ローム粒(φ0.5～1cm)・軽石微混

1 黒褐色土 As-C・ローム粒少混

2 黒褐色土 As-C・ローム粒(φ1～10mm)少混

3 褐色土 As-C・ローム粒(φ1～30mm)多混

A, I-147.10m



0 1:60 2m

て作られている。1層が崩落した天井で、焚口には石が鳥居状に組まれ、壁との間は粘土質の褐色土でふさがれている。内部は強く焼け、支脚が残されている。

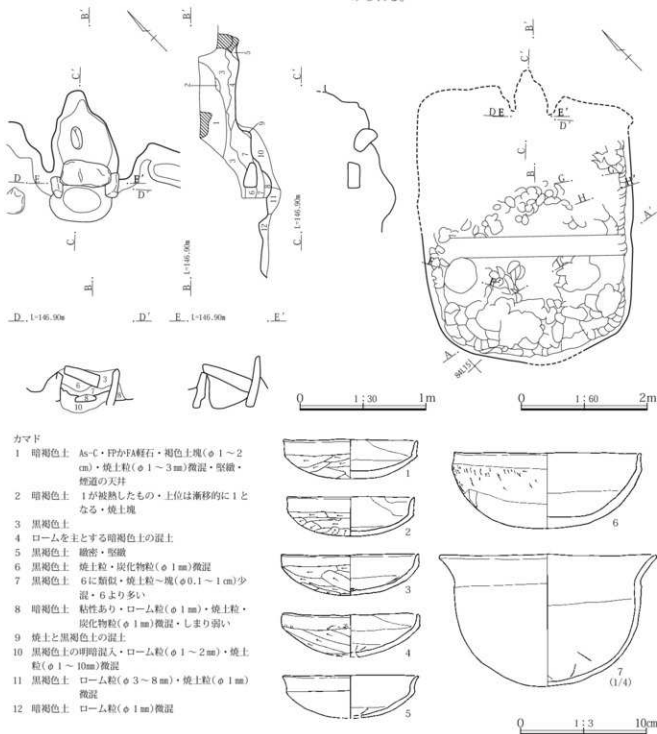
周溝 西辺と北辺で検出された。幅、深さともに5cm前後である。**貯蔵穴** カマド脇にはなく、南西隅にある1号土坑が該当。規模は先述のとおり。**柱穴** 長軸・短軸・深さは、P1が25・22・17cm、P2が30・25・10cm、P

3が21・18・26cmである。規模、位置が揃って対応する関係にはない。浅いがP1は二重の方形をしている。

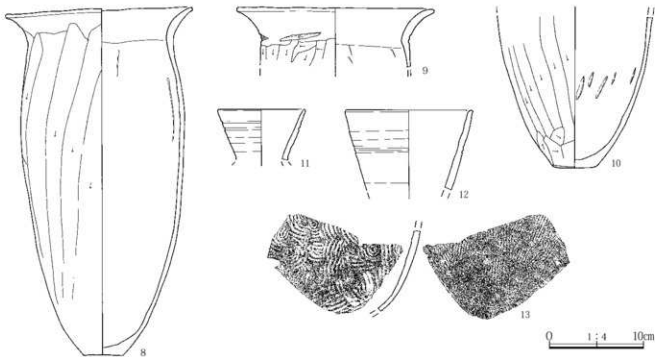
埋没土 暗褐色土、黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では184片、土師器環・埴、鉢、甕、須恵器環・埴、甕、瓶がある。中央部では位置が床面から10cm前後高い。焚口の前では長胴甕、丸底鉢、環が出土。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から7世紀後半とみられる。



第167図 55号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第168図 55号住居遺物図(2)

56号住居(第169・170図 P.L.23・54)

位置 84OP17・18 形状 方形

規模 長軸3.28m、短軸3.03m、残存壁高0.20m

面積 9.94㎡ 方位 N101° E

重複 古い方から59号、58号、56号、57号住居の順である。床面 ロームまで掘り込み、薄い貼床である。

カマド 東辺の南東隅に位置、粘土被覆の石組み構造。煙道は削平。鳥居状に組んだ焚口から半円状の燃焼部まで、石がすき間なく使われている。1層が天井ならびに壁材である。中央にある支脚は高さ17cmである。

周溝 北の壁際が窪んでいる。

貯蔵穴 南西隅にあったものが57号住居の重複で消失したのか、検出されていない。

柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で埋没している。

遺物出土状況 全体では51片、土師器杯・埴、灰軸陶器、須恵器杯・埴、瓶、羽釜がある。カマドから羽釜が出土。57号住居跡北東隅にある5点の石は、本カマドのものである。ほかに角のある棒状鉄製品1、埴型滓1がある。

時期 平安時代、カマドから出土した土器の特徴から10世紀後半とみられる。

57号住居(第169・170図 P.L.23・54)

位置 84OP17 形状 方形

規模 長軸2.80m、短軸2.73m、残存壁高0.18m

面積 7.64㎡ 方位 N104° E

重複 56号住居～59号住居より新しい。古い方から59号、58号、56号、57号の順である。

床面 56号・59号との重複部分にローム混土で貼床。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、59号住居埋没土を掘り込んでローム主混土を半円状に貼付した上に、さらに粘土を貼付している。ローム混土の厚さは2～3cm、粘土は最大で10cmである。支脚のまわりから煙道にかけて強く焼けている。ロームをはさんで、焼土が上下に2層あることから作り替えと判断。幅40cmの焚口は、作り替えによる2基分が重複したものである。周溝・貯蔵穴・柱穴 検出されていない。埋没土 黒褐色土で埋没。

遺物出土状況 全体では101片、土師器杯・埴、灰軸陶器、須恵器杯・埴、蓋、甕、塀がある。カマド内で羽釜、住居中央で人頭大の大きさの石が出土。北東隅の石は煤が付着、カマドで使われたものであるが本跡に伴うものが不明である。

時期 平安時代、カマドから出土した土器の特徴から10世紀後半～11世紀前半とみられる。

58号住居(第169・170図 P.L.24・55)

位置 84O17 形状 長方形

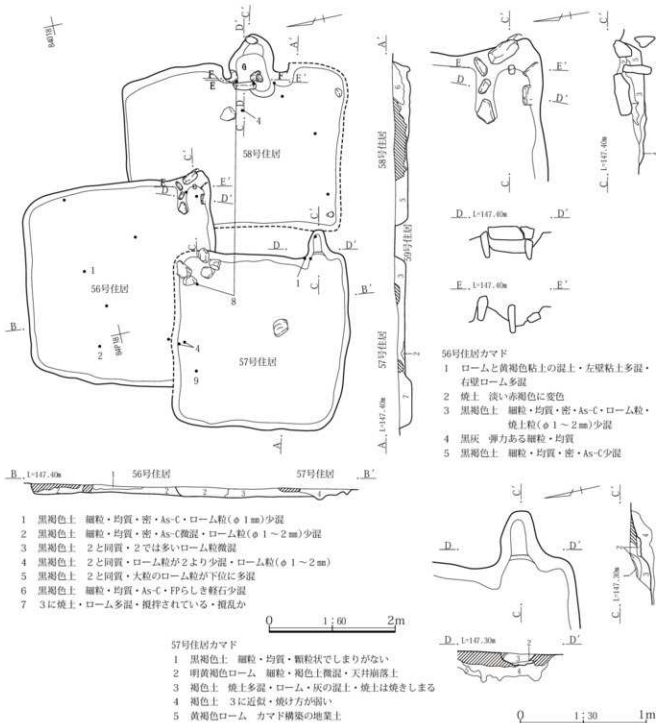
規模 長軸3.53m、短軸2.62m、残存壁高0.29m

面積 9.25㎡ 方位 N101° E

重複 古い方から59号、58号、56号、57号住居の順である。床面 59号住居とはほとんどが重複、掘り込んだ埋没土をそのまま床としている。

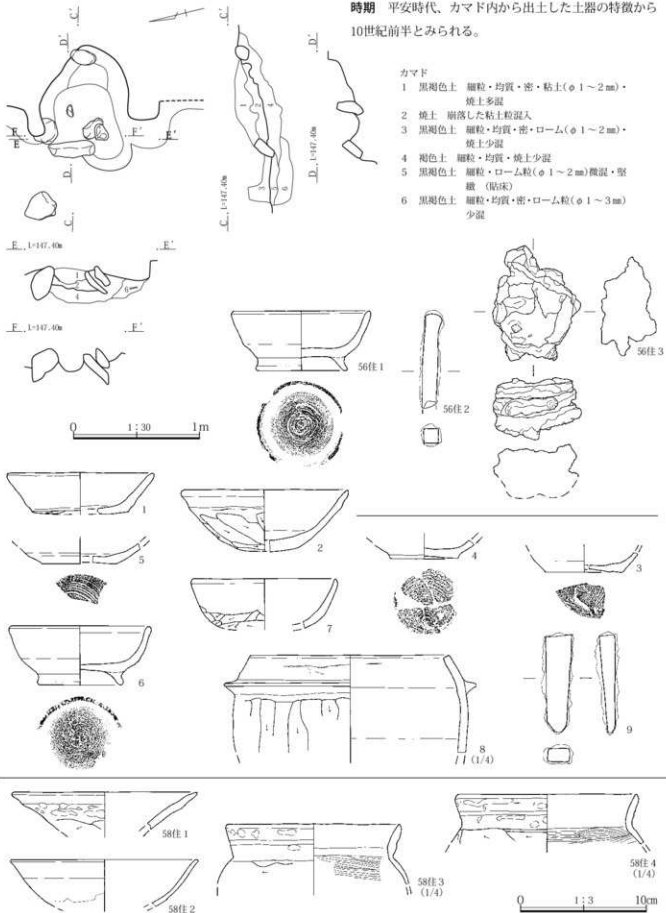
カマド 東辺の南東隅寄りに位置、粘土被覆の石組み構

造。煙道は削平、焚口は鳥居状に組んだ石を粘土で被覆、そのまま天井を作る。支脚が左に寄っていることから2穴式の構造か、作り替えがされているとみられる。右袖口の石は二重に立てられている。周溝・貯蔵穴・柱穴 検出されていない。埋没土 黒褐色土で埋没している。遺物出土状況 全体では157片、カマド内からその周囲に分布。土師器環・埴、甕、台付甕、灰軸陶器、須恵器環・埴、甕、瓶、羽釜がある。



第169図 56～58号住居遺構図(1)

時期 平安時代、カマド内から出土した土器の特徴から
10世紀前半とみられる。



第170図 58号住居遺構図・56~58号住居遺物図

59号住居(第171～174図 P.L.24・55)

位置 84N～P16・17 形状 方形

規模 長軸6.15m、短軸6.10m、残存壁高0.44m

面積 37.52㎡ 方位 N97° E 重複 古い方から59号、58号、56号、57号住居の順である。床面 ロームまで掘り込んで、ロームと黒褐色土の混土で貼り床、薄い硬化面がある。南辺の周溝が途切れた所が入口らしく、半円形に窪んでいる。掘り方は主柱穴を結んだ内側が高く、壁沿いが約1.5mの幅で一段低い。

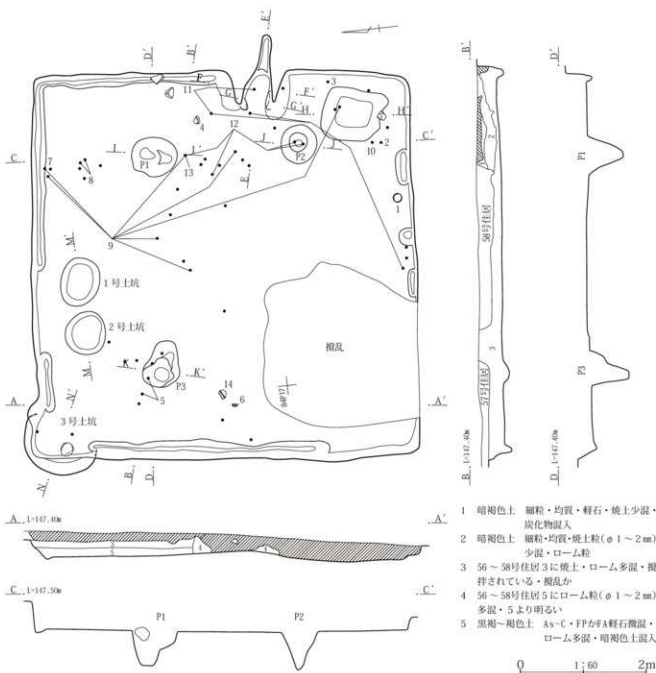
カマド 東辺の中央に位置、全長が2m近い大型。掘り

残したロームを芯にして粘土を貼付して作られている。左袖石と支脚が残され、右袖口には据えた穴がある。

周溝 西、北、東の3辺で検出された。幅11～18cm、深さ5～10cmである。南は断続的である。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは95・83・61cmの方形である。上端は床面と1cmの段差があり、上蓋用とみられる。

柱穴 4本組主柱穴のうち3本を検出。長軸・短軸・深さはP1が72・60・43cm、P2が62・56・46cm、P3が75・58・55cm、P4が45・43・12cmである。間隔はP1



第171図 59号住居遺構図(1)

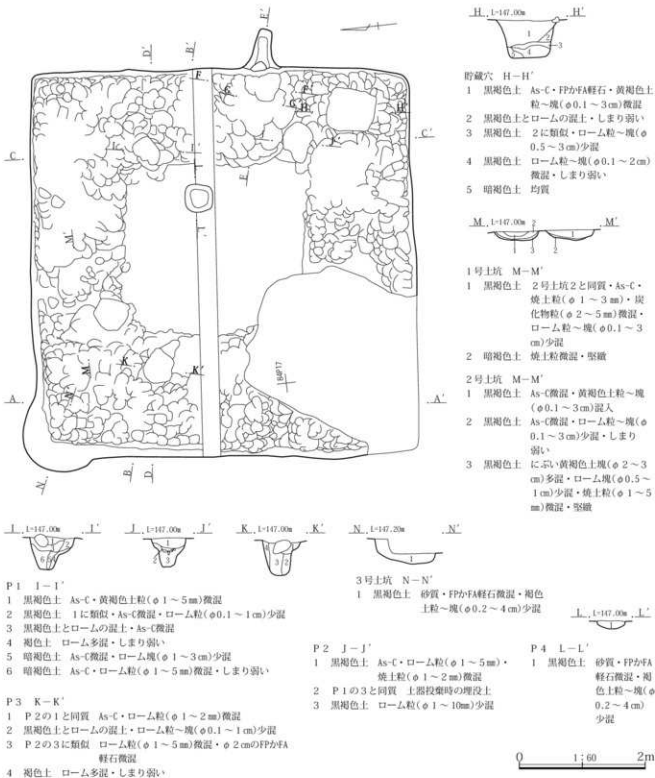
とP2が350cm、P1とP3が243cmである。P1は二重の掘り方が特徴で、P2は覆土上位で遺物が出土、柱抜き取り後に埋めたか。P3は底面近くに人頭大の大きさの石が複数ある。P4は覆土に炭化物が多く、掘り方で検出した。土坑は1号が77・61・16cm、2号が70・64・17cm、3号が124・95以上・39cmである。2号だけ底面

に粘土を貼る。3号は57号住居に伴うものか。

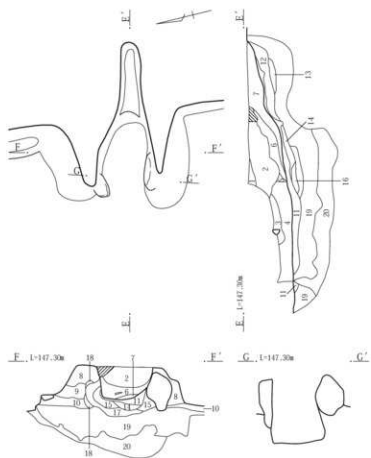
埋没土 暗褐色土、焼土と炭化物が多く混入する。

遺物出土状況 全体では145片、土師器環・埴、鉢、甕、高坏、須恵器環・埴、蓋、羽釜がある。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から6世紀末～7世紀前半である。

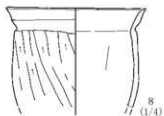
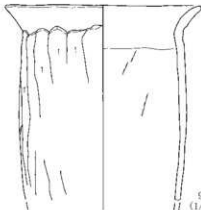
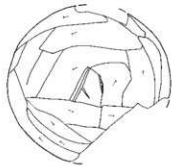
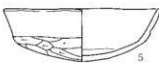
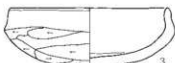


第172図 59号住居遺構図(2)



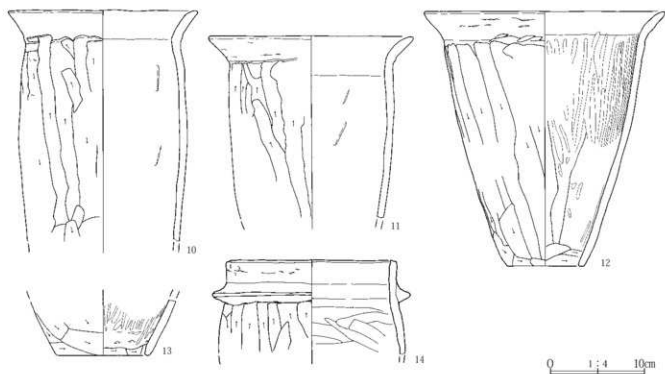
- カマド
- 1 黒褐色土 As-C・褐色土粒(φ1~2mm)・焼土粒(φ1mm)微混
 - 2 黒褐色土 As-C・ローム粒・焼土粒(φ2~5mm)微混
 - 3 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石微混・ローム粒(φ2~5mm)少混
 - 4 暗褐色土 As-C・ローム粒(φ1~5mm)・焼土粒(φ1mm)微混
 - 5 ローム多混 焼土混入
 - 6 黒褐色土 焼土粒(φ1~10mm)・ローム粒(φ5~10mm)微混
 - 7 暗褐色土と焼土の混土・焼土粒(φ1~10mm)少混
 - 8 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石・ローム粒~塊(φ1~15mm)・焼土粒(φ1mm)微混
 - 9 黒褐色土とロームの混土・As-C・FPかFA軽石・焼土粒~塊(φ1~15mm)微混
 - 10 黒褐色土 黒褐色土少混・FPかFA軽石微混・ローム粒~塊(φ1~25mm)少混
 - 11 暗赤褐色土 焼土多混・ローム粒(φ2~5mm)微混(火床面)
 - 12 暗褐色土と黒色土の混土・焼土粒~塊(φ1~20mm)少混
 - 13 焼土と暗褐色土の混土
 - 14 黒褐色土 炭混入・焼土粒(φ1mm)微混・しまり強い
 - 15 黒褐色土 As-C・FPかFA軽石微混・焼土粒~塊(φ1~5mm)少混
 - 16 黒褐色土 焼土粒~塊(φ1~5mm)微混
 - 17 11と同質 (田カマド火床面)
 - 18 ローム多混
 - 19 黒色土 As-C・FPかFA軽石微混・ローム粒~塊(φ1~20mm)少混
 - 20 ローム多混 暗褐色土混入・ロームは塊(φ15~40mm)に混入

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第173図 59号住居遺構図(3)・遺物図(1)



第174図 59号住居遺物図(2)

60号住居(第175図)

位置 84K16・17 **形状** 推定長方形、擾乱され、カマドと壁をつないでプランとした。床は北東隅で段差があり、中央に設けたトレンチの様子では東に30cm前後広がる可能性がある。

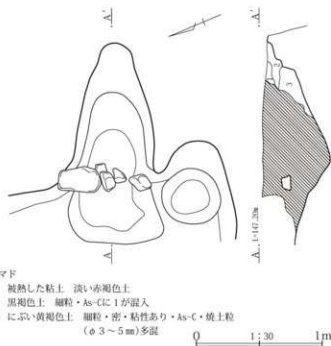
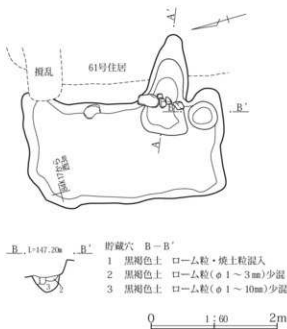
規模 長軸3.13m、短軸1.60m以上、残存壁高0.22m

面積 5.01m²以上 **方位** N102° E

重複 61号住居よりも新しい。

床面 ロームは北東隅だけで、ほかは擾乱されているかロームと黒褐色土の混土による貼床である。

カマド 東辺の南東隅寄りに位置、61号住居埋没土を掘り込み粘土を貼付して作られている。焼土塊と石が散在、



第175図 60号住居遺構図

焚口は石組みであったことがわかる。

周溝 検出されていない。

貯蔵穴 南東隅、長軸・短軸・深さは45・45・27cmの円形である。

柱穴 検出されていない。

埋没土 黒褐色土で自然埋没している。

遺物出土状況 全体で80片、土師器杯・埴、甕、須恵器杯・埴、甕、刀子の破片1点がある。

時期 平安時代、出土した土器の特徴から10世紀代である。

61号住居(第176～178図 P.L.24・55・56)

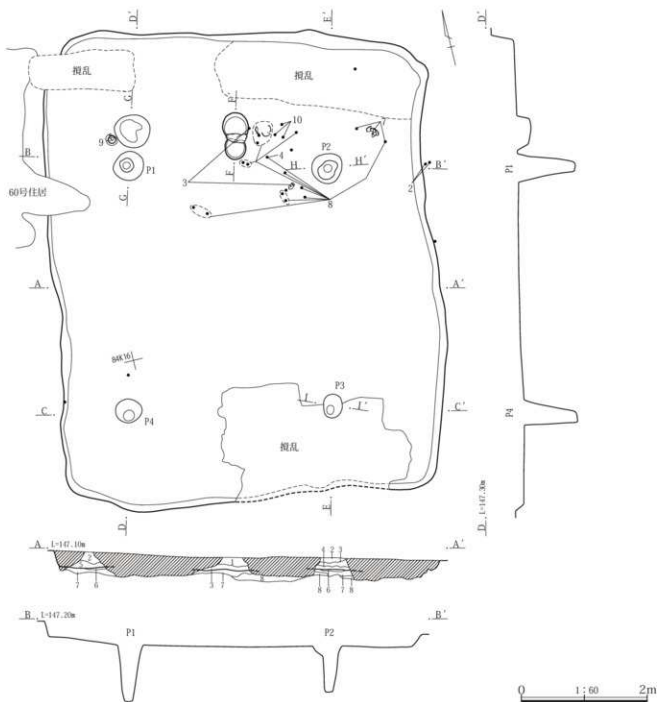
位置 84I～K15～17 形状 方形、北西隅から北壁の東寄りにはプランのずれがあり、建て替えの可能性はある。

規模 長軸7.40m、短軸6.08m、残存壁高0.30m

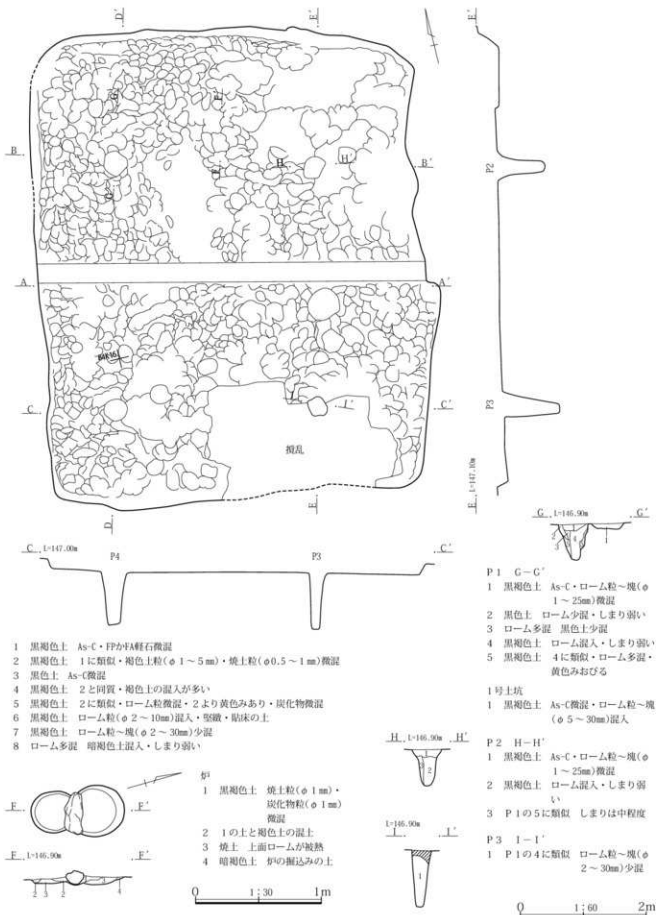
面積 44.99㎡ 方位 N14° E

重複 55号・60号住居よりも古い。

床面 ロームまで掘り込み、ロームと黒褐色土との混土で貼床。



第176図 61号住居遺構図(1)



第177図 61号住居遺構図(2)

炉 壁からは1.25m離れた中央北寄り、石をはさんで北と南に円形の掘り込みがある。強く焼けた北を主に併存、南は火力調整のために使われていたのではないか。

周溝 検出されていない。

貯蔵穴 掘り方でも相当するものがない。

柱穴 4本組主柱穴。長軸・短軸・深さはP1が47・44・57cm、P2が49・47・58cm、P3が37・30・90cm、P4が42・37・84cmである。間隔はP1とP2が318cm、

P2とP3が385cm、P3とP4が315cm、P4とP1が393cmである。P2とP4は底面に柱の痕跡がある。

埋没土 黒褐色土で床面まで埋没。ロームが壁際で多く混入する。

遺物出土状況 全体で133片、土師器鉢、小型壺、壺、器台がある。8はがの周囲つぶれていたものが接合。

時期 古墳時代、出土した土器の特徴から3世紀後半とみられる。



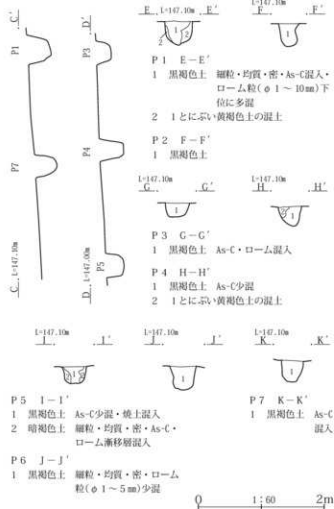
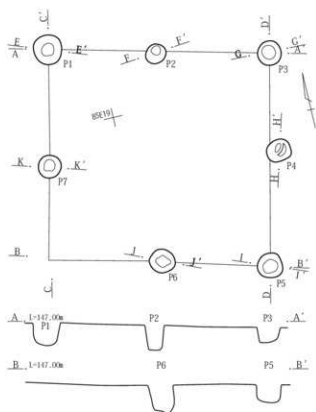
第178図 61号住居遺物図

2 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第179図 第20表 P.L.25)

位置 85 D E 18・19

規模 東西棟、梁間2間×桁行2間、梁間342cm、桁行353cm 南西隅の1本はない。



第179図 1号掘立柱建物遺構図

2号掘立柱建物(第180図 第20表 P.L.25)

位置 95 C D 1

規模 梁間1間×桁行1間。梁間210cm、桁行235cm、柱穴の直径は最大でも25~30cmの円形か方形で、1号のものより細い。北東隅は35号土坑の重複で消失したとみられる。

柱間 P1-P2が235cm、P2-P3が210cmである。

方位 西辺N10°W

重複 41・45号土坑より新しい。

時期 As-B混黒褐色土で埋没。

3号掘立柱建物(第180図 第20表 P.L.25)

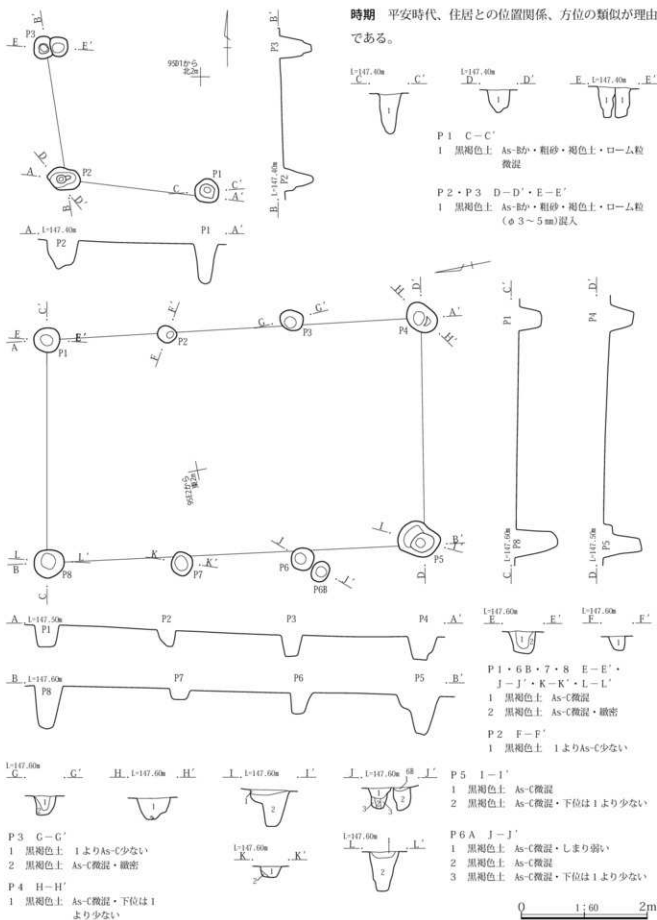
位置 95 D E 1・2

規模 南北棟、梁間1間×桁行3間、梁間352・360cm、桁行592・596cmである。

柱間 P1-P2が195cm、P2-P3が193cm、P3-P4が204cm、P4-P5が360cm、P5-P6が193cm、P6-P7が192cm、P7-P8が211cm、P8-P1が352cmである。方位 N9°E

重複 プラン内に33・34号住居があり、2号掘立柱建物とも近い。

第5章 胴城遺跡の調査



第180図 2・3号掘立柱建物遺構図

3 土坑(付図)

土坑は63基検出された。いずれも出土した遺物は少ない。時期を特定できたのは、縄文時代が16基、平安時代13基である。残りは掘立柱建物の柱穴、住居に付随した土坑などがあるとみられるが断定を避けた。

縄文時代の土坑は、位置が10号溝の西側に限られている。旧石器確認調査を行ったところで検出されることが多く、55号～63号土坑のようにハードローム面になって検出されたことをみると、調査漏れも十分に考えられる。30号土坑ほど深くないが、用途としては断面形からみて貯蔵用とみてよいだろう。ただ台地の中でもやや低くなる中央部に多いというのは何を意味しているのだろうか。谷頭に北にあって貯蔵用の土坑が集まるような場所でもあったのか。住居とは大きく離れているだけに、立地としては気になるところである。大半は12号住居と同じ前期中葉黒浜式・有尾式の時期とみられるが、出土した遺物は少なく決定要素に乏しい。覆土の特徴から推定したものがほとんどで、一様に固く締まっている。調査区外では中期後半～後期にかけての遺物の方が多く散布している。石器の中にも銅型石斧があつて中期、後期の存在も濃厚で、遺構の可能性も高いと言える。その意味では前期以外の土坑が含まれているといえるが、覆土からでも区別できるような状況ではない。

平安時代では、掘立柱建物を検討してみたが32～38号住居付近に集中している。用途については遺物がなく、不明のものがほとんどである。例外が36号のように土器のほかに焼土が検出された土坑である。46号では壁までが焼けていて火を焚いた、住居に伴う屋外施設とした。ただ土器は塊だけで裏はない。さらに焼けたような痕跡も乏しい。ほかに焼土が混入しているものはあつたものの、先の2基ほど顕著な例はない。用途では25号が大型であることから竪穴状遺構としたほかに、55号が約1m四方のしっかりとした掘り方で注目である。しかし、いずれも時期を特定できる遺物が出土していない。

1号土坑(第181図)

位置 95K4、2号土坑、1号、2号ピットとは列をなし、5号溝の延長線上に位置する。**形状** 円形、断面漏斗状 **規模** 長軸・短軸・深さは72・70・38cm

覆土の特徴 灰黄褐色土で埋没。底面まではロームとの混土である。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降のものか。

2号土坑(第181図)

位置 95K4、1号土坑、1号、2号ピットとは列をなし、5号溝の延長線上に位置する。**形状** 円形、西側の底面に段差があり、2基が重複しているようである。

規模 長軸・短軸・深さは58・53・22cm

覆土の特徴 灰黄褐色土で埋没している。底面はロームとの混土である。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降のものか。

3号土坑(第181・185図 P.L.56)

位置 95K L3 **形状** 楕円形、N9°W、北側の底面に階段式の段差がある。2基か3基が重複しているようである。**規模** 長軸・短軸・深さは262・113・83cm

覆土の特徴 中位を黒褐色土が占め、2層の黒色土には鉄分が浸み込み住居上層を覆う土層とよく似ている。鉄分は5号溝の底面にみられるのと同じである。底面の4層はローム崩壊土である。

出土遺物 須恵器製の口縁部破片は、同一の個体が1・2・5号溝からも出土し接合している。

所見 時期不明、近世以降でも5号溝に先行か。8号土坑より新しい。

4号土坑(第181図)

位置 95M1、3号溝に重複 **形状** 楕円形、断面漏斗状、N35°W **規模** 長軸・短軸・深さは108・66・54cm

覆土の特徴 1層褐灰色土、2層灰黄褐色土で埋没している。**出土遺物** 土師器製の小片が出土した。図示可能なものはなかった。

所見 時期不明、近世以降か。3号溝より古い。

5号土坑(第181図)

位置 95J K2、3号溝と5号溝の交点から北東1mに位置し、長軸は3号溝と平行している。**形状** 楕円形、断面塊状、N52°W **規模** 長軸・短軸・深さは128・86・18cm

覆土の特徴 As-C混入黒色土で埋没している。炭化物がまばらに混入。**出土遺物** 須恵器製、羽釜の小

片が出土。図示可能なものはなかった。

所見 時期不明、近世以降か。5溝の底面にある鉄分凝集を切る。5溝より新しい。

6号土坑(第181図)

位置 95 I 2・3、7号土坑の北に並んで位置する。
形状 円形、断面箱形 **規模** 長軸・短軸・深さは64・55・29cm **覆土の特徴** 褐灰色土で埋没し、中位にはローム塊がある。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。

7号土坑(第181図)

位置 95 I 2、6号土坑の南に並んで位置する。
形状 楕円形、N78°W **規模** 長軸・短軸・深さは62・42・21cm **覆土の特徴** 灰黄褐色土、黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。

8号土坑(第181図)

位置 95 K L 3、3号土坑と重複 **形状** 円形
規模 長軸・短軸・深さは77・75±・27cm
覆土の特徴 褐灰色土で埋没し、7号土坑の3層に似ている。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。3号土坑より古い。

9号土坑(第181図)

位置 85 N 19・20、10号土坑の壁から西へ50cmの所に位置している。**形状** 円形、断面漏斗状、底面は凸凹している。**規模** 長軸・短軸・深さは64・60・37cm
覆土の特徴 灰黄褐色土と黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。

10号土坑(第181図)

位置 85 N 19・20、9号土坑の壁から東へ50cm
形状 長方形、N25°W、南側が深くなる。
規模 長軸・短軸・深さは124・86・26cm
覆土の特徴 底面にロームがあって黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。

11号土坑(第181図)

位置 85 L 18、12号土坑の東壁に重複 **形状** 円形
規模 長軸・短軸・深さは64・58・27cm
覆土の特徴 灰黄褐色土で埋没している。固く締まる。11号との区別は明暗の差だけである。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。12号より新しい。

12号土坑(第181図)

位置 85 L 18、東壁に11号土坑が重複。**形状** 円形
規模 長軸・短軸・深さは110・102・31cm
覆土の特徴 灰褐色土で埋没し固く締まる。底面に薄くロームがある。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。11号より古い。

13号土坑(第181図)

位置 85 K 19、4号溝と重複。**形状** 円形
規模 長軸・短軸・深さは97・82・22cm
覆土の特徴 黒褐色土で埋没している。底面に暗灰黄褐色土があり、ロームが多く混入している。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。4号溝より古い。

14号土坑(第181図 P L .27)

位置 85 K L 17 **形状** 方形 **規模** 長軸・短軸・深さは162・131±・71cm **覆土の特徴** 中位にロームをはさんで黒褐色土と黒色土、褐灰色土が西側にむかって堆積している。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。ロームが反転して倒木痕ではないか。

15号土坑(第181図 P L .27)

位置 85 K 16 **形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは88・72・29cm **覆土の特徴** 灰黄褐色土で埋没している。砂粒を含む。出土した遺物はない。
所見 時期不明、近世以降か。

16号土坑(第181図 P L .27)

位置 85 I J 16、4号住居の西に隣接している。**形状** 円形、断面が箱形で壁は垂直である。底面は平坦。
規模 長軸・短軸・深さは178・176・100cm

覆土の特徴 ロームを多く含む黄褐色土をはさんで、上下に黒褐色土がレンズ状の互層状態で堆積している。17号とよく似た状況で、東方向からの人為的な埋没とみられる。出土した遺物はない。

所見 古代の土坑である。

17号土坑(第182図 P L .27)

位置 85 I 16・17、4号住居の北に隣接している。

形状 円形、断面が箱形で、壁は外側に傾斜している。底面は平坦。**規模** 長軸・短軸・深さは205・192・101 cm **覆土の特徴** 黒褐色土、灰褐色土、灰黄褐色土などがレンズ状の互層状態に堆積している。16号土坑とよく似た状況で、東方向からの人為的な埋没とみられる。

出土遺物 須恵器碗の小片が出土。混入とみられ図示可能なものはなかった。

所見 古代の土坑である。

18号土坑(第182図)

位置 85 J 19・20、5号溝に重複。**形状** 楕円形、N28° W **規模** 長軸・短軸・深さは112・88・37 cm

覆土の特徴 大半が黒褐色土で埋没し、底面にローム塊、暗褐色土がある。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降か。5号溝より古い。

19号土坑(第182図)

位置 85 I 19、ピット群の中にある。**形状** 楕円形、N67° W **規模** 長軸・短軸・深さは85・58・34 cm

覆土の特徴 暗褐色土、灰黄褐色土で埋没している。ともに固く締まっている。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降か。

20号土坑(第182図)

位置 85 G 17、ピット群の南東端に位置する。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは68・61・26 cm

覆土の特徴 灰褐色土で埋没している。上位は黒味が強い。固く締まっている。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降か。大型のピットか。

21号土坑(第182図)

位置 85 G 17、20号土坑から南へ1.20m、ピット群の南

東端に位置する。**形状** 楕円形、N65° E **規模** 長軸・短軸・深さは80・51・61 cm

覆土の特徴 黒褐色土とロームを含んだ暗灰黄色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降か。大型のピットか。

22号土坑(第182図)

位置 85 I 19・20 **形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは93・86・17 cm **覆土の特徴** ほとんどが黒褐色土で埋没している。底面にあるにぶい黄褐色土はロームが多く、掘りすぎの可能性もある。出土した遺物ない。

所見 時期不明、近世以降か。

23号土坑(第182・185図 P L .12・27・56)

位置 95 G 3、8号住居の北東端から約1 mに位置する。

形状 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは109・100・33 cm

覆土の特徴 2層の黒褐色土には炭化物が混入している。**出土遺物** 10世紀代の須恵器碗1点を取り上げるが、埋没時に混入したものである。

所見 時期不明、近世以降か。

24号土坑(第182図 P L .12)

位置 95 G H 3、調査区の北壁にかかり南半分を検出。

形状 推定方形 **規模** 長軸・短軸・深さは54+・96・24 cm **覆土の特徴** にぶい黄褐色土、黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 時期不明、近世以降か。

25号土坑(第182・185図 P L .11・56)

位置 85 G 20、6号、7号、9号住居に近く、6号住居東壁から1.20m、長軸方向は平行している。

形状 長方形、N9° E、底面は平坦。**規模** 長軸・短軸・深さは322・167・72 cm **覆土の特徴** 中位の褐灰色土をはさんで上下の灰黄褐色土で埋没している。**出土遺物** 5世紀代の高坏脚部を取り上げたが埋没時の混入遺物である。ほかにも土師器環の小片3片が出土している。

所見 平安時代、住居半分ほどの床面積で竪穴状遺構か。

26号土坑(第182図 P L .27)

位置 85 K 16・17、旧石器確認調査グリッド、ソフトロー

ム面で検出。**形状** 楕円形、その南側 **規模** 長軸・短軸・深さは102+・108・87cm、深さは1mを越すとみられる。**覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土とにぶい黄褐色土の斑混土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 縄文時代、検出状況からみて落とし穴である。北側半分は旧石器確認調査で掘り下げる。

27号土坑(第182図 P L.27)

位置 85 H 1 20、旧石器確認調査グリッドで検出。

形状 不整形、掘り下げるに従い掘り方がはっきりとしない。**規模** 長軸・短軸・深さは177・135・91cm

覆土の特徴 堅緻な黒褐色土、褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 長方形で確認したが調査が進むにつれて歪み、底面の凸凹も激しい。縄文時代、しみ状の土坑の可能性もある。

28号土坑(第182図 P L.27)

位置 85 G 19、旧石器確認調査グリッド、ローム漸移層まで掘り下げて検出。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは110・100・24cm **覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土で、壁際になると斑状の混土となる。**出土遺物** 拳大の石1点が記録されている。取り上げてはいない。

所見 縄文時代の土坑である。

29号土坑(第183・185図 P L.56)

位置 95 E F 2、31号土坑と重複。**形状** 円形、断面が塊状。**規模** 長軸・短軸・深さは191・125+・58cm

覆土の特徴 堅緻な暗褐色土で埋没している。壁際にはぶい黄褐色土との斑状混土である。**出土遺物** 覆土中位から出土した深鉢口縁部は、有尾式で櫛歯状工具による条線を横位に施す。覆土の上位には9号住居の須恵器甕、羽釜が混在している。

所見 縄文時代の土坑である。31号土坑より古い。

30号土坑(第182図 P L.28)

位置 85 C 13・14、旧石器確認調査の85 C 14グリッドで検出。**形状** 円形、断面が箱形。**規模** 長軸・短軸・深さは114・109・127cm **覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土が上下に分かれ、ともに中央部が黒く壁際になると褐色土

との斑状の混土となる。上面は黒ボク土が堆積していて確認するのがむずかしい。**出土遺物** 深鉢の小片が出土したが時期は特定できない。

所見 縄文時代、袋状土坑である。

31号土坑(第183・185図 P L.56)

位置 95 F 2、29号土坑と重複。**形状** 円形、断面が袋状。底面については掘り方が不足していて、図示したよりさらに広がる可能性もある。

規模 長軸・短軸・深さは157・126・114cm **覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土で埋没している。**出土遺物** 覆土中位で1~4の黒浜・有尾式の深鉢、剥片が出土。

所見 縄文時代の土坑である。29号土坑より新しい。

32号土坑(第183図)

位置 95 D 2、調査区の北壁にかかる。**形状** 推定円形、南半分を検出。**規模** 長軸・短軸・深さは75+・28+・15cm **覆土の特徴** As-C混入黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 覆土の特徴からみて古代の土坑である。

33号土坑(第183図)

位置 95 C 2、調査区の北壁にかかる。43号土坑の東70cmに位置する。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは70+・70・13cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 覆土の特徴からみて古代の土坑である。

34号土坑(第183図 P L.27)

位置 95 C D 1・2、33号土坑の南1.60mに位置する。**形状** 円形、底面にあくビットは深さ54cmで土坑よりも新しい。**規模** 長軸・短軸・深さは92・87・15cm **覆土の特徴** As-C混入黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 古代の土坑である。33号土坑と掘立柱建物として検討したが対応するものがなかった。

35号土坑(第183図)

位置 95 C D 1・2 **形状** 円形、断面形が塊状をしたしっかりとした掘り方である。**規模** 長軸・短軸・深さ

は112・111・59cm **覆土の特徴** 黒褐色土にロームが混入して筒状となる。人為的に埋め戻したものか。出土した遺物はない。

所見 覆土の特徴からみて古代の土坑である。

36号土坑(第183・185図 P L. 56)

位置 95 C 1、35号と37号土坑の中間に位置する。

形状 円形、北側の壁にかかり別の掘り込みがある。

規模 長軸・短軸・深さは84・75・33cm **覆土の特徴** 黒褐色土の上面に焼土がある。遺物と混在していて、厚い所では3～5cmのレンズ状である。**出土遺物** 須恵器壺5点、灰軸陶器壺1点を取り上げる。ほかに須恵器壺小片が出土。これらに混じり拳大の石1点が出土している。

所見 平安時代の土坑である。住居に併設された屋外施設で火を焚いたとみられる。

37号土坑(第183図)

位置 95 B 1、38号土坑の西1.15mに位置する。**形状**

円形 **規模** 長軸・短軸・深さは101・89・35cm

覆土の特徴 黒褐色土に焼土が混入している。

出土遺物 須恵器甕、土師器環の各小片が出土したが、図示可能なものはなかった。

所見 古代の土坑。38・39号土坑とともに掘立柱建物として検討したが確定できない。

38号土坑(第183図)

位置 95 B 1、37号と39号土坑の中間に位置する。

形状 円形、浅く底面が凸凹している。**規模** 長軸・短軸・深さは64・49・12cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 古代の土坑。37・39号土坑とともに掘立柱建物として検討したが確定できない。

39号土坑(第183図)

位置 95 A 1、38号土坑の東45cmに位置する。

形状 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは72・60・25cm

覆土の特徴 黒褐色土で埋没している。2層は自然層で掘りすぎか。出土した遺物はない。

所見 古代の土坑である。37・38号土坑とともに掘立柱建物として検討したが確定できない。

40号土坑(第183図)

位置 95 E 2、32号土坑の南西1.55mに位置する。

形状 楕円形、N88° W **規模** 長軸・短軸・深さは89・59・37cm **覆土の特徴** 32・34号土坑と似ている黒褐色土で埋没。ロームの小塊が混入している。出土した遺物はない。

所見 覆土の特徴からみて古代の土坑である。

41号土坑(第183図)

位置 95 D 1 **形状** 円形、浅いビット2本が重複。

規模 長軸・短軸・深さは74・69・9cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。As-C、ロームやローム漸移層が混入し、全体にしまりが無い。**出土遺物** 平面図にはNo. 1、No. 2の記載がある。

所見 覆土の特徴からみて古代の土坑である。

42号土坑(第183図)

位置 95 D 1、34号住居カマドの先端部に重複、住居よりも新しい。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは100・94・22cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。

As-Bらしい細砂が混入している。出土した遺物はない。

所見 平安時代の土坑である。34号住居よりも新しい。

43号土坑(第183図)

位置 95 D 2、33号住居北東隅に重複 **形状** 推定円形

規模 長軸・短軸・深さは54+・69・18cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

所見 平安時代の土坑である。33号住居よりも新しい。

44号土坑(第183・185図 P L. 27・56)

位置 95 D 1 **形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは

48・44・34cm **覆土の特徴** 軽石、ロームが混入する黒褐色土 **出土遺物** 覆土の中心で須恵器壺1点が出土している。内面が磨滅している。

所見 平安時代、大きさからみて柱穴か。

45号土坑(第183・185図 P L. 27・56)

位置 85・95 D 20・1、37号住居北東部に重複 **形状** 円形、底面は平坦。**規模** 長軸・短軸・深さは125・118・38cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。

出土遺物 須恵器壺2点を取り上げる。このほかに土師器甕9片、台付甕1片、瓶1片、須恵器環・壺7片、羽釜3片が出土。須恵器壺のほかには図示可能なものがなかった。

所見 平安時代の土坑である。

46号土坑(第183図 P.L.27)

位置 85D20、37号住居の東50cmに位置する。炭化物が分布していた範囲を広げて確認した。**形状** 円形、壁が焼けていて、良好な箇所は厚さが1cmで炭化物を伴う。

規模 長軸・短軸・深さは74・57・19cm **覆土の特徴** にぶい黄褐色土の単一層で埋没。出土した遺物はない。

所見 平安時代の土坑である。36号土坑に似た住居に伴う屋外施設ではないか。

47号土坑(第184・185図 P.L.56)

位置 85A18、48号土坑に重複、57号土坑の東85cmに位置する。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは96・90・15cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。As-C、焼土が混入している。**出土遺物** 土師器口の字口縁甕1、須恵器環1を取り上げる。ほか土師器甕38片、台付甕1片、須恵器環・壺2片が出土している。

所見 平安時代の土坑である。48号より新しい。

48号土坑(第184・185図 P.L.56)

位置 84A18、47号土坑と重複 **形状** 楕円形、N3° E **規模** 長軸・短軸・深さは69・110・20cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。As-Cが混入している。

出土遺物 須恵器壺1点を取り上げる。このほか土師器環1片、甕14片、須恵器環・壺3片、皿1片が出土している。南壁に接して長さ25cm大の石が1点出土している。

所見 平安時代の土坑である。47号土坑より古い。

49号土坑(第184図)

位置 84R18、50号住居の西壁から西に2mに位置する。**形状** 楕円形、底面は凸凹している。N90° **規模** 長軸・短軸・深さは151・76・16cm **覆土の特徴** 黒褐色土、ロームの小塊が混入。**出土遺物** 土師器甕2片、須恵器環3片が出土。図示可能なものはなかった。

所見 平安時代の土坑である。

50号土坑(第184図)

位置 84Q17・18、49号住居の北東隅に重複

形状 楕円形、N71° W **規模** 長軸・短軸・深さは127・75・36cm **覆土の特徴** 人為埋没とみられる。出土した遺物はない。

所見 平安時代の土坑である。49号住居より新しい。

51号土坑(第184図)

位置 84S17、43号住居の北壁から1.20mに位置する。

形状 楕円形、N71° W **規模** 長軸・短軸・深さは116・67・16cm **覆土の特徴** 黒褐色土で埋没している。As-Cが混入している。出土した遺物はない。

所見 平安時代の土坑である。

52号土坑(第184図)

位置 85D E19・20、61号土坑の北西1.50mに位置する。

形状 楕円形、N18° E、2基が重複していて、北側が古く深い。**規模** 底面のレベル差は4cmで、2基を合わせた長軸・短軸・深さは165・98・30cm、長軸1m前後のものが重複したとみられる。

覆土の特徴 黒褐色土には焼土と炭化物が混入している。出土した遺物はない。

所見 平安時代の土坑である。

53号土坑(第184図)

位置 85D E20、37号住居掘り方で検出。**形状** 円形

規模 長軸・短軸・深さは114・99・54cm

覆土の特徴 堅緻な暗褐色土で埋没している。下位～壁際にはにぶい黄褐色土との斑状混土である。出土した遺物はない。

所見 縄文時代の土坑である。

54号土坑(第184図 P.L.27)

位置 85A20、29号住居の北壁にかかり検出。**形状** 円形、断面は中位がわずかにふくらんでいる。底面は平坦。**規模** 長軸・短軸・深さは130・127・82cm

覆土の特徴 上位は堅緻な暗褐色土で、下位～壁際にはにぶい黄褐色土、明黄褐色土との斑状混土である。出土した遺物はない。

所見 縄文時代の土坑である。

55号土坑(第184図)

位置 85 B 19、ソフトローム面まで掘り下げて確認。

形状 方形、N24° W、底面にはうすい硬化面がある。掘り方は凸凹している。**規模** 長軸・短軸・深さは171・143・26cm、本来の深さは倍以上とみられる。

覆土の特徴 As-C混入黒褐色土の単一層で埋没している。出土した遺物はない。

所見 古代の土坑である。住居に併存している。

56号土坑(第184図 P.L.27)

位置 85 B 19、ソフトローム面まで掘り下げて確認。

形状 不整形、底面は平坦。**規模** 長軸・短軸・深さは96・80・27cm **覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土で埋没している。壁際は斑状の混土である。出土した遺物はない。

所見 縄文時代の土坑である。掘り方がはっきりしていない。しみ状の土坑であるのか、それとも掘り方が不足しているのか。

57号土坑(第184図 P.L.28)

位置 85 A 18、ソフトローム面まで掘り下げて確認。47号土坑の西85cmに位置する。**形状** 円形、底面は平坦。

規模 長軸・短軸・深さは134・130・62cm

覆土の特徴 堅緻な黒褐色土で埋没している。壁際はにぶい黄褐色土との斑状混土である。出土した遺物はない。

所見 縄文時代の土坑である。

58号土坑(第184・185図 P.L.28・56)

位置 85 B 17、ソフトローム面まで掘り下げて確認。63号土坑と重複する。**形状** 円形、底面は平坦。

規模 長軸・短軸・深さは122・119・30cm、深さは倍近い。

覆土の特徴 堅緻な暗褐色土で埋没している。壁際は黄褐色土との斑状混土である。

出土遺物 黒浜・有尾式の深鉢の小破片を取り上げる。石製品は直径5.1cm、厚さ2.8cmの軽石製、表裏のうちの一方が碗状に窪んでいる。ほかに拳大～長さ25cmの割れた石5点が中央部、床面より数cm高い位置で出土している。埋没時に混入したのではなく集石とみられる。

所見 縄文時代の土坑である。63号土坑より新しい。

59号土坑(第184・185図 P.L.56)

位置 85 B 17、ソフトローム面まで掘り下げて確認。40号住居西壁と重複。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは128・125・32cm、深さは倍近い。 **覆土の特徴** 中央部は堅緻な黒褐色土。その下位の北東の壁寄りに炭化物が混入している。壁際は全体が黄褐色土との斑状混土である。 **出土遺物** 黒浜・有尾式の深鉢口縁部破片1点を取り上げる。 **所見** 縄文時代の土坑である。

60号土坑(第184図)

位置 85 B 17・18、ソフトローム面まで掘り下げて確認。40号住居北壁と重複。**形状** 円形

規模 長軸・短軸・深さは127・109・22cm

覆土の特徴 堅緻な暗褐色土、掘り方が不足しているのか壁との境界が不明瞭である。出土した遺物はない。

所見 縄文時代の土坑である。

61号土坑(第185図 P.L.56)

位置 85 D 19、ソフトローム面まで掘り下げて確認。52号土坑の南東1.50mに位置する。**形状** 楕円形、N49° W、北壁は一部掘りすぎている。**規模** 長軸・短軸・深さは169・93・36cm **覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土、壁際は黄褐色土との斑状混土である。

出土遺物 黒浜・有尾式の深鉢1点を取り上げる。

所見 縄文時代の土坑である。

62号土坑(第185図 P.L.28)

位置 85 E 20、ソフトローム面まで掘り下げて確認。37号住居の南55cmに位置する。**形状** 円形

規模 長軸・短軸・深さは92・88・22cm

覆土の特徴 堅緻な暗褐色土と黄褐色土の混土で埋没している。出土した遺物はない。

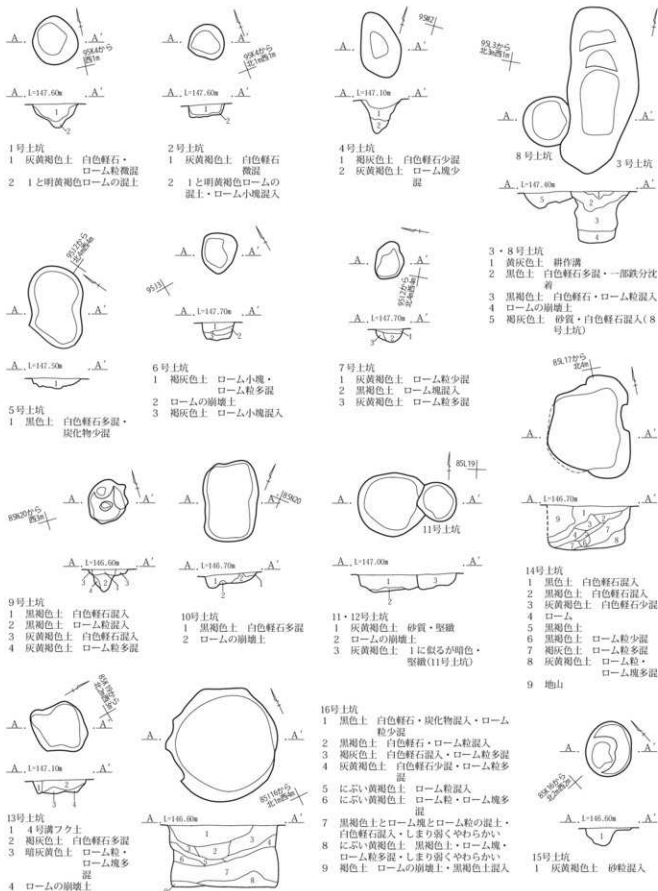
所見 縄文時代の土坑である。

63号土坑(第184図 P.L.28)

位置 85 B 17、58号土坑と重複。**形状** 円形 **規模** 長軸・短軸・深さは94・74+・6cm **覆土の特徴** 堅緻な暗褐色土で埋没している。出土した遺物はない。

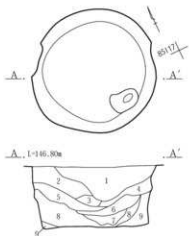
所見 縄文時代の土坑である。58号土坑より古い。

第5章 胴城遺跡の調査

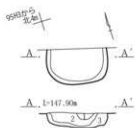


第181図 1～16号土坑遺構図

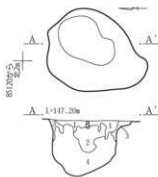
第2節 検出された遺構と遺物



- 17号土坑
 1 黒色土 白色軽石混入
 2 暗灰色土 白色軽石多混・ローム粒少混
 3 黒褐色土 白色軽石混入
 4 暗灰黄色土 白色軽石・ローム粒多混
 5 褐灰色土 砂質・白色軽石少混・ローム粒混入
 6 黒褐色土 白色軽石・ローム粒混入
 7 暗灰黄色土 白色軽石・ローム粒混入
 8 灰黄褐色土 白色軽石・ローム粒混入
 9 黄褐色土 ローム粒・ローム塊多混・白色軽石少混



- 24号土坑
 1 灰黄褐色土 擾乱
 2 黒褐色土
 3 にぶい黄褐色土 ローム塊多混



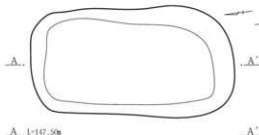
- 27号土坑
 1 暗褐色土とにぶい黄褐色土の混混
 2 黒褐色土 堅緻
 3 黄褐色土 擾拌されている・しまり強い
 4 褐色土 2の縁辺里・下位As-B混入・堅緻



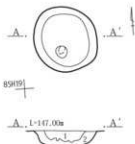
- 18号土坑
 1 5号溝ブック上
 2 黒褐色土 白色軽石混入
 3 黒褐色土 ローム粒・黒色土塊混入
 4 暗褐色土 ローム粒・ローム塊混入
 5 ロームの崩壊上



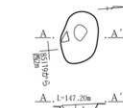
- 21号土坑
 1 黒褐色土 白色軽石混入
 2 暗灰黄色土 ローム粒多混



22号土坑
 1 黒褐色土 白色軽石混入
 2 にぶい黄褐色土 ローム塊多混



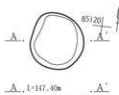
- 23号土坑
 1 灰黄褐色土 擾乱
 2 黒褐色土 中央黒色・白色軽石混入・炭化物少混
 3 にぶい黄褐色土 ローム粒多混



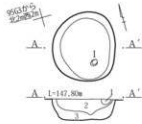
- 19号土坑
 1 褐灰色土 細粒白色軽石混入・堅緻
 2 灰黄褐色土 細粒白色軽石混入・堅緻
 3 にぶい黄褐色土 ローム粒・黒褐色土塊混入



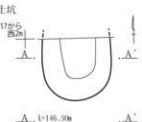
- 20号土坑
 1 灰黄褐色土 ローム粒混入・上層は黒み強・堅緻



- 25号土坑
 1 灰黄褐色土 砂質・白色軽石・塊混入
 2 1ににぶい黄褐色土混混・白色軽石混入
 3 褐灰色土 白色軽石混入
 4 灰黄褐色土 ローム粒・ローム塊混入・白色軽石少混



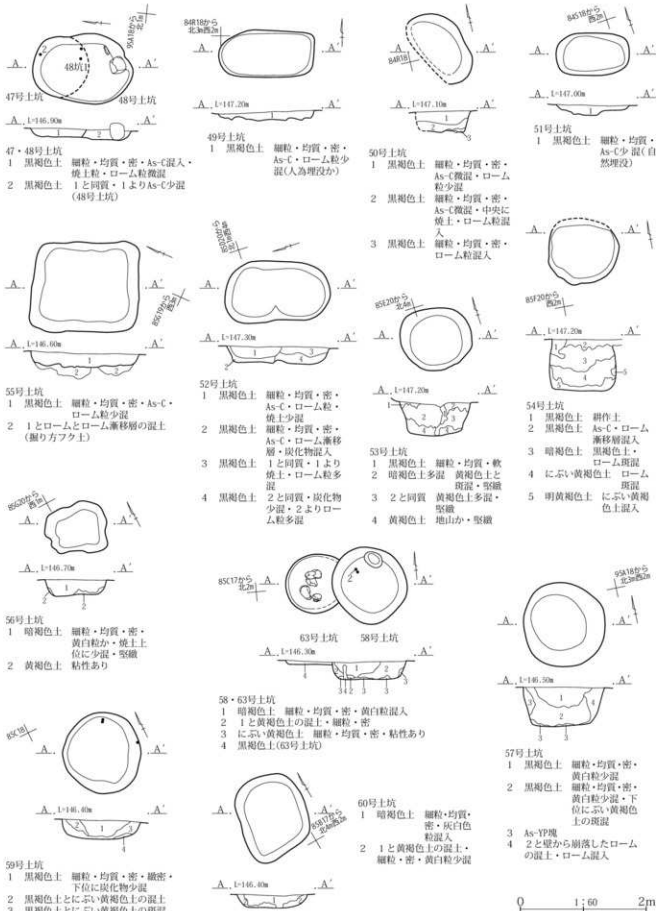
- 26号土坑
 1 黒褐色土 細粒・密・硬・にぶい黄褐色土の混混
 2 黒褐色土 細粒・密・2より硬・2にあつたにぶい黄褐色土の混混がない
 3 黒褐色土 細粒・密・2より硬・2にあつたにぶい黄褐色土の混混がない
 4 3に壁から剥落したロームとAs-B多混
 5 耕作による擾乱



- 29号土坑
 1 黒褐色土 細粒・密
 2 黒褐色土 細粒・密・硬・にぶい黄褐色土の混混
 3 黒褐色土 細粒・密・2より硬・2にあつたにぶい黄褐色土の混混がない
 4 3に壁から剥落したロームとAs-B多混
 5 耕作による擾乱

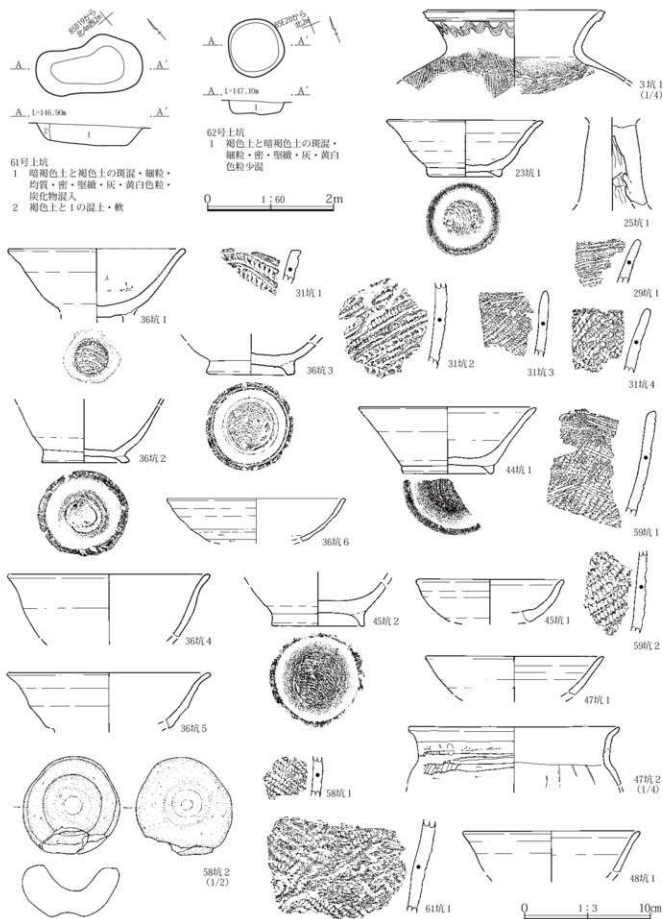


第182図 17～28・30号土坑遺構図



第184図 47～60・63号土坑遺構図

第5章 胴城遺跡の調査



第185図 61・62号土坑遺構図、3・23・25・29・31・36・44・45・47・48・58・59・61号土坑遺物図

4 溝

1号溝(第186 第22表 P L.25・26)

位置 調査区の北西隅、95K～M4に位置する。2号溝と平行し、南西端は重複している。東西両端は調査区外へ続いている。

検出長 7.20m、幅84～94cm、深さ31～45cm

走行 N70° E 重複 2号溝より新しい。

覆土 上位に黒褐色土と灰黄褐色土との混土、砂を多く含む。下位には時期が異なる灰黄褐色土が堆積。

遺物 土師器杯、須恵器皿、甕の小片が出土したが、図示可能なものはなかった。

所見 近世以降の時期、畑の区画とみられる。新旧2条があり上下に重複している。

2号溝(第186 第22表)

位置 調査区の北西隅、95K～M4に位置する。1号溝と平行し、南西端で切られている。

検出長 8.65m、幅26～54cm、深さ9～26cm

走行 N71° E 重複 1号溝より古い。

覆土 褐灰色土と黒褐色土が自然堆積。1号溝と同様に上下の土層で時差がある。

遺物 須恵器の甕破片が出土したが、図示可能なものはなかった。

所見 近世以降、畑の区画とみられる。新旧2条があり上下に重複している。

3号溝(第186・187図 第22表 P L.25・26)

位置 調査区の北西寄り、85M20、95I～N1～4に位置する。95K2グリッドで5号溝、85N1グリッドで4号溝と接続している。また95M1グリッドより東では同規模のもので2条になっている。

検出長 30.50m、幅110～175cm、深さ17～30cm

走行 N55° E 重複 新旧2条からなる。南西端が4号溝と接続している。2条の覆土には差がなく、同時期とみられる。

覆土 褐灰色土で埋没。白色軽石を多く含む。

遺物 土師器杯、須恵器杯、甕、羽釜、鉢の小片が出土したが、図示可能なものはなかった。

所見 近世以降の時期、畑の区画とみられる。

4号溝(第186・187図 第22表 P L.25・26)

位置 調査区の西端寄り、85J～N17～20に位置する。西端は3号溝と約70°の角度で接続している。南東端は5号溝と重複している。

検出長 24.90m、幅44～85cm、深さ13～25cm

走行 N55° W 重複 古い方から13号土坑、5号溝、4号溝の順である。

覆土 褐灰色土で埋没。

遺物 出土した遺物はない。

所見 近世以降の時期、畑の区画とみられる。

5号溝(第186～188図 第22表 P L.25・56)

位置 85I～K17～20、95J K1・2

検出長 25.20m、幅142～350cm、深さ11～40cm

走行 N13° W

重複 古い方から13号土坑、5号溝、4号溝の順である。

覆土 鉄分のために固く硬化した薄い層が底面を覆う。

遺物 土師器杯、台付甕、須恵器杯・埴、甕、羽釜、蓋、灰釉陶器皿が出土。磨滅しているのは1点、ほか鉄分の付着しているものが目立つ。

所見 近世以降の時期、道かその側溝とみられる。

6号溝(第186・187図 第22表 P L.25・26)

位置 調査区の西端、85N～Q17～20、95J K1・2に位置する。7号溝とは3～4mの間隔で平行している。南北両端は調査区外へと続いている。

検出長 26.70m、幅60～82cm、深さ23～37cm、底面高は145.62～146.35mで南へと傾斜している。

走行 N27° E 重複 2号住居を切る。

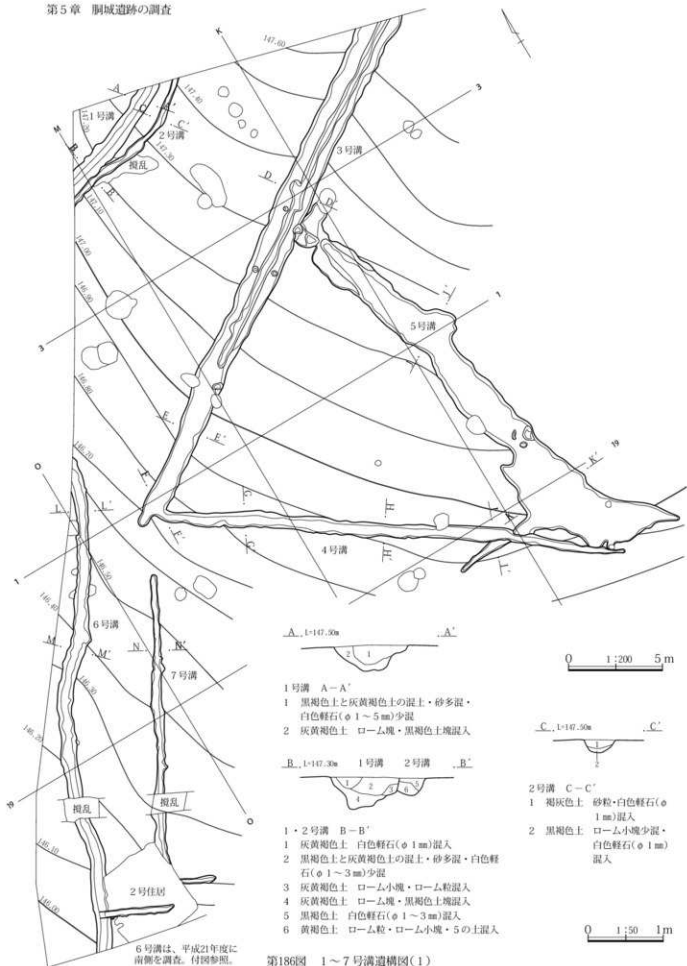
覆土 灰黄褐色土

遺物 土師器甕の小片が出土したが、図示可能なものはなかった。

所見 近世以降の時期、畑の区画とみられる。

7号溝(第186・187図 第22表 P L.25・26)

位置 調査区の西端、85N O17～20に位置する。6号溝とは3～4mの間隔で平行している。延長上2mに3号溝南西端がある。南端は2号住居に重複している。

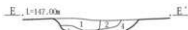


第186図 1~7号溝遺構図(1)



3号溝 D-D'

- 1 褐灰色土 白色軽石(φ1~3mm)混入
- 2 褐灰色土 ローム塊混入
- 3 ロームと褐灰色土の混土



3号溝 E-E'

- 1 褐灰色土 D-D'の1と同じ
- 2 褐灰色土 1に似るが砂粒多混
- 3 ロームと褐灰色土の混土
- 4 灰黄褐色土 ローム粒混入



3・4号溝 F-F'

- 1 褐灰色土 3・4溝の埋土・白色軽石(φ1~5mm)多混
- 2 ロームと褐灰色土の混土



4号溝 C-G'・H-H'

- 1 褐灰色土 白色軽石(φ1~3mm)・ローム粒少混



6号溝 L-L'

- 1 灰黄褐色土 黒褐色土塊・白色軽石(φ1~5mm)多混
- 2 灰黄褐色土 1に似るが軽石微混



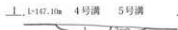
6号溝 M-M'

- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1~3mm)・灰黄褐色土混入
- 2 灰黄褐色土 黒褐色土塊混入・軽石少混
- 3 灰黄褐色土 ローム粒多混



7号溝 N-N'

- 1 にぶい黄褐色土 ロームの崩落土・褐灰色土混入



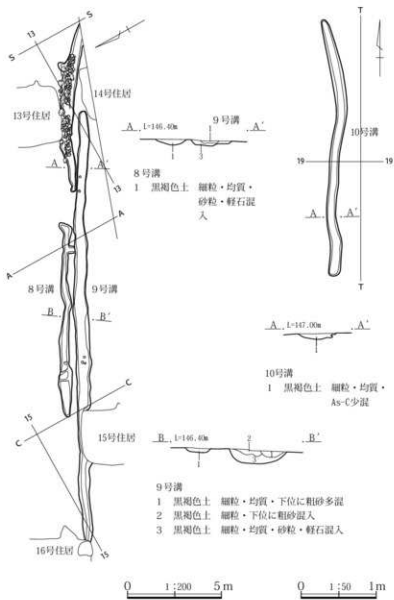
5号溝 J-J'

- 1 オリーブ灰色砂 白色軽石(φ1~8mm)混入
- 2 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)混入・下端跌分で薄く硬化
- 3 黄褐色土 砂質・下端跌分で一部薄く硬化
- 4 にぶい黄褐色土 上端跌分で薄く硬化



5号溝 K-K'

- 1 黒褐色土 白色軽石(φ1~5mm)混入・下端跌分で薄く硬化
- 2 黄褐色土 砂質・ロームの崩落土・下端跌分で薄く硬化



第187図 3~7号溝遺構図(2)・8~10号溝遺構図

検出長 15.20m、幅32～55cm、深さ10～29cm、底面高は144.96～145.44mで南へと傾斜している。

走行 N29° E **重複** 2号住居を切る。

覆土 にぶい黄褐色土

遺物 出土した遺物はない。

所見 近世以降の時期、畑の区画とみられる。

8号溝(第187図 第22表)

位置 調査区の南壁沿い、84 S T 12・13、85 A B 13・14に位置する。9号溝とは平行していて、狭い所は10cmの距離である。

検出長 途切れている西側が10.70m、幅30～60cm前後、東側が9.80m、幅30～58cm、合わせた長さは20.50m、深さ7～14cmである。底面の高さが146.20～146.26mと差は少ない。東端はさらに続いていたが、上面を確認しただけで精査はしていない。

走行 N59° W

重複 13、14号住居より新しい。

覆土 13、14号住居と重複する箇所だけに石が詰め込まれている。人頭大を最大に、拳大程度のものが8割以上を占めている。1号墳の隣接地であり、石室から抜き取られた一部を埋めたのではないかとみられる。

遺物 出土した遺物はない。

所見 近世以降の時期、畑を区画していたとみられる。

9号溝(第187・188図 第22表 P L.56)

位置 調査区の南壁沿い、84 T 12・13、85 A～C 13～15に位置する。8号溝とは平行していて、最も狭い所では50cmの距離である。北西端は16号住居で途切れている。南東端も14号住居で途切れている。

検出長 22.70m、幅46～72cm、深さ9～21cm、底面の高さは146.16～146.28mである。

走行 N62° W

重複 14、15、16号住居より新しい。

覆土 2層下部に粗砂がある。

遺物 土師器環、甕、瓶、須恵器環・埴、甕、羽釜、瓶の小片が出土、このうち須恵器埴、瓶を掲載した。

所見 近世以降の時期、畑を区画していたとみられる。

10号溝(第187図 第22表)

位置 調査区の中央、84 S T 17～20にかけて位置する。

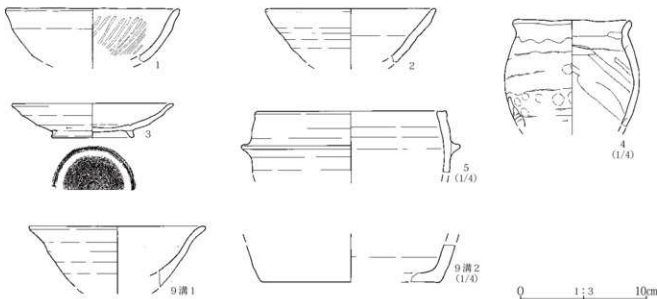
検出長 13.70m、幅50～62cm、深さ8～19cm、底面の高さは146.67～147.12mで南が深い。

走行 N2° W **重複** 単独

覆土 黒褐色土

遺物 土師器環、甕、須恵器環、甕の小片で、図示可能なものはなかった。

所見 平安時代か。住居との重複がなく、覆土は住居に似ている。住居群を仕切る役割をしていたとみられる。



第188図 5・9号溝遺物図

5 古墳

1号墳(第189図 P L.25)

位置 調査区の中央近くの南壁沿い、85C～E13～15に位置する。上面は整地面以下まで削平されている。

形状 円墳、北側を検出。

規模 推定12～13m

周堀の状況 東側を検出。徐々に浅くなり、北側は途切れている。幅が2.22～3.65m、深さ56～81cm、底面は平坦で、壁は外側が直立気味、検出した中央にウロがあいている。間口110cm、奥行き70cmである。内側は、な

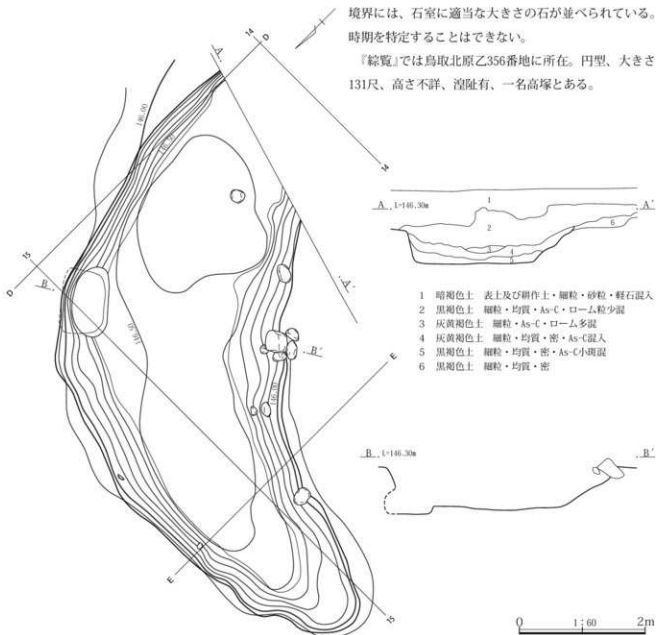
だらかに立ち上がり段差を作る。**重複** 単独

覆土の特徴 As-Cが混入する黒褐色土で自然埋没。墳丘から崩落した盛土は特定できない。

遺物 周囲にある住居などからの流れ込んだ土師器環、甕、小型甕、高環、羽釜などがある。埴輪はない。石は確認面の付近にしかなく、作業中に取り上げたものを含めても15個前後の数である。葺石とするには数が不足、基壇の裾周りに置かれていたものが崩落したとみられる。

所見 『上毛古墳総覧』芳賀村1号墳吉祥寺塚に比定。該当の鳥取町北原乙356番地からは北へずれているが別の1基を考えるほどではないため相当させた。隣接地番の境界には、石室に適当な大きさの石が並べられている。時期を特定することはできない。

『総覧』では鳥取北原乙356番地に所在。円型、大きさ131尺、高さ不詳、渚陸有、一名高塚とある。



第189図 1号墳遺構図

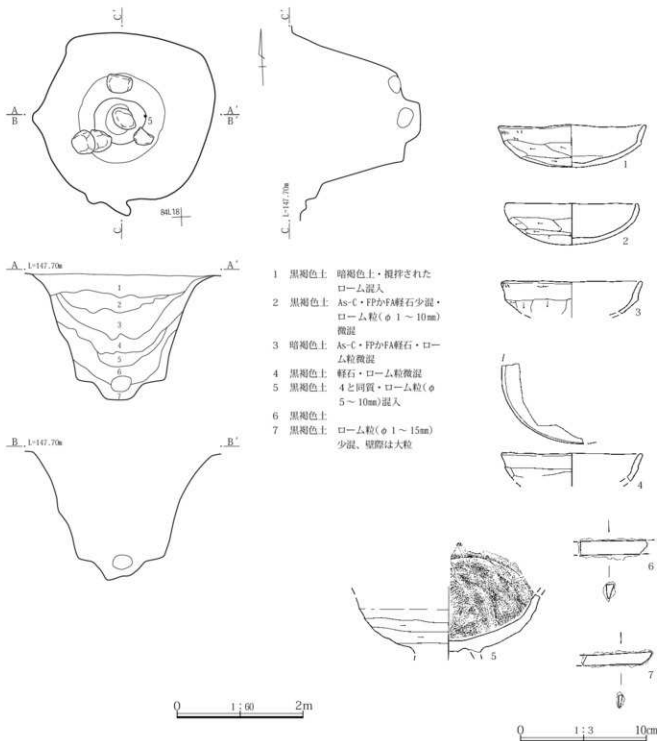
6 井戸

1号井戸(第190図 P.L.26・56)

位置 調査区の中央から東寄り、85 K L 18に位置する。

形状 円形、底面の中央に直径80cm、深さ25cmの穴があけられている。壁から底面まで荒れた様子がない。

規模 長軸291cm、短軸289cm、深さ198cm



重複 単独、近い住居は北2mの21号住居。

覆土 黒褐色土と暗褐色土で埋没。3層を境にして上が黒色土、下がローム混じりの暗褐色土で上下に違いがみられる。6層の下位に人頭大の石5個が投棄されている。

遺物 埋没土に混入して土師器環・埴、須恵器皿の小片。

所見 平安時代、底面の中央に土坑があることから氷室状のものである。

第190図 1号井戸遺構図・遺物図

7 墓坑

1号墓(第191図 P L.28・57)

位置 調査区の西端、95M3・4に位置する。南西1mの位置に2号墓がある。

形状 隅丸方形、北東隅に掘乱坑 **方位** N51° E

規模 長軸145cm、短軸142cm、深さ47cm

覆土の特徴 灰黄褐色土、暗褐色土で埋没している。

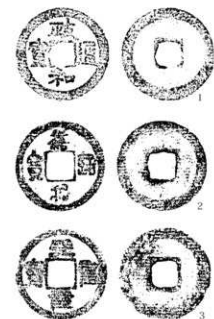
人骨の状況 椎体部、脳頭蓋骨数10片、下顎骨片、上腕骨片、脛骨、大腸骨片などが残存する。東頭位での屈葬、老齢、性別は不明。年齢は無歯顎から推定。

遺物 政和通宝など3枚、2枚は判読不可。

所見 江戸時代、第6章自然科学分析参照。



- 1 灰黄褐色土 新し掘乱坑
- 2 灰黄褐色土 ローム塊・ローム粒・黒土塊多混
- 3 暗褐色土 ローム塊・ローム粒混入
- 4 灰黄褐色土 ローム粒少混



2号墓(第191・192図 P L.28・57)

位置 調査区の西端、95MN2に位置する。北東1mの位置に1号墓がある。

形状 方形、底面は平坦で壁が内側に傾斜している。西側に重複する土坑は植栽の穴の可能性。

方位 N16° E

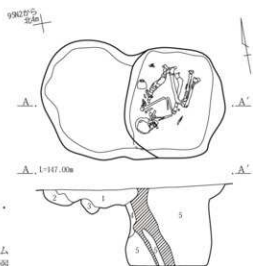
規模 長軸116cm、短軸105cm、深さ87cm

覆土 検出面から底面まで、ローム粒やローム塊を多く含むにぶい黄色土で埋没している。しまりがなく、腐朽に伴い盛り土が陥没したものであろうか。

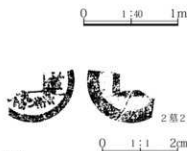
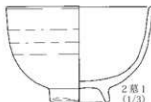
遺物 御器焼壺1、漆壺1、寛永通宝6枚、題目銭1枚が副葬品である。漆壺は、木質が腐り漆の塗膜がわずかに残るだけである。題目銭は、調査中に破損して南無妙法蓮華経のうち3文字を読むことができる。

人骨の状況 ほぼ全身にわたる部位が出土している。南頭位、横臥屈葬、成人男性、性別は寛骨から確認した。

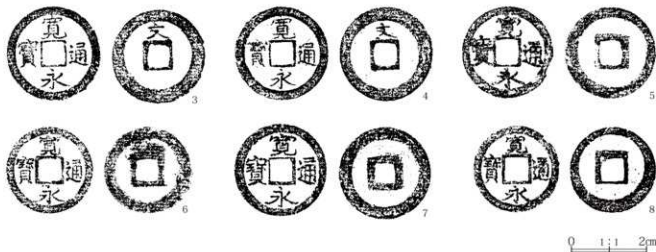
所見 江戸時代、副葬品の御器焼壺からすると17世紀後半である。第6章自然科学分析参照。



- 1 黄灰色土 ローム多混
- 2 ロームの崩壊土
- 3 黄灰色土 しまり弱くやわらかい・木根か
- 4 ロームの崩壊土
- 5 にぶい黄褐色土 ローム粒・ローム塊多混・しまり弱くやわらかい(墓坑の上)



第191図 1・2号墓遺構図、1号墓遺物図・2号墓遺物図(1)



第192図 2号墓遺物図(2)

8 ビット群(第193図 P L.28・57)

位置 調査区の西に寄った、85G～J16～20、95J K1～4に位置する。総数では96基がある。これらは5号溝に併走していて、その東側約5mの帯状の範囲内に集中している。中でもGラインからKラインまでに9割以上が集中し、1と2号だけが北に15m程離れている。なお、北へと続いているとみられる。一方、Gラインより東では調査時間の不足から確認をしていない。あわせて掲載した97～99号は、旧石器確認調査中に検出した縄文時代のもので、この帯状の範囲外にある。

重複 住居と重複したものはない。ほとんどが5号溝に併走していて、溝の中にあるのが2基、ビット同士が8の字に連結したものが数基ある。また集中する範囲内には19～21号土坑などがある。

形状 直径が30cm～40cm前後の円形がほとんどである。深さは10～40cm前後、直立した断面形ものは柱穴とみてよいだろう。ただし建物とするには対応するものが見当たらない状況である。

覆土の特徴 数が多いのと、土層が類似しているために断面記録は1号から6号だけを行い、7号以降は断面で観察しただけである。図面記録は省略した。土層はA・Bの2つに分類をした。Aが黒褐色土で、直径1～3mmの軽石を含む。Bが褐色土、細かい軽石を含むが数は少ない。時期はAがFA以降、Bがそれ以前ではないかとみられる。ただしBは39号1基だけである。70号～92号はすべてAであるが、やや褐色味が強い。93号～96

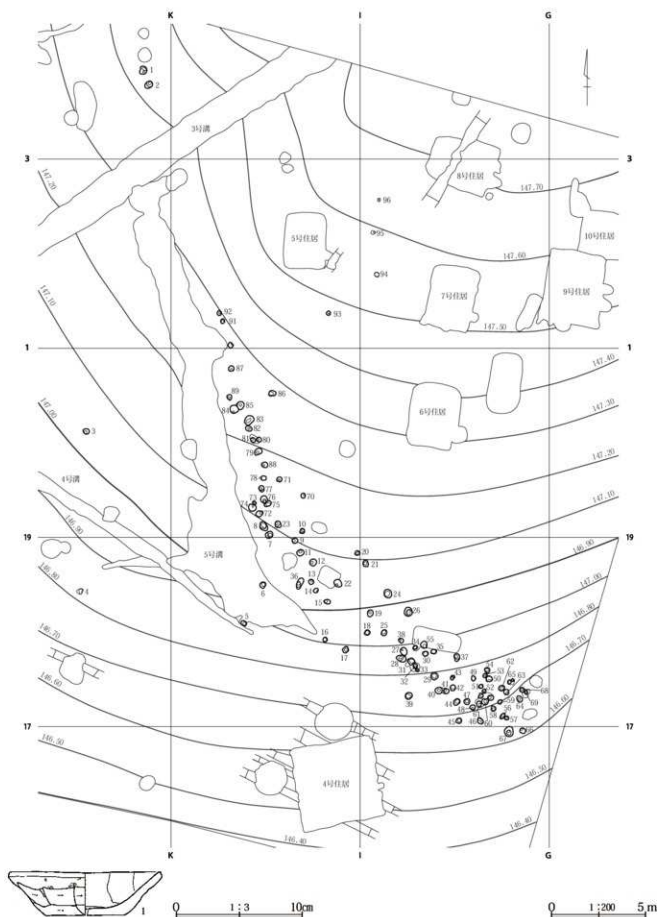
号はすべてAであるが、やや灰色味が強い。97号～99号はBで縄文時代のビットである。

所見 近世、溝の東側を柵か塀のような構造で区画していたとみられる。

9 遺構外遺物(第194～198図 P L.57～60)

遺物は収納箱にして35箱である。このうち遺構外は8箱で、そのほとんどが遺構確認の作業中に取り上げたものである。縄文時代の遺物のように包含層で出土したのものも含まれているが、古墳時代以降は住居に伴うとみてよいものである。そのために遺構にあった時期の遺物で遺存状態が良好なもの、緑釉、鉄製品など特徴的な遺物を選別した。掲載は、縄文土器、石器、土師器など土器類、鉄製品類の種類別とした。観察表も同じように種類別としている。

縄文土器は、遺構が検出された調査区の西半分によく東になると稀である。鳥取松合下遺跡でも遺物が少なく、遺構は台地の西側半分藤沢川寄りであるとみてよいだろう。半数は前期中葉～後半にかけての時期で、残りが中期の加曾利E式後半～後期堀之内2式にかけてである。第194～196図の1～47が前期中葉～後半、48～57が中期後半加曾利E2～E4式、58～119が後期称名寺式～堀之内2式である。前期は、1～33が黒浜・有尾式で31が網目状摺糸文の太木2a式である。34～47が諸磯a・b式である。12号住居や土坑に関連しているとみられるが、数の上からは中期～後期についても遺構の存在を否定できない。調査区の隣接地では中期加曾利E式



第193図 ビット群遺構図・35号ビット遺物図

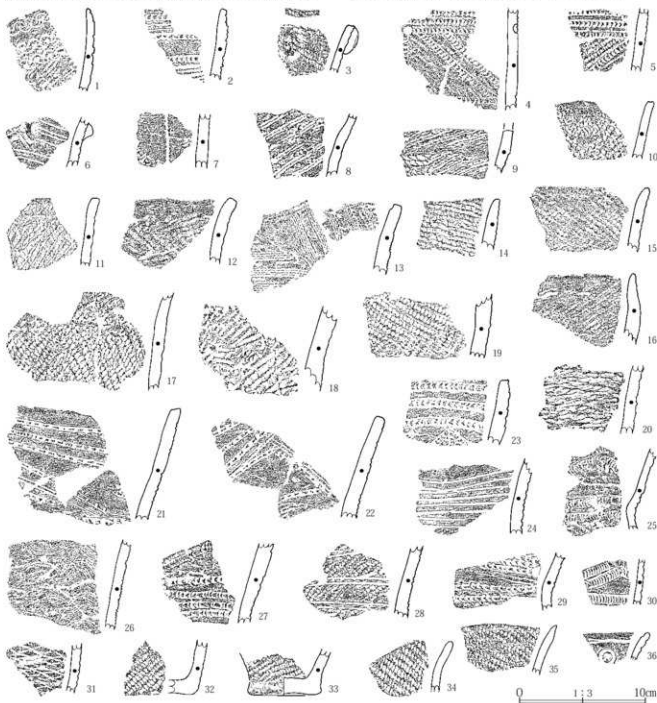
～堀之内式の土器の方が多く散布している。119の三角型土製品は、側縁を研磨した円板類よりも研磨が人念である。

石器は、土器と同じく西側に多いが調査区の東側にまで点在している。ただし分布しているのは打製石斧や削器といった製品が多くて、屋外での生産活動を示すものではないだろうか。その好例は第198図30の石皿で、関連するの出土した85 K 19グリッドのまわりには凹石、蔽石が点在している。剥片類は275点のうち218点を黒色

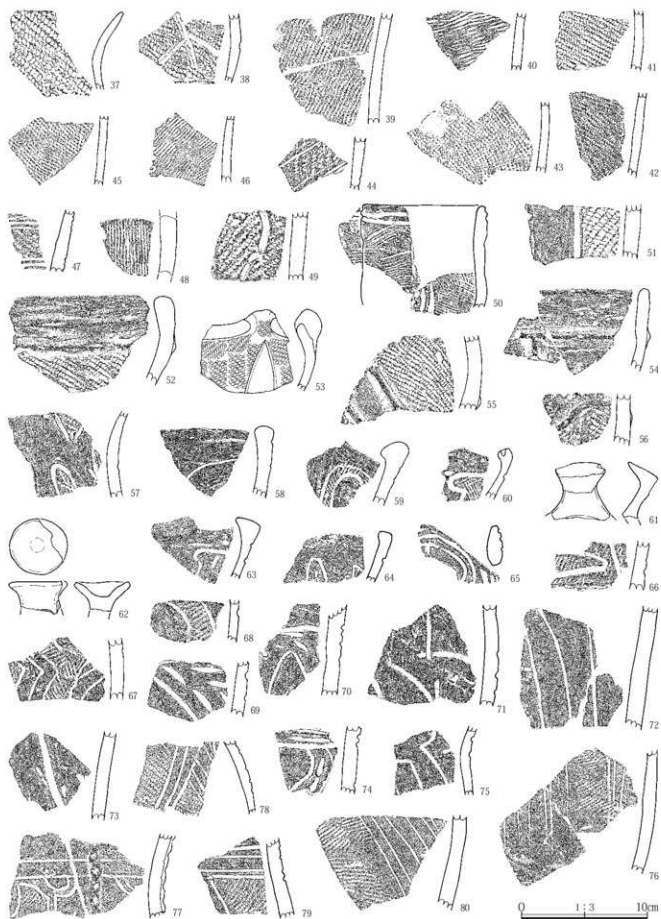
頁岩が占める。製品と対応する関係にあるが、打製石斧に多い細粒輝石安山岩の剥片のないことが指摘されている。石鏃と削器の中には未成品ではないかと指摘されているものもある。

土器類は、第198図2が内面に油脂が付着した灯明ではないかとみられるもの、5が小片ながら輪花状の緑釉皿、8が古墳時代前期初頭の壺である。

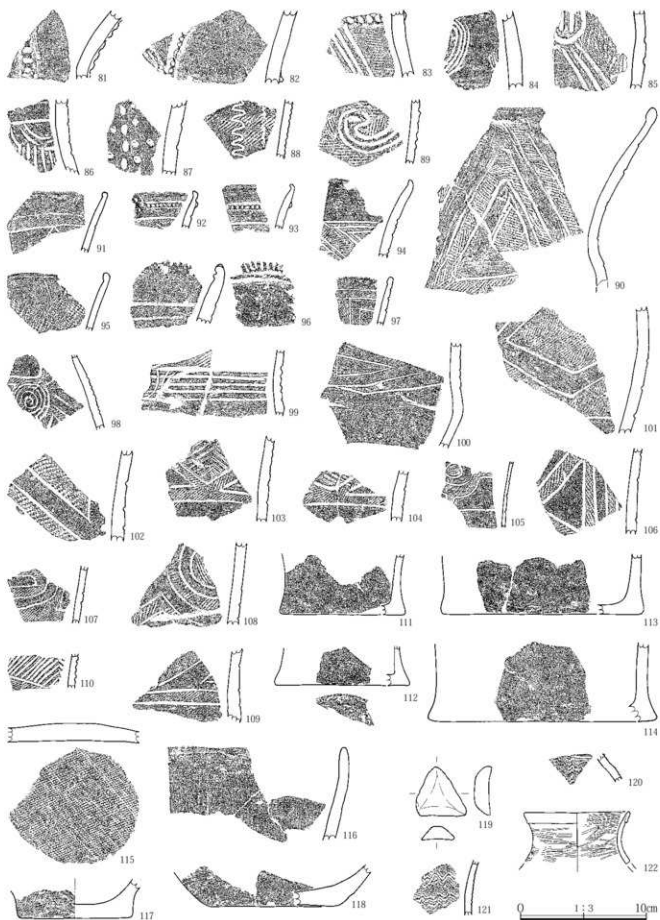
中世については掲載した位の出土点数で、遺物が稀である。遺構がないことと関係しているのであろう。



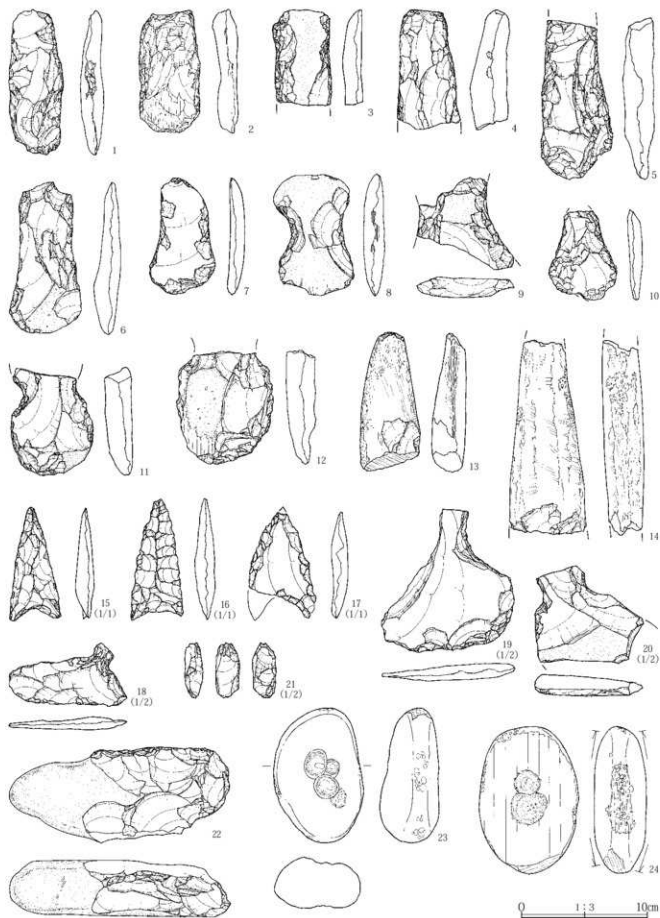
第194図 遺構外遺物図(1)土器



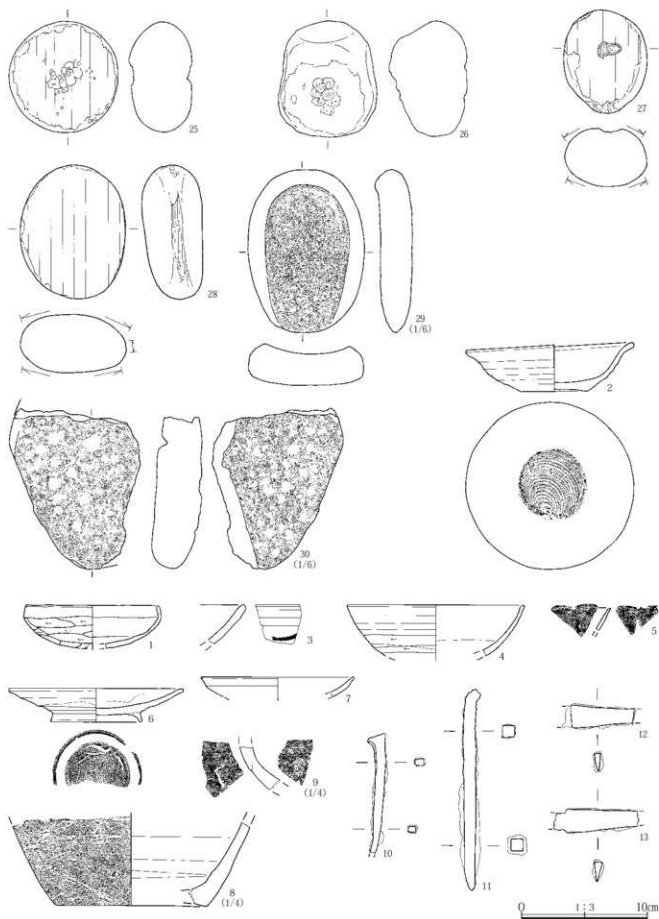
第195図 遺構外遺物図(2)土器



第196図 遺構外遺物図(3)土器



第197図 遺構外遺物図(4)石器



第198図 遺構外遺物図(5)石器・土器・金属製品

第6章 自然科学分析

第1節 胴城遺跡出土の人骨と馬歯

分析資料について

胴城遺跡は、群馬県前橋市鳥取町に所在する。赤城山南麓でも末端に近い丘陵性台地上にある。調査はその一角で行われ、縄文時代～平安時代の住居61軒などが検出されている。

人骨は、台地の西端にある2基の墓坑から出土したものである。1号墓は北宋銭、2号墓には寛永通宝、茶碗、漆碗が副葬されている。2号墓の年代は、副葬品から17世紀後半とみられ、1号墓は北宋銭のみであることから2号墓よりも少し古いとみられる。ともに屈葬か座葬で、差異は掘り込みの深さで2号墓が1号墓の倍以上もある。隣接している溝と藤沢川までの距離からすれば、2基は墓地の東縁にあるとみられる。

ウマは、歯、肢骨のともに一部が出土した。1頭分が土坑に埋葬され、土坑の覆土が住居と差のないことから平安時代のものではないかとみられる。

分析は、身体の特徴その他を明らかにするため宮崎重雄氏に依頼した。結果は以下のとおりである。

1 胴城遺跡出土の人骨

はじめに

胴城遺跡では、2基の土坑からそれぞれ1個体分すなわち2個体分の人骨が出土している。

本調査では、歯、骨の計測を行い、主だった形態的特徴と触頭の認められた歯を記録した。歯についてはさらに咬耗の程度を記録し、年齢推定の一つの手掛かりとした。

胴城1号墓人骨

鍾体部、脳頭蓋後部片など脳頭蓋骨数10片、下顎骨片、上腕骨片、脛骨、大腿骨片などが残存する。いずれも保存状態はきわめて不良で、有効な計測値が得られる部位はない。発掘時の記録から屈葬あるいは座葬の姿勢で埋葬されていたことがわかる。

下顎骨は歯槽部を少なからず損傷しているが、他の部

位に比べて保存が良く、現状で見る限り歯はなく、生前にすでに欠損していたように思われる。

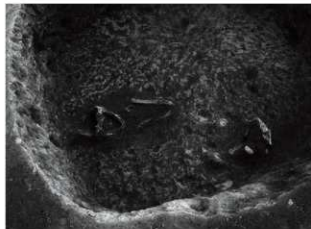
推定年齢：老齢期

歯は、高齢化に伴い歯槽縁が吸収、退縮したことにより脱落が発症したものと思われる。

性別：不明

性別を推定する部位がきわめて保存不良か、欠いているかて性別判定は困難である。

古病理：所見なし。



1号墓人骨出土状況

胴城2号墓人骨

ほぼ全身にわたる部位が出土しているが、現状では各部位とも少なからず損傷を受けている。

埋葬姿勢：横臥屈葬

体幹を南西-北東方向に、頭部を南西に置いて、顔を南東にむけ、両上肢・両下肢も南側に屈曲させている。

推定年齢：壮年期

17才～20才頃に萌出するとされる第3大臼歯が本個体ではすでに咬耗を受け、右下顎第3大臼歯では近心後頭にわずかに象牙質が露出している。他の歯の咬耗状況も合わせて考えると壮年期が想定される。

また、口蓋縫合の状況を観察すると、本個体では切歯縫合はすでに消失し、正中口蓋縫合口蓋部の縫合線が後2/3程が消失している。上条(1982)は、この状態にある個体の年齢は30-49才としている。脳頭蓋の他の縫合線などの観察結果も、この推定年齢と矛盾しない。

推定性別：男性

性別推定の際に最も有効とされる観察点の一つである大座骨切痕の聞きが本個体ではほぼ51°である。Hanna & Washburn (1953)によれば、エスキモー人のこの角度が女性では61°～93°(平均74.4°)、男性では26°～65°(平均50.4°)である。これに照らせば本標本は男性の範囲にある。

また、Nakahashi & Nagai (1986)、中橋(1988)は保存不良の古人骨でも性別判定が可能な方法を提案している。彼らは、計測ポイントとして18か所取り上げているが、胴城2号髌人骨では、このうち6か所で信頼できる計測値が得られ、もう1か所でもある程度信頼できる値が得られた(表3)。ただし、上記判別法には、江戸時代のもの欠けていて、その前後の時代の中世人と現代人のデータが提示されている。本人骨は江戸時代の人骨ではあるが、その前後の時代人のデータではあっても有力な参考値にはならぬ。

胴城2号髌人骨の計測値を現代人骨と照合してみると、仙骨折線長(SLA)のみが女性に近いほかは明らかに男性の値を示している。中世人骨との比較でも、仙骨の2計測値が男女の境界近くを前後している他は大きく男性側に寄っている。また、ほぼ完存する上腕骨全長から藤井(1960)により得られた推定身長は156cm前後で、江戸時代では男性の身長としてはごく平均的である(平本、1981)。

以上の結果から、性別は男性と判断される。

一方、本個体は以下のような女性的な特長も合わせてもっている。①頭蓋骨の計測値はかなり小さく(表4)、これに伴い②歯は左下顎第1大臼歯を除き、どれも小さめである(表6)。③眉弓・上頰線・後頭隆起などの発達もそれほど顕著でない。④耳状面が男性では、一般に第3仙椎まで達しているとされるが、第2仙椎までしか達していない。

古病理：齧歯

観察される限り上顎切歯および下顎切歯の4本に歯頸部におけるC₂の齧痕が認められる。

本調査では、国立科学博物館の人類学教室所蔵の人骨を観察し、参考にさせていただいた。

参考・引用文献

- 青山敏男・松本 靖・小林徳之助・松田隆雄(1957)「日本人個体骨の大きさの性的差異について」『歯科医学』20, 344-353
 馬場悠男(1991)「人体計測 - II 骨計測法」『人類学講座別巻1』
 藤井 明(1960)「四肢長骨の長さと同身長との関係に就いて」
 『順天堂大学体育学部紀要』3, 49-61
 種田和良(1959)、歯の大きさの性差について。『人類学雑誌』67, 151-163
 Hanna, R. E. and Washburn, S. L. (1953) The determination of the sex of skeletons, as illustrated by a study of the Eskimo pelvis. *Human biology*, 25, 21-27
 平本嘉助(1981)「骨からみた日本人身長の変り変わり」
 『考古学ジャーナル』197, 24-27
 上條雄彦(2000)「日本人永久歯解剖学」アナトーム社
 上條雄彦(1982)「口腔解剖学第1巻骨学(頭蓋骨)」アナトーム社
 片山一造(1990)「古人骨は語る」同朋舎出版
 Matsumura, H. (松村 博文) (1995) A Microevolutional History of the Japanese People as Viewed from Dental Morphology. National Science Museum Monographs No. 9, 1-130. National Science Museum, Tokyo
 Nakahashi, T. and Nagai, M. (1986) Sex Assessment of Fragmentary Skeletal Remains. 『人類学雑誌』94 (3) 289-305
 中橋孝博(1988)「古人骨の性別判定法」『日本民族・文化の生成1 - 永井昌文教授退官記念論文集』217-233
 瀬田季茂・吉野峰生(1990)「白骨死体の鑑定」令文社
 柳原 博(1957)「日本人歯牙の咬耗に関する研究」
 『熊本医学会雑誌』31, 607-656



2号髌人骨出土状況

2 胴城遺跡3号住居出土のウマ

ウマの上顎臼歯・下顎臼歯及びきわめて保存不良の肢骨片がわずかに出土した(P.L.10 参照)。

年令：老令馬

咬耗が極度に進み、上顎後臼歯では咬耗面にエナメル質を欠いている。老食による自然死と思われる。

馬格：咬耗が極度に進んでいるため歯列長は本来の値より小さくなっていると思われるが、日本の小型・中型在来馬ほどの大きさと、少なくとも外来馬ではなさそうである。

参考文献

- 西中川 敏編(1991)「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書

第3表 性別判定基準値との比較表

脚城2号	現代人男性		現代人女性	
	中根(1988)	Nakahashi & Koga(1986)	中根(1988)	Nakahashi & Koga(1986)
頭蓋(上脛骨最小径)	62.9	58.7	62.0	54.0
FEM(人頭骨中央径)	87.6	82.2	83.6	76.3
TB1(脛骨尖部孔位距)	87.4	84.9	89.7	79.6
CSB(脛骨臼径)	36.3	35.4	35.9	32.9
SNB(上脛骨切端幅)	27.5	27.0	26.0	30.0
SAT(仙骨孔径)	29.8	30.6	32.8	29.3
SIA(仙骨折部長)	54.8	54.0	37.7	54.0

※この値より大きければ男性、小さければ女性と判定する。

単位はcm

第4表 脚城遺跡2号墓頭蓋計測表

計測番号	計測箇所	計測値
1	側頭部前長	109.2
11b	ラテアウワール幅	118.3
11(11)	外耳道幅	105.9
12	眉上後頭幅	85.7
13a	乳棘突起間幅	102.0
13b	乳棘突起幅	15.4
13(11)	乳突部前長	124.0
14	後頭部底径幅	20.0
15	人頭部孔幅	26.0
17(2)	ハジオン・ブレイグマ高	133.0
17(3)	頭蓋部最大高	134.0
30(13)	後頭部径長	53.7
30(3)	上顎突出高	41.0
38(1a)	仙骨孔径	32.4
40	上顎前突記長	51.0
41(1)	後上顎突起幅	44.4
42	口蓋長	44.6
42a	オウラレー・後後縁距離	47.7
62(11)	前口蓋長	35.0
63	口蓋幅	34.0
63a	口蓋前長	38.4
63(2)	前口蓋幅	21.7
67	前下顎幅	47.2
68a	下顎臼歯径長	28.2
68b	オトガイ高	28.0
69(11)	下顎体高	28.3
69(12)	下顎体高(M2)	26.1
69(3)	下顎体厚	14.6
70b	下顎体厚(M2)	15.7
70(3)	下顎切頭深	51.8
71(1)	下顎切頭深	34.6
71b	下顎前長	19.0
80	上顎上唇前長	45.0

計測法は野場(1991)による

単位はmm

第5表 脚城遺跡2号墓四肢計測表

計測部位	計測番号	計測箇所	計測値
軸骨	1a	軸骨前長	39.2
11	11	軸骨後長	27.6
14	14	肩胛骨幅	59.0
15	15	肩胛骨長	17.1
15-1	15-1	肩胛骨幅	29.6
16	16	仙骨管上口深	27.2
17	17	仙骨管上口幅	29.8
18	18	仙骨管前体上面幅	46.3
19	19	前仙骨孔間幅	31.0
1	1	前仙骨孔長	141.0
4	4	中央前径	10.0
5	5	中央尖径	13.0
6	6	中央間	50.0
12	12	前部高長	31.5
13	13	前部高幅	24.4
13-13	13-13	前部高幅	21.2
14	14	前部高深	3.0
2	2	上脛骨前長	297.0
5	5	中央前径	19.4
6	6	中央前小径	18.3
6a	6a	三角部前小径	18.8
6b	6b	中央幅	19.3
6c	6c	中央尖径	19.0
7a	7a	中央間	63.0
14	14	肘部高幅	25.3
15	15	肘部高深	19.3
尺骨	1	尺骨前長	39.2
14(1)	14(1)	尺骨後長	39.2
22	22	尺骨臼歯径	53.4
22a	22a	尺骨深	18.8
1	1	尺骨前長	390.0
6	6	骨体中央尖径	27.0
7	7	骨体中央幅	29.1
8	8	骨体中央間	87.6
9	9	骨体上幅	29.4
10	10	骨体上尖径	25.3
11	11	骨体下前小尖径	26.3
12	12	骨体下幅	31.5
13	13	尺骨前上幅	92.0
14a	14a	後頭部長	60.0
14b	14b	前部高長	31.0
14d	14d	部長	29.0
15	15	肩直径	29.8
16	16	肩尖径	23.0
17	17	肘間	10.1
18	18	肘前径	45.4
19	19	肘直径	44.8
20	20	肘間	15.2
1	1	肘骨全長	287.0
8	8	中央最大尖径	23.3
8a	8a	尖部孔位前長	31.0
9	9	中央幅	20.0
9a	9a	尖部孔位幅	22.7
10a	10a	尖部孔位間	88.4

計測法は野場(1991)による

単位はcm

第6表 駒城遺跡2号墓出土人骨計測表

切歯		単位:mm				
歯	種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齧	咬耗部位・咬耗度
上顎	右 中切歯	8.1	7.1	10.6	遠心歯槽部にCの齧痕	切歯に線状に象牙質露出
	左 中切歯	8.0	7.2	10.5	遠心歯槽部にCの齧痕	切歯に線状に象牙質露出
	右 側切歯	5.8	6.2	8.1	遠心歯槽部にCの齧痕	切歯に線状に象牙質露出
下顎	左 中切歯	5.0	5.9	7.0	舌側歯槽部にCの齧痕	切歯に歯状の象牙質露出
	右 中切歯	5.2	5.8	7.0	舌側歯槽部にCの齧痕	切歯に線状の象牙質露出
	左 中切歯	5.2	5.8	7.0	舌側歯槽部にCの齧痕	切歯に線状の象牙質露出

犬歯		咬耗部位・咬耗度				
歯	種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齧	咬耗部位・咬耗度
上顎	右 犬歯	7.5	8.1	8.6	咬耗面は舌側に傾斜し、尖部部に大きく象牙質露出	
	右 犬歯	6.7	7.6	10.2	咬耗面は唇側へ傾斜し、尖部部に三角形に大きく象牙質露出	
	左 犬歯	6.38	7.5	10.0	右犬歯と同様、咬耗面の傾斜がやや強い	
上顎小臼歯	種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
	第2小臼歯	6.5	9.1	7.3	エナメル質のみ咬耗	
	第1小臼歯	7.6	9.3	7.0	頬舌咬頭に点状の象牙質露出	
下顎小臼歯	種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	Blackの分類	咬耗部位・咬耗度
	第2小臼歯	6.3	7.8	6.2	Blackの分類はD型	頬側咬頭に小象牙質露出
	第1小臼歯	7.0	7.9	8.3	舌側加歯筋はa型、遠心舌側溝あり	頬側咬頭に小象牙質露出
左	第1小臼歯	6.7	7.4	8.3	舌側加歯筋はa型、遠心舌側溝あり	咬耗面舌側に傾斜
	第2小臼歯	6.2	8.0	6.6	近心舌側咬頭に小象牙質露出	咬合面舌側に傾斜
	第3小臼歯	6.2	8.0	6.6	近心舌側咬頭に小象牙質露出	咬合面舌側に傾斜
上顎大臼歯	種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
	第3大臼歯	欠如	—	—		
	第2大臼歯	9.4	11.1	?	頬側咬頭に極小の象牙質露出	
右	第1大臼歯	10.1	11.9	?	遠心舌側咬頭に開口部の径4mmの象牙質露出	
	第1大臼歯	10.1	11.59	?	舌側2咬頭に小象牙質露出	
	第2大臼歯	9.2	11.3	?	近心舌側咬頭に小象牙質露出	
左	第3大臼歯	8.2	11.3	?	近心舌側咬頭に小象牙質露出	
	第2大臼歯	10.6	10.2	6.6	咬耗は広く遠んでいるが象牙質の露出なし	
	第3大臼歯	10.6	10.1	6.8	エナメル質にわずかに咬耗あり	
下顎大臼歯	種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
	第3大臼歯	10.1	9.4	6.0	近心咬頭に小象牙質露出	
	第2大臼歯	10.4	10.6	5.3	遠心頬側咬頭を欠くすべての咬頭に小象牙質露出	
右	第1大臼歯	11.0	11.0	6.2	頬側咬頭に点状の象牙質露出、舌側2咬頭にもより小さい象牙質	
	第1大臼歯	11.6	10.9	7.3	遠心舌側だけに象牙質露出	
	第2大臼歯	10.0	10.2	6.6	咬耗は広く遠んでいるが象牙質の露出なし	
左	第2大臼歯	10.6	10.1	6.8	エナメル質にわずかに咬耗あり	
	第3大臼歯	10.6	10.1	6.8	エナメル質にわずかに咬耗あり	
	第3大臼歯	10.6	10.1	6.8	エナメル質にわずかに咬耗あり	

第7章 総括

はじめに

検出した住居は、2つの遺跡をあわせて縄文時代から平安時代までの83軒である。集落の中央か、その近くを横断したかのようで、住居は調査区全体に分布している。変遷の中では6世紀後半以降継続し、10世紀にピークを迎えている。第4章、第5章が、その詳細である。ここでは、第1節で遺跡の変遷を取り上げ、第2節で鳥取松合下16号住居出土の銅鏡を含め県内資料38点を集成、第3節では鳥取松合下9号住居で出土した曲物と樹皮について述べ、調査のまとめとする。

なお遺構の名称は、鳥取松合下、胴城に限り遺跡を省略して記述する。また、遺構などの年代観については、芳賀東部団地遺跡(註1)、坂口 一・三浦京子(註2)を参照した。

第1節 遺跡の変遷

1 遺跡の範囲

群馬県文化財情報システムには、市立芳賀小学校から大正用水までの台地上が胴城遺跡、谷地が鳥取松合下遺跡として登録されている(註3)。調査区は、登録範囲の十分の一以下の面積である。それでも集落の中央か、近い位置と推定したのは、東隣りにある先述の芳賀東部団地遺跡の調査成果による。

集落は、台地と谷地を基盤とし奈良・平安時代だけでも住居が420軒以上、縄文時代まで含めると、その数は500軒を越す。さらに250棟以上の掘立柱建物を加えて15期に区分され、変遷が詳述されている。

3つの台地の中でも、特に集中した範囲の横が本調査区である。台地の東側、中でも緑辺部に遺構が集中していることや、大小の住居を組み合わせた集落構成は本遺跡でもみられる。

先述の集落の中央か、近い位置と調査区を評価したのも、理由は遺構分布が似ているからである。谷地をはさんで仕切るよりは、むしろ藤沢川までが一体の遺跡とて

みてもよいのではないか。谷地が水田であれば、その両側の台地に住まいを構えるのが自然である。

しかし、課題はその水田である。周辺の遺跡を見ても、集落に対応するような水田が明らかとなった所は少ない。あっても確認できたのは平安時代で、調査したかの問題ではなく地形勾配の制約で残りにくいのか、それとも生産の場が居住域とは離れてあるからなのか。

鳥取松合下遺跡では期待した結果が得られず、水田は可能性にとどまる。藤沢川沿いを少し南下すれば、谷地も広くなり水田には適している所が多いように見える。しかし鳥取福蔵寺遺跡のように、一方の谷地が水田でも同じ条件の隣接箇所に開墾の形跡がないといった所もある(註4)。

これを見ると開墾の程度は一律ではなく、谷地があるから水田にして耕作に励む、集落を構えるという状況でもないらしい。だからといって畠があるのかといえば、これも検出されていない。多くの台地を調査してきたにも係わらず水田以上に手掛かりに乏しく、ともに課題となったままである。

調査区の近くでは、中央の南に支谷の埋没している可能性がある。これは旧石器確認調査で明らかとなった、ローム層の堆積レベルの差から推定したもので、この支谷の消長が遺跡の構造や変遷と係わっていたとみられる。古墳時代までの東西に分かれた遺構分布や、古墳の築造に影響を読み取れるが、そこは仕切り線やその逆に輪の中心にするという意識が働いたのであろう。

以下で、旧石器時代から近世までの変遷を述べる。

2 時期別変遷

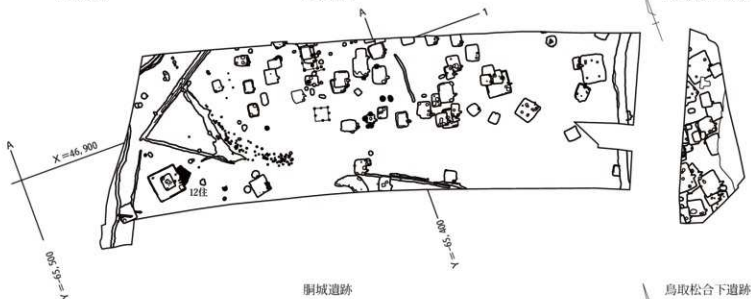
旧石器時代

胴城遺跡では石器と、地点を別にした結晶質片岩が出土した。結晶質片岩は、再三述べたように7工区以来の課題である。石器であれば前期旧石器問題と関係し、どの層位まで調査するかに係わる。石器素材としても利用は可能なのであろうが、それ以前に赤城山麓でも産出するとして当事業団内でも石器か否かの見解は分かれている(註5)。

縄文時代

銅城遺跡

鳥取松下遺跡



3・4世紀

銅城遺跡

鳥取松下遺跡



第199図 時期別遺構分布図(1)

本遺跡では、84N012・13グリッドの暗色帯から八崎軽石層までの間に、30点近くが集中している。上下で1m前後のレベル差を持つが、層位はこれまでどおりである。しかし、周囲のグリッドでは出土が稀である。分布に偏りがあるからといって人為的とはできないが、限られた範囲に30点近いという数が目を引いている。

もう1カ所は、銅城32号住居掘り方でのナイフ形石器出土が契機となって調査に至る。浅間大窪沢軽石層から浅間板鼻黄色軽石層までの間で、黒曜石と硬質頁岩の石器が100点余り出土している。

本遺跡だけでなく、8工区では軒並み旧石器が出土している(註6)。これまでは細石刃が出土した鳥取福蔵寺遺跡(註7)や、その周囲での槍先形尖頭器(註8)が知ら

れていたが、旧石器時代となると調査が稀な地域である。本遺跡は、この地域に遺跡が多いことを推定させ、暗色帯前後の出土事例が多い中で数少ないローム層上位の資料として注目である。

縄文時代

検出したのは、前期黒浜式期の住居1軒と16基の土坑である(第199図上段)。周辺では遺構が最も多く検出されている時期で、改めて遺跡の多さを印象付ける。規模は大きくはないが、藤沢川に面した集落である。

遺構があるのは銅城遺跡の西側だけで、その中でも川寄りに12号住居と数基の土坑があり、距離を置いて台地の中央近くに土坑群がある。12号住居から土坑群のひとつ

つ63号土坑までは、約50mの距離になる。

遺物の分布範囲を集落とすると、その範囲は調査区外にまで広がるかともよい。住居と土坑群が離れているのも、調査区外に推定している支谷に近いという理由だけでなく、検出したほかにも住居があるからという見方が自然である。

住居は半分を検出しただけであるが、方形とみられ前期中葉から後半の特徴を表している。これに伴う土坑は、円形と楕円形の2種類がある。円形でも深さに違いがみられ、深いものは暗色帯まで掘り込んでいるが、数の上ではローム層上位までの浅いものが大半である。深くても袋状となるものは少ないが、深さの違いは時期差を示しているのかもしれない。代表的な事例として29号と31号の重複をあげておく。

唯一の楕円形が26号土坑で、深くて等高線に直交していることから落として穴と推定した。藤沢川と推定する支谷にはさまれ、狩猟の場として数を期待したいところであるが検出したのは、この1基だけである。

58号土坑の石製品は、直径4cm、凹石のミニチュアのように実用には向きな大きさである。58号土坑は、数少ない土坑同士の重複事例で、貯蔵用を埋葬施設に転用し、それへの副葬用とも考えられる遺物である。

注目しておきたいのが、12号住居の北10m(85K19グリッド)で出土した石皿(第198図29)である。遺構外としたのは、ローム漸移層で単独に出土したからである。廃棄というには惜しい無傷で、屋外の作業の場にあったと考えられまいだろうか。28号土坑にも近く、住居のまわりとして適度な位置にある。

以上が前期の様相であるが、ほかにも中期後半～後期前半の土器が出土している(第194～196図)。主な分布は、川沿いに広がっている。対岸には堤遺跡(註9)があり、敷石住居からなる後期の集落との関係を考えているところである。それでも土坑を前期としたのは、遺物分布域との違いを決め手にしている。

3・4世紀

鳥取松合下1号住居とその周囲で、構式土器の破片が少量出土している。いずれも覆土に混入した状況で遺構には結びつかないが、近くに胴城61号住居がある(第199図下段)。この状況からみて、弥生時代終末期から古墳

時代初頭の短期の集落が、ここにもあったといえよう。台地の縁辺部にあるというのは、水田との関係で注意することであるが、先述のように可能性を指摘したにとどまり状況は不明である。

胴城61号住居は、長短軸の差が1.41mで南北に長い。これは、弥生時代の傾向といえるが、出土したのは口縁部に輪積み痕を持つ壺や、胴部に縄文を施した壺である。石田川式土器についても、調査区の東側で点々と少量出土しているだけで、分布の傾向がつかみにくい状況にある。

5世紀

覆土に混入して高環など、少量が出土してはいるが検出された遺構はない。周辺では五代中原Ⅰ・Ⅱ遺跡(註10)で中葉～後半の集落が検出され、藤沢川沿いの下流には初期群集墳の芳賀西部団地遺跡がある(註11)。

芳賀西部団地遺跡は、縄文時代以来遺構がなかった所に古墳が作られている。古墳は台地の東縁辺に沿うように作られている。一方の五代中原Ⅰ・Ⅱ遺跡は、芳賀東部団地遺跡のすぐ南に隣接していて、5世紀代だけの集落が形成されている。住居同士が重複することは稀で、半ば整然と並んだというような配置に特徴がある。前後と継続しないのは墓域が出現したからで、一時的に居住域を移すというようなことがあったのだろうか。

2つの遺跡との距離をみると、本遺跡もそうした動きがあっても不思議ではない近さにある。調査区に隣接して住居が存在した可能性は高い。その手掛かりが、次の時期、調査区の西端に寄って検出された住居である。

6世紀

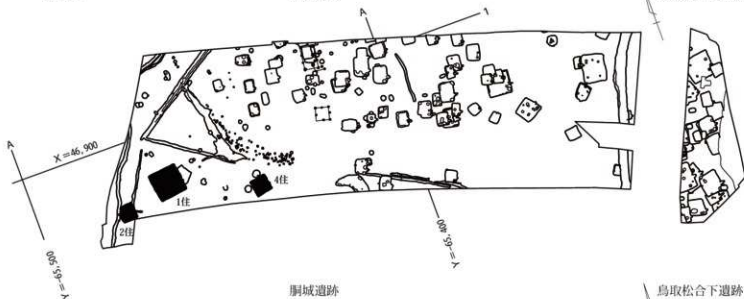
胴城遺跡の西端に寄って6世紀初頭から前半にかけての1号、2号、4号、3軒の住居が検出されている(第200図上段)。4号住居にはFAa堆積しているが、大小の住居の組み合わせからなる、集落内の支群の一つを検出したとみられる。口縁部が直立気味の坏や赤色塗彩を施した坏に、この時期の特徴が表れている。

3軒の後には継続することなく、空白である。次に遺構が作られているのは、7世紀になってから調査区の東側である。隣接する芳賀東部団地遺跡では、H区で6世紀後半の住居6軒が検出されている(註11)。また、南30m

6世紀

胴城遺跡

鳥取松合下遺跡



7世紀

胴城遺跡

鳥取松合下遺跡



第200図 時期別遺構分布図(2)

にある芳賀北原遺跡は、胴城遺跡の推定する範囲内にあるが、ここでも6世紀後半の住居4軒が検出(註12)されており、調査区を外れたところでは住居が確認されている。本遺跡集落のは中心を外れ、その北縁に位置するのではないだろうか。

藤沢川の対岸にある西田遺跡では、5世紀代の住居と6世紀中葉～後半の帆立貝式古墳を含む古墳6基が検出されている(註13)。九料遺跡でも6世紀前半の住居6軒が検出(註14)され、さらに南が芳賀西部団地遺跡と、川の兩岸には濃密な遺構分布のあることがわかる。

古墳は台地の縁辺に作られていることが多く、次々作られて墓域が拡大すれば居住域との競合は避けられない。それが特定の台地に集住させ、さらに上流へと居住

域を拡大させる要因となったのであろう。

7世紀

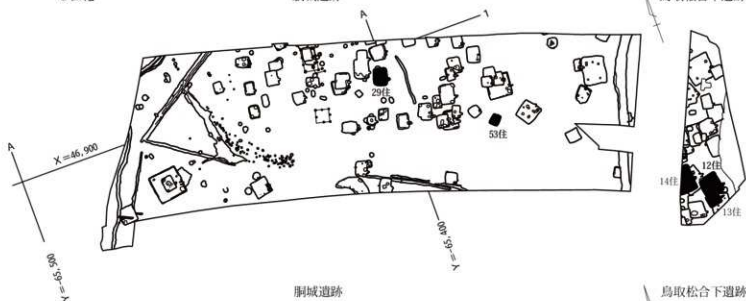
台地の中央に古墳が作られ、集落内に墓域が出現するという大きな変化がある。古墳は、『上毛古墳総覧』(以下『総覧』)芳賀村1号墳で、記載通りであるなら直径20m前後の円墳である。時期を特定することはできなかったが、台地の中で孤立したようにあるか、『総覧』に漏れがあっても、数基で群を作る程度の規模であろう。

藤沢川沿いには、芳賀西部団地遺跡の初期群集墳以降、古墳が川に沿って点々と作られている。6世紀代が西田遺跡で中葉から後半、そして前方後円墳のオブ塚古墳が作られ、7世紀代が芳賀西部団地遺跡に4基、北上して

8世紀

胴城遺跡

鳥取松合下遺跡



9世紀

胴城遺跡

鳥取松合下遺跡



第201図 時期別遺構分布図(3)

芳賀北曲輪遺跡が6基という検出状況である。本遺跡は、川沿いを北上する歩みの中の1基である。

住居は、鳥取松合下遺跡で1号、2号、14号、21号住居の4軒、胴城遺跡では17号、20号、52号、54号、55号、59号住居の6軒が、古墳を遠巻きするように調査区の東半分に分布している(第200図下段)。遠巻きにしていることでわかるように、古墳を意識していたことは十分考えられる。古墳のまわりに遺構の無いことが、意識した表れだろうが明瞭な区別や境界があるのかといえば、その形跡はない。

では、空白の調査区西側をどう見たらいいのか。6世紀代の集落とは断絶していたから、というには広々としている。それとも畠など、より有効的な利用法を考える

べきなのだろうか。今のところ、調査で得た明確な回答はない。

断絶していたのかといえば、その兆候があるはずだが大型住居とその周囲に小型住居が囲む構成は6世紀代と同じで、群の数が増えている。大型住居とするのは一辺が6m以上の方形で、鳥取松合下では1号、15号住居の2軒があり、胴城では59号住居1軒が該当する。3軒ともに、拡張するために建て替えがされている。居住期間が長いことを示していて、中心の施設らしさを物語るものである。

ただ、遺物組成は周囲と変わるところがなく、出土したのは坏など小型の器種に限られている。長胴甕は、カマドの焚口で使用されていたものである。

10世紀

胴城遺跡

鳥取松合下遺跡



11世紀

胴城遺跡

鳥取松合下遺跡



第202図 時期別遺構分布図(4)

8世紀

胴城遺跡では住居の数が大幅に減少する。29号、53号住居の2軒となり、鳥取松合下遺跡でも12～14号住居の3軒である(第201図上段)。

減少と評価はしてみたが、次の9世紀とは継続性がみられる。閑散とした状況ではない。鳥取松合下遺跡が大型の住居を含めて変遷しているのを見ると、支群の構成は維持されている。

9世紀

胴城遺跡では、中央部に23号、26号、31号、35～37号住居の6軒、距離を置いて南に13号住居の合計7軒がある。鳥取松合下遺跡では5号、9号、18号、19号の4

軒が検出され、その中の9号、18号、19号の3軒は焼失住居である(第201図下段)。

この分布状況を見る限りでは、3つの支群に分けられる。東にある一群が、鳥取松合下遺跡の焼失住居3軒と5号住居の4軒、胴城遺跡中央部北の一群が23号、26号、31号、35号、36号、37号の6軒からなる。この中で23号だけが東に離れている。35号と36号が重複し、ほかも位置が接近しているので細分は可能である。

26号住居は、建て替えが頻繁に行われていて、周囲にはない状況である。群の中心の住居でもというべき存在で、ここからは「万」の墨書土器が出土している。最後に胴城13号の1軒だけであるが、古墳まわりの一群として調査区の南に展開するものである。

焼失住居は、上屋の構造までは明らかにできなかったが、2つの点が特記される。1点目が第3節で詳述した曲物と樹皮を利用した容器、そして容器ではないかとみられるウリが出土したことである。曲物にはアワ粒が付着していて、内容物が判明した。保管容器か、調理の蒸籠かまでは検討していないが、出土したのはカマドからは離れた住居北西隅の床からである。

2点目は、上屋に利用されていた木材のことで、樹皮付きの枝と直径50cm以上の木を割ったものが混じっている。また、9号住居と18号住居とでは樹種構成が違うなど、一様ではないことが判明した。

10世紀

住居の数は、9世紀に比べて倍以上の数に増加している。鳥取松合下遺跡が10号、11号住居の2軒、胴城遺跡が3号、5～11号、14～16号、24号、27号、28号、30号、33号、34号、38～41号、43～51号、56～58号住居の33軒である(第202図上段)。この軒数から集落のピークを判断した。

9世紀の住居と重複することはないが、10世紀の前半と後半とでは複数の事例がある。胴城45号～47号住居、同56号～58号住居のように3軒という所もある。またカマドの改築も盛んで、胴城40号住居をはじめ8軒がある。集落がピークを迎え、軒数が増えたためにスペースの確保がむずかしくなったことが重複、カマド改築につながっている。

住居は、大きさに差がなくなる。一方で小型化も進み、最小面積は胴城40号住居の4.67㎡である。それでもカマドの位置や大きさに変化は少なく、40号住居では依然として東壁の中央寄りに作られ、石が多く使われ、焚口が広くなっている。

特記事項は、粘土を使ったカマドの作り方で、通常みられる天井だけでなく、地山にまで粘土が貼り込まれている。この方法は、床がロームまで掘り込んでいない住居に多いが、ロームに代わる補強策として採用・普及していったとみられる。

その他、貼床の上に薄く粘土を貼っているのが胴城15号住居で、これは補強するというよりは上にのせる土台だったのではないかと。土坑では、鳥取松合下18号住居に縁にだけ粘土を貼ったものがある。これは9世紀の事例

で、掘り込みは浅くローム漸移層までである。

黒土土器は、この時期が最も多い。胴城27号住居「万」は、隣接する26号住居での出土例とあわせ、住居の群を把握する目安にできる。

鉄器は、9世紀以来、依然として多数出土する傾向にある。組成としては刀子、鉄鏝があって、これに鉄滓、そして原料ではないかとみられる「故鉄」が伴う。鍛冶に関する遺構はないが、調査区周辺に推定させることは可能である。

埋没した胴城3号住居内の土坑に馬が埋葬されている。体高から外来馬ではないと鑑定されている。1軒だけ遠く離れた住居の跡に埋められている。

11世紀

住居の数は減少し、鳥取松合下16号住居、1軒だけとなる。第2節で詳述した銅碗は、16号住居で出土したが、破片であることや出土した状況から、覆土に混入したものとしておきたい。

至近での官衙や寺院といった場所は見当たらないが、候補は本遺跡より東600mにある峰塗遺跡で出土した奈良三彩の小壺が本来あった所であろうか。

中世

青柳、細井の御厨と大胡郷に関連が考えられる地域としては、是非とも明らかにしたい時代であるが、検出された遺構はなく、遺物として鳥取松合下遺跡で龍泉窯青磁?、胴城遺跡で常滑焼の甕が出土しているのみである。全くの空白域というわけではないだろうが、調査した中に手掛かりはない。次への課題としたままである。

近世

胴城遺跡で検出されたのは、溝や土坑、そして墓坑などである。2基の墓は、2号墓が17世紀後半で、1号墓がそれよりもさかのぼる。副葬された銭を年代の決め手としたが、1号墓では渡来銭のみが3枚、2号墓では寛永通宝6枚と題目銭1枚である。伊藤順一氏の編年によれば2号墓が1期、1号墓がIV期に比定することができる(註15)。

第6章に詳述した人骨は、鑑定の結果、1号墓が老齢の女性、2号墓が壮年期の男性と判明したが、男性は華

著な印象を受け、肉体労働とは縁の遠い人物だったのではないかと指摘されている。

本遺跡から南東500mにある鳥取東原遺跡では、1基の墓坑から複数の人骨が出土したと報告されている(註16)。九料遺跡でも5基の墓坑が報告されている(註17)。そこでは「出土した古銭や人骨の数から考えると、1つの墓坑に1遺体ではなく、4号には3遺体が葬られていることが判明している」(P67)ということであるが1基の墓坑に複数の埋葬することがあるのか、それとも墓地の改修で集葬して再埋葬するようなことがあったのであろうか。

題目銭は、念仏銭とともに絵銭といわれているもので、本遺跡が県内3例目の出土となる。

前橋市元総社寺田遺跡 河川に流れ込んでいたもので「大黒」様を鋳出した銭2枚が出土している(註18)。

芳賀東部団地遺跡 墓坑から寛永通宝に伴い「南無阿彌陀仏」の念仏銭1枚が出土している(註19)。

芳賀地区では、隣同士の遺跡で出土したことになる。先述の鳥取東原遺跡や九料遺跡での複数埋葬の報告事例もあり、この地区だけの独特な埋葬習慣であるのか、興味深い状況を示している。

3 掘立柱建物

胴城遺跡では掘立柱建物3棟が検出されている。住居との位置関係で平安時代と判断したが、時期を特定するのに課題を残した。住居との位置関係は、1号掘立柱建物が距離を置いて単独にある。3号掘立柱建物が住居と全く重なっている。2号掘立柱建物は、変則的な構造で提示するしかなかったが、位置としては3号掘立柱建物に前後する。周囲にあるピットの数からすると、数棟が建つ可能性もある。

建物の数からみて、複数の住居に1棟というような対応関係を考えているが、南北に並んでいるところにこれら建物の役割が表れている。そこは調査区内でもロームがわずかに高い場所で、集落に一線を画して区分するといった役割も考えられ、平行して10号溝があるのも意図的な配置ではないか。

しかし調査区を集落の中央か、その近い位置と評価した割には数が少ない。隣接する芳賀東部団地遺跡が250棟以上という数であるだけに極端な違いである。遺跡の

評価に係わることで拠点の集落と、その周辺遺跡の違いが反映されたとしてとらえておきたい。

4 鍛冶

芳賀東部団地遺跡では、9世紀代の鍛冶遺構が検出され、鉄滓の成分についても分析がされている。住居群からは離れて台地の内部に孤立してあることや、操業の期間については8世紀代にさかのぼるのではないかと、その特徴が述べられている(註20)。精錬と製鉄の分業や、集落を越えての製品流通も推定されている。農閑期の片手間にやる仕事ではない、ということである。

その意味もあって本遺跡での注目は、胴城8号住居で出土した、再生用の原料だという「故鉄」である。長さが揃い、束ねたような状態は、保管のためだけでなく、流通時の規格品を思わせる。8号住居に鍛冶をしていた形跡はなく、工人が住む家だから保管できたのか、それともカマドでもできる簡易な作業のためだったのか。鉄は貴重である。

これまで住居で出土すれば、そのまま使用した道具と理解しがちであったが、「故鉄」はその見方を変えるものだろう。特に遺物が破損していれば尚更で、「故鉄」の可能性が高いといえよう。

もう一つ気に掛かっているのが、割れた鉄滓である。塊形滓がいずれも半分程度か、それ以上に割られている。小分けにした状態である。資料を整理した本事業団笹澤泰史氏は、鉄滓が8世紀後半から9世紀代の堅型炉に伴う鍛冶滓の特徴を持つと指摘している。

例えば鳥取松山下11号住居9には、鉄分が豊富に残存し、木炭痕が大きいことから精錬炉での炉内生成物の可能性がある。同13号住居12は滓質が緻密である。胴城33号住居16も滓質は密で、下面には木炭痕が点在する。いずれも残滓であったのか。「故鉄」並みに、この状態で流通していたのではないだろうか。

5 文字資料

墨書土器は、11点のうち判読できたのは「万」が2点、「高七」1点で、ほかは偏や作りの一部か、画数が多くても破片のために判読不可とした。

「万」は出土した住居が隣接している上に、字体も似ていることから住居を群に分ける目安としてみた。「高七」

は、穂先がのびやかで書き慣れた人の印象を受ける。ほかの破片でも、9世紀代のは書き慣れた印象を受け、10世紀代になると「万」のように稚拙な字体で、両者の間には書き手と時期の違いが感じられる。

周辺では芳賀東部団地遺跡のように、墨書土器が多く出土している。本遺跡も、そのうちのひとつという見方が自然で、文字の普及程度は高いといえる。「万」の稚拙な字体は、いかにも書くことに不慣れた人が書いたもので、それが逆に文字の普及の程度を示している。礎は、胴城49号住居15が須恵器の裏の破片を転用したものである。このあたりに普及の程度が読み取れる。

2つの遺跡の出土事例は、次のようである。

鳥取松合下遺跡

1号住居 10 土師器環 底部外面「判読不可」

胴城遺跡

9号住居 1 須恵器碗 口縁部外面「判読不可」

9号住居 2 須恵器環 口縁部外面「判読不可」

15号住居 1 須恵器環・碗 底部内外面「判読不可」

26号住居 1 須恵器環 体部外面「万」

27号住居 1 須恵器環 「判読不可」

27号住居 2 須恵器碗 体部外面「万」

28号住居 3 須恵器碗 体部両面「判読不可」

30号住居 7 須恵器碗 体部外面「高七」

37号住居 6 須恵器碗 体部外面「判読不可」

50号住居 5 土師器底部外面「判読不可」

刻書は、胴城8号住居20の「吉」、胴城38号住居の「隆」の文字らしい2点と、記号のような胴城47号住居「+」1点がある。「隆」は線が細くて、そう読むには画数が足りないが、「吉」は誰でも文字と分かる。

土鍾に書くというのが異例である。丁寧に扱われていた証しに光沢まで帯びている。個人の名前を表すのではなく、多くがそうであるように吉祥句の「吉」で、特に区別をするために書いたとみられる。

井上唯雄氏は、石製紡錘車に線刻された春日臣国麿を人名、勢多郡楊氏の楊氏が郷土層の人名とみなし、「この地域が律令制の中に組み入れられていたことは確実で」、「洪積台地で古くから養蚕地区であったことは想像に難くない」と指摘している(註21)。

本遺跡の「万」は、住居群に分ける目安になるのかと指摘したが、その文字は芳賀北部団地遺跡でも「千万」が出

土している。2つの遺跡は、離れているが同じ台地上にある。文字の類似は偶然ではなく、「万」と「千万」で区別される集落を示す可能性がある。

6 曲物

焼失住居の鳥取松合下9号住居では、第3節で詳述したように、炭化した重木やカヤに混じり曲物が出土した。1～2個体の数が、住居の北西隅床面で出土した。破片の大きさは図示(第205図)したものが大きい方で、10点以上に割れている。側板と底板の2種類と樽とみられる一部がある。側板は、幅が3cm前後で厚さ2～3mm、底板は縁が丸く整形され、縁から1cmほど内側には1mm強の段差がある。板の厚さは4mm、復元される直径は約24cmである。側板の内面にはアワ粒が付着している。食用に保管していたとみられる。

県内の曲物等の出土例としては、以下がある。

高崎市日高遺跡では、側板、底板が出土し、底板の中には焙印が押されているものがある。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「日高遺跡」1982

高崎市国分境遺跡では、河道にある井戸か土坑の中から側板、底板がまとまって出土。ごみとして廃棄したのではなく、祭祀のために供献したと考えられている。木簡を転用した定木が共存している。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「国分境遺跡」1990

高崎市天田・川押遺跡では、平安時代の住居から炭化した状態の皿か盆がカマド焚口の前で出土している。

高崎市教育委員会「天田・川押遺跡」1983

白倉下原遺跡では、台地の東斜面から6世紀前半代の粘土探掘坑が69基検出されている。2基の粘土探掘坑から土器に混じり、それぞれ曲物1点が出土している。72号粘土探掘坑のものは、直径が39×37cm、器高10cm、厚さは側板、底板とも4mmである。蓋の有無は不明である。側板は両端が10cmほど重ねて丸められ、蔓らしいもので綴じられている。それに底板をつけているが、端は外側にはみ出している。26号粘土探掘坑のものは、直径は不明であるが72号よりは小ぶりである。側板、底板の綴じ方は同じであるが、底板の段は溝となっている。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第221集「白倉下原・天引向原遺跡IV」1997

元総社寺田遺跡では、古墳時代後期のFA水田下から樹

皮の曲物13点が出土している。Ⅲ区F A水田下10点、Ⅳ区3面(古墳時代後期)2点、Ⅴ区3面(古墳時代後期)1点の内訳である。228は、Ⅲ区FA水田下から出土した直径が38.5cmと大型の底板である。386も作り方が同じである。232は、側板の重ねられた箇所で組穴が平行している。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第167集『元総社寺田遺跡Ⅱ』1994

元総社北川遺跡では、古墳時代後期MK、B区4面FA下河道から曲物1点が出土している。直径は27.4×25.5cm、側板は、厚さが0.3cmである。底は板ではなくて、ヤナギ属の細い枝をかかかって作ったものである。ほかに4点が出土している。110は樹皮を使用した底板で直径が34.3×33.0cm、厚さ3mmである。113はヒノキ、底板で直径が18.4×15.2cm、厚さ2cmである。165は、ケヤキを使用した底板、直径が27.8cm以上、厚さ1cmである。22はモミ属の側板、幅が3.5cm、厚さ0.6cmで、端にカバ皮で止めた跡がある。この仕様からすると古代のものと思われる。

群馬県前橋土木事務所・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第407集『総社関泉明神Ⅳ遺跡・元総社牛池川遺跡・元総社北川遺跡・元総社小見内Ⅴ遺跡』2007

三ツ寺1遺跡では、古墳時代後期の濠から曲物の底板1点が出土している。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『三ツ寺1遺跡』1988

黒井峯遺跡では、被災した住居から炭化した曲物1点が出土している。

子持村教育委員会『黒井峯遺跡発掘調査報告書』1992
曲物は、古墳時代後期に普及していたことは確か、材質も元総社北川遺跡をみればヒノキ材に限定されず、モミ属、ケヤキなど広葉樹までが利用されている。

用途が明らかなのは黒井峯遺跡の出土例で、住居の隅に置かれていた。貯蔵穴の代用品として使われていたのではないだろうか。白倉下原遺跡は、粘土を盛って運び出すための用具で、使い込まれた様子である。元総社北川遺跡や三ツ寺1遺跡は廃棄されたもので、本来の用途は分からない。

製作上の特徴は、側板と底板の取り付け方で蔓のようなものが2例、組と断定できるものはない。底板は、元

総社北川遺跡だけが簀子のように枝を集めて作っている。県内では唯一である。

以上、遺跡の変遷と特徴的な遺物について述べた。遺跡の様相は、隣接する芳賀東部団地遺跡と似ていて、藤沢川沿いの拠点地区、その一角を占める集落だった可能性が銅鏡の出土などから読み取れる。古墳時代以降は途切れることなく、11世紀代までの変遷をたどることができると。出土した黒土土器「万」「千万」を理由にすると、芳賀北部団地遺跡まで関連していたことが考えられる。

両期は、2度あったと考えられる。最初は、7世紀葛城の形成に伴い居住域が移動する。台地の西から東へ、さらに谷地を越えて台地間の移動までが考えられる。周辺にある古墳の数からみて、藤沢川沿いの高揚が背景にある。2度目は、その葛城だった所にまで土地利用が進む時期である。9世紀前半にはじまり、勢いは10世紀代まで継続している。谷地を基盤とする集落とみているが、耕作地に関する資料はなく、今後の調査に課題を残したままである。

註1 前橋市教育委員会『芳賀団地遺跡群 第1巻(芳賀東部団地遺跡Ⅰ)』1984『芳賀団地遺跡群 第2巻(芳賀東部団地遺跡Ⅱ)』1988

註2 坂口 一 三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年-住居の重複と共存関係による土器形式相列の検討」『群馬県史研究』24 群馬県史編さん委員会 1986

註3 群馬県教育委員会ホームページ掲載

註4 註1に同じ

註5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第478集『上武道路旧石器時代編(2)』2010

註6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第535集『上武道路旧石器時代編(3)』2013

註7 前橋市埋蔵文化財発掘調査部『鳥取福寺遺跡』1998

註8 前橋市教育委員会『芳賀西部団地遺跡』1991

註9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』28 2008

註10 前橋市埋蔵文化財発掘調査部『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』2002 同『五代伊勢宮Ⅴ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡』2003

註11 註9に同じ

註12 前橋市埋蔵文化財発掘調査部『芳賀北原遺跡』1992

註13 前橋市教育委員会『小神明遺跡群Ⅱ』1984

註14 前橋市教育委員会『小神明遺跡群Ⅲ・Ⅳ』1986・1987

註15 伊藤順一「六道銭からみた上州近世墓の様相」『上毛野の考古学』群馬考古学ネットワーク2007

註16 前橋市埋蔵文化財発掘調査部『鳥取東原遺跡』1998

註17 註14に同じ

註18 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第208集『元総社寺田遺跡』1996 鈴木公雄「念仏銭・題目銭と六道銭」『史学』第63巻第3号 1993

註19 註9に同じ

註20 註1に同じ

註21 井上唯雄『V芳賀東部団地遺跡出土の刷刺防錆車について』註11984に同じ

註22 前橋市教育委員会『芳賀団地遺跡群 第5巻芳賀北部団地遺跡Ⅰ-古墳・奈良・平安時代編-』1994

第2節 金属器について

鳥取松合下遺跡では、第44図6に提示したようにD区16号住居から銅鏡の破片が1点出土している。同様に、未報告ではあるが天王遺跡でも竅穴住居から銅鏡が出土しており、比較的近い位置にある2遺跡で資料が追加されたことになる。このように県内においても集落からの金属器出土例は増えてきたものの、上記2点を除くと管見に触れた限り14遺跡17点に過ぎない。他に古墳から9古墳12点、寺院跡から1遺跡4点、出土場所不詳の資料3点が報告されており、合計38点の出土が知られていることになる。県内出土の金属器については、かつて集成をした(註1)が、新しい資料や未報告資料の追加もあることから、当遺跡出土金属器の位置づけをするために、再度の金属器集成と若干の検討をしておきたい。

今回の集成において追加したのは、元総社西川遺跡4点、元総社普海遺跡群1点、天神遺跡1点、小原目遺跡1点、寺間遺跡1点、上大類北宅地遺跡1点の計9点である。また、報告されていなかった元総社寺田遺跡と有馬遺跡の2点についても実測掲載した。他に玉村町の殿台山古墳から銅鏡1点が出土したとされているが(註2)、これは未確認であり集成には含まなかった。したがって追加した資料は、いずれも集落出土のものであり、しかも上大類北宅地遺跡、元総社寺田遺跡、有馬遺跡の3点以外は、いずれも竅穴住居から出土したものである。

古墳出土の金属器については、仏器であるか大陸的な食習慣の受容を示す器(註3)であるかは別として、「畿内政権による地方豪族把握の手段として利用された」(註4)器とする見方が主流で、畿内政権から地方の有力豪族層に賜与されたものが、その後地方で再分配されたと考えられている。県内の古墳出土事例では、大型前方後円墳の観音山古墳や観音塚古墳では、特殊な器種や複数器種が出土しているのに対して、円墳からは単器種1点の出土であり、器種の優位性や数における違いが認められることから、賜与と再分配とする考え方が首肯される。

続いて寺院出土の金属器については、金属器そのものが仏器として国内にもたらされたと考えられてきたものであり、『法隆寺資財帳』や『大安寺資財帳』に「仏分・聖僧分」として多数の金属器の存在が記載されていること

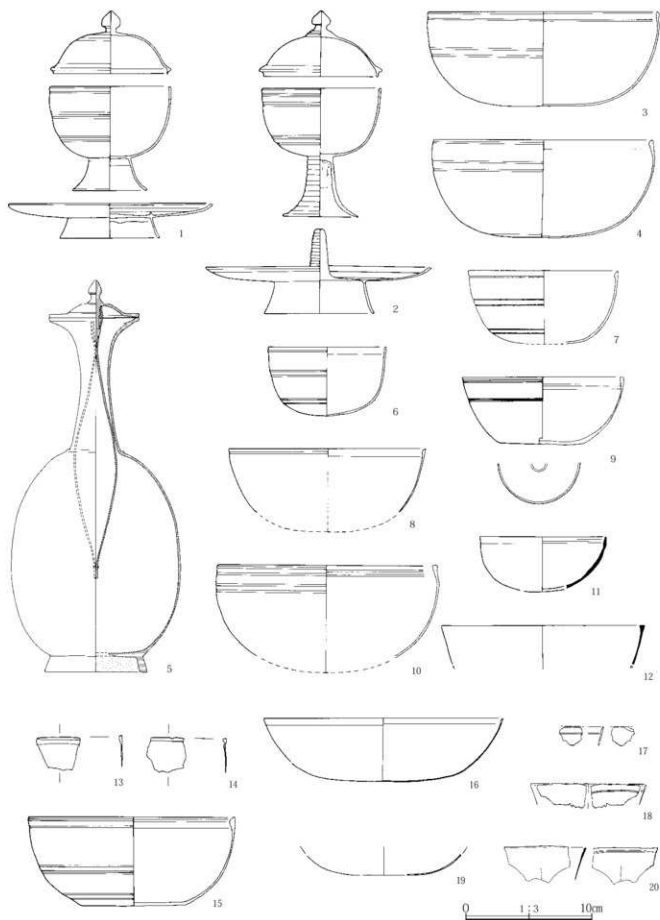
など、寺院において多く所有されていたことは明らかである。したがって、地方寺院においても当然多くの金属器の存在が想定されるのであるが、県内においてこれまでに確認されているのは山王廃寺の4点だけであり、国分僧寺や上植木廃寺の調査では出土していないようである。山王廃寺出土の金属器の中で、16の白銅鏡は、東門付近から緑釉陶器塚とともに重ねられた状態で出土したとされているもので、地鎮具として埋納されたため比較的良好的な状態で残存したものと考えられる。他の3点については、集落出土資料と同様に破片であり、出土状況が判然としないが、本来寺物であったものが散逸したものと見て良いであろう。

次に、集落遺跡出土の金属器では、出土時期は7世紀後半から10世紀代までであり、時間的に顕著な偏りは認められないが、17点中13点が竅穴住居から出土しており、すべてが小破片という特徴がある。これらの金属器が、竅穴住居内で器として使用されていたとすれば、土器のように完形に近い状態で出土する例があっても良さそうであるが、実際にはそうした例は皆無である。こうした状況は、古墳や寺院出土の金属器とは対照的で、おそらく本来使用されていた場所は他にあり、住居内には別な目的で持ち込まれたものと考えられるのである。これを示唆するものとして、金属器出土遺跡の周辺環境がある。列記すると、花瓶と思われる破片が出土した国分境遺跡は、山王廃寺と同じ台地上の至近に位置しており、国分寺とは牛池川を挟んで隣接する位置関係にある。元総社西川遺跡は、国分僧寺とは染谷川を挟んで南側に位置しており、元総社普海遺跡は推定国府の北西側の国分寺との間に位置し、天神遺跡は推定国府の南側に隣接している。また、元総社寺田遺跡は「国厨」「曹司」の墨書土器が出土した国府関連遺跡であり、鳥羽遺跡は国府工房の可能性の高い鍛冶遺構が検出された遺跡である。下東西清水上遺跡は、官衙または有力層の居宅と見られる遺構・遺物が検出された下東西遺跡に隣接し、西方至近に二彩陶器や風字硯・円面硯を出土した中島遺跡が位置している。また、白倉下原遺跡は隣接する天引地区で寺院と見られる遺構が検出されており、荒砥洗橋遺跡では「大郷長」の墨書土器や「井」の焼印が出土し、隣接して「芳郷」の墨書土器を出土した二之宮洗橋遺跡がある。竅穴住居の出土ではないが、有馬遺跡も近くに「有馬廃寺」が想定

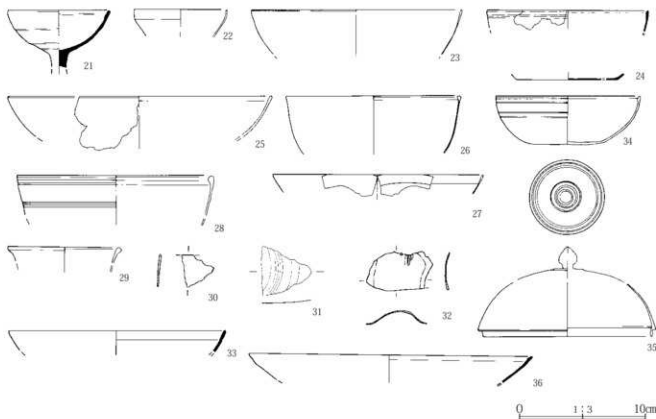
第7章 総括

第7表 群馬県出土金属器一覽

番号	器種	口径/底径/器高(cm)	出土遺跡	出土遺構	市町村	時期	文 献
1	承台付有蓋鏡	蓋 9.4/-/5.0 鏡 9.4/5.9/10.7 承台 16.2/8.0/2.8	観音塚古墳(前方後円墳)	石室	高崎市	6世紀後半	『観音塚古墳調査報告書』1992 113頁 第26図-1
2	承台付有蓋鏡	蓋 9.3/-/5.4 鏡 9.4/5.8/9.6 承台 17.6/8.6/3.9	観音塚古墳(前方後円墳)	石室	高崎市	6世紀後半	『観音塚古墳調査報告書』1992 113頁 第26図-2
3	丸底鏡	17.4/-/7.7	観音塚古墳(前方後円墳)	石室	高崎市	6世紀後半	『観音塚古墳調査報告書』1992 113頁 第26図-3
4	丸底鏡	18.1/-/7.6	観音塚古墳(前方後円墳)	石室	高崎市	6世紀後半	『観音塚古墳調査報告書』1992 113頁 第26図-4
5	王子形水瓶	6.9/8.2/31.3	観音山古墳(前方後円墳)	石室	高崎市	6世紀後半	『観音山古墳』1999 231頁 第154図
6	高脚付鏡	9.3/-/ (5.5)	房子塚古墳(前方後円墳)		佐波郡玉村町	6世紀代	実測図は大谷徹氏による。
7	丸底鏡	11.6/-/5.5	石原稲荷山古墳(円墳)	石室	高崎市	6世紀後半	『石原稲荷山古墳』41頁 図14-17
8	丸底鏡	15.0 ~ 16.0/-/ (6.0)	白山古墳(円墳)	石室?	前橋市(宮城村)	8世紀前後	『群馬県史 資料編3』1981 127頁 図46-20
9	平底鏡	13.3/6.4/5.5	諏訪神社北古墳の東の古墳		藤岡市	6世紀代	『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』224頁
10	丸底鏡	17.8/-/ (8.6)	富士山道跡1号墳(円墳)		前橋市	7世紀後半	『富士山1号道跡1号古墳』1992 14頁 第2図-20
11	丸底鏡	(9.9) -/-/ (4.0)	五雲神社古墳(前方後円墳)		高崎市	6世紀代	『新編高崎市史 資料編1 原始・古代上』1999 494頁 第3図-3
12	丸底鏡か	16.0/-/ (3.0)	三本山古墳(円墳)	石室西壁	高崎市	6世紀代	『中山村誌』1955 96頁
13	鏡		山王庵寺	寺城北側付付近	前橋市	7世紀後半	『山王庵寺跡第5次発掘調査概報』1979 58頁 神図31-10
14	鏡		山王庵寺	寺城北側付付近	前橋市	7世紀後半	『山王庵寺跡第5次発掘調査概報』1979 58頁 神図31-11
15	平底鏡	16.6/8.3/7.4	山王庵寺	寺城南方	前橋市	7世紀後半	『前橋市史 第一巻』1971 623頁 第152図
16	丸底鏡	18.8/-/4.9	山王庵寺	寺城東側東門付近	前橋市	10世紀代	『観音塚古墳調査報告書』1992 149頁 第34図-11
17	鏡		元総社西川道跡	123住	前橋市	9世紀後半	『元総社西川・塚田中原道跡』2003 55頁 第339図-1882
18	鏡	(12.4) -/-/ (2.2)	元総社西川道跡	123住	前橋市	9世紀後半	『元総社西川・塚田中原道跡』2003 55頁 第339図-1881
19	丸底鏡	-/-/ (2.0)	元総社西川道跡	123住	前橋市	9世紀後半	『元総社西川・塚田中原道跡』2003 55頁 第339図-1895
20	鏡		元総社寺田道跡	IV区B下	前橋市		報告書未掲載
21	高足高盒か	8.2/-/ (4.5)	元総社善海道跡群	H-7住	前橋市	10世紀後半	『元総社善海道跡群(18)』55頁 Fig.34-22
22	花瓶か	(7.4) -/-/ (2.2)	固分壇道跡	B区9住	高崎市(群馬町)	9世紀中	『固分壇道跡』1990 未掲載
23	鏡	(17.0) -/-/ (3.0)	下東西清水上道跡	15住	前橋市	8世紀中	『下東西清水上道跡』1998 64頁 第43図-15
24	鏡	(12.6) / (7.9) / (1.5)	天神道跡	24住	前橋市	10世紀代	『天神道跡』19頁 第19図-8
25	鏡	(21.0) -/-/ (3.5)	融通寺道跡	表上	高崎市		『融通寺道跡』1991 703頁 第715図-2470
26	丸底鏡か	(14.0) -/-/ (4.5)	鳥羽道跡	1103住	前橋市	8世紀中	『鳥羽道跡 G・H・I区』1986 735頁 Fig.815-13
27	鏡	(17.0) -/-/ (1.5)	鳥羽道跡	1103住	前橋市	8世紀中	『鳥羽道跡 G・H・I区』1986 735頁 Fig.815-12
28	鏡		筑砥洗橋道跡	4住埋没土	前橋市	7世紀後半	『筑砥洗橋道跡 筑砥宮西道跡』1989 16頁 12図-13
29	鏡	(9.0) -/-/ (1.2)	白倉下原道跡	白倉B区51住	甘楽町	7世紀後半	『白倉下原・天引向原道跡IV』1997 図227-9
30	不明		小原目道跡	2住	前橋市(富士見村)	10世紀中	『小原目道跡』1998 241頁 第128図-13
31	丸底鏡か		有馬道跡		渋川市		『下東西清水上道跡』1998 PL166
32	不明		寺間道跡	1住	前橋市(富士見村)	9世紀後半	『上野山道跡 寺間道跡 孫田道跡』120頁 第99図-11
33	鏡	(17.0) -/-/ (1.6)	土大類北宅地遺跡	4区2溝	高崎市		『土大類北宅地遺跡』1983 23頁 図21-40
34	平底鏡	11.3/5.8/3.9	伝伊勢崎市波志江出土		伊勢崎市		実測図は大谷徹氏による。
35	蓋	13.4/-/-	田滝川村出土		高崎市		実測図は大谷徹氏による。
36	鏡	(22.2) -/-/ (2.0)	総社町付近出土		前橋市		『観音塚古墳調査報告書』1992 149頁 第34図-15



第203図 群馬県内出土金属器集成(1)



第204図 群馬県内出土金属器集成(2)

される遺跡であり、融通寺遺跡は群馬郡の別院「八木院」関連集落と考えられている。

以上のように、竪穴住居から出土した13点中11点、竪穴住居以外から出土した4点中3点が、寺院や官衙関連施設が近くに想定されているか、有力層の存在が想定される遺跡から出土しているのである。つまり、金属器の多くが本来は寺院や官衙関連施設、または有力層のもとにあったものであり、器としての機能を失い破片化した段階で集落内に持ち込まれた可能性が高いのである。鳥羽遺跡1区103号住居のように、工房的な遺構から出土した金属器のように、リサイクル素材として持ち込まれた可能性があるものは理解しやすい例であるが、すべてがそうであったとは考えられない。金色に輝く金属片そのものが価値を有していたものと思われるのである。

こうした集落遺跡からの金属器出土例は、今後も追加されていくものと考えられるが、土器などのように集落

から普遍的に出土するものでないことは明らかであり、多少の資料増加があったとしても、集落内に金属器が普及していたことにはならないものと思われる。その本来の所有者は、寺院や官衙そのものか、官に繋がるような有力層の一部に限られていたものであり、所有者に時期的に大きな変化があったものとも思えない。

したがって、際だって優れた遺構の検出されていない当遺跡の金属器についても、破片として集落内に持ち込まれたものであり、逆に本来所有していた官衙などの施設や有力層の存在が至近の位置に想定できるのである。

- 註1 桜岡正信 神谷佳明 「金属器横徴と金属器指向」『研究紀要15』1998 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 註2 『日本の古代遺跡16 群馬県』1987 保育社
 註3 原 明芳「銅鏡考」『長野県の考古学』1996 (財)長野県埋蔵文化財センター
 註4 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌第64巻第1号』1978 日本考古学会

第3節 鳥取松合下遺跡出土炭化物について

1 試料について

発掘調査時にサンプルとして取り上げられていた炭化物123点について、その樹種等の調査を行った。炭化物は、細かに割れていたものが一括して取り上げられており、その中から試料を抽出し実体顕微鏡を使用して観察・同定を行った。同一Naのサンプルより異なる樹種・資料が検出された場合は、試料を複数抽出して同定を行っている。各試料の同定結果が第8表、遺構別の集計が第9表である。

時期は、9号、18号、19号の3軒の住居とも9世紀前半で、焼失住居である。2号、10号の2軒の住居は、7世紀と10世紀である。

2 観察所見と同定結果

9号住居は、65点の試料を同定した。クヌギ節10点のほとんどは直径3～4cmの小径木で、ニレ科8点、針葉樹3点(Na49・50・53)、散孔材13点、環孔材7点、広葉樹材2点のほか、イネ科植物幹、ウリ科果実の果皮(Na53)、種子(Na48～50・53)、樹皮(Na18・48～51・53)も検出された。

種子は、径1.2mmほどの球形でやや扁平、現世標本資料と比較しアワと同定した(写真1)。アワのほとんどは種皮が取り除かれた状態である。Na53は、果皮や樹皮の破片に接する形で塊状にまとまっていて、土を若干含むブロックで重量12.23gである。またNa50の曲物底板および側板の内面にも、少量のアワが密着する形で検出されている(写真2)。そのほかNa48～50の土の中からもアワが見つかり、合計の重量は1.506gである。遺存状態が良好なアワ20粒を抽出して重量を測定したところ0.010gで、1粒の平均重量は約0.0005gである。アワは、その出土状況からみて樹皮か曲物、フクベのいずれかに収納されていたと考えられる。

針葉樹材の3点(Na49・50・53)は、曲物の底板と側板の破片(第205図)である。年輪幅の狭い樺目材で、どの

破片も全体に虫食いの穴が多数開いている(写真3)。9号住居で出土したほとんどの炭化木材には大小の虫食い穴が存在するが、この曲物は特に顕著である。穴は直径0.2～0.3mmと微小で、分布密度多いところでは1平方cm当たり30ヶ所以上にのぼる。内容物と関係があるのだろうか。なおNa50からは幅5mm、厚さ0.8mm、長さ5.8mmおよび7mmの薄い短冊型の炭化物(樹皮加工品)2点が見つかっている(写真4)。2点とも破損しているものの片方の端1mmほどで裏側に折れ曲がる構造を示している、曲物を固定する樹皮(樺綴じ)と考えられる。

樹皮は、6点とも表皮を取り除いた後の内皮部分で、樹種については不明である。Na53には一方の端を直線的に削り、縷にしたと思われる加工も見られ、樹皮製曲物の側板と考えられる(第205図)。同様な樹皮破片は6ヶ所の試料で検出されたが、その出土位置が住居北西隅に集中し、相互の破片同士接合関係を持つことから同一個体の可能性もある。

Na53より検出された果実は、ウリ科のヒョウタンまたはユウガオとみられる果皮の破片で、中小を含めて約20片が見つかった。このうちの数片が接合できただけで、全体形状については不明である(写真5)。ヒョウタンかユウガオであるかの識別もできない。ただ加工の痕跡は見られないが果皮の内側には種子の付着はなく、試料の周囲より種子の出土もなかったことから、果実として収穫後、保管されていたのではなく、容器として利用されていたと考えられる。

9号住居では以上のほかに、クリ材16点が出土している。大半が直径3～4cmの小径木で、残りの小破片との接合等が困難、形状・用途等を特定できない。

18号住居は、9点の試料を同定した。2点が微小試料で同定できないほかは、7点がすべてクヌギ節で直径3cm程度の丸木6点(Na1・3・4・7・Na不明)、割材1点(Na17)である。丸木の6点には樹皮は付いていないが、材の最外周部に年輪界が見られる。伐採した時期を示唆する資料である。また、削平されていて検出したのが一部で試料も少ないながらも、クヌギ節が圧倒的であることが特筆される。

19号住居は、37点の試料を同定した。クヌギ節の材31点、散孔材3点、残りの3点は微小で同定できなかった。材の大半は細かくブロック状に割れていて、本来の形状

を推定できないが、直径2～5cmの丸木が5点(№5・13・23・30・36)あり、このうち2点(№13・30)には樹皮が付いている。丸木5点の年輪を観察すると、9号住居と同じように材の最外周部に年輪界が見られる。また直径50cmを超す大径木の破片等(14・19・24)が検出されたものの、明らかな加工のある木製品は検出されなかった。用途も不明である。

主な住居ごとに、出土樹種の構成を比較したのが第8表である。9号住居では、製品とみられる針葉樹・樹皮等を除いてもクリ24.6%、クスギ節15.4%、ニレ科12.3%、散孔材20%と分かれている。これに対して、18号住居ではクスギ節88.9%、19号住居ではクスギ節81.1%、散孔材8.1%と、それぞれの樹種の占める割合が大きく異なっている。

3 9号住居と県内出土資料との対比

焼失住居から木製品が出土した例は、愛宕山遺跡4号住居、中沢平賀界戸遺跡G-5号住居、黒井峯遺跡がある。ここでは曲物に、樹皮やフクベまでを含んでいることに特徴がある。焼失住居こそ事例ではあるが、サンプル抽出しないで、取り上げが可能だったものを持ち帰った結果である。まして、曲物の中にはアワが保管されていた可能性があって、使用方法の一つを明らかにした。今後の調査への警鐘でもある。

樹皮は、元総社寺田遺跡と三ツ寺1遺跡で、古墳時代後期のものが出土している。前者では直径38.5cmの底板に側板を蔓で綴じたものが出土し、後者では底板にあたるものが1点出土している。蔓で綴じる方法は、縄文時代からの技法で曲物とよく似ている。曲物が普及したことで淘汰されたのか、少なくとも平安時代までは利用されていたことを示す資料である。類例を待ちたい。

4 18号住居出土鉄斧の木質について

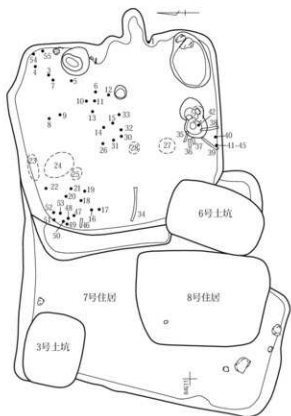
鉄斧は、第47図に表現されているように斧柄装着部分が袋状で、そこに差し込まれた形で柄と見られる木質が残っている。木質は袋部内に長さ3.5cm、袋部後方に約5cmが現存する。鉄斧端部(袋部端)断面は幅2.6cm、厚さ1.4cmの方形で斧柄木質の四隅のうち現存する一ヶ所に0.2cm幅の面取り加工の痕が確認できる。

木取りは、樹芯をわずかに外した板目使いである。実

体顕微鏡で観察すると、樹芯方向より幅広い放射組織に挟まれるように大血管が配列する環孔材で、孔圏外道管はやや大きめの道管が単独で直径を減じながら放射方向に並ぶことからクスギ節の材と同定した。この材では放射組織が大きく弧を描くように曲がっているため刃の両端方向では斜め方向に、刃の中央部では刃に直交する方向に伸びている。通常放射組織の方向に枝は伸びるため、この斧の柄を幹と枝の分枝部を利用して膝柄と想定した場合、刃に直交する方向に伸びた枝を柄として利用することが最も機能的であり、この斧は柄に対して刃を直角に装着する横斧の可能性が考えられる。

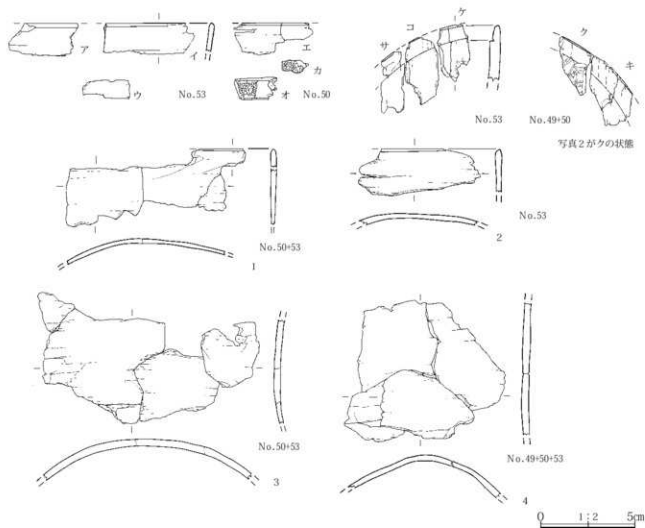
参考文献

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第276集『愛宕山遺跡』2001
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第221集『白倉下原・天引原遺跡』1997
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ツ寺1遺跡」1988
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第199集『中沢平賀界戸遺跡』1996
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第167集『元総社寺田遺跡Ⅱ』1994
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団第407集『元総社関原明神Ⅳ遺跡・元総社牛池川遺跡・元総社北川遺跡・元総社小見内Ⅴ遺跡』2007



鳥取松山下遺跡9号住居居化物分布図
番号は第205図と一致する。

第3節 鳥取松合下遺跡出土炭化物について



第205図 9号住居出土炭化材



写真1
アワ粒



写真2
付着した
アワ粒



写真3
虫食い穴



写真4
樹皮加工品

第8表 出土炭化物一覧表

遺構	№	樹種	備考	遺構	№	樹種	備考	遺構	№	樹種	備考
2号住居	1	散孔材	木材破片	9号住居	37	クスギ節	直径4cm丸木	18号住居	7	クスギ節	直径3cm丸木
9号住居	1	クリ	木材破片	9号住居	38	散孔材	木材破片	18号住居	8	固定不可	木材破片
9号住居	2	ニレ科	木材破片	9号住居	39	クスギ節	小径丸木	18号住居	17	クスギ節	割材
9号住居	3	環孔材	木材破片	9号住居	40	クスギ節	直径2.5cm皮付	18号住居	なし	クスギ節	直径3cm丸木
9号住居	4	クリ	丸木破片	9号住居	41	散孔材	木材破片	19号住居	1	クスギ節	木材破片
9号住居	5	散孔材	木材破片	9号住居	42	散孔材	小径木	19号住居	2	固定不可	微小木片
9号住居	6	散孔材	木材破片	9号住居	43	広葉樹	木材破片	19号住居	3	クスギ節	小木片
9号住居	7	クリ	木材破片	9号住居	44	ニレ科	木材破片	19号住居	4	固定不可	微小木片
9号住居	8	散孔材	木材破片	9号住居	45	クリ	木材破片	19号住居	5	クスギ節	直径3cm丸木
9号住居	9	環孔材	木材破片	9号住居	46	クリ	木材破片	19号住居	6	固定不可	木材破片
9号住居	10	散孔材	木材破片	9号住居	47	広葉樹	木材破片	19号住居	7	クスギ節	木材破片
9号住居	11	散孔材	木材破片	9号住居	48	樹皮	動物か	19号住居	8	クスギ節	割材
9号住居	12	クリ	小径丸木破片	9号住居	48	アワ	種子	19号住居	9	散孔材	木材破片
9号住居	13	ニレ科	木材破片	9号住居	49	クリ	直径1.5cm皮付	19号住居	10	クスギ節	木材破片
9号住居	14	クスギ節	木材破片	9号住居	49	アワ	種子	19号住居	11	クスギ節	木材破片
9号住居	15	環孔材	小木片	9号住居	49	樹皮	動物か	19号住居	12	クスギ節	割材
9号住居	16	クリ	木材破片	9号住居	49	針葉樹	動物	19号住居	13	クスギ節	直径5cm皮付
9号住居	17	クスギ節	小径木	9号住居	50	樹皮	動物か	19号住居	14	クスギ節	大径木加工材
9号住居	18	樹皮	動物か	9号住居	50	針葉樹	動物底	19号住居	15	クスギ節	割材
9号住居	18	散孔材	木材破片	9号住居	50	アワ	種子	19号住居	16	クスギ節	大径木破片
9号住居	19	環孔材	木材破片	9号住居	51	クリ	直径1.5cm皮付	19号住居	17	クスギ節	割材
9号住居	20	クリ	木材破片	9号住居	51	樹皮	動物か	19号住居	18	クスギ節	小破片多数
9号住居	21	クリ	木材破片	9号住居	52	イネ科	植物茎	19号住居	19	クスギ節	大径木破片
9号住居	21	散孔材	木材破片	9号住居	53	樹皮	動物か	19号住居	20	散孔材	木材破片
9号住居	22	散孔材	木材破片	9号住居	53	クリ科	果皮	9号住居	21	クスギ節	木材破片
9号住居	23	散孔材	木材破片	9号住居	53	針葉樹	動物底板・側板	19号住居	22	クスギ節	小径木
9号住居	24	環孔材	木材破片	9号住居	53	クリ	丸木	19号住居	23	クスギ節	直径2cm丸木
9号住居	25	散孔材	木材破片	9号住居	53	アワ	種子	19号住居	24	クスギ節	大径木破片
9号住居	26	クリ	木材破片	9号住居	54	環孔材	木材破片	19号住居	25	クスギ節	小木片
9号住居	27	ニレ科	木材破片	9号住居	55	環孔材	木材破片	19号住居	26	クスギ節	小木片
9号住居	28	クスギ節	直径3cm割材	9号住居	なし	クリ	木材破片	19号住居	27	固定不可	微小木片
9号住居	29	クスギ節	直径4cm丸木	10号住居	33	クスギ節	小径丸木	19号住居	28	クスギ節	木材破片
9号住居	29	ニレ科	木材破片	10号住居	35	散孔材	木材破片	19号住居	29	クスギ節	小木片
9号住居	30	ニレ科	加工材	10号住居	39	ニレ科	木材破片	19号住居	30	クスギ節	直径4cm皮付
9号住居	31	ニレ科	加工材	10号住居	39	クスギ節	木材破片	19号住居	31	クスギ節	割材他
9号住居	32	クスギ節	木材破片	17号住居	18	クスギ節	木材破片	19号住居	32	クスギ節	直径6cm丸木片
9号住居	32	ニレ科	木材破片	18号住居	1	クスギ節	直径3cm丸木	19号住居	33	クスギ節	丸木破片
9号住居	33	クスギ節	小径丸木	18号住居	3	クスギ節	直径3cm丸木	19号住居	34	クスギ節	木材破片
9号住居	34	クリ	木材破片	18号住居	4	クスギ節	直径3cm丸木	19号住居	35	散孔材	木材破片
9号住居	35	クリ	木材破片	18号住居	5	クスギ節	直径3~4cm丸木	19号住居	36	クスギ節	直径3cm丸木
9号住居	36	クスギ節	木材破片	18号住居	6	クスギ節	小木片	19号住居	37	クスギ節	木材破片

※備考の記載内容について

- 1 直径が測定できたものは数値を記載。推定2~5cm程度のを小径木、推定50cm以上を大径木と記した。また、大きさ・形状を把握できない試料は木材破片、小木片と記した。
- 2 丸木と記載した試料は断面に割れや削り等のない木材で、樹皮のあるものを皮付と記した。また、丸木はすべて喪材部形成後伐採されている。

第9表 遺構別樹種構成表

樹種	9号住居		18号住居		19号住居	
	点数	比率%	点数	比率%	点数	比率%
針葉樹	3	4.6				
広葉樹	2	3.1				
環孔材	7	10.8				
散孔材	13	20			3	8.1
ニレ科	8	12.3				
クスギ節	10	15.4	8	88.9	30	81.1
クリ	16	24.6				
樹皮	6	9.2				
固定不可			1	11.1	4	10.8
試料合計	65		9		37	

※比率%は小数点以下第2位四捨五入



写真5
ヒョウタンまたはユウガオとみられる果皮

第10表 鳥取松合下遺跡 石器観察表

1・2・3・7・9・10号住居									
種別	遺物番号	種類	出上位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材	
13	14	紡錘車	カマ下左脇壁際	径 4.5	厚 1.5	43.4	径7mmの孔を片側穿孔する。使用面側周辺には破損部の再生痕があり、肩が落ちる。薄型。	蛇紋岩	
15	24	砥石	北部礫床直	7.6	2.6	84.5	四面使用。上下両端は磨き整形。上端側に5mmの孔を穿つ。下1/4砥石。	砥沢石	
16	3	石製品	中央部北寄り	4.3	3.9	61.8	柱状の切り石を面取り整形。整形は上半部主体で、正面側は約錐状。上面に径3mm、深さ2.5mmの凹孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩	
23	7	石製品	南部中央床直	3.2	1.8	8.7	孔は片側穿孔(背面側で径3mm・腹面側で径1mm)。腹面側の孔周辺は穿孔時に弾け残り窪む。	玉髄	
25	9	磨石	南部中央-6	10.9	5.8	358.0	礫の周辺に敲打・摩耗痕が全周する。被熱。	粗粒輝石安山岩	
25	9	紡錘車	南西隅-9.5	径 5.3	厚 1.9	74.9	径7mmの孔を片側穿孔する。使用面側・孔周辺は破損は穿孔に生じたものか。全面が強く光沢を帯びている。	蛇紋岩	
25	9	砥石	P 4北床直	13.4	15.7	1,316.5	背面側中央に強い摩耗痕、裏面側中央付近は浅く窪み、斜位線染痕が残る。小口部に敲打・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩	
27	10	砥石	東部中央-20	(16.8)	(15.7)	1,741.0	右辺側の側面に斜行するノミ状の工具痕がある。裏面・左辺側に窪面を残す。	二ツ岳輝石	

11・12・19・22号住居

種別	遺物番号	種類	出上位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材	
29	11	石製品	中央部北寄り	2.2	1.8	6.3	碇石状を呈する偏平礫。礫面に線染痕は確認できない。	玉髄	
33	12	紡錘車	東部中央北寄り	径 (2.0)	厚 1.2	12.0	径7mmの孔を片側穿孔する。下面側平坦面・体部は光沢を帯びる平面。使用面側には整形痕が残る。	滑石	
33	14	砥石	貯蔵穴西床直	29.2	22.4	8,100.3	右辺側の側面に使用面がある。使用面には横位の擦痕がある。	滑石	
47	19	砥石	中央部 8.5	12.7	7.0	459.5	両側縁に敲打・衝撃割離痕があるほか、小口部上端に打痕がある。端部は被熱破損。	粗粒輝石安山岩	
47	19	砥石	3坑東 11.5	17.9	8.5	582.7	四面使用。下端小口部は分割したのみで、未整形。表裏面に粗い引けキズが残る。	デイサイト	
51	22	砥石	南西部礫床直	12.7	6.7	501.2	上下両端の小口部に敲打・摩耗痕がある。礫面全体、特に側縁の光沢が強く、使用痕とすべきかもしれない。	粗粒輝石安山岩	

7号土坑

種別	遺物番号	種類	出上位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材	
53	10	砥石	南西部環際	(6.0)	4.4	67.3	四面使用。下端小口部は分割したのみで、未整形。	粗粒輝石安山岩	
53	11	砥石	埋没上	14.3	8.3	618.4	上面小口部を除く各面を使用。使用面は片減り、著しく変形している。置き砥石としては安定感に欠ける。	粗粒輝石安山岩	

遺構外

種別	遺物番号	種類	出上位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材	
54	19	打製石斧	22住内東部北寄り 10	10.4	5.5	73.0	完成状態。側縁はハ字状に開き、上端側に装着部を有する。対面摩耗が著しい。側縁加工は新鮮で、この部分のみ再生している。	黒色頁岩	
54	20	打製石斧	22住内西部環 10	17.0	8.4	517.4	未製品？側縁はハ字状に直線的に開く。側縁加工は新鮮だが、裏材面は風化摩耗しているように見える。	黒色頁岩	
54	21	四石	埋没上	(6.1)	(8.9)	267.1	背面側にローノミ状の凹部1、表裏面とも集合打痕・摩耗痕。側縁に打痕。側面中央付近で破損。	粗粒輝石安山岩	
54	22	磨石	2住内P 3中央部床直	15.7	7.8	1,013.8	表裏面とも摩耗。上端小口に敲打痕。側面は敲打・摩耗痕が著しい。	粗粒輝石安山岩	

第11表 胸城遺跡 石器観察表

12・16・17・24・27号住居									
種別	遺物番号	種類	出上位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材	
83	14	打製石斧	P 2 南西部 8	10.7	5.9	97.1	完成状態。側縁はハ字状に開き、上端側に装着部を有する。対面摩耗が著しい。側縁加工は新鮮で、この部分のみ再生しているが、その加工意図は不明。	黒色頁岩	
91	16	砥石	北部中央環際	(11.4)	4.8	181.0	四面使用。上端側破損は摩耗しており、破損後の使用が確認できる。	砥沢石	
91	16	砥石	2坑内南東部 - 31	(5.6)	2.9	43.2	破損した裏面側を除く各面を使用。	砥沢石	
93	17	砥石	北部中央西寄り	11.4	5.9	485.6	小口部両端に打痕がある。上端側小口部は集中的に敲打され、平坦面を形成している。	粗粒輝石安山岩	
107	24	砥石	カマ下右脇 15	(15.2)	6.9	801	小口部下端に敲打・摩耗痕。被熱破損。	ひん岩	
116	23	石製品	南西部環 10.5	5.0	4.9	150.1	礫面中央付近の敲打痕が特徴的だが、礫面は摩耗しており、石製研削具としての可能性が残る。	粗粒輝石安山岩	

遺物観察表

41・47号住居

棟内番号 図取番号	遺物 番号	種 類 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第136図 PL.51	41住 5	砥石 切り砥石	1坑西部床直	(8.5)	5.7	121.9	破損部を除いた各面を使用。主たる使用面は幅の狭い表面。両側面に粗い縦条痕が残る。	砥沢石
第148図 PL.52	47住 12	砥石 切り砥石	西部中央埋障10	(7.2)	3.5	60.8	四面使用。上半部を欠損。	砥沢石

49・53号住居

棟内番号 図取番号	遺物 番号	種 類 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第153図 PL.53	49住 19	砥石 切り砥石	北東部-22	10.2	6.1	121.9	断面三角形状を呈す。破損後再利用されたもので、粗い縦条痕が背面側に残る。	砥沢石
第153図 PL.53	49住 20	砥石 礫砥石	北西隅9.5	(10.5)	(10.9)	808.7	背面側に斜向する粗い縦条痕が残る。	粗粒輝石安山岩
第162図 PL.53	53住 3	砥石 棒状砥	南部東寄り埋障床直	(14.1)	6.2	545.0	小口部下端に衝撃剥離痕・側縁敲打痕。部分的に表裏面とも摩耗。	石英斑岩
第162図 PL.53	53住 4	砥石 円形扁平礫	中央部北西寄り床直	11.3	10.7	516.3	側縁に敲打痕が連続する。表裏面とも摩耗。	粗粒輝石安山岩

58号土坑

棟内番号 図取番号	遺物 番号	種 類 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第185図 PL.56	2	石製品 不明	中央北寄り -32.5	径5.1	高2.8	27.8	小型碗状を呈する。裏面側底部は浅く窪む。	軽石

遺物外

棟内番号 図取番号	遺物 番号	種 類 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第197図 PL.59	1	打製石斧 短冊型	表土	11.4	4.3	101.3	完成状態。刃部摩耗・摺痕あり。	黒色頁岩
第197図 PL.59	2	打製石斧 短冊型	埋没上	9.7	4.8	102.1	完成状態？風化が激しく、刃部摩耗等は明らかでない。	細粒輝石安山岩
第197図 PL.59	3	打製石斧 短冊型	36住中央部北寄り床直	(7.5)	(4.6)	73.5	完成状態。側縁が弱く摩耗する。上半部破片。	灰色安山岩
第197図 PL.59	4	打製石斧 短冊型	85 B 14	(9.4)	(5.0)	155.4	完成状態。両側縁はリタクションされており剥離面は新鮮だが、部分的に摺痕が残る。	細粒輝石安山岩
第197図 PL.59	5	打製石斧 短冊型	9溝埋没上	(12.5)	5.6	178.2	完成状態？風化して刃部摩耗等は不明瞭。	細粒輝石安山岩
第197図 PL.59	6	打製石斧 短冊型	表土	11.9	5.7	139.6	完成状態。刃部摩耗・摺痕あり側縁は直線的に開く。	黒色頁岩
第197図 PL.59	7	打製石斧 短冊型	85 K 19	9.2	5.2	63.2	完成状態。剥離は両側で、断面として捉えることも可能だが、形態的個性・刃部側縁の摩耗を重視して分類。	黒色頁岩
第197図 PL.59	8	打製石斧 分銅型	表土	9.4	6.0	117.3	完成状態。摺痕が残る。刃部形状は乱れたことから、刃部再生を想定しておきたい。	細粒輝石安山岩
第197図 PL.59	9	打製石斧 分銅型	1井戸埋没上	(6.9)	(7.5)	103.1	完成状態。上下両端を欠損する。風化して不明瞭だが、装首部の摩耗は明らかである。	細粒輝石安山岩
第197図 PL.59	10	打製石斧 分銅型	表土	(7.0)	5.4	37.3	完成状態？上端部(頭部)を部分的に欠損する。	黒色頁岩
第197図 PL.59	11	打製石斧 分銅型	5溝埋没上	(8.5)	(6.5)	116.4	未完成品。剥離面が新鮮で、製作途中破損した可能性が高い。	黒色頁岩
第197図 PL.59	12	打製石斧 分銅型	表土	(8.9)	7.6	169.4	完成状態。刃部右辺縁を再生、左辺側に刃部摩耗あり。	細粒輝石安山岩
第197図 PL.59	13	磨製石斧 乳房状	表土	(10.9)	4.6	193.3	完成状態。節理面より刃部側を破損。	変質玄武岩
第197図 PL.59	14	磨製石斧 乳房状	表土	(15.3)	(6.0)	462.0	完成状態。上下両端を欠損する。	変質玄武岩
第197図 PL.59	15	石鏝 凹基無茎鏝	85 C 17	3.0	1.4	1.6	完成状態。断面は菱形を呈し、厚い。	チャート
第197図 PL.59	16	石鏝 凹基無茎鏝	第1文化層	3.2	1.4	1.6	完成状態？裏面側剥離は浅く平坦で、背面側剥離に先行する。背面側剥離は粗く、最終剥離まで達していない可能性がある。	黒色頁岩
第197図 PL.59	17	石鏝 凹基無茎鏝	表土	2.8	(1.8)	2.1	未製品。左辺側の返し部を欠損。加工は粗く、形状修正的で、第1次剥離面(素材面)を大きく残す。	黒色頁岩
第197図 PL.59	18	石鏝 模型	85 G 19	3.3	6.2	10.6	剥片の打面側に幅み部を作出。刃部は直線的で、長い。	珪質頁岩
第197図 PL.60	19	石鏝 模型	表土	7.6	6.9	38.7	左辺側の幅み部を欠く。製作途中、剥片内部に内包したヒビから破損した可能性が高い。	黒色頁岩
第197図 PL.60	20	石鏝 模型	2住埋没上	(5.1)	(5.7)	28.5	剥片の打面側に幅み部を作出。刃部側を大きく破損しており、刃部形状等の詳細は不明。	黒色頁岩
第197図 PL.60	21	石核 小型柱状	表土	2.9	1.3	3.6	剥離面構成よりみて両側打撃によるものであることが明らかである。サイズ的には剥片生産を目的とするように見える。	黒曜石
第197図 PL.60	22	石核 柱状亜円礫	16住貯蔵穴南西壁際8.5	17.3	7.3	753.8	幅広剥片を剥離。	珪質頁岩
第197図 PL.60	23	石核 円形礫	85 G 17	10.6	7.1	389.5	背面側にロード状の孔3を穿つ。裏面側は集合打痕。表面の摩耗痕は石材が粗く、不明瞭。	粗粒輝石安山岩

検出番号 図版番号	遺物 番号	種 類 形 態・ 素 材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第197図 Pl.60	24	門石 偏平楕円盤	54住西部隅6	11.6	7.8	568.8	表裏面とも著しい摩耗痕。縁中央の凹部は浅く、ロータ状の孔が判別が難しい。無縁に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩
第198図 Pl.60	25	門石 偏平円盤	85 K 19	8.7	8.7	501.9	表裏面とも縁中央に集合打痕。	粗粒輝石安山岩
第198図 Pl.60	26	門石 楕円盤	85 I 1	9.1	7.8	577.3	表裏面とも縁中央に集合打痕。	粗粒輝石安山岩
第198図 Pl.60	27	門石 楕円盤	表土	8.1	6.6	323.1	表裏面とも縁中央に集合打痕。	粗粒輝石安山岩
第198図 Pl.60	28	磨石 偏平楕円盤	85 K 19・1	10.5	8.3	622.5	表裏面とも著しく摩耗。無縁に敲打・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩
第198図 Pl.60	29	石皿 有縁	85 K 19	25.6	18.5	4,133.7	使用面上端側・掻き出し口に打痕が残る。右皿周縁には打痕が著しい。整形痕として理解すべきものか。	粗粒輝石安山岩
第198図 Pl.60	30	多孔石 偏平垂直円盤	85 G 17	(25.4)	(20.6)	5,177.2	表裏面に多数の孔を穿つ。被熱破損。	粗粒輝石安山岩

第12表 鳥取松合下遺跡 縄文土器観察表

遺蹟外

検出番号 図版番号	遺物 番号	器種	残存	胎土色調 焼成	文様の特徴等	備考
第54図 Pl.38	1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維、白色粒、繊維 橙 ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第54図 Pl.38	2	深鉢	胴部片	細砂 におい橙 良好	R Lを横位施文する。	諸磯a式
第54図 Pl.38	3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、黒色粒 橙 良好	横位隆帯をめぐらし、隆帯下にR Lを充填施文する。	加曾利E2式
第54図 Pl.38	4	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、黒色粒 に ふい黄橙 ふつう	隆帯によるU字状モチーフを施し、R Lを充填施文する。	加曾利E4式
第54図 Pl.38	5	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、黒色粒 に ふい黄橙 ふつう	無節L rを縦位施文する。	加曾利E5式
第54図 Pl.38	6	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、黒色粒 に ふい黄橙 ふつう	波状口縁で波頂下に捻転状隆帯を貼付。口縁に沿って隆帯をめぐらし、口縁部無文帯を区画。	称名寺式
第54図 Pl.38	7	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 黒周 良好	刻みを伴う隆帯。沈線をめぐらし、L Rを充填施文する。	堀之内2式
第54図 Pl.38	8	深鉢	底部片	粗砂、白色粒、黒色粒 浅 黄 ふつう	推定底径6.0cm。斜位の沈線を施す。	後期前葉

第13表 胸城遺跡 縄文土器観察表

12号住居

検出番号 図版番号	遺物 番号	器種	残存	胎土色調 焼成	文様の特徴等	備考
第83図 Pl.43	1	深鉢	口縁～胴部	細砂、白・黒色粒、繊維 におい黄橙 ふつう	推定口径23.8cm。口縁が緩く外反。R L、L Rを菱形施文する。	黒浜式
第83図 Pl.43	2	深鉢	口縁～胴部 下位	細砂、白色粒、繊維 明赤 濁 ふつう	推定口径36.3cm。緩い波状口縁。胴下位が膨らみ、頸部ですばまって口縁が開く器形。附加条1種R L+Rを横位施文する。	黒浜式
第83図 Pl.43	3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維 明赤 濁 ふつう	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	4	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維 橙 ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第83図 Pl.43	5	深鉢	胴部片	粗砂、繊維、繊維 明赤濁 ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第83図 Pl.43	6	深鉢	口縁部片	細砂、繊維 におい黄濁 ふつう	波状口縁で口縁内閉じ。R L、L Rを羽状施文する。	有尾式
第83図 Pl.43	7	深鉢	口縁部片	細砂、白色粒、繊維 橙 ふつう	波状口縁で口縁内閉じ。R L、L Rを菱形施文する。	有尾式
第83図 Pl.43	8	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、繊維 にぶ い橙 ふつう	無節R lを横位施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	9	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維 灰黄 濁 ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	10	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、石英、繊維 におい黄橙 ふつう	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	11	深鉢	胴部片	粗砂、繊維 灰黄濁 ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	12	深鉢	胴部片	細砂、白・黒色粒、繊維 におい黄橙 ふつう	無節R lを横位施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	13	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維 橙 ふつう	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	14	深鉢	胴部片	細砂、白・黒色粒、繊維 におい橙 ふつう	R L、無節L rを羽状施文する。	黒浜・有尾
第83図 Pl.43	15	深鉢	底部片	細砂、繊維 におい黄濁 ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾

遺物観察表

神岡番号 図版番号	遺物 番号	器種	残存	胎土色調	焼成	文様の特徴等	備考
第83図 PL.43	16	深鉢	底部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶ い橙 ぶつう	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
第83図 PL.43	17	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	波状口縁で口縁が緩く内湾。残存部は無文。	黒浜・有尾

土坑

神岡番号 図版番号	遺物 番号	器種	残存	胎土色調	焼成	文様の特徴等	備考
第185図 PL.56	29坑 1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶ い橙 ぶつう	磨歯状工具による条線を横位施文する。	有尾式
第185図 PL.56	31坑 1	深鉢	口縁部片	粗砂、細砂、繊維	にぶ い橙 ぶつう	波状口縁。口縁に沿って連続爪形文をめぐらす。	有尾式
第185図 PL.56	31坑 2	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、石英、繊維	にぶ い赤橙 ぶつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。地文に附加条1種 R + Lを横位施文。内面研磨。	有尾式
第185図 PL.56	31坑 3	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶ い黄 ぶつう	L Rを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
第185図 PL.56	31坑 4	深鉢	口縁部片	粗砂、細砂、白・黒色粒、石英、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
第185図 PL.56	58坑 1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙 ぶつう	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
第185図 PL.56	59坑 1	深鉢	口縁部片	粗砂、細砂、繊維	にぶ い赤橙 ぶつう	波状口縁で口唇内削ぎ。L Rを地文とし、波頂部下で左右に斜行する平行沈線を多段に施す。	有尾式
第185図 PL.56	59坑 2	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
第185図 PL.56	61坑 1	深鉢	胴部片	粗砂、細砂、繊維	にぶ い橙 ぶつう	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾

遺構外

神岡番号 図版番号	遺物 番号	器種	残存	胎土色調	焼成	文様の特徴等	備考
第194図 PL.57	1	深鉢	口縁部片	粗砂、細砂、繊維	にぶ い橙 ぶつう	波状口縁で口縁が緩く内湾。無節 L r を地文とし、コンパス文を口縁下に3条施す。	黒浜式
第194図 PL.57	2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維、繊維	黒色 ぶつう	連続爪形文。平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式
第194図 PL.57	3	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	橙 ぶつう	口縁下に貼付文を付し、無節 R l を横位施文。口唇部にも施紋する。	黒浜式
第194図 PL.57	4	深鉢	胴部片	粗砂、細砂、石英、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	連続爪形文により米字状モチーフを描き、交点に円形刺突を付す。地文に R L 横位施文。	黒浜式
第194図 PL.57	5	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英、繊維	橙 ぶつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。地文に L R 横位施文。	黒浜式
第194図 PL.57	6	深鉢	胴部片	粗砂、細砂、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	平行沈線により菱形モチーフを描き、貼付文を付す。	黒浜式
第194図 PL.57	7	深鉢	胴部片	粗砂、白色・黒色粒、繊維	にぶ い赤橙 ぶつう	沈線を1条垂下させ、燃糸文 R を横位帯状施文する。	黒浜式
第194図 PL.57	8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙 ぶつう	附加条2種 R l + R、R を横位施文する。	黒浜式
第194図 PL.57	9	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、黒色粒、繊維	橙 ぶつう	輪襷に対して L、L を密接に巻いた附加条2種を横位施文する。節の大きいものも見られる。	黒浜式
第194図 PL.57	10	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	無節 L r を横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	11	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、石英、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	無節 L r を横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	12	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶ い橙 ぶつう	無節 L r、R l を羽状施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	13	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶ い橙 ぶつう	波状口縁。L を4周密接に巻いた燃糸文を帯状施文することによりモチーフを構成。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	14	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、石英、繊維	にぶ い黄橙 ぶつう	無節 R l を横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	15	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、繊維	灰黄 ぶつう	R l、L R を羽状施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	16	深鉢	口縁部片	粗砂、片岩、繊維	にぶ い橙 ぶつう	L R を横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	17	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、繊維	にぶ い橙 ぶつう	R l、L R を菱形施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	18	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、繊維	にぶ い橙 ぶつう	無節 L r、R l を羽状施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	19	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶ い橙 ぶつう	附加条1種 R l + R、L R + R を羽状施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	20	深鉢	胴部片	粗砂、細砂、石英、繊維	橙 ぶつう	反置 L l を横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	21	深鉢	口縁部片	粗砂、細砂、黒色粒、繊維	にぶ い橙 ぶつう	波状口縁で口唇内削ぎ。連続爪形文、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式

神岡番号 図版番号	遺物 番号	器種	現 存	胎土 色調 焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第194図 PL.57	22	深鉢	口縁部片		No.21と同一個体。	有尾式
第194図 PL.57	23	深鉢	口縁部片	細砂、白・黒色粒、繊維 にぶい黄褐色 ふつう	連続爪形文を口縁下に3条めぐらし、文様帯内に幾何学モチーフを描く。	有尾式
第194図 PL.57	24	深鉢	胴部片	細砂、繊維 橙 ふつう	多条の平行沈線により紋様帯を区画、文様帯内に平行沈線による菱形モチーフを描く。	有尾式
第194図 PL.57	25	深鉢	胴部片	粗砂、黒粒、繊維 橙 ふつう	くの字状に外屈する部位。連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第194図 PL.57	26	深鉢	胴部片	細砂、黒粒、繊維 にぶい 黄褐色 ふつう	櫛歯状工具による条線を横位波状に施す。	有尾式
第194図 PL.57	27	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、石英、繊維 にぶい赤褐色 ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第194図 PL.57	28	深鉢	胴部片	細砂、黒色粒、繊維 にぶい 黄褐色 ふつう	L Rを地文とし、平行沈線を横位多段に施す。	有尾式
第194図 PL.57	29	深鉢	胴部片	細砂、繊維 にぶい橙 ふつう	くの字状に外屈する部位。連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第194図 PL.57	30	深鉢	胴部片	細砂、繊維 明赤褐 ふつう	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
第194図 PL.57	31	深鉢	胴部片	細砂、黒色粒、繊維 にぶい 黄褐色 ふつう	副目状器底文を横位施文する。	大木2 a式
第194図 PL.57	32	深鉢	底部片	粗砂、白色粒、繊維 橙 ふつう	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	33	深鉢	底部片	細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維 橙 ふつう	底径5.8cm。L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
第194図 PL.57	34	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒 明赤褐 良好	波状口縁で縦く外反。R Lを横位施文する。	諾職 a式
第194図 PL.57	35	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒 明赤褐 良好	R Lを横位施文する。	諾職 a式
第194図 PL.57	36	深鉢	口縁部片	細砂、黒色粒 橙 良好	口縁下に1条の沈線をめぐらし、円形刺突を施す。地文にR L横位施文、 口縁内面にも1条の沈線をめぐらす。	諾職 a式
第195図 PL.57	37	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒 橙 ふつう	口縁が外反。R Lを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.57	38	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 にぶい赤褐 良好	R Lを地文とし、幅広い沈線で幾何学モチーフを描く。	諾職 a式
第195図 PL.58	39	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 暗灰黄 ふつう	結節L Rを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.58	40	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 明赤褐 良好	反照L Lを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.58	41	深鉢	胴部片	粗砂、片岩 明赤褐 良好	R Lを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.58	42	深鉢	胴部片	細砂、黒色粒、石英 にぶい 赤褐色 良好	R Lを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.58	43	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 明赤褐 良好	R Lを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.58	44	深鉢	胴部片	粗砂 明赤褐 良好	R Lを地文とし、平行沈線を斜位に施す。	諾職 a式
第195図 PL.58	45	深鉢	胴部片	細砂、白・黒色粒 橙 良好	R Lを横位施文する。	諾職 a式
第195図 PL.58	46	深鉢	胴部片	細砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄褐色 ふつう	L Rを地文とし、円形刺突を縦位に配す。	諾職 a式
第195図 PL.58	47	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 橙 ふつう	集合沈線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諾職 b式
第195図 PL.58	48	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 明赤褐 ふつう	器底文Lを縦位施文する。	加曾利 E 2式
第195図 PL.58	49	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 橙 良好	R L縦位施文を地文とし、沈線による蛇行懸垂文を施す。	加曾利 E 2式
第195図 PL.58	50	小形 深鉢	口縁～胴部	細砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつう	想定口径9.3cm。胴下位がやや膨らみ、口縁は直立する器形。口縁下に 2条の沈線をめぐらせ、3条の沈線を垂下させる。短い条線を横位、斜 位に施して地文とする。	加曾利 E 3式
第195図 PL.58	51	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄褐色 ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利 E 3式
第195図 PL.58	52	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄褐色 ふつう	隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下に1 rを縦位充填施文す る。	加曾利 E 4式
第195図 PL.58	53	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄褐色 ふつう	波状口縁で波頂部に突起を付す。隆帯をめぐらせて幅狭な口縁部無文帯 を区画、波頂部下に沈線による逆V字状モチーフを描き、L Rを充填施 文する。	加曾利 E 4式
第195図 PL.58	54	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒 にぶい黄褐色 ふつう	隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯による懸垂文を施す。	加曾利 E 4式
第195図 PL.58	55	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄褐色 ふつう	2条の隆帯を弧状に施し、L Rを充填施文する。	加曾利 E 4式
第195図 PL.58	56	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 橙 ふつう	隆帯による逆U字状モチーフを施し、L Rを縦位充填施文する。	加曾利 E 4式

遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	器種	現存	胎土色調 焼成	文様の特徴等	備考
第195図 PL.58	57	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 橙 良好	沈線によりV字状、逆U字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	加賀利E4式
第195図 PL.58	58	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつう	沈線により弧状モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	59	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	波状口縁で波頂部内面肥厚。帯状沈線により逆U字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	60	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒 にぶい黄橙 良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。口縁に小突起を付し、蓋文連繫文を施す。	称名寺式
第195図 PL.58	61	深鉢	口縁部片	細砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつう	波頂部の突起。丁寧に研磨される。	称名寺式
第195図 PL.58	62	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒 橙 ふつう	波頂部の突起で頂部を凹ます。沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第195図 PL.58	63	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、黒色粒 に ぶい黄橙 ふつう	口縁内面肥厚。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	64	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、黒色粒 にぶい ふつう	口縁内面肥厚。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	65	深鉢	口縁部片	細砂、黒色粒、石英 にぶい 橙 ふつう	口縁の三角形の突起で、三角形の透かしを入れる。帯状沈線によりモチーフを描く。	称名寺式
第195図 PL.58	66	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒 にぶい黄橙 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	67	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	68	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつう	帯状沈線により弧状モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	69	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	70	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 暗灰黄 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	71	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 浅黄 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	72	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 にぶい黄橙 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	称名寺式
第195図 PL.58	73	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	帯状沈線により弧状モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	74	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 明赤黄 良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第195図 PL.58	75	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	称名寺式
第195図 PL.58	76	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつう	多条の沈線による懸垂文を施し、LRを施文する。	堀之内1式
第195図 PL.58	77	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	外周する部位。鋸状隆帯を垂下。2条の横位沈線をめぐらせて文様帯を区画。沈線による幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内1式
第195図 PL.58	78	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい橙 良好	LRを施し、斜行する多条沈線を施す。	堀之内1式
第195図 PL.58	79	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 良好	外周する部位。横位沈線を垂下。2条の横位沈線をめぐらせて文様帯を区画。LR、斜行する沈線を施す。交点に凹形刺突を施す。	堀之内1式
第195図 PL.58	80	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	多条の弧状沈線を施し、LRを充填施文する。	堀之内1式
第196図 PL.58	81	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	刻みを伴う隆帯を垂下させる。	堀之内1式
第196図 PL.58	82	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 浅黄 ふつう	刻みを伴う隆帯をV字状に付す。	堀之内1式
第196図 PL.58	83	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 橙 ふつう	外周する部位。屈曲部に刻みを伴う隆帯をめぐらせて区画。斜行する多条沈線。LRを施す。	堀之内1式
第196図 PL.58	84	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 橙 ふつう	多条沈線により弧状モチーフを描く。	堀之内1式
第196図 PL.58	85	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	LRを施し、垂下、斜行する多条沈線を施す。	堀之内1式
第196図 PL.58	86	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 浅黄 ふつう	外周する部位。横位沈線をめぐらせて文様帯を区画。弧状、垂下する沈線を施す。	堀之内1式
第196図 PL.58	87	深鉢	胴部片	粗砂、細砂、白・黒色粒 にぶい黄 ふつう	列点を充填施文する。竹管状工具を斜めにして抉るようにしたものと垂直気味に押詰したもの2種が認められる。	堀之内1式
第196図 PL.58	88	深鉢	胴部片	細砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	LRを横位施文し、沈線による蛇行懸垂文を施す。	堀之内1式
第196図 PL.58	89	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつう	3条の沈線により渦巻モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内1式
第196図 PL.58	90	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつう	帯状沈線により三角形モチーフを描き、LRを充填施文する。口縁下の横帯区画は認められない。	堀之内2式
第196図 PL.58	91	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
第196図 PL.59	92	深鉢	口縁部片	細砂、白色粒 暗赤灰 ふつう	刻みを伴う隆帯をめぐらし、8の字貼付文を付す。横位沈線、LRを施す。	堀之内2式
第196図 PL.59	93	深鉢	口縁部片	細砂、白・黒色粒 黒期 ふつう	刻みを伴う隆帯。横位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。内外面研磨され、光沢をもつ。	堀之内2式

種別番号 図版番号	遺物 番号	器種	現 存	胎土 色調 焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
19619 PI.59	94	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英 ふつつ	帯状、多条の沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	95	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒 橙 ふつつ	口縁が短く内折。口縁下に幅狭な無文帯を設け、LRを横位施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	96	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒 にぶい黄橙 ふつつ	刻みを配した小突起を付す。横位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	97	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、石英 橙 良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	98	注口 土器	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつつ	沈線による渦巻文など幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	99	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 にぶい黄橙 ふつつ	文様帯下縁の内屈する部位。5条の横位沈線をめぐらせて区画、LRを 充填施文する。区画文上に弧状の沈線を施す。	甕之内2式
19619 PI.59	100	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 良好	文様帯下縁の内屈する部位。帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	甕之内2式
19619 PI.59	101	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 明黄橙 ふつつ	緩く内湾する器形。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填 施文する。内部に菱形モチーフを配す。	甕之内2式
19619 PI.59	102	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 赤褐 良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	103	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつつ	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文。余白の菱形状 区画内に竹管内・外皮による沈線を矢羽根状に充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	104	深鉢	胴部片		No.103と同一個体。	甕之内2式
19619 PI.59	105	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 にぶい橙 良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。器壁2mm と薄い。	甕之内2式
19619 PI.59	106	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 黒褐 ふつつ	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	107	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英 黒褐 ふつつ	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	108	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつつ	帯状沈線により同心円状モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	109	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつつ	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	110	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒 浅黄 ふつつ	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文。余白の菱形状 区画内に矢羽根状沈線を充填施文する。	甕之内2式
19619 PI.59	111	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつつ	推定底径9.8cm。底部が張り出す器形で、残存部は無文。	甕之内2式
19619 PI.59	112	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒、石英 明赤褐 ふつつ	推定底径10.6cm。底部が張り出す器形で、残存部は無文。	甕之内2式
19619 PI.59	113	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつつ	推定底径15.6cm。底部が張り出す器形で、残存部は無文。外面研磨。	甕之内2式
19619 PI.59	114	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒、石英 橙 ふつつ	推定底径18.0cm。底部が張り出す器形で、残存部は無文。	甕之内2式
19619 PI.59	115	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 黄橙 ふつつ	底面に網代文。	甕之内2式
19619 PI.59	116	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつつ	無文。外面縦位、内面横位のナ字龜が見られる。	後期前葉
19619 PI.59	117	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒、石英 橙 ふつつ	底径8.7cm。ほぼ直に立ち上がってから開く器形で、残存部は無文。	後期前葉
19619 PI.59	118	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒 にぶい 橙 ふつつ	推定底径10.2cm。底部から開く器形で、残存部は無文。	後期前葉
19619 PI.59	119	土製品	完形	粗砂、白・黒色粒 浅黄橙 ふつつ	長さ4.3cm、幅4.3cm、厚さ1.2cm。三角形の土製品。土器片を再利用し、 二辺を磨って整形。外縁を斜めにすることで断面は台形状を呈す。一角は 磨って角を落としている。	後期前葉

第14表 鳥取松合下遺跡 遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 土 位 置 現 存 率	法 量	胎土 色調 焼成	出 土 位 置 ・ 法 量 は cm と する。	
						形 ・ 成 調 整 等	
1219 PI.29	1	土師器 環	北部中央環際床直 4/5	□ 11.3 高 3.7	粗砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り。	
1219 PI.29	2	土師器 環	P 3南17、埋没上 1/2	□ 11.8 高 -	粗砂粒 橙 やや 軟質	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り。	
1219 PI.29	3	土師器 環	P 2西床直・7.5 中央部8.5 2/5	□ 12.4 高 3.7	粗砂粒 明赤褐 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り。	
1219 PI.29	4	土師器 環	南部中央21.5 1/4	□ 9.8 高 -	粗砂粒・角閃 橙 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り、器面磨滅 のため単位不明。	
1219 PI.29	5	土師器 環	P 3南16 1/4	□ 11.8 高 3.9	粗砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り、器面磨滅 のため単位不明。	
1219 PI.29	6	土師器 環	北高中央28.5 1/4	□ 11.8 高 -	粗・粗砂粒・角閃 橙 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り。	
1219 PI.29	7	土師器 環	中央部西5 口縁部→底部片	□ 11.8 高 -	粗砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち宛削り。	

遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土 色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
1212 Pl.29	8	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	□ 11.4 高 -	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち寛削り、器面削落のため単位不明。有段口縁部環。
1212 Pl.29	9	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	□ 11.8 高 -	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下平から底部は手持ち寛削り。
1212 Pl.29	10	土師器 環	南部東側床直 口縁部~底部片	□ 11.9 高 -	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち寛削り。
1212 Pl.29	11	土師器 環	P 2 東床直 口縁部~底部片	□ 12.9 高 -	細砂粒 明黄褐 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下平から底部は手持ち寛削り。
1212 Pl.29	12	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	□ 13.2 高 -	細砂粒 明赤褐 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち寛削り。内面に煤が斑点状に付着。
1212 Pl.29	13	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	□ 12.8 底 11.4	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち寛削り。外面底部に墨書、判読不能。
1212 Pl.29	14	須恵器 坏蓋	北部中央壁際15.5 口縁部1/4欠損	□ 11.2 高 3.2	細砂粒・角閃 灰 還元焰	左右回転軸調整、天井部平坦面は回転削り。内面天井部は撫で。
1212 Pl.29	15	須恵器 高环	中央部11.5 口縁部~体部片	□ 11.8 高 -	褐灰・灰 還元焰	右回転軸調整。内外面は撫で。脚部に透孔あり。
1212 Pl.29	16	土師器 高环	中央部床直、埋没上 1/2	□ 11.4 脚 7.0 高 5.8	細砂粒 橙 良好	脚部は貼付。口縁部横撫で、体部から底部、脚部は寛削り。腹部は横撫で。
1212 Pl.29	17	土師器 鉢	中央部6・7 口縁部~体部片	□ 22.0 底 -	細・粗砂粒・方 にぶい黄橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち寛削り。内面体部下平は寛削り。
1212 Pl.29	18	土師器 小型鉢	P 2北10・13 口 縁部~胴部中位片	□ 13.4 胴 15.4	細砂粒 灰黄褐 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は寛削り。内面胴部は寛削り。
1212 Pl.29	19	土師器 甕	中央部床直 口縁 部~胴部上位片	□ 20.8 底 -	細砂粒・黄雲母 明赤褐 良好	口縁部は横撫で、胴部は寛削り。内面胴部は寛削り。
1212 Pl.29	20	土師器 片	P 2 東床直・10.5 口縁部~胴部上位片	□ 21.2 底 -	細砂粒・粗砂粒 にぶい黄橙 良好	口縁部は横撫で、胴部は寛削り。内面胴部は寛削り。
1312 Pl.29	21	土師器 甕	P 3南7.5 口縁部 ~胴部上位片	□ 22.2 底 -	細砂粒・方 橙 良好	口縁部は横撫で、胴部は寛削り。内面胴部は寛削り。
1312 Pl.29	22	土師器 甕	東部中央床直、埋 没上 胴部中位片	□ - 底 -	細砂粒・方 褐 良好	胴部は外面が寛削り、内面は寛削り。

2号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土 色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
1515 Pl.29	1	土師器 環	P 2・5南14・13 口縁部~底部片	□ 13.8 高 -	細砂粒・粗粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち寛削り。2と同一個体であるが、体部の角度が異なるため別々に図化した。
1515 Pl.29	2	土師器 環	P 2・5南14・13 口縁部~底部片	□ 13.8 高 -	細砂粒・粗粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)は手持ち寛削り。1と同一個体であるが、体部の角度が異なるため別々に図化した。
1515 Pl.29	3	土師器 環	P 1南12、埋没上 口縁部~底部片	□ 15.0 高 -	細砂粒微 橙 良 好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち寛削り。
1515 Pl.29	4	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	□ 12.8 高 -	細砂粒微 橙 良 好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち寛削り。
1515 Pl.29	5	土師器 環	P 2西6、埋没上 口縁部~底部片	□ 13.2 高 -	細砂粒微 橙 良 好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち寛削り。
1515 Pl.29	6	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	□ - 高 -	細砂粒 暗赤褐 良好焼	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち寛削り。有段口縁部環。
1515 Pl.29	7	土師器 甕	北東部壁際18 口 縁部~胴部上位片	□ 21.8 底 -	細砂粒・方 にぶ い黄橙 良好	口縁部は横撫で、胴部は寛削り。内面胴部は寛削り。

4号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土 色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
1818 Pl.30	1	土師器 環	カマド南~40 口縁部~底部片	□ 12.8 底 -	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下平から底部は手持ち寛削り、器面削落のため単位不明。
1818 Pl.30	2	土師器 環	カマド振り方 口縁部~底部片	□ 12.8 底 10.4	細砂粒 にぶい橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち寛削り。
1818 Pl.30	3	須恵器 環	カマド振り方 底部~体部小片	□ - 底 10.0	細砂粒 灰白 還 元焰	右回転軸調整。底部は回転削り。
1818 Pl.30	4	須恵器 塊	カマド埋没上 1/2	□ 14.4 底 7.8 高 4.9	細砂粒 灰 還元 焰	右回転軸調整。高台は貼付底部は回転糸切り。 高台径 7.4cm
1919 Pl.30	5	須恵器 塊	カマド振り方 口縁部~体部片	□ 13.8 底 -	細・粗砂粒 灰 還 元焰	右回転軸調整。高台が貼付。
1919 Pl.30	6	須恵器 塊	カマド埋没上 口縁部~体部片	□ 13.8 底 -	細・粗砂粒・角閃 灰 還元焰	右回転軸調整。高台が貼付。
1919 Pl.30	7	土師器 甕	東部南側26.5 口縁部~胴部上半	□ 19.8 胴 22.2	細砂粒・方 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は寛削り。内面胴部は寛削り。

5号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土 色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
1919 Pl.30	1	土師器 環	カマド前直 口縁部~体部片	□ 11.8 高 -	細砂粒 にぶい赤 褐 良好	口唇部は横撫で、口縁部から体部・底部は手持ち寛削り。
1919 Pl.30	2	土師器 環	P 2北床直 口縁部~体部片	□ 12.8 高 -	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち寛削り。

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第19図 PL_30	3	土師器 環	南東隅壁16 口縁部~底部片	口 14.4 高 ー	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち段削り。
第19図 PL_30	4	土師器 環	4住カマド内~14 口縁部片	口 13.4 高 ー	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち段削り。
第19図 PL_30	5	須恵器 環蓋	P 2北床直 はぼ正形	口 14.8 高 4.5 高 3.1	細砂粒 灰白 選 元胎	右回転軸調整。掴みは貼付、天井部は中ほどまで回転段削り。
第19図 PL_30	6	須恵器 環蓋	東部北壁際6 1/4	口 15.0 高 4.0 高 1.7	細砂粒・角閃 選元胎	右回転軸調整。掴みは貼付、天井部は周辺まで回転段削り。
第19図 PL_30	7	須恵器 埴	4住内東隅南側 直 完形	口 12.5 高 6.7 高 4.3	細・粗砂粒 灰 選元胎	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。
第19図 PL_30	8	須恵器 埴	4住内7坑北床直 2/3	口 13.4 高 6.4 高 3.6	細・粗・角閃 灰 選元胎	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。
第19図 PL_30	9	須恵器 埴	カマド右袖前床直 1/4	口 12.6 高 5.7 高 3.7	細砂粒 にぶい 黄橙 酸化胎	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。
第19図 PL_30	10	須恵器 埴	北東部33 底部~体部片	口 ー 高 7.0	細・粗砂粒 灰黄 選元胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転系切り。
第19図 PL_30	11	須恵器 埴	4住カマド東38 底部~体部片	口 ー 高 6.2	細砂粒 にぶい 橙 酸化胎	右回転軸調整か。高台は貼付。 高台径 6.8cm
第19図 PL_30	12	土師器 埴	掘り方 口縁部~ 胴部上位片	口 22.4 底 ー	細砂粒 にぶい 赤褐 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は段削り。内面胴部は段撫で。
第19図 PL_30	13	土師器 埴	東部北壁際40 口縁部~胴部上位片	口 31.8 底 ー	細砂粒 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は段削り。内面胴部は段撫で。
第19図 PL_30	14	須恵器 埴	埋没土 胴部片	口 ー 底 ー	細・粗砂粒 灰 選元胎	軸調整形、内外面とも段撫で。

6号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第19図 PL_30	1	須恵器 埴	4住内7坑北~16、 掘り方 胴部片	口 ー 底 ー	細砂粒 暗灰 選 元胎	外面は平行明き痕がかすかに残る。内面は同心円状アテ具痕が残る。

7号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第22図 PL_30	1	須恵器 環	埋没土 4/5	口 10.0 高 4.8 高 3.2	細砂粒・ガ 灰黄 褐 酸化胎	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。外面の体部から底部は全体的に擦りつけている。
第22図 PL_30	2	須恵器 埴	埋没土、3坑 1/4	口 15.1 高 7.8 高 6.1	細砂粒・ガ にぶ い橙 酸化胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は撫で。 高台径 8.8cm
第23図 PL_30	3	須恵器 埴	埋没土、5住カマ ド 口縁部片	口 17.6 底 ー	細砂粒 灰白 選 元胎	右回転軸調整か。
第23図 PL_30	4	須恵器 埴	埋没土 底部~体部片	口 ー 底 4.2	細砂粒 にぶい 黄橙 酸化胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転系切り。 高台径 5.0cm
第23図 PL_30	5	須恵器 埴	埋没土 体部小片	口 ー 底 ー	細砂粒 にぶい 黄橙 還元焼きみ	軸調整形、回転方向不明。外面体部に墨書、小片のため判読不能。
第23図 PL_30	6	黒色土器 埴	埋没土 口縁部~体部片	口 14.2 底 ー	細砂粒 にぶい 黄橙 酸化胎	内面黒色処理。軸調整形、回転方向不明。内面は横位の段撫で。
第23図 PL_30	7	黒色土器 埴	中央部床直 口縁部~体部片	口 15.7 底 ー	細砂粒 にぶい 黄橙 酸化胎	内面黒色処理。軸調整形、回転方向不明。内面は横位の段撫で。
第23図 PL_30	8	黒色土器 埴	埋没土 底部~体部片	口 ー 底 5.7	細砂粒・褐粒 橙 酸化胎	内面黒色処理。軸調整形、回転方向不明。高台は貼付。内面は段撫で。高台径 6.4cm
第23図 PL_30	9	須恵器 皿	南西部一5、8住 口縁部片	口 12.8 底 ー	細砂粒・白粒 に ぶい黄橙 酸化胎	右回転軸調整。高台が貼付か。
第23図 PL_30	10	灰軸陶器 埴	埋没土 口縁部片	口 10.8 底 ー	緻密 灰白 還元 胎	軸調整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛けか。大原2号変式期。
第23図 PL_30	11	灰軸陶器 埴	埋没土 底部~体部片	口 ー 底 7.2	黄砂粒 褐灰 選 元胎	右回転軸調整か。高台は貼付、体部下位は回転段削り。施釉方法は漬け掛け。大原2号変式期。高台径 6.4cm
第23図 PL_30	12	灰軸陶器 埴	北部中央16.5 底部~体部片	口 ー 底 8.0	緻密 灰黄 還元 胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転段撫で。施釉方法は漬け掛けか。内面底部に重ね焼き痕が残る。大原2号変式期。高台径 7.3cm
第23図 PL_30	13	灰軸陶器 皿	埋没土 底部~体部片	口 ー 底 6.8	緻密 灰白 還元 胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転段削り。施釉方法不明。大原2号変式期。高台径 6.1cm
第23図 PL_30	14	土師器 埴	8住内北壁際5 頸部~胴部片	口 ー 底 ー	細砂粒・角閃 橙 良好	頸部は横撫で、胴部は段削り。内面胴部は段撫で。
第23図 PL_30	15	須恵器 羽釜	西部中央42.5 口縁部~胴部上位 片	口 18.0 底 ー	細・粗砂粒・角閃 にぶい黄橙 酸化胎	軸調整形、回転方向不明。跨は貼付。 跨径 22.2cm
第23図 PL_30	16	須恵器 羽釜	埋没土 口縁部~ 胴部上位片	口 19.5 底 ー	細砂粒 浅黄橙 酸化胎	軸調整形、回転方向不明。跨は貼付。 跨径 22.2cm
第23図 PL_30	17	須恵器 羽釜	中央部床直、9住 口縁部~胴部上位 片	口 21.4 底 ー	細砂粒・ガ にぶ い黄橙 酸化胎	軸調整形、回転方向不明。跨は貼付、跨の上下は撫で。 跨径 28.0cm
第23図 PL_30	18	土製品 土鉢	埋没土 1/2	長(2.3) 幅 1.0 厚 1.0 孔 0.3	白粒 黒用 良好	表面は撫で。 重さ 2.3g

遺物観察表

8号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
23 PL.31	1	須恵器 環	埋没上 1/4	口 9.8 底 5.4 高 3.2	細砂粒・褐粒 に ぶい黄 酸化焼	右回転軸輪調整。底部は回転系切り無調整。
23 PL.31	2	須恵器 環	埋没上 底部～体部下位	口 — 底 4.5	細砂粒・褐粒 浅 黄橙 酸化焼	右回転軸輪調整。底部は回転系切り無調整。
23 PL.31	3	須恵器 碗	東部塚原中央床直 口縁部～体部片	口 14.2 底 —	細・粗砂粒 浅黄 橙 酸化焼	右回転軸輪調整か。高台が貼付か。
23 PL.31	4	灰釉陶器 環	埋没上、7.住 口縁部～体部片	口 15.8 底 —	緻密 灰白 還元 焼	軸輪整形、回転方向不明。施釉方法不明。大原2号窯式製。
23 PL.31	5	須恵器 羽釜	西部中央49 口縁 部～胴部上位片	口 20.0 底 —	細砂粒 灰白 還元 焼きみ	軸輪整形、回転方向不明。跡は貼付。 口径 25.7cm

9号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
24 PL.31	1	土師器 環	北部中央23、埋没 上 1/2	口 12.3 底 8.6 高 3.8	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
24 PL.31	2	土師器 環	北東隅8.5、P 4 口縁部～底部片	口 12.3 底 10.6	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
24 PL.31	3	土師器 環	カマド左外～17.5 口縁部～底部片	口 12.2 底 10.2	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
24 PL.31	4	土師器 環	埋没上 口縁部～底部片	口 11.7 底 9.7	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
24 PL.31	5	土師器 環	埋没上 口縁部～底部片	口 12.0 底 10.5	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
24 PL.31	6	土師器 環	貯蔵穴～15.5 口縁部～底部片	口 12.3 底 9.6	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
24 PL.31	7	須恵器 坏蓋	貯蔵穴北14、西部 中央17.5 1/3	口 18.8 底 —	細砂粒・黒粒 灰 還元焼	右回転軸輪調整。握みは貼付、天井部は中ほどまで回転旋削り。
24 PL.31	8	須恵器 坏	中央部14、北部中 央床直～17 完形	口 12.0 底 7.0 高 4.0	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸輪調整。底部は回転系切り無調整。
24 PL.31	9	須恵器 坏	北部中央床直・ 13.5・15.5 口縁部一部欠損	口 12.7 底 8.1 高 3.7	細・粗砂粒・角閃 灰 還元焼	右回転軸輪調整。底部は回転系切り無調整。
24 PL.31	10	須恵器 坏	P 2北8 1/2	口 11.8 底 6.4 高 3.6	細砂粒 灰黄 還元 焼	右回転軸輪調整。底部は回転系切り無調整。
24 PL.31	11	須恵器 坏	埋没上 1/5	口 13.0 底 7.2 高 3.3	細砂粒・角閃 灰 還元焼	右回転軸輪調整。底部は回転起し。
24 PL.31	12	須恵器 小碗	6 坑内北東部6.5 口縁部～体部片	口 9.0 底 —	細砂粒・角閃・褐 粒 にぶい黄橙 酸化焼	軸輪整形、回転方向不明。
24 PL.31	13	須恵器 小碗	埋没上 口縁部～体部片	口 9.2 底 —	細・粗砂粒 にぶ い黄橙 酸化焼	軸輪整形、回転方向不明。
24 PL.31	14	須恵器 碗	埋没上 4/5	口 15.5 底 6.3 高 5.8	細砂粒 灰白 還元 焼	右回転軸輪調整。高台は貼付、底部は回転系切り。 高台径 5.7cm
24 PL.31	15	須恵器 碗	北部中央7・8 1/5	口 16.8 底 9.2 高 8.6	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸輪調整か。高台は貼付、底部は回転撫で。施釉方法は 漬け掛けか。高台径 9.3cm
24 PL.31	16	須恵器 碗	西部中央33.5 底部～体部下半	口 — 底 5.5	細砂粒・角閃 に ぶい黄橙 酸化焼	右回転軸輪調整。高台は貼付、底部は回転系切り。 高台径 5.5cm
24 PL.31	17	灰釉陶器 碗	埋没上 底部～体部片	口 — 底 8.0	緻密 灰白 還元 焼	軸輪整形、回転方向不明。高台は貼付。施釉方法は漬け掛け、 内面底部に重ね焼き痕が残る。大原2号窯式製。高台径 7.0cm
24 PL.31	18	灰釉陶器 段皿	北西隅6.5 1/5	口 11.8 底 6.6 高 1.9	緻密 灰白 還元 焼	右回転軸輪調整か。高台は貼付、底部は回転撫で。施釉方法は 漬け掛けか。大原2号窯式製。高台径 6.2cm
24 PL.31	19	灰釉陶器 皿	埋没上 底部～体部片	口 — 底 7.2	緻密 灰白 還元 焼	右回転軸輪調整か。高台は貼付。施釉方法不明。内面底部に重 ね焼き痕が残る。光ヶ丘1号窯式製～大原2号窯式製。 高台径 6.8cm
24 PL.31	20	須恵器 瓶	埋没上 脚部片	口 — 脚 10.9	細砂粒・角閃 灰黄橙 酸化焼	右回転軸輪調整か。脚部に2条の凹線が巡る。
24 PL.31	21	土師器 台付甕	南西隅12・13・ 16.5・20 口縁部～底部片	口 12.0 底 2.6	細砂粒・ガ 灰黄 粒 良好	脚部は貼付。口縁部から頸部は横撫で、胴部は旋削り、底部は 撫で、内面胴部は横撫で。
24 PL.31	22	土師器 甕	6 坑内床直、南西 隅8・16・20 3/4	口 20.4 底 4.6 高 26.7	細砂粒 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は旋削り。内面胴部は横撫で、 器面磨減のため単位不明。
24 PL.31	23	土師器 甕	カマド右袖11 口 縁部～胴部上位片	口 20.6 底 —	細砂粒 にぶい赤 褐 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は旋削り。内面胴部は横撫で。
25 PL.31	24	須恵器 甕	埋没上 胴部片	口 — 底 —	細砂粒・黒粒 灰 還元焼	外面は平行引き痕がすかすかに残り、凹線が5条巡る。内面は回 心円状アケ目痕が残る。

10号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
27 PL.32	1	土師器 環	南部中央塚原床直 口縁部～体部片	口 12.8 底 —	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部横撫で、体部は上位・中位が撫で、下位が旋削り。内面 は横撫で。
27 PL.32	2	須恵器 環	埋没上 口縁部～体部片	口 12.8 底 —	緻密 灰 還元焼	右回転軸輪調整か。

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第27図 Pl.32	3	須恵器 埴	南部中央段際床直 底部片	□ 一 底 7.7	細砂粒 明赤褐 酸化焼	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転系切り。
第27図 Pl.32	4	灰軸陶器 埴	西部中央段際10 口縁部片	□ 11.8 底 一	緻密 灰白 還元 焼	右回転軸調整か。施釉方法は不詳明。黒塗14号式期か。
第27図 Pl.32	5	灰軸陶器 埴	埋没土 底部片	□ 一 底 8.0	緻密 灰白 還元 焼	右回転軸調整か。高台は貼付、底部は回転軸で、施釉方法不明。 大原2号式期。高台径 6.4cm
第27図 Pl.32	6	土師器 甕	東部中央床直 口縁部～頸部片	□ 18.6 底 一	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部は横撫で、頸部は撫で。内面は横撫で。
第27図 Pl.32	7	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位片	□ 一 底 一	細砂粒 にぶい赤 褐 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は旋削り。内面胴部は撫で。
第27図 Pl.32	8	灰軸陶器 長頸壺	中央床直～11・13 胴部片	□ 一 底 一	緻密 灰白 還元 焼	右回転軸調整か。胴部下半は回転削り。
第27図 Pl.32	9	須恵器 壺	西部中央段際18 底部～胴部下片	□ 一 底 12.2	細・粗砂粒・角閃 灰白 還元焼	右回転軸調整。高台は貼付、胴部下位に2段の回転削り。 高台径 11.6cm

11号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第29図 Pl.32	1	須恵器 環	埋没土 口縁部～体部片	□ 12.7 底 一	細砂粒・角閃 粗 灰 還元焼	右回転軸調整か。
第29図 Pl.32	2	須恵器 環	埋没土 口縁部～体部片	□ 14.6 底 一	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整か。
第29図 Pl.32	3	須恵器 環	中央部11 底部～体部片	□ 一 底 6.0	細砂粒・角閃 灰 還元焼	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。
第29図 Pl.32	4	須恵器 埴	埋没土 口縁部～体部片	□ 13.6 底 一	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整か。
第29図 Pl.32	5	灰軸陶器 埴	北西部13 口縁部～体部片	□ 15.7 底 7.0	微砂粒 灰白 還元 焼	右回転軸調整か。体部下位に回転削り。施釉方法は刷毛塗 りか。光ヶ丘1号式期。
第29図 Pl.32	6	須恵器 羽釜	中央部床直 口縁部～跨片	□ 24.0 底 一	細砂粒・長石にふ い黄橙 酸化焼	輪軸整形。跨は貼付。

12号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第31図 Pl.32	1	土師器 環	貯蔵穴西部床直 1/2	□ 12.0 底 9.0 高 3.3	細砂粒 にぶい、粗 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	2	土師器 環	西部部床直 1/2	□ 12.2 底 8.6 高 3.2	細砂粒・ガ 粗 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	3	土師器 環	カマド床直・埋没 土 1/2	□ 12.4 底 10.4 高 3.3	細砂粒・粗砂粒 粗 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。 高台径 16.8cm
第31図 Pl.32	4	土師器 環	中央部床直・12 1/4	□ 13.8 底 9.4 高 3.7	細砂粒 粗 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	5	土師器 環	南部中央17.5 口縁部～底部片	□ 11.8 底 一	細砂粒 明赤褐 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	6	土師器 環	北部中央床直 口縁部～底部片	□ 12.0 底 10.6	細砂粒 粗 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	7	土師器 環	貯蔵穴～8 口縁部～底部片	□ 15.7 底 一	細砂粒 にぶい、粗 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	8	土師器 大型環	中央部西18 口縁部～体部片	□ 22.8 底 一	細砂粒 粗 良好	口縁部横撫で、体部は手持ち旋削り。
第31図 Pl.32	9	須恵器 環蓋	西部中央23 1/4	□ 13.8 高 2.6	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整。積みは貼付、天井部は中ほどまで回転削り。
第31図 Pl.32	10	須恵器 環蓋	貯蔵穴床直、埋没 土 天井部片	□ 一 底 一 横 3.2	細砂粒 灰オリー ブ 還元焼	右回転軸調整。積みは貼付、天井部は中ほどまで回転削り。
第31図 Pl.32	11	須恵器 環蓋	P 5南5・5坑北 一6、埋没土 2/5	□ 18.4 底 一	細砂粒・角閃、白 灰黄 還元焼	右回転軸調整。積みは貼付(剥落)、天井部は中ほどまで回転 削り。
第31図 Pl.32	12	須恵器 環	中央部23.5 底部片	□ 一 底 7.6	細砂粒 にぶい赤 褐 酸化焼	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。
第31図 Pl.32	13	須恵器 環	5坑内～14 底部片	□ 一 底 8.0	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整。底部は回転削り。
第31図 Pl.32	14	須恵器 埴	南部中央床直、貯 蔵穴西15・16 1/2	□ 11.5 底 6.4 高 4.4	細砂粒 灰白 還元焼	右回転軸調整。底部は回転系切り無調整。
第31図 Pl.32	15	須恵器 埴	南部中央13.5 1/2	□ 11.2 底 6.6 高 5.3	細砂粒・黒粒 灰 還元焼	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転削り。
第31図 Pl.32	16	須恵器 埴	貯蔵穴床直・7・ 12 1/4	□ 17.4 底 8.6 高 7.4	細砂粒 灰白 還元焼	右回転軸調整。高台は貼付底部は回転系切り。 高台径 9.0cm
第32図 Pl.32	17	須恵器 埴	中央部10.5 口縁部～体部片	□ 16.8 底 9.2	細・粗砂粒・角閃 灰 還元焼	右回転軸調整か。高台は貼付。
第32図 Pl.32	18	須恵器 埴	中央部5、埋没土 口縁部～体部片	□ 11.8 底 一	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整か。
第32図 Pl.32	19	須恵器 埴	貯蔵穴9 口縁部～体部片	□ 14.2 底 一	細・粗砂粒・角閃 暗灰 還元焼	右回転軸調整か。
第32図 Pl.32	20	須恵器 壺	北部中央床直 底部片	□ 一 底 一	細砂粒 灰 還元 焼	輪軸整形。回転方向不明。高台は貼付、高台内底部は回転削り。 高台径 16.8cm

遺物観察表

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
第32図 PL.33	21	土師器 高坏	埋没上 坏身口縁部 ～底部片	□ 13.0 底 一	細砂粒 にぶい 良好	口縁部横撫で、底部は横撫で。内面口縁部は二次被熱を受けている。
第32図 PL.33	22	土師器 小型甕	5坑北床直 口縁部 ～胴部中位片	□ 9.8 胴 11.8	細砂粒 赤褐色 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第32図 PL.33	23	土師器 甕	カマド床直・9・ 12.5 口縁部～胴部下位	□ 20.4 胴 21.5	細砂粒・粗粒 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第32図 PL.33	24	土師器 甕	カマド床直・7、 右袖床直・17、東 部中央床直・6 口縁部～胴部上半	□ 20.5 胴 20.7	細砂粒 橙 良好	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第32図 PL.33	25	土師器 甕	カマド床直・7 7・13、中央床直 口縁部～胴部上半	□ 23.4 底 一	細・粗砂粒 にぶ い赤褐色 良好	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第32図 PL.33	26	土師器 甕	5坑内一20 口縁 部～胴部上位片	□ 20.6 底 一	細砂粒 橙 良好	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第32図 PL.33	27	土師器 甕	カマド内5・11・ 21・30 胴部片	□ 一 底 一	細砂粒 明赤褐色 良好	内面胴部に輪積み痕が残る。頸部横撫で、胴部丸削り。内面胴部は横撫で。
第32図 PL.33	28	土師器 甕	カマド内7・9、 北部中央・P 3床 直 胴部上半片	□ 一 底 一	細砂粒・角閃 橙 にぶい赤褐色 良好	胴部は外面が縦位の丸削り。内面は横撫で。
第33図 PL.33	29	土師器 甕	カマド内床直 底部～胴部	□ 一 底 5.5	細砂粒 にぶい赤 褐色 良好	底部と胴部は丸削り。内面は横撫で。
第33図 PL.33	30	土師器 甕	南部中央段際9・ 10・15、1住 底部～胴部	□ 一 底 6.7	細砂粒 にぶい赤 褐色 良好	底部と胴部は丸削り。内面は横撫で。器面割傷のため単位不明。

13号住居

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
第35図 PL.34	1	土師器 环	南東部18・20 完形	□ 11.7 高 3.2	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	2	土師器 环	P 1南9.5、21住 1/3	□ 13.8 高 3.4	細砂粒 明赤褐色 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	3	土師器 环	埋没上 口縁部～底部片	□ 10.8 底 8.6	細砂粒 灰青褐色 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	4	土師器 环	カマド埋没上 1/4	□ 11.9 底 一	細砂粒 にぶい 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	5	土師器 环	南部中央段際26 1/4	□ 14.2 底 一	細砂粒 明赤褐色 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち丸削り。内面に煤が斑点状に付着。
第35図 PL.34	6	土師器 环	カマド左床直 口縁部～体部片	□ 12.8 底 一	細砂粒 にぶい 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	7	土師器 环	中央部5 口縁部～体部片	□ 13.6 底 一	細砂粒 にぶい赤 褐色 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	8	土師器 环	埋没上 口縁部～底部片	□ 一 底 一	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(梗下)から底部は手持ち丸削り。
第35図 PL.34	9	土師器 甕	南部中央15 口縁 部～胴部上位片	□ 16.0 底 一	細砂粒・角閃 橙 にぶい褐色 良好	口縁部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第35図 PL.34	10	土師器 甕	北東部26.5、12住 口縁部～胴部上位 片	□ 18.8 底 一	細砂粒 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は丸削り。内面胴部は横撫で。
第35図 PL.34	11	須恵器 瓶	南部中央段際25 口縁部～頭部片	□ 12.0 底 一	細砂粒少 灰白 還元焼	右回転軸調整か。

14号住居

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現 存 率	法 量	胎土色調 焼成	形 ・ 成 調 整 等
第38図 PL.34	1	土師器 环	南東部一20 ほぼ完形	□ 12.7 高 3.5	細砂粒 にぶい赤 褐色 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	2	土師器 环	南東部5・埋没上、 15住5 2/3	□ 12.8 底 10.4 高 3.0	細砂粒・方 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	3	土師器 环	南部中央床直、埋 没上 2/5	□ 12.6 底 10.4 高 2.9	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	4	土師器 环	埋没上、15住 口縁部～底部片	□ 12.6 底 10.6	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	5	土師器 环	南部中央段際9・ 11、埋没上 1/3	□ 11.6 高 2.8	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	6	土師器 环	埋没上 1/3	□ 11.8 底 一	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	7	土師器 环	埋没上、15住 口縁部～底部片	□ 11.8 底 一	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち丸削り。
第38図 PL.34	8	土師器 环	埋没上 口縁部～底部片	□ 14.6 底 11.2	細砂粒 橙 良好	口縁部は上半が横撫で、下半が撫で、体部から底部は手持ち丸削り。

遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第38図 PL.34	9	土師器 環	南部中央壁際床直 12 完形	口 11.8 底 8.2 高 3.6	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち貫削り。内面は口縁部に斜放状、底部に螺旋状附文。
第38図 PL.34	10	土師器 環	埋没上 2/5	口 10.0 底 —	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第38図 PL.34	11	土師器 環	15住南部中央壁際 26・28 口縁部～体部片	口 11.8 底 —	細砂粒・粗粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)は手持ち貫削り、稜下に撫で部分がある。
第38図 PL.34	12	須恵器 鉢	北東隅床直、埋没 上、15住 3/5	口 12.6 底 7.5 高 3.7	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整。底部は回転糸切り後周囲を回転貫削り。内外面にも1段の回転貫削り。内外面に火傷がみられる。
第38図 PL.34	13	須恵器 甕	南東部 5 1/4	口 11.8 底 5.4 高 3.7	細砂粒・粗粒 灰 黄 酸化焼	右回転軸調整。底部は回転糸切り無調整。
第38図 PL.34	14	須恵器 甕	南部中央 9 口縁部～体部片	口 10.8 底 —	細砂粒・角閃 灰 還元焼	右回転軸調整か。高台が貼付される形態。
第38図 PL.34	15	須恵器 甕	埋没上 底部～体部片	口 — 底 8.0	細砂粒 にぶい 酸化焼	右回転軸調整か。高台は貼付。
第38図 PL.34	16	須恵器 短頸壺蓋	南部中央10 2/5	口 14.8 脚 15.0	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整。脚は貼付、天井部は回転撫で。
第38図 PL.34	17	須恵器 甕	北東部外—13 底部～胴部下位片	口 — 底 20.0	細砂粒 灰 還元 焼	胴部は平行し面が残るか、最下位は貫削り、底部は貫撫でか、内面は胴部に同心内状ア字痕が残る。底部は貫撫で。
第38図 PL.34	18	須恵器 羽釜	埋没上 胴～脚上半片	口 — 脚 26.8	細・粗砂粒・ガ 灰黄陶 還元焼き	軸調整。脚は貼付。胴部下斜めのは貫削り。

15号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第41図 PL.35	1	土師器 環	南部中央壁際10.5・ 19 4/5	口 10.6 高 3.6	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第41図 PL.35	2	土師器 環	南部中央壁際19・ 32 3/4	口 12.2 高 4.1	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。有段口縁部環。
第41図 PL.35	3	土師器 環	南部中央壁際23.5、 埋没上 3/5	口 11.6 高 4.7	細砂粒 にぶい赤 濁 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第41図 PL.35	4	土師器 環	南部中央11.5、中 央部床直 3/5	口 11.8 高 3.8	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。内外面の一部に靨が付着。
第41図 PL.35	5	土師器 環	南部中央壁際19・ 19・22.5 2/3	口 10.5 高 3.5	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第41図 PL.35	6	土師器 環	カマド右袖床直 1/2	口 12.3 高 4.1	細砂粒 明赤濁 良好・橙	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第41図 PL.35	7	土師器 環	南部西床直 口縁部～1/3欠損	口 12.7 高 4.4	細砂粒 橙 良好・橙	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り
第41図 PL.35	8	土師器 環	南部中央壁際19・ 22・26・28 1/3	口 11.2 底 —	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第41図 PL.35	9	土師器 環	南部中央壁際11 1/3	口 11.2 高 3.5	細砂粒・粗粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。
第42図 PL.35	10	土師器 鉢	埋没上、12住 口縁部～体部片	口 12.0 底 —	細砂粒 にぶい赤 濁 良好	口縁部は横撫で、体部(稜下)から底部は手持ち貫削り。内外面に靨が斑状に付着。
第42図 PL.35	11	土師器 鉢	中央部床直・22 1/3	口 13.8 高 2.9	細砂粒 にぶい 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち貫削り。
第42図 PL.35	12	土師器 鉢	P 7 埋没上 口縁部～体部片	口 13.6 高 —	細砂粒 にぶい 黄 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち貫削り。
第42図 PL.35	13	須恵器 環	P 3内22 1/4	口 12.0 底 7.3 高 4.5	細砂粒 灰 還元 焼	左回転軸調整か。底部は回転糸切り無調整。
第42図 PL.35	14	須恵器 環	P 8・握り方 口縁部片	口 11.8 高 —	細砂粒 灰 還元 焼	軸調整。回転方向不明。20と同じ個体か。
第42図 PL.35	15	須恵器 環	P 7、14住 底部～体部下片	口 — 底 9.0	細砂粒 灰 還元 焼	軸調整。回転方向不明。底部は回転貫削り。19と同じ個体か。
第42図 PL.35	16	土師器 鉢	埋没上・握り方 口縁部～体部片	口 21.2 高 —	細・粗・粗粒・黒 粒 明赤濁 良好	口縁部は横撫で、体部は手持ち貫削り。内面は横撫で。
第42図 PL.35	17	須恵器 長頸壺	カマド左袖7 口縁部片	口 12.3 高 —	細砂粒 灰 還元 焼	右回転軸調整か。口縁部上半に波状文が2段部。外面の一部に靨が付着。
第42図 PL.35	18	土師器 甕	カマド右袖床直、 埋没上 ほぼ完形	口 19.6 底 6.0 高 38.9	細・粗砂粒多・角 閃 橙 良好	口縁部は横撫で、胴部と底部は貫削り。内面は底部から胴部が貫撫で。外面胴部の一部に粘土付着。
第42図 PL.35	19	土師器 甕	カマド前12.5 ほぼ完形	口 20.0 底 4.8 高 37.4	細・粗砂粒・角閃 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は貫削り、底部には木葉痕が残る。内面は底部から胴部が貫撫で。
第42図 PL.36	20	土師器 甕	カマド右袖床直 口縁部～胴部中位	口 20.3 脚 18.4	細砂粒多 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は貫削り。内面胴部は貫撫で。
第43図 PL.36	21	土師器 甕	カマド前床直・13 口縁部～胴部中位	口 22.7 脚 19.4	細砂粒多 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は貫削り。内面胴部は貫撫で。

16号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第44図 PL.36	1	須恵器 環	埋没上 口縁部片	口 7.8 底 —	細砂粒 灰黄 酸化焼	軸調整。回転方向不明。

遺物観察表

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第44図 Pl.36	2	須恵器 埴	埋没上 口縁部~底部片	口 12.0 底 5.0 高 4.4	細砂粒 灰 還元 胎	右回転軸調整か。底部は回転糸切り無調整か。
第44図 Pl.36	3	須恵器 皿	南部埋没24 口縁部~底部欠損	口 9.0 底 6.0 高 2.2	細砂粒・粗砂粒 橙 酸化胎	右回転軸調整。底部は回転糸切り無調整。
第44図 Pl.36	4	須恵器 皿	掘り方 口縁部~底部片	口 8.6 底 5.2 高 2.2	細砂粒 にぶい黄 橙 酸化胎	軸調整形。回転方向不明。底部切り難し技法は糸切り、回転が 静止かは不明。
第44図 Pl.36	5	須恵器 皿	埋没上 底部~口縁部片	口 ー 底 6.0	細砂粒 灰黄 酸 化胎	右回転軸調整。底部は回転糸切り無調整。

17号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第45図 Pl.36	1	須恵器 環	埋没上 口縁部片	口 7.8 底 ー	細砂粒 灰黄 酸 化胎	軸調整形。回転方向不明。
第45図 Pl.36	2	黒色土器 埴	北東部床直 底部~体部下片	口 ー 底 6.0	細砂粒 にぶい黄 橙 酸化胎	内面黒色処理。軸調整形。回転方向不明。底部は磨き、体部は 撫で。内面は磨き。高台が貼付されていた可能性あり。
第45図 Pl.36	3	須恵器 皿	南部中央埋没10、 16埋没上 完形	口 9.3 底 5.0 高 2.2	細砂粒 浅黄橙 酸化胎	右回転軸調整。底部は回転糸切り無調整。内面底部に指頭痕 が残る。
第45図 Pl.36	4	須恵器 羽釜	東部溝40 口縁部 ~胴部中位片	口 19.4 跨 22.2	細・粗砂粒・方 にぶい黄橙 酸化胎	軸調整形。跨は貼付。胴部は内外面とも撫で。
第45図 Pl.36	5	須恵器 羽釜	東部溝33・34・40 口縁部~胴部中位片	口 22.3 跨 24.8	細・粗砂粒・方 にぶい黄橙 酸化胎	軸調整形か。跨は貼付。胴部は磨削り。内面胴部は撫で。

18号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第47図 Pl.36	1	土師器 環	南部19住居埋没床直 口縁部~底部片	口 12.4 底 ー	細砂粒 明赤褐 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち旋削り。

19号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第47図 Pl.37	1	土師器 埴	北部中央10 口縁部~底部片	口 11.6 底 10.4	細砂粒 にぶい赤 褐 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
第47図 Pl.37	2	須恵器 埴	4坑内15 底部~体部下位片	口 ー 底 6.8	細砂粒 灰 還元 胎	右回転軸調整。底部は回転糸切り無調整。
第47図 Pl.37	3	須恵器 埴	埋没上 底部~体部下位片	口 ー 底 7.0	細砂粒・白粒 灰 オリーブ 還元胎	右回転軸調整。底部は回転糸切り無調整。
第47図 Pl.37	4	須恵器 埴	埋没上 底部~体部下位片	口 ー 底 7.8	細砂粒 灰 還元 胎	右回転軸調整か。底部は回転旋削り。
第47図 Pl.37	5	須恵器 埴	埋没上 底部~体部下位片	口 ー 底 8.0	細砂粒 灰 還元 胎	軸調整形。回転方向不明。器面磨削のため詳細不明。
第47図 Pl.37	6	須恵器 埴	東部中央床直 底部~体部下位片	口 ー 底 6.8	細・粗砂粒・角四 小溝 灰 還元胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転糸切り。 高台径 6.4cm
第47図 Pl.37	7	須恵器 皿	3坑内16 底部~体部下位片	口 ー 底 6.6	細・粗・長石・角 四 灰 還元胎	右回転軸調整。高台は貼付、底部は回転糸切り。 高台径 6.0cm

20号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第45図 Pl.36	1	灰陶器 皿	カマ下内-12.5 1/2	口 11.5 底 6.4 高 2.1	緻密 灰白 還元 胎	右回転軸調整。高台は貼付底部は回転糸切り。施釉方法は漬 け掛け。大原2号窯式。高台径 5.6cm

21号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第49図 Pl.37	1	土師器 環	P 3北-11 1/4	口 12.7 高 4.8	細砂粒・粗粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部(横下)から底部は手持ち旋削り。
第49図 Pl.37	2	土師器 環	P 3南-28.5 口縁部~底部片	口 12.0 高 ー	細砂粒 にぶい橙 良好	口縁部横撫で、体部(横下)から底部は手持ち旋削り。
第49図 Pl.37	3	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	口 11.8 底 9.8	細砂粒 にぶい橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
第49図 Pl.37	4	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	口 12.0 底 10.6	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち旋削り。
第49図 Pl.37	5	土師器 環	埋没上 口縁部~底部片	口 13.0 高 ー	細砂粒 にぶい橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち旋削り。
第49図 Pl.37	6	土師器 罎	東部埋没床直 口 縁部~胴部中位片	口 19.0 胴 18.0	細砂粒多・方 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち旋削り。
第49図 Pl.37	7	土師器 罎	P 5北-25-26 底部~体部下位片	口 ー 底 3.0	細・粗砂粒・角四 橙 良好	胴部は横撫で、高台は貼付。内面は撫で。
第50図 Pl.37	8	土師器 罎	南西部20 底部~胴部下位片	口 ー 底 8.6	細砂粒・方 にぶ い赤褐 良好	胴部は旋削り後撫で、底部は周辺が旋削り、中央は撫で。内面 は撫で。
第50図 Pl.37	9	須恵器 提瓶	埋没上 頸部~胴部小片	口 ー 底 ー	細砂粒 灰 還元 胎	軸調整形。側面は回転旋削り、頸部下に把手が貼付。

遺物観察表

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
5019 PL_37	10	須恵器 甕	中央部60 胴部片	□ - 底 -	細砂粒 暗灰 選 元胎	輪軸整形。外面は平行引き取が残る。内面は輪軸のみでアテ 具痕は消されている。
5019 PL_37	11	須恵器 形象埴輪	埋設上 一部片	□ - 底 -	細砂粒・雲母 ぶい相 良好	貼付されて部位の一部か。表面は撫で。

22号住居

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
5119 PL_37	1	土師器 環	埋設上 口縁部~底部小片	□ 12.0 高 -	細砂粒 灰褐 良 好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち削り。
5119 PL_37	2	須恵器 甕	埋設上 胴部上位小片	□ - 底 -	細砂粒 暗灰 選 元胎	輪軸整形。胴部に凹線が走り、凹線下に刺突文が施文。
5119 PL_37	3	須恵器 甕	西部中央~15.5 胴部片	□ - 底 -	細砂粒 灰 選元胎	外面は平行引き取が残り、不定方向の掻き目、内面は同心円状 アテ具痕が残る。

2~7号土坑

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
5219 PL_37	2坑	須恵器 埴輪	埋設上 口縁部片	□ 14.0 高 -	細砂粒 灰白 選 元胎	輪軸整形。回転方向不明。
5219 PL_37	2坑	須恵器 埴輪	埋設上 体部片	□ - 底 9.4	細砂粒 灰 選元胎	輪軸整形。回転方向不明。高台が貼付か。
5219 PL_37	2坑	土師器 小型甕	埋設上 口縁部~ 胴部上位片	□ 14.6 高 -	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は削り。内面胴部は 横撫で。
5219 PL_37	3坑	須恵器 埴輪	西部堺際~32.5 底部片	□ - 底 7.0	細砂粒 にぶい黄 橙 酸化胎	右回転輪軸調整。高台は貼付、底部は回転撫で。
5219 PL_37	4坑	灰軸陶器 埴輪	埋設上 口縁部片	□ 15.0 高 -	緻密 灰白 選元胎	輪軸整形。施軸方法は不明。大原2号窯式期か。
5219 PL_37	5坑	土師器 環	西部堺際~23.5 1/3	□ 11.0 底 10.0	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち削り。
5219 PL_37	5坑	須恵器 坏蓋	西部堺際~8 口縁部~天井部片	□ 13.4 高 -	細砂粒 灰 選元胎	右回転輪軸調整。天井部は中ほどまで回転削り。
5219 PL_37	6坑	土師器 台付甕	口縁部~胴部上位 片	□ 10.8 高 -	細砂粒 にぶい赤 褐 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は削り。内面胴部は 横撫で。
5219 PL_37	6坑	土師器 甕	北西部堺際~21 口縁部~胴部上位 片	□ 16.0 高 -	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	口縁部は横撫で、胴部は撫で。内面胴部は横撫で。
5319 PL_38	7坑	土師器 埴輪	東部~19 口縁部~体部片	□ 17.6 高 -	細砂粒 にぶい赤 褐 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち削り。内面体部 に斜射状放射磨き(砲文)状。
5319 PL_38	7坑	須恵器 坏蓋	東部味直 ほほ形	□ 13.2 底 7.1 高 3.7	細砂粒・角閃 灰 選元胎	右回転輪軸調整。底部は回転系切り無調整。
5319 PL_38	7坑	須恵器 埴輪	南部味直~9.5、 埋設上 3/4	□ 13.9 底 6.7 高 5.0	細砂粒・方 灰 選元胎・横	右回転輪軸調整。底部は回転系切り無調整。
5319 PL_38	7坑	須恵器 埴輪	中央部~12 口縁部1/3損	□ 14.5 底 6.6 高 5.7	細砂粒・方 にぶ い黄橙 酸化胎	右回転輪軸調整。高台は貼付、底部は回転系切り。内面体部 に斜射状放射磨文。内外面部分的に煤が付着。高台径 6.0cm
5319 PL_38	7坑	須恵器 埴輪	東部~6 口縁部~体部片	□ 13.7 高 -	細砂粒 灰 選元胎	右回転輪軸調整か。高台が貼付される形態か。
5319 PL_38	7坑	須恵器 埴輪	東部~6 底部~体部下位片	□ - 底 7.5	細砂粒 灰白 選 元胎	右回転輪軸調整。高台は貼付、底部は回転系切り。
5319 PL_38	7坑	灰軸陶器 埴輪	北部中央~25.5、 埋設上 3/4	□ 13.3 底 6.3 高 4.3	細砂粒・角閃 灰 白 選元胎	右回転輪軸調整。高台は貼付、底部は回転撫で。体部下位は 回転削り。施軸方法は漬け掛け。大原2号窯式期か。 高台径 6.0cm
5319 PL_38	7坑	土師器 甕	北部堺際~6 口縁部~胴部上位片	□ 20.0 底 -	細砂粒・角粒 橙 良好	口縁部から頸部は横撫で、胴部は削り。内面胴部は横撫で。
5319 PL_38	8坑	土師器 甕	北部中央~16 底部~胴部下位片	□ - 底 4.2	細砂粒 にぶい黄 橙 良好	底部と胴部は削り。内面は横撫で。

道徳外

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
5419 PL_38	9	土師器 環	1/4	□ 10.6 高 2.0	細砂粒・方 橙 良好	口縁部横撫で、体部(椀下)から底部は手持ち削り。
5419 PL_38	10	土師器 環	表上、表採 1/3	□ 11.6 高 3.6	細砂粒 橙 良好	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半から底部は手持ち削り。
5419 PL_38	11	土師器 環	表採 1/4	□ 12.2 底 9.5 高 2.9	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部は撫で、底部は手持ち削り。
5419 PL_38	12	土師器 環	表上 口縁部~体部片	□ 12.7 底 -	細砂粒 橙 良好	口縁部は横撫で、体部下半は手持ち削り。
5419 PL_38	13	須恵器 埴輪	底部片	□ - 底 7.4	細砂粒・長石 灰 選元胎	輪軸整形。回転右回りか。底部は横撫で。
5419 PL_38	14	黒色土器 埴輪	表採 口縁部~体部片	□ 13.7 底 5.9	細砂粒 にぶい黄 橙 酸化胎	内面黒色化粧。右回転輪軸調整か。内面は横撫で。
5419 PL_38	15	灰軸陶器 皿	表採 1/8	□ 12.0 底 7.0 高 2.8	緻密 灰白 選元胎	右回転輪軸調整か。高台は貼付。施軸方法は漬け掛け。大原2 号窯式期。

遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第54図 PL.38	16	須恵器 环蓋	口縁部片	口 12.0 高 —	細砂粒 灰 還元 焼	輪軸整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転施り。
第54図 PL.38	17	龍泉窯系 青磁 碗	表土 口縁部片	口 — 底 —	灰黄〜にぶい黄橙	沈線で体部内面を分割し、その間に飛雲文を配す。12世紀中〜13世紀中頃

第15表 厨城遺跡 遺物観察表

						出土位置・法量はcmとする。
種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第58図 PL.39	1	土師器 环	埋没上 ほぼ完形	口 12.6 高 5.3	B 橙 良好	器表厚焼。外面口縁部下縁をなす。口縁部内傾もしくは僅かに窪む。底部外面施り単位不明。
第58図 PL.39	2	土師器 环	埋没上 口縁1/2 底部完形	口 12.6 高 5.3	B 明赤褐 良好	口縁部内面凹線状に窪む。口縁部横撫で、内面は撫で上げ部が残る。底部外面施り。
第58図 PL.39	3	土師器 环	埋没上 1/3	口(12.4) 高 —	D 橙 良好	やや器厚い。口縁部内面内傾。口縁部横撫で。外面口縁部下の段母線。底部外面施り。
第59図 PL.39	4	土師器 环	埋没上 1/4	口(12.6) 高 —	D 橙 良好	器表厚焼。胎土緻密で焼成硬質。
第59図 PL.39	5	土師器 环	埋没上 1/3	口 11.8 高 3.9	A か 橙 良好	口縁部外反し、端部付近内湾。体部内面上位から口縁部外面横撫で。外面口縁部下の段母線。底部外面施り。
第59図 PL.39	6	土師器 环	埋没上 1/4	口(11.4) 高 —	A かにぶい橙 良好	口縁部外反。器表厚焼。胎土緻密で焼成硬質。底部外面施り。
第59図 PL.39	7	土師器 环	埋没上 1/3	口(10.0) 高 —	A 明赤褐 良好	底部器面やや厚く、口縁部直立。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面施り。
第59図 PL.39	8	土師器 高环	埋没上 1/3	口(18.0) 底 —	A かにぶい橙 良好	内面刷毛目後撫で、口縁部横撫で。
第59図 PL.39	9	土師器 甕	埋没上 底部	口 — 底 4.6	A かにぶい橙 良好	外面施り。内面撫で。
第59図 PL.39	10	土師器 甕	東部塚際床直 ほぼ完形	口 24.7 底 9.4 高 32.7	B 橙 良好	口縁部横撫で。体部外面施り。体部内面撫で。孔部段調整。

3号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第59図 PL.39	1	土師器 环	南東部9 1/4	口(10.4) 高 —	A 橙 良好	口縁部はほぼ直立。口縁部横撫で。外面器表厚焼し、底部外面施り単位不明。
第59図 PL.39	2	須恵器 碗	埋没上 1/4	口(13.4) 底(5.9) 高 5.0	A オリーブ黒 還元焼	口縁部外反。貼付高台。高台端部厚焼。外面輪軸目縁が浅い。
第59図 PL.39	3	須恵器 碗	埋没上 1/4	口(14.8) 底 —	B 浅黄橙 酸化 焼	口径大きく腰部やや張る。貼付高台。輪軸回転方向不明。底部切り離し技法不明。
第59図 PL.39	4	須恵器 碗	埋没上 1/3	口(11.9) 底 —	B 灰白 還元焼	口縁部直線的に開く。貼付高台。高台欠左。左回転輪軸調整。
第59図 PL.39	5	須恵器 碗	カマド5、埋没上 底部	口 — 底 7.2	B 灰黄 還元焼	貼付高台。高台端部面取り風の平坦面がある。右回転輪軸調整か、切り離し技法不明。
第59図 PL.39	6	須恵器 甕	東部・北部塚際床直、カマド7 上半部片	口 — 底 —	B 灰白 酸化焼	上部還元気味で下部酸化。口縁部外面内湾1条の凹線。口縁部端部小さくつまみ上げる。口縁部内面から前部外面端回転横撫で。体部内外面撫で。
第59図 PL.39	7	須恵器 甕	北部床直・カマド 13 胴部片	口 — 底 —	A 灰 還元焼	径6mm程の線少量含む。外面下部施り。内面の回転撫で、やや被打つ。
第59図 PL.39	8	須恵器か 費か	南部中央9 底部	口 — 底 14.0	須恵B 灰白 酸化 焼	体部外面から底部外面施り。底部内面撫で。
第59図 PL.39	9	須恵器 羽釜	カマド16.5 1/6	口(21.0) 底 —	C にぶい褐 酸化焼	鈎跡1付け。口縁部横撫で。体部外面施り。体部内面撫で。
第60図 PL.39	10	土師 上釜	東部床直、カマド 10.5・14.5 1/3	口(21.4) 底 —	土師A' 明赤褐 良好	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面施り。内面横撫で。径7・8mmの線や軽石少量含む。口縁部やや歪み。推定径不明焼。
第60図 PL.39	11	羽釜か 上釜	東部床直、カマド 10.5 1/4	口 — 底 —	土師A' 橙 良好	外面施り。体部下位接合部外面横撫で。内面幅広の撫で。内面接合線残る。
第60図 PL.39	12	須恵器 羽釜	カマド11、1生理 埋没上 下半部片	口 — 底(9.8)	C 浅黄 酸化焼	体部外面施り。
第60図 PL.39	13	灰輪陶器 甕	埋没上 体部片	口 — 底 —	緻密 灰白 良好	内面輪軸目縁著。外面施軸。外面下半回転施り。右。

2号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第62図 PL.40	1	土師器 环	3/4	口 12.3 底 — 高 5.1	A 明赤褐 良好	口縁部内面に小さい段。口縁部横撫で。内面撫で上げが認められるが、残存部の外面には認められない。外面口縁部下縁線は横撫でにより形成。底部外面施り。外面口縁部下撫で部分残る。
第62図 PL.40	2	土師器 环	埋没上、掘り方 3/4	口(11.8) 高 5.5	A 明赤褐 良好	口縁部横撫で。外面口縁部下横撫でにより縁線形成。口縁部底沈線状に窪む。底部外面施り。
第62図 PL.40	3	土師器 环	埋没上、掘り方 1/3	口(13.2) 高 —	A 赤褐 良好	体部から口縁部内湾し、口縁部外面部分的に膨らみを持つ。口縁部横撫で。底部外面施り。内外面赤色染彩するが、底部外面は不明焼。

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第62図 PL.40	4	土師器 坏	1/2	□(11.7) 高 5.2	A 橙 良好	体部から口縁部内湾。口縁部横撫で、底部外面磨削り。外面口縁部から体部上位撫で状の窪みが認められる。
第62図 PL.40	5	土師器 甕	カマド、埋没上 1/2	□ 21.6 高 -	A にぶい黄褐 やや不良	口縁部横撫で。体部外面縦位置磨削り。内面内撫でか。胎土中の 藍物粒多い。
第63図 PL.40	6	土師器 甕	カマド、埋没上 1/3	□(25.1) 底 -	B にぶい黄橙 良好	口縁部端部1条の沈殿。口縁部横撫で、体部外面縦位置磨削り。体 部内面撫で。口縁部外面接合痕残る。

4号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第66図 PL.40	1	土師器 坏	南部塚跡床直 上	□ 14.5 底 - 高 6.0	B 灰黄 良好	底部から口縁部内湾。口縁部横撫で、体部外面撫で。底部外面 磨削り。体部から底部内面撫で後撫で。内面から口縁部外面 赤色塗彩。口縁部から体部外面黒変部多量。
第66図 PL.40	2	土師器 坏	南部塚跡31 はぼ形	□ 14.6 高 6.5	B にぶい黄褐 良好	底部から口縁部内湾。口縁部横撫で、体部外面撫で。底部外面 磨削り。体部から底部内面撫で後撫で。内面から口縁部外面 赤色塗彩。
第66図 PL.40	3	土師器 坏	貯蔵穴、埋没上 1/3	□(12.1) 高 -	A 赤褐 良好	口縁部内湾。口縁部横撫で後、内面細い磨き。外面口縁部下 撫で、底部外面磨削り。
第66図 PL.40	4	土師器 坏	埋没上 1/4	□(11.8) 高 -	A にぶい赤褐 良好	口縁部外反した後、端部をつまみ上げる。底部外面磨削り。体 部内面磨き。底部内面撫で。
第66図 PL.40	5	土師器 台付甕	貯蔵穴-55 はぼ形	□ 13.8 底 8.2 高 13.2	A 橙 良好	外面磨き剥離し、表面荒れる。口縁部と台座部横撫で。口縁部 内面撫で上げ部残る。体部内面撫で。
第66図 PL.40	6	土師器 甕	カマド7、貯蔵穴 はぼ形	□ 15.3 底 7.3 高 31.7	A にぶい黄橙 良好	口縁部歪む。口縁部横撫で。体部外面撫で、体部下平接合痕 多く残るが、内面凹凸不可。口縁部内面接合部の段差残る。
第66図 PL.40	7	土師器 甕	カマド床直、カ マド 口縁部片	□(17.3) 底 -	A 橙 良好	口縁部歪み、端部肥厚。口縁部横撫で。体部内外面撫で。8・9 と同一の可能性あり。
第66図 PL.40	8	土師器 甕	カマド8 胴部片	□ - 底 -	A にぶい橙良 好	外面頸部上端横撫で。内面頸部強撫で。体部内面撫で。7・8 と同一の可能性あり。
第66図 PL.40	9	土師器 甕	貯蔵穴床直、カマ ド 1/2	□ - 底 -	A にぶい黄良 好	体部外面撫で、部分的に磨削りに近い状態。体部内面撫で、 体部内上位撫で。7・8と同一の可能性あり。
第66図 PL.40	10	土師器 甕	貯蔵穴-38、掘り 方 下部	□ - 底 7.9	A にぶい黄橙 良好	底径小さいが体部径は大きい。外面磨削り又は撫で。内面磨 き剥離。
第66図 PL.40	11	土師器 甕	貯蔵穴、カマド 上半部	□(14.8) 底 -	A にぶい黄橙 良好	口縁部横撫で。体部内外面刷毛目(内外面:1cm6条)。内面接 合部明瞭に残る。体部外面下半半部。
第66図 PL.41	12	土師器 甕	貯蔵穴-45 完形	□ 16.0 底 5.5 高 32.5	B にぶい黄橙 良好	口縁部横撫で。体部外面上位刷毛目に近い撫で。体部中位以下 撫で、後下位のみ磨きに近い撫で。底部外面周縁高台状をなす。 内面撫で。
第66図 PL.41	13	土師器 小型甕	貯蔵穴-26 完形	□ 14.7 底 4.5 高 9.9	A 橙 良好	口縁部外方に折り返し、内外を指押さへ。内面刷毛目(1cm3条)。 体部外上位刷毛目(1cm4条)。下位撫で。底部焼成前に直径2.5 cm前後の穿孔。
第67図 PL.41	14	土師器 甕	貯蔵穴-10・-32 はぼ形	□ 23.4 底 8.1 高 25.4	A' 橙 良好	体部外面撫で口縁部下まで撫すが、上半は単位不明。ごく一 部に接合痕残る。口縁部横撫で。内面磨き。内面は部分的 に接合痕残る。
第66図 PL.41	15	土師器 甕	カマド・袖床直～ 8 下半部	□ - 底 8.3	A 橙 良好	内面磨き。外面不明瞭な刷毛目。底部焼成前に孔部を作り、 周囲を磨削りで仕上げる。

5号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第69図 PL.41	1	須恵器 蓋	カマド・4住掘乱 1/4	□ - 底 -	D 灰黄 還元焼	口縁部内面低いかえり。天井部外面輪状つまみ取り付け。右回 転軸調整。
第69図 PL.41	2	灰輪陶器 塊	貯蔵穴14 1/3	□(14.8) 底 -	緻密 灰白 良好	口縁部緩く外反。口縁部から体部内外面磨削。
第69図 PL.41	3	須恵器 煎餅	南西隅・東部床直 胴部片	□ - 底 -	D 褐灰 還元焼	体部外面中位浅い円縁部さすが、磨削りにより消失する箇所が ある。体部外面下半半部。体部内面下半半部縦目顯著。

6号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第71図 PL.41	1	土師器か 塊	埋没上 2/3	□ - 底 -	A 灰褐 酸化焼	断面橙色。内面磨き。内面黒色処理。高台内夾雑物目立ち。 底部を回転台か轆轤から離した際に生じたと思われる粘土の盛り 上がりがある。
第71図 PL.41	2	須恵器 塊	カマド掘り方 1/2	□ - 底(8.6)	B 浅黄 酸化焼	貼付高台。右回転軸調整。
第71図 PL.41	3	灰輪陶器 皿	埋没上 1/5	□(13.9) 底 -	緻密 灰白 良好	口縁部緩く外反。口縁部から体部内外面磨削。輪薄く、全面白濁。 洗灰掛け。
第71図 PL.41	4	土釜	1坑埋没上 口縁部片	□(20.2) 底 -	須恵 B 黒褐 良 好	口縁部横撫で。体部外面磨削り。体部内面撫で。口縁部外面粘 土接合痕残る。
第71図 PL.41	5	須恵器 羽釜	南東隅床直 1/2	□(11.0) 底 -	B 黒褐 酸化焼	口縁部端部付近小さく外反。口縁部横撫で。胴下部以外磨削り。 体部内面撫で。磨削り付け。胴下部の一部に型型直残る。
第71図 PL.41	6	須恵器 羽釜	南東隅・壁際床直 1/3	□(16.0) 底 -	C 黒褐 酸化焼	内外面上半半部縦目残る。体部外面下半半部磨削り。体部外面上位型 型直残る。体部内面下半半部接合痕顯著。
第71図 PL.41	7	須恵器 羽釜	埋没上 1/4	□(20.0) 底 -	B にぶい黄橙 酸化焼	口縁部端部窪み。磨削り付け。轆轤調整。外面接合痕残る。

遺物観察表

7号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
773図 PL.42	1	須恵器 埴か	カマド、掘り方 1/4	口(12.0) 底—	B にふい黄橙 酸化焼	口縁部小さく外反。右回転軸調整。残存部口縁水平で潤滑したが、因り浅い可能性ある。外面軸輪目顕著。
773図 PL.42	2	灰釉陶器 埴か皿	掘り方埋没上 1/5	口— 底(6.8)	緻密 灰白 良好	高台外面丸みを著し端部尖り気味。
773図 PL.42	3	須恵器 羽釜か	カマド床直・5 体部下位—底部	口— 底 7.5	B 灰黄褐 酸化 焼	外面澁削り。砂底。内面凹型所れる。

8号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
775図 PL.42	1	須恵器 埴	南東隅床直 ほぼ完形	口 12.5 底 5.0 高 3.6	A 灰白 還元焼	口縁部外反。底部右回転軸系無調整。径約7mmの踵少量含む。
775図 PL.42	2	須恵器 埴	P1床直 ほぼ完形	口 11.2 底 5.7 高 3.7	A 黒褐 酸化焼	口縁部器壁厚。底部器壁薄く、製作時に生じたと考えられる底部のヒビが貫通する。底部左回転軸系無調整。底部内面螺旋状軸輪目。
775図 PL.42	3	須恵器 埴	埋没上、カマド掘り 方 1/4	口(11.8) 底(5.9) 高 3.8	A 明褐 酸化焼	口縁部小さく外反。底部右回転軸系無調整。
775図 PL.42	4	須恵器 埴	南東部床直 完形	口 12.7 底 7.3 高 5.7	B にふい黄橙 酸化焼	やや高い高台貼り付ける。底部内面螺旋状軸輪目。製作時に生じたと考えられる底部の大きなヒビが貫通する。高台内中央回転軸系切取残存。
775図 PL.42	5	須恵器 埴	カマド床直、埋 没上 1/2	口(12.0) 底 7.4 高 4.75—5.3	B 浅黄 酸化焼	やや高い高台貼り付ける。底部内面螺旋状軸輪目。高台内中央回転軸系切取残存。
775図 PL.42	6	須恵器 埴	埋没上、1坑 1/2	口(12.3) 底(6.1) 高 4.8	A 灰黄 還元焼	器高高く、口縁部外反。右回転軸調整。貼付高台。高台内中央回転軸系切取残存。底部内面中央盛り上がる。
775図 PL.42	7	須恵器 埴	カマド 5 1/3	口(12.3) 底 7.2 高 5.1	B 灰黄 還元焼	やや高い高台貼り付ける。左回転軸調整。底部内面螺旋状軸輪目。高台内中央回転軸系切取残存。
775図 PL.42	8	須恵器 埴	埋没上、掘戻 1/4	口(12.4) 底(7.6) 高 5.0	B 浅黄 還元焼	やや高い高台貼り付ける。左回転軸調整。底部内面螺旋状軸輪目。高台内中央回転軸系切取残存。
775図 PL.42	9	須恵器 埴	南東隅10 4/5(高台欠損)	口 11.9 底—	B 灰 還元焼	左回転軸調整。高台欠損。高台内中央回転軸系切取残存。
776図 PL.42	10	須恵器 高台	カマド床直 高台	口— 底 9.5	A 灰黄 還元焼	左回転軸調整。埴部との接合部に稜線。
776図 PL.42	11	須恵器 高台	カマド8・3坑5 高台	口— 底 11.5	A 灰白 還元焼	径7mm程の踵少量含む。右回転軸調整。
776図 PL.42	12	須恵器 瓶 胴部片	2坑埋没上 胴部片	口— 底—	A 黄灰 還元焼	外面肩部凸帯貼付。
776図 PL.42	13	須恵器 羽釜	カマド床直、1坑 口縁部—体部1/4	口— 底—	B 明赤褐 酸化 焼	口縁部凹線状に窪む。体部外面下位斜位澁削り。体部内面螺旋状軸輪目。
776図 PL.42	14	須恵器 羽釜	カマド床直・8 1/4	口(20.8) 底—	D にふい橙 酸 化焼	口縁部内傾し、端部ほぼ平坦。内外面軸輪目顕著で、外面下位澁削り。体部外面型削れ接合痕僅かに残る。
776図 PL.42	15	須恵器 羽釜	カマド6—12 1/4	口(19.8) 底—	C 浅黄 酸化焼	口縁部内傾し、端部外方に引き出す。体部内外面軸輪目。体部外面下位澁削り。
776図 PL.42	16	須恵器 羽釜	カマド床直、3坑 14 1/4	口(21.9) 底—	D にふい黄橙 還元焼	口縁部短く、端部平坦で外方に引き出す。内外面軸輪目顕著。内外面接合痕残存。
776図 PL.42	17	須恵器 羽釜	カマド11、1・2 坑 1/5	口(20.5) 底—	D 橙 酸化焼	口縁部内傾して肥厚。端部凹線状に窪む。体部内外面軸輪目顕著。体部外面下位澁削り。
776図 PL.42	18	須恵器 羽釜	3坑6・1・2坑 カマド 1/6	口(21.0) 底—	A 橙 酸化焼	口縁部凹線状に窪む。跨削り付け。口縁部外面と内面口縁部に接合痕残存。体部外面澁削り。
776図 PL.42	19	須恵器 羽釜	2土坑埋没上 体部小片	口— 底—	B にふい黄橙 酸化焼	内外面軸輪目。外面焼成前の記号か。
776図 PL.42	20	土製品 土鉢	埋没上	長 3.9 幅 1.4 厚 1.4 孔 0.3	A 灰黄褐 良好	小口を含め器表は磨かれ、光沢を有する。焼成後に「吉」の刻書。重さ7.5g。

9号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
778図 PL.43	1	須恵器 埴	中央部床直 完形	口 13.6 底 6.0 高 4.2	B 浅黄 酸化焼	口縁部肥厚し、端部外反。底部右回転軸系無調整。底部内面螺旋状軸輪目。
778図 PL.43	2	須恵器 埴	埋没上 口縁部小片	口(12.6) 底—	B にふい黄橙 酸化焼	口縁部外反。口縁部歪み、傾き不明瞭。
778図 PL.43	3	須恵器 埴	埋没上 下半部	口— 底 5.4	B にふい橙 酸 化焼	内面黒色処理。底部右回転軸系無調整。
778図 PL.43	4	須恵器 埴	1坑埋没上 体部 下位以下—底部	口— 底 5.0	B にふい黄橙 酸化焼	底部右回転軸系無調整。底部内面螺旋状軸輪目。
778図 PL.43	5	須恵器 埴	掘り方 1/6	口(12.8) 底—	B にふい黄橙 酸化焼	外面軸輪目顕著。右回転軸調整。6と同一個体の可能性がある。
778図 PL.43	6	須恵器 埴	掘り方 口縁部片	口(12.8) 底—	B にふい橙 酸 化焼	外面軸輪目顕著。右回転軸調整。外面黒書があるが、残存が一部のため判読不可能。5と同一個体の可能性がある。
779図 PL.43	7	須恵器 埴	埋没上 口縁部小片	口— 底—	B にふい黄橙 酸化焼	外面黒書。
779図 PL.43	8	灰釉陶器 皿	埋没上 1/5	口— 底(7.0)	緻密 灰白 良好	体部内面塗輪。体部外面澁削り。
779図 PL.43	9	須恵器 羽釜	埋没上、カマド 1/5	口— 底 6.4	C 灰黄 酸化焼	外面澁削り。砂底。内面軸輪目。

10号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
79回 PL.43	1	須臾器 環か	埋没上 1/5	□(11.0) 底—	B 灰黄 還元焼	器壁やや厚い。外面輪幅目立立つ。
79回 PL.43	2	須臾器 環か	埋没上、掘り方 口縁部片	□(14.3) 底—	B にぶい黄橙 酸化焼	内面磨き着き。内面黒色処理。胎土緻密。
79回 PL.43	3	須臾器 瓶類	掘見 口縁部片	□— 底—	D 褐灰 還元焼	酸化焼に近く、焼き締まりない。

11号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
81回 PL.43	1	土師器 埴	1坑北東隅床直 ほぼ完全形	□ 12.9 底 6.6 高 5.3	A にぶい黄褐 良好	口縁部部外反。体部内面中位から口縁部外面横撫で。体部外面直削り。外面口縁部下型彫痕残。底部平坦で砂付着。底部内面下平らな撫でか。焼成後、底部を内側から加撃して穿孔する。
81回 PL.43	2	須臾器 環	埋没上 1/2	□(10.8) 底(6.2) 高 3.3	B 淡黄 酸化焼	底部器壁盛り上がる。底部右回転系切痕調整。
81回 PL.43	3	須臾器 埴	北西部床直、埋没 土 3/4	□(11.6) 底(6.8) 高 5.7	B 淡黄 酸化焼	高台高く、体部下位が張る。器高が低いわりに径が大きい。右回転系輪幅調整。口縁部部外面、部分的に凹線状に部む。
81回 PL.43	4	須臾器 埴	埋没上、上層 体部片	□— 底—	B 浅黄 酸化焼	下位器壁厚い。輪幅調整で回転方向不明。輪幅目水平で焼きを推定したが、実際は体部がもう少し開く可能性高い。内面黒色処理。内面磨き着き。
81回 PL.43	5	須臾器 皿	埋没上、上層 1/4	□— 底—	B 浅黄 酸化焼	底部器壁厚い。輪幅調整で回転方向不明。内面黒色処理で磨き着き。底部回転系切痕後高台取り付着。高台内系切痕僅かに残る。高台貼付部で欠損。
81回 PL.43	6	須臾器 羽釜	南西隅7 1/3	□(21.6) 底—	B 灰白 還元焼	焼き締まりない。口縁部内面から体部外面上位回転横撫で。体部内面磨き着き。体部外面型彫痕残り。中位以下顕著に残る。
81回 PL.43	7	須臾器 羽釜	カマ下内床直・10 1/4	□(19.0) 底—	D 橙 酸化焼	口縁部内傾しながら外反し、端部肥厚。内外面輪幅目残る。跨取り付丁寧。
81回 PL.43	8	須臾器 羽釜	中央部床直 1/8	□(23.0) 底—	D にぶい橙 酸化焼	口縁部内傾しながら内傾。口縁部部上面は畳で撫でたように平坦。跨り薄く、取り付は丁寧。内外面回転横撫で。体部外面型彫痕残る。口縁部部み及あり推定径は不正確。

13号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
84回 PL.44	1	土師器 甕	埋没上 口縁部片	□— 底—	A 橙 良好	断面灰白色。胎土緻密で焼成硬質。器表厚みしやすい。口縁部横撫で。体部外面横位の段削りで、削り痕が鋭い痕跡をなす。

14号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
85回 PL.44	1	須臾器 埴	西部.5・10 1/2	□(13.2) 底(6.6) 高 4.9	B 灰白 還元焼	口縁部部外反。底部内面窪み、外面突出する。貼付高台。高台内右回転系切痕残る。
85回 PL.44	2	須臾器 環か	東部壁際床直 1/3	□(13.4) 底—	B にぶい黄橙 還元焼	口縁部部外反。輪幅回転方向不明。外面器表黒色物薄く付着。
85回 PL.44	3	土師器 費か	北西隅床直～10.5 口縁部片	□— 底—	C 黒濁 やや不 良	器壁厚いわりに径小さい。外面上位横撫で、下位段削り。内面上位部横撫で。内面中位以下器表厚減。

15号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
87回 PL.44	1	須臾器 埴	P 2北15.5 1/4	□(14.8) 底—	C 灰黄 還元焼	口縁部部外反。口縁部部みあり。実測より口径小さい可能性高い。内面磨き一部残るが、欠損部多く判読不可能。
87回 PL.44	2	須臾器 埴	南部壁際床直 下部部	□— 底 6.5	C 褐灰 還元焼	貼付高台。高台端部稜状と頸部稜状が明確につく。高台内底部回転系切痕残る。底部内面同心円状横撫で。

16号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
90回 PL.44	1	土師器 埴	カマ下8・2坑一 10・7.5 1/2	□(14.1) 底—	A 橙 良好	口縁部部外反。内面体部中位から口縁部外面横撫で。体部外面横位段削りだが、単位不明。貼付高台割縁。高台内砂付着。体部外面下位から底部外面還元気味で灰色。
90回 PL.44	2	須臾器 環	2坑一10.5、1坑 ほぼ完全形	□ 10.4 底 4.8 高 3.0	A 橙 酸化焼	外面口縁部下の輪幅目強く、口縁部部外反。底部右回転系切痕調整。
90回 PL.44	3	須臾器 埴	4坑床直 ほぼ完全形	□ 11.6 底 6.3 高 5.4	A 橙 酸化焼	口縁部内面鋭い稜をなして外反。底部内面輪幅目螺旋状。右回転系輪幅調整。高台貼付。
90回 PL.44	4	須臾器 埴	カマ下床直 4/5	□ 14.3 底—	A にぶい黄橙 酸化焼	口縁部部外反。内面から口縁部外面磨き着き。底部外面から高台割れ口の一部と口縁部内面に黒色物付着。貼付高台欠損。輪幅左回転の可能性高い。
90回 PL.44	5	須臾器 埴	南西部17.5 1/6	□(14.6) 底—	A にぶい黄 橙 酸化焼	器部張り。体部直線的に開く。内面磨き着きで黒色処理。貼付高台。口縁部外面非常に丁寧に回転横撫で。
90回 PL.44	6	灰輪陶器 埴	管線穴床直。2坑 一11、カマ下床直 口縁部1/3欠損	□ 17.6 底 7.5 高 6.3	緻密 灰白 良好	口縁部やややむむ。口縁部内面僅かに窪む。残存部2カ所輪花。総数は4カ所か。口縁部のみ灰輪液掛け。内面は重ねねむ時の高台まで自然釉痕状にかかると。
90回 PL.44	7	緑輪陶器 皿	1坑埋没上 口縁部片	□— 底—	緻密 淡黄 良好	口縁部鋭く内湾し外面小さく窪む。胎土軟質。濃緑色の輪幅目多い。

遺物観察表

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第90図 PL.44	8	土師器 小型甕	カマド8.5 ほぼ完成	口11.3 底6.5 高11.9	A 明褐 良好	口縁部横撫で。口縁部外面指圧痕残る。口縁部内面横撫での撫で上げ部残るが、外面には認められない。体部外面段削り。体部外面上位に型肌痕残る。体部内面横撫で、砂底。
第90図 PL.44	9	須恵器 甕	カマド床直、貯蔵 穴床直・6、2坑 -49～14.5、3/4	口(23.4)底11.3 高37.2	A 黄灰 還元焼	口縁部外面浅い凹線2条。体部下位段削り。
第90図 PL.44	10	須恵器 羽釜	2坑-28～10 ほぼ完成	口22.5 底6.4 高25.4	C 視灰 還元焼	歪みあり。口縁部横撫で。体部外面中位以下段削り。体部内面横撫で。底部外面砂圧痕残る。
第91図 PL.44	11	須恵器 羽釜	カマド床直・5、2坑 床直・11、2/3	口23.8 底(7.6) 高26.2	B にぶい黄褐 酸化焼	胴下位以外段削り。口縁部横撫で。体部内面横撫で。内面器衣剥離部分多い。砂底。
第91図 PL.45	12	須恵器 羽釜	北部・中央15.5、カ マド8～16、2坑 -49～床直 1/2	口(20.8) 底 -	C 赤褐 酸化焼	口縁部横撫で。外面胴下まで段削り。体部内面横撫で。接合部で黒色と赤褐色の色違い可瞭。
第91図 PL.44	13	須恵器 羽釜	カマド7 1/3	口 - 底 -	A 褐 酸化焼	右回転軸調整。外面体部下位段削り。体部中位いよむゆる色口縁部分で割られる。

17号住居

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第93図 PL.45	1	土師器 杯	北壁際床直 1/5	口(12.9) 高 -	A 橙 良好	夾雑物少なく焼成硬質。口縁部部外反。底部浅く、外面段削り。器表摩滅。
第93図 PL.45	2	土師器 杯	埋没土 1/4	口(9.6) 高2.5	A にぶい黄褐 良好	口縁部内面横撫で立ち上がる。体部内面中位から口縁部外面横撫で。底部外面段削り。
第93図 PL.45	3	土師器 甕	カマド6 小片	口(20.0) 底 -	A 橙 良好	口縁部横撫で。体部外面段削り。体部内面横撫で。一部刷毛目状。頸部外面器表摩滅。
第93図 PL.45	4	土師器 甕	北壁際床直、カマ ド6・10、南東隅 12.6 体部上平	口 - 底 -	A 橙 良好	口縁部横撫で。体部外面段削り。体部内面横撫で。

18号住居

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第94図 PL.45	1	土師器 小型台付甕	3/4	口(11.9) 底9.7 高14.4	A にぶい黄良 好	体部上位から口縁部下平で内湾し、口縁部上平で直立する。低い台部取り付け。体部外面から台部外面段削り。外面器表剥離。体部内面器表剥離に剥離。
第95図 PL.45	2	須恵器 甕	体部小片	口 - 底 -	A 灰 還元焼	外面平打叩き目。内面同心円状当て具痕。
第95図 PL.45	3	須恵器 瓶類小甕	体部下位小片	口 - 底 -	D 黄灰 還元焼	外面の一部に格子状叩き目。内面下部に自然軸。

22号住居

挿入番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第100図 PL.45	1	土師器 杯	貯蔵穴-24.5 完成	口11.0～12.0 高3.7～4.1	D 橙 良好	かなり歪む。焼成は硬質であるが、器表摩滅。口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面段削り。
第100図 PL.45	2	土師器 杯	貯蔵穴床直 ほぼ完成	口11.1～11.8 高3.6	A 橙 良好	焼成は硬質だが、器表やや摩滅。口縁部外反。口縁部横撫で。底部外面段削り。底部内面丁寧な撫で。
第100図 PL.45	3	土師器 杯	北東隅35 ほぼ完成	口10.6 底 - 高3.9～4.3	B 橙 良好	底部外面器表剥離。口縁部横撫で。底部内面丁寧な撫で。底部外面段削り方向と単位不明。口縁部内面の横撫では段状工具により2段で施され、下段は部分的に塵状を呈する。
第100図 PL.45	4	土師器 杯	埋没土 1/4	口(11.3) 高 -	C 橙 良好	焼成は硬質だが、器表やや摩滅。口縁部部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面段削り。単位と方向不明瞭。
第100図 PL.45	5	土師器 杯	北西隅34 1/5	口11.7 底 - 高 -	A 黒・にぶい黄 橙 良好	器壁やや厚い。底部扁平で口縁部長く延びる。底部内面から口縁部外面横撫で。口縁部中位内面段削りに浅く窪み、下位は緩い段差をなす。底部外面段削り。
第100図 PL.45	6	土師器 杯	埋没土 1/4	口(10.7) 底 - 高4.4	B にぶい黄良 好	内面黒色処理。内面磨き。口縁部外面横撫で、下平の横撫でが強く、浅い凹線をなす。外面体部から底部磨きき丁寧な横撫でにより平滑で、部分的に光沢を有する。
第100図 PL.45	7	土師器 杯	北東隅33・43	口11.7 底 - 高4.1～4.4	D にぶい黄橙 良好	外面器表やや摩滅。口縁部部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面段削り。外面口縁部下位型肌痕残る。
第100図 PL.45	8	土師器 杯	南西部33.5 1/4	口(10.4) 高3.5	D 橙 良好	焼成は硬質だが外面器表摩滅。口縁部部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面段削り。段削り摩滅し単位と方向不明瞭。
第100図 PL.45	9	土師器 杯	南西部36 1/4	口(13.6) 高 -	D 橙 良好	焼成は硬質だが器表摩滅し。内面が著しい。口縁部外面横撫で。底部外面段削り。
第100図 PL.45	10	土師器 杯か	西部37 2/3	口 - 底6.9	B 明赤褐 良好	底部から底部外面段削り。内面横撫で。内面赤色塗彩。
第100図 PL.45	11	土師器 小型丸底甕	中央部36 体部	口 - 底 -	B にぶい橙良 好	口縁部横撫で。体部外面上位刷毛目状の撫で。体部中位横撫で。底部外面段削り。体部内面部分的に接合痕残る。
第100図 PL.45	12	土師器 甕	中央部8 4/5	口 - 底7.7	C にぶい黄橙 良好	口縁部横撫で。体部外面磨きで上位器表剥離。底部外面砂状。内面器表剥離に剥離。
第100図 PL.45	13	土師器 小型甕	中央部7.5 上平部	口(9.6) 底 - 高 -	B 橙 良好	器表やや摩滅。口縁部外反。口縁部横撫で。体部球状をなし、外面横撫で。内面横撫で。夾雑物少なく、胎土緻密。焼成も硬質であるが、器表は摩滅しやすい。

種別番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	法 量	胎土・色調・焼成	形・成調・調整等
第100図 PL.45	14	土師器 長胴壺	カマド床直・5 ほぼ正形	口 21.2 底 4.2 高 38.8	B 明赤褐色 良好	口縁部外反し、外面中に1条の沈線巡る。体部外面隆起。口縁部内面接合痕あり。底部外面葉形明瞭。
第100図 PL.45	15	土師器 長胴壺	カマド床直・16 1/3	口(20.2) 底 —	B にぶい黄褐色 良好	胎土等の夾雑物多い。口縁部開く。内面隆起。口縁部隆起で後横撫でか、体部外面隆起。体部内面隆起。
第100図 PL.45	16	土師器 甕	西部37、貯蔵穴床直、東部14.5 口縁部	口 22.0 底 —	B にぶい黄褐色 良好	胎土等の夾雑物多い。口縁部大きく開く。口縁部横撫で、体部外面隆起。口縁部歪む。
第100図 PL.45	17	土師器 甕	中央部24・39 1/2	口 — 底(7.6)	B 浅黄褐色 良好	外面隆起りだが単位不明。外面の一部に粘土を貼り付けた箇所があるが、欠損のため詳細不明。内面隆起。内面接合明瞭に残る。
第100図 PL.45	18	土師器 甕	中央部9 3/4	口(18.2) 底 8.2	B 明赤褐色 良好	鉢形を呈し、口縁部外反、口縁部横撫で。体部外面隆起り。体部内面隆起で、底部外面隆起り後、外方から穿孔。
第100図 PL.45	19	須恵器 瓶類	中央部35 口縁—肩部	口 10.6 底 —	A 灰 還元焼	口縁部受け口状をなし、端部平坦。肩部の一方は水平に開き、他方は下方に下がる。口縁部の長さに違いがあり、肩部の開きの違いは意図的であろう。口縁部内面から肩部外面隆起りに自然輪かかると。
第100図 PL.45	20	須恵器 瓶類	貯蔵穴50.5 底部	口 — 底 5.0	B 灰白 還元焼	器壁やや厚い。内面輪軸目顯著。底部外面右回転隆起り。底部外面自然輪。
第100図 PL.46	21	土製品 土師	西部床直 完形	長 7.7 幅 2.2 厚 2.1 孔 0.4	A 褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ32.3g
第100図 PL.46	22	土製品 土師	西部床直 完形	長 7.3 幅 2.1 厚 2.0 孔 0.5	A にぶい褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ28.1g
第101図 PL.46	23	土製品 土師	西部床直 完形	長 7.9 幅 2.1 厚 1.9 孔 0.5	A 褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ30.3g
第101図 PL.46	24	土製品 土師	西部床直 完形	長 7.9 幅 2.2 厚 2.0 孔 0.5	A 明赤褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。やや歪む。重さ31.4g
第101図 PL.46	25	土製品 土師	西部床直 完形	長 8.2 幅 2.2 厚 2.1 孔 0.4	A 明赤褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。裏面表摩擦。重さ34.6g
第101図 PL.46	26	土製品 土師	西部床直 完形	長 8.4 幅 2.2 厚 2.1 孔 0.4	A にぶい赤褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ33.7g
第101図 PL.46	27	土製品 土師	西部床直 完形	長 7.7 幅 2.4 厚 2.3 孔 0.4	A 褐色・にぶい褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ38.7g
第101図 PL.46	28	土製品 土師	西部床直 ほぼ正形	長(7.4) 幅 2.2 厚 2.0 孔 0.4	A 暗褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(26.6)g
第101図 PL.46	29	土製品 土師	西部床直・5 ほぼ正形	長(7.2) 幅 2.0 厚 1.8 孔 0.4	A 灰褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(23.8)g
第101図 PL.46	30	土製品 土師	西部床直 ほぼ正形	長(7.8) 幅 2.1 厚 2.0 孔 0.4	A 明赤褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(32.1)g
第101図 PL.46	31	土製品 土師	西部床直 端部欠損	長 — 幅 2.4 厚 2.1 孔 0.4	A にぶい赤褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。端部丸みを帯びる。重さ(35.4)g
第101図 PL.46	32	土製品 土師	西部床直 端部欠損	長 — 幅 2.3 厚 2.1 孔 0.4	A にぶい褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(30.1)g
第101図 PL.46	33	土製品 土師	西部床直 内端欠損	長 — 幅 2.0 厚 1.9 孔 0.4	A にぶい褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(23.0)g
第101図 PL.46	34	土製品 土師	西部床直 3/4	長 — 幅 2.2 厚 2.2 孔 0.4	A 明赤褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(28.0)g
第101図 PL.46	35	土製品 土師	西部床直 1/2	長 — 幅 2.0 厚 2.2 孔 0.4	A 灰褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。裏面表摩擦。重さ(20.3)g
第101図 PL.46	36	土製品 土師	西部床直 1/4	長 — 幅 — 厚 — 孔 0.4	A にぶい褐色 良好	外面隆起。成形時の凹凸残る。重さ(8.2)g

23号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	法 量	胎土・色調・焼成	形・成調・調整等
第103図 PL.46	1	土師器 环	カマド5 完形	口 12.8 底 5.0 ~ 5.6 高 3.4 ~ 3.7	B にぶい黄褐色 良好	体部から口縁部内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。内外面ほぼ同一箇所に撫で上げ部あり。体部外面下半隆起り。体部上半成形成態で凹目立つ。底部外面はほぼ平面で隆起り、残り部分に形明瞭残る。底部内面隆起。
第103図 PL.46	2	土師器 环	南西隅床直 完形	口 11.8 ~ 12.2 底 6.0 高 3.5 ~ 4.1	A 明赤褐色 良好	体部中位外湾し、口縁部内湾して立ち上がる。底部内面周縁から口縁部外面横撫で。底部内面横撫での撫で上げ痕残る。体部外面下半から底部外面隆起り。体部外面上半成形成態の凹凸残る。
第103図 PL.46	3	土師器 环	カマド13 完形	口 12.4 底 5.2 高 3.9 ~ 4.2	B にぶい黄褐色 良好	内面から口縁部外面上半隆起り。口縁部隆起の単位と方向不明。口縁部外面下半横撫で。体部外面から底部外面隆起り。
第103図 PL.46	4	須恵器 环	貯蔵穴床直 1/2	口(12.6) 底 6.0 高 4.1	B にぶい褐色 還元焼	内面黒色処理。体部内湾し、口縁部外反。内面隆起。底部右回転糸切無調整。割れ口を境に黒色部分が分化している。
第103図 PL.46	5	須恵器 环	カマド掘り方 底部	口 — 底(6.0)	D 灰黄褐色 還元焼	内面黒色。底部右回転糸切無調整。
第103図 PL.46	6	須恵器 碗	カマド袖床直 3/4	口(15.2) 底 6.8 高 6.1	D にぶい褐色 還元焼	内面褐色。口縁端部水平に近く外反。右回転輪軸調整。内面下半黒色で内面磨き。高台貼り付け。高台内中央部右回転糸切痕あり。
第104図 PL.46	7	灰輪陶器 碗	貯蔵穴—9.5、カマド床直 1/2	口 15.8 底 7.1 高 4.9	緻密 灰白 良好	口縁部小さく外反。外面体部下位右回転隆起り。口縁部から体部内外面輪軸。高台外面鋭い縁をなし、端部尖る。
第104図 PL.46	8	灰輪陶器 碗	中央部床直 下半部	口 — 底 6.8	緻密 褐色 やや焼成不良	高台外面丸みを有し、端部内面鋭尖る。体部内外面輪軸。

遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土・色調・焼成	形・成調整等
第104図 PL.46	9	須恵器 盤	カマド7・10・22 3/4	口(20.6) 底(10.0) 高 7.2 ~ 8.3	A にぶい 橙良 好	口縁部から体部内面凹撫で、口縁部外面のみ横撫で。口縁部 外面から体部外面上位撫でで、接合部明瞭に残る。体部外面凹 撫で、高台端から高台内面凹撫で。高台貼り付け。
第104図 PL.46	10	須恵器 瓶類か	埋没上 1/6	口 - 底(7.0)	B 灰 還元焰	焼き締まる。外面部は異味を帯び、光沢を有する。内面輪軸 目深い。高台貼り付け。
第104図 PL.46	11	土師器 甕	北部5、埋没上 1/8	口(19.2) 底 -	A にぶい 黄橙 良好	口縁部やや厚く、口縁部横撫でだが、端部・中位・下層強い横 撫で、口縁部外面上位と中位に成形の粗い撫でや接合残る。 体部外面凹撫で。体部内面凹撫で。
第104図 PL.46	12	土師器 甕	カマド22 1/4	口 - 底 -	A にぶい 橙良 好	外面凹撫で。肩部内面凹撫で、体部内面撫で、内面の一部撫で が集中する箇所があり、裨縁の可能性はある。
第104図 PL.46	13	灰釉陶器 瓶	北部床直 体部下位~底部	口 - 底 -	緻密 灰白 良好	外面叩き後回転凹撫で。外面平ら叩き目残る。内面当ての凹 凸残る。内面底部付近自然輪軸か。

24号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土・色調・焼成	形・成調整等
第106図 PL.46	1	土師器 甕	貯蔵穴床直、カマド 口縁部一部体部 1/4	口(13.4) 底 -	A? 橙 良好	口縁部の残存率が低く、径と傾き不正確。内面密な磨ききである が、黒色処理はされない。口縁部外面横撫で。外面口縁部 以下器表摩滅。体部外面上半撫でか、下半は凹撫でだが単位 不明瞭。
第106図 PL.46	2	須恵器 碗	カマド右袖床直 1/4	口(12.8) 底(6.6) 高 6.4	B にぶい 黄橙 酸化焰	体部直線的に開き、口縁部外反。高台貼り付け。高台内底部右 内面斜切刃残る。器表やや横撫で。
第106図 PL.46	3	須恵器 碗	カマド左袖床直 1/4	口(13.8) 底 -	B 浅黄橙 酸化 焰	体部内湾し、口縁部外反、右回転輪軸調整。
第106図 PL.46	4	須恵器 甕	カマド床直 1/5	口(13.0) 底 -	A 橙 酸化焰	体部やや内湾し、口縁部外反。右回転輪軸調整。底部外面斜切 痕僅かに残るが断面と同じ色調であり、高台が削がれている可 能性が高い。
第107図 PL.46	5	須恵器 甕	貯蔵穴床直 1/4	口 - 底 -	A 灰 還元焰	歪み著しく、径の推定不可能。体部下位の同じ箇所内面に指 押さえ痕と指撫で痕集中部があり、裨縁跡と考えられる。
第107図 PL.46	6	灰釉陶器 皿	埋没上 1/5	口(15.0) 底 -	緻密 灰黄 良好	口縁部外反。体部内外面磨滅するが、輪薄く口縁部内面無輪軸 部分がある。
第107図 PL.46	7	灰釉陶器 碗か	埋没上 底部片	口 - 底(7.0)	緻密 灰白 良好	高台やや歪む。高台内右回転斜切刃残る。
第107図 PL.47	8	土師器 甕	カマド床直・6・ 28 1/3	口(20.1) 底 -	B 明赤褐 良好	器壁やや厚く、口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、外面肩 部強い横撫で。体部外面凹撫で。
第107図 PL.46	9	土師器 甕	貯蔵穴床直、カマド 右袖13.6 1/4	口(20.6) 底 - 高 -	A にぶい 赤褐 良好	口縁部「コ」の字状に近く、外面肩部強い横撫で。口縁部横撫で、 口縁部外面上位と中位に横撫での及ばない窪み残り、上位には 型肌痕残る。体部外面凹撫で。体部内面凹撫でか。
第107図 PL.46	10	土師器 甕	カマド床直・6・ 埋没上 1/4	口 - 底 -	A 褐 良好	外面凹撫で。内面撫で、内面指面圧痕状の窪み連続する。
第107図 PL.46	11	土師器 甕	埋没上 底部片	口 - 底(4.8)	A 灰黄褐 良好	外面凹撫で。内面凹撫で。
第107図 PL.46	12	須恵器 羽釜	カマド床直・5・ 7 1/5	口(18.6) 底 -	A 灰黄~橙 酸 化焰	体部から口縁部内湾し、器形シャープ。口縁部肥厚し、上面 やや凹む。外面凹縁状の輪軸目顯著。

25号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土・色調・焼成	形・成調整等
第109図 PL.47	1	須恵器 坏	南東隅7・10 1/2	口 10.0 底 6.4 高 3.1	B にぶい 黄橙 酸化焰	体部から口縁部内湾し、外面輪軸目による窪み目立つ。底部右 内面斜切刃無調整。
第109図 PL.47	2	須恵器 瓶類か	南東隅中央28 体部片	口 - 底 -	C 灰 還元焰	焼き締まる。外面上半掻き目。下半平撃工具による列点文。
第109図 PL.47	3	須恵器 甕	西部床直 体部小片	口 - 底 -	C 暗灰 還元焰	内面灰色。大型の裏体部小片。焼き締まる。外面格子状叩き目。 内面当て具痕。
第109図 PL.47	4	須恵器 甕	南東隅26 体部小片	口 - 底 -	C 灰 還元焰	大型の裏体部小片。焼き締まる。内外面撫で。
第109図 PL.47	5	須恵器 羽釜	南東隅床直・21.6 1/4	口(20.2) 底 -	B にぶい 橙 酸化焰	器壁厚く、体部から口縁部直立気味。罫は低く、雑な貼り付け。 口縁部横撫で。体部外面造り痕明瞭で、接合部が凹む。体部 外面下半平撃り。内面器表摩滅。
第109図 PL.47	6	須恵器 羽釜	南東隅床直・9 ~22 1/4	口(20.4) 底 -	B にぶい 黄橙 酸化焰	口縁部横撫で。罫貼り付け。体部外面凹撫で。体部内面撫で、 体部内面指面圧痕状の窪み連続する。
第109図 PL.47	7	須恵器 羽釜か	中央部床直 体部片	口 - 底 -	B にぶい 黄褐 酸化焰	器壁厚い。外面上半縦位凹撫で。下半斜位凹撫で。内面器表摩滅。 下端接合部で欠損。
第110図 PL.47	8	須恵器 羽釜か	東部埋没5 1/4	口 - 底(8.0)	B にぶい 黄橙 酸化焰	器壁厚い。外面斜位凹撫で。内面器表摩滅。
第110図 PL.47	9	須恵器 甕	南東隅5・7・18・ 19.5、埋没上 1/3	口 - 底(20.8)	B にぶい 黄橙 酸化焰	瓶部直線的に開く。瓶部内面から体部外面下位回転凹撫で。体 部外面下位から肩部面まで、瓶部外面から内面強い横撫で。 瓶部外面には型肌痕と接合部明瞭に残る。
第110図 PL.47	10	須恵器 土釜	南東隅14.5 口縁部~胴部片	口(24.4) 底 -	土師 A にぶい 黄 橙 酸化焰	器壁厚い。口縁部強く外反。口縁部横撫でで、外面下位は靡状 をなさない。体部内面凹撫で。
第110図 PL.47	11	須恵器 土釜	南東隅21.5、埋没上 1/4	口(22.4) 底 -	土師 A にぶい 黄 橙 酸化焰	器壁厚い。口縁部外面で外反。口縁部内面から肩部外面上位 横撫で。口縁部内面撫で上半部残る。外面横位凹撫で後縦位 凹撫で。体部内面幅が狭く強い凹撫で。

26号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第113図 PL.47	1	須恵器 環	南内溝13、中央部33	□ 10.7 底 4.8 高 3.3	D 灰黄・オリ ブ黒 還元焼へ 焼し	口縁部1/2を除き黒色。底部右回転系切無調整。製作時に生じたと考えられる底部のヒビが貫通する。
第113図 PL.47	2	須恵器 環	貯蔵穴ー6 完形	□ 11.2 底 4.3 高 3.9	D 灰 還元焼	口縁部外反。底部右回転系切無調整で、圧痕が付く。底部内面螺旋状轆轤目。製作時に生じたと考えられる底部のヒビが貫通する。
第113図 PL.47	3	須恵器 環	カマド前6 完形	□10.8～11.8 底 5.7 高 3.0～3.8	B 灰白 還元焼	赤み著しい。底部左回転系切無調整。底部内面螺旋状轆轤目。製造時の含有量多し。
第113図 PL.47	4	須恵器 環	カマド15 ほぼ完形	□ 11.0 底 4.6 高 3.9	D 黒褐 還元焼 へ焼し	口縁部1/2を除き黒色。底部右回転系切無調整。底部内面螺旋状轆轤目。
第113図 PL.47	5	須恵器 環	北東部床直 ほぼ完形	□ 10.8 底 4.8 高 3.9	B 灰黄褐 還元 焼へ焼し	底部内面黒色。底部右回転系切無調整。底部内面同心円状轆轤目。
第113図 PL.47	6	須恵器 環	カマドA27 完形	□ 12.4 底 6.0 高 4.3	C にぶい黄橙 酸化焼	口縁部大きく外反。口縁部歪む。底部右回転系切無調整。
第113図 PL.47	7	須恵器 環	カマドA28・29 3/4	□ 10.7 底 4.0 高 3.5	B 灰黄・黒 還 元焼へ焼し	2/3黒色から暗灰色。口縁部外反。底部右回転系切無調整。底部内面螺旋状轆轤目。
第113図 PL.47	8	須恵器 環	カマドA26・27・ 29 1/2	□ 10.8 底(4.2) 高 3.9	B 浅黄 還元焼 へ焼し	残存部1/4黒色。右回転轆轤調整。底部回転系切無調整。
第113図 PL.47	9	須恵器 環	カマドA15・19 1/2	□(11.6) 底(6.0) 高 4.0	B にぶい黄橙 酸化焼	口縁部歪む。器壁厚い。右回転轆轤調整。
第113図 PL.47	10	須恵器 塊	貯蔵穴ー15 完形	□ 12.3 底 7.4 高 5.1～5.5	B 浅黄橙 酸化 焼	器表暗灰色。左回転轆轤調整。高台やや高く、器壁厚め。底部内面螺旋状轆轤目。貼付高台。製作時に生じたと考えられる底部のヒビが貫通する。内外面に黒変あり。
第113図 PL.47	11	須恵器 塊	カマド前9 完形	□ 12.0 底 7.3 高 5.1～5.5	B 浅黄橙 酸化 焼	器表黒褐色部分多い。左回転轆轤調整。高台やや高く、器壁厚め。底部内面螺旋状轆轤目。製作時に生じたと考えられる底部のヒビが貫通する。高台内から内面にかけた黒色物付着するが、範囲不明瞭で部分的に黒斑と区別できない。
第114図 PL.47	12	須恵器 塊	北東部5 完形	□ 12.6 底 7.6 高 5.1～5.4	B 灰白 還元焼	左回転轆轤調整。高台やや高く器壁厚め。体部と口縁部直線的に延びる。底部内面螺旋状轆轤目。高台内中央回転系切無調整。底部外面石畳せ部分にヒビは貫通していない。
第114図 PL.47	13	須恵器 環	貯蔵穴ー10 ほぼ完形	□ 11.7 底 7.2 高 4.6～5.0	B 黄灰 酸化焼	器表の約1/2暗灰色。左回転轆轤調整。高台やや高く、器壁厚め。底部内面螺旋状轆轤目。貼付高台。製作時に生じたと考えられる底部のヒビが貫通する。
第114図 PL.47	14	須恵器 塊	北部床直。埋没上 ほぼ完形	□ 12.6 底 7.3 高 5.0～5.2	D 黄灰 焼し 還元焼	器表、断面1/2強黒色。体部縦く内湾し、口縁部付近小さく外反。右回転轆轤調整。底部内面螺旋状轆轤目。高台貼り付け。高台内中央回転系切無調整。
第114図 PL.47	15	須恵器 塊	西部24.5 3/4	□(12.3) 底 7.8 高 4.9～5.2	B 灰黄 還元焼	左回転轆轤調整。高台やや高く器壁厚め。体部と口縁部直線的に延びる。底部内面螺旋状轆轤目。高台内左回転系切無調整。
第114図 PL.47	16	須恵器 塊	南部5.5 底部	□ ー 底 ー	B にぶい橙 酸化 焼	胎土濃密。右回転轆轤調整。底部内面螺旋状轆轤目。内面黒色処理で良磨き。高台内から回転系切無調整。
第114図 PL.47	17	灰輪陶器 塊	カマドA18.5 2/3	□ ー 底 6.8	緻密 灰白 良好	高台外面丸みを有し、端面内面突り気味。底部内面周縁まで灰輪が斑状にかかるが、降灰によるものと考えられる。高台内右回転系切無調整。
第114図 PL.47	18	灰輪陶器 塊	埋没上 底部小片	□ ー 底(7.7)	緻密 灰白 良好	体部外面下位回転鋭削り。体部内外面無輪。
第114図 PL.48	19	土師器 小型甕	貯蔵穴ー14・ー15、 カマドA17 1/4	□ 13.2 底(6.0) 高 16.0	A' 橙 良好	体部下位器壁厚い。口縁部外反。口縁部内面から根部外面丁寧な横磨し。体部外面上半や中程の横磨しの後、尻削り。体部外面下半削りより輪の扱い粗悪で、体部内面直位無輪。
第114図 PL.48	20	須恵器 羽釜	カマドA14ー33 2/3	□ 20.0 底 ー	C 浅黄 酸化焼	体部上位内湾し、口縁部外湾して立ち上がる。内外面輪轆目顕著で、体部外面下位下位鋭削り。胸もシャープで全体に丁寧な作り。
第114図 PL.48	21	須恵器 羽釜	カマドA14ー32 1/3	□(21.4) 底 ー	C にぶい橙 酸化 焼	体部から口縁部内湾し、口縁部肥厚。内外面輪轆目顕著。体部外面下位鋭削り。
第114図 PL.48	22	須恵器 羽釜	カマドBー27 1/6	□(18.7) 底 ー	B 浅黄橙 酸化 焼	小型甕。胴下位で直削し、口縁部直立気味に立ち上がる。口縁部肥厚し、内面輪をなす。内外面輪轆目顕著。
第114図 PL.48	23	須恵器 羽釜	カマドBー25.5・ 8.5、カマドA 口縁部片	□(21.0) 底 ー	D にぶい橙 酸化 焼	口縁部内湾し、端部肥厚。端部正面凹む。
第114図 PL.48	24	須恵器 羽釜	カマドA14・15 体部下位片	□ ー 底 ー	C 橙 酸化焼	内外面輪轆目顕著。外面下位鋭削り。

27号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第116図 PL.48	1	須恵器 環	南東部14 1/6	□ ー 底(6.6)	B 浅黄 還元焼	轆轤回転方向不明。底部回転系切無調整。体部外面黒変あるが小片のため判断不明。
第116図 PL.48	2	須恵器 環	南東部11 1/4	□(13.2) 底 ー	B 灰黄 還元焼	内面・断面黒褐色。左回転轆轤調整。体部外面「刀」墨色。貼付高台の底部欠陥。器高のわりに径大きい。
第116図 PL.48	3	須恵器 皿	西部床直。28住埋 没上 1/3	□ ー 底(19.4)	B 灰白 還元焼	焼き締まりなく軟質。器表厚。右回転轆轤調整。内面の輪轆目立つ。

遺物観察表

28号住居

検出番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第116図 PL.48	1	須恵器 埴	南東隅-0.5 1/6	□(13.0) 底(6.0) 高 4.9 ~ 5.2	C 灰黄 還元焼	右回転軸轆調整。口縁部の歪み部分に粘土を貼り付けたような痕跡があり、焼成前の補修により歪みを生じた可能性高い。貼付高台。
第116図 PL.48	2	須恵器 埴	南東隅9 1/5	□(14.6) 底 -	D 浅黄 酸化焼	右回転軸轆調整。内面轆目非常に低く、外面轆目やや低い。
第116図 PL.48	3	須恵器 塚か	埋没上 口縁部片	□ - 底 -	B 灰白 還元焼	右回転軸轆調整。内外面同一文字墨書か。
第116図 PL.48	4	土師器 埴	埋没上 1/8	□(19.4) 底 -	A 黄灰 良好	内面黒褐色。口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、外面屈曲面強い横撫で。口縁部内面横撫でで、撫で上げ痕がある。体部外面造削り。
第116図 PL.48	5	須恵器 羽釜	埋没上 体部小片	□ - 底 -	B にぶい黄橙 酸化焼	口縁部内湾。内外面轆目顕著。罅小さく、復元径も小さい。

29号住居

検出番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第119図 PL.48	1	土師器 埴	北東隅6 ほぼ完形	□ 12.8 高 4.1	A 橙 良好	口縁部内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面下位型型痕残る。底部外面造削り。底部内面横撫で。
第119図 PL.48	2	土師器 埴	北西部床直 1/2	□(12.6) 高 3.3	A 橙 良好	器底や外縁、口縁部直立気味。体部内面から口縁部外面横撫で、体部外面造削り。底部外面横撫で。
第119図 PL.48	3	土師器 埴	埋没上、カマド 1/2	□ 13.2 底 - 高 4.2	A 橙 良好	器形やや歪み、口縁部聞き気味の箇所と内湾気味の箇所がある。体部内面から口縁部外面横撫で、口縁部外面の横撫で範囲やや狭く、体部から底部外面造削り。
第118図 PL.48	4	土師器 埴	東部床直、埋没上 3/4	□ 16.6 高 4.0	A 橙 良好	底部から体部内湾して聞き、口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面の造削りにより口縁下に線を作る。
第119図 PL.48	5	土師器 埴	カマド23 1/2	□(16.6) 高 4.1	A 橙 良好	底部から体部内湾して聞き、口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面の造削りにより口縁下に線を作る。
第119図 PL.48	6	土師器 埴	埋没上 1/4	□(17.4) 高 -	A 橙 良好	器壁やや薄い。底部から体部内湾して聞き、口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面の造削りにより口縁下に線を作る。
第119図 PL.48	7	土師器 埴	北東隅6 1/4	□(16.8) 高 -	A 橙 良好	器壁やや薄い。底部から体部内湾して聞き、口縁部外反。体部内面横撫で。他は器表厚減のため不明。
第119図 PL.48	8	土師器 埴	西部中央10、埋没 上1/4	□(16.2) 高 -	A 橙 良好	底部器壁薄い。底部から体部内湾して聞き、口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面の造削りにより口縁下に線を作る。
第119図 PL.48	9	土師器 埴	北西隅床直、カマ ド6 ~ 24.5 2/3	□ 23.5 底 -	D 明赤褐 良好	口縁部外反。口縁部横撫で、体部外面造削り。外面口縁部下造削りによる段差。体部内面横撫で。

30号住居

検出番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第121図 PL.48	1	須恵器 埴	南部中央28 1/5	□(13.2) 底(7.2) 高 3.6	A' 明赤褐色 良好	体部やや内湾し、口縁部外反。内面底部周縁から口縁部外面横撫で、外面口縁部下造削り。接合痕明瞭。体部外面中位以下造削り。底部内面造削り。
第121図 PL.48	2	須恵器 埴	埋没上 1/6	□(13.2) 底(5.2) 高 5.5	B 灰 還元焼	体部直線的に聞き、口縁部やや外反。高台貼り付け。轆轤回転方向不明。体部外面墨書。高七の2文字。
第121図 PL.48	3	須恵器 埴	カマド16.5 下半部	□ - 底(5.8)	C 褐 酸化焼	高台の上とどろ接合部から欠損。高台内右回転糸切痕残る。器壁やや薄く、体部内湾。
第121図 PL.48	4	須恵器 埴	北西部床直 下半部	□ - 底 5.8	A 灰 還元焼	右回転軸轆調整。高台貼り付け。高台内中央回転糸切痕残る。内面轆目なく平滑な曲面。
第121図 PL.48	5	須恵器 埴	中央部15.5 底部	□ - 底 6.8	C 黄灰 還元焼	断面に淡褐色部分があり、還元不十分。高台貼り付け。高台内右回転糸切痕残る。
第121図 PL.48	6	須恵器 皿	南部37.5 1/2	□ - 底(6.2)	C 黄灰 還元焼	内面暗灰色で、器表付近のみ黄灰色。高台貼り付け。高台内右回転糸切痕残る。外面轆轤目顕著。
第121図 PL.48	7	灰陶器 埴	カマド床直 3/4	□ 13.3 底 6.5 高 4.6	緻密 灰白 良好	口縁部小さく外反。内面から高台外面厚く輪縁。
第121図 PL.49	8	灰陶器 埴	中央部38.5 1/2	□ - 底 7.3	緻密 灰白 良好	体部外面回転造削り。内面重ね焼き痕まで灰輪。底部内面と高台端部平滑。
第121図 PL.49	9	土師器 小型罌	中央部床直・6・ 24.5 1/5	□(14.8) 底 -	A にぶい黄橙 良好	口縁部歪む。口縁部器壁厚く、小さく外湾。口縁部横撫でで、外面中位に撫で残し箇所に見合痕残る。体部外面造削り。体部内面上半部造削り、下半部器表厚減。
第121図 PL.49	10	土師器 罌	カマド25、埋没上 1/4	□(19.4) 底 -	A にぶい黄良 好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で。外面屈曲面強い横撫で、口縁部外面中位接合部が型肌痕残る。体部内面造削り。
第121図 PL.49	11	土師器 罌	東部15.5、埋没上 底部片	□ - 底(4.2)	A にぶい黄良 好	内面造削り。底部内面刷毛目(1cm内6条)。
第121図 PL.49	12	須恵器 羽釜	中央部9、埋没上 底部片	□ - 底(7.8)	D 灰 還元焼	内面暗灰色。外面底部付近造削り。内面撫で。体部内面上部指撫で、底部外面造削り若しくは指撫で。

31号住居

検出番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第122図 PL.49	1	須恵器 埴	カマド前床直 1/4	□(12.5) 底(5.2) 高 4.1	A 灰 還元焼	口縁部小さく外反。底部右回転糸切無調整。

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第122図 PL.49	2	須恵器 環	貯蔵六床直 1/3	口 一 底 6.0	D 灰オリーブ 還元焰	器壁やや薄い。底部右回転系切無調整。底部内面縦状輪軸目。
第122図 PL.49	3	須恵器 埴	貯蔵六床直・一 28 3/4	口 14.8 底 6.0 高 5.1	C 灰黄 酸化焰	口縁部小さく外反。右回転軸調整。薄くやや小さい高台貼り付け。高台内回転系切直残。器表厚残。
第122図 PL.49	4	須恵器 埴	北東隅21・カマド 17.5 3/4	口 14.3 底 6.1 高 5.1	C 赤黒～黒褐 酸化焰	体部下位内湾し、口縁部直視の間に、口縁端部肥厚。高台貼り付け。高台内右回転系切直残。接合部で色調異なり、破損後に被熱する。
第122図 PL.49	5	須恵器 埴	貯蔵六床直 口縁1/3、底部はぼ 完形	口(15.2) 底 6.7 高 4.9	C にぶい黄褐色 ～褐灰 還元焰か 横し	残存部2/3暗灰色から黒色。口縁部外反。高台貼り付け。高台内右回転系切直残。
第122図 PL.49	6	灰釉陶器 埴	埋没上 1/3	口 一 底(8.0)	緻密 灰白 良好	高台外面丸みを持つ。高台端部と底部内面平滑。
第122図 PL.49	7	土師器 台付埴	カマド床直・7・ 8 口縁1/5、体部 はぼ完形	口 12.6 底 一	B にぶい橙 良	口縁部縦い「コ」の字状。口縁部横撫で、体部外面削り。体部外面下端、台貼り付け時の横撫で。内面横撫でか。台部欠損。
第122図 PL.49	8	土師器 埴	貯蔵六～12・周辺 床直、南部床直 1/2	口 18.8 底 一	B 橙～黒褐 良 好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、外面中位の横撫で弱く、接合痕明瞭に残る。体部外面削り。体部内面上半横撫で。下半横撫で。
第122図 PL.49	9	土師器 埴	南部床直、埋没上 1/3	口 17.7 底 一	D 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、端部外面、上位外面、下位外面強い横撫で。口縁部内面中位、成形時の指頭圧痕強い窪みが深。
第122図 PL.49	10	土師器 埴	貯蔵六11 口縁部一床部片	口(21.5) 底 一	A 橙 良好	口縁部外反するが、外面上位に強い横撫で。強い横撫で上に接合痕。下に成形時の凹凸が残り、いわゆる「コ」の字状口縁の特徴を有する。

33号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第124図 PL.49	1	土師器 環か	埋没上 1/2	口 一 底(7.0)	A にぶい赤褐 良好	体部外面削り。底部内面丁字状無調整。底部外面砂大量に付着。
第124図 PL.49	2	須恵器 環	カマド右袖19 1/2	口(10.6) 底 6.0 高 3.6	B 黒、にぶい黄 褐色 還元焰～横し	器表黒色部分多い。体部から口縁部直視の間に、右回転軸調整。底部内面縦状輪軸目。底部右回転系切無調整。
第124図 PL.49	3	須恵器 埴	南東隅13 底部片	口 一 底(8.0)	A にぶい黄褐 酸化焰	内面黒色処理で艶つき。底部右回転系切無調整。
第125図 PL.49	4	須恵器 埴	カマド外一17.5 1/4	口(14.8) 底(6.0) 高 5.0	C にぶい黄 還 元焰	体部から口縁部直視の間に、器表厚残。貼付高台。軸部回転方向不明。
第125図 PL.49	5	須恵器 埴	西部8、埋没上 1/2	口(12.0) 底 一	B 灰黄褐 還元 焰	口縁のわりに器高低い器壁厚い。右回転軸調整。高台内全面削り。切り筋不注法不明。
第125図 PL.49	6	須恵器 埴	埋没上 1/4	口(16.4) 底 一	B 灰白 還元焰	焼き締まりなく軟弱。口縁のわりに器高低い。口縁部外反。右回転軸調整。貼付高台下欠損。
第125図 PL.49	7	須恵器 埴	南西隅15 1/4	口(14.8) 底 一	B にぶい黄褐 酸 化焰	右回転軸調整。体部内湾し口縁部外反。外面体部下端高台貼り付け時の回転軸で認められる。
第125図 PL.49	8	須恵器 埴	カマド前10 1/5	口(11.0) 底 一	B 浅黄橙 酸化 焰	体部内湾し、口縁部横撫でで小さく外反。高台貼り付け時の回転軸で認められ、高台が存したと考えられる。軸部回転方向不明。口縁端部に縦か曲線が厚く付着。
第125図 PL.49	9	須恵器 埴	北東隅7.5、南西隅 24 1/3	口 一 底(6.6)	B にぶい橙 酸 化焰	体部下端張り、やや大型の埴。内面艶つきを行うが、黒色処理は施していない。艶つき単位一部不明。軸部回転方向不明。
第125図 PL.49	10	灰釉陶器 口縁部片	カマド前床直 口縁部片	口(14.8) 底 一	緻密 灰白 良好	残存部が弱く、推定径が小さい可能性高い。残存部輪花1カ所。体部外面下位回転削り。
第125図 PL.49	11	灰釉陶器 埴	埋没上 1/5	口 一 底(7.0)	緻密 灰白 良好	高台内側上部抉れ、縁をなす。底部内面と高台端部平滑。
第125図 PL.49	12	須恵器 羽釜	南西隅14.5・16 口縁部一床部片	口(20.4) 底 一	C にぶい黄橙 酸化焰	胴部分で内湾し、口縁部外反。内外面輪軸目顕著で、残存部に酸化焰認められる。
第125図 PL.49	13	須恵器 羽釜	中央部一5.5 口縁部一床部片	口 一 底 一	B にぶい黄 酸 化焰	口縁部横撫で、両面貼り付け。体部外面薄な横位削り。口縁部内面指頭圧痕あり。
第125図 PL.49	14	須恵器 羽釜	南西隅18.5 口縁部片	口(21.8) 底 一	C 橙 酸化焰	体部から口縁部内湾。口縁部器具による凹凸があるがほぼ平直。内外面輪軸目あり。残存部削り認められる。
第125図 PL.49	15	灰釉陶器 埴	南西隅21 1/5	口(21.5) 底 一	緻密 灰白 良好	口縁部部や立ち上げる。端部外面凹線状に覆く窪ませる。口縁部内面輪軸目。45号住居13と同一体の可能性高い。

34号住居

神回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第125図 PL.49	1	土師器 環	カマド前床直 1/2	口(12.7) 底 6.6 高 4.0	D にぶい橙 良 好	口縁部内面下位凹みだ後に外反。体部内面から口縁部外面横撫で。体部外面から底部外面削り。
第125図 PL.49	2	土師器 環	埋没上 口縁部一床部片	口(13.7) 高 一	B 明赤褐 良好	口縁部下で屈曲し、口縁部小さく外反。口縁部横撫で。体部内面横撫で。外面口縁部下横撫で。外面下位から底部外面削り。
第125図 PL.49	3	土師器 埴	カマド前一8 1/3	口(13.8) 底 一	A にぶい黄橙 良好	口縁部端小さく外反。内面艶つきで黒色処理。体部外面削り。
第125図 PL.49	4	須恵器 環	東部16 1/3	口 一 底(6.0)	B にぶい橙 酸 化焰	右回転軸調整。底部外面器表やや厚残。底部回転系切無調整。
第125図 PL.49	5	灰釉陶器 皿	中央部一11 1/2	口(14.6) 底 6.4 高 2.4	緻密 灰白 良好	体部直視的に凹く。高台外面丸みを受ける。内面から口縁部外面施釉。内面の釉は厚い。体部外面中位以下回転削り。
第125図 PL.49	6	灰釉陶器 埴	埋没上 底部片	口 一 底(8.0)	緻密 にぶい黄 褐色不良	体部内面施釉。底部内面と高台端部平滑。

遺物観察表

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第125図 PL.49	7	須恵器 壺か瓶類	南東部6 体部小片	口一底一	C 灰 還元焼	焼き締まる。外面回転横撫で。内面撫で。

35号住居

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第128図 PL.50	1	須恵器 壺	埋没上. 37埋没上 口縁~底部片	口一底一	B 灰白 還元焼	口縁部外反。右回転縦横調整。高台貼り付け。高台内回転系切痕残る。内面漆付着。
第128図 PL.50	2	須恵器 壺	埋没上 底部1/4	口一底(6.7)	A 灰黄 還元焼	右回転縦横調整。体部内湾。高台の貼り付けやや雑で高台も変形する。高台内回転系切痕残る。
第128図 PL.50	3	須恵器 壺	埋没上 底部片	口一底(6.1)	C 灰白 還元焼	右回転縦横調整。器壁薄く、高台も小さい。貼付高台。高台内回転系切痕残る。
第128図 PL.50	4	須恵器 皿	埋没上 1/8	口(13.0) 底一	A 灰白 還元焼	全体に薄くシャープな作りだが焼き締まりはない。縦横目も密で凹凸は明瞭。口縁部内面はぼ平坦に開き。端部尖り気味。
第128図 PL.50	5	灰釉陶器 皿	埋没上 口縁部小片	口(13.7) 底一	緻密 灰白 良好	口縁部部外反。内外面施釉で。内面の釉厚い。
第128図 PL.50	6	灰釉陶器 皿か	埋没上 1/5	口一底(8.0)	緻密 灰白 良好	体部内面施釉。高台端部やや尖り気味。
第128図 PL.50	7	土師器 小型壺	埋没上 口縁部1/5	口(9.8) 底一	B 黒褐 良好	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面磨削り。体部内面刷毛目(1cm以下条)。
第128図 PL.50	8	土師器 壺	カマド18.5~32 口縁部1/2	口(19.0) 底一	B にぶい 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で。口縁部外面屈曲部強い横撫で。口縁部外面接合痕残る。体部外面磨削り。肩部内面刷毛目。体部内面施撫で。
第128図 PL.50	9	須恵器 壺か	埋没上 台端部片	口一底(17.6)	A 浅黄 還元焼	裾端部外面凹線部。端部内面やや凹む。

36号住居

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第128図 PL.50	1	土師器 環か	カマド前床直 口縁部1/5	口(13.6) 高一	A 灰黄褐 良好	内面から口縁部外面横撫で。外面口縁部下撫で。体部外面、残存部僅かでは不明瞭だが施撫で。
第128図 PL.50	2	須恵器 壺	南部床直 底部2/3	口一底(5.8)	B 灰黄褐 還元焼	器表暗灰色。底部右回転系切調整。底部内面縦線状縦横目。胎土に條の含有多。
第128図 PL.50	3	須恵器 壺	カマド前床直。35 埋没上 3/4	口 13.8 底 6.3~6.8 高 4.5~4.8	D 黄灰 還元焼	口縁部外反。高台の貼付雑で形状歪む。また、粘土組が足りず、3mm程度凹が生じている。右回転縦横調整。高台内回転系切痕残る。
第128図 PL.50	4	須恵器 壺	南部床直12.5 底部	口一底 6.4~7.0	C 黄灰 還元焼	高台の貼り付け雑で、高台や底部の歪み著しい。高台内底部右回転系切痕残る。焼き締まりなく軟質で器表厚撫で。
第128図 PL.50	5	須恵器 壺	南部20 1/2	口一底 6.2	D 浅黄 還元焼	体部器壁やや厚い。右回転縦横調整。高台貼り付け。高台内右回転系切痕残る。
第128図 PL.50	6	須恵器 壺か	南部1 口縁部1/6	口(14.4) 底一	C 黄灰 還元焼	口縁部外反。焼き締まりなく軟質。器表厚撫。縦横回転方向不明。
第128図 PL.50	7	灰釉陶器 壺	東部3.5 底部2/3	口一底 6.6	緻密 黄灰 良好	体部内面の釉は自然釉の重ね焼き直で、施釉範囲ではない可能性高い。高台外面縦い線をなし。端部やや尖り気味。
第128図 PL.50	8	土師器 壺	カマド6・15.5 口縁部~体部1/5	口(19.4) 底一	A にぶい 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で。口縁部外面屈曲部強い横撫で。体部外面磨削り。磨削りは幅広くやや雑。体部内面施撫で。体部内面下部表厚撫。
第128図 PL.50	9	土師器 壺	カマド16・H.貯蔵六 口縁部~体部1/8	口(20.6) 底一	A にぶい 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で。口縁部外面屈曲部強い横撫で。体部内面磨削り。磨削りは幅広く、やや丁寧。体部内面施撫で。体部内面下部器表厚撫。残存部にねじれるような歪みあり。体部形状不正確。
第128図 PL.50	10	土師器 壺	北西隅16.5 1/6	口(18.8) 底一	A 明褐 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で。外面屈曲部強い横撫で。体部外面磨削り。体部内面施撫で。
第128図 PL.50	11	土製品 土師 ほぼ丸形	南西隅18.5 ほぼ1.9	長(5.6) 幅 0.7 厚 0.6 孔 0.4	B 褐 良好	器身のわりに孔径大きい。器表光沢があり、磨かれている可能性高い。重さ1.9g

37号住居

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第130図 PL.50	1	土師器 環か	埋没上 1/6	口(13.5) 高一	A 明赤褐 良好	内面器表厚撫。口縁部外面横撫で。体部外面型凹痕残る。
第130図 PL.50	2	須恵器 壺	カマド前左床直 完形	口 14.0~14.5 底 6.9 高 3.9~4.4	A 灰 還元焼	焼き締まり硬質。口縁部歪む。体部内湾して広がり。口縁部外反。端部やや肥厚。右回転縦横調整。高台貼り付け。高台内中央回転系切痕残る。底部内面使用による擦れて平滑となる。高台端部やや厚撫。
第130図 PL.50	3	須恵器 壺	南東部床直。埋没上 1/2	口(12.8) 底 6.8~7.2 高 5.9	C 灰 還元焼	体部深く。口縁部外反。右回転縦横調整。高台貼り付け。高台内右回転系切痕残る。
第130図 PL.50	4	須恵器 壺	南東部床直。埋没上 1/4	口(14.0) 底(5.7) 高 4.9	D 浅黄 還元焼	器壁やや厚い。右回転縦横調整。体部中位内湾し。口縁部外反。体部外面黒垢。高台貼り付け。
第130図 PL.50	5	須恵器 壺か	埋没上 1/5	口(14.8) 底一	D にぶい 褐 還元焼	底部器壁やや厚い。口縁部は厚い。口縁部縦く外反し。端部肥厚。右回転縦横調整。
第130図 PL.50	6	須恵器 壺	カマド内床直・14 底部1/4	口一底(7.2)	A 黄灰 還元焼	体部僅かに内湾して開く。貼付高台の幅狭く低い。高台内右回転系切痕残る。

神宮番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第130図 PL.50	7	須恵器 埴	カマド内・7・一 8 底部	口一 底 7.5~7.8	D 灰黄 酸化焙	高台貼り付け。高台内右回転系切痕残る。底部内面中央盛り上がり、この部分を中心に使用による擦れで表面平滑となる。
第130図 PL.50	8	須恵器	2坑-9 下半部	口一 底(5.7)	D 浅黄 還元焙	体部内湾し、丸みを帯びる。轆轤右回転調整。高台貼り付け。高台内回転系切痕残る。体部外面型痕跡のような皺状亀裂目立つ。
第130図 PL.50	9	土師器 小型埴	埋没上 口縁部1/4	口(13.0) 底一	A 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で、口縁部端付近と外面口縁部強い横撫で。体部内面横撫で。
第130図 PL.50	10	土師器 埴	カマド内床直 口縁部1/3	口(19.0) 底一	B 橙 良好	口縁上部屈曲しないが、口縁部内面形状と外面横撫でが端部付近、中位、下位の3カ所が強く、その間を中心とは指頭圧痕状の窪みや型痕跡がある。また、胴部内面窪りの痕跡であり、「コ」の字状口縁部と考えられる。胴部内面粗い刷毛目(1cm内4条)。
第130図 PL.50	11	土師器 埴	カマド右袖床直 口縁部一全体1/5	口(19.0) 底一	B 橙 良好	器壁やや厚い。口縁部退化した「コ」の字状を呈する。口縁部横撫で、口縁部外面中位接合痕明瞭に残る。体部内面上半横撫で。下半部表厚減。胎土礫の含有多く粗い。
第130図 PL.50	12	須恵器 埴	カマド内一9 体部片	口一 底一	A 淡黄 酸化焙	胎土中に結晶片質礫礫を含む。外面叩き目後撫で。内面無当で具痕。酸化焙だが、焼成自体は良好。

38号住居

神宮番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第131図 PL.50	1	土師器 埴	南東隅床直 1/5	口(14.6) 高一	A 赤褐 良好	内面から口縁部横撫で、体部外面上半撫で、体部外面下半段削り。
第131図 PL.50	2	須恵器 埴	貯蔵穴-6・一22 口縁一部欠損	口 12.0 底 5.6 高 3.8	B 褐 酸化焙	口縁部小さく外反。底部右回転系切痕不明。内面黒色物層付着し、部分的に光沢を有する。底部外面周縁擦れにより器口縁部減少しており、使用痕と考えられる。
第131図 PL.50	3	須恵器 埴	南西隅6・9、埋 没上 口縁一部、 体部一部欠損	口(13.0) 底 5.6 高 3.7	A 灰 還元焙	口縁部外反。内面は縦い絞をなして外反した後内湾。底部右回転系切痕調整。
第131図 PL.50	4	須恵器 埴	南東隅床直 口縁1/4、底部定形	口(11.6) 底 5.2 高 4.8	C 灰 還元焙	体部から口縁部直線的に延びる。右回転轆轤調整。高台貼り付け。高台内回転系切痕残る。体部内外面、皺状亀裂が顕著。
第132図 PL.50	5	須恵器 埴	カマド内床直、貯 蔵穴 1/2	口(14.6) 底(5.5)	C にぶい 橙 酸化焙	口縁部外反。右回転轆轤調整。高台貼り付け、内面底部周縁凹む。
第132図 PL.50	6	須恵器 埴	カマド右外-10 1/2	口(14.0) 底一	A 灰 還元焙	口縁部外反。右回転轆轤調整。高台欠損。高台内回転系切痕僅かに残る。体部外面焼成後に「器」?刻痕。右側に右刻痕があるが欠損のため不明。
第132図 PL.50	7	須恵器 埴	貯蔵穴外-12 1/3	口(14.0) 底一	C にぶい 黄褐 酸化焙	器壁やや厚い。口縁部外反。器壁やや厚減し轆轤回転方向不明。
第132図 PL.50	8	須恵器 埴	埋没上 1/3	口(14.0) 底一	C にぶい 褐 酸化焙	器表灰色。口縁部外反。右回転轆轤調整。
第132図 PL.50	9	須恵器 埴	カマド右外-17 1/6	口(14.0) 底一	B 灰 酸化焙	断面灰白色。口縁部外反。
第132図 PL.50	10	須恵器 埴	貯蔵穴-17.5・一 22 1/4	口(12.6) 底一	C 黄灰 酸化焙	器壁薄く口縁部外反。
第132図 PL.50	11	灰輪陶器 埴	北東部5 1/4	口(13.8) 底(6.0) 高 4.2	緻密 灰白 良好	口縁部から体部内外面施釉。口縁部外反。高台外面をなし、端部尖る。
第132図 PL.50	12	土師器 小型埴	カマド前床直 口縁部片	口(11.2) 底一	B 橙 良好	器壁やや厚い。胴部やや厚い、口縁部外反。口縁部横撫で、外面上位のみ強い横撫で、体部外面縦段削り。体部内面と胴部外面横撫で。
第132図 PL.51	13	土師器 埴	カマド前・内床直 面、貯蔵穴-6 口縁1/6、体部1/3	口(21.8) 底一	A にぶい 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で、口縁部外面2段に成形時の窪みが見える。口縁部外面下部接合痕残る。体部外面削り。体部内面上半横撫で、下半撫で、接合痕明瞭に残る。
第132図 PL.51	14	土師器 埴	カマド内床直、埋 没上 1/3	口(16.8) 底一	A 橙 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で、口縁部外面と屈曲部強い横撫で、横撫での弱い部分に成形時の撫で残る。体部外面削り。体部内面上位横撫で、下位横撫で。
第132図 PL.51	15	土師器 埴	カマド右袖-16.5 1/3	口(20.6) 底一	B 褐 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で、口縁部外面と屈曲部強い横撫で、横撫での弱い部分に接合痕残る。体部外面削り。体部内面横撫で。
第132図 PL.51	16	須恵器 瓶	カマド右袖床直 1/5	口一 底(13.9)	C にぶい 橙 酸化焙	轆轤回転方向不明。高台貼り付け。体部外面下部回転削り。削りの際に横線状の窪みが通り、この窪み部分から削り目が見えて多量。
第132図 PL.51	17	須恵器 羽釜	カマド前10 1/6	口(19.0) 底一	B 淡褐 酸化焙	体部から口縁部はぼ直上。口縁部横撫で、胴部内面指頭圧痕連続する。体部外面胴下部まで縦段削り。
第132図 PL.51	18	土師器 土師	南西隅床直 定形	長 5.2 幅 1.6 厚 1.6 孔 0.4	A 黒褐 良好	器表若干光沢あり、丁寧に磨くように撫でる。重さ11.4g。

39号住居

神宮番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 現存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第133図 PL.51	1	土師器 埴	埋没上 1/6	口(17.8) 高一	A 橙 良好	器高や厚い。口縁部直立気味。体部内面から口縁部外面横撫で、底部外面削り。
第133図 PL.51	2	灰輪陶器 埴	埋没上 1/3	口一 底(7.7)	緻密 灰 やや焼 成不良	底部内面窪み。器壁薄くなると共に外面突出する。高台厚く低い。高台内回転系切痕残る。底部内面横撫でと高台端部平滑。
第133図 PL.51	3	須恵器 埴	埋没上 口縁部小片	口一 底一	D 灰 還元焙	口縁部上方つまみ上げる。外面部の折り返し部分欠損。

遺物観察表

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第133図 PL.51	4	須恵器 羽釜	カマド内床直・ 6・8・9 口縁1/3、体部1/2	口(19.6) 底 —	A にぶい黄橙 酸化焼	体部上位に最大径を持ち、体部上位から口縁部内湾。跨貼り付 け丁寧。体部外面艶削り。

40号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第134図 PL.51	1	須恵器 甕	埋没上 底部1/3	口 — 底(7.8)	D 灰白 還元焼	器表厚減。轆轤回転方向不明。貼付高台。高台内回転糸切直残る。
第134図 PL.51	2	須恵器 皿	カマド前9 ほぼ完全	口 10.2 底 5.4 高 2.2～2.7	B にぶい黄橙 酸化焼	器形やや歪む。底部内面浅い螺旋状轆轤目。底部右回転糸切無調整。
第134図 PL.51	3	須恵器 皿	北東隅9 ほぼ完全	口(10.0) 底 6.0 高 2.6～3.0	B にぶい黄橙 酸化焼	器形やや歪む。底部内面浅い螺旋状轆轤目。底部右回転糸切無調整。
第134図 PL.51	4	須恵器 皿	南部中央7 3/4	口10.0～10.4 底 6.0 高 2.7～2.9	B にぶい黄橙 酸化焼	器形やや歪む。底部内面浅い螺旋状轆轤目。底部右回転糸切無調整。
第135図 PL.51	5	須恵器 羽釜	カマド前・北東外 床直 口縁部1/4	口(23.4) 底 —	B 暗褐 酸化焼	器壁薄く、跨の貼付も丁寧。口縁部丸い。内外面轆轤目顕著。

41号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第136図 PL.51	1	須恵器 塚か	埋没上 口縁部小片	口(13.2) 底 —	D 灰 還元焼	焼き跡あまりなく軟質。口縁部外反。右回転轆轤調整。
第136図 PL.51	2	須恵器 塚か	埋没上 口縁部1/3	口(11.7) 底 —	D 灰黄 還元焼	口縁部外反し、端部肥厚。右回転轆轤調整。
第136図 PL.51	3	灰釉陶器 塚か	埋没上 底部1/3	口 — 底(7.3)	緻密 灰白 良好	高台、場所により厚さが異なり、胴面箇所は厚い。高台内中央 下位糸切直残る。内面降灰による斑状の自然釉がかかる。 体部から口縁部内傾。口縁部平坦。内面から口縁部外面轆轤目。 体部外面跨下下面で埋没削りで、跨接合部下面に位の当たり痕あり。
第136図 PL.51	4	須恵器 羽釜	埋没上 口縁部1/5	口(17.8) 底 —	C 灰 還元焼	

42号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第138図 PL.51	1	土師器 環	北東隅周溝内27・ 35 1/3	口(11.7) 高 —	D 橙 良好	平底。体部直線的に開き、口縁部横撫でにより小さく外反。体 部内面から口縁部外面横撫で。体部内面成形時の凹凸や空孔直 残る。底部外面艶削り。
第138図 PL.51	2	須恵器 環	南部中央床直 1/2	口(13.4) 底 6.0 高 3.8	C にぶい黄 酸化焼	片岩含む。体部から口縁部直線的に開く。底部右回転糸切無調整。
第138図 PL.51	3	須恵器 塚	北東隅周溝内30 口縁部～体部1/3	口(12.8) 底 —	C 灰 還元焼	焼き跡あまりない。片岩含む。体部内湾し、口縁部直線的に延 びる。右回転轆轤調整。
第138図 PL.51	4	須恵器 皿	中央部床直 3/4	口(13.4) 底 6.6 高 3.1	C 黒褐～灰黄 還元焼	片岩含む。体部直線的に開き、口縁部外反。底部内面螺旋状轆 轤目残る。高台貼り付け。高台内右回転糸切直残る。高台端部 厚減。
第138図 PL.51	5	土師器 小型甕	埋没上 口縁部 1/3、体部一部	口(10.2) 底 —	D 灰褐 良好	口縁部外反し、内外面横撫で。口縁部外面中位成形時の塵で残る。 小型台付きの「コ」の字状口縁である。
第138図 PL.51	6	土師器 甕	南東隅床直・7・ 8 体部上半	口 — 底 —	A にぶい赤褐 良好	体部内湾。右回転轆轤調整。内面艶削りで、縦位窪み残る。内面接 合痕残る。
第138図 PL.51	7	土師器 甕	南部中央6、埋没上 体部下半	口 — 底 —	A 灰黄褐 良好	外面縦位窪削り。内面艶削り。残存部上位内面接合明瞭。

43号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第140図 PL.51	1	須恵器 環	南部中央—17 ほぼ完全	口 10.8 底 6.0 高 3.5	D 橙 酸化焼	内面底部から体部内湾し、内面に轆轤目認められない。底部右 回転糸切無調整。
第140図 PL.51	2	須恵器 環	カマド右袖床直 ほぼ完全	口 10.2 底 5.0 高 3.4	A にぶい赤褐 酸化焼	体部内湾し、口縁部外反。底部右回転糸切無調整。
第140図 PL.51	3	須恵器 環	埋没上 1/4	口 — 底(5.2)	C にぶい黄橙 酸化焼	片岩含む。底部右回転糸切無調整。器表厚減。
第140図 PL.51	4	須恵器 塚	2坑内—21 体部1/4、底部完形	口 — 底 9.2	B にぶい黄橙 酸化焼	轆轤右回転調整。体部内湾。高い高台貼り付け。
第140図 PL.51	5	須恵器 塚	埋没上 底部2/3	口 — 底 6.7	D にぶい黄 酸化焼	体部内湾。右回転轆轤調整。やや高い高台貼り付け。高台端部 凹縁状に凹む。

44号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第140図 PL.51	1	須恵器 塚か	カマド内床直—5 1/3	口(13.8) 底 —	B にぶい橙 酸化焼	体部から口縁部均一に内湾。右回転轆轤調整。
第140図 PL.51	2	土師器 甕	埋没上 口縁部1/4	口(19.5) 底 —	B 灰褐 良好	体部内湾。体部外面艶削り。体部内面艶削り。口縁部やや 歪む。
第140図 PL.51	3	土師器 甕	埋没上 底部1/2	口 — 底 5.9	B 灰黄褐 良好	体部から底部内面艶削り。内面器表厚減。

種回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第140回 PL.51	4	須恵器 羽釜	カマド埋没土 口縁部-体部片	口(18.8) 底-	A にぶい黄橙 酸化焼	口縁部内傾。口縁端部平坦。器胴り付け丁寧。内外面接合痕残る。
第140回 PL.51	5	須恵器 羽釜	43住カマド外床直 底部	口- 底6.4	C 灰黄褐 酸化 焼	外面直筒形。内面器表厚減。
第140回 PL.51	6	須恵器 甕	南東隅5 底部片	口- 底(25.7)	D 灰黄 還元焼 〜焼し	夾雑物少なく胎土精良。外面器表黒色から暗灰色。底部広く広がり。端部縁部をなす。縁部外面は「V」字状に近く凹む。

45号住居

種回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第141回 PL.52	1	須恵器 坏	南面中央外-5 1/2	口(10.8) 底(5.9) 高3.0	A 灰白〜黒 還 元焼〜焼し	口縁部灰白色。内面口縁部以下黒色。外面口縁部以下2/3黒色。器壁やや厚く。口縁部小さく外反。底部右回転系切痕無調整。
第141回 PL.52	2	須恵器 埴	埋没土 1/4	口(13.9) 底(6.0) 高5.3	A 灰黄 酸化焼	口縁部外反。右回転軸轆調整。高台縁部貼り付けで変形著しい。高台内回転系切痕残る。
第141回 PL.52	3	須恵器 埴	東部中央壁際床直 下半部	口- 底6.9	B にぶい黄 還 元焼	B にぶい黄 還元焼 胎土。器壁やや厚い。右回転軸轆調整。高台内回転系切痕残る。底部焼成時に生じた貫通するヒビが入る。高台外反。貼り付け高台。右回転軸轆調整。高台内回転系切痕残る。底部焼成時に生じた貫通するヒビが入る。
第141回 PL.52	4	須恵器 埴	北東隅壁際10.5 1/3	口(14.9) 底-	A 灰黄 還元焼	高台外反。貼り付け高台。右回転軸轆調整。高台内回転系切痕残る。内面凹削若しくは凹削状の距着な轆轆目。底部内面削れにより平滑となる。
第141回 PL.52	5	須恵器 埴	北東隅床直 1/3	口(13.9) 底-	A 黄灰 還元焼	器壁やや厚い。右回転軸轆調整。
第141回 PL.52	6	須恵器 小型甕	2坑内床直 底部2/3	口- 底4.3	D にぶい黄橙 還元焼	外部外面傾かい轆轆目。底部右回転系切痕無調整。内面調整丁寧で轆轆目立たない。
第142回 PL.52	7	灰釉陶器 埴	南面中央-6.5。埋 没土 1/4	口(16.8) 底(7.5) 高5.1	緻密 灰白 良好	口縁部端外反。口縁部から体部内外面薄輪。滑り掛けか。底部内面と高台端部平滑。
第142回 PL.52	8	灰釉陶器 埴	貯蔵穴床直 1/4	口(11.8) 底(5.6) 高4.0	緻密 灰白 良好	体部から口縁部内溝。口縁部から体部内外面薄輪。滑り掛けか。
第142回 PL.52	9	灰釉陶器 埴	カマド内床直 底部1/4	口- 底(9.0)	緻密 灰白 良好	底部器壁厚い。体部外面直筒形。体部内面の輪は降灰による自然輪の可能性高い。底部内面と高台端部やや平滑。
第142回 PL.52	10	灰釉陶器 埴	貯蔵穴-6。16住 埋没土 1/3	口- 底(6.0)	緻密 灰白 良好	残存部厚輪。高台内回転系切痕残る。底部内面と高台端部やや平滑。
第142回 PL.52	11	灰釉陶器 皿	東部中央-20 1/2	口(11.8) 底5.8 高2.6	緻密 灰白 良好	体部やや内湾。灰釉掛け抜け。高台低い。高台内底部回転系切痕ほとんど擦で消すに残る。
第142回 PL.52	12	灰釉陶器 皿	埋没土 口縁部小片	口(14.0) 底-	白色・透明 褐灰 良好	輪は濃緑色。内外面輪の擦れ目立つ。胎土硬質。
第142回 PL.52	13	灰釉陶器 甕	貯蔵穴7.5・北西部 床直。7住 口縁部-体部1/3	口- 底-	緻密 灰白 良好	口縁部やや開き。肩部丸みを帯びる。肩部外面灰輪かかる。肩部外面石罫2カ所。33号住居15と同一個体の可能性高い。
第142回 PL.52	14	土師器 小型土釜か	埋没土 口縁部-体部1/6	口(12.3) 底- 高-	C 橙 酸化焼	内外面・羽釜と同様な無調整。口縁部外面低い。明瞭な輪をもつ段差あり。体部外面下位窪地で。

46号住居

種回番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第144回 PL.52	1	土師器 坏	南東隅床直 1/4	口(13.2) 底-	A 橙 良好	体部直線的に開き。口縁部は外反し。更に上方に立ち上げる。口縁部横溝で。体部外面粗い横溝で。成形時の凹凸残る。底部外面直筒形。体部内面直。体部内面指頭圧痕状の窪み通る。
第144回 PL.52	2	須恵器 坏	南東部床直・8 口縁部1/2。底部 完形	口(12.5) 底5.8 高3.8	A 浅黄 還元焼	口縁部小さく外反。体部外面下位屈曲して下方に延びる。底部右回転系切痕無調整。
第144回 PL.52	3	須恵器 坏	南東隅壁際14 1/3	口(11.5) 底(5.7) 高3.3	D 灰 還元焼	体部内湾。底部右回転系切痕無調整。内面上位の轆轆目やや深い。
第144回 PL.52	4	須恵器 坏	埋没土 1/5	口(12.8) 底-	D 灰 還元焼	体部直線的に開き。内面側に緩く屈曲して口縁部に至る。右回転軸轆調整。口縁部内面を中心に油状。若しくは油煙状黒色物厚く付着。
第144回 PL.52	5	須恵器 埴	埋没土 1/3	口(13.6) 底-	A 灰白 還元焼	体部僅かに内湾。右回転軸轆調整。外面轆轆目間開狭い。
第144回 PL.52	6	須恵器 埴	埋没土 底部1/2	口- 底(6.8)	C 黄灰 酸化焼	器表厚減。高台貼り付け。高台内右回転系切痕残る。
第145回 PL.52	7	須恵器 皿	南東隅壁際10 ほぼ完形	口13.7 底6.2 高2.2	A 浅黄 酸化焼	体部から口縁部直線的に開く。右回転軸轆調整。高台貼り付け。高台内回転系切痕残る。口縁部内面器表。高台と同じ径の内形に暗灰色を塗る。重ね焼き痕残る。
第145回 PL.52	8	須恵器 埴	カマド内床直。45 住埋没土 口縁部-一部欠損	口(12.9) 底6.0 高3.2	A 灰 還元焼	体部緩く内湾した後、外反して口縁部に至る。右回転軸轆調整。口縁部緩く内湾。高台貼り付け。高台内回転系切痕僅かに残る。
第145回 PL.52	9	須恵器 皿	埋没土 底部1/4	口- 底(6.0)	C 浅黄 酸化焼	器表厚減。高台貼り付け。高台内右回転系切痕残る。
第145回 PL.52	10	土師器 小型甕	南東部8・15.5 口縁部-体部1/5	口(8.6) 底-	A 灰褐 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横溝で。頸部内外面接合痕残る。体部外面直筒形。体部内面直溝で办難で。
第145回 PL.52	11	土師器 甕	南東部床直・12.5 口縁部1/3	口(20.9) 底-	A にぶい橙 良 好	口縁部「コ」の字状。口縁部横溝で。屈曲部外面直溝で。口縁部外面指頭圧痕状の窪み残る。体部外面直筒形。体部内面直溝で。
第145回 PL.52	12	須恵器 甕	埋没土 頸部片	口- 底-	A 灰 還元焼	右回転軸轆調整。口縁部広く開くが、端部欠損。

遺物観察表

47号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第147図 PL.52	1	須恵器 環	南部床直 1/3	口—底 5.8	A 灰白 還元焼	底部右回転系切無調整。
第147図 PL.52	2	須恵器 埴	南西隅-6 2/3	口(14.1) 底 6.2 高 5.0	D 暗灰黄 還元	口縁部外反。内外面間隔の狭い轆轤目。右回転轆轤調整。底部中央部厚い。高台貼り付け。高台内回転系切痕残り。焼成後の体色引く×が認められる。
第147図 PL.52	3	須恵器 埴	貯蔵穴-6 1/3	口(13.7) 底(7.2) 高 4.9	A 橙 酸化焼	轆轤僅かに内湾して開き。口縁部外反。端部肥厚。高台貼り付け。右回転轆轤調整。
第147図 PL.52	4	須恵器 埴か	カマド内床直 1/4	口(13.7) 底—	A にぶい黄橙 酸化焼	口縁部外反し。端部肥厚。右回転轆轤調整。
第147図 PL.52	5	須恵器 埴	貯蔵穴床直 底部	口—底 6.2	A 黒・にぶい黄 橙酸化焼	右回転轆轤調整。底部中央部厚い。高台貼り付け。高台端部凹線に凹む。高台内回転系切痕残り。
第147図 PL.52	6	須恵器 埴	貯蔵穴-5 底部1/2	口—底 6.7	C 黒褐 還元焼	轆轤僅かに内湾して開き。口縁部外反。高台貼り付け。高台内右回転系切痕残り。
第147図 PL.52	7	須恵器 埴	東部中央床直 底部1/3	口—底(6.5)	D 灰黄褐 酸化	右回転轆轤調整。高台貼り付け。高台内回転系切痕残り。
第148図 PL.52	8	灰釉陶器 埴	西部中央床直 1/3	口(14.7) 底 6.7 高 5.0	緻密 灰 良好	口縁部僅かに外反。体部外面下位内回転削り。高台外面丸みを有し。端部尖り気味。口縁部から体部外面灰釉塗け掛り。
第148図 PL.52	9	灰釉陶器 埴か皿	埋没土 底部片	口—底(6.2)	緻密 灰黄 良好	高台内湾。底部内面周縁まで施釉。
第148図 PL.52	10	土師器 甕	カマド前床直・5 口縁部-体部1/2	口 19.7 底—	B 橙 良好	口縁部「く」の字状に外反するが、外面屈曲部と肩部に横撫で。横撫で間には指頭状の盛り込みあり。体部外面削り。体部内面塗でか。
第148図 PL.52	11	須恵器 羽釜	カマド前・右袖床 直 口縁部1/3	口(18.0) 底—	C 橙 酸化焼	口縁部内湾し。端部外方に張り出す。右回転轆轤調整。内外面轆轤目。罫の貼り付け丁寧。

48号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第150図 PL.52	1	須恵器 埴	2坑床直 底部 1/4	口—底 5.7	B にぶい黄褐 酸化焼	片岩含む。体部器壁厚い。右回転轆轤調整。高台貼り付け。高台内回転系切痕残り。底部内面屈曲状轆轤目。
第150図 PL.52	2	須恵器 埴	カマド前床直 底部1/4	口—底(6.7)	A 灰黄褐 酸化	器表厚。轆轤回転方向不明。貼付高台。

49号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第152図 PL.52	1	須恵器 埴	北部中央28.5。埋 没土 1/4	口(10.8) 底—	D 橙 酸化焼	内面黒色処理。口縁部外反。右回転轆轤調整。
第152図 PL.52	2	須恵器 埴	カマド内8・12 1/5	口(16.8) 底—	B にぶい橙 酸化焼	体部内湾し。口縁部端のみ小さく外反。右回転轆轤調整。内面 内湾し。体部内面厚塗し不明。高台貼り付け。
第152図 PL.52	3	須恵器 埴	中央部13 1/4	口(10.0) 底(4.4) 高 4.6	B 橙 酸化焼	小型品。口縁部部外反。右回転轆轤調整。高台貼り付け。
第152図 PL.52	4	須恵器 埴	カマド床直 1/3	口(11.0) 底(5.0) 高 4.2	A 橙 酸化焼	やや小型。口縁部緩く外反し。端部肥厚。高台貼り付け。右回 転轆轤調整。
第152図 PL.52	5	須恵器 埴	西北隅溝内埋没22 底部	口— 底 5.9～6.5	D 灰黄 還元焼	轆轤回転方向不明。高台の貼り付け雑で、高台の平面形不整形。 高台内回転系切痕残り。
第152図 PL.53	6	須恵器 埴	西部中央16・21.5 底部	口—底(5.4)	D 灰黄 還元焼	体部直線的に開く。高台貼り付け。高台内右回転系切痕残り。
第152図 PL.53	7	須恵器 埴	南西隅16 底部1/2	口—底(7.2)	C 暗灰黄 酸化	轆轤回転方向不明。高台貼り付け。内面黒色処理。内面内湾し だが単位不明。
第152図 PL.53	8	須恵器 埴か	カマド 1/5	口(14.0) 底—	B 橙 酸化焼	体部内湾し。口縁部小さく外反。内面密な横位内湾し。口縁部 器厚。
第152図 PL.53	9	須恵器 埴か	貯蔵穴-11.5 1/5	口(14.8) 底—	B 浅黄橙 酸化	体部内湾し。口縁部緩く外反。内面密な横位内湾し。
第153図 PL.53	10	須恵器 埴か	埋没土 1/5	口(10.7) 底—	B 橙 酸化焼	体部から口縁部内湾。内面密な横位内湾し。
第153図 PL.53	11	須恵器 埴か	貯蔵穴5 1/6	口(12.4) 底—	D にぶい黄橙 酸化焼	轆轤右回転調整。内面黒色処理。内面内湾し。
第153図 PL.53	12	土師器 鉢	埋没土 口縁部片	口(15.8) 底—	A にぶい赤褐 良好	内面に縦い段差をもち。口縁部大きく開く。内面黒色処理。内面 内湾し。口縁部外面横撫で。外面口縁部以下内湾し。
第153図 PL.53	13	土師器 小型甕	埋没土 口縁部片	口—底—	A 黒褐 良好	口縁部外反。口縁部内面から肩部外面横撫で。体部外面縦位内湾 し。体部内面無で。
第153図 PL.53	14	土師器 甕	カマド内床直・6・ 21・26.5 体部1/3	口—底—	B 橙～にぶい赤 褐 良好	体部のみであり。径と傾き不正確。外面縦位内湾し。内面内湾 でと撫で。
第153図 PL.53	15	須恵器 転用碗か	カマド内16 1/2	幅 11.3 厚 1.3	A 灰 還元焼	襷の体部片周囲を細かく打ち欠いて成形。中央部付近で欠損。 欠損部中央付近を中心に。擦れにより平滑。外面も同部位に若干 擦れが認められる。
第153図 PL.53	16	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口(21.6) 底—	D 灰 還元焼	還元たが焼き締まりない。口縁部外反。17と同一個体の可能性 あり。
第153図 PL.53	17	須恵器 甕か	北東部17 底部片	口—底(13.6)	D 灰 還元焼	還元たが焼き締まりない。外面調整痕不明瞭だが、下位は削り。内 面無で。16と同一個体の可能性あり。
第153図 PL.53	18	須恵器 羽釜	カマド内床直・12 口縁部-体部1/8	口(19.4) 底—	D 橙 酸化焼	口縁部中や内湾。罫の貼り付けやや丁寧。体部外面上位接合痕 明瞭に残る。下位は削り。

遺物観察表

50号住居

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第155図 PL.53	1	土師器 底部小片	埋没上	口—高—	A にくい黄 良好	底部外面磨削り。底部内面不明著。
第155図 PL.53	2	土師器 底面	1坑南東部床直 底面	口—底7.2	B にくい黄 良好	底部外面磨削り。底部内面中央を中心に、爪先か筥先状の圧痕めぐる。高台貼り付け。高台内面横撫での撫で上げ部残る。
第155図 PL.53	3	須恵器 底面1/2	埋没上 口縁部1/4、 底面1/2	口(10.8) 底5.5 高3.9	B 灰白 還元 焼	口縁部軽く屈曲し、内面を中心に外反。底部右回転系切無調整。底部内面表黒色。
第155図 PL.53	4	須恵器 底面	カマド内9 底面	口—底(6.0)	B 明黄褐 酸化 焼	体部下位内湾。底部右回転系切無調整。
第155図 PL.53	5	須恵器 底面	埋没上 底面	口—底(5.5)	D 暗灰黄 還元 焼	底部右回転系切無調整。
第155図 PL.53	6	須恵器 塚か皿	埋没上 口縁部片	口(13.2) 底—	D 明黄褐 酸化 焼	口縁部外反。右回転軸調整。澁を含むため、器表に凹凸が目立つ。
第155図 PL.53	7	須恵器 塚か皿	カマド内左袖床直 口縁部片	口(13.7) 底—	B 灰黄 酸化 焼	口縁部小さく外反。外面輪軸目間狭い。右回転軸調整。
第155図 PL.53	8	土師器 甕	カマド内床直・5 口縁部片	口(22.2) 底—	A 褐 良好	口縁部「く」の字状に外反するが、外面屈曲部と肩部に横撫で。横撫で間には指頭圧痕状の窪み残る。体部外面磨削り。体部内面磨削で。
第155図 PL.53	9	須恵器 羽釜	カマド内床直 口縁部片	口(21.6) 底—	D 浅黄橙 酸化 焼	口縁部内傾し、端部平坦。鈎取り付け丁寧。内面輪軸目顕著。

51号住居

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第157図 PL.53	1	須恵器 塚	カマド内36.5 下半部	口—底(6.2)	B 浅黄橙 酸化 焼	やや高い高台貼り付けるが、粘土が足りず1cmほど途切れる。右回転軸調整。底部内面螺旋状輪軸目顕著。
第157図 PL.53	2	灰釉陶器 塚か皿	埋没上 底面	口—底(6.4)	緻密 灰白 良好	体部内外面磨削。底部内面と高台端部やや平滑。
第157図 PL.53	3	須恵器 甕	カマド左袖15.5・ 29 口縁部1/8、体 部1/6	口(24.8) 底—	D 黄灰 酸化 焼	輪軸回転方向不明。口縁部外反し、端部は縁帯をなす。縁帯下端僅かに外方に突き出る。
第158図 PL.53	4	須恵器 羽釜	カマド15.5・34・ 36.5 1/3	口(19.9) 底(6.8) 高25.0	B 明赤褐 酸化 焼	体部下位外傾して開く。体部中位から口縁部直立し、端部付近のみ小さく外反し、上端丸みを帯びる。口縁部回転軸撫で。体部内面磨削で、部分的に成形時の凹凸残る。
第158図 PL.53	5	須恵器 羽釜	カマド34 口縁部～肩部一部	口(22.1) 底—	D 黄褐 酸化 焼	還元に近い焼成。器高や高く砲型に近い形状。体部上位から口縁部内湾。体部外面上位から中位。縦方向の皺状亀裂(型肌痕)が顕著で、軽い回転軸撫でにより若干湾で消される。体部外面下位横撫で削り。口縁部回転軸撫で。体部内面磨削でか。6・7は同一個体の可能性あり。
第158図 PL.53	6	須恵器 羽釜	カマド34 1/8～1/6	口—底—	D 灰黄 酸化 焼	器高高く、砲型を呈する。体部外面上位から中位、縦方向の皺状亀裂(型肌痕)が顕著。上位は軽い回転軸撫でにより若干湾で消される。体部下位調整不明。内面器表割離。5・7は同一個体の可能性あり。
第158図 PL.53	7	須恵器 羽釜	埋没上 底面1/3	口—底(8.1)	D 黄褐 酸化 焼	外面磨削り。体部内面磨削でか。5・6は同一個体の可能性あり。

53号住居

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第162図 PL.53	1	土師器 環	東部中央塚部床直 完形	口9.8 高3.2	D にくい橙 良好	体部内湾し、口縁部ほぼ直立。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削り。口縁部外面型肌痕残る。
第162図 PL.53	2	土師器 長胴甕	カマド左袖床直 口縁部片	口(22.8) 底—	B 明黄褐 良好	口縁部横撫で。体部外面縦位磨削り。体部内面磨削で。

54号住居

神岡番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 整等
第164図 PL.53	1	土師器 環	埋没上 1/2	口(10.8) 底—	A 橙 良好	器表厚。口縁部外面下端横撫でにより凹ませ、下部の磨削りで縁を形成する。底部外面磨削り。磨削り単位不明瞭。
第164図 PL.53	2	土師器 環	埋没上 口縁部～底部3/4	口(11.7) 底—	A にくい橙 良好	口縁部長く、内傾する。口縁部横撫で。口縁部内面撫で上げ部残る。底部外面磨削り。底部外面器表割離部分多い。
第164図 PL.53	3	須恵器 皿	南東部中央18 下半部	口—底6.2	D 浅黄 酸化 焼	やや高い高台を貼り付ける。右回転軸調整。高台内回転系切痕僅かに残る。
第165図 PL.54	4	土師器 甕	南東部中央12.5・ 20、埋没上 1/3	口(21.0) 底—	A 黄褐 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、屈曲部外面強い横撫で。体部内面磨削り。体部内面磨削で。口縁部外面と体部内面接合痕残る。
第165図 PL.54	5	土師器 甕	中央部15.5・17・ 20 口縁部一部、 体部1/4	口(20.9) 底—	A 橙 良好	口縁部横撫で。体部外面磨削り。体部内面磨削り。
第165図 PL.54	6	土師器 甕	中央部11.5 体部～底部1/4	口—底—	A 橙 良好	外面磨削り。内面磨削で、残存部内面上位に接合痕残る。

遺物観察表

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第165図 PL.54	7	土師器 甕	カマド右袖床直・ 貯蔵穴6・11.5 体部下位～底部	口 ー 底 8.5～9.0	A っぽい黄良 好	丸底気味で底部境不明瞭。体部から底部外面匳削り。体部内面土割れ多い。体部内面下位匳削り。底部内面匳削り。内面表割れ多い。
第165図 PL.54	8	土師器 匳	埋没上 ほぼ完成形	口14.2～16.0 底 4.1 高 13.5	A 褐 良好	口縁部下面形、楕円形。口縁部内外面表割れ部分多い。口縁部横撫で。体部内面匳削り。体部内面匳撫で。孔径2.0cm。
第165図 PL.54	9	須恵器 甕	P 2内6 体部片	口 ー 底 ー	A 浅黄 酸化焼	一部の扉面中央と外面器表の一部灰色。酸化焼気味だが特に磨良で焼き締まる。外面格子状肌目後、強い撫で。内面同心円状で貝痕のほとんどを強い撫でによって消す。

55号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第167図 PL.54	1	土師器 坏	カマド左袖床直 完成形	口 10.6 底 3.1	B 橙～黒褐 良 好	内面にぶい黄褐。口縁部屈曲して立ち上がり、僅かに外傾。口縁部横撫で。口縁部内面撫で上げ部明瞭。底部外面匳削り。底部内面匳撫で。
第167図 PL.54	2	土師器 坏	東部竈床直 ほぼ完成形	口 10.0 底 ー 高 3.1	A 橙 良好	口縁部屈曲し、直立気味に立ち上がる。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部内面撫で上げ部残存。口縁部外面下端横撫でにより、浅い凹線状に凹む。底部外面匳削り。
第167図 PL.54	3	土師器 坏	中央部床直 ほぼ完成形	口 10.8 高 3.2	A 橙 良好	器表や厚縁。体部内湾し、口縁部はほぼ直立。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面匳削り。底部内面匳撫で痕残存。
第167図 PL.54	4	土師器 坏	中央部床直、埋没 土 3/4	口 10.6 底 ー	A 橙 良好	口縁部面から内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面の横撫で、2段分よりで行い、2段分の撫で上げ部残り、口縁部側の横撫でが新しい。底部外面匳削り。底部内面匳撫で。
第167図 PL.54	5	土師器 坏	埋没上 1/4	口(10.6) 底 ー	D 橙 良好	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面匳削りだが、器表厚縁のため方向や単位不明。底部内面匳撫で後撫でか。
第167図 PL.54	6	土師器 坏	中央部10・10.5 2/3	口 14.6 底 ー 高 6.0	D 橙～黒褐 良 好	体部半球状に内湾。口縁部直立し、端部小さく外反。体部内面中位から口縁部外面横撫で。体部外面縦匳削り。型明痕多く残存。底部外面匳削りだが単位不明。底部外面付近黒染。
第167図 PL.54	7	土師器 鉢	カマド前床直 1/2	口 22.8 底 13.8	A にぶい赤褐 良好	口縁部外反。器表厚縁著しい。口縁部横撫で。体部から底部外面匳削りだが、単位と方向不明。体部から底部内面匳撫でか。
第168図 PL.54	8	土師器 甕	カマド前6.5 ほぼ完成形	口 19.8 底 4.2 高 36.8	A 橙 良好	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面縦匳削り。体部内面匳撫で。上半は粗く匳削りにやや近く、夾雑物の移動が認められる。
第168図 PL.54	9	土師器 匳	中央部6・7 口縁部1/4	口(20.6) 底 ー	A 橙 良好	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面匳削り。体部内面匳撫で。
第168図 PL.54	10	土師器 匳	北東部床直 下半部	口 ー 底(4.6)	B 褐 良好	体部外面匳削り。内面匳撫で。
第168図 PL.54	11	灰釉陶器 瓶類	埋没上 1/8	口(9.1) 底 ー	黒色物吹付 灰白 良好	口縁部外面凹縁2条。口縁部内外面、相対する方向に灰釉がかり。自然輪と考えられる。
第168図 PL.54	12	灰釉陶器 瓶類	南部中央20.5 1/6	口(13.4) 底 ー	黒色物含有 灰 良好	口縁部直線的に開く。端部小さく外反。口縁部外面凹縁2条。内面自然輪と降り物多く付着。
第168図 PL.54	13	須恵器 体部下位片	中央部14.5 体部下位片	口 ー 底 ー	D 灰濁 還元焼	外面格子状肌目。内面同心円状で貝痕残り。一部軽く撫でを加える。

56号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第170図 PL.54	1	須恵器 甕	北部中央床直、埋 没上 2/3	口(10.3) 底 7.0 高 4.7	B にぶい黄橙 酸化焼	体部内湾し、口縁部付近僅かに外反。右回転軸輪調整。高台貼り付け。高台内中央まで回転撫で。

57号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第170図 PL.54	1	土師器 坏	埋没上 1/5	口(11.5) 高 ー	A にぶい黄橙 良好	口縁部直線的に開く。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面匳削り。
第170図 PL.54	2	須恵器 坏	カマド左袖10 3/4	口 13.0 底(5.4) 高 4.9	D にぶい黄褐 良好	体部内面から口縁部横撫で。体部外面から底部外面匳削り。外面口縁部下成形時の撫でと接合痕残存。
第170図 PL.54	3	須恵器 坏	埋没上 1/4	口 ー 底(6.1)	D にぶい黄橙 酸化焼	底部右回転系切無調整。底部内面横輪目顕著。
第170図 PL.54	4	須恵器 坏	埋没上 底部	口 ー 底 5.2	C にぶい黄橙 酸化焼	夾雑物多く胎土粗い。底部右回転系切無調整。
第170図 PL.54	5	須恵器 坏	カマド内12 1/4	口 ー 底(6.0)	D 浅黄 酸化焼	底部回転系切無調整。
第170図 PL.54	6	須恵器 甕	北部中央21.5・23. 埋没上 1/2	口(11.1) 底(6.6) 高 4.6	B にぶい黄橙 酸化焼	体部内湾し、口縁部付近僅かに外反。右回転軸輪調整。高台貼り付け。高台内中央まで回転撫で。
第170図 PL.54	7	須恵器 甕	埋没上 1/4	口(11.4) 底 ー	D 浅黄 良好	口縁部付近やや内湾。体部内面から体部外面回転横撫で。体部外面縦匳削り。
第170図 PL.54	8	須恵器 羽釜	北東部床直・12、 埋没上 1/5	口(21.0) 底 ー	D 明黄褐 酸化 焼	口縁部内湾し、端部正面内湾。右回転軸輪調整。体部外面縦匳削り。口縁部接合痕残存。

58号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第170図 PL.55	1	土師器 土師	埋没土 1/4	□(14.6) 底	D にぶい 橙良 好	口縁部歪みあり、実測因は問かない可能性がある。内面から口縁部外面横撫で。体外外面中位成形時の撫でと指頭圧痕状の凹凸。体外外面下位窪削り。
第170図 PL.55	2	灰釉陶器 壺	埋没土 1/5	□(14.6) 底	緻密 灰白 良好	口縁部縦く外反。口縁部から内面内撫触。
第170図 PL.55	3	土師器 甕	埋没土 口縁部1/5	□(18.2) 底	A にぶい 黄褐 良好	口縁部直線的に立ち上がる。口縁部横撫で。口縁部外面中位、強い横撫でにより浅い凹線となる。凹線状横撫での上下、成形時の撫でや凹凸残る。体内内面刷毛目(1cm内6条)。4と同一個体の可能性高い。
第170図 PL.55	4	土師器 甕	カマド前20、埋没土 口縁部1/3	□(18.9) 底	A にぶい 黄褐 良好	口縁部直線的に立ち上がる。口縁部横撫で。口縁部外面中位、強い横撫でにより浅い凹線となる。凹線状横撫での上下、成形時の撫でや凹凸残る。体内内面刷毛目(1cm内6条)。3と同一個体の可能性高い。

59号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第173図 PL.55	1	土師器 杯	南東部埋没床直 完形	□ 12.1 高 4.6	B 淡黄 良好	器表のみ黒褐色で黒色物を塗布している。器壁やや厚く、口縁部僅かに外湾して上方に立ち上がる。内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面の横撫でにより、下端に明瞭な稜を作る。底部外面窪削り。口縁部細かい割線が多い。
第173図 PL.55	2	土師器 杯	貯蔵六南6、埋没土 ほぼ完形	□ 12.2 高 4.4	A 浅黄 良好	底部器壁厚い。内面から口縁部外面上位黒色処理。口縁部横撫で。体外部から底部内面窪削き。底部外面窪削り。底部外面中央稜顕著残る。
第173図 PL.55	3	土師器 杯	貯蔵六東8 ほぼ完形	□ 12.5 高 4.7	A にぶい 橙良 好	器壁やや厚い。口縁部内傾した後外反。体内内面から口縁部外面横撫で。底部外面窪削り。長径8mm以下の継ぎ目。
第173図 PL.55	4	土師器 杯	東部中央23 1/4	□(12.4) 高	A にぶい 赤褐 良好	内面器表斑状に剥離する部分多く、調整痕不明。口縁部外面横撫で。底部外面窪削り。口縁部下端、横撫でにより段差を作る。体外部内面型型痕残る。
第173図 PL.55	5	土師器 杯	北西部8・9.5 1/2	□ 12.2 高 4.2	C 橙 良好	胎土緻密で焼成硬質だが器表摩滅。口縁部外傾して直線的に開く。体内内面から口縁部外面横撫で。底部外面窪削り。
第173図 PL.55	6	須恵器 壺	西部中央22.5 口縁部一部、底部 完形	□(14.2) 底 6.4 高 6.2	D 灰 還元焰	片岩微塵量含む。右回転軸調整。高台貼り付け。高台内回転糸切痕残る。
第173図 PL.55	7	土師器 鉢か	北東部埋没床直、 埋没土 1/6	□(15.4) 底	D 橙 良好	粗砂粒多く含む。口縁部横撫で。体外外面窪削り。体内内面窪削り。内面器表から器表付近黒色。
第173図 PL.55	8	土師器 小壺	北東部7・7.5、埋没土 上半部のみ	□(14.6) 底	D 橙 良好	粗砂粒多く含む。口縁部シャープに作り、外面中位稜をなし、端部平坦で先端部尖り気味。口縁部横撫で。体外外面窪削り。体内内面窪削りで後撫でか。
第173図 PL.55	9	土師器 甕	北東部同溝11、北 部中央床直・9 カマド前-10、貯 蔵六-34 口縁部~割部片	□(20.7) 底	A にぶい 黄橙 良好	体の歪り少なく、口縁部大きく開く。口縁部横撫で。体外外面窪削り。体内内面器表剥離するが、部分的に窪削り残る。
第174図 PL.55	10	土師器 甕	東部中央・カマド 床直、南部中央埋 没9.5 1/3	□(19.8) 底	A にぶい 黄橙 良好	体の歪り少なく、口縁部外反。口縁部横撫で。体外外面窪削り。体内内面窪削り。11と同一個体の可能性あり。
第174図 PL.55	11	土師器 甕	東部中央・カマド 床直、P 2 1/5	□(21.5) 底	A にぶい 黄橙 良好	体の歪り少なく、口縁部外反。口縁部横撫で。体外外面窪削り。体内内面窪削り。10と同一個体の可能性あり。
第174図 PL.55	12	土師器 壺	P 1南-7、東部 中央-6、P 2- 18・20 1/3	□(25.4) 底(18.2) 高 25.9	A 浅黄 良好	口縁部外反し、体部は逆置皿面筒形を呈する。口縁部横撫で。体外外面窪削り。体内内面やや粗い窪削り。底部周縁窪削り。13と同一個体の可能性あり。
第174図 PL.55	13	土師器 壺	P 1南-7、P 2 底部1/3	□ 一 底(19.7)	A 浅黄 良好	外面窪削り。内面やや粗い窪削り。底部内面周縁窪削り。12と同一個体の可能性あり。
第174図 PL.55	14	須恵器 羽釜	西部中央24.5 口縁部1/4	□(18.0) 底	C 灰褐 還元焰	口縁部直立で、体部は寸型製。跨の貼り付け丁寧。体外外面跨下面まで全面窪削り。体内内面窪削り。口縁部内面凹線状に窪む。

61号住居

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第178図 PL.55	1	土師器 鉢	埋没土 口縁1/4、底部完形	□(11.0) 底(4.0) 高 5.5	A にぶい 赤褐 良好	平底で体部から口縁部縦く内湾。口縁部横撫で後、内面窪削り。体外外面上位窪削り。体外外面下位窪削り。下部窪削り。体外外面中位横撫で、成形時の凹凸残る。凸部分に光沢が認められることから、難な窪削りを行っていると考えられる。
第178図 PL.55	2	土師器 鉢	北東部埋8・14 ほぼ完形	□15.4~16.0 底 4.8 高 8.0~8.6	A にぶい 橙良 好	平底で体部から口縁部縦く内湾。口縁部内面から外面横位窪削り。内面内面窪削り。体外外面下段、成形時窪削りか窪削りで内面窪削り。
第178図 PL.55	3	土師器 器台	北部中央15・炉東 床直 脚部	□ 一 底 10.6~11.0	A 明赤褐 良好	坯内面窪削り。脚柱部外面横撫で。裾部横撫で。円孔3方2段だが、上段は下段円孔の中間に配置。
第178図 PL.55	4	土師器 小型壺	炉東6、埋没土 口縁1/2、体部1/3	□ 10.4 底(5.2) 高 12.0	A にぶい 黄橙 良好	口縁部直線的に開き、外面を2段に折り返す。口縁部から胴部内面密な横位窪削り。体部から底部内面横撫で。体外外面横撫で、一部に下地の刷毛目残る。
第178図 PL.55	5	土師器 小型壺	埋没土 口縁部1/2	□(9.4) 底	A にぶい 橙良 好	口縁部外面密な縦位窪削り。口縁部内面密な横位窪削り。

遺物観察表

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第178図 PL.55	6	土師器 小型壺	埋没上 1/4	口 — 底 5.8	A にぶい 橙 良 好	外面縦位磨き。内面斜位磨き。底部外面、肩縁部を中心に 器表摩滅。
第178図 PL.55	7	土師器 壺	北東部床直・15.5・ 18、埋没上 ほぼ完形	口 14.0 底 7.5 高 27.0	A にぶい 黄橙 良好	胴部張らず、器高に比して体径も小さい。体外外面刷毛目後 斜位磨きで、部分的に刷毛目(1cm内8条)残る。口縁部外面 下半から肩部外面は磨きや横撫でが行われず、刷毛目残る。 口縁部外面上平横撫で。口縁部内面から体部内面上半は横位 磨きだが、器表の細かいヒビにより単位不明瞭。体部内面下半 は撫でか。内面2ヶ所に黒色面あり。
第178図 PL.56	8	土師器 壺	中央部・伊南・P 2南床直・5・15、 伊東5・6・29、 北東部18 ほぼ完形	口 17.4 底 10.0 高 37.8	A? 濁 良好	口縁部外反し、端部付近外方に折り返す。体部は中位に最大径 を有する。口縁部内面と体外外面密な横位磨き。口縁部外面 縦位磨きで、部分的に粗い。磨滅で状をなす。肩部外面L R調文。体部外面下部の一部に細かいLR調文が認められる。 体部から底部内面撫で。
第178図 PL.55	9	土師器 壺	P1北床直 上半部	口13.4~13.8 底 — 高 —	A にぶい 赤褐 良好	口縁部から体部内面密な横位磨きだが、部分的に下地の刷毛 目が残る箇所がある。口縁部外面斜位後縦位磨き。体部外面 横位磨き後縦位磨きで、部分的に縦位のみ箇所がある。 全体に丁寧な磨きで、器表に光沢を有する。
第178図 PL.55	10	土師器 壺	伊東床直・13・25、 埋没上 口縁部~底部3/4	口 — 底 8.0 高 —	A にぶい 黄橙 良好	体部上位縁に張らずに立ち上る。外面密な横位磨きだが、 下地となる磨削りの凹部が不規則に残り、単位不明瞭。内面も 密な横位磨きだが、下地の凹部が不規則に残り単位不明瞭。

3・23・25・36・44・45・47・48号土坑

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第185図 PL.56	3坑 1	須恵器 甕	埋没上 口縁部1/2	口 18.8 底 —	D 灰白 還元 元焼	胎土精良で焼き締まり、器形もシャープ。口縁部上面と外面 に凹線1条並ぶ。口縁部外面波状文。肩部外面平打ち目。胴 部内面中位見。
第185図 PL.56	23坑 1	須恵器 壺	南部-20 口縁部 1/4、底部完形	口(12.1) 底 5.0 高 4.4	C 灰黄褐 酸化 焼	胎土中の礫多く、石畳け目立つ。口縁部外反。右回転軸調整。 高台貼り付け。高台内右回転軸切痕残る。
第185図 PL.56	25坑 1	土師器 高杯	埋没上 脚柱部	口 — 底 —	A にぶい 黄橙 良好	外面撫で。内面撫でと紋目。内面細作り痕跡に残る。
第185図 PL.56	36坑 1	須恵器 壺	西部-8 1/2	口(13.8) 底 —	A にぶい 黄橙 酸化焼	口縁部小さく外反。右回転軸調整。内面に皺状亀裂目立つ。 高台付け高台欠損。高台内右回転軸切痕残る。
第185図 PL.56	36坑 2	須恵器 壺	西部-13 底部1/3、底部完形	口 —	B にぶい 黄橙 酸化焼	高台と体部赤む。右回転軸調整。高台貼り付け。高台内撫で つけ肌粗く、切り難し技法不明。
第185図 PL.56	36坑 3	須恵器 壺	北部-16 底部	口 — 底 6.2 高 —	C 灰黄褐 還元 元焼	器表暗灰色から黒色。高台貼り付け。高台内右回転軸切痕残る。
第185図 PL.56	36坑 4	須恵器 壺	中央部-9 1/5	口(13.6) 底 —	B 浅黄 酸化焼	口縁部外反。推定径や大きい。右回転軸調整。
第185図 PL.56	36坑 5	須恵器 壺	西部-8 口縁部小片	口(15.8) 底 —	B にぶい 黄橙 酸化焼	口縁部外反。小片のため推定径や大きい可能性高い。右回転 軸調整。
第185図 PL.56	36坑 6	灰輪陶器 壺	中央部-21 1/4	口(13.8) 底 —	緻密 灰黄 良好	口縁部端部小さく外反。口縁部から体部内面磨滅。外面体部 下位 口縁部削り。
第185図 PL.56	44坑 1	須恵器 壺	中央部-15.5 1/4	口(13.8) 底(7.0) 高 5.2	B 灰白、黒 還元 元焼	口縁部灰白色。体部から底部黒色。体部直線的に開き、口縁部 外反。高台貼り付け。高台内右回転軸切痕残る。底部内面から 高台内面下端、使用による磨滅で光沢を放つほど平滑となる。
第185図 PL.56	45坑 1	須恵器 壺	埋没上 1/3	口(11.6) 底 —	D 灰黄 還元 元焼	体部内滑し。口縁部外反。右回転軸調整。
第185図 PL.56	45坑 2	須恵器 壺	北東部-27.5 底部	口 — 底 7.3	C 灰白 還元 元焼	高台貼り付け。高台内右回転軸切痕残る。
第185図 PL.56	47坑 1	須恵器 高杯	埋没上 1/5	口(14.0) 底 —	A 灰白 還元 元焼	器表摩滅。軸調整方向不明。
第185図 PL.56	47坑 2	土師器 甕	南部床直 口縁部1/4	口(22.2) 底 —	B 濁 良好	口縁部コウの字状。口縁部横撫で。口縁部屈面外面強い横撫で、 体外外面見。体部内面横撫で。
第185図 PL.56	48坑 1	須恵器 壺	北部-20 1/6	口(14.0) 底 —	B にぶい 黄橙 酸化焼	口縁部外反。内面黒色処理。内面丁寧な磨きで単位不明瞭。

5・9号溝

種別番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調整等
第188図 PL.56	5溝 1	土師器 環	埋没上 1/6	口(13.6) 高 —	A' 明赤 濁 良 好	器壁や厚く、口縁部外反。内面磨き。口縁部外面横撫で。 体外外面器表斑状に剥離。体外外面撫でか。
第188図 PL.56	5溝 2	須恵器 壺	埋没上 1/6	口(13.3) 底 —	B 灰白 還元 元焼	器壁や厚く、体部から口縁部直線的に開く。右回転軸調整。
第188図 PL.56	5溝 3	灰輪陶器 皿	埋没上 1/3	口(12.4) 底 6.2 高 2.7	緻密 灰白 良好	口縁部小さく外反。口縁部から体部内外面磨滅。底部内面と高 台端部平滑。
第188図 PL.56	5溝 4	土師器 甕	埋没上 1/3	口(12.1) 底 —	D にぶい 黄褐 良好	口縁部横撫で。体外外面成形時の撫でで、接合痕や指頭圧痕状 の凹凸多い。体外外面下端削り。体部内面強い斜位撫で。
第188図 PL.56	5溝 5	須恵器 羽釜	埋没上 口縁部1/6	口(20.0) 底 —	D 橙 酸化焼	口縁部内湾。軸調整方向不明。器の跡り付け丁寧。
第188図 PL.56	9溝 1	須恵器 壺	埋没上 1/8	口(13.9) 底 —	B 灰白 還元 元焼	口縁部外反。底部付近器壁厚い。右回転軸調整。
第188図 PL.56	9溝 2	須恵器 壺	埋没上 底部1/6	口 — 底(18.9)	B 灰 還元 元焼	焼き締まる。外面撫で。内面回転横撫で。軸調整方向不明。

1号井戸

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 調整等
第190図 PL.56	1	土師器 環	埋没上 1/2	□ 11.4 高 3.4	D 橙 良好	平面楕円形を呈するが、完形でなく短径不明。口縁部外反。内部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面型肌一部残る。底部外面磨削り。
第190図 PL.56	2	土師器 環	埋没上 1/2	□ 10.4 高 3.3	A 橙 良好	口縁部内湾。内面器表摩滅し、調整痕不明。口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。
第190図 PL.56	3	土師器 環	埋没上 1/6	□(10.8) 高 —	D 橙 良好	口縁部外反。内部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面一部に型肌残存。底部外面磨削り。
第190図 PL.56	4	土師器 環	埋没上 1/4	□(11.0) 高 —	A 橙 良好	口縁部やや外反。内部内面から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。平面形に歪みがあり、口径は不正確。
第190図 PL.56	5	須恵器 高環か	中央部—66、埋没上 体部下位	□ — 底 —	D 灰黄 酸化焙	内断面褐色。胎土緻密で精良。酸化焙のわりに焼き締まる。外面器表を淡き橙色。内面不定方向の撫で。体部下位外面回転磨削り。脚部欠損。

2号墓

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 調整等
第191図 PL.57	1	肥前陶器 甕	埋没上 完形	□ 11.4 底 4.5 高 7.5	灰白	京焼風陶器、呉器手挽。胎土が灰白色で灰色味を帯びた色調となる。高台端部を除いて透明釉。貫入入る。17世紀後半。

35号ピット

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 調整等
第193図 PL.57	1	土師器 環	埋没上 1/3	□(11.9) 底(6.2) 高 3.4	B 褐 良好	内面底部周縁から口縁端部外面横撫で。内面の横撫で。底部周縁からの撫で上げ部残る。外面体部中位から底部磨削り。口縁部外面型肌残存。

遺構外

種別番号 図取番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	法量	胎土色調 焼成	形・成調 調整等
第198図 PL.60	1	土師器 環	覆瓦 1/3	□(10.4) 高 —	A にぶい黄褐 良好	口縁部内面して立ち上がる。内部内面上平から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。
第198図 PL.60	2	須恵器 環	22任埋没上 完形	□ 13.0 底 5.1 高 3.3—3.8	D 灰黄褐 還元焙	器形歪む。口縁部外反。底部右回転糸割無調整。内面から口縁部内面に油状黒色物付着し、口縁部内面を中心に厚い面所多い。
第198図 PL.60	3	須恵器 環か	表上 口縁部片	□(14.8) 底 —	A 灰白 酸化焙	体部凹き。口縁部僅かに内湾。外面不明磨削。
第198図 PL.60	4	灰輪陶器 碗	表上 1/4	□(13.8) 底 —	緻密 灰白 良好	口縁部内面やや肥厚。口縁部から体部内外面施釉。灰輪漬け掛けか。体部外面下位回転磨削り。
第198図 PL.60	5	緑輪陶器 碗	表上 口縁部小片	□ — 底 —	緻密 灰 良好	口縁部上方から押さえて輪花とし、口縁部外面も上方から押さえ、内面を盛り上げる。内外面丸みを有し、端部内側尖り気味。体部外面下位回転磨削り。口縁部から体部内外面施釉。底部内面と高台端部平滑。
第198図 PL.60	6	灰輪陶器 皿	表上 1/3	□(13.4) 底(6.8) 高 2.6	緻密 灰黄 良好	体部から口縁部直線的に開く。高台外面丸みを有し、端部内側尖り気味。体部外面下位回転磨削り。口縁部から体部内外面施釉。底部内面と高台端部平滑。
第198図 PL.60	7	緑輪陶器 皿	1/7	□(12.0) 底 —	緻密 淡黄 良好	口縁部緩く内湾し外面小さく窪む。胎土軟質。濃緑色の釉剥離多い。
第198図 PL.60	8	須恵器 志か瓶類	29坑埋没上 底部1/5	□ — 底(16.0)	C 灰黄褐 酸化焙	外面撫で。内面輪轆目残る。
第198図 PL.60	9	常滑陶器 甕	表上 頸部片	□ — 底 —	灰白	胴部から頸部にかけての湾曲部片。高部外面自然釉。中世。
第196図 PL.59	120	赤生土器 壺	頸部片	□ — 底 —	細砂粒 にぶい黄橙 良好	櫛歯状文。4～6本単位の櫛歯波状文。
第196図 PL.59	121	赤生土器 壺	胴部片	□ — 底 —	細砂粒 にぶい黄橙 良好	4～6本単位の櫛歯波状文。
第196図 PL.59	122	土師器 壺	表上、94M18 口縁部片	□(11.0) 底 —	A 橙 良好	頸部外湾し口縁部直線的に開く。口縁端部外方に折り返す。内外面磨削り。

鳥取松合下遺跡

方：ガラス
角筒：角四石安山岩

製版遺跡

須恵器

- A：夾雑物は少ないが、夾雑物中では白色鉱物粒がやや目立つ。灰色粒含む。
 C：白色鉱物粒と透明鉱物粒多く含む。黒色鉱物粒少量含む。両者を含む岩片微量含む。
 D：微細な鉱物粒を多く含む。BはAよりも白色鉱物粒が多い。

土師器

- A：鉱物粒含む。輝石か角閃石と考えられる黒色鉱物粒多く含む。A'は鉱物粒が少ない。
 B：鉱物粒含むが、透明鉱物粒や黒色鉱物粒は目立たない。赤色粒多く含む。白色鉱物粒少量含む。
 C：透明鉱物粒と黒色鉱物粒多く含む。赤色粒含む。
 D：鉱物粒含む。薄く割れ、光を反射する雲母状の小片含む。

遺物観察表

第16表 鳥取松合下遺跡 金属製品観察表

1号住居					法量の単位はcm, gである。	
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第13図 PL_29	鉄器 刀子	南部東11 刃部切先側片	残存長 残存重	5.2 幅 0.9 厚 0.2	表裏ともに錆化が進んでいる。	
7号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第23図 PL_30	鉄器 釘	東部中央6.5 頭部側片	残存長 頭部	4.2 幅 0.9×0.8 厚 0.5 残存重 5.0	断面四角形、頭部は折り曲げ、叩き作っている。錆化が進んでいる。	
8号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第23図 PL_31	鉄器 鏃	中央部10 茎部下半欠損	残存長 茎部幅	10.7 対部幅 2.0 厚 0.4 0.6 厚 0.6 残存重 18.4	頭部と茎部の間に間をもつ、間幅1.0×0.7mm、逆刺の状態が左右不均等な状態から鉤の可能性もある。錆化が進んでいる。	
第23図 PL_31	鉄器 釘	北西部隅43 定形	全長 頭部	3.9 幅 1.2 厚 0.4 重 2.1	断面四角形、頭部は折り曲げ、叩き作っている。錆化が進んでいる。	
9号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第25図 PL_31	鉄器 鎌か	北西部隅床直 先端部欠損	残存長 残存重	15.5 幅 2.7 厚 0.3 27.7	柄に取付ける折り曲げが作られていない。全体的に錆化が進んでいる。	
第25図 PL_31	鉄器 刀子	P4北床直 刃部→柄部片	残存長 柄部幅	11.3 対部幅 1.1 厚 0.4 0.3 残存重 8.7	刃部は途中で折れ曲がっている。錆化が進んでいる。	
第25図 PL_31	鉄器 不明	南西部10 一部片	残存長 残存重	5.1 幅 2.2 厚 0.3 8.6	断面は薄い板状を呈す。全体的に錆化が進んでいる。	
第25図 PL_31	鉄器 釘	P4内26.5 頭部側1/2片	残存長 残存重	4.1 幅 0.6 厚 0.4 3.9	断面四角形、頭部は折り曲げ、叩き作っている。錆化が進んでいる。	
第25図 PL_31	鉄器 紡車	P4南床直 軸下半部欠損	残存長 軸幅	11.5 径 3.9 厚 0.4 18.7	軸上半部は先端の糸掛け部分がかすかに確認できる。	
11号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第29図 PL_32	鉄器 不明	埋没上 下位欠損片	残存長 孔径	6.0 幅 2.9 厚 0.4 0.8 残存重 13.0	木の葉状、中央部に円形の孔。表裏とも錆化が進んでいる。	
第29図 PL_32	鉄器 不明	中央部床直 先端部欠損	残存長 へら部幅	11.5 柄部幅 1.0 厚 0.4 2.9 厚 0.4 残存重 38.9	鋭状を呈す。機能不明。表裏とも錆化が進んでいる。鉄製の可能性もある。	
第29図 PL_32	9 埴形鍛冶滓(中、含鉄)	埋没上	長 残存重 磁着度	8.1 幅 8.7 厚 3.9 241.4 5 メタル度 L(●)	底部が埴形であることから埴形鍛冶滓としたが、表面に厚く酸化土砂が付着しており、詳細は不明。本遺跡出土の埴形鍛冶滓と比較して本灰渣が直径約2cmと大きく、残存する金属鉄が豊富であることから、製錬時に生成した鉄塊系遺物の可能性もある。	
12号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第33図 PL_33	鉄器 釘	北東部隅床直 両端部欠損	残存長 残存重	5.0 幅 0.6 厚 0.4 6.0	先端部がやや折れ曲がっている。表面は錆化が進んでいる。	
第33図 PL_33	鉄器 釘	カマド右袖15 両端部欠損	残存長 残存重	5.3 幅 0.5 厚 0.4 4.3	錆化が進み、内部に空洞化がみられる。	
第33図 PL_33	鉄器 不明	北東部隅床直 上端部欠損か	残存長 残存重	11.6 幅 0.4 厚 0.4 9.9	両端部が尖っている形状か、下部に凹状の形状がみられる。	
13号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第35図 PL_34	12 埴形鍛冶滓(小、含鉄)	埋没上	残存長 残存重 磁着度	5.9 幅 5.1 厚 38.2 1 磁着度1 メタル度錆化(△)	約1/4残存。断面は光沢のある灰褐色を呈する。気泡が点在するものの質は密。	
14号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第39図 PL_34	鉄器 刀子	埋没上 刃部→柄部片	残存長 柄部幅	9.9 対部幅 1.3 厚 0.4 0.8 厚 0.5 残存重 16.0	柄部の側面に木質部が残る。全体的に錆化が進んでいる。	
第39図 PL_34	鉄器 不明	埋没上 ほぼ定形	長 重	2.3 幅 1.7 厚 1.6 器厚 0.3 6.7	板状を折り曲げて環状にしている。錆化が激しい。	
16号住居						
種別	種類	出土位置	計測値		成形・整形の特徴	
遺物番号	器種	残存率				
第44図 PL_36	6 金属製品 銅胸	中央部26.5 口縁部片	残存高 残存重	3.3 残存幅 2.4 器厚 0.1 4.2	後の圧力で歪が生じている。口縁部が僅かに肥厚する。	

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第44図 PL.36	7	鉄器 鎌か釘	中央部22.5 一部片	残存長 2.5 幅 0.6 厚 0.3 残存重 3.4	断面長方形、上部の欠損場所は錆化での肥厚か。
第44図 PL.36	8	鉄器 針状品	20枚1坑北11 上位片	残存長 3.3 幅 0.6 厚 0.3 残存重 2.7	最上部に楕円形の孔がみられるが錆化で不鮮明。
第44図 PL.36	9	鉄製品 釣手金具	北部39 一部片	残存高 3.5 長 3.3 幅 1.4 厚 0.6 残存重 14.7	全体の形状不明。断面四角形、上端部は棒状を折り曲げて環状を作っている。

18号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第47図 PL.36	2	鉄器 釘	南西部中央5 先端部側片	残存長 3.4 幅 0.5 厚 0.5 残存重 2.1	断面四角形、先端部に僅かな欠損力所あり。錆化が進んでいる。
第47図 PL.36	3	鉄器 釘	19住北西隅床直 先端部側付近片	残存長 3.5 幅 0.6 厚 0.5 残存重 1.3	断面四角形、内部まで錆化が進んでいる。
第47図 PL.36	4	鉄器 釘	2.6住北西隅床直 先端部側片	残存長 2.6 幅 0.4 厚 0.4 残存重 1.5	断面四角形、錆化が進み、内部は空洞化している。
第47図 PL.36	5	鉄器 斧	南西部喫煙床直 完形、橋木貫一 部残	長 9.9 幅 4.3 基部厚 1.7 先厚 0.3 器厚 0.3 重 139.8 (本含)	取り付けた柄の木質部は腐食が進んでいるが残る。表面は錆化が進む。

19号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第47図 PL.37	8	鉄器 釘	北西部床直 頭部	残存長 2.3 幅 0.2 厚 0.2 頭部 0.7×0.4 残存重 0.9	断面四角形、頭部は台形状。錆化が進んでいる。
第47図 PL.37	9	鉄器 刀子	埋没上 刃部切先端片	残存長 5.0 幅 0.9 厚 0.4 残存重 4.3	表裏とも錆化が進んでいる。

3号土坑・2号溝

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第52図 PL.37	3坑	鉄器 釘	埋没上 先端部 側付近片か	残存長 3.1 下半幅 0.5 厚 0.4 上半幅 0.4 厚 0.2 残存重 1.4	残存部下半は断面四角形、上半は厚さのない長方形。錆化が進んでいる。
第8図 PL.一	2溝 1	銭貨 寛永通宝	B区2号溝 完形		内端に割線、中間に鉄銭3枚。鉄銭が破損の恐れあり、分離不可能。全て新寛永、鉄銭は元文8年(1739)初鋳。

遺構外

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第54図 PL.38	18	鉄器 釘	表上 切先端片	残存長 4.5 幅 0.6 厚 0.4 残存重 4.8	先端部側が僅かに曲がる。断面四角形、錆化が進んでいる。

第17表 厨城遺跡 金属製品観察表

6号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第71図 PL.41	8	鉄器 鉋	埋没上 ほぼ完形	残存長 15.4 刃部幅 1.0 厚 0.3 柄部幅 7.0 厚0.7 残存重 18.9	刃部先端を僅かに欠損。表裏とも錆化が進んでいる。
第71図 PL.41	9	鉄器 鎌	埋没上 柄部～刃部片	残存長 4.5 残存幅 0.5 器厚 0.3 残存重 2.8	柄部は断面四角形、刃部はドリル状に加工されている。内部は空洞化が進んでいる。

8号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第76図 PL.42	21	鉄器 刀子・釘	北西隅5 ほぼ完形	刀子 長 13.7 幅 0.8 厚 0.3 釘 長 6.2 幅 0.7 厚 0.5	刀子と釘が融着。刀子は柄の端部、釘は先端部を僅かに欠損。
第76図 PL.42	22	鉄器 刀子	北西隅床直 完形	長 8.1 幅 1.4 厚 0.5 重 9.8	上位に他の鉄器小片が融着。先端部の錆化が激しい。
第76図 PL.42	23	鉄器 刀子	埋没上 ほぼ完形	長 17.3 幅 1.0 厚 0.4 重 19.4	3カ所で折り曲げられている。錆化が進んでいる。

9号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第79図 PL.43	10	鉄器 釘	カマ下外東 先端部片	残存長 2.4 幅 0.5 厚 0.4 残存重 1.6	錆化が進み、縦方向に亀裂がみられる。

11号住居

挿入番号 図版番号	遺物 番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	成形・整形の特徴
第81図 PL.43	9	鉄器 鋸	埋没上 底部破片	残存長 5.3 幅 4.3 厚 0.4 残存重 41.39	鋸歯、底部破片。

遺物観察表

16号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第91図 PL.44	14	鉄器 刀子	西部中央6 柄～刃部片	残存長 8.6 残存重 13.6	幅 1.9 厚 0.3	刃部は長期に使用か、研磨によって部に比べ刃部が細くなっている。錆化が進んでいる。
第91図 PL.44	15	鉄器 鋸・鏃	4坑内15 刃部	残存長 4.9 残存重 5.0	幅 1.1 厚 0.4	表面の状態、柄の曲り具合から鋸の可能性が高い。表面とも錆化が激しい。

21号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第98図 PL.45	1	鉄器 鏃	埋没上 刃部～頸部	残存長 9.7 残存重 6.9	幅 0.6 厚 0.3	長頸三角形鏃（端欠陥）、頸部に僅かな湾曲がみられる。表面とも錆化が進んでいる。

29号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第119図 PL.48	10	キール 戦口	埋没上 戦口	残存長 9.0 径 0.8	口径径 0.35	羅字の接合部から口付まで裝飾的な特徴はみられず、作りは素朴である。

31号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第122図 PL.49	11	鉄器 釘	北西部床直 ほぼ完形	残存長 6.2 残存重 7.4	幅 0.7 厚 0.7	頭部の折り曲げ部分は欠損。表面の錆化は進んでいるが内部は比較的良好か。

33号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第125図 PL.-	16	埴形鏡治淨 （極小）	埋没土	残存長 5.2 残存重 45.7	幅 4.4 厚 2.0 磁着度 1	約1/2残存。断面は光沢のある灰褐色を呈する。気泡が点在するもの、洋質は形。下面には長軸5mmほどの細かい木炭粒が点在する。上面は垂れが生じている。

34号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第125図 PL.-	8	鉄製品 紡錘車	カマド内10 軸部片	残存長 10.5・7.1 残存重 14.8	幅 0.4 厚 0.3	断面はやや丸みをもつ四角形。表面は錆化が進み、内部は空洞化が始まっている。
第125図 PL.49	9	埴形鏡治淨 （極小、含鉄）	埋没土	残存長 6.0 残存重 49.1	幅 3.9 厚 1.9 磁着度 1 メタル度 錆化(△)	上面は平坦で洋質は密。断面は光沢のある灰褐色を呈する。薄手。上面に発現した粘土質溶解物が付着しており、頸口の容積が。

35号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第128図 PL.50	10	鉄器 不明	北東隅5 一部片	残存長 4.5 残存重 7.0	幅 0.6 厚 0.6	端部を二股に裂いて環状に丸めている。錆化が進んでいる。

36号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第128図 PL.50	12	鉄器 刀子	北部中央35.5 刃部片	残存長 4.7 残存重 6.0	幅 0.8 厚 0.2	錆化が進み、内部も空洞化している。
第128図 PL.50	13	鉄器 鏃	西部北寄り11 柄～頸部	残存長 7.9 残存重 19.9	幅 2.9 厚 0.4	古代の加里麻多鏃か。刃部を欠損。表面とも錆化が激しい。
第128図 PL.50	14	鉄器 釘	南西部隅19.5 頭部断片	残存長 2.3 頭部 1.6×1.3	幅 1.2 厚 0.4 残存重 3.0	頭部は平たくたき折り曲げている。錆化が進んでいる。

42号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第138図 PL.51	8	鉄器 刀子	北東部隅床直 柄～刃部片	残存長 7.8 残存重 14.8	幅 1.6 厚 0.5	柄、刃部の端部を欠損。表面の錆化は進んでいるが内部は比較的良好か。
第138図 PL.51	9	鉄器 刀子	北部中央隅溝内 35.5 刃部の一部欠損	推定長 16.8 柄長 3.9	幅 1.3 厚 0.3 幅 0.8 残存重 24.3	刃部の中ごろを欠損。表面の錆化は進んでいるが内部は比較的良好か。

48号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第150図 PL.52	3	鉄器 鏃	埋没上 刃部破片	残存長 11.8 残存重 50.05	幅 4.5 厚 0.4	両端欠損。錆化が進んでいる。

50号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	
第155図 PL.53	10	鉄器 釘か鉄鏃	埋没上 破片	残存長 3.6 残存重 0.81	幅 0.5 厚 0.35	両端欠損。錆化が進んで空洞になっている。

56号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
第170図 PL.54	2	鉄器 釘	西部北寄り床直 須部曲片	残存長 5.0 幅 0.8 厚 0.8 残存重 20.6	頭部は僅かに膨らみをもつ。全体的に錆化が進んでいる。
第170図 PL.54	3	鉄滓 (極小、含鉄)	埋没上	残存長 9.1 幅 6.9 厚 4.9 残存重 102.2 磁着度 2 メタル度 錆化(△)	2段気味。上面は平直で垂が生じている。下面は長軸5mm程の細かい本炭痕が散在する。鉄部が内在し、表面に錆が生じている。

57号住居

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
第170図 PL.54	9	鉄器 楔	北西部隅11 完形	残存長 5.1 幅 1.4 厚 0.8 残存重 27.7	先端、基部の一部を欠損。表面の錆化は進んでいるが内部は比較的良ほか。

1号井戸

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
第190図 PL.一	6	鉄器 刀子	埋没上 刃部片	残存長 3.5 幅 0.8 厚 0.4 残存重 3.7	刃部中ほどの破片。錆化が進んでいる。
第190図 PL.一	7	鉄器 刀子	埋没上 刃部端部片	残存長 3.7 幅 0.6 厚 0.3 残存重 2.0	錆化が進んでいる。

1号墓

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
第191図 PL.57	1	銭貨 政和通宝	埋没上 完形	長径 2.55 短径 2.50 重 3.18	遺存状態は良好。北末 1111年初鋳。
第191図 PL.57	2	銭貨	埋没上 完形	長径 2.45 短径 2.45 重 2.83	文字が磨滅している。□祐通寶か。
第191図 PL.57	3	銭貨	埋没上 完形	長径 2.50 短径 2.50 重 2.97	文字が磨滅している。元□通寶か。

2号墓

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
第191図 PL.57	2	銭貨 題目銭	埋没上 破片	残存長 縦 1.90 横 1.35 重 0.94	雄半銭の3文字が残る。2片に割れている。
第192図 PL.57	3	銭貨 寛永通宝	埋没上 完形	長径 2.55 短径 2.55 重 3.40	遺存状態は良好。銅銭、新寛永、背文。
第192図 PL.57	4	銭貨 寛永通宝	埋没上 完形	長径 2.55 短径 2.53 重 3.27	遺存状態は良好。銅銭、新寛永、背文。
第192図 PL.57	5	銭貨 寛永通宝	埋没上 完形	長径 2.47 短径 2.45 重 3.16	遺存状態は良好。銅銭、新寛永、ス貝。
第192図 PL.57	6	銭貨 寛永通宝	埋没上 完形	長径 2.35 短径 2.30 重 2.33	遺存状態は良好。銅銭、新寛永、ハ貝。
第192図 PL.57	7	銭貨 寛永通宝	埋没上 完形	長径 2.50 短径 2.50 重 3.41	遺存状態は良好。銅銭、新寛永、ス貝。
第192図 PL.57	8	銭貨 寛永通宝	埋没上 完形	長径 2.35 短径 2.35 重 2.52	遺存状態は良好。銅銭、新寛永、ハ貝。

遺構外

神岡番号 図版番号	遺物 番号	種 類 器 種	出 上 位 置 残 存 率	計 測 値	成 形 ・ 整 形 の 特 徴
第198図 PL.60	10	鉄器 釘	表探 先端部欠損	残存長 6.2 幅 0.6 厚 0.3 頭部 0.9×0.5 残存重 7.5	頭部は小型の台形状。断面は四角形。錆化が進み亀裂がみられる。
第198図 PL.60	11	鉄器 釘	表上 頭部欠損	残存長 10.5 幅 0.6 厚 0.6 残存重 25.1	先端部側がやや肥厚する。先端部側の錆化が激しい。
第198図 PL.60	12	鉄器 刀子	表探 刃部片	残存長 3.7 幅 1.1 厚 0.4 残存重 4.6	刃部中ほどの破片。錆化が進んでいる。
第198図 PL.60	13	鉄器 刀子	表上 刃部片	残存長 4.4 幅 1.2 厚 0.4 刃 幅 0.9 厚 0.4 残存重 4.7	錆化が激しく器面に割離がみられる。

鉄滓の磁着度、メタル度は次のとおりである。

「磁着度」 鉄関連遺物分類用の特定「標準磁石」を用いて、資料との反応を数値化したもの。数値位置が大きいくほど、磁石との反応が強い。
「メタル度」 特殊金属探知機により金属の量を分類したもので、錆化(△)H(○)M(◎)L(●)特L(☆)の順で金属部分が多いことを示す。
概ね、H(○)は4～5mm大前後、L(●)は10～12mm大前後、特L(☆)は20mm大以上の金属鉄の残留を示す。金属探知機を用いて判定している。

遺構一覽表

第18表 鳥取松合下遺跡 住居一覽表(長軸・短軸・深さのカッコ付き、面積の以上は残存値)

No	グリッド位置	時期	形状	長軸・短軸・深さ(cm)	面積(m ²)	柱穴	部・カマド	貯蔵穴	周溝	主軸方位	重複
1	84D E13 ~ 15	古墳	方形	666・658・70	37.93	4	東	南東隅	-	N 85° E	22号住居、建て替え
2	84E F12・13	古墳	方形	431・(400)・39	11.55以上	3	東	南東隅	-	N 67° E	西側に別住居か
3	84E12	平安	長方形	374・263・22	9.84	-	東	-	-	N 94° E	10号住居
4	84G10	平安	推定方形	(332)・(126)・16	2.12以上	-	東	-	-	N 94° E	5・7号住居、7号土坑
5	84G10・11	平安	推定方形	(614)・(320)・38	10.35以上	2	東	南東隅か	-	N 87° E	4・7号住居
6	84G10	古墳	推定方形	(144)・(92)・25	1.32以上	-	-	-	-	N 86° E	4号住居
7	84F G10・11	平安	推定長方形	565・277・45	15.65	-	-	-	-	N 102° E	5・8・9号住居・3号土坑
8	84F10・11	平安	長方形	279・201・29	5.61	-	-	-	-	N 92° E	7号住居
9	84E F10・11	平安	方形	450・442・53	19.89	-	東	南東隅	-	N 85° E	7・10号住居・6号土坑、焼失住居
10	84D E11・12	平安	方形	448・440・25	17.51	-	東	-	-	N 93° E	3・9号住居
11	84E F9・10	平安	長方形	516・378・21	15.81	-	東か	南東隅か	-	N 85° E	単独
12	84F G7~9	奈良	方形	581・515・57	27.28	-	東	南東隅	-	N 83° E	13・15・21号住居・5号土坑
13	84F G7	奈良	方形	354・323・43	11.43	-	東	南東隅か	-	N 78° E	12・21号住居
14	84G H8・9	奈良	推定方形	711・(487)・49	34.62以上	2	東	南東隅か	-	N 86° E	15号住居、建て替え
15	84G H8・9	古墳	方形	587・582・76	31.49	4	東	南東隅	-	N 78° E	12・14号住居、建て替え
16	84H I6・7	平安	推定方形	(229)・(141)・40	2.22以上	-	東か	南東隅か	-	N 91° E	17・20号住居
17	84H7	平安	推定方形	(256)・(136)・49	1.74以上	1	-	-	東壁のみ	N 68° E	16・20号住居
18	84G H7・8	平安	推定方形	(186)・(144)・7	2.68以上	-	-	-	-	N 103° E	19号住居、焼失住居
19	84G H6・7	平安	方形	428・426・31	18.06	-	東	南東隅	-	N 91° E	18・20号住居、焼失住居
20	84H I6・7	平安	推定方形	(249)・415・34	8.11以上	-	東	-	-	N 99° E	16・17号住居
21	84F G6・7	古墳	推定方形	(482)・479・78	16.72以上	3	東か	南東隅か	-	N 99° E	12・13号住居
22	84D13・14	平安	方形	313・309・24	8.86	-	東	南東隅	-	N 84° E	1号住居

第19表 胴城遺跡 住居一覽表(長軸・短軸・深さのカッコ付き、面積の以上は残存値)

No	グリッド位置	時期	形状	長軸・短軸・深さ(cm)	面積(m ²)	柱穴	部・カマド	貯蔵穴	周溝	主軸方位	重複
1	85MN17 ~ 19	古墳	方形	785・755・56	59.27	4	東	南東隅	全周	N 82° E	3・12号住居
2	85O P17	古墳	方形	433・413・35	17.88	3	西	南西隅	全周か	N 94° W	6・7号溝
3	85MN17・18	平安	方形	373・282・65	10.52	-	東	南東隅	部分	N 82° E	1号住居
4	85H I15・16	古墳	方形	450・442・70	19.89	4	東	南東隅	南・西・北か	N 78° E	
5	95 I1・2	平安	方形	295・222・19	6.55	-	東	南西隅	東	N 90° E	
6	85G H19・20	平安	方形	337・268・30	9.03	-	東	南西隅	全周	N 98° E	北東隅2号土坑
7	95G H1	平安	長方形	340・243・23	8.26	-	東	南東隅	全周	N 100° E	
8	95G H2・3	平安	長方形	350・273・15	9.56	-	東	南東隅	-	N 111° E	
9	95F G1・2	平安	方形	383・305・20	11.68	1	東	南東隅	-	N 100° E	10号住居
10	95E F1・2	平安	方形	340・250・12	8.5	-	北	-	-	N 10° E	9号住居、29・31号土坑
11	95E F2・3	平安	推定方形	(190)・265・31	5.04	-	東	南西隅	-	N 83° E	北側調査区外
12	85L M17・18	縄文	推定方形	400・(317)・22	12.68以上	3	中央部北	-	-	N 32° W	1号住居・1号土坑
13	84S13	平安	方形	318・318・41	10.11	-	東	南東隅	-	N 114° E	8号溝
14	84S12	平安	推定方形	262・(162)・20	4.24以上	-	東	-	-	N 107° E	8・9号溝、南辺調査区外
15	85B C14・15	平安	方形	386・294・48	11.35	-	東	-	部分	N 117° E	9号溝
16	85C D15	平安	方形	405・313・33	12.76	1	東	南東隅	部分	N 114° E	9号溝
17	84L M13	古墳	方形	343・310・36	10.63	-	東	-	-	N 82° E	
18	84K10・11	古墳	推定方形	282・(260)・55	7.33以上	-	東か	-	部分	N 26° E	東半分道路で削平
19	84 I13	平安	推定方形	(125)・225・7	2.81以上	-	東	-	-	N 100° E	西側道路で削平
20	84 I17	古墳	推定方形	315・(193)・39	6.08以上	-	-	-	部分	N 133° E	北側調査区外
21	84L18	不明	推定方形	(142)・(90)・45	1.28以上	-	-	-	-	計測不可	北側調査区外、南西隅を掘出
22	84O P18・19	古墳	方形	430・344・77	14.79	-	東	南東隅	全周か	N 105° E	
23	84P Q19・20	平安	推定方形	(316)・276・28	8.72以上	-	東	南東隅	-	N 98° E	北側調査区外
24	84Q R20	平安	推定方形	(264)・275・38	7.26以上	-	東	南東隅	-	N 100° E	北側調査区外
25	84・94R S20・1	平安	推定方形	(210)・335・34	7.04以上	-	-	-	-	N 98° E	北側調査区外
26	84・85・94・95T A20・1	平安	方形	428・395・38	16.91	-	東3	南東隅	西・東	N 95° E	27号住居、北側調査区外
27	94T1	平安	推定方形	292・(132)・20	3.85以上	-	南東隅	南東隅	-	N 93° E	26・28号住居、北側調査区外
28	94・95T A1	平安	推定方形	(273)・(92)・23	2.51以上	-	-	-	-	N 100° E	27号住居、北側調査区外
29	84・85T A19・20	奈良	方形	475・365・68	17.34	-	東	南東隅	-	N 107° E	54号土坑

No.	グリッド位置	時期	形状	長軸・短軸・深さ(cm)	面積(m ²)	柱穴	が、 カマド	貯蔵穴	周溝	主軸方位	重複
30	85 B C 19・20	平安	方形	413・376・55	15.53	-	-	東	南東隅 部分	N107° E	31号住居
31	85 C 19・20	平安	方形	305・307・39	11.21	-	-	東	南東隅 西から北	N101° E	30号住居
32	95 D 2	平安	推定方形	(98)・253・28	2.48以上	-	-	-	-	N100° E	33号住居、32号土坑、南辺を 掘出
33	95 D 2・3	平安	長方形	350・252・32	8.82	-	-	東	-	N99° E	32・34号住居、43号土坑
34	95 D 2・3	平安	長方形	413・308・36	12.72	-	-	東	南東隅 -	N104° E	33号住居、42号土坑
35	85・95 A B 20・ 1	平安	推定方形	272・(248)・40	6.75以上	-	-	東	南東隅か -	N105° E	36号住居
36	85 A B 19・20	平安	長方形	520・390・34	20.28	-	-	東	南東隅 -	N105° E	35号住居、56号土坑
37	85 D E 20	平安	長方形	342・250・22	8.55	-	-	南	南東隅 -	N19° W	45・53号土坑
38	85 E F 19・20	平安	方形	325・297・25	9.65	-	-	東	南東隅 -	N97° E	
39	85 C D 17	平安	方形	384・307・20	11.79	-	-	東	南西隅か -	N109° E	
40	85 B 17	平安	方形	217・215・14	4.67	-	-	東	南東隅 -	N112° E	59・60号土坑
41	85 A B 17・18	平安	方形	302・252・28	7.61	-	-	東か	南西隅か -	N15° E	
42	84・85 T A 16・ 17	平安	方形	395・318・43	12.56	-	-	東	- 全周	N102° E	
43	84 S T 16・17	平安	方形	352・346・14	12.18	-	-	東	不明 -	N107° E	44号住居
44	84 S T 16・17	平安	推定方形	288・210・8	6.05	-	-	東	-	N109° E	43号住居
45	84 R S 16	平安	方形	345・305・18	10.52	-	-	東	南東隅	N101° E	46号住居
46	84 R S 15・16	平安	方形	503・415・31	20.87	-	-	東	不明 北・東	N105° E	45・47号住居
47	84 Q R 16	平安	長方形	346・210・22	7.27	-	-	東	南東隅 -	N107° E	46号住居
48	84 R S 17	平安	長方形	330・227・11	7.49	-	-	東	南東隅 -	N105° E	49号住居
49	84 Q R 17・18	平安	長方形	518・382・36	19.79	-	-	東	南東隅 部分	N103° E	48号住居、50号土坑
50	84 Q R 18	平安	長方形	340・220・47	7.48	-	-	東	南東隅 部分	N95° E	51号住居
51	84 Q 18・19	平安	方形	420・332・38	13.94	2	-	東	南東隅 -	N95° E	50号住居
52	84 P Q 16	古墳	方形	295・295・45	8.7	-	-	東	不明 -	N72° E	
53	84 P 15	奈良	方形	285・245・18	6.98	-	-	北東	北東隅 -	N46° E	
54	84 N O 14・15	古墳	方形	508・495・48	25.15	4	-	東	南東隅 -	N54° E	
55	84 K 14・15	古墳	方形	435・340・65	14.79	1	-	北東	南西隅か 西・北	N41° E	
56	84 O P 17・18	平安	方形	328・303・20	9.94	-	-	東	-	N101° E	57～59号住居
57	84 O P 17	平安	方形	280・273・18	7.64	-	-	東	-	N104° E	56・58・59号住居
58	84 O 17	平安	長方形	353・262・29	9.25	-	-	東	-	N101° E	56・57・59号住居
59	84 N ～ P 16・ 17	古墳	方形	615・610・44	37.52	3	-	東	南東隅 部分	N97° E	56～58号住居
60	84 K 16・17	平安	推定長方形	313・(160)・22	5.01以上	-	-	東	南東隅 -	N102° E	61号住居
61	84 I ～ K 15・ 17	古墳	方形	740・608・30	44.99	4	中央北 寄り	-	-	N14° E	55・60号住居

第20表 脚城遺跡 掘立柱建物一覧表(長軸・短軸・深さ・柱痕・柱間の単位はcm)

No.	位置・規模・方位	柱穴番号	長軸	短軸	深さ	柱痕	柱間	備考
1	85 D E 18・19 梁行2間(東342) 桁行2間(北353) 東西棟 北辺N75° W	P 1	47	45	37	16	P 1～P 2	173
		P 2	33	30	37	不明	P 2～P 3	180
		P 3	39	37	22	不明	P 3～P 4	155
		P 4	38	34	31	不明	P 4～P 5	187
		P 5	39	39	27	16	P 5～P 6	170
		P 6	42	37	38	不明		
		P 7	37	36	34	不明	P 7～P 1	185
2	95 C D 1 梁行1間(210) 桁行1間(235) 西辺N10° W	P 1	38	38	64	不明	P 1～P 2	235
		P 2	53	35	36	不明	P 2～P 3	210
		P 3	35	35	50	不明		
3	95 D E 1・2 梁行1間(南380) 桁行3間(西596) 南北棟 北辺N9° E	P 1	41	39	35	不明	P 1～P 2	195
		P 2	29	25	22	不明	P 2～P 3	193
		P 3	38	31	30	不明	P 3～P 4	204
		P 4	53	40	36	不明	P 4～P 5	360
		P 5	62	54	58	不明	P 5～P 6	192
		P 6	37	37	34	不明	P 6～P 7	192
		P 7	39	35	17	不明	P 7～P 8	211
		P 8	47	45	63	不明	P 8～P 1	352

遺構一覧表

第21表 胴城遺跡 土坑一覧表(長軸・短軸・深さの単位はcm、カッコは残存値)

No	位置	時代	形状	長軸・短軸・深さ	備考	No	位置	時代	形状	長軸・短軸・深さ	備考
1	95K 4	近世	円形	72・70・38		33	95C 2	古代	円形	(70)・70・13	
2	95K 4	近世	円形	58・53・22		34	95C D 1・2	古代	円形	92・87・15	
3	95K L 3	近世	楕円形	262・113・83	N 9° W	35	95C D 1・2	古代	円形	112・111・59	
4	95M 1	近世	楕円形	108・66・54	N35° W	36	95C 1	平安	円形	84・75・33	
5	95 J K 2	近世	楕円形	128・86・18	N52° W	37	95B 1	古代	円形	101・89・35	
6	95 I 2・3	近世	円形	64・55・29		38	95B 1	古代	円形	64・49・12	
7	95 I 2	近世	楕円形	62・42・21	N78° W	39	95A 1	古代	円形	72・60・25	
8	95K L 3	近世	円形	77・(75)・27	3号土坑重複	40	95E 2	古代	楕円形	89・59・37	N88° W
9	85N 19・20	近世	円形	64・60・37		41	95D 1	古代	円形	74・69・9	
10	85N 19・20	近世	長方形	124・86・26	N25° W	42	95D 1	平安	円形	100・94・22	34号住居重複
11	85L 18	近世	円形	64・58・27	12号土坑重複	43	95D 2	平安	(円形)	(54)・69・18	33号住居重複
12	85L 18	近世	円形	110・102・31	11号土坑重複	44	95D 1	平安	円形	48・44・34	
13	85K 19	近世	円形	97・82・22	4号溝重複	45	85・95D20・1	平安	円形	125・118・38	37号住居重複
14	85K L 17	近世	方形	162・(131)・71	側土堀か	46	85D 20	平安	円形	74・57・19	
15	85K 16	近世	円形	88・72・29		47	85A 18	平安	円形	96・(90)・15	48号土坑重複
16	85 I J 16	古代	円形	178・176・100		48	84A 18	平安	楕円形	(69)・110・20	N 3° E
17	85 I 16・17	古代	円形	205・192・101		49	84R 18	平安	楕円形	151・76・16	N90°
18	85 J 19・20	近世	楕円形	112・88・37	N28° W	50	84Q17・18	平安	楕円形	127・(75)・36	49号住居重複
19	85 I 19	近世	楕円形	85・58・34	N67° W	51	84S 17	平安	楕円形	116・67・16	N71° W
20	85G 17	近世	円形	68・61・26		52	85D E 19・20	平安	楕円形	165・98・30	N18° E
21	85G 17	近世	楕円形	80・51・61	N65° E	53	85D E 20	縄文	円形	114・99・54	37号住居重複
22	85 I 19・20	近世	円形	93・86・17		54	85A 20	縄文	円形	130・127・82	29号住居重複
23	95G 3	近世	円形	109・100・33		55	85B 19	古代	方形	171・143・26	N24° W
24	95G H 3	近世	(方形)	(54)・96・74		56	85B 19	縄文	不整形	96・80・27	
25	85G 20	平安	長方形	322・167・72	N 9° E	57	85A 18	縄文	円形	134・130・62	
26	85K 16・17	縄文	楕円形	(102)・108・87		58	85B 17	縄文	円形	122・119・30	63号土坑重複
27	85H・120	縄文	不整形	177・135・91		59	85B 17	縄文	円形	128・125・32	40号住居重複
28	85G 19	縄文	円形	110・100・24		60	85B 17・18	縄文	円形	127・109・22	40号住居重複
29	95E F 2	縄文	円形	191・(125)・58	31号土坑重複	61	85D 19	縄文	楕円形	169・93・36	N49° W
30	85C 13・14	縄文	円形	114・109・127		62	85E 20	縄文	円形	92・88・22	
31	95F 2	縄文	円形	157・126・114	29号土坑重複	63	85B 17	縄文	円形	94・(74)・6	58号土坑重複
32	95D 2	古代	(円形)	(75)・(28)・15							

第22表 胴城遺跡 溝一覧表(長さ・幅・深さの単位はm)

No	グリッド位置	重複	長さ	幅	深さ	方向
1	95K~M 4	2号溝	7.20	0.84~0.94	0.31~0.45	N70° E
2	95K~M 4	1号溝	8.65	0.26~0.54	0.09~0.26	N71° E
3	85MN20 95 I~N 1~4	4・5号溝、4号土坑	30.50	1.10~1.75	0.17~0.30	N55° E
4	85 J~N 17~20	3・5号溝、13号土坑、5号ピット	24.90	0.44~0.85	0.13~0.25	N55° W
5	85 I~K 17~20 95 J K 1・2	3・4号溝、5・18号土坑、5・6号ピット	25.20	1.42~3.50	0.11~0.40	N13° W
6	85N~Q 17~20 95 J K 1・2	2号住居	26.70	0.60~0.82	0.23~0.37	N27° E
7	85N O 17~20	2号住居	15.20	0.32~0.55	0.10~0.29	N29° E
8	84 S T 12・13 85 A B 13・14	13号住居、9号溝	20.50	0.30~0.60	0.07~0.14	N59° W
9	84 T 12・13 85 A~C 13~15	15・16号住居、8号溝	22.70	0.46~0.72	0.09~0.21	N62° W
10	84 S T 17~20	単独	13.70	0.50~0.62	0.08~0.19	N 2° W

第23表 胴城遺跡 その他一覧表(長軸・短軸・深さの単位はcm)

遺構名	グリッド位置	時期	形状	長軸	短軸	深さ	主軸方位	備考
1号墓	95M 3・4	江戸時代	隅丸方形	145	142	47	N51° E	政和通宝ほか
2号墓	95MN 2	江戸時代	方形	116	105	87	N16° E	寛永通宝出土
1号墳	85C~E 13~15	7世紀	円墳	西軸幅	222~365	56~81		
1号井?	85K L 18	平安時代	円形	291	289	198		

写真図版



前橋市下沖町上空からみた赤城山南麓 平成13年撮影
●が遺跡の位置、右が芳賀東部住宅団地、工業団地である。
南に芳賀西部工業団地がある。手前が広瀬川低地帯、左隅に見えるのが桃ノ木川である。



B区全景(東から)



B区全景(南から)



C区全景(北西から)



B区セクション



C区作業状況(西から)



D区作業状況(南から)



D区作業状況(南西から)



D区基本土層(南から)



D区調査区全景(北から)



D区調査区全景(東から)



D区1・2・22号住居(北上空から)



D区4～11号住居(北上空から)



D区14・15号住居(南上空から)



D区12～19・21号住居・4号土坑(南上空から)



D区1号住居SPA-A' (東から)



D区1号住居SPB-B' (南から)



D区1号住居SPB-B' (南から)



D区1号住居掘り方全景(南東から)



D区1号住居掘り方土坑埋没状況(南から)



D区2号住居掘り方全景(南東から)



D区4～6号住居(南上空から)



D区4号住居カマド全景(南西から)



D区4号住居東壁石組(南から)



D区7～9号住居遺物出土状況(南西から)



D区7号住居勾玉出土状況(西から)



D区9号住居東壁遺物出土状況(西から)



D区10号住居遺物出土状況(南から)



D区12号住居遺物出土状況(西から)



D区12号住居カマド遺物出土状況(南西から)



D区12号住居カマド全景(西から)



D区12・13・21号住居遺物出土状況(西から)



D区14号住居遺物出土状況(南東から)



D区15号住居掘り方検出状況(東から)



D区14・15号住居掘り方全景(南から)



D区15号住居カマフSPA-A' (南西から)



D区15号住居カマド全景(南西から)



D区16号住居銅碗出土状況(東から)



D区18号住居鉄斧出土状況(東から)



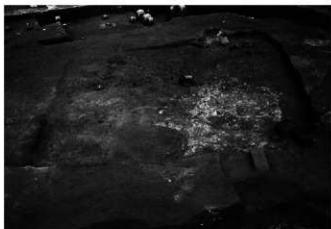
D区19号住居遺物出土状況(西から)



D区19号住居遺物出土状況(東から)



D区19号住居カマド全景(西から)



D区19号住居全景(西から)



D区21号住居全景(西から)



D区22号住居全景(南から)



D区5号土坑全景(北から)



D区7号土坑全景(東から)



調査着手前の状況(東から)



9・10号住居作業状況(南から)



平成19年度調査区全景(東から)



平成19年度調査区作業状況(東から)



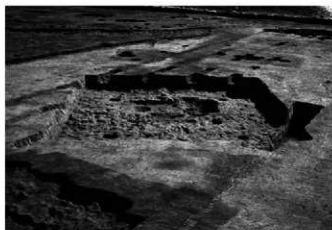
1・3号住居作業状況(東から)



1・3号住居全景(西から)



1・3号住居SPA-A'(南から)



1・3号住居掘り方全景(西から)



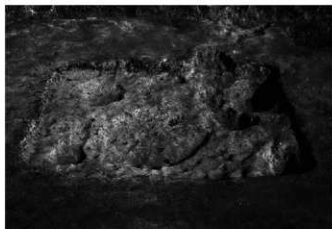
2号住居全景(東から)



2号住居掘り方全景(東から)



3号住居全景(西から)



3号住居掘り方全景(西から)



3号住居内馬骨出土状況(西から)



3号住居内馬骨出土状況(西から)



3号住居カマド全景(西から)



4号住居貯蔵穴遺物出土状況(東から)



4号住居全景(西から)



4号住居F A堆積状況(南から)



5号住居全景(西から)



5号住居掘り方全景(西から)



5号住居掘り方土坑断面(西から)



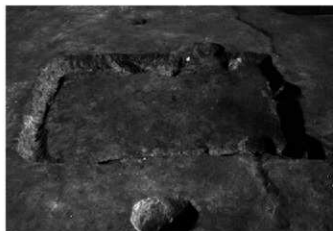
6号住居全景(西から)



6号住居掘り方全景(西から)



6・7号住居・25号土坑全景(東から)



7号住居全景(西から)



7号住居掘り方全景(西から)



7号住居掘り方断面(西から)



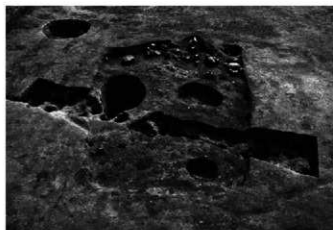
8号住居・23・24号土坑全景(東から)



8号住居東壁遺物出土状況(東から)



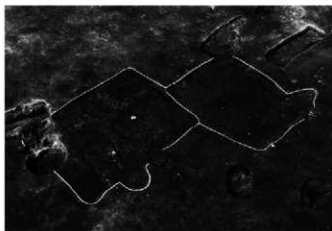
8～11号住居全景(東から)



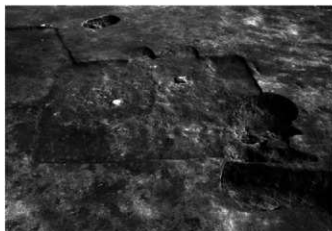
8号住居全景(西から)



8号住居掘り方全景(西から)



9・10号住居全景(東から)



9号住居全景(西から)



11号住居全景(西から)



11号住居カマド全景(西から)



12号住居遺物出土状況(南から)



12号住居遺物出土状況(南から)



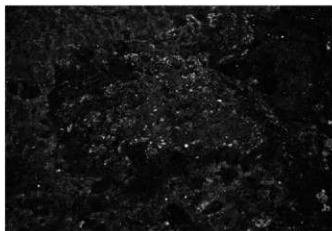
13号住居全景(西から)



14号住居全景(北東から)



15号住居全景(西から)



15号住居内坑土検出状況(西から)



16号住居全景(西から)



16号住居掘り方全景(西から)



16号住居カマド遺物出土状況(西から)



16号住居カマド全景(西から)



16号住居内土坑遺物出土状況(西から)



17号住居全景(西から)



18号住居全景(東から)



22号住居遺物出土状況(西から)



22号住居全景(西から)



22号住居 S P A - A' (南から)



22号住居 S P B - B' (西から)



22号住居遺物出土状況(西から)



23号住居全景(西から)



23号住居カマド全景(西から)



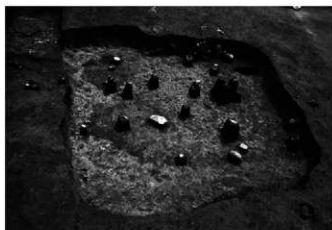
24号住居全景(西から)



24号住居カマド全景(西から)



25号住居遺物出土状況(南から)



26号住居遺物出土状況(西から)



26号住居掘り方全景(西から)



26号住居カマド遺物出土状況(西から)



26号住居カマド全景(西から)



26号住居カマド掘り方全景(西から)



27号住居全景(西から)



28号住居全景(西から)



29号住居全景(西から)



29号住居カマド全景(西から)



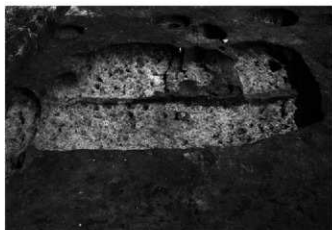
30・31号住居全景(西から)



30号住居カマド全景(西から)



33・34号住居全景(西から)



33・34号住居掘り方全景(西から)



平成20年度調査区北側全景(西上空から)



平成20年度調査区北側全景(北上空から)



35号住居全景(西から)



35号住居カマド全景(西から)



36号住居全景(西から)



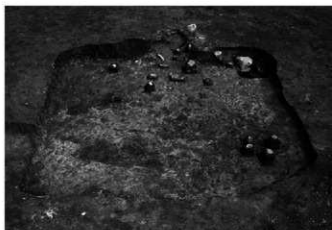
36号住居カマド全景(西から)



37号住居全景(北から)



37号住居カマド全景(北から)



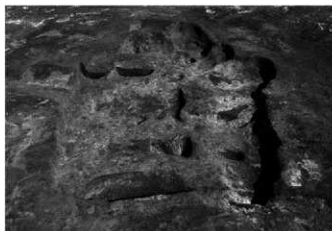
38号住居全景(西から)



38号住居カマド全景(西から)



39号住居全景(西から)



39号住居掘り方全景(西から)



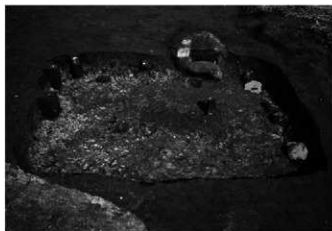
40号住居全景(西から)



40号住居掘り方全景(西から)



41号住居全景(西から)



42号住居全景(西から)



42号住居掘り方全景(西から)



42号住居カマド全景(西から)



43・44号住居全景(西から)



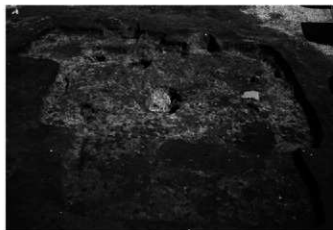
43号住居カマド全景(西から)



45号住居全景(西から)



45号住居カマド全景(西から)



45～47号住居全景(西から)



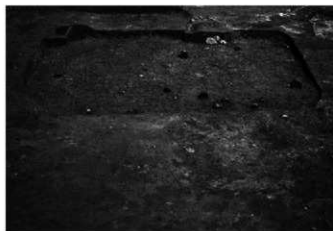
47号住居全景(西から)



47号住居カマド全景(西から)



48号住居全景(西から)



49号住居全景(西から)



49号住居カマド全景(西から)



50号住居全景(西から)



50号住居カマド全景(西から)



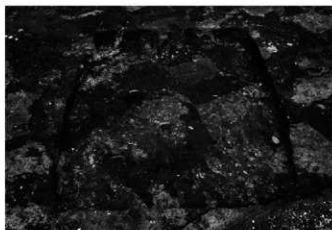
51号住居全景(西から)



51号住居カマド全景(西から)



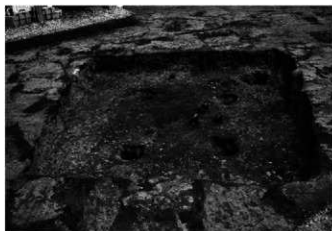
52号住居全景(南西から)



53号住居全景(南西から)



54号住居遺物出土状況(南西から)



54号住居全景(南西から)



54号住居カマド全景(南西から)



55号住居全景(西から)



56号住居全景(西から)



56号住居カマド全景(西から)



57号住居全景(西から)



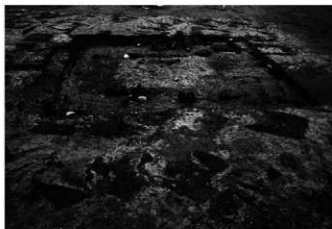
57号住居カマド全景(西から)



58号住居全景(西から)



58号住居カマド全景(西から)



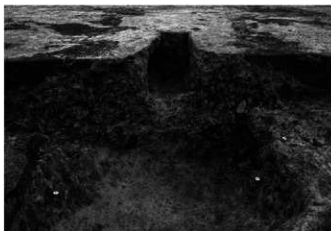
59号住居全景(西から)



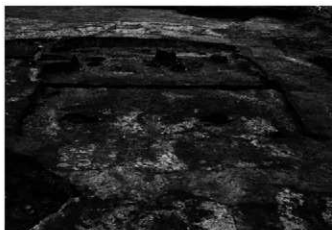
59号住居貯蔵穴全景(西から)



59号住居カマド全景(西から)



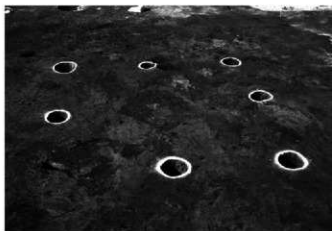
59号住居カマド掘り方全景(西から)



61号住居全景(南から)



61号住居カマド全景(南から)



1号掘立柱建物全景(南から)



2号掘立柱建物全景(西から)



3号掘立柱建物全景(南から)



1号古墳全景(北から)



1号古墳北東部(北西から)



1号古墳周堀埋没状況(北から)



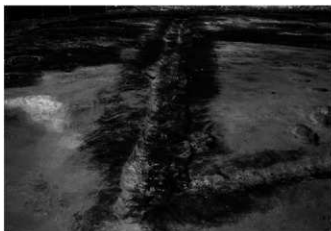
3～7号溝全景(東から)



1号溝全景(南西から)



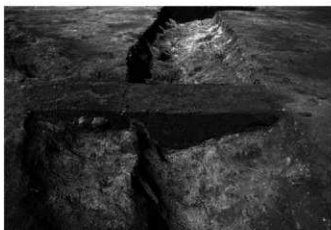
1号溝 S P A-A' (南西から)



3号溝全景(南西から)



4号溝全景(東から)



4号溝 S P A-A' (東から)



6・7号溝全景(北から)



6号溝作業状況(南から)



1号井戸 S P A-A' (南東から)



1号井戸全景(南から)



14号土坑全景(南から)



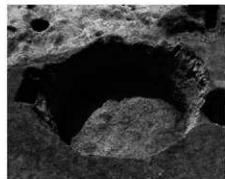
16号土坑 S P A-A' (南から)



16号土坑全景(南から)



17号土坑 S P A-A' (北から)



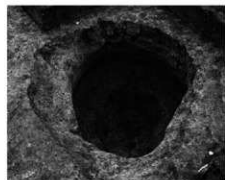
17号土坑全景(北から)



23号土坑全景(南から)



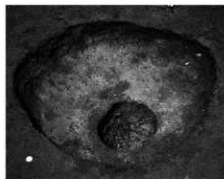
26号土坑全景(北西から)



27号土坑(南西から)



28号土坑全景(南から)



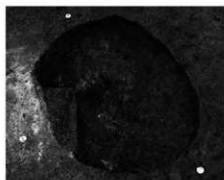
34号土坑全景(南東から)



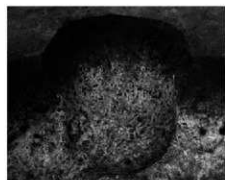
44号土坑全景(南から)



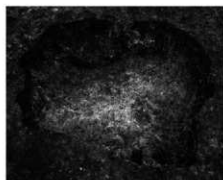
45号土坑全景(南から)



46号土坑全景(南から)



54号土坑全景(南から)



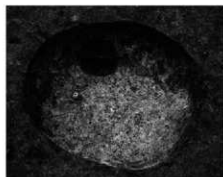
56号土坑全景(南から)



57号土坑 S P A-A' (南から)



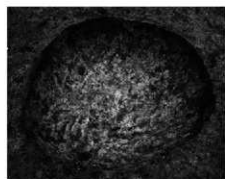
57号土坑全景(南から)



58号土坑全景(南から)



58号土坑遺物出土状況(南から)



62号土坑全景(南から)



63号土坑 S P A-A' (東から)



30号土坑全景(北から)



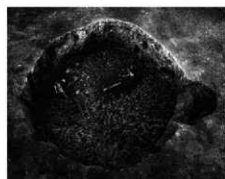
30号土坑 S P A-A' (北から)



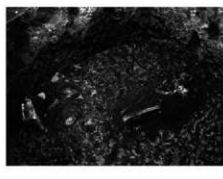
平成19年度調査区ピット群(東から)



平成19年度調査区北側全景(東から)



1号墓全景(南から)



1号墓人骨検出状況拡大(南から)



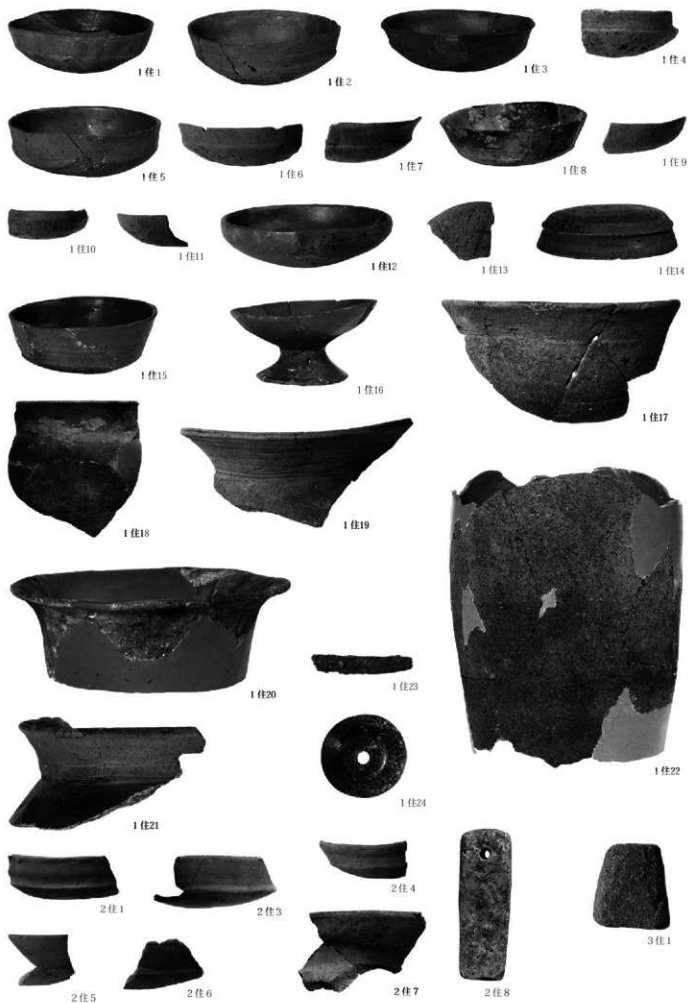
2号墓全景(東から)



2号墓人骨検出状況拡大(東から)



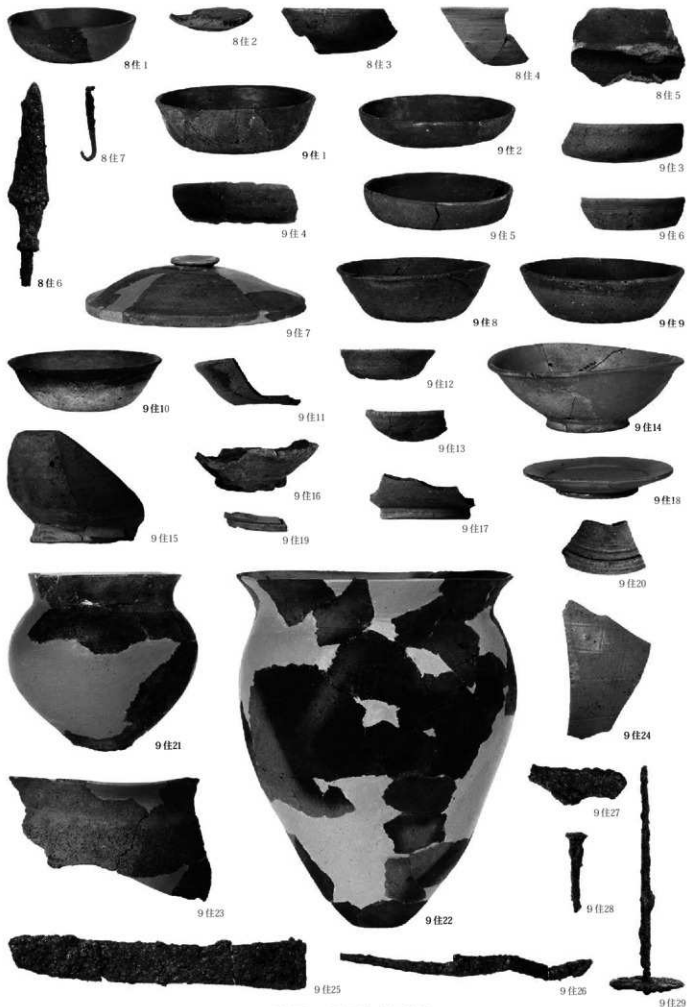
平成21年度調査区全景(東上空から)



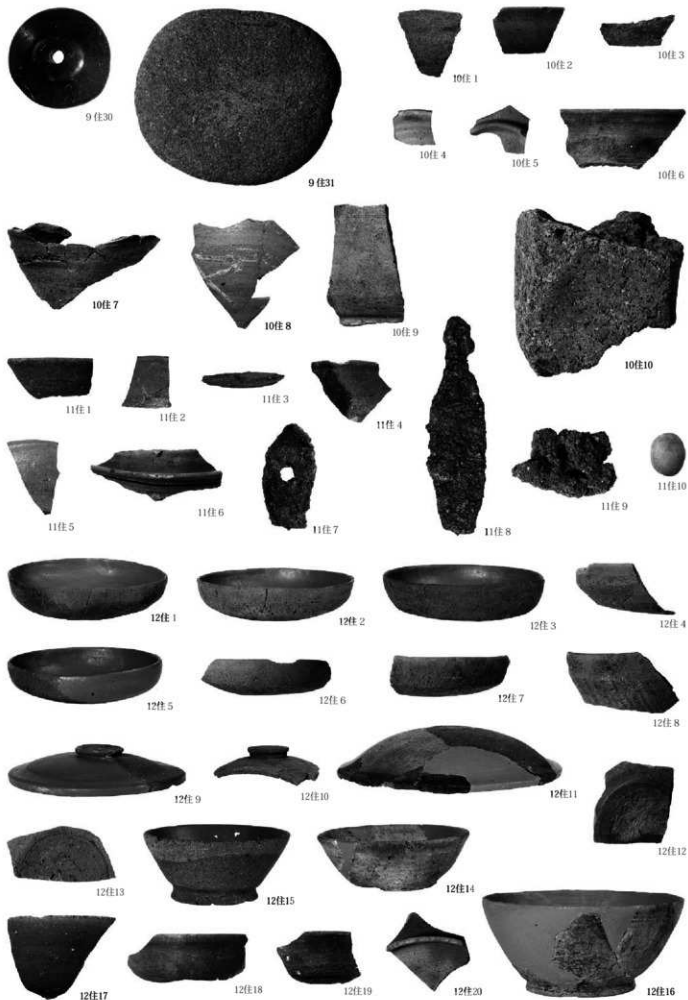
1～3号住居出土遺物



4～7号住居出土遺物



8号住居・9号住居(1)出土遺物





12住21



12住22



12住24



12住23



12住26



12住25



12住28



12住34



12住27



12住29



12住30



12住31

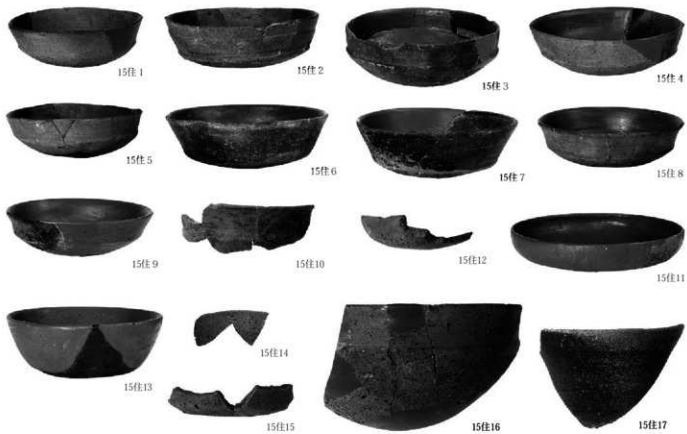


12住32



12住33







15住20



15住21



16住1



16住2



16住3



16住4



16住5



16住6



17住1



17住2



17住3



16住7



16住8



16住9



18住1



18住2



18住3



18住4



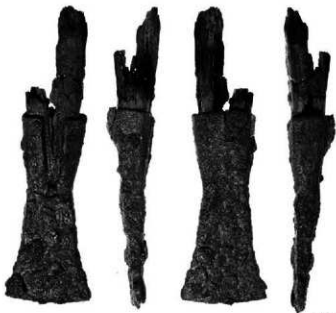
17住5



17住4



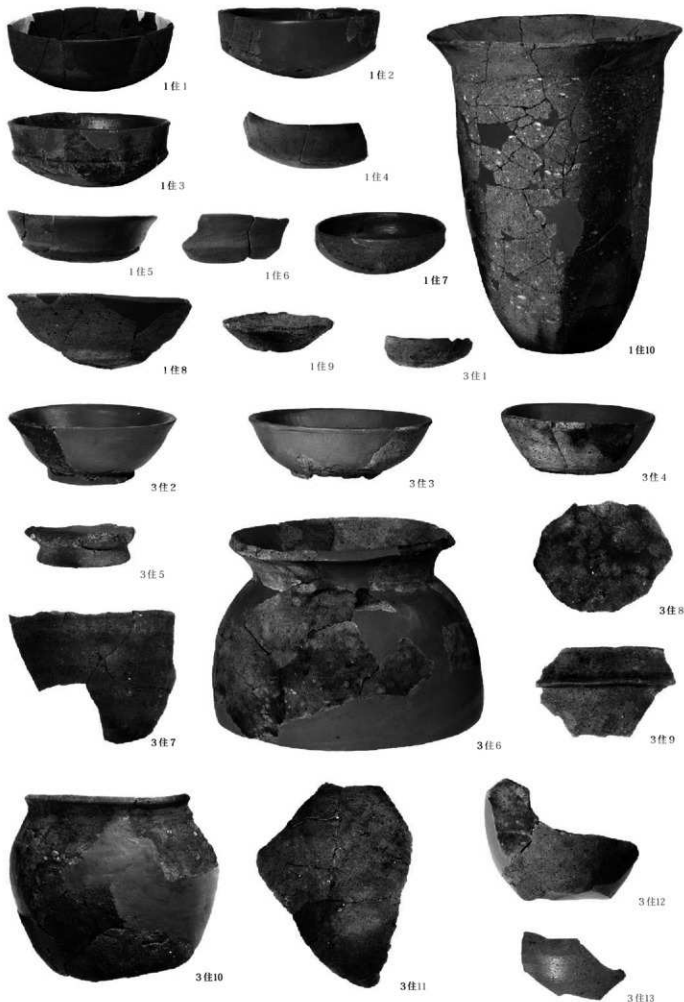
20住1



18住5







1・3号住居出土遺物



2住1



2住2



2住5



2住3



2住6



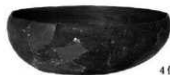
2住4



4住1



4住2



4住3



4住4



4住8



4住5



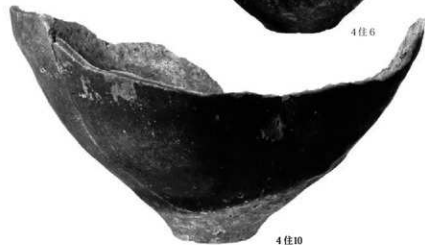
4住6



4住9



4住7



4住10



4住11



4～6号住居出土遺物

PL.42 銅城遺跡



7住1



7住2



7住3



8住1



8住2



8住3



8住4



8住5



8住6



8住7



8住8



8住9



8住10



8住11



8住12



8住13



8住14



8住15



8住16



8住17



8住18



8住19



8住20



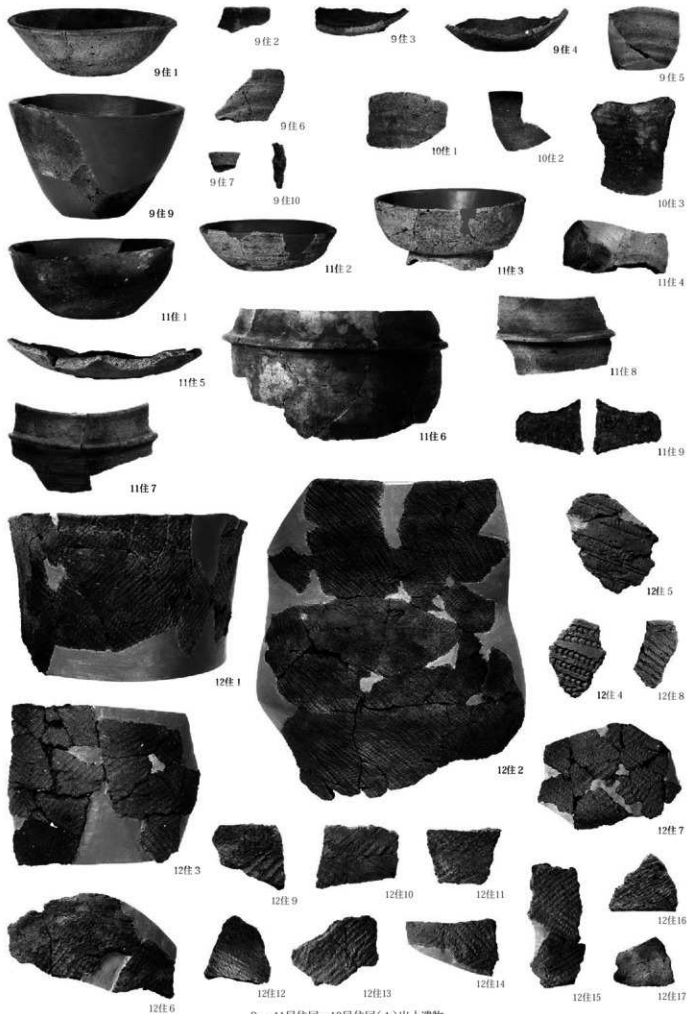
8住21



8住22



8住23



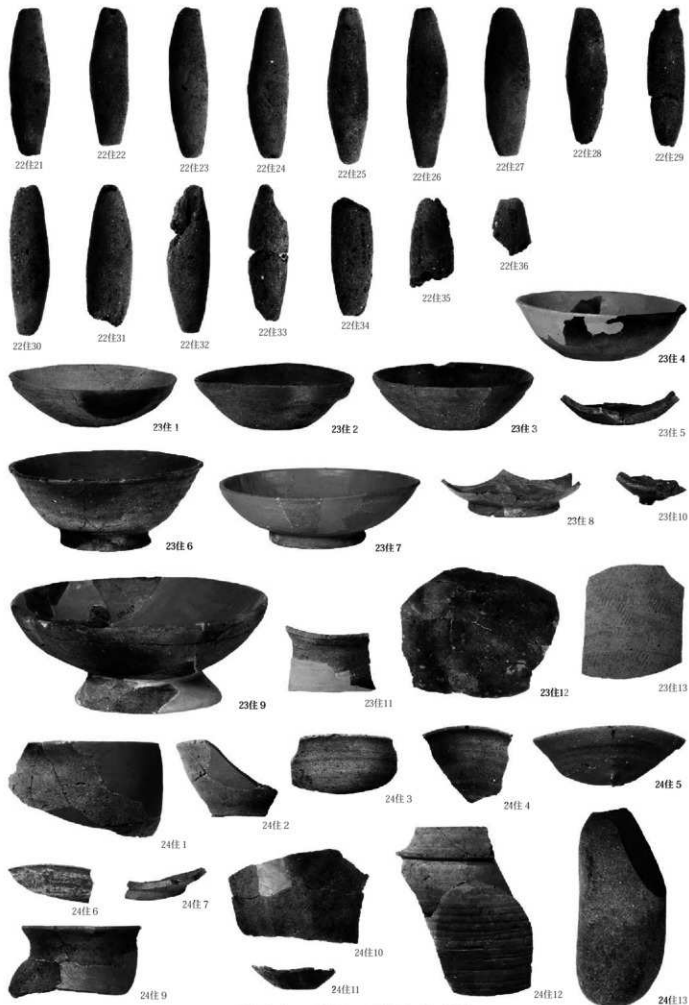
9～11号住居・12号住居(1)出土遺物



12号住居(2)・13～15号住居・16号住居(1)出土遺物



16号住居(2)・17・18・21号住居・22号住居(1)出土遺物



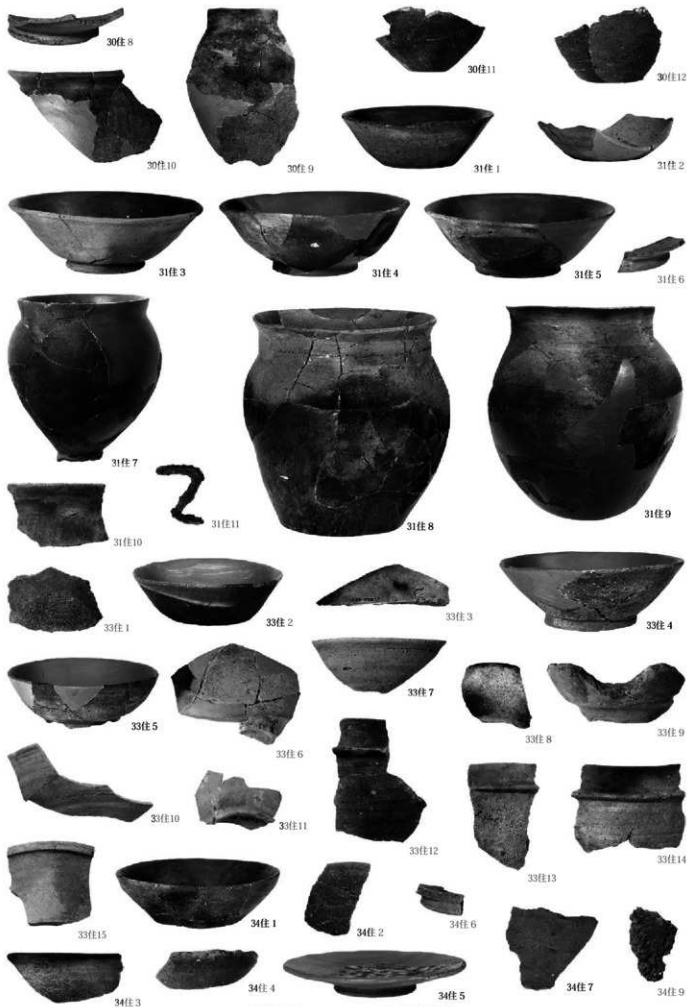
22号住居(2)・23号住居・24号住居(1)出土遺物



24号住居(2)・25号住居・26号住居(1)出土遺物



26号住居(2)・27～29号住居・30号住居(1)出土遺物







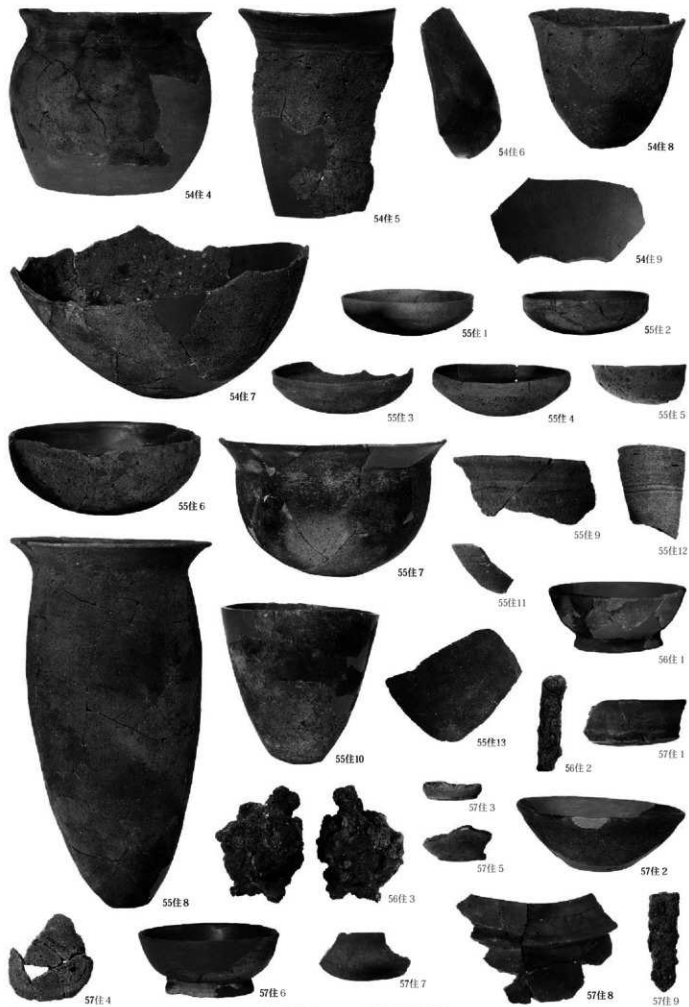
38号住居(2)・39～44号住居出土遺物



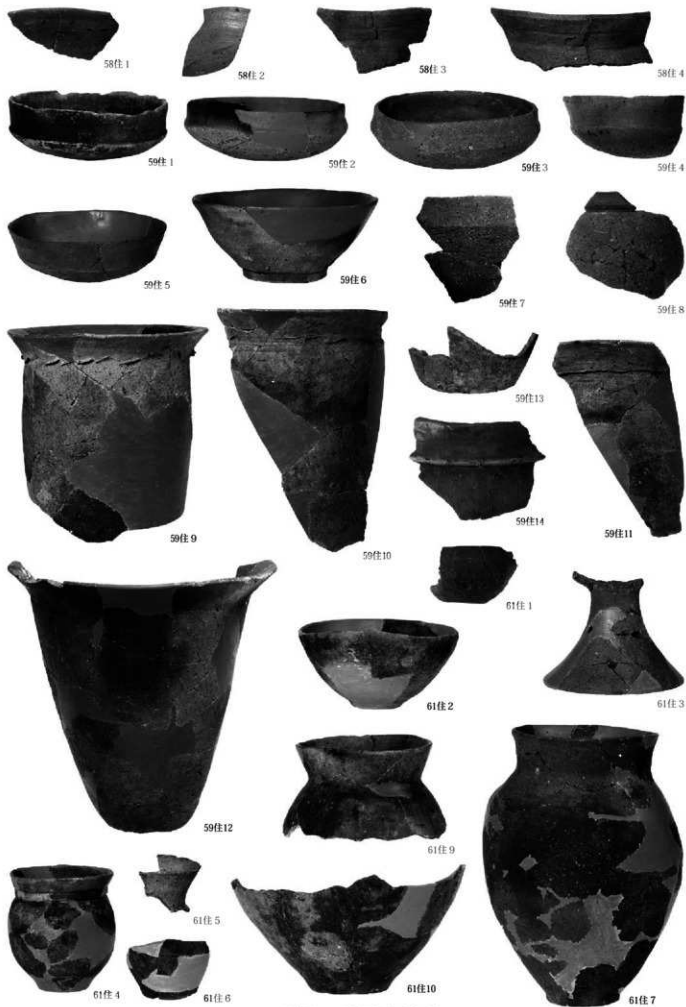
45～48号住居・49号住居(1)出土遺物



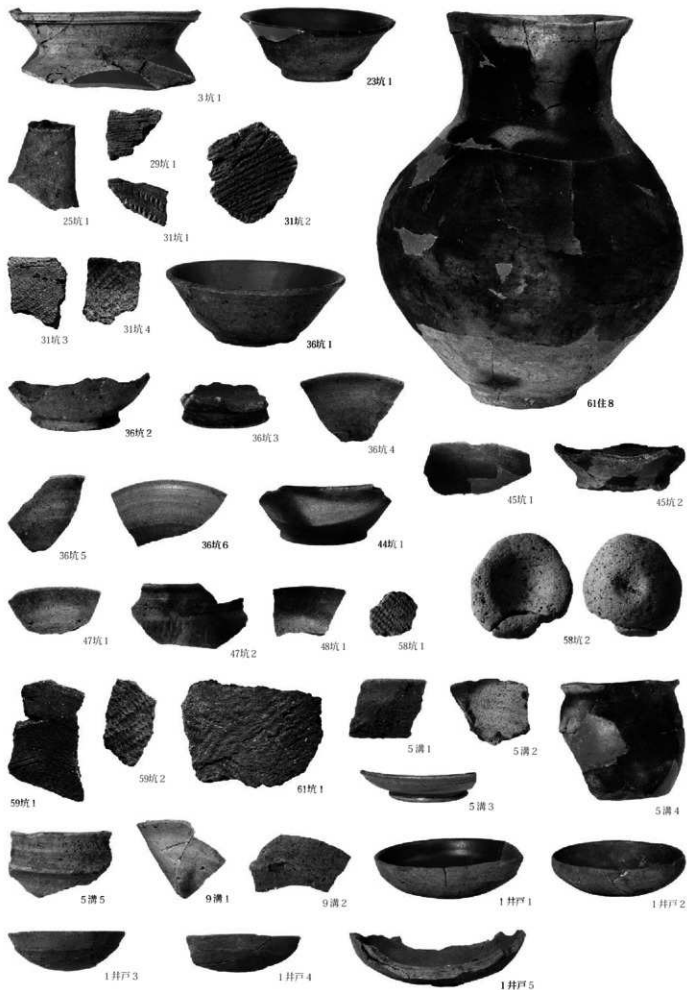
49号住居(2)・50・51・53号住居・54号住居(1)出土遺物



54号住居(2)・55～57号住居出土遺物

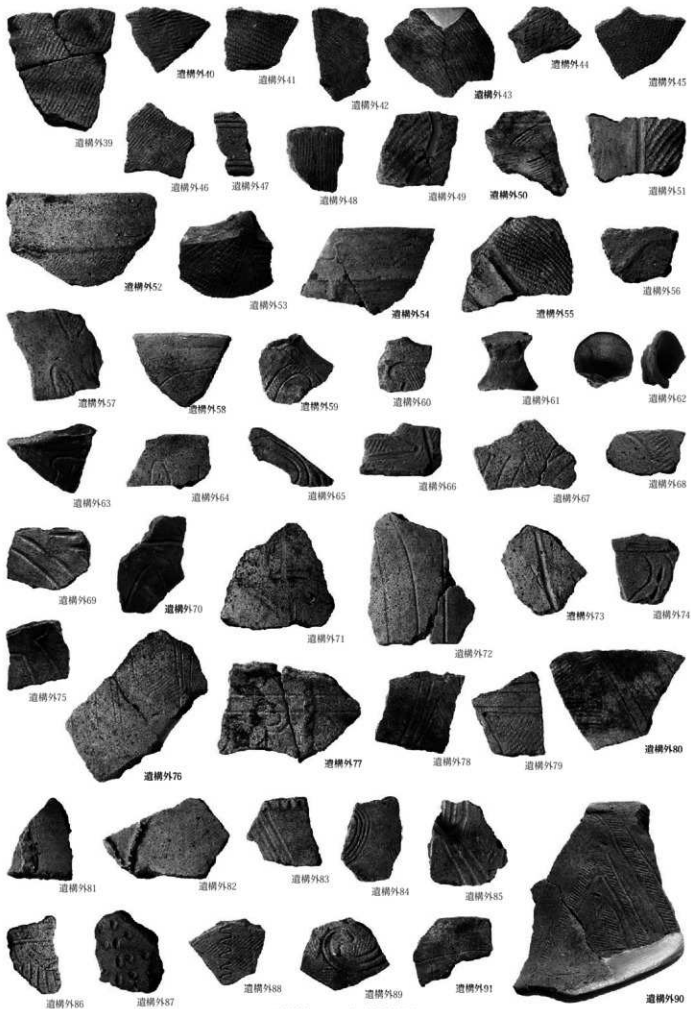


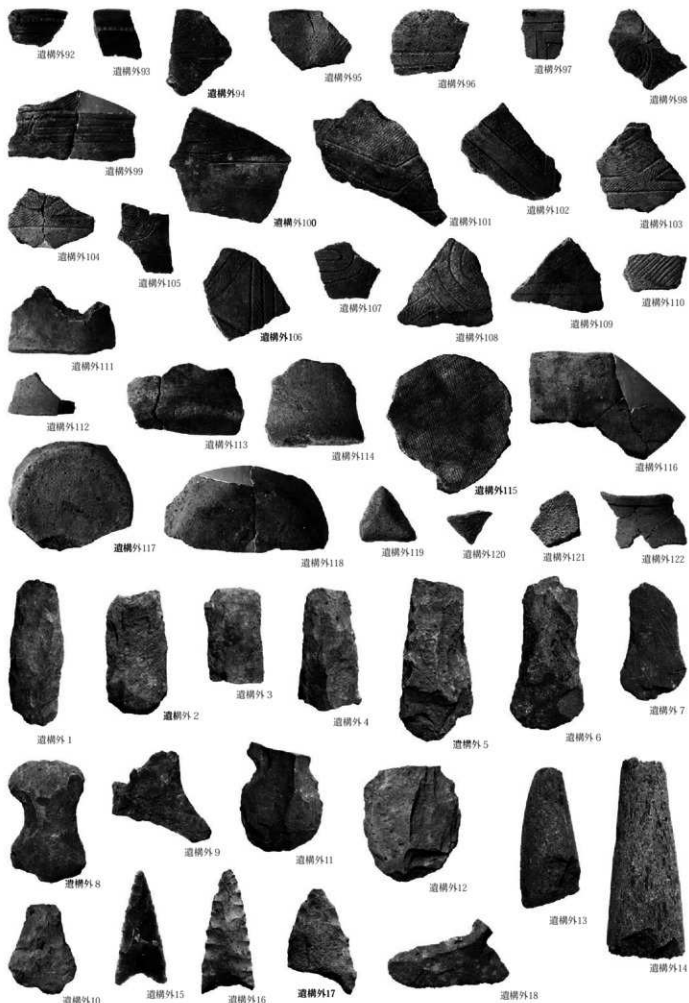
58・59号住居・61号住居(1)出土遺物





1・2号墓出土遺物、35号ビット、道構外1～38出土遺物土器





道構外92～122出土遺物土器・1～18出土遺物石器



道構外19



道構外20



道構外21



道構外22



道構外23



道構外24



道構外25



道構外26



道構外27



道構外28



道構外29



道構外30



道構外1



道構外2



道構外3



道構外4



道構外5



道構外11



道構外6



道構外7



道構外9



道構外8



道構外12



道構外13

道構外19～30出土遺物石器・道構外1～13出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	とっとりまつあいたいせき・どうじょういせき
書名	鳥取松合下遺跡・胴城遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	534
編著者名	女屋和志雄・岩崎泰一/橋本 淳/笹澤泰史/神谷佳明/大西雅広/板岡正信/関 邦一
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120323
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	とっとりまつあいたいせき
遺跡名	鳥取松合下遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししとっとりまち
遺跡所在地	群馬県前橋市鳥取町
市町村コード	10201
遺跡番号	776
北緯(日本測地系)	362416
東経(日本測地系)	1390736
北緯(世界測地系)	362428
東経(世界測地系)	1390725
調査期間	20080512-20080911
調査面積	3,262.82
調査原因	道路建設工事
種 別	集落その他
主な時代	縄文/古墳/奈良・平安/近世
遺跡概要	集落-縄文-土器+石器/古墳-住居5+土器+石器/奈良・平安-住居17+土坑7+土器+石器+石製品+金属製品/近世-溝1+土器+石器+金属製品
特記事項	古墳～平安時代の集落
要 約	A～C区は金丸川が流れる谷地で、流路と水田を区画する近世の溝を検出。試掘で推定されていた古代の水田は可能性にとどまる。D区は、胴城遺跡で検出された集落の東縁辺部。胴城遺跡とは市道で分ける。7世紀から住居は数を増し、斜面に重複する。大型住居は、いずれも建て替えがされている。16号住居からは銅鍔の破片が出土し、柄の一部が錆で固まった18号住居の鉄斧も特筆される。また、焼失住居の9号住居からはアワを保管していたとみられる曲物と、容器とみられる樹皮が出土している。

報告書抄録

書名ふりがな	とっとりまつあいたいせき・どうじょういせき
書名	鳥取松合下遺跡・駒城遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	534
編著者名	女屋和志雄/岩崎泰一/橋本 淳/笹澤泰史/神谷佳明/大西雅広/桜岡正信/関 邦一
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120323
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	どうじょういせき
遺跡名	駒城遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししとっとりまち
遺跡所在地	群馬県前橋市鳥取町
市町村コード	10201
遺跡番号	41
北緯(日本測地系)	362426
東経(日本測地系)	1390730
北緯(世界測地系)	362438
東経(世界測地系)	1390719
調査期間	20080201-20080331/20080401-20080911/20091011
調査面積	6,130.66
調査原因	道路建設工事
種別	集落/墳墓/その他
主な時代	縄文/古墳/奈良・平安/近世
遺跡概要	集落-縄文 - 住居1+土坑16+土器+石器/古墳 - 住居12+古墳1+土器+石製品+金属製品/奈良・平安 - 住居47+掘立柱建物3+土坑25+井戸1+土器+石製品+金属製品/近世 - 土坑22+溝10+墓坑2+土器+陶磁器+金属製品+人骨/時期不明 - 住居1
特記事項	縄文・古墳～平安時代の集落
要約	旧石器時代～平安時代、近世の複合遺跡。鳥取松合下遺跡は東縁辺部である。黒浜・有尾式期の住居と土坑群は距離を置く。台地の西寄りでは中期～後期の遺物も出土。川沿いを断続的に利用した集落の一角である。その後も台地の西では6世紀前半の集落が形成されるが、7世紀に入ると中心を東に移し中央部には古墳が作られる。東にある前期初頭の1軒は稀少な存在で、集落がどう展開するのかわからない。古墳は、『上毛古墳総覧』芳賀村第1号吉祥寺古墳で周堀を検出。7世紀以降は台地全体に広がり、11世紀代まで変遷する。旧石器時代は『上武道路旧石器時代編3』に(2013)掲載。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第534集

鳥取松合下遺跡
胴城遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

平成24年(2012)3月16日 印刷

平成24年(2012)3月23日 発行

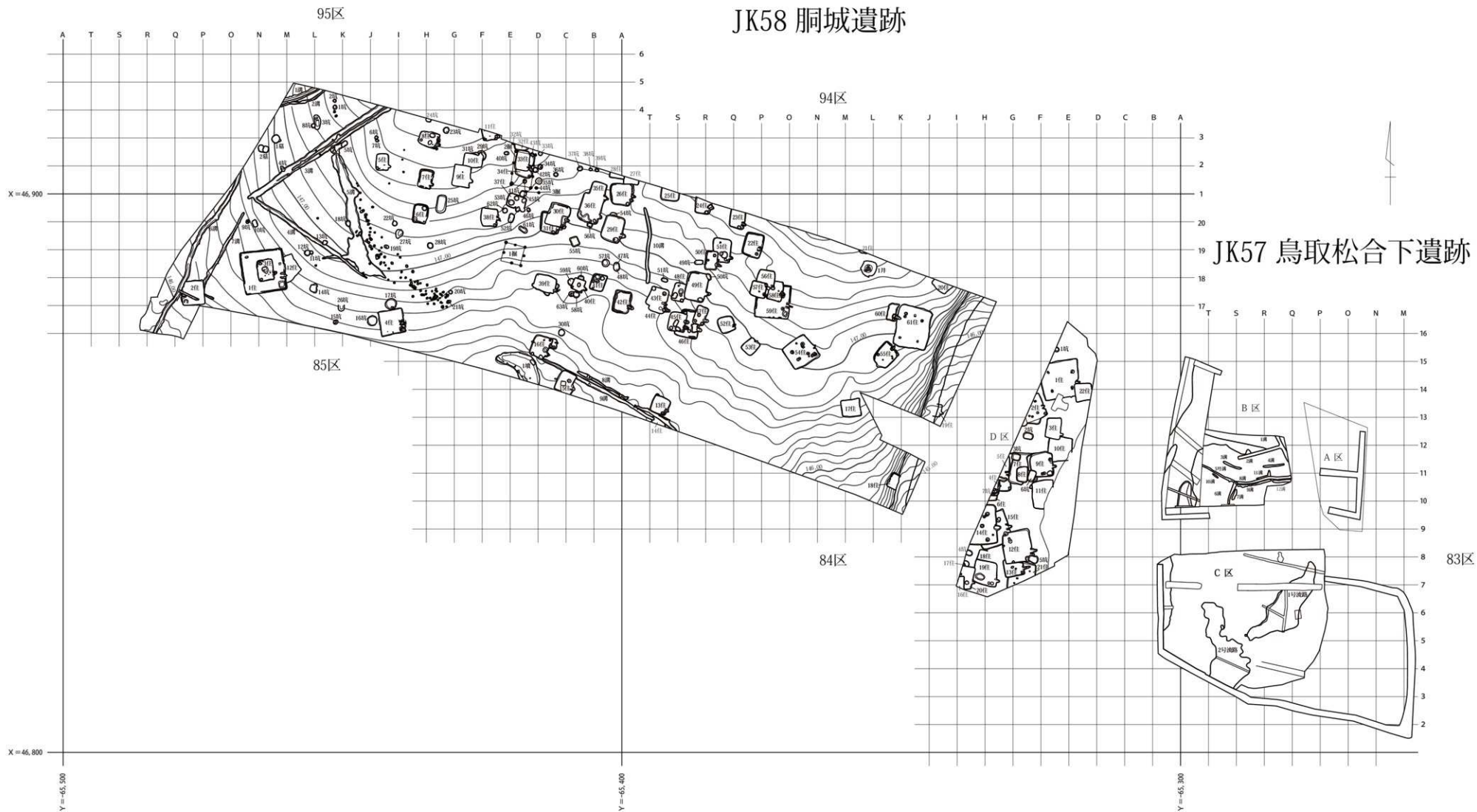
編集・発行/財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/上海印刷工業株式会社

JK58 洞城遺跡



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第534集 付図
上武道路鳥取松合下遺跡・洞城遺跡全体図

0 1:500 40m